

---

**コントラクト ? インモラルティ・ティアーズ -**

織田 梶子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コントラクト ? インモラルティ・ティアーズ

### 【Nコード】

N8837W

### 【作者名】

織田梶子

### 【あらすじ】

コントラクト 続編

”オペレーション・ヴァルプルギス” 終結後、インドへ渡ったその後のお話。

辛い経験を乗り越えようとするミナ、そしてそれを支えるシュヴァリエたちの奮闘と日常を描く、アンジェロの綴る報告書。

インドへ渡り、ミナと死神たちは名を変え密やかに、そして穏やかに過ごす。すべてはミナ笑顔の為に。ミナの幸福な日常を取り戻すために。

ミナの為にすべてを捧げる決意をしたアンジェロに、人生の転機と共に幸福と終焉が訪れる。

ミナの為に苦悩し続けるアンジェロ。アルカードの残した数々の謎、ミラーカ、クリシュナ、北都、そしてジュリオの幻影、ボニー・クライドの行方と新たな出会いに、次第に翻弄されて、変化していく日常。

アンジェロの運命を決めるのは、彼の天使と悪魔だけ。背徳という運命を背負わせた天使と悪魔に、アンジェロが選択した道は

FILE 1 Comte 「伯爵」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

アンジエ

ロ・ジエズアルド改め

カイ・ペンドラゴン

戦後におけるシュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動  
報告

アンタは今どこで何やってんですか。さっさと帰ってきやがれば  
力。

ああ、とりあえず、伯爵の新しい名前アーサーってことになった  
から。ミナ・・・ていうか、ミナも今はエルメスって名乗ってるけ  
ど、まあ、兎に角アイツが勝手に決めた。

その件に関してはおいおい言及していくとして、とりあえずアー  
サーが消えてからの事をこれから書いて行こうと思う。

アーサーが帰って来た時に、それまでの事を口頭で説明すんのが面倒くせえからな。

つつても、もしかしたらその時になって「やっぱ見せるのやめよ」とか思うかもしれないけど、まあその時にならなきゃわかんねーし、書いときゃよかったって後悔するのも嫌だからとりあえず書くことにする。

アーサーが消滅した後、エルメスは戦ったよ、ジュリオ様と。裏切りは許さないって、アーサーとみんなの為に。

アイツ凄かった。ちゃんとアーサーの眷属としての矜持を保って、アーサーの能力を踏襲して、エルメスなりのラグナロクを発動させた。

エルメスが言うには、ラグナロクというか、アーサーの能力の根源はサイコネシスと元素を操る能力だって言って、めちゃくちゃ化学戦だった。正直俺にはわけわからん現象だったけど、とにかく壮絶だった。まさか中性子爆弾作るとは思わなかったからな。少なくとも今のエルメスには全く勝てる気がしない。

だからついた二つ名。何個があったけど、なんだっけ。

“蒼い錬金術師”

ノイライフキング

“不死王の愛娘”

“アンフィニサージュ”

俺的には“不死王の愛娘”って響きがいい。ぴったりじゃん。“蒼い錬金術師”ってのもあいつにはぴったりだと思っ。まさしく錬金術だったしな。“アンフィニサージュ”これはアイツにしては尊大すぎだ。どんなネーミングセンスしてんだ。フランス語なのを見

ると名付けの犯人はアレクだな。

で、まあ話を戻すけど、戦ってジュリオ様を圧倒して瀕死にまで追い込んでただけど、とどめを刺そうとしたエルメスを止めて、俺がジュリオ様を殺した。アーサーにしてみたら喜ばしい事だろ。感謝しろ。

なんでかっていうと、教皇からの命令があつたつーのが1つ。それと、エルメスにジュリオ様を殺してほしくなかったから。それに、どうしてもエルメスを殺したくなかつたし、死んでほしくなかった。まあ、俺の都合が8割だけだ。

この2人が殺し合いをしても、結局呪いの連鎖って消えねえんじやねえかと思つた。エルメスにジュリオ様を殺されたら、俺がエルメスを殺さなきゃいけないなるだろ。それに、あの時仮に形勢が逆でジュリオ様がエルメスを殺しても、俺はジュリオ様を恨むと思うし。だから俺が殺した。

それでかえってエルメスは心配してたけど、それはまあ、いい。

で、戦いは終わったけど、エルメスはアーサーもみんなも、誰も守れなかつたつてすげえ後悔してた。強くなつてみんなを守るつてクリシュナさんと約束したのにつて。もう生きていたくない、死にたい、殺してくれとか言い出した。だから、引き留めた。

そりゃ引き留めるよな。アイツに死んでほしくなくてジュリオ様を殺したのに、アイツが死んだら意味ねえし。引き留めるために、俺と死神の奴らとみんなと一緒に生きると決めた。つーか実は決めた。で、今一緒にいるわけ。

とりあえず、ミラーカさんの砂を集めて、棺に入れて城の裏庭に埋葬した。本当はオーストリアに連れて行ってあげたいつてエルメ

スは言つてたけど、今はフィレンツェで我慢してもらつて、落ち着いたら国に返してあげようつてことになった。

エルメスはミラーカさんの墓の前でずっと泣きながら謝つてた。守つてくれてありがとう、守れなくてごめんなさいつて。ミラーカさんだけじゃなくて、エルメスはクリシュナさんも北都も失つて、ボニーさんとクライドさんは行方不明で、さらにはアーサーまでいなくなつて、本当に一人ぼっちになってしまった。一夜にして大切にしていたものを全て、失つた。アイツの絶望は俺の想像もつかない程なんだと思う。

アイツ前に言つてたんだ。俺が「お前が心まで化け物になつてるようには見えない」つて言つたら、なんだかしよんぼりしてさ。

「今のままで、また大事な人を失うようなことがあつたら、その時は耐えられるのかな」

そう言つてた。一時は耐える気力すらなかつたけど、でも今は耐えてる。心も化け物にせず。すげえよな、アイツ。

状況は違つし、自分で決めて実行したことだけど、俺だつてジュリオ様を手にかけてた罪悪感で死にたいと思つた。でも、それ以上の絶望を味わつてなお、アイツは耐えてる。

そんなエルメスの姿を見て、俺が死にたいなんて言えるわけねえし、むしろダメだよな、そんなの。だから、俺がアイツの傍にいて一緒に生きてつてやりたいと思つた。なんか、俺がすっかりしないと、とか思つた。あれ、なんか俺アイツの保護者みたいじゃね？

まあ、兎に角そう言う事だ。

で、レミは地下室に隠れさせてただけど、出してやったら行くって聞かねえから一緒に連れて、偽造パスポート作って、アーサーに言われていた通り、インドに逃げた。アーサーの棺も一緒に。で、今インドでシャンティの屋敷に世話になってる。

その逃避行で何が一番面倒くさかったってパスポートだよ、パスポート。偽造するくらいなら大した作業じゃねえんだけど、まあ俺らは慣れてるしな。

どうせ作るなら名前変えようぜってことになって、エルメスが提案した。

「みんなもう死神じゃないんだから、レミと一緒にシュヴァリエになればいいじゃん」

なんかそんなこと言い出して。で、騎士と言えば円卓の騎士だろってことになって、みんな円卓の騎士から名前を取ったわけだ。偶然にもエルメス以外のメンバーはレミ入れて丁度12人だったしな。で、やっぱりアンタは王だからアーサーになったわけ。エルメスには最初王妃の名前がいいんじゃないかねーかつつたら、

「王妃は王を裏切るからダメ！」

とか言って、伝説の錬金術師の名前をシュヴァリエに倣ってフラ



ンス語読みにパクってエルメスになった。だったら、王の補佐役やつてた魔術師のマーリンでいいんじゃないかねーのとも思ってたけど、なんか知らねえけど却下された。ヘルメスをリスペクトしてるとか言うて。どうでもいいけど。

ちなみにレミはランスロットになった。まあ、ランスロットは王妃さえいなけりゃ裏切らなかつただろうからな。

ただ、納得いかないのがなんで俺がカイなのかって事なんだけど。それもエルメスが勝手に決めやがった。

「“永遠の毒舌家”とか言われてるカイ卿はアンジェロにぴったりじゃん！ やつと名前負け神父卒業だね」

とかなんとか言いやがって、マジあのバカ女シバキ回したい。で、他の奴らはこんな感じ。

クリステイアーノ      ガウエイン

レオナルド              キルシユ

クラウディオ          ペレアス

ヨハン                  ベドウィル

エドワード              パーシヴァル

アレクサンドル          ライオネル

オリバー                ユーウェン

ルカ                      デイナダン

ジョヴァンニ              ガラード

ミゲル                  トリスタン

ついでに姓は

「私は娘でしょ？ みんなは言ってみれば孫みたいなものじゃない。

家族みたいなもんだし、同じでいいよね」

結局考えるのも面倒だったから、もうそれでいいやってなった。

とりあえずそれで全員名前が決まって、いざ作業に取り掛かろうと思ったら一大事だよ。

俺達はさっきも言ったけど慣れてるから写真とか用意してあるわけ。問題はエルメスだよ。今更写真撮れねーしどーすんのかな

結局あいつが1枚だけ写真持ってて、それで何とかしたけど。でもその写真、家族写真だったんだぞ。しかも高校の卒業式。

まあ、吸血鬼だし別に老けたりしねーけど、パスポートの写真にそれはちよつとどうかと思うよ、俺は。正直加工がめちゃくちゃ大変だった。

つくづくエルメスには手を焼かされる。

まあ、そんな感じで紆余曲折あって、パスポートの偽造は完了した。

で、城に火を放ってすべてを燃やし尽くした。もうフィレンツェっていかイタリヤにもヴァチカンにも戻ってくることはないと思うし、あの城での思い出は、良い事以上に悪い事の方が強く残ってしまったから。過去には執着しない、もう、後戻りしないって言う覚悟も含めて。

そんで、アーサーが前に買ったって言ってた飛行機で、アーサーの棺も一緒にインドに行った。

で、すぐにまた一大事だよ。屋敷に着いてシャンティの顔見た瞬間エルメス号泣。で、シャンティはシャンティでアーサーたちがいないって知って号泣。俺ら呆然。ていうか、早く屋敷に入れるみないな。

二人とも全然泣き止む気配がなくて、俺らも正直困ったつつーか、ぶっちゃけ俺はキレそうでした。

そしたらスニルが気イきかせてくれて、とりあえず屋敷に入れたんだけど、またこいつらが本当にアーサーを崇拜してたんだな。

アンタの部屋そのまま残してるんだよ、誰も手を付けずに、アーサーだけの部屋だからとか言っつて。それでまたエルメス号泣だよ。泣かせてくれるじゃねーの。いい加減俺はウンザリだけどな。

その後もウンザリの連続だよ。アーサーの部屋にとりあえずアーサーの棺を置いて、エルメスもアーサーの部屋がiiiiって言っつて、まあ、そこまではいい。

アーサーの傍でアーサーの帰りを待ちたいって気持ち俺にもわかるしな。インドに行く前だってアイツ自分の棺に寝ないで、泣きながらアーサーの棺の前で過ごしてたんだ。

アーサーの棺に伏して、アーサーの紅い結晶を握りしめながらポロポロ泣零して

「会いたいよ、早く帰ってきて」

何度も何度もそう言いながら。吸血鬼じゃなかったら病気になるんじゃないかって思う。

本当にエルメスにとってはアーサーが全てなんだよ。もし、あの時アーサーが

「必ず帰ってくるから待っていてくれ」

この一言を言わなければアイツは死んでたと思う。その一言だけでエルメスは生きてるんだよ。パンドラの箱に残った小せえ希望に縋り付いてるみたいに。

エルメスは言ってた。アーサーの為に生きてアーサーの為に死ぬんだって。そう言う契約をしたんだって。アーサーは約束は絶対破らないから、自分が破っちゃダメなんだって。

それを言えるようになるまで、アイツもかなり悩んでただけ。最初はさ、仲間も全員居なくなっただけ、こんな思いを抱えながら、帰ってくるかもわからないマスターを一人で待ち続ける事なんかできないって、そう言って死のうとしたくらいだったしな。

それでも、アイツはアーサーの為に待つことを決めたんだよ。もし、アーサーが生きてて、帰って来た時に自分が居なかったらアーサーが辛い思いをするからって。もう、アーサーを一人ぼっちにはさせないんだって。

俺だって、いつまでもあんな風に泣いてるエルメスを見ていたい

わけじゃないし、アーサーが帰ってきてくれたらどんなにいいかって思う。

でもな、それを踏まえてもあり得ねーんだよ。あのバカ女の我儘炸裂だよ。

「一人じゃ寂しいから、みんな一緒の部屋でいいじゃん」

もう、ちよつと俺は本当に眩暈がしたよ。あんな面倒くせえ女とそこまで、24時間いるなんて耐えられない。俺は基本自由人だから無理。できる事なら23時間一人でいたい。俺には無理。つーかどうやったら12台もベッドが入るんだよ。野戦病院じゃあるまいし。

勿論、全員大反対だよ。シャンティ達ですら反対した位だ。当然だよな。そしたらまさかのご指名だよ。

「ランスとカイは一緒じゃなきゃ絶対イヤ！」

もう本当アイツ殴っていいか？ このメンバーの中で俺が一番嫌がってるの。一目瞭然なの、それは。それを無視しての我儘放題だよ。これは正直アーサーの監督責任だと思う。甘やかしすぎだ。

そっからはまあ想像つくと思うけど、いつもどおりの大喧嘩だ。

「いいじゃん！　なんでダメなの？」

「お前がウザいから」

「ウザくないよ！」

「いや蜘蛛の巣よりウザい。ていうか、逆になんでだよ！」

「だって、一人は寂しいし怖いもん」

「じゃあランスだけでいいじゃねーか！」

「ダメだよ！　ランスは癒し系でカイは励まし系なんだから！」

「意味わかんねえよ！　面倒くせーんだよてめーは！　ガキじゃね

ーんだから寝れるだろ！」

「無理！　もう！　なんで我儘言うの！？」

「おま・・・ちよつと待て、俺が我儘なのか？」

「そうだよ！　私に忠誠を誓うって言ったのカイじゃん！」

「いや、言っただけどよ、そう言う事じゃなくてだな。物事には限度つてもんがあんだろつが」

「忠誠を誓うってことは絶対服従って事だよ？」

「それは違う！　それはお前間違っただ認識だ！　その暴拳が許されるのはアーサーだけだ！」

「暴拳なの！？　なんで私はダメなの？」

「お前がダメじゃなくてアーサーが特殊なんだよ！　わかつたら諦める！」

このやり取りでわかってもらえると思うが、アーサー、アンタのせいだ。妙な親の背中を見て育つからこういうアホな子供に成長するわけだ。

以前ジュリオ様に部下の教育がどうのこうの言ってたけど、エルメスを見る限り、アーサーの教育方針にも十分問題があったことは明白だ。

で、何がム力つくってこれでも諦めなかったアイツの無駄な執念深さ。ずっとガキみてえにヤダ！ つつてゴネて鬱陶しいことこの上ない。しかも涙目で、段々泣きそうな顔になってくるし。え、なにこれ。俺が虐めてるみてーじゃん、みたいな。

もつさ、今がこんな状況じゃなかったらブツ叩いてるところなんだけど、状況が状況なわけじゃん。俺ら的にはこれ以上エルメスを余計なことで泣かせたくないわけじゃん。もはや今の俺はエルメスに対してはマジで天使の域に達してるわけじゃん。

だからアイツに泣かれるとスゲエ困るわけよ。アイツ泣かせたら犯罪者扱いなわけよ。うわー、カイ、エルメス泣かせた、みたいな視線が俺にとっては毒劇物なわけよ。

今の俺にとってはエルメスの「涙ながらの訴え」は最終兵器に等しいわけよ。頼むから泣くな！ 何でも言う事聞くから！ くらいな勢いなわけよ、実に不本意ながら！

そういうわけで、この件に関しては、こいつは折れることはないんだろうなって渋々俺の方が諦めた。

「あー！ もういいよ！ わかったよ！ そこまで言うなら一緒に部屋にしてやる！ でも、俺の眠りを妨げたり俺の生活の邪魔したら有無を言わさずお置きだからな！」

「うん！ わかった！ ありがとう！」

俺が諦めて話がまとまった瞬間、アイツお礼言っただけで、久しぶりにアイツの笑顔を見て、なんかすげえホッとした。

アイツあれからあんまり笑わなくなつて、まあ当然なだけどさ。笑う事があつても愛想笑いつつーか、営業スマイル。いかにも、な笑顔。

「みんな心配しないで、私は大丈夫だから」

つてかんじの。なんか自分に言い聞かせて、俺らに氣イ遣つてるみたいな取つてつけたような笑顔だったんだけど、その時エルメスは前みたいにちゃんと感情のある顔で笑つた。

だから、まあこの決定が本意には違いなかつたけど、それに釣り合う代価かなとは思つた。

とりあえず話がまとまつたから、俺はアーサーの部屋の寢室のベッドで寝ることにした。俺達棺持ってねえし、あつたとしても生まれた土地の土なんて無いどころか、それがどこかも覚えてねえしな。寢室が無駄に広がつたおかげで、ランスのベッドも運び込めだし、エルメスとアーサーの棺も運んだ。

で、こつからちよつと面白いんだけど、またエルメスの我儘が炸裂。

「ランス、一緒に寝よつか！」

「え？ エルメス様は棺でお休みになつた方がよろしいんじゃないやありませんか？」

「いーの！ 私と一緒に寝るのイヤ？」

「い、イヤじゃないですけど、でも……」

「じゃあいいでしょ？」

「ダメですー！」



「どうして？ 私の事キライ？」

「好きです！ だからダメなんです！」

「意味わかんないよ！ ホラもう我儘言わないの！」

結局、エルメスは勝手にランスのベッドに潜り込んで、暴れるランスを押さえつけて一緒に寝てる。

多分ランス的には

「エルメス様と一緒に寝るなんてドキドキして眠れません！」

て事なんだと思う。アイツ残酷だよな。ランスが今まだ10歳だからいいものの、15歳とかだったら気の毒すぎる。

ていうか正直すげえウケるんだけど。アイツのああいっつ男の気持ちを理解しないところは、見る分には最高に面白い。

さすがはバカの象徴だ。やっぱりアイツのバカなところは長所だ  
と思う。

で、それが数時間前までの話。もうそろそろ朝になるから、イン  
ド逃亡生活1日目が終わるところ。

とりあえず、今日までの流れをざっと書いてみたけど、もっと詳しく知りたいならエルメスに聞け。俺は話すの面倒くさいし、俺の主観でしか語れないからな。

今日の所はこれで終わり。これから毎日書くかはわかんねえけど、  
なんかあったら書こうと思う。

でも、できればこの報告書の数が増えないことを祈る。

さっさと帰ってこい。じゃねーと、その内愛想尽かされて本当にランスに横取りされるかもしんねえぞ。

以上

## FILE 1 Comte 「伯爵」(後書き)

### 登場人物紹介

カイ「俺」 旧：アンジェロ

本編の主人公。エルメスのシュヴァリエ筆頭で親友。

エルメスを心底バカだと思っているが、心底大事にも思ってる。

博学多才、頭脳明晰、眉目秀麗、品行方正、完璧と優秀の体現者、

それが俺！と思いつ込む、人格の破綻した自由人。

好きな言葉 独立自尊

エルメス 旧：ミナ

今のところペンドラゴン一族のトップ。先の戦争で家族を失って傷  
心中。

アーサーを見て育ったせい、傷心中なせい、我儘が加速中。

アーサーの帰りを待たため、カイ達と行動を共にする。

好きな言葉 日進月歩

アーサー 旧：アルカード

エルメスの主人。ペンドラゴン一族本来のトップ。現在消滅中。

必ず帰ってくるかと約束したものの、いつ帰ってくるかはわからない。

本当に帰ってくるのかもわからない。どこにいるのかもわからない。

アーサーの愛がどこに行くのかもわからない。

何を考えているのかもよくわからない。

作者ももてあます謎の男。

好きな言葉 難攻不落

## FILE 2 Charisma 「カリスマ」

### シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

今日も俺は寝起き早々ウンザリさせられました。むしろ泣かされました。助ける。

いや、冗談抜きで泣いた。マジでアーサー、アンタどんな躰してんだ。本当にどういいう教育をしたんだ！俺は腹が立って仕方がない！

何がそんなに悲しいって、目が覚めたらエルメスが「おはよう」ニツコリだよ。普通だって？普通じゃねーよ。俺寝起きね。エルメス眼の前ね。おかしいだろ。

目開けて速攻ギョツとしたぞ。昨夜ランスと仲良くネンネしてたやつが目の前にいるっておかしいだろ。どういうことだ。

「いや、ていうかお前なんでいんの」

「だってランス朝になったらいなかったから・・・」

ランスは人間だし普通に朝起きてベッドから出たようで、途中でランスがいないと気付いたエルメスは寂しくなって俺のベッドに潜り込んできたらしい。運悪く夜までシャンティ達は仕事でほとんど出払ってるらしいし。さっそく俺の生活は崩壊だよ。マジ勘弁して

ほしい。

まさか寝起き早々涙で枕を濡らす羽目になるとは思わなかった。  
マジ俺可哀想。昨日の俺を拷問の末殺してやりたい。

「ああもう！ だから嫌だって言ったんだよ！ 超うぜえ！ 邪魔  
すんなって言っただろーが！」

「邪魔なんてしてないよ！ じつとしてたよ！」

「そういうことじゃねーよ！ 勝手に人のベッドに入ってくるな！  
「だってランスがいないんだもん！ 目が覚めた時誰もいないと怖  
いんだもん！」

エルメスのその言葉を聞いてようやく理解できた。あいつは自分  
が一人ぼっちになったことが怖くて、それを体感したくなかったん  
だとわかった。

まあ、それを差し引いてもあり得ないけどな。

「いや、わかる。わかるけどな、お前はわかってねえみたいけど、  
俺一応男ね。わかるか？」

「バカにしすぎだよ！ そのくらいわかってるよ！」

「全然わかってねーじゃねーか！ 仮にこのタイミングでアーサー  
が帰ってきたら俺が殺されるんだけど！ その辺わかってるか！？」

「え？ なんで？」

「・・・いや、もういい」

もうさ、本当さ、昨夜ランスで笑って申し訳なく思ったよ。マジ  
でアーサー怒らないでよ、俺は全然悪くないから！ 全く持って悪  
くないから、むしろ被害者だから！

ていうかその後も、エルメスは俺がいるのに普通に着替えるわけよ。そりゃ前にアイツとストリップ剣劇で立ち回りしたけど、だからって気を抜きすぎだと思う。多分アイツの中で俺の性別は存在してないんだな。

こんなに他人に気を遣ったのは初めてだ。多分俺ハゲるぞ。もしくは精神分裂症とかになる。

頼むから俺が発狂する前に帰ってきてくれ。今すぐ帰ってこい、頼むから。土下座するから。マジアイツうぜえ。前からウザかったけど一層ウザさに拍車がかかっている。俺の手に負えるようなレベルじゃねえ、なんとかしろ。誰か変わってほしい。

寝起き早々地獄に突き落とされた可哀想な俺だったわけだけど、唯一の救い。

「カイとランスがいてくれたから怖くなかったよ！　ありがとう！」

まあ、アイツの素直な性格は財産だと思う。正直金輪際こういう事は御免だけど、エルメスがちょっとでも元気になるなら同室くらいは許してやってもいいかなーとか思ってみたりした。

エルメスは強い奴だけど、だからってなにもかも一人で我慢させるのは可哀想だ。一生エルメスの傍にいて誓った以上は、アイツが辛さとか恐怖とかを克服する手伝いをするのも俺の仕事だ。あんなんでも一応俺たちの「ご主人様」なわけだし、おもりぐらいはしてやんねえと。

「あ！　良い事思いついた！　今日から3人川の字で寝ればいいんだ！」

前言撤回。やっぱ無理。俺程度の才覚じゃ面倒見きれませんよ主人様。アイツの笑顔に騙された。アイツがバカだつてことを一瞬忘れてた俺が憎い。

とりあえず、その後エルメスをシカトしてシャンテイ達に俺とエルメスとガラード達とで事の顛末を説明した。

アーサーの事やジュリオ様の事、スパイ活動の事なんかはそれぞれ俺たちも知らない事実もあつたわけだし、説明は分担しながらだつただけだ。

正直俺も“オペレーション・ヴァルプルギス”の事は直前まで知らされてなかつたから、ガラードから話を聞いてやっぱりちよつと辛かつたな。

最初ジュリオ様からその作戦を聞いたときは、裏切られたつて言う思いと、裏切らなければならぬつて言う罪悪と、ジュリオ様への忠誠と、エルメスへの友情とで八方塞がりになつて結局止めることが出来なかつたし。

なんといつてもこのインドの屋敷はスレシユの屋敷だし、俺の両親を殺して俺を誘拐した犯人の家だと思つたなんと複雑だ。まあ、今の住人は無関係だつてわかつてるけど。

フィレンツェにいた時は、俺は本当にジュリオ様がエルメスを愛していて、呪いから解放されたがつてるんだつて信じて疑わなかつた。だから、あの戦争は正に寝耳に水だつただけだ、ジュリオ様

の気持ちもわからなくはない。

確かにあの時ジュリオ様の言っていた通り、ジュリオ様の復讐は正当性があると思う。どう考えたって呪いの種を蒔いたのはアーサーであって、襲撃されてもしょうがないと思う。だけど、ジュリオ様のやり方は、ダメだ。

アーサーを絶望の底で殺す為に、羊のふりをしてエルメスやみんなを、俺達をも騙して、もしジュリオ様の計画通りになったとしても、その後俺はそれまでのようにジュリオ様を信頼して着いて行けたかと考えると、答えはNOだ。

俺は心底ジュリオ様を信頼していたし、だからこそエルメスまで騙していたことが悲しかった。ジュリオ様はわかっていたはずだ。俺がどれほどエルメスを大事な友達だと思っていたか。それをわかっていて、その事を利用されたことがとても悲しかった。その事を無下にされたことが辛かった。俺はあの人を父親のように思っていたから、余計に。

あの方は、アーサーに裏切られて相当辛い思いをして来たんだ。だから、化け物になった。なってしまった。

あの人を化け物にしたのはアンタだ。アンタが招いた事態だ。だけど、呪いの種を蒔いたのはアンタだけど、それを育てて呪いの花を咲かせたのはジュリオ様だ。結局ジュリオ様も弱い化け物だったって事だな。

俺やガードからジュリオ様の話を聞いてシャンティ達は当然怒ってたよ。昔の事なのにつて、エルメスやミラーカさん達は関係ないのにつて。クリシユナさんを殺した黒幕だったなんて許せないつて。まあ、その感想は当然だと思う。けど、それを聞いたエルメスは驚くべきことを言った。



「それはそうなんだけど、でもジュリオさんは可哀想な人なんだよ。本当のジュリオさんとはとってもいい人なの。心の底から“ミナ”を愛してただけなんだよ。悪いのはアーサーさんと私なの。ジュリオさんに呪いの種を植え付けて、ジュリオさんの苦しみに気付いてあげられなくて、より一層ジュリオさんを苦しめた、私にも罪があるの」

それを聞いてさすがに全員絶句した。アイツはあれほどの目に遭っていながらジュリオ様を許そうとしてるんだ。そんな心情を持つことが信じられなかった。アイツが自分の愛する夫や家族を失ったのはジュリオ様のせいなのに。アイツもジュリオ様と同じように裏切られて、愛する人を殺されてしまったのに。

エルメスはアーサーやジュリオ様とは違う。いや、もしかしたら一緒ではいけないと思ったのかもしれない。きっとジュリオ様を許しても、その理不尽を許すことはないだろうとは思う。でも、それでもアイツは罪だけを憎んで人を憎んではいけないと思ったんだろう。

ジュリオ様を憎み続けても、それに囚われるだけってのは目に見えてるから。8年前に復讐をしないと決めたということもあるんだろう。アーサーやジュリオ様って言う前例があればなおのこと。それで苦しむ姿を見てきたのなら尚更。

エルメスはきつと苦しむのは自分で最後にしたいと思ったんだろう。もしエルメスがジュリオ様を憎んで、ずっとずっと憎み続けたら、呪いの種を蒔いたアーサーも、今でもジュリオ様を嫌いにならない俺たちも、ジュリオ様を憎むエルメスを見て苦しむとわかって

るから。

アイツは今生きている奴らの為に、前に進む努力をしているんだ。死んだ人達に後ろ髪引かれながら、必死に。自分一人で全部を背負って。アーサーが種を蒔いてジュリオ様が育てた呪いの花を摘んだのは俺だったけど、摘んだだけならまた蕾をつけたかもしれないそれを、呪いの樹ごと切り倒して枯らせようとしている。

エルメスは本当に強いよなあ。エルメスの力になってやりてえけど、呪いの樹がデカすぎて、俺程度の才覚じゃ力になれないんじゃないかって自信失くす位だったのに。

でも、やっぱりアーサーが帰ってくるまでは、なんとかエルメスが立っていられるくらいには力になってやりたいと思う。できるかはわかんねえけど。多分そう思ったのはシャンティ達も同じだな。

「ミナ様、アンタがそう言うならあたし達はもう何も言わねえよ。でも、無理すんなよ、一人で我慢すんな。ミナ様がインドを出る時に言っただろ。復讐はしない方がいい、後悔するよって。よかったじゃねえかよ、カイがいて。カイがいたから、復讐せずに済んだんだろ。呪いの連鎖を止めてくれたんだろ。」

「それに、こうも言ってたよな。シャンティはもう一人じゃないんだから、みんなで幸せになることを考えてって。それはミナ様だって同じなんだぞ。ミナ様の為に一緒に生きようって言うてくれる奴が傍にいるんだぞ。ミナ様をそれほどまでに大事に思ってくれる奴が傍にいるんだぞ。ミナ様が我慢して周りの奴らだけ幸せになっても意味ねえよ。ミナ様だって幸せになれる様に、あたし達も傍にいるから。ミナ様は一人じゃないから、だから一人で泣くなよ」

それを聞いたエルメスはありがとぅって言いながら泣き出して、シャンティはそんなエルメスを抱きしめながら一緒に泣いていた。俺達だけなら正直不安だけど、シャンティ達もいるなら大丈夫そう  
だ。

アイツいい奴だな。エルメスの事が本当に好きなんだな。シャンティの言葉から察するにシャンティも色々あつて乗り越えてきたんだろぅな。多分、エルメスの存在もあるんだろぅ。

今のエルメスに必要なのは、同情してくれる偽善者じゃなくて共闘してくれる戦友だ。その点シャンティはいい相棒なんだと思う。

インドに行くようにあらかじめ指示してたアーサーの采配は大当たりだったわけだ。つーかアンタまさかここまで予測してたのか？自分が消えることも？ だとしたらやっぱりアンタは恐るべき策略家だな。敵わねえはずだ。

とりあえず説明を終えた後、エルメスとシャンティは話したいことがあるつつつて二人でシャンティの部屋に入って行ったもんだから、残された男どもでアーサーたちの思い出話でもすることにした。

どうでもいいけど、この屋敷における男女比率って異常だな。2  
5対2ってあり得ねえ比率だよな。どうにかなんねえの？ まあ、  
いいんだけど。

アイツらはアーサーたちと出会ってからどういっいきさつでアーサーたちに仕えることになったのか、エルメスの結婚式とか、テロ騒動とか、イスラムの襲撃とか色々教えてくれた。

聞けば聞くほどエルメスってバカだな。とりあえず、アーサーも苦労したんだな。同情する。んで、これからは俺らが苦労するんだろうなと思うと、もう既に面倒くせえ。つーか既に苦労してる。同情しろ。

そういえば、こいつらとアーサーが出会ったいきさつを聞いて思ったんだけど、さすがだな。こいつらはみんなアーサーの事を英雄視してる節があるけど、実際違うだろ。

こいつらを雇用した理由は4つ。

1. 化け物に仕えさせるのに不可触の民、いわゆる無戸籍の孤児の方が都合が良かった。
2. 不可触の民は常に救いを求めているから、救ってくれる人間を裏切ることはない。
3. 仮に裏切りを働かれても殺してしまえばいい。不可触の民なら家族も戸籍もないから周りから不審に思われることもない。
4. なによりシャンティを気に入った。

正解だろ？　なんでわかったって？　そりゃわかるよ。ジュリオ様と似たようなもんだからな。ただジュリオ様と違う点は、アーサーに家族がいたことだな。仮にアーサーがジュリオ様と同じようにこいつらを駒としか思っていなかったとしても、エルメスや他の人たちは違っただろ。

こいつらが言ってたぜ。根気よく自分たちに教育を施してくれたミラーカさん、禁を犯したと知っても、それを隠して真実を教えてください。ボニーさんとクライドさん、いつも自分たちを世話して労ってくれたクリシュナさん、いつも優しくしてくれたエルメス、そして何より、自分たちを拾ってくれたアーサーに心から感謝してるって。

アーサーはさ、本当はこいつらに吸血鬼ってバレた時点で殺そうとでも思ってたんだろ。でも家族がそれを許さない。こいつらに關わって、こいつらから信頼を得て、みんなもこいつらを信頼したから。特にエルメスあたりが猛反対しそうだしな。だろ？

それにアンタ自身も感化されたはずだ。レヴィが言ってた。イスラムが襲って来た時、一緒に戦いたいって申し出たシャンティにアーサーが言った言葉が忘れられないって。

「私に恩を返したいと思うなら、生きてここから逃げろ」

お前たちに死なれたら辛いからって言ってもらったような気がして、すげえ嬉しかったってさ。

こいつらとアーサーたちとの関係を聞いて思ったよ。もしジュリオ様にも家族がいたら、俺達も違っていたのかなーって。誰かがあの人の心を支えてやってたら、化け物になってなかったんじゃないかって。

もしかしたら、ジュリオ様はヴァチカンに来たのは間違いだったのかもしれない。あのまま、イギリスでヘルシング卿に仕えてた方が良かったのかもしれない。まあ今更考えてもしょうがねえけどな。

でもアーサー、アンタはやっぱりスゲエな。さすがに王様だよアンタは。アーサーにエルメスや家族がいたのはたまたまじゃねえな。アーサーはあんなに傍若無人で自己中でやな奴なのに、アンタに関わった人間はみんなアンタに着いて行きたくなる。

まさにカリスマだな。

こいつらも、シュヴァリエの奴らも、エルメスも、クリシュナさんも、ミラーカさんも、ボニーさんも、クライドさんも・・・あ、でもアンタ北都とは異常に仲悪かったよな。まあ、北都はシスコンだったからしょうがねえか。北都にしてみりゃクリシュナさん以外、エルメスに近づく奴は許せねえんだろ。

そういえば、クリシュナさんはここで亡くなったんだってな。エルメスを庇って死んだって前にエルメスから聞いたな、そういえば女の為に自分の命を懸けて守るってスゲエよなあ。クリシュナさんこそ正にシュヴァリエじゃねえか。クリシュナさんも吸血鬼だったみてえだけど、あの人に限っては名前の前に“聖”がついてもいい気がする。

クリシュナさんとエルメスはそりゃもう仲が良くて、クリシュナさんはエルメスをすっげえ大事にしてたってこいつらも言ってたし、俺の見る限りもそうだったな。アンタ、クリシュナさんに勝てねえんじゃないの。あの人を超えるのは相当苦勞しそうだぞ。

まあ、帰ってきたら目一杯エルメスを大事にしてやれ。せいぜい

頑張れ。って俺は何者だよ。

とりあえず、さっきから

「カイ、何してんの？ 何書いてんの？」

ってエルメスがうぜえから、今日の所はこのへんで報告を終わる。

以上

## FILE 2 Charisma 「カリスマ」(後書き)

### 登場人物紹介

#### ジュリオ

故人。カイの育ての親であり、元主人。エルメスの為にカイが殺害した。

エルメスやアーサーを裏切り、先の戦争を引き起こした張本人。

#### ランス(ランスロット) 旧:レミ

シュヴァリエ幹部の一人。現在10歳。ペンドラゴン一族において唯一の人間。

いずれはエルメスに吸血鬼化してもらう予定。

エルメスを慕いついてきて、次期旦那の座を虎視眈々と狙う腹黒美少年。

好きな言葉 私利私欲

#### ガラード 旧:ジョヴァンニ

シュヴァリエ幹部の一人。エルメスの唯一の支配下の吸血鬼。エルメスに命を助けてもらった為に忠誠を誓った。

最近まで人間だったのでまだ20歳と若く、世間知らずで青臭いところがある。

好きな言葉 雪中松柏

#### シャンティ

インドの屋敷の女主人。かつてアーサーに拾われてそのことをとても感謝している。



エルメスとも仲良し。元盗賊団のリーダーだった為、若干ガラが悪い。

好きな言葉 臥薪嘗胆

クリシュナ

故人。アーサーの兄であり、エルメスの夫。先の戦争にて戦死。

人格者で博識で愛妻家というスーパーマン。

彼の思想はエルメスに多大な影響を与えた。

エルメスにとっては幸福の象徴そのものであり、尊敬の対象でもある。

シユヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

なあ、なんで俺の周りにはムカつく奴しかいねえんだ。俺が一体何をした！

発端は昨夜だよ。昨夜は結局エルメスとシャンティは夜中まで話してて、それから飯食って風呂入ってだから、部屋に戻ってきたのはもう夜中の4時を回ってたわけだ。

暇だったのか構って欲しかったのか、報告書を書く俺に付きまわって鬱陶しかつたんだけど、シカトしてたらその内諦めたように寝ると言い出した。でも、その時にはすでにランスは寝てて、エルメスは困惑した。

「カイ、一緒に寝ていい？」

「ざけんなバカ！ それはもうやめろって言ったじゃねーか！」

「静かにしてよ、ランス起きちゃうじゃない」

「・・・とにかくダメだ。絶対許さん。そこまで面倒見きれるか。そこまでの位なら死んだ方がマシだ」

「死ぬとか言わないでよ！ バカア！」

「お前が一番うるせえよバカ」

エルメスが見当違いなところで大声を上げるもんだから、案の定ランスが起きてきた。

「うー・・・二人とも、どうなさったんですか？ こんな夜中にケンカですか？」

「ああ、ワリーな。ホラ、ランス起きたんだから一緒に寝ればいいだろ。つーか、よく考えたらランスが寝てても一緒に寝ればいいじゃないか！」

「やだよ！ 寝てる人の隣で一人起きてるのは寂しいの！ 一緒に寝付きたいの！ 何のために二人と同室にしたと思ってるの!？」

「おま・・・計算済みかよ！ つーか交代制!？」

「そーだよ。夜はランスで、昼はカイだよ」

「ちょ、ちょっと待ってください！ どういうことですか!？」

会話が飲み込めないらしいランスに昼間のことを話してやると、ランスは顔色を変えた。まあ当然だ。

「つーわけでランス、お前エルメスが目覚めるまでベッドから出るな」

「そうですね、そうします。エルメス様ダメじゃないですか。男は狼なんですよ?」

「待て待て、ランス？ お前どこでそんな言葉覚えてきやがったんだ？ つーか迷惑してるのは俺の方なんだよ!」

「エルメス様、カイ様は前科者なんですからちゃんと気を付けましようね?」

「え？ うん、わかった」

「わかったじゃねーよ！ つーかなに前科者呼ばわりしてんだ！ つーかシカトすんな!」

「何をおっしゃるんですか。前科者なのは事実じゃないですか」

「昔の事じゃねーか！ すっかり忘れてたんだけど！」

「加害者が忘れても被害者は心に傷を負っているものですよ。カイ様は一応シユヴァリ工筆頭なんですから、ちゃんと騎士らしくしてください。さ、エルメス様寝ましようか」

「うん。カイおやすみー」

結果的には俺の望むとおりになったんだけど、全然釈然としねえ。つーか超ムカつく。あのクソガキ、シバキ回した上に吸血してブチ殺してやりてえ。

大体エルメスもその話題が出る度に「そういえば」みたいな顔してんじゃねーか。アイツも忘れてんじゃねーか。なんで俺ばかり文句言われるわけ？ スゲー腹立つ。なんなの？ つーかなんでランスが知ってんだよ。マジ怖ええ。何者だよアイツ。

え？ ていうか俺が悪いの？ 俺が悪いの？ いや、俺は悪くない！ 仮に俺が悪かったとしたらそれは昔の俺だ！ 今の俺は悪くない！ だろ？ 頼むからそうだと言ってくれ。今の俺にはアーサーしか頼りにならない。絶対俺は悪くない。と思う。

で、今日目が覚めたらもうエルメスもランスも起きたようで部屋にはいなかった。やっぱり素晴らしいな、一人って。最高だな。昨日が最悪だったからより幸福を感じる。孤独を愛する男、俺。そんな俺にとって今の環境は地獄と同義語なわけだ。

でも、ランスがいるなら俺は別室でもいいだろ。そう思ってシャンティに別室を賜ろうと相談したら、なんでか知らんが白い目を向けられた。

「ああ、そーだな。アンタみたいな危険人物をミナ様と同室にするのは危ねーからな」

ランス！？ てめえ何喋ってんだコノヤロー！ よく見たらほぼ全員から白い目線を感じる。なにこれ、俺はこんな孤独は望んでねえぞ。

リオ 「はーあ、なんだかんだ言っさあ、副長も結局はその程度の男なんだよね」

ガルフ 「セクハラどころか犯罪者じゃねーか。それでも聖職者？ 生殖者の間違いだろ」

ディナ 「副長最低！。2次元の趣味を3次元に持ち込むなよ」

ランス 「カイ様は本当にヒドいお方ですね」

トリス 「ていうか、副長だけズルい」

ユアン 「お前それは違うね？」

もうあり得ない。なにこれ。俺可哀想すぎじゃね？ もうこれはイジメだよ。迫害とも言う。アーサー、アンタになら俺の悲壮が分かるはずだ。

俺が何かしましたか。いや、してねーよ。うん、しようとしただけで実際は何もしてねえ。俺は何もしてねえ！ なんになんだこの扱いは！ 俺が何をしたらって言うんだ！ 冗談じゃねえぞ！

俺 「うるせえよてめーらは！ 俺はまだ何もしてねーの！ ぶざけんな！」

パーシー 「まだつてなんだよ！ これからすんのか！」  
気の毒な俺「しねーよ！ つーかお前ら面倒くせえ！ 黙れ！」  
キルシュ 「被告からは反省の色が窺えませんね。有罪」  
可哀想な俺「誰が被告だ！ 何様だてめーは！」  
ベディ 「検事、求刑の弁論を」  
ガラード 「裁判長、極刑を望みます」

何故かバカどもが裁判を始めやがって、いい加減イラついて銃を取り出そうかと思つていたところで、エルメスが間に割つて入つて来た。

「異議あり！ もういいじゃない。面倒くさいし。私別に怒つてないし、カイはカイなりに反省してるんだから、ねえ？」  
「そーだぞお前ら！ いい加減にしるよ！ 俺は無罪だ！」  
「反省してる素振り位見せようよ・・・まあいいけど。部屋はランズがいてくれるならカイの好きにしていよいよ」  
「やった！ さすがだなお前！ さすがにこの俺様が主と認めただけはあるな」  
「結局自分を褒めるんだね・・・」  
「いやいや、もう本当忠誠を誓いますよ、エルメス姫」  
「誰が姫・・・まあいいや」

もうさすがだな。エルメスの博愛主義は賞賛に値する。アイツがここまで寛容なのは多分アーサーの躰が行き届いていたおかげだな。アーサーが普段からエルメスに無茶ブリかましていたおかげで、ちよつとやそつとではコイツは怒つたりしない。よく調教されてる。さすがアーサーはやることが違う。

ガルフ 「ていうかエルメス原告じゃん。なんで弁護してんの？」  
ディナ 「エルちゃんあまーい！」  
ベディ 「性犯罪は再犯率高いんだぞ！」

バカどもが何か言ってるけど、エルメスが俺に着いたならただの野次に過ぎない。

従僕な俺「諸君、黙りたまえ。姫はやめろと言っておられる。姫の命令に逆らうな」

ペレアス「副長がそれ言う！？ ていうか誰だお前！」

忠臣な俺「黙れ。エルメスには絶・対・服・従だ。金輪際この話題を出すな。出したら殺す。それと俺はもう副長じゃねえ。筆頭と呼べ」

ペレアス「急に忠臣ぶりやがって・・・」

アホどもはまだブーブー言ってたけど、俺圧勝。見事なまでの起死回生。さすが俺。

落ちて着いたところでソファに座ったら、エルメスの隣でシャンテイとレヴィが大きく溜息を吐いていた。

「まあ、このお姫様にその手の話題が尽きないのは今に始まったことじゃねえしな」

「そうだな・・・」

「は？ なに？ どういうこと？」

俺も含めてシュヴァリエ全員がシャンティ達に振り向いて、なんかエルメスが慌てた。もう俺はこの時点で半分くらい読めた。消去法で行けば簡単なことだ。

「あーハイハイ、俺わかった。アーサーだろ」

「おお、正解。あの不倫騒動はびっくりしたよ。しかも結婚式当日に発覚してるし」

「不倫・・・エルメスお前スゲエな。大体アーサーとクリシュナさん兄弟じゃねえか。お前どんだけビッチだよ」

「誰がビッチよ！ ていうか違うし！ 誤解だつて言ったじゃない！」

「でもアルカード様は認めてたし、事実があるのに誤解っておかしくねーか？」

「うっそれは・・・でも違うの！ えーと、えーと、そう！ 騙されたの！ 罠よ！」

どういうことがよくわからんけど、さすがアーサーはやることが違うな。兄貴の女に手を出すとはさすがだ。伊達にエロオヤジの称号をほしいままにしてねえな。敬意をもって呼んでやろう。このエロオヤジめ。

ていうか、罠ってなんだよ。童話に出てくるバカな小娘か？ いや、普通に普段からエルメスはバカな小娘だな。

ついでに、クリシュナさんが言っていたことも納得できた。

「っーかお前さあ、前にクリシュナさんも言ってたけど防御力低いんだよ」

「どづいつこと？」

「隙だらけってことだよ。言ってたじゃねーか。付け入る隙を提供してるって」

「え？ 私が悪いの？ 私のせいなの？」

「そーだな。お前バカだから」

「そ、そんなバカな・・・いや、バカじゃないよ！ まあ、でもいいや」

「いいのかよ！」



一瞬落ち込んだものの、すぐにエルメスは開き直った。ていうか開き直るとはどういう事だ。いいやってなんだよ。いいんなら遠慮しねえぞ。と思ってたらエルメスに睨まれた。

「だって、仮にこれから何かされても、私に触れた時点で燃やすなり凍らすなりするもん」

普段バカだからすっかり忘れてたけど、コイツ強いんだった。俺らなんかよりも圧倒的に。エルメスに手を出せば間違いない死ぬ。下手したら爆死する。それだけは勘弁だ。

「ハハハ、心配すんな。そんなことする奴ここには一人もいねーよ」

「カイ様がおっしゃっても説得力ありませんね」

「ああ？ うるせえ。フーカランス、てめえ覚えてるよ」

「なにがですか？」

「クソガキが・・・まあいい。後3年もすれば苦悩に喘ぐのはお前だ。ざまあみる」

「カイ様と一緒にしないでください。僕はカイ様と違って騎士で紳士ですから」

あーもうマジ腹立つんだけど、この腹黒のクソガキ。ジュリオ様と同じようなこと言いやがって。こいつも撃ち殺してやるーかな、マジで。

自称紳士な奴が一番厄介でムカつく。アーサーもクリシュナさんと喧嘩した時そう思っただろ。紳士なんて絶滅すればいいと思わねえ？ 好きに生きて何が悪いんだっつーの。

その後しばらくゴチャゴチャ話してたら、エルメスは部屋に戻っていった。それを見届けていたらレヴィが話しかけてきた。

「ミナ様、思ってたより元気そうじゃよかったな」

確かに、普通に喧嘩もするし元気そうではある。でも、それは多分人前だからだ。元気そうなだけで元気なはずがない。

クリシュナさんの時も似たような感じではあったけど、あの時は違う。本当にいなくなってしまったんだから。それも全部一度に。

「きつとアイツは今頃アーサーの棺の前で泣いてるよ」

そう言うつとレヴィたちは悲しそうな顔をした。心配、だよな。当然だ。でも、どうすることもできない。どうしたらいいのかが分からない。俺達はただ普通に今までどおりにエルメスと接してやることしかできない。

少なくとも、俺らがエルメスの前で悲しそうな顔をしちゃいけない。でも、それしか方法は見当たらないし、今は終戦直後だし何をしてもエルメスを元気つけてやることなんか出来ない。

無力だな、俺は。

柄にもなくちよつと落ち込んでたら、急にシャンティが立ち上がって俺を呼んだ。

「カイ、何ぼさつとしてんだよ。いくぞ」

「は？ 行くつて？」

「ミナ様のとこだよ。友達が泣いてんなら、一緒に泣いてやんのが友達だ。一人で泣かせてんじゃねえよ」

やっぱシャンティはいい奴だ。どういう風に育てばこんなアツい奴になれるんだ。こいつもスゲエ。何でもない時に出会ってたら鬱陶しい女だろうけど、今は相当頼りになる。つっても別に俺は泣かねえけど。

シャンティと一緒にエルメスの所に行くと、エルメスは泣いてるところか読書中だった。俺達の入室に気付かない程熟読中だ。なんで普通に本読んでんだよ。なんで泣いてねえんだよ。俺の発言と立場をどうしてくれんだ。

「カイ？ どういうことだ？」

「俺に聞くな」

「アンタがミナ様が泣いてるつつたんだろ！」

「そう思っただけだ！ そこまで責任持てるか！」

「アンタよくそれでシュヴァリ工筆頭とか言えるな！」

「なんでそこまで言われなきゃいけねえんだよ！ このバカ女！」

「なんだと！ このエロメガネ！」

「んだとテメエ！」

ダメだ。俺こういう気の強い女は好きじゃねえ。俺は一見淑女っぽく見えて、でも打算的で高潔そうな女が好きなの。ミラーカさんがドストライクだったの！ 情熱的で気が強いバカ女って対極じゃねえか。アーサー、アンタこいつのどこが気に入ったわけ？

シャンティとケンカを始めたらすすがエルメスも気づいて止めに入って来た。しっかりと会話の内容も聞こえてたみたいで、泣い

てなくてゴメンとか言う始末。アホか。

「心配して来てくれたの？ ごめんね、ありがとう」

「別に」

「プツ！ カイ照れてんじやねーよ」

「は？ んなわけねーだろ！ そもそもお前が行くって言ったんじやねーか！」

「アンタがミナ様が泣いてるって言うからだろ！」

「はああ！？ 俺のせいだよ！ エルメスが泣いてないならソレでいいだろ！」

「二人ともやめてよー！」

申し訳ない事に傷心のエルメスにケンカを仲裁させてしまった。この時はなんも思わなかったけど、後でちょっと反省した。それもこれも全てシャンテイのせいだ。俺のせいじゃねえ。

「ていうか、お前何読んでたんだけ？」

少し落ちついてエルメスに尋ねたら、本を掲げてニコツと笑った。

「ダンテの神曲！ クリシュナのお気に入りだったの！ テロの時クリシュナに面白いから読んでみてって言われたけどそのまま忘れちゃってて、今思い出したの！」

「ふーん、そうか。俺も好きだぞ、神曲」

「意外……」

「うるせえ。イタリア人で元聖職者なら当然だ」

「あ、そっか」

そつからなんとなく本を読む流れになって、エルメスと二人で神曲を読んでたらシャンティも覗き込んできた。

「お前読んだことあるか？」

「いや、ない」

「フーか読めんのか？」

「読めるよ！ バカにしすぎだろ！」

「あーワリーワリー」

再びケンカが勃発しそうになって面倒くさくて適当に謝ったら、エルメスが笑い出した。

「二人とも仲良しだねー！」

このバカ！ どの辺が仲良しだ！ てめーの目と耳はちゃんと機能してんのか！ もう本当俺疲れるよ・・・何とかしろよこのバカを。まあ、笑ってるならいいけどよ。

「ちよつとミナ様、冗談キツイよ」

「はああ！？ ざけんな！ お前が言うなよ！ 俺のセリフなんだから！」

「いや、あたしのセリフだったの！ アンタこそふざけんな！」

「本当仲良しだねー。知り合ったばっかなのに。なんか嫉妬しちゃう」

「はあ！？ バカじゃねーの！？ ちげーつってんだろーが！ バカ！」

もう本当ヤダ。なんでエルメスわかってくんねーの？ なんでア

イツはあんなにバカなの？ もう本っ当疲れる。マジでインド来てから以前より溜息倍増なんだけど。エルメスと出会っ前に比べて4倍なんだけど。どうしよう俺。

もー！ アーサー！ アーサー頼むよ、助けてくれ。俺溜息つきすぎて酸欠で死んじゃう。

以上

## FILE - 3 Chat 「お喋り」(後書き)

### 登場人物紹介

ガルフ(ガウエイン) 旧：クリステイアーノ

シュヴァリエ幹部の一人。カイの副官的存在な人。

対人格闘が得意で、それにおいてはカイよりも強い。  
頭も性格も割といいのに苦勞人。

好きな言葉 初志貫徹

ペレアス 旧：クラウディオ

シュヴァリエ幹部の一人。ガウエインに続く常識人。

ぶつちやけシュヴァリエ達の中でまともなのはこの二人しかない。  
手先が器用で、化学と工学が得意な為エルメスと趣味が合う。

エルメスが核爆弾を作るきっかけを作ったのはコイツ。

リオ(ライオネル) 旧：アレクサンドル

シュヴァリエの一人で、チャラ男3兄弟の一人。

とにかくチャライ。ウソや詐欺が得意な人を騙すプロ。  
好きな言葉 自由闊達

ベデイ(ベドウィル) 旧：ヨハン

シュヴァリエの一人。チャラ男3兄弟を抑止する人。

止められた試しはない。結構真面目な奴。武器萌えで制服萌え。  
好きな言葉 質実剛健

キルシュ 旧レオナルド

シュヴァリエ幹部の一人でチャラ男3兄弟の一人。

エルメスに「ヴァチカンのゴルゴ」と称される狙撃の名医。

仕事中はなかなかイイ男だが普段が残念。

パーシー（パーシヴァル）旧：エドワード

シュヴァリエの一人でチャラ男3兄弟の一人。

武器マニア。一番好きなのは日本刀。

なので以前は剣術使いのエルメスに相当萌えていた。

ユアン（ユーウエン）旧：オリバー

シュヴァリエの一人。乗り物好き。

彼に操縦できない乗り物は女性くらいなもの。

人知れず悩みを抱えている。

ディナ（ディナダン）旧：ルカ

シュヴァリエの一人。ある意味紳士。

誰よりも女性に優しいが一步間違えればチャラ男3兄弟の仲間入り。  
トラップを仕掛けるのが得意&趣味で、子供のころはよくいたずら  
していた。

でも逃げ足が速く、めったにカイに怒られない。



## FILE - 4 Cemetery 「墓地」

### シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

女二人に騙されるわ、何もできないわで今日の俺は散々だ。

確かにエルメスは言ったんだよ。部屋は俺の自由にしていいって。シャンティも確かに言ったんだよ。別室を用意するって。なのにまだ同室だよ。

「あ、カイ悪いな。満室だ。ウツカリしてた」

8合目まで登って突き落とされた気分だよ。ていうか本当は満室どころか俺とランスがエルメスと同室でギリギリなんだと。

「ていうか、一応一部屋空いてはいるけど使い物にならねえんだよ」  
「あ？ なんでだよ？」

「その部屋からランスのベッド持ってきたし、まあそれだけならベツド買えば済むんだけど、ガラスは割れてるし壁も穴だらけで外壁にまで穴が開いてるからな」  
「なんだそれ」

シャンティにとりあえずその部屋を見せてもらったら、マジでヒドイ有様だった。片付けすらしてねえし、なんだこれ。

「修理しろよ」

「いや、記念に取っところと思って」

「記念ってなんだよ！ 意味わかんねえんだけど！」

シャンティが訳わかんねえこと言うと思つて突っかかったら、シャンティはエルメスに視線を流した。

つられてエルメスを見ると、何か知らんけど涙目。

「・・・どした？」

「ここ、クリシュナが使つてた部屋なの」

なるほど、それはわかつたけど、なんでこんな荒れてんだか。でもその理由はすぐに分かった。

「実は結婚式の後にクリシュナ様の部屋で二次会したんだけどさー。そんな時に不倫疑惑が発覚して、ミナ様とアルカード様が大ゲンカ始めちゃったんだよ。で、この有様ってわけ」

ああ、なるほど。何やってんだよアーサー。手加減しろよ。いい加減にしろよ。アンタのせいで俺までとばっちり受けてんじゃねーか！ 勘弁しろよマジで！

「カイ、ごめんね。本当はカイにこの部屋を使つてもらつたらいいんだけど、残しておいてほしいの。だから同室で我慢してくれる？」

出た、リーサルウェポン。たーのーむーかーらー、泣きそうな顔するな。なんだよこれは。新手の脅迫か？ 「YES」としか言いようがねえだろうが！ さてはコレもアーサーの躰の賜物だな！？  
あまりにもアーサーが自己中すぎてエルメスは泣き落として言うスキルを得たわけだな！ いい迷惑だ、チクショー！

渋々OKの返事をして、というかどの道そうするしかねーし。結局同室のままってわけだ。

とりあえず寝起きドッキリの件に関しては、ランスが頑張ってるので俺は安心だ。アーサーも安心したろ。まあ3年も経てばわかんねーけどな。3年経ってランスが助けを求めてきても絶対助けてやんねえ。せいぜい苦しめばいい。大人の階段なめんなよ。ざまあみろ。

つーか3年経ったらエルメス30歳かよ。アラサーじゃねーか。なんて頼りねえアラサーだよ。まあ見た目はその半分くらいにしか見えねえけど。つーかアイツ19で吸血鬼化したって聞いたときはびっくりしたな。やっぱ東洋人つてのは幼く見えるもんだ。

それにしてもランスの趣味が良くわからん。もっと成長したら熟女萌えになるんじゃないか。いや、もしかしてアイツ未亡人萌え？まあどうでもいいや。

そんな未亡人は今日もアーサーの棺の前で神曲を読んでる。もうそろそろ終わりそうだ。多分今頃ダンテはベアトリーチエに再会してるどころだろう。

エルメスも、今まさにダンテと同じように地獄を旅してる。ダンテと違って水先案内人のヴィルギリウスもいない、広大で忌々しい地獄と煉獄をさまよってる。悪魔と亡者に追いつめられながら、アーサーと再会できる日を心待ちにしているんだ。それがいつかもわからずに。それがどれほどの道のりかもわからずに。それがどれほど

の苦悩かだけを知りながら。

そう思うと、本当にエルメスは辛い選択をしたと思う。いや、違うな。その選択をさせたのは俺だ。俺が引き留めてアーサーを待たせて言ったせいだ。アーサー、頼むから帰ってきてくれ。この選択が正しかったんだと、安心させてくれ。

じゃなきゃ、エルメスが可哀想だ。もしアーサーが帰ってこなかったら、エルメスは死ぬかもしれない。そうなったら俺も生きていく意味はない。エルメスはどれくらいなら待てるんだろう。時間がたつにつれて悲しみは薄れるかもしれないけど、それに比例して焦燥は大きくなると思う。

もしエルメスが待つことを挫折しそうになっても、何とか引き留めようとは思う。でも、10年とかあまりにも時間がかかるようなら、さすがに俺も引き留め切れねえかもしれない。その時は・・・どうするんだろうな、わかんねえ。

でも、俺はアイツと一緒に生きるって決めたから、もしアイツがどうしても待てなくて死にたいって言うたら、本当にどうしてもダメだっていうなら、その時は、許せ。

許してくれ、許してやってくれ。

それほどまでにエルメスが追いつめられてしまったら、待ち続けることを正しいと言える自信はなくなってしまうから。その時は、神に謀反を企てた罪人が凍りつく地獄の最下層・コキュートスの更に奥、イスカリオテのユダが墮ちた、第4圏ジュデッカで待つことにする。つーか結局待つんじゃないか。

けど、そこならジュリオ様もいそうだな。3人で氷漬けになりつつルシフェルに食われつつ待っとくわ。つーかダンテは恐ろしい世界を考えるもんだ。冷凍された上に悪魔に食われるってなんだよ。どんだけ裏切り者が嫌いなんだ、ダンテは。

ま、一応今の所信じてるけどな。エルメスが待ってるんだし。きつとエルメスはアーサーを裏切ることはないし、俺はエルメスを裏切らないから、待つことにする。

しかし、俺はいつの間になんか忠臣キャラになったんだ。正直なところ不思議で仕方がない。だって俺たちはさ、ジュリオ様にこっぴどく裏切られてるわけじゃん。ぶっちゃけ人間不信つーの？ハイハイどうせ裏切るんでしょ、みたいな。信用？なにそれ美味しいの？みたいな。

でも、不思議とエルメスが俺たちを裏切ることにはありえない気がする。アイツは別格だ。

まあ、そんな奴じゃなきゃ一緒に生きようなんて言わないわけだけど。多分、死神として活動している間に、エルメスに何度も助けられたからだろうな。エルメスがいつも身を挺して俺たちを守ってくれて、ガロードの命を救ってくれたから。信頼、依存と言ってもいい。ジュリオ様だってさすがにそこまではしなかった、いや違うな、できなかつたのかもな。

エルメス、アイツは俺たちの“アイコン”だ。

アイツには言うなよ。調子乗るから。本当もうガライドに至っては女神の様に崇めてるからな。まあ命の恩人だし当然かもしれない。ちなみに俺はバカの象徴として崇めてるけど。崇めてることに変わりはない。そう言う事にしておけ。

今夜の空模様は大荒れだ。さつき停電になった。一時保存しといてよかったぜ。また書き直すのとか超面倒くせえしな。マメな俺、さすがだ。そんな天気なのに、俺がちょっと部屋から出た間にエルメスはいなくなっていた。

屋敷の中を探してみても見当たらないし、まさかと思って外に出てみたら、案の定いやがった。

屋敷の裏庭でバケツひっくり返したみてえな土砂降りの中、傘も差さずに座り込んでた。何してんのかと思って近づいてみたらエルメスの前に小さな石碑があって、摘んだばかりのような花が添えてあった。

エルメスがインドで祈りを捧げるような石碑の持ち主と言ったらクリシュナさんしかない。そうか、これはクリシュナさんの墓なんだな。そうか、だからアーサーはインドに行けと言ったのか。

この雨の中じゃ傘なんてクソの役にも立たねえ。足元はずぶ濡れだ。でも、エルメスに歩み寄って後ろから傘をさすと、エルメスは

振り返らずに呟くように言った。

「クリシュナの、お墓なの」

「そうか」

「インドを出てから、今日初めてお墓参りなの」

「そうか」

「今まで、必要なかったから」

「・・・そうだな」

「でも、これからはお墓参り、しなくちゃいけない。ここで、クリシュナが眠ってるから。私が・・・来なかったら、クリシュナ、寂しがるから」

なんて言っていていいか、わからなかった。エルメスの頬を伝うのが雨なのか涙なのかも、俺にはわからない。

「エルメス・・・」

「違うよ」

泣いてるのか？ そう尋ねようと思ったたら遮られて、またエルメスは呟くように震える声で言った。

「・・・雨だよ」

肩と声を震わせながらそう呟くエルメスを見て、猛烈に、憎いと思った。なんで、なんで神はエルメスにこんな酷い仕打ちをするんだ。エルメスは何も悪くないのに。エルメスが何をしたらって言うんだ。あんまりだ。エルメスが可哀想だ。なんでエルメスにこんな泣き方をさせるんだ！ 頼むから、声を上げて泣かせてやれよ！ 泣

くことくらい許してやってくれよ！

吸血鬼よりも、悪魔よりも、神の方が余程酷い。神はエルメスを救わない。神はエルメスに辛い試練しか与えない。神なんか死んだ方がマシだ。アーサー、アンタもそう思うだろ？ でも、それ以上に酷いのは俺かもしれない。泣いているエルメスを前にしても、どうしたらいいのかわからなくて、ただ、立ち尽くしている俺の方が酷いかもしれない。

「友達が泣いているなら一緒に泣いてやるのが友達だ」

シャンティはそう言った。でも、俺は泣けない、泣き方なんか知らない。じゃあ、エルメスが泣けるようにするしかない。せめて、素直に泣けるようにしてやりたい。

最早、無用の長物になった傘はその場に捨てた。エルメスの隣に跪いて、頭を抱えて撫でてやると、少ししたら声を上げて泣きはじめた。

今は、これしかできない。でも、これでいいんだと思いたい。土砂降りの雨が鬱陶しい。早く晴れて欲しい。

早く以前のような、晴れた日の、太陽のようなエルメスの笑顔を見たい。それまで、俺はエルメスの泣ける場所になってやりたい、いや、ならなきゃいけない。



辛いなあ。俺は何回エルメスの泣き顔を見ればいいんだろう。

でも、一人では泣かせたくない。その方が辛い。エルメスも、俺も。せめて、泣きたい時に泣けるようにしてやりたい。そうすれば、笑いたい時に笑ってくれるかもしれないから。

エルメスが泣きたい時に泣かないのは、自分を責めているのかもしれない。自分のせいでみんなを失ったと思い込んで、だから自分が泣いちゃいけないと思っっているのかもしれない。

それに、ここにはエルメスが安心して泣ける場所がないのかもしれない。そんな場所があるとしたら、アーサーだけだと思う。でも、アーサーはいない。

エルメスにとって、アーサーは師であり、父であり、主君であり、神であり、すべてだ。アーサーが居なければ、エルメスは生きてはいけない。

エルメスはそう思ってるし、事実そうだと思う。

俺には、アーサーの代理は勤まらない。それはわかってるけど、でも俺が代わりにならなきゃいけない、そう決めた。

でも、俺は無力だ。何もできない、してやれない。どうしたらいいかが分からない。なんで俺にはわからないんだろう。今まで俺は何を見て、何を感じて生きてきたんだろう。こういう時に役に立たないことしか、俺は知らない。

いつぞ、ジユリオ様が憎い。結局俺は人殺ししか知らない。俺は

ただの兵器だ。今までの事が、エルメスにとっては微塵も役に立たない。俺のこれまでの人生は、この一瞬で、すべてが無駄なんだとわかった。

だって、そうだろ？ エルメスを救ってやれない。俺はエルメスに忠誠を誓った。エルメスの役に立たないなら、価値はない。その考えは極端かもしれない、でも、そうなんだよ。

ああ、悔しい、悔しい。

もっと前からエルメスをちゃんと見ていればよかった。エルメスを取り巻く人たちをよく見ておくべきだった。もっとエルメスの話を聞いてやればよかった。俺は知らなさすぎる。

アーサー、アンタならこういう時はどうするんだろう。エルメスの為に何をすればいいんだ。俺にはかけてやる言葉も見つからない。なんて言えばエルメスが救われるのかが分からない。

俺には、エルメスが泣き止むのを待つことしかできない。何もできない自分が悔しい。俺は一体何のために傍にいるんだろう。

アーサー、俺はどうしたらいいんだ。教えてくれ。

エルメスを救えるのはアーサーしかないんだ。俺じゃダメなんだよ。

アーサー、お願いだ。早く帰ってきてくれよ。エルメスを、助けてくれ。



報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

連日愚痴で悪いと思ってたが、今日はちょっと良い報告だ。

この前の墓参りの日から、エルメスは少しだけ弱音を吐くようになった。今までアイツは辛いとか苦しいとか俺たちに直接言う事はなかったから、多分良い事なんだと思う。

あの墓参りの後、俺も考えてみた。俺はいつも文句はポンポン言うのに、よく考えてみたらそれ以外の事をほとんど言わない。だから、言った方がいいのかなって。例えばそれが見当違いの事でも、エルメスを思っただけで味方になる奴がちゃんといてるんだってわかってくれるならそれでいいと思った。

前にエルメスは言った。

「私自分のこととか話したのアンジェロが初めてだし、何でも言い合える人に出会えることってそんなにないと思うから、アンジェロの事大事な友達だと思っててるよ」

そう言ってもらった時にスゲー嬉しかったのを覚えてる。アイツは良くも悪くも思ったことを何でも口にする。でも、今は言わない。それなら、俺が話せばアイツも話すんじゃないかって言う安直な発想だけだ。

今のエルメスはまさにダイヤだ。研磨されて擦り減っていく比重と比例して、輝きを増していく。でも、その輝きはなんとというか、儂い。刹那。それが俺は、悲しい。その悲しい輝きにみんな惹きつけられて、エルメスを心配せずにはいられない。

前はアイツの周りはなんだか明るくて、温かい感じがしたけど、今は違う。目を刺すような冷たい光だ。前のアイツが太陽であったなら、今は月。吸血鬼なのに太陽と揶揄すのはどうかと思うけど、でも俺はそう思った。

今のアイツは月のようで、自分で光ることが出来ない。光が当たらないと輝かないダイヤも同じだ。当然だけど、まだエルメスの心は上手く歩けない。月みてえにグルグル回ってる。当然だけど、仕方ないけど、なんとかかしてやりたい。一刻も早く。

墓参りの時、泣き止んだエルメスが言った。

「カイ、ごめんね。いつも心配顔させちゃうね。ごめんね。もう大丈夫だよ」

俺は謝ってほしいわけじゃない。俺に気を遣って欲しくなんか

い。俺の心配なんかしてほしくない。自分のことだけ考えていてくれたらいい。なのにエルメスは自分が悪いと思った。そんな風に思わせたかったわけじゃないのに。

きつと俺が何も言わなかったからだ。お前は何も悪くないよって言うてあげればよかったのに、言えなかった。俺が言うていいのかわからなかった。

俺ともあろうものがこんな後悔をするとは思わなかった。カイ卿は“永遠の毒舌家”なのに口を開くの躊躇うなんて、とんだお笑い草だ。らしくねえ。自分に腹が立ったつーのもあるけど、なんかいてもたってもいられなくて速攻エルメスのところに行った。

エルメスはシュヴァリエの奴らとシャンティファミリーの奴らととにかくみんなでリビングでテレビを見てた。本当は二人の方が話しやすいけど、みんながいた方が俺がしくじった時にフォローが入るだろうと思って、そのままテレビを消してやったらすぐ振り向いて怒り出した。

「ああー！ 私のマハラジャ・ナイト24！ この司会の人が面白いのに！ 楽しみにしてるのに！」

エルメスの楽しみを奪ってしまったことにちよつとだけ躊躇したけど、そのままリモコンを握り潰した。

「ミナ、テレビよりも俺の話を聞け」

「ええ？ なに？ ていうか今はエルメスだよ」

「俺は作られたエルメスと話をしたいんじゃない。本当のミナと話をしたい」

「・・・どうしたの？」

「ミナ、お前は自分のせいだと思ってんのか？」

俺の言葉にエルメスは困ったようにして俯いた。どうやら正解だったらしい。

「クライドさんとボニーさんが生死不明なことも、ミラーカさんとクリシュナさんと北都とアーサーが消滅したことも、お前は自分のせいだと思ってんのか？ ジュリオ様が裏切って攻撃してきたことも、俺がジュリオ様を殺したことも、自分のせいだと思ってんのか？」

畳み掛けるように質問しても、エルメスは俯いたまま答えようとしない。

「ミナ、答えろ」

ちょっと厳しいかと思っただけど、逆に普段通りの方がいいと思っただ。むしろ怒らせた方が饒舌になるかもしれないって言う目論見もあったけど。すると、俺の作戦は功を奏した。

「だって、私が誘拐されたせいでジュリオさんを城に入れちゃったんだよ。私がすっかりしてなかったから、ジュリオさんの苦しみに気付いてあげられなかったから、戦いをさせちゃったんだよ。私が強くなかったから北都も消えちゃったんだよ。私が・・・私のせい

で！ 私を守ってミラーカさんとクリシユナは死んじゃったの！  
アーサーさんは消えちゃったの！ 私のせいでカイにジュリオさんを殺させちゃったんじゃない！ ジュリオさんはカイのお父さんなの！ 私か・・・全部私の・・・なんで、なんで私が生きてるの！」

一息に叫んで、エルメスは泣き出した。あーあ、俺泣かしちゃった。アーサー怒らないでよ、わざとじゃねえから。必要悪だから。一つ溜息を吐いて、エルメスの涙を拭いた。

「ミナ、俺を見る」

エルメスはゆっくり顔を上げて、目が合ったのを確認して、作戦を実行に移した。

「お前はどうしようもねえバカだな。お前は激しく勘違いしてる。それを俺が正してやるからよく聞け。いいか、まず誘拐についてだけど、誘拐されたのはお前だ。お前は被害者だ。自分で言っただろ、とばっちりだつて。お前は被害者だ。お前は何も悪くねえ」

「でも、私が・・・」

「でもじゃねえ。悪いのはジュリオ様だ。お前は何も悪くない。大体、ジュリオ様が城に行くって言った時、お前反対しただろ。ちなみに俺も反対したしな。アーサーの気持ちを利用して、それを押し通したのはジュリオ様だ。お前は悪くない。お前が悪いなら銀行強盗に遭った銀行も悪いってことになる。それは違うだろ？」

「・・・うん」



「お前は悪くない。わかったか？」  
「うん」

「じゃ次。お前がジュリオ様の気持ちに気付かなかつたから戦争が起きたんじゃない。あの人はお前と出会ったその日には既に襲撃を計画してた。ジュリオ様がずっと“ミナ”を忘れられなかつたから戦争が起きた。お前は“ミナ”じゃねえだろ。別人だ。違うか？」

「・・・違うない」

「コレも悪いのはジュリオ様だ。あの人が弱かつたから悪いんだ。あの人が“ミナ”を忘れられなかつたせいだ。忘れようとしなかつたせいだ。あの人は死ぬ間際まで“ミナ”に囚われた。それほどの妄執を他人がどうこうできるはずがない。あの人自身にできないんだから当然だ。お前の意志も誰の意志も届かない次元にあつたんだ。お前がしっかりしてようがしてなかるうが関係ねえ。あの戦争は、ジュリオ様の妄執が引き起こした。わかるな？」

「うん」

「それと、これが一番大事だけど、クライドさんとポニーさんが生死不明なのと、みんなが死んだのはお前のせいじゃねえ」

「でも、私が弱かつたからだよ」

「なんでお前が弱いとお前のせいなんだよ」

「私が弱かつたから、守つてあげられなくて殺されたんだもん」

「殺したのは誰だよ」

「・・・ジュリオさん」

「じゃあ悪いのはジュリオ様だな」

「・・・でも」

「でもじゃねーの！ じゃあお前が殺したのかよ」

「違うけど・・・」

「じゃあお前は何も悪くねえよな」

「・・・」

「お前のせいじゃねえ。ミラーカさんが言っただけだ。それが自分の使命なんだって。彼女は自分の使命を果たしただけだ。クリシユナさんと北都はお前を守って責任を全うしただけだ。愛する人を守りたいと思うのは当たり前前の事だ。それをお前が讃えてやらなくてどーすんだよ。お前が自分の責任だと思ってる内は、ミラーカさんもクリシユナさんも北都も浮かばねえだろ。お前を守って死んでいった人たちに感謝こそしても、懺悔や謝罪をするな。わかったな」

「わかった」

「それと、まあ正直俺の事はどうでもいいんだけど」

「よくないよ！ カイはジュリオさんの事大好きだったじゃない！」

「まーな。俺はあの人を信頼してたし、尊敬もしてたけど」

「なのに、私のせいで・・・」

「あんなー、お前のせいじゃねえよ。お前の為ではあるけどな。つかそもそも、教皇の命令だったし。でもそれ以上に俺の為に」

「カイの為？」

「そーだよ。単純なことだ。お前とジュリオ様を天秤にかけて、どつちが俺にとって重要だったのか、それだけだ」

「でも・・・」

「でもじゃねえつつつてんだろ！ これに関してでもは許さねえぞ！ 俺がそうだって言うんだからそうなんだよ！」

「でも、だって！ カイがジュリオさんを殺したのは呪いの連鎖を止める為でしょ！」

「言い方変えてんじゃねえよ。まあ勿論それもあるけど、それは正直付録だ」

「じゃあ、なに？」

「お前を殺したくなかった。死なれんのがヤだったから」

「なんで？」

「なんで！？ なんで・・・なんで？」

予期せぬ質問に思わずシャンティに振り向くと溜息を吐かれた。こいつに溜息つかれると異常にムカつく。

「友達だからだろ」

「あ、そうだな、それだ。友達だからに決まってるんだろ！ わかったか！」

「・・・なんか釈然としないんだけど」

「なんでだよ！ 俺がそうだったついたらそうなんだよ！」

「シャンティが言ったんじゃない」

「うるせえ！ 意見としては同じだ！ 要するに、俺の都合なの！

お前に生きててほしかったからジュリオ様を殺したつてのが実は8割くらい占めてんの！ だからお前は何も気負う必要はねえ！

わかったか！」

「・・・わかった」

「えーと、後はなんでお前が生きてんのか。バカじゃねーの。なんだそれ」

「バカじゃないもん！ だって、みんないなくなったのに私だけのうのうと生きてるなんて許されない気がするんだもん」

「ハア、バカ。お前はのうのうとは生きてない。あの日からずっとお前は悩んで苦しんで生きてる。ずっとアーサーを待ってる。お前が一番苦しいのに、俺達にまで気を遣ってる。それでのうのうと生きてるってんなら、世の中の大半の奴は生きる価値はねえ」

「でも、クリシュナも北都もミラーカさんも、アーサーさんもいなくなっただのに・・・」

「そうだな。で、誰か一人でもお前に死ねつつあったか？」

「言わない」

「てことは生きてるって事だろ。大体消えた人達はみんなお前に生きててほしかったから、その身を賭してでもお前を守ったんだぞ。それなのに生きてるのが許されないなんて、じゃあ何のためにお前を守ったのかってことになるだろ。それは逆に申し訳ないと思わねえか？」

「・・・」

「お前は何も悪くない。お前は十分苦しんだ。お前は生きていい。生きる価値がある。それはここに居る全員が保証する。俺たちはお前と一生一緒に生きてるって誓っただろ。その誓いをお前は破るのか？」

「そうじゃないけど・・・」

「ハア。お前はさ、アーサーと約束したんだろ。アーサーの為に生きてアーサーの為に死ぬって。その誓いも破る気か？」

「破らないよ！」

「じゃあ生きろよ。お前が前に言ってただろ。誰かが生きててほしいと願っているうちは死んじやだめなんだって。俺も、コイツらも死んでいった人たちも、大勢の奴らがお前に生きててほしいと願ってる。生きてるのが許されないなんて二度と考えるな」

「・・・うん」

「要するに、総合するとお前は一つも悪くねえって事だ。わかったな？」

「わかった」

「本当に？」

「うん」

「ミナ、お前は何にも悪くねえよ。お前のせいじゃねえ。お前が辛

いって言っても泣いても笑っても誰も怒ったりしねえよ。ここにはお前の味方しかいない。もう我慢すんなよ。誰にでもいくらでも頼っていい、甘えていいんだぞ。大抵の事なら我儘も聞いてやるし、ずっと傍にいてやるから。だからお前一人で何でも背負い込むな。みんな、お前を本当に大事に思ってたんだから。その事をちゃんとわかってくれ。俺らを信じてくれ。頼ってくれよ、な？」

「・・・うん、カイ、ありがとう」

またしても泣き出したエルメスは、ちよつとだけ前のエルメスに戻った気がした。とりあえず、理詰め&洗脳作戦第一段階はクリアだ。この調子で毎日言ってるだろう。

「ミナ、俺たちがお前を心配するのをお前が気にする必要はねえんだからな。俺らが勝手に心配したくてしてんだから。俺らは好きでやってんの。だから謝んな」

「う、うん」

「なんかあつたら誰でもいいから捕まえて話せ。その為に俺らは傍にいるんだからな」

「うん」

「俺たちは絶対にお前を裏切らないから、信用してくれ」

「うん」

「ミナ、俺たちはみんなお前の味方だから。お前と一緒に生きるって誓っただろ。俺は・・・いや。とにかく、わかったな」

「う？ うん。俺は、なに？」

「なんでもねえ」

「気になるよ」

「気にすんな」

「気になる!」

「うるせえ」

「きーになーるー！」

「うるせえつつつてんだろ！」

うつかり口を滑らせたせいでエライ食いつきようだ。どうしよう、うぜえ、叩きてえ。でも今は我慢だ。耐えろ、俺。

しかし、どうしよう。言いたくねえ。でも言った方がいいんだろ  
うか、いや言いたくねえ。俺絶対恥かくし。でも、もし言ったらエル  
メスが元気になるならちよっとくらい恥かいてもいいか、そう思っ  
た。

「ハア、いいか。一回しか言わねえ。二度と言わねえからな」  
「うん」

「俺はお前が大好きだよ。お前を大事な友達だと思ってる。大事な  
家族だと思ってる。お前が居ななきゃ俺は生きていたくない。お前に  
とってのアーサーがそうであるように、俺に、俺たちにとってお前  
がすべてだ。俺は、世界で一番お前が大事だ。だから、えーと、あ  
ー……まあそういうことだ」

なんとか頑張ってた言ったら、エルメスはキョトン顔してる。周りの  
の奴らがクスクス笑ってる。キルシュに至っては指さして笑ってる。  
チクシヨ、アイツ後で撃つ。

クソ、やっぱ恥かいた。頼むから俺のこの恥に見合うリアクシヨ  
ンをしてくれ、と思ってたなら、エルメスは突然泣き出した。

アレ、なんで？ なんで泣くの？ って内心パニックに近いくら

い慌ててたらエルメスが抱き着いてきた。

「ありがとう、すごく嬉しい。私もカイが大好きだよ。私もカイは大事な家族だって思ってるよ。カイ達が居なかつたら生きてたかない、生きてられないよ。傍にいてくれて、本当にありがとう」

どうやら喜んで頂けたようだ。なんとか俺の恥に見合う反応を戴けて超安心した。エルメスの頭を撫でてたら、思った。俺はスゲー頑張ってたけど、コイツは普通に言えるんだなって。

俺は嬉しかったし、エルメスも嬉しいって言ってくれた。エルメスが喜んでくれるなら、俺ももうちょっと頑張つて、普通に言える努力を試してみようと思った。

でも、もう二度と人前で言わねえ。アイツらのリアクションが心底ムカつく。あークソ、リオの奴いつまで笑ってんだコノヤロー。アイツも撃つ。

どうでもいいけど、コイツ腕力強ええ。さすがアーサーの眷属だ。苦しい。え、プロレスじゃねえよな。どうしよう、突き飛ばしていい？ いやでも我慢だ、耐えろ、俺。とか思ってたら、急にエルメスが離れるもんだから何故か知らんがむせた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「・・・なんでもねえ。つかまあ、兎に角そう言う事だ。家族なんだから言いたいこと言っついていいんだぞ。それが普通だろ。もう一

人で悩むなよ。わかったな」

「うん、わかった！ ありがと！」

そう言っただけで笑ったエルメスの顔は太陽みたいだった。少しだけ状況は好転したようだ。話が終わった後にガードが話しかけてきた。

「何となく今まで副長とエルメスの関係をうまく形容する言葉って見つからなかったんだけど、今日の話聞いてじっくりくるのを見つけたよ」

「あ？ なに？」

「兄妹、これが一番合ってる気がする。確実に友達以上で恋人以上に信頼してる関係なんて、兄妹しかないじゃん」

それを聞いた全員が「それだ！」って満場一致で納得してた。なんか、俺的にもしつくりきた。エルメスは俺の家族、妹。思わず納得。道理で手間がかかる。道理で保護者のような気分にもなるわけだ。でも、妹なら手間をかけて、保護して当然。

このままエルメスが元気を取り戻して、穏やかにアーサーを待てるようになればいいと思う。アーサーが帰って来た時に、前のエルメスみたいな笑顔で迎えてやれたらいい。そうなるように、俺も頑張ります。

以上





## FILE - 5 Crybaby 「泣き虫」(後書き)

### 登場人物紹介

#### ミラーカ

故人。アーサーの親友。先の戦争にて戦死。  
アーサーとエルメスを守るため魂を引き替えに二人を守った。  
最後まで二人を愛し死んでいった非業の美女。  
エルメス以上にアーサーの理解者で、苦楽を共にした竹馬の友。

#### 北都

故人。エルメスの弟。先の戦争にて戦死。  
極度のシスコンでアーサーにすら牙をむくほどの狂犬。  
クリシュナだけは仲良し。  
最後まで姉と共に戦い、励まし奮起させた強い子。

#### ボニー&クライド

アーサーの支配下の吸血鬼カップル。眷属ではない。  
先の戦争から生死不明。戦争当日に拳式予定だった。  
ボニーの好きな言葉 永世中立  
クライドの好きな言葉 行雲流水

LETTER 1 Cai 「カイ」

拝啓 アーサーさん

初めてお手紙書きます。なんだかわからないけど、急にアーサーさんにお手紙を書きたくなりました。

アーサーさん、あなたが消えた後、今日まで色々ありました。今はカイ達とシャンティの所にいます。あ、カイっていうのはアンジエロの事です。今は私もエルメスって名乗ってるんですけど。あ、ていうか勝手にアーサーって名前変えてごめんなさい。

アーサーさんが居なくなっただ後、私はジュリオさんを殺そうとしました。ジュリオさんが心の底から憎くて、彼をこの世から欠片も残さず消滅させてやろうと思いました。

でも、カイがジュリオさんを殺しました。私がジュリオさんを殺したら、カイが私を殺さなきゃいけないからって。今になって思うと本当にその通りで、“ミナ”の呪いの連鎖を止めようと思ってたのに、また自分で新しく呪いの連鎖を繋げようとしてたって気付いて悲しくなりました。

私は本当にバカです。どうしようもないくらいです。今日カイに言われました。お前は悪くないって。そう言われるまで、私は全部自分が悪いんだって思ってた。今でもちよっと自責の念はあります。でも、私に味方してくれる人がいっぱいいるんだってわかつ

て、早く元気にならなきゃって思いました。

今日、カイに言ってもらったことを思い出してたら、クリシユナが殺された時の事を思い出しました。今日カイが言ってくれたようなことを、私はアーサーさんに言ったなあって。シャンティの時もそうだったなあって。

どうしてでしょうね。人にはそう言う風に言えるのに自分の身にそう言うことが降りかかってくると、言われるまで気付きもしないんです。本当バカみたいですよ。

だけど、そう言ってもらわなかったら今こんな風に思えませんでした。本当にカイやランスやガロード、シャンティ、みんなのお陰です。私本当にみんなが居なきゃ生きていけません。みんなのお陰で生きてます。みんなのお陰でアーサーさんを待てます。

あの日、私は全てを失いました。でも、その代り新しく家族が出来ました。すごく悲しいけど、でも私は幸せ者です。

だけど、すべてを失ったのは私だけじゃありません。カイだって大事なものをたくさん失いました。カイはジュリオさんを殺してしまいました。自分の都合だって言ってたけど、きつと今でも後悔してるんじゃないかなって思います。

だって、カイは本当にジュリオさんが好きだったんですよ。ジュリオさんを撃った時のカイの顔が忘れられません。凄く苦しそうで、今にも泣きそうで、このまま自殺しちゃうんじゃないかって思うくらい、辛そうでした。

ジュリオさんが砂になって死んだ後、ごめんなさい、ごめんなさいって何度も謝ってたんです。

それなのに、俺の事はどうでもいいっていうんです。私の為にカイはいつも一生懸命です。カイにはいつもたくさん迷惑かけて、すごく気を遣わせてしまいます。私はもう今は前みたいにできません。もう少し時間が経たなきゃ無理です。

カイはジュリオさんを失いました。ヴァチカンを失いました。今までの人生を壊されました。信頼を裏切られました。大事にしていたものをたくさん失いました。

だからでしょうか。今カイが取り戻せるものは何もありません。だから私だけでも元に戻そうって頑張ってくれてるのかもしれない。それは私にとってすごく嬉しいけど、同時にとても悲しい。

カイはあの時、ジュリオさんを撃った後、死んでしまったかっと思えます。カイにとってジュリオさんは全てでした。私がアーサーさんを殺すようなものです。もし、私がカイと同じだったら、誰がなんて言っても絶対死んでいると思います。カイみたいに踏みとどまって、私まで引き留めるようなことは、私にはできません。とてもじゃないけど、できません。

カイはすごく強い人だと思います。きつとすごく罪悪に苛まれてると思うんです。きつとすごく苦しいはずなんです。それなのに、私とアーサーさんの為に、私に生きると言いました。私とアーサー

さんの為に一緒に生きるって言いました。

アーサーさんが待ってって言うんだからちゃんと待ってるって言いました。一緒に待っててやるからって言うってくれました。お前を一人にはしないからって言うってくれました。

カイがそう言うってくれるから、私は待つことが出来ます。でも、カイはカイですごく苦しいはずなのに、いつも私の為に気を遣って私の為に苦しそうな顔をしています。今のカイは私の為に生きてます。私のせいで、生きてます。

それが良い事なのか、悪い事なのか、よくわかりません。

アーサーさん、私は災厄のような女でしょうか。今、私は決して幸せだとは言えません。私の周りの人たちも、幸せだとは思えません。カイはただでさえ苦しいのに、私のせいで余計に苦しんでいます。私は災厄なのでしょうが。

今私の周りにいる人たちは、みんな私を心配してくれています。心配させてしまっています。カイは好きでやってるんだから気にするなって言います。そんなこと言われても気にしちやいます。そうですよ？

だけど、心配かけるのが嫌ならしつかりしろよって話ですよね。まあ、そう言う風に思えるのもカイ達のお陰なんですけど。

今日の事で、クリシュナの言葉を思い出しました。何もかも背負っていつまでも苦しいって言ってちゃだめだよって。理不尽は存在して当然だって、できることを考えなさいって。

本当にその通りだなんて思います。こんな酷い理不尽がこの世に存在するのかと、今でも恐ろしく思います。だけど、アーサーさんは怒るかもしれないけど、私はジュリオさんを許してあげられたいいなって思ってます。

ジュリオさんを恨んでしまったら、100年の呪いは更に100年続くでしょう。それだけは、避けたいんです。呪いを絶とうとしてくれたカイの為に、呪いを生んだことを後悔していたアーサーさんの為にも、自分の為にも。

私、前にクリシュナに言われて思ったんです。クリシュナの様になりたいなって。彼は現実主義者でした。強く優しい人でした。どうしようもないことを、いつまでもクヨクヨ考えているような人ではありませんでした。自分の為に、自分が大事に思う人の為に、いっしょにできることを考えて、できることをする人でした。

今の私にできることは、みんなの思いに応えられるようにすることだと思います。カイもみんなも、私の為に一生懸命になって励ましてくれたり心配してくれたりしてます。でも、いつまでも心配かけたくないし、これ以上カイに苦しんでほしくないから。

だからって、無理に明るくふるまうのも違うかなって思いました。多分それも見抜かれちゃってるんでしょうし。だから、泣きたい時に泣く努力をしてみます。

アーサーさんに前に言いましたよね。泣きたい時に泣けるのも強さだって。自分で言っというて忘れてるんだから本当私バカです。

とりあえず、あんまり考えないように頑張ろうって思います。ミラーカさんとクリシユナと北都はもう、戻って来ません。その事を考えるだけで、胸が苦しいです。だけど、今更どうしようもありません。後悔しても仕方がないんです。後悔して戻ってくるわけじゃないから。

カイに言われました。私を守って死んでいった人たちの為に、感謝はしても謝罪や懺悔をするな。本当、そうだなって思いました。私のしていたことは彼らに対する冒涇でした。自分を恥ずかしく思いました。

だから、これからは彼らの死を悼んで、彼らに出会えたことを感謝して生きて行けるように頑張るつもりです。本当はすごく辛いけど、自信ないけど、でもその方がやっぱりいいと思うし、そうすれば彼らはずっと私の心の中で笑ってくれると思うんです。

今、私がこんな風に思えるようになったのは、カイやみんなが支えてくれるおかげです。本当に頭が上がりません。

カイは言いました。私が世界で一番大事だと。大事な家族だと。その言葉で、私の苦しみの世界は一気に壊れました。



あれほど自分を責めていたのに、誰かに必要とされていることがわかっただけで、赦されたような気がしました。本当に心の底から嬉しかった。そう言う風に思ってくれる人がこの世に存在することが死ぬほど嬉しかった。涙が出るほど嬉しかった。ていうか、泣きましたけど。そりゃ泣きますよ。泣くでしょ、普通に。

カイはまるでヴィルギリウスのように私を地獄から導いてくれます。

私は地獄をさまようダンテです。地獄の悪魔と亡者に怯えて、迷って、泣きながら出口を探す憐れな吸血鬼です。今日の事がなかったら、地獄の恐ろしさに目を閉じて耳を塞いで、隣で導いてくれるヴィルギリウスの存在にさえ気づかなかったかもしれない。

カイは私の道標です。彼が居なかったら生きていけません。きつと、ずっと地獄から出ることが出来ないでしょう。だけど、カイがいてくれるなら、いつか地獄から抜け出して、煉獄を上って、ベアトリーチェに会えると思うんです。

アーサーさん、早くあなたに会いたい。アーサーさんのいない世界はとても怖くて寂しいです。アーサーさんに会って、その声を聴きたい。色んなことを話して、笑って、怒ってほしいです。

でも、その時に私も前の私に戻っていられるように頑張ります。今のままの私でアーサーさんに会うのは、アーサーさんに申し訳が立ちません。

アーサーさんはきつと、私が生きているかどうかも分からずに不安だと思います。状況もわからずに今頃苦しんでいるんじゃないかと心配です。だから、帰って来た時に安心できるように、あなたの居場所はここにちゃんとあるんだとわかってもらえるように、私とみんなで、笑顔でお帰りって言います。

ずっと、ずっと、待ってます。あなたが約束を破ったことはないから、ずっと信じて待ってます。

だから、私が笑顔でお帰りって言ったら、ただいまって笑ってください。

また、何かあったらお手紙書きます。でも、デスクの引き出しがいっぱいになる前に帰ってきてくださいね。待ってますから。

敬具

## FILE 6 Change 「気分転換」

### シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

明けましておめでとう。今年もよろしく。つかランスに言われるまで忘れてた。もう正月じゃん。ていうか、コイツら正月らしいこと一切しねえの。

「あたしらスラム育ちだし？」

「どうでもいいよな」

「わかんねえし」

「ていうか、仕事忙しいし」

こういうところは共感できるな。実をいうと俺もイベントとか大嫌い。面倒くせえもん。実は世の中で一番嫌いなイベントがクリスマスだったりする。あの浮かれっぷりが腹立つ。

去年戦争まで起きたせいでより嫌いになった。クリスマス死ね。キリストもう起きてくんない。てめえの誕生日なんざどーでもいいんだ。知ったこっちゃねえ。

正月なんてどうでもよくて、仕事が忙しいシャンティ達は今日も

仕事だったみてえだ。つーか、言うの忘れてたんだけど、シャンティあれで社長だ。部下はほんとこ身内だけらしいけど。何やってるかっつーと人材派遣会社なんだと。

なんで人材派遣かって言うと、ここでまたアーサーが絡んできやがる。

アーサーは自分たちを拾って人並みの仕事を与えてくれた。誰だってその機会さえあれば、才能のある奴だっているし、誰かの役に立てる。特にスラムの奴らなんてその最たる例だ。仕事ができないわけじゃない。機会がないからできない。仕事がないからできない。

だからいずれもつと会社をデカくして、そういう奴らに働く場所と、能力とやる気を生かせる場所を提供したいんだと。アーサーがそうしてくれたようにな。

そう言うのを考えると、アーサーってさあ、蒔いたのって呪いの種だけじゃないんじゃないかねえの。良い方の奴も蒔いてんじゃない。まあ、それをシャンティたちがこれからどう育てるかってのが課題だけど、なんとかなんだろ。

シャンティからその話聞いてエルメスは嬉しそうにしてたぞ。いねえのに喜ばせられるってなんだよ。もう、なんなんだよ。なんか腹立つ。別にいいけどよ。

そっからまた話が正月の事に戻ったんだけど、正月だったのに実は俺らは密かに頭を抱えてた。

血のストックが底を尽きかけてた。以前は餌なんて喰いきれない程に手に入ってたから、ぶっちゃけ余裕ぶっこいてたっつーか、現実ナメてた。

その辺の奴殺して持ってこようかとも考えたが、それじゃシャンティ達に迷惑がかかるだろうし、今妙な騒ぎを起こしたら逃げた意味ねえしな。

本来なら心配かけんのが嫌だったんだけど、手に詰まったもんだから、エルメスに相談することにした。

「うーん、私達が前にインドにいた時の入手先って、病院か大学の医学部から輸血用とかを盗んでただけど」

「大学？」

「そう。クリシュナが大学にいたから」

「吸血鬼なのに大学生!？」

「ううん、博士。准教授」

「マジか」

吸血鬼に戸籍がある意味もよくわかんなかったけど、人格者でしかもインテリってクリシュナさんはどんだけスーパーマンだよ。よくエルメス相手にしてこれたな。

いや、もしかすると、だからこそバカなエルメスに惹かれたのか？ 想像を絶するバカっぷりが面白かったとかならまだ納得できるけど。

いや、今はそれはいいとして、病院は盲点だったな。

「なるほどな。じゃあ今夜あたり盗みに行くわ」

「私も行く！」

「いや、お前は留守番してろ」

「なんで？」

「お前連れて行くと必ずと言っていいほど不測の事態が起きるから。最早そのこと自体は不測じゃねえ」

エルメスはブーブー言ってたけど、シュヴァリエ全員が俺に着いたもんだから諦めたようだ。

シャンティにデケエ病院の場所を聞いて、俺とガルフとリオとベディとで行くことになった。他の奴はエルメスと留守番だ。

「カイ、誰かに見つかったても殺しちゃダメだよ？」

「言われなくてもわかってますが」

「隠密行動の時は慎重にね？」

「だから言われなくてもわかってますが」

「好き嫌いしちゃダメだよ？ でもAB型は数が少ないから取って来ちゃだめだからね？」

「だから言われなくてもわかってるっつってんだろーが！」

「もう、すぐ怒るんだから。ベディ、ナースさん見つけてもついてもついでだからね？」

「な！ ちょっと待て！なんでエルメスが知ってるの！？」

「あ、ワリ、俺が教えた」

「なんで副長は変なところで口が軽いんだよ！」

「ハハハハハハ」

「また笑って誤魔化す！」

そう言うわけで、俺ら4人でプラプラ歩きながら病院に向かった。車で行ってナンバー控えられたりしたらダリーし。走りゃ車よりはええし。

ガルフ「なんかこういうの久しぶりじゃね？」

ベディ「しかも盗みに入るだけって超平和じゃね？」

リオ「つか手ブラとか初じゃね？」

ガルフ「つかクーラーボックスとか持ってこなくてよかったわけ？」

俺「あ、忘れてた。戻んの面倒くせえから途中で買ってたか」

ベディ「はあ？ 今何時だと思ってるんだよ」

俺「知らね。じゃあそれも病院で盗みゃいいだろ」

正月ボケしてるだのなんだの文句を言われたが、帰りの短時間で腐るわけねえだろつつって結局そのまま病院に着いた。で、やっぱり病院に潜入ついたらコレだろ。

俺「俺超カッコよくな？ 超似合ってるね？」

リオ「似合すぎて逆に怖ええ」

ガルフ「マッドサイエンティストにしか見えねえ」

ベディ「コレ持って帰っていいかな」

俺「実用の機会ねえだろ。つか、どんだけお医者さんゴッコやりてえんだ、てめーは。いっそ引くわ」

ベディ「うるせーな！」

俺「てめーがな」

素敵に白衣を着こなした俺らは、無線を繋いで散開してそれぞれ血を探しに行った。しばらくウロチヨロしてそれっぽい部屋を見つけたらビンゴ。早速血を持って部屋から出ようとしたら、ガルフから無線が入った。

ガルフ「お、俺どうしよう」

俺「あ？ どした？ 今どこだ？」

ガルフ「西棟の壁に掴まってる」

俺「は？」

勿論無線はみんな聞こえてたから、ソッコ外に出て西棟に行ったら4階の壁にガルフがぶら下がってた。なにやってんのアイツ。つかウケるんだけど。

俺「ギャハハハ！ お前何やってんの！」

リオ「何それ？ 楽しい？」

ガルフ「笑い事じゃねえんだって。助けるよ！」

ベディ「飛び降りりやいいじゃん」

ガルフ「・・・それもそうだな」

結局ガルフだけ成果を得られなかったんだけど、結構収穫はあったからそのまま帰りながら何があったのか聞いてみた。

「入った部屋自体は良かったんだよ。準備室みてーなき。で、血を



探してたら人が入って来たから、慌てて外に出て隠れてたわけよ。で、いつまで待っても出ていかねえから何してんだろと思ったたら、医者とナースがイチャついてやがった」

白衣4人組が深夜のスラムで大爆笑だよ。そしてそれを羨ましが  
るベディ。だからお前どんだけだよ。つーか、エルメスいなくても  
不測の事態起きてんじゃねえか。もしかしてトラブルメーカーって  
感染症か？

ヒーハー笑いながら屋敷に着いたら、そのままの格好で帰ったの  
忘れててコスプレだのなんだの笑われた。

「似合うだろ？」

「似合ってるけど、金髪メガネで白衣って3つもクリシュナと共通  
点あるのに、どうしてカイはそんなに邪悪なの？」

「てめー、クリシュナさんと比較してんじゃねえよ。あの人と比較  
されたら大概の奴は邪悪だろ」

「他の3人はカイほど邪悪じゃないよ」  
「うるせえ」

結局屋敷に帰ってからマッドサイエンティスト呼ばわりされた  
んだが、思いついてエルメスに白衣を着せてみた。

「似合わなさすぎだろ」

「そんなことないよ。保健室の先生くらいには見えるよ」

「どのへんが？ 袖余ってるし、なんか親父のシャツ着たガキみてえ」

「せめて大人にしてよ！」

「じゃあスゲエ間抜けな助手」

「間抜けは余計！」

「いや、不可欠」

エルメスはキーキー言ってたが、他の奴らは「あー」つって納得してた。コレとつといてアーサー帰って来た時にも見せてやる。

あーでも、なんか今日は久々笑ったなー。結構楽に血も手に入っ  
たし、ずっとこんな感じで毎日楽しけりやな。なんかいい気分転換  
になった。俺だけ気分転換するのも悪いし、次はエルメスも連れて  
行ってやるか。つーかたまには外に連れ出してやんねーとな。

「じゃあ、その時私はナースさんだね！」

「お前にだけは看護されたくねえな」

言いながら思わずベディを見たら、なんか打ちのめされてた。何を想像してんだ、何を。なんかバカばかりだな。まさかバカも感染症か？

いかにも間抜けそうなナースエルメスはアーサーに献上してやる。楽しみにしてる。

以上

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

今日早速エルメスを外に連れてってやったんだが、なんかスゲエ疲れた。今度は別の奴に付き合わせる。もう俺は一緒に出歩きたくなえ。

「なあエルメス、今日どっか行かねえ？」

「どこかつて？」

「どこかだよ」

「……行かない」

序盤からエルメスにフラれた俺にみんなは大爆笑だよ。いきなり可哀想な俺。まあ、ノープランな俺も悪いけど。つーか本当はどこかなんてどうでもいいんだけど。

「うるせえ。俺が行くつつたら行くんだよ。さっさと支度しろ」

「横暴！ ていうか、カイが行きたいところあるんでしょ？ どこに行きたいの？」

「別に」

「別につて……意味わかんないよ。行きたいの？ 行きたくないの？ どっち？」

「むしろお前一人でいいから出かけてこい」

「全然意味わかんないよ!？」

「うるせえ、さっさと支度しろ・・・ああ、もうそのままでもいいや、面倒くせえ」

「え!？　ちよ、うあ!」

で、無理やりエルメスを連れ出したんだが、さすがにノープランだ。さて、どうしようと考えてたら、気付いたら後ろからついてきてたはずのエルメスがいなえ。早速迷子。

あーマジかよ。屋敷出てまだ10分だぞ、ありえねー。渋々来た道に戻ったら、アイツ、スラムの孤児に捕まってた。

「ごめんね、お金持ってる人とはぐれちゃって何も持ってないの」

俺は金ヅルか。飛び蹴りしたい衝動を何とか抑えて、エルメス引き摺ってスラムを抜けたところでアイツが離せって暴れるから離してやった。

「もう!　扱いがヒドイ!」

「じゃあはぐれんな」

「カイが歩くの早いんだよ!　勝手に連れ出しといて一人で行っちゃうから!」

「お前が遅いんだよ。ダックスみてえに足短えから」

「ヒド・・・それでもシユヴァリエなの?　紳士なの?」

「役職は一応シュヴァリエだが、残念ながら紳士じゃねえ」

「それを偉そうに言う人初めて見たよ」

「フーかどこ行こっかな」。どこ行きてえんだ？」

「こっちのセリフだよ！」

キャンキャン吠えるエルメス無視して、適当にプラプラしてたらなんか大通りに出て、そしたら急に目の前にあるシヨップिंगモールに行きたいとエルメスが言い出した。

「ここテロ現場！ 今どうなってるのか見たい！」

ああ、例の。エルメスが一人で乗り込むと言う暴挙を犯したって噂の。まあいいかと思って中に入ってしまったらウロついてたら、またしてもエルメスがいねえ。もう俺、帰っていいかな。アイツ置いて帰っていいかな。

探するのが心底面倒くさかったから、企業の良心に頼ることにした。

ピンポンパンポーン

「ナリマン・ポイントからお越しのエルメス・ペンドラゴン様、エルメス・ペンドラゴン様。お連れ様がお待ちです。サービスカウンターまでお越しください」

アナウンスを流して貰ったら、アイツ顔真つ赤にしてソッコ走  
ってきやがった。マジ面白れえ。アイツ最高。

「もー！ もー！ ヒドイよ！ 恥ずかしいでしょ！」

「アハハハ！ お前最高！」

「最悪だよ！ もー！」

顔を真つ赤にして怒るエルメスに俺は腹抱えて笑っただけど。  
しかし、コイツの迷子癖は本当に何とかなんねえのか。アーサー、  
本当に苦労したんだな。なんかしみじみと同情する。

さて、どうしたもんかと考えてたら良い事を思いついた。

「エルメス、ペットショップ行くぞ」

「え？ 蛇買うの？」

「どっから蛇が湧いて出た？」

「だってカイ蛇っばい」

もうコイツの思考は意味わかんねえよ。何？ 蛇っばいって。最  
早ツッコむ気力も起きねえよ。アーサー始終こういうのに晒されて  
たの？ 本当気の毒だな。本当に心底同情する。だから今は俺に同情  
しろ。

「わけわかんねえ事言ってるな。動物なんていらねえよ」

「じゃあ何？ 見たいの？」

「いや、買い物」

「なにを？ ペットなんていないじゃん」

「いや、うるせえ犬が一匹いる」

そう言ったらエルメスは少し考え込んで、すぐにハツとした顔をした。

「まさかと思うけど私のこと言ってるの？」

「そーだけど？」

「私犬じゃないもん！ 犬嫌いなのに！」

「キャンキャンうるせえよ。室内犬かためーは。オラ、二度と迷子なんねえように首輪買ってやつからさつさと来い」

「ヤダよ！ バカじゃないの！」

「お前がな。何度も迷子になりやがって。わざわざこの俺が買ってやるんだから有難く受け取れ」

「有難迷惑だよ！」

「迷惑はお前な」

あまりにもエルメスがキャンキャンうるせえから首輪は諦めた。まあ折角デケエとこ来たんだし買い物でもさせてやるうと思つて聞いてみた。

「お前はどっか行きてえとことか見てえとことかねーの？」

「えー？ うーん、うーんとねー・・・」

「あ、俺煙草吸いてえ。バルコニー行くぞ」

「結局カイの都合なんだ・・・」



不服そうにするエルメスを迷子にならねえように引き摺ってバルコニーのベンチに座った。煙草吸ってたらなんかエルメスがじーっと見てる。

「なんだよ？」

「何歳から吸ってるの？」

「12」

「不良……ていうか、カイって本当は何歳なの？」

「ヒミツ」

「ケチ！ でも、アーサーさんが私より一回りは上って言ってたっけ……ん？ じゃあ40歳くらい！？ なんて落ち着きのないアラフォー……」

「黙れ小娘、生意気だ。お前もアラサーにしてはガキみてえじゃねーか」

「アラサー言うな！」

そーいや、俺が同い年だったからこいつは馴れ馴れしくなっただった。なのに、年上だと判明したのにいつまでも馴れ馴れしいのはどういうことだ。そっちはいいのかよ。エルメスは本当に意味わからん。つーか一日に何回意味わからんって感想を述べさせる気だ。いい加減しつけーぞ。

「そついえばミラーカさんが割った窓ガラスとか全部綺麗になつたなあ。従業員通路とかどうなってるんだろ？」

「従業員通路？」

「そつ、そこで私爆破されちゃって。アーサーさんが助けてくれた

んだけど、クリシュナとアーサーさんに怒られちゃった！」  
「……………だろうな」

アーサー……かける言葉も見つからねえよ。本当に苦労したんだなあ。俺もそんな苦労をするんだろうか。あーヤダヤダ。

「でも、私もまた血も力もなくなっちゃったから本当に気をつけなきゃなあ」

しみじみと日が暮れた街を見下ろしながら呟くエルメス。紫色の空はあの日の夜明けみてえだ。

あの日大事な仲間も何もかも失ったエルメスは能力こそ覚醒したけど、血と共に力は失ってしまった。教訓は最高の教師だと言うが、教訓と呼ぶにはあまりにも酷だ。

でも、だからこそわかってもらう必要がある。

「そーだぞ、お前。今またお前が単独で戦うようなことしたら、今はアーサー程の奴はいねえんだから、俺らの命と引き換えにお前助けなきゃいけねーんだからな」

アーサーとの再会を果たす前にエルメスを死なせるわけにはいかねえし、それに俺らが誰か一人でも死んじゃったら、エルメスは再び地獄の底に突き落とされる。

勿論死ぬ気はねえし俺らも気を付けるけど、エルメスにも気を付けてもらわねえと、と思ってたんだが。

「いや、お前何笑ってんの」

「だって、カイがそんなこと言うなんて意外過ぎる」

「あ？・・・いやバカ、そういうことじゃなくてだな」

「命かけて私を守るなんてアーサーさんかクリシユナみたーい！」

「喜ぶな！　ちげーつつつてんだろ！　俺がそんな気持ちワリー宣言するか！」

「気持ち悪い？　ちよつと、それはあの二人に失礼じゃない？」

「あの二人はいいんだよ！　俺的に気持ちワリーの！　つーか、ちげーつつてんだろ！　面倒くせえ！　もういい、絶対え助けてやんねえ」

「えー！　ケチ！」

「ケチじゃねえ。甘えんな」

激しく勘違いしてやがる。いくつになっても甘えん坊なこのバカには、多少厳しく躰しとかねえと後が面倒くせえな。

「何でもいう事聞いてくれるって言ったのにー！　ウソつき！」

「そんなこと言った覚えはねーよ！　多少の我儘は聞いてやるつつたの！　勝手に俺の発言を捏造するな！」

「一緒じゃない」

「何でもと多少じゃ大違いだ、バカ！」

どうやらエルメスの脳と耳には自分に都合よく変換する、悪魔のようなフィルターがついているらしい。こっちが気を付けねえとウソつき呼ばわりだ。

イヤ待て。それはおかしい。それは違つだろ。なんで俺がそこま  
で気をつけなきゃいけないんだよ、腹立つ。

アーサー、ウマイ事エルメスを飼ひ馴らす方法を教えてくれ。俺  
の手には負えない。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

クリシュナさんにはもちろん、アーサーにも謝罪させてください。本当にすいません。エルメスに対してそういう感情を持つことはあってはならないと思います。本当にすいません。全ては俺の責任です。

「ピーピー」

「へへ、キロちゃん可愛い！」

先日連れまわした先でエルメスはカナリアを買って帰ってきた。キロって名前は日本語の「黄色」から来ているらしい。微妙にネーミングセンスねえ。でもまあ気晴らしにはなったみてえだし、本来の目的が達成できたならいい。俺は疲れたけど。

ガラードと二人でキロを愛でてただけど、ポツリとエルメスが言った。

「私の羽根ね、北都が作ってたんだけど、カナリアの羽根なんだって。北都が学校で飼育係してたからって」

それを聞いてなるほどな、と思ってたんだけど、突然横で別の声が聞こえた。

「カナリアと戯れるエルメス。超萌える」

「あ？」

「どうしよう、俺エルメスの事好きかも」

そう言ってきたキルシュを思わずブン殴ってやりました。褒める。

「ウソウソ！ 冗談！ 冗談だつて！」

「てめえ、冗談でも言つて良い事と悪い事があるだよ。つかそもそもそんな事を冗談で言うな」

「ていうか、何も殴ることねーじゃん！」

「殴るだろ。そりゃ殴るだろ。一応あれでもエルメスは主人だぞ。

それはあつてはいけないことだ。許されん」

「副長、相変わらず厳しい・・・」

「当たり前だ」

「夢くらい見させてよ」

「夢を見るのは許すが、二度と起きてこれなくすんぞ」

「・・・すみません」

俺的には、エルメスが跪くべきはアーサーで、隣にはクリシュナさんが居るべきだ。ベきつつつても今は不可能なわけだけど、俺的にはいずれ隣もアーサーに占領して戴きたい。理由は単純。落ち着くだろ。やっぱそうこなくっちゃなーみたいな。

今の所エルメスは隣の席をクリシユナさん以外に譲る気はねえみてーだけど。まあ正直その方があのバカどもの暴走を抑制できるから、それはそれでいい。

前にも言ったがこの屋敷の男女比率を考えると、それも心配の一つだ。ちなみに俺の心配は無用だ。俺には全っ然理解できねえからエルメスがとか他人がどうこうじゃなくて、そう言う感情が理解出来ねえ。むしろ邪魔。

そう言うわけで、キルシユの件もあつたしちよつとだけ目を光らせてたわけだ。まーそしたら、叩きゃあ埃つてのは出てくるもんだな。

この際もうランスはいい。ある意味アイツは公認だ。ガライドもいいだろ。ガライドの場合はその域スツ飛ばして崇拜まで行ってる位だ。

基本的にはほとんどの奴らは元聖職者なだけあつてしっかりしてる。微妙にわかりづれえのがあのチャラ男ども。パーシーとリオ。キルシユはもうブン殴ったからいい。

アイツらは昔からチャラかつたし、隙あらばエルメスを口説こうとしてたから微妙にわからん。ある意味そついう性格なんだろうから、ほつといて平気な気もするけど念のため見張ってた。そしたら

まずパーシーが網にかかりやがった。

「エルっち、デートしよっか」

「ヤダ」

「いーじゃん、副長とはデートしたじゃん。今度は俺」

「強制連行されて引きずり回されるのをデートって言わないよ」

「・・・言わないな」

確かに言わねえ。引きこもりの室内犬を無理やり散歩に連れてった、の方が正解だ。つーか俺的には俺以外の誰かがエルメスの相手してくれんなら楽だから、それはそれでいいんだけど。でもパーシーは明らかに動機が不純だ。

「じゃあ俺が本当のデートしたげるよ」

「えー、いいよ」

「楽しいって」

「やだ！ 私にはクリシユナがいるからダメ！」

「俺がクリシユナさんのかわブツ！」

なんとなくそれ以上喋らせちゃマズイ気がして、パーシーに飛び蹴りをお見舞いした。褒める。

「テメエ今何言おうとした？ ああ？」

「聞くくらいなら遮んなよ！ ていうか痛いし！」

「痛みを伴わない教訓に価値はない」



「だからってそんな渾身の力で蹴ることねーじゃん！」

「渾身の一撃を食らうような真似をするお前が悪い。お前ごときがクリシユナさんの代理なんざ笑止千万。身の程を知れ」

「う、ごとき・・・」

とりあえず、これでパーシーはちったあ大人しくなった。目の前で急に俺に蹴られたパーシー見てエルメスはびっくりしてたが、まあいい。どうせやるなら徹底だ。出る杭は打ち込みまくって叩き潰す。そんぐれえしねえと、バカには通用しねえ。

一方のリオは意外となかなか網にかからねえ。チャライにはチャライが、いつも微妙なところで引き下がる。さすがに以前潜入とかやらせてたせいとか、引き際が分かってるのか。

もしくは、パーシーとキルシユに俺に殴られるから気をつけるって警告を受けて警戒してるのかもしれない。まあ、それならそれでいい。むしろそれでこそ、だ。

が、アイツは人を騙すプロだ。完全に俺は油断してた。今日はエルメスとリオと二人で出かけてた。まあその時は特になんも言っただけで、キロの餌を買いに行くつつつただけだったから放つてたんだが。帰ってきたエルメスが言った。

「カイ、どうしよう。なんか私、リオの彼女になっちゃったみたいなんだけど」

「・・・は？」

事の顛末はこうだ。買い物しながらリオが言った。

「エルちゃん、最近ほホラーな夢とか見たりしない？」

「まだ時々。でも大丈夫だよ」

「それならよかった。なんかあったら俺にすぐ言っただよ」

「うん、ありがとう」

「俺はエルちゃんの味方だからね」

「うん」

「ずっと傍にいるからね」

「うん」

「何かあったら頼ってね」

「うん」

「些細なことでも何でも言っただよ」

「うん」

「俺の女になりなよ」

「うん……ん？」

「うん、て言っただよ」

「え」

どうもその会話の流れに騙されたらしい。エルメスはバカだからその流れでうっかり肯定の返事をしてしまったわけだ。で、困って泣きついてきた。

ある程度はわかってたけど、そんな手管に騙されるとはどんだけバカなんだアイツは。エルメスの防御力の低さには改めて落胆させられる。

でも、それを一緒に聞いてたランスとガロードは速攻リオン所言つて文句言い始めた。

「この詐欺師！ 卑怯者！」

「ライオネル様には心底失望しました」

「なにになにー？ 二人ともヤキモチ？」

「誰が！ 恐れ多いっつもの！ 俺は絶対認めない！ 絶対許さないぞ！」

「ガラードの許可とか必要ないしー」

「なんだとおおお！？」

「まあまあガラード様、落ち着きましよう。ライオネル様はこんな手段でもとらないと一生相手にされないんですから。必死なんですよ」

「え、ちょ、ランス、それはヒドクね？」

「ランス良い事言うな！ その通りだ！ リオなんかエルメスから見たら使用済みティッシュだ！」

あの二人、意外に使える。エルメスの近衛に任命してやろう。しかし、リオはしぶとかった。

「ムカつくなー。でも二人が何言ってもエルメスはうんって言ったもんね。その事は事実じゃん」

バン！

「ぎゃあああ！！ 痛えええ！」

「不届き者が。恥を知れ」

「ちよ、副長！ 普通撃つか！？」

「撃つ。もしくは撃ち殺す」

いい加減しつけれから撃った。褒める。厚顔無恥な奴には近衛長官、俺が直々に説教だ。

「いいかお前らよく聞け。どうしてもエルメスを手に入れたいなら、越えなきゃいけない壁が3つある。まずは近衛のランスとガライド。次に長官、俺。最後に帝王アーサーだ。この壁を超えるのはまず不可能だ。どうしても越えたいなら死ぬ覚悟をするんだな」

俺の話を聞きながら、撃たれたリオに視線を注いだバカどもは大に人しく頷いた。さすが俺、超かっけえ。

ユアン 「リオ、諦める。見るよあの番犬」

ディナ 「メチャクチャおっかねえ。ケルベロスかよ」

俺 「地獄の番犬、ケルベロス。いーねえ、良い響きだ」

ガライド 「ちようど3人だしね」

ランス 「エルメス様に近づいたら噛み殺しますよ」

エルメスの近衛部隊「ケルベロス」ここに結成。王族の親衛警備隊である近衛隊と近衛長官、もはや俺らには天職だな。

しかし、あのバカエルメスのせいで近衛長官から一気に転落する

羽目になった。

「3人ともありがと。助かった」

「つーか、お前ももうちよっとしっかりしろ。アーサー泣くぞ」

「アーサーさんが？ 泣かないよお。ていうか、なんか3人とも北都みたいだねー」

言われて見れば、北都はアーサーにすら牙をむく狂犬だったな。  
実は北都ってケルベロスの再来？

トリス 「そういえば、ガラードは副長とエルメス兄妹みたいだったな」

パーシー 「あれ？ てことは」

キルシュ 「副長って単なるシスコンじゃね？」

リオ 「ガラードとランスはマザコンじゃね？」

キルシュ 「やーい！ シスコン！」

パーシー 「やーい！ マザコン！」

俺 「誰がシスコンだゴルア！ ざけんな！」

キルシュ 「副長がだよ」

俺 「んな訳ねーだろ！ ブツ殺すぞゴルア！」

パーシー 「怖！ このシスコン兄貴めつちや怖ええ！」

俺 「テメエら・・・つかガラード、ランス！ お前らもなんとか言え！」

ガラード 「・・・うーん、別にいいかな」

ランス 「そうですね」

俺 「ナニイイイ!？」

近衛部隊「ケルベロス」は「エルメス・コンプレックス」に改名だよ。もうあり得ない。俺泣きたい。

「なんか嬉しい！ これからは3人がシスコンやってくれるんだね！」

「シスコンやるっておかしいだろ！ 職業みてえに言ってるんじゃないよ！」

「意外と天職だと思うよ」

「んな訳ねーだろ！ バカ！ もう・・・バカ！」

「んもー、すぐ怒るんだから。私にまで噛みつかないですよ。狂犬病の予防接種受ける？」

「受けるか！」

本当信じられん。あり得ねえ。なんでエルメスがノリノリなんだよ。意味わかんねえよ。天職とか言われても意味わかんねえよ。職業じゃねえだろ。

つーか何でランスとガライドは容認してんだよ。意味わかんねえよ。もう本当意味わかんねえ。

以上

動報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行

檻の中で餌をついばむキロを見て、泣いていた。

「私は北都から人間としての死を奪って、最後にはあんな可哀想な死に方をさせてしまった」

カナリアの羽根は北都の羽根。キロを見て北都を思い出したエルメスは、そう言って涙を零す。

エルメスは二度も北都に死なれてしまった。一度目は目の前で、二度目は自分の中で。エルメスも北都をとてても大事にしていた。本当に仲のいい兄弟で、大事な弟だった。

あの日、北都は最後の一片で、エルメスの最後の砦だった。最後の拠り所だった。アーサーを失って自暴自棄になりかけたエルメスを救ったのは北都だった。

北都が一生懸命エルメスに語りかけた。立て、戦え、みんなの思いを無駄にするな、そう言って。その言葉にエルメスは涙を拭って立ち上がった。

あの時北都がそう言わなければ、エルメスはきつとそのまま殺されてた。アーサーを失ったという絶望、地獄にもたらされた蜘蛛の糸。

細く光るその糸は、何よりも強い兄弟の絆。北都が地獄からエルメスを引き上げた。その北都も、もういない。

再び地獄に突き落とされたエルメスに、蜘蛛の糸を垂らしてくれる者はもう、いない。エルメスはこれから自力で這い上がってこなければならぬ。俺が手を伸ばしても、届かない。地獄が、深くて深淵、底が見えない程に。

「私、お父さんとお母さんに合わせる顔がない。あの日お父さんは北都を助けられなかったことを、自分をすごく責めてた。だけど、私の中で生きてるってわかって救われたって言うてた。それなのに私はまた北都を、本当に死なせちゃった。私はお父さんとお母さんに、なんて謝ればいいのか？」

答えが、見つからない。どうしたらいい、なんて言えばいい、どうすればエルメスが救われるのか。わからない、わからない。

困惑してエルメスを見つめる事しかできない俺に、エルメスは尋ねる。



「こんなこと聞いて怒るかもしれないけど、カイは家族を失った時、どうやって乗り越えたの？」

俺にとってはもうずいぶん昔の話だ。あの頃俺はまだガキで、目の前で繰り広げられた惨劇が何なのかもよくわかっていなかった。自分の足元まで流れてきた母さんの血が恐ろしくて、ただ、泣いていた。

あの日以来、俺は泣かなくなった。泣けなくなった。それ以上に悲しい事など、今までなかったから。今こんなことになって、エルメスを見てとても悲しく思うのに、泣き方すら忘れて一緒に泣いてやることもできない。

少なくとも今こうなるまでは、それでいいと思っていた。必要のない事だと。俺はもうただ泣いていた頃のガキじゃない、強くなつたんだ。そう、思ってた。

あの日、両親を目の前で殺されて殴られて気絶した。気が付いたらジュリオ様の屋敷にいて、頭が痛くて、両親がいないことが怖くて、そこがどこかもわからなくて、恐怖した。

「大丈夫だよ。ここはヴァチカン」

「ヴァチカン？」

「神様のいるところだよ」

「神様が住んでるの?」

「そうだよ。これからは君をずっと神様が守ってくれる。だから、大丈夫。怖くないよ」

「だいじょうぶ・・・」

大丈夫、そう言ったジュリオ様の笑顔と言葉に安堵した。その言葉はガキの俺に、お守りの様に響いた。

夢を見る。あの日の夢、怖い夢。飛び起きる度に呟く。

大丈夫、大丈夫、ここには神様がいるから、大丈夫。神様が守ってくれるから、大丈夫。

まじないのように、呟く言葉。

しばらくして、ガルフやペレアス達も屋敷にやってきた。それからも少しずつ増える、同族。自分の身に起きたことを知らない奴も、知っている奴も、理解していない奴も、支え合った。同じ苦しみを分かち合う、兄弟のように。

その中で俺は一番年上で、誕生日も一番早かったから自然と長兄のような立場になっていく。

しっかりとしなきゃ、コイツらを守ってやらなきゃ、俺は兄ちゃんなんだから。大丈夫、神様が見守ってくれてる。大丈夫、神様が頑張ってくれてくれる。大丈夫、俺には神様がついてる。

自分に、言い聞かせた。

「アンジェロがいつもみんなを引っ張ってくれるから助かるよ。アンジェロはえらいね」

「はい、ジュリオ様。ありがとうございます」

ジュリオ様に褒められるのが、嬉しかった。

10歳になって、初めて銃を握った。構えて、標的に照準を定めて引き金を引いた。衝撃、硝煙の匂い、破裂音。初めてだったのに、弾は標的に命中した。

「すごいね。アンジェロは才能あるね」

甘い響き。もっとジュリオ様に褒められたい。それから俺は銃の訓練に没頭するようになる。

連続して撃てるようになったら褒めてくれるかな。命中率を上げたら、早撃ちができる様になったら、色んな銃を使いこなせたら、褒めてくれるかな。

ただ、ただ、ジュリオ様に褒められたくて、それだけの為に銃の腕を磨いた。そんな幸福な少年時代は、終わりを告げる。

14歳の誕生日を迎えたその日に、ジュリオ様は言った。

「アンジェロ、君は本当に優秀だ。俺の仕事を手伝わない？」

「仕事、ですか？」

「そう、エクソシスト。アンジェロがいてくれたらきつとみんな助かるよ。アンジェロは才能あるから、困っている人の役に立てる。

俺を助けると思っ、ね？」

ジュリオ様を助ける、俺が、ジュリオ様の助けになる。大人になったみたいで、認めてもらえたような気がして、嬉しかった。

初めて出陣した戦場で、殺すべき相手は人間だった。エクソシストは悪魔を祓う仕事なのに、なぜ、人間を？ 疑問に思う。俺の質問にジュリオ様は笑って答えた。

「いいんだよ、大丈夫。異教徒は人間じゃないから、殺していいんだよ」

大丈夫という言葉に、初めて違和感を感じた。震える手で、引き金を引いた。初めて、人を殺した。殺した女が死にゆくさまを見て、母さんを思い出した。

俺のしたことは、母さんを殺した人間と同じことなんじゃないか。父さんと母さんはカトリックだったけど殺された。宗派の違いに何の意味があるのか。

神を、疑った。

でも、次第に麻痺していく「正常」な感覚。破裂音と硝煙の匂い。それは人の感覚を麻痺させるものだ、後から知った。

その後、精鋭部隊「死神」が組織され、その隊長に就任し、以前よりも圧倒的に活動の機会は増える。今まで何人殺したかなんて、数える必要もない。数なんて、意味はない。ただ、ジュリオ様の為に、ただ、仲間を守るために、敵が邪魔だから、殺す。

大丈夫、俺のしていることは悪じゃない。大丈夫、俺は、隊長なんだから。大丈夫、俺はなんだってやれる。大丈夫、仕事の為なら何をしても許される。大丈夫、俺のせいじゃない。

子供の頃から変わらない、大丈夫、の祈り。その祈りが、ある日突然、嫌いになった。

「ラルフ！ しっかりしろ！」

「隊長、すいません・・・」

「大丈夫だ、すぐ助けが来るから！」

仲間の一人が撃たれて重傷を負った。

「狻下！ 救援の要請をお願いします！ ラルフが撃たれました！」

「アンジェロ、今からでは間に合わない。諦めるんだ」

「諦める！？ このままではラルフが・・・」

「大丈夫、神に召されるんだよ。ラルフは天国に行ける」

ジュリオ様の言った通り、ラルフは天に召された。

大丈夫、大丈夫、大丈夫って、どういう意味だったっけ。助かるから、大丈夫？ 死ぬから、大丈夫？ 天国に行けたら、大丈夫？

死んじまえば、同じじゃねえか。なにもなくなる。全然、大丈夫じゃねえ。

祈りを、やめた。

そして運命は変わる。

「ラルフみたいなことが今後起きないように、洗礼を受けてもらう。大丈夫、ちゃんと人間には戻してあげるよ。約束する」

神を疑った報いか、俺は吸血鬼になった。いつかは人間に戻れる、その約束にすがって。

ラルフが死んでしばらくして、ジュリオ様は赤ん坊を連れて来た。

「アンジェロ、新しい兄弟だよ。この子の名前はジョヴァンニ。ア

ンジエロが面倒見てあげて」

手渡された赤ん坊は俺を見て笑った。血に濡れた、人でなくなつた人殺しの腕の中で。

兄弟と言つても俺にとつては子供と言つてもいいほどの年齢差。俺も普通の人生を歩んでいたら、子供がいてもおかしくねえよな。そう思つて腕の中のガライドの笑顔を見て実感した。

これが、命。

可愛いな。この子も、人殺しになるのか。人殺しなんかさせたくねえな。

俺の願いを、運命は聞き入れない。呪われた存在の祈りを、神は聞いてくれない。

俺の指導でメキメキと銃の腕を上げたガライドは、やはり戦線に投入される。初戦を終えたガライドは、俺と同じ人殺しの目をしていた。

この子も、あの小さくて可愛かつた子も、人殺しになつちまつた。けど、せめて俺と同じ呪われた存在にはしたくねえ。

ガラードの吸血鬼化は、まだ未熟だと言う理由をつけて待ってもらっていた。

そして出会う、俺たちの運命の女。エルメスによってガラードは吸血鬼化された。

エルメスを恨んだ。俺の希望を、殺した。

だが、エルメスは言った。生きていてほしい、大事だから。生きていてくれるなら、なんだったっていい。それが私の願いだから。死んでほしくないから。ジヨヴァンニの心は、私が守るから。

それを聞いて知る。それが、それこそが愛。

エルメスはガラードを守ると、俺に約束した。言葉の通り、エルメスはマスターとしてガラードを大事にして、心を守り続ける。母親の様に、愛を注いで。心底、安堵した。

ジヨヴァンニは俺と同じにならずに済みそうだ。母親がいるから。

ガラードが言った。

「伯爵にすぐ泣くのはミナの遺伝か？　って言われた！」



この子には、未だ感情がある。まだ若い、世間知らずな子供。ミラーカさんの墓の前で泣くエルメスをみて、涙をこぼすガラードに羨望すら覚えた。

よかった、この子にエルメスがいて。よかった、この子に母親がいて。俺は狂ってしまったけど、そんな俺が育てた子に母親ができて、運命の呪いに苦しまずに済んで、本当に良かった。

俺の祈りは、初めて神に聞き届けられた。俺の願いを、俺の神が叶えてくれた。この時になってようやく俺は、救われた。

俺のクソ暗い昔話を聞いて、エルメスは涙をこぼした。

「何泣いてんだよ」

「カイが、泣かないから」

「同情するなつつつたる」

「カイが泣かないから、私が代わりに泣くの。同情なんかじゃないよ。私はガラードのお母さんで、カイがガラードを育てたお父さんなら、私達は同じ気持ちのはずだよ」

「・・・バカな奴」

俺の代わりだと言って泣くエルメスの涙を拭いたら、俺の手を取ってエルメスは言った。

「カイにはみんながいたから、ガラードがいたから、乗り越えられたんだね。じゃあ、私もきつと乗り越えられる。みんなが、ガラードが、カイがいるから。家族がいるから。きつと、大丈夫。みんなが私を大事にしてくれるから、大丈夫」

俺が嫌いになってしまった大丈夫という言葉を使って、泣きながら微笑んだエルメスは続けてこう言った。

「みんなは私の大事な家族。私の愛する家族。お父さんとお母さんがどれほど私と北都を愛してくれていたか、今ならわかる。きつとこの世界に生まれたこと、それだけで幸せだと思えるほどに愛は深かった。カイのご両親もきつとそう。」

「カイがガラードやみんなを大事にして愛していたから、ガラードやみんなは苦しまなくて済んだんだね。そして今はカイが大事にした人たちに、私は大事にされてる。カイが世界で一番私を大事にしてくれるから、私は泣くことを許される。そのことが、すごく嬉しい。カイ、ありがとう。あなたがみんなを愛してくれたから、みんなが私を愛してくれる。愛は、繋がっていくんだね」

エルメスのその言葉に、あの日以来忘れてたはずの涙が、頬を伝った。

何度でも俺を救う神は、俺の涙を見て嬉しそうに笑う。

「カイの心も、愛も、ちゃんと生きてる。よかった」

こういう時、つくづく思う。アーサーは大した王様だったが、その娘も大した女だ。

以上

LETTER 2 Cian 「一族」

拝啓 アーサーさん

とても悲しくて、とても驚いて、とても嬉しい事がありました。

この前、カイとお出かけして、ていうか連れまわされたんですけど。その時に金糸雀を買ってもらったんです。お店で見かけた時に北都を思い出して。

その後も、カイとランスとガラードはシスコン呼ばわりされたりして、なんだか北都を思い出さずにはいられませんでした。

金糸雀にキ口ちゃんって言う名前を付けて、籠の中で餌を食べているのを見ていたら、北都を思い出してどうしようもなく悲しくなりました。大好きだったのに、大好きでいてくれたのに、2回も死の恐怖を味わわせてしまって、本当に可哀想なことをしてしまいました。

それに、アーサーさんも一緒だったからわかると思うけど、お父さんとお母さんの事を思うと、胸が張り裂けそうになりました。あと7年で時効が成立したら日本に帰れるかもしれないのに、帰った時に両親になんて謝罪したらいいんだろって。

そう考えると、帰りたいけど、帰るのが怖いと思ったりしてどうしようもなく辛くなりました。

そしたらカイが来て、だからそのことを話したんだけど、さすがに困ったような顔をして。だけど、よく考えてみたら私だけじゃないんだって思っつて。シャンティも、カイ達も、みんな家族を奪われてる。家族から奪われてる。

でも、みんな頑張っつて乗り越えてる。その事に気付いて、怒られるかなっつて思っつたけど、カイに聞いたんです。そしたら、カイは怒らなっつに昔話をしてくれました。

カイの過去は、とても悲しいものでした。とても辛いものでした。とても辛い運命でした。それでも生きていられたのは、信仰とジュリオさんとシュヴァリエのみんなの存在だったみたいです。

その中でも、特にガライドの存在が大きかった。私は知らなかつたんですけど、ガライドはカイが面倒を見て育てたそうです。それを聞いて納得がいきました。

私がガライドを吸血鬼化した時に、カイはすごく怒りました。本当に私を本気で殺そうとするくらいに。本当に怒っていました。

その時はジュリオさんや神への誓いだと言っつてたんです。それが嘘だとも思えませんが。多分、ジュリオさんは吸血鬼化を今のところはしなっつて約束してくれてたのになっつて、神への誓いっつてことは神への反逆の徒に墮ちるのは許せなっつて、そう言っつ意味だっつた

のこなつて思います。

あの時言われたんです。ガードには神はいなくなつたから、お前が祈りも懺悔も呪いも何もかも引き受けると約束しろつて。だから、絶対にガードの心は守るつて、それがマスターの責任だからつて言つたら許してくれたんです。

あの時のカイは本当に怒つて、少し疑問に思うくらいでした。だけど、カイの話聞いてようやくわかりました。カイがガードに自分と同じような辛い思いをしてほしくなかつたんだつて。自分が大事に育てた子に、辛い運命を歩ませたくなかつたんだつて。

カイは神様を信仰してたから、吸血鬼になつたことがすごく嫌だつたんだと思います。辛かつたんだと思います。それを私に隠していたのも、そのせい。私が友達だから、自分の本心を知られたら私が傷つくと思つたのかもしれない。相変わらず、カイは自分が辛くてもいつつても後回しです。

でも、カイの昔話を聞く限り昔からそうだつたみたいです。みんなの為に頑張つて、ジュリオさんの為に頑張つて、ガードの為に頑張つて、今は私の為に。

カイの過去はとても辛く悲しいものだつたけど、カイは救われたんだと言つてました。ガードが今、苦しんでないから。私がガードに愛を注いで心を守つたからつて。私もそれを聞いて凄く嬉し

かったです。

カイの話聞いて思いました。連鎖は呪いだけじゃないって。愛も連鎖するんだって思いました。カイが愛した兄弟たちが、今は私を大事にしてくれます。アーサーさんの愛した娘は、今みんなを大事に思っています。アーサーさんの救った孤児たちは、別の孤児たちを救おうとしています。

本当に辛い事があって、理不尽しかないと思っていたこの世界にも、こんなに素晴らしい事があるんですね。私はそれがとても嬉しくて、今生きていることを、今周りにいる人たちの事をとっても愛しく思いました。その事に、とても、とても、救われました。

カイは、泣かないんじゃないって泣けなかったんだって言ってました。ご両親を殺された時以上の悲しみを感じることはなかったからって。ジュリオさんを殺した時でさえ、凄く辛そうにしていたけど、泣かなかった。みんなは泣いていたけど、カイだけは泣かなかった。

だから私がカイの代わりになって泣いたら、バカな奴って言われたんですけど、話の最後に、カイは一筋だけ涙を零しました。

カイの涙を見て思いました。カイはガードやみんなを本当に大事に思ってるんだなって。だから、カイの与えた愛が連鎖して、今私の救いになってることが嬉しかったのかなって。自分の与えた愛が連鎖して、今誰かを救っていることが嬉しかったのかなって。

カイのガードに対する思いを聞いて、カイが私をガードの母親だつて言うのを聞いて、お父さんとお母さんの事を思いました。その時に思い出しました。この世に存在するもので一番美しいものは、親から子供への無償の愛だと。

それはきつと空よりも広くて、海よりも深いものなのでしょう。きつと我が子がこの世に生を受けたことが、至上の喜びであるほどに。それほど深く強い愛情、絆。

ガードがいることで、今になってわかるようになりました。ただ、ただ、存在することが、嬉しい。些細なことでも、笑ってくることが嬉しい。例えば本当の親子じゃなくても、本当の兄弟じゃなくても、血縁を凌駕するほどの、それほどの、愛情。

それほどの愛情を抱く私の両親が、北都を死なせてしまった私を責める事なんてないだろうし、悲しむと思っけど、きつと一緒に泣いてくれるんだらうって、私と同じ気持ちで泣いてくれるんだらうって、そう思いました。

私、本当に今日カイとこの話をする事が出来て良かったです。カイは救われたって言ってたけど、私も本当に救われました。とてもとても嬉しかった。



アーサーさんが私に向ける愛情も、きっとそれに近いものなんじゃないかって思います。アーサーさんはいつも私が笑っていられるように、いつも私の事を考えていてくれました。

有償の愛ならできないことさえ、苦しい決断も、悲しい別れも、辛い選択も、アーサーさんは私の為にしてくれた。それはきっと無償の愛なのですね。

これと言ったらアーサーさんは怒るかもしれないけど、やっぱり私にはアーサーさんは偉大なる父です。畏怖すべき、敬愛すべき、偉大なる父です。

私達だけでなく、シャンティ達や、トリン、ツァン達の上にも愛情の連鎖を振りまいたあなたは、私達みんなにとって、偉大なる父です。私達の愛の連鎖の生みの親です。あなたが私の、私達ペンドラゴン一族の父であることを、心から誇りに思います。

敬具

P・S

カイが泣いたって書きちゃったこと内緒にしてくださいね。喋

ったらブッ殺すって言われてるから。後が怖いので。

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

ちよつとちよつと。それはないんじゃないの。それはないんじゃないの！

さて寝るか、と思って寝室入ったらエルメスに先に寝られてた。俺のベッドで。あれ、なんで？ なんでランスのところに寝ないの？ 疑問と共に怒りがこみあげてきて、文字通り叩き起こした。

130

「うや・・・いたい・・・」

「おはよう、エルメス。てめえ何してんだコラ」

「寝てたの」

「ランスんとこ行け」

「やーだ」

瞬間的に相当イラついたぞ。なんつて我儘な娘だ。マジどんな騷  
したんだよ。腹立つ！ と思ったんだが、話を聞いてみると意外な  
事実が発覚。

「エルメス様、今夜はカイ様とお休みください」  
「どうして？」  
「色々諸事情がありました」  
「ふーん？ わかった」

先日11歳を迎えたランスはとうとう大人の階段を上り始めたようだ。つーか諦め早っ！ 騎士で紳士なんじゃなかったのかよ。もうちょっと頑張れや。

「そういうことなら棺で寝ろ」  
「やーだ」  
「ヤダじゃねえ。お前の本来の寝床は棺だろ」  
「まだ怖いからヤダ」  
「じゃあ勝手にランスんとこいけ」  
「カイは私の事嫌い？」  
「いや、別に嫌いとかじゃなくて」  
「嫌いなんだ・・・」  
「い、いや、そうじゃなくて」  
「私嫌われちゃったんだ・・・しくしく」  
「ご、ゴメン！ 嫌いじゃねえから！ うん、いいから。ここで寝ていいから！」  
「本当？ ありがとう！」

しょうがねえから渋々許可した。だって泣かれたんだぞ！ なにも泣く事ねえのに！

「つーか俺、騙されたのか。もしかして騙されたのか。あれはワザとなんじゃねえか、後からそう思い至ってイラついた。本当は蹴っ飛ばしてでも追い出したいところなんだが、そうもいかない。」

「カイと一緒に寝てるとクリシユナ思い出す」

「オイオイ、恐ろしい事言ってるじゃねえよ」

「カイ、腕枕」

「ざけんな。俺はクリシユナさんじゃねーし」

「ちえっ、ケチ」

「ケチじゃねえ」

俺はエルメスに背中向けてたんだけど、少ししたら後ろからシクシク聞こえてきて、ビックリしてエルメスの方向いたら泣きつかれた。キヤー！俺貞操の危機！

「背中向けないでよ。寂しい」

「うん、わかった。わかりました。だからちょっと離れてもらえませんかね。お兄ちゃんからのお願い」

「ねえ、どうしてカイはいつも自分のことを後回しにするの？」

「シカトかよ・・・つーかしてねーし。俺はいつも自分最優先だけど」

「してるよ。カイだって辛いのにいつもどうでもいいって言って後回しにするじゃん」

「いや、してねえ。するはずがねえ」

「でもジュリオさんの話した時はそう言った。ガラードの話の時もそう」

「まあ、それは・・・ていうかお前は何に泣いてるわけ？」

「だって、私はいっぱいカイに助けてもらってるのに、私はカイを助けてあげられないの？」

正直、何言っただこの小娘は、と思った。正直なところ、イタリアにまだいた頃から俺はエルメスにかなり助けてもらってた。コイツが気付いてないだけで、色々と救われたことは沢山あった。

それこそ、ガードの件にしても、ジュリオ様の件にしても。むしろ、エルメスを救ってやれないのは俺の方だ。エルメスを救えるのはアーサーしかいねえから、俺の存在はその場凌ぎでしかない。俺はエルメスの助けにはならない。アーサーの代理すらも勤まらないんだから。エルメスを助けてやれないのは、俺の方。

「俺はもう既にお前に助けられてるよ。たくさん」

「ウソ、私には何もできないもん」

「んなことねえ。お前はいつも俺が欲しい時に欲しい言葉をくれるし、俺の為に泣いてくれるだろ。ガードの件にしてもそうだし、ランスも大事にしてくれるし、ジュリオ様の時だって安らかに死なせてくれて、俺の話聞いて慰めてくれたし。それ以外にも、それ以前からたくさん」

「でも、カイは苦しそうにしてる」

「・・・そうだな。警沢言っただ否定はしない」

「今は何が辛い？」

「アーサーがいなくてお前が泣いてるから」

「アーサーさんが居ないのはカイのせいじゃないよ」

「ああ、俺のせいじゃねえし、俺にはどうしようもねえ。お前が泣くのを止められるのはアーサーしかいねえし、俺にはそれはできない。俺にはどうしようもない事が、俺にお前を救えないことが、今

「は辛いかな」

「そんなことない。私いっぱいカイに救われたよ」

「でも、お前は泣いてる」

「けど、それは・・・」

「いつも救われてるのは俺の方だ。俺は救われてるのに、お前を救ってやれない。ゴメンな。ただ、傍にいる事しかできなくて、ゴメン」

自分で言いながら、自分の無力さにいつそ泣けてくる。アーサーが帰ってきてくれたら、エルメスを閉じ込めてる悲しみの繭は一瞬で燃え落ちるのに。俺には北都の様に蜘蛛の糸を垂らしてあげることも、クリシュナさんの様に存在するだけで幸せの象徴になれる力もない。俺には何も無い、何もしてやれない。ただ、傍にいる事しかできない自分が悔しい。

俺がエルメスを救わなきゃいけないのに、いつも救われるのは俺の方で、俺だけが救われる。誰もエルメスを救ってあげられない。俺はエルメスを救ってあげられない。その事が、辛くて悲しくて仕方がない。

アイツが自力で地獄から這い上がって、悲しみの繭を突き破って出てくるのを見守ることしかできない、自分の無力さが悲しい。

いつそ、エルメスに俺を救ってほしくない。傍にいるのが辛い。俺の無力さが、浮き彫りになるから。エルメスを置いて、俺だけが幸せになるような気がして、嫌なんだ。

「カイのバカ」

「は？」

「カイはいつも私の事考えてくれてるけど、全然私の事見てくれない」

「・・・ん？」

「私、本当にカイにたくさん助けられたよ。カイが私を世界で一番大事にしてくれるから、すごく救われてるよ。カイの存在が、救い。いつも傍にいてくれて、ありがとう」

「まただ。また、救われる。俺だけが救われる。俺は、何もしてやれないのに。この心に同時に発生する悲壮と歓喜を、なんと呼ぶんだろうか。」

「エルメス、ゴメンな、ゴメンな。傍にいてやることしかできなくて、ゴメン。お前が元気になれるなら、俺はアーサーの代わりに、クリシュナさんの代わりに、北都の代わりに、なんにだってなる。お前が幸せになれるなら、俺は何にでもなるから」

「ありがとう。でも、カイは、カイだよ」

俺はアーサーになりたい。クリシュナさんになりたい。北都になりたい。エルメスを救う事の出来る誰かになりたい。

俺は、俺でいたくない。エルメスを救えない無力な自分が、大嫌いだ。



シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

一日10万な。で、今日で300万だ。キツチリ払えよ、延滞料  
金。

「マジあり得ねえ」

「もう1か月だよお」

アーサーを待つこと既に今日で1か月経過。ふざけんな。ていう  
かさあ、せめていつ帰ってくるかわかんないわけ？ 自分の事だ  
ろ？ ああ？

「ねえ、カイ、そろそろ一回イタリアに戻らない？」

「ミラーカさんか？」

「うん」

「うーん、まだ少し早い気がするな。ヴァチカンの調査がまだ入っ  
てるかもしれないし、それにオーストリアつつつてもそのどこか  
もわかんねえからな」

「そっか、そうだよね」

「まあ、ミラーカさんの出生地に関してはトリスに調べさせるから」「うん、ありがとう」

あれからちょうど一か月経って、その間にエルメスも少しだけ落ち着いたようだ。悲しみに時間は最高の薬だと聞いたことがあるが、全くその通りだ。

けど、それと比例して色んなことに目が行くようになった分、新しく悲しみの種を拾ってくることもある。みんながないという事を実感して、死んだという事を改めて実感して、アイツは時折泣いてる。拾って来た種を一粒ずつ潰していつてる。隠れて、独りで。

本来なら一人で泣かせたくねえけど、アイツの方が俺から逃げたしまう。この前エルメスが泣いていることが辛いつて言ってしまったせいかもしれないねえ。俺を苦しめたくないと思って、隠れて一人で泣くんだ、アイツは。

俺はアイツを助けてやりてえのに、支えになりてえのに、余計な苦しみを背負わせてしまった。最悪だ。俺は一体どこまで役立たずなんだ。

アーサーは笑ってるエルメスが好きで、エルメスの笑顔を守る為にエルメスを大事にしたのに、その為に俺に仲良くしてやれつて言ったのに、俺はアイツを苦しめる事しかできねえ。いつも、泣かせてしまう。

俺だってエルメスの笑顔を取り戻してえし、大事に思ってたのに。

アーサーに当たり前にできることが、俺には全然できねえ。アーサーと俺にはきつと決定的な違いがあるんだろうけど、それがなんなのかわかんねえ。

わかれば、俺にもアーサーの代わりに務まるかもしれないと思っただけ。

まあ、仮にそれが愛情と友情の差だと言われたら、正直俺にはお手上げだ。さすがにそこまで模倣してやる事はできん。無理だし、あり得ねえし、ぶっちゃけ嫌だし。断固拒否。

まあ、愚痴はこの辺にしておこう。最近愚痴ってばっかだな。ちよつと反省。

知らない間に俺に一方的にフラれたエルメスは、トリスの部屋でミラーカさんの事を調べてる。けど、中々それらしい情報が出てこなくて、かなり苦戦してる。

エルメスの話ではミラーカさんも300歳超えてたらしいし、貴族と言っても何かやらかした人が英雄でもない限りは、そんな昔の人の情報なんか出てこなくても仕方ねえんだけど。

「ていうかそもそもさあ、ミラーカさんって本名なの？」  
「・・・あ」

トリスに言われるまで俺も気づかなかった。そうだな、アーサーだって偽名なんだし、ミラーカさんだって本名とは限らねえじゃねえか。本名がわかんねえ以上、完全に迷宮入りだ。

「しまったあ、ミラーカさんの本名聞いとくべきだった」

「偽名使ってる人に聞いて教えてくれると思えねえけど？」

「あ、それもそうだよ。アーサーさんも教えてくれなかったし」

「そりゃそうだろ・・・」

「でも聞いちゃったけど」

エルメスの言葉に俺とトリス興味津々。アーサーの正体めっちゃ知りてえ！ それはエルメスも同様だったらしい。

「トリスちよっとパソコン貸して！」

「いーよー」

みんなには本名内緒！ つつて自分で検索を始めたエルメスは、少ししたら結果に辿り着いたようだった。

「マジでえええ！？」

「どした！ どした！？」

「ちよ、ヤバい。ちよ、ヤバい」

なんかエルメスの動揺が半端ねえ。こっち振り向いてワタワタしてる。ますます俺ら興味津々。

「見せて！」

「どれ……」

『マジでえええええ！？』

危うく腰抜かしそうになったぞコノヤロー！ いえ、すみません。今まで生意気な口きいてすいません。

「まさかアーサー様があの世界一有名な吸血鬼だったなんて……」

「まさかアーサーさんがあの串刺し公だったなんて……」

「まさかアーサーがあのワラキアの英雄だったなんて……」

俺らしばらくボーゼン。いまだに信じられんが、そう言われてみれば確かに最強の吸血鬼で、化け物たちの中で人格化するほどの吸血鬼つつたらもうアンタしかいねえじゃねえか！

まさかアンタがあのドラキュラだったとは驚きだよ！

「す、すごい……私何も知らないで、今までとんでもない人に仕えてたんだ。ヤバイ！ 超スゴイ！」

「っーかお前、伝説の吸血鬼の眷属とかマジスゲエ！」

「っーか俺らも血族じゃん！ うわー、マジスゲエ！」

俺ら大興奮。ハリウッドスターに知り合いがいるとかよりも自慢できるじゃん。マジスゲエ。マジヤベエ。

興奮しすぎてエルメスに至っては、名字ドラキュラに変えちゃうとか言いだすほどだ。それはちよつとさすがにあんまりだから却下したけど。

少しして興奮が落ち着いてきた頃に、改めてパソコンの画面を見つめてたトリスがあれ？ つつって俺らを呼んだ。

「アーサー様の名前、アナグラムだ」

「え？」

「ほら、DRACULA、これ逆から読んでみて」

「え？ ALUCARD・・・アルカードさんになった！」

「おー！ こんなトリックが！」

思わず拍手だよ。アンタすげえな。存在が魔術じゃねえか。その後もアンタの謎解きで大盛り上がりだよ。

つーか今更だけど、隠してたところ探ったりして悪かったな。心配するな、誰にも言ってるねえから。俺らだけで盛大に楽しんでやったから！ ハハハハハ！ やべえ、みんなに喋りてえ！ ……  
…冗談だ。

しかし、アンタも色々あったんだな。俺らが知ったことは史実上のアンタでしかないし、本当の事はわかんねえけど、それでも俺なんかよりも遥かに辛い人生だったんだな。トリスがなんかしみじみ言ってた。

「俺らが500年前に臣下にいたら吸血鬼になってなかったって、こっぴどい事だったんだ」

アーサーも裏切られ続けて、それでも戦い続けてきたんだな。絶望してそれでも尚、生き続けてきたんだな。500年以上も、ずっと孤独でも、それでも生き続けてきたんだな。

アーサー、アンタは本当にすげえよ。エルメスの父親だけあって、エルメス以上に強ええ。弱い化け物なんかじゃねえ。本当に弱いなら、とっくに生きることから逃げてる。

アーサーは本当に立派な王様だ。今俺達に、アーサーの血がわずかにでも流れていることを、本当に誇りに思う程だ。

正直俺は吸血鬼になったことがすげえイヤだったんだけど、アーサーの事を知って、この事があったって、なんかイヤじゃなくなった。

うーん、まさかアーサーにまで救われるとは。アーサー親子、恐るべし。

以上



報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

エルメスがうざい。

「カイー、アーサーさんまだ帰ってこないの?」

「さーなー」

「アーサーさん早く帰ってこないかなあ」

「そーだなー」

「アーサーさんに会いたいなあ」

「そーだなー」

「カイも会いたいでしょ?」

「別にー」

「でも帰ってきてほしいでしょ?」

「まーなー」

「じゃあ会いたいでしょ?」

「別にー」

「意味わかんない!」

わかれよバカ。確かに俺はアーサーに一日でも早く帰ってきてほ

しいと思ってるけど、別にアーサーに会いたいわけじゃねえからな。勘違いすんなよ。エルメスの為だからな、言っとくけど！

「カイー、アーサーさん今どこにいるのかなあ」

「さーなー」

「アーサーさん何してるのかなあ」

「さーなー」

「アーサーさんに会いたいよあ」

「さーなー」

「そこでさあな、はおかしいよ！ もー！ さっきから返事が適当過ぎだよ！」

「そりゃそうだろ！ 俺の相槌のキャパ越えてんだよ！ お前この会話何ラウンド目だと思ってるんだ！」

「そんなのしょうがないでしょ！」

「しょうがなくねえよ！ 一日に10回も20回も同じこと言いやがって！ いい加減しつけーんだよ！」

「だって！ だって！ 会いたいんだもん！」

先日の件でアーサーに惚れ直した様子のエルメスは、更にアーサーが恋しくなったらしい。よかつたな。

しかし、そのとぼっちりがコレだ。この会話を毎日毎日一日に何十回も繰り返られる俺の身にもなってみろ。

勿論、エルメスがアーサーに会いたい気持ちはよくわかる。うん、わかる。けどもだ・け・ど、人には我慢の限界と言う物があるのだよ。

元々サツパリ風呂上り気質な俺には、今のエルメスのようにベツトベットした粘着ローション気質は耐え難いわけだ。そりゃもう苦痛なわけだ。わかる？

例えるなら酔っぱらって調子に乗ったオツサンが、若い女に何度も同じ自慢を繰り返しているのと同じ状況だ。な、うぜえだろ？  
実にわかりやすい解説。さすが、インテリジェンス俺。

「はあ・・・アーサーさん、会いたいな・・・」

「また始まった・・・ハア」

そりゃゲンナリもするぜ。溜息も出るさ。そんな俺の気も知らないで、シュヴァリエの奴らったら笑うのよ。ひどいじゃない。

リオ 「プクク、副長、アーサー様に嫉妬してんだぜ」

パーシー 「可愛い妹取られたかと思ってんだぜ、あのシスコン」

こいつらは死ねばいいと思う。ていうか、殺そうと思う。

俺 「テメエら・・・人の気も知らねえで好き勝手言いやがって」

ペレアス 「んなことねえよ？ 副長の気持ちはよくわかってるから！ なあ？」

トリス 「そうだよー。なんてったって世界一大事な妹だもんなー」

ダイナ 「大好きな妹だもんなー」

ユアン 「そりゃアーサー様の話ばかりされたら寂しいよなー」  
キルシュ 「シスコンの副長には耐え難いよなー」  
俺 「そーかそーか、お前らがそんなに死にたがってたとは知らなかったぜ。すぐ楽にしてやる」  
バカども『ギヤアアアア！』

ふう、スッキリした。いいストレス解消になった。とりあえず喋った奴は全員撃った。黙って苦笑いしてただけの奴らは見逃してやった。神のごとき慈愛を持つ俺、さすがだ。

でもさ、でもさ、その後がもっとヒドイのよ。もっと可哀想なのよ、俺。

「ちょっと！ 何も撃つことないじゃない！ みんなに謝りなさい！」

え、この子お母さん？ 俺のお母さん？  
エルメス激怒。まさかの命令口調。あまりの剣幕に思わず怯んじやった俺。

「カイはいつもすぐ撃つんだから！ やめなさいって何回言われたらわかるのー！」

「いや、でもこいつらが・・・」

「言い訳しない！ 今度やったら爆破するわよー！」

「い、ごめんなさい」

「謝る相手が違う！ みんなに謝りなさいー！」

「ごめん・・・」

完全にお母さんに怒られるガキだよ俺。つーかブチギレたエルメス超怖ええ。普段が温和なだけに温度差が半端ねえ。爆破するって言われた時マジ冷や汗かいたぞ。

しかしエルメスは俺に言っではいけないことを言ってしまった。

「どうしてそんなにバカみたいに撃つの!? 全く! 変なところばかりアーサーさんに似て!」

一瞬、どこの世界のホームドラマ? と思っただけど、聞き捨てならないセリフにアドレナリンが再活性。本来の俺、復活。

俺 「テメエ、今なんだった? 誰が誰に似てるって?」

エルメス 「カイの変なところがアーサーさんに似てるって言ったの!」

俺 「そりゃ聞き捨てならねえな。眉目秀丽・豪放磊落・品行方正な俺様があんな自己中横暴吸血鬼と似てるわけねえだろ!」

エルメス 「品行方正の方が聞き捨てならないけど!? 自己中横暴吸血鬼なんて、カイの為にあるような言葉じゃない! 加えて鬼畜!」

ガルフ 「更に付け加えると狂犬」

パーシー 「歩く嫉妬心」

ダイナ 「歩く独占欲」

リオ 「つまり極度のシスコン」

俺 「更に言うなら優秀・有能・秀才・完璧! それが俺!」  
エルメス 「カイはどこまで強欲なの!? バカじゃない!?」

ガード「ていうかシスコンは否定しなくていいの？」

俺 「忘れてた！ する！ 全否定！」

ベディ 「全否定したらバカしか残らねえじゃん」

エルメス「カイって結構バカだよな」

俺 「黙れ！ お前に言われたくねーんだよ！ アルティメットバカ！」

エルメス「アルティメット!？」

このバカは究極のバカなだけに、とんでもねえ事を言いやがる。似てる？ 俺が？ アーサーに？ 冗談じゃねえ。欠片も似てねえよ。共通点があるとしたら性別くらいなもんだっつもの。

「お前よお、冗談は顔だけにしろよ、マジで」

「ヒド！ なんでそう言うこと言うかな！」

「事実だから。大体アーサーつつたらさあ、自己中・性悪・人格破綻者・傲岸不遜・陰険・卑怯・横暴・乱暴・粗野・エロオヤジ。どこも俺と共通点ねえよ」

「全部該当するよ!? 今のまるつきりカイの自己紹介じゃん！」

「んなわけねえだろ！ あんな化け物と一緒にすんな！ 俺は地上に舞い降りた高尚かつ崇高な天使だぞ！」

「本名が最高に名前負けしてるくせに、よくそんな事を恥ずかしげもなく言えるね・・・ある意味尊敬するよ」

「おう、尊敬しろ。俺に跪き傅き敬い崇め、奉れ」

「……………カイって、すごいね」

「ようやくパーフェクトバカにも理解できたか。引き続き俺を敬愛しろ」

「うん、もう相当引いてる」

何なんだこのクソ生意気でバカな小娘は。アーサーの躰がなつてねえから俺はこんな不当な言い様をされてんだぞ。アンタみてえなのをモンスターペアレンツと呼ぶんだ。そのガキも親に似てモンスターだ。こっちはたまつたもんじゃねえ。

エルメスといいシユヴァリエといい、俺の周りはバカばつかだ。嫌がらせか。もしくはこれが俺に対する神の報いか。冗談じゃねえ。

でもとりあえずバカどもは一応大人しくなつたから俺もソファに腰かけたら、ずっと黙つてたランスが隣に座つてきて俺に耳打ちした。

「本当はアーサー様に似てると言っていただけで嬉しいでしょう？」

急に何を言いやがるんだこのクソガキは。何を根拠にそんなイカれた発言をしゃがるんだこのクソガキは。

俺の目から放たれるふざけんなビームに気づいたランスは再び耳打ちした。

「エルメス様の為に何にでもなりたいカイ様には本望でしょう？」

「は！？ なに！？ 何言つてんの！？」

「アーサー様の代わりになるとおっしゃったじゃありませんか」

「おま、お前聞いてたのか！」

「ええ、カイ様のメソメソ言う声で目が覚めましたから」

「メソメソなんてしてねえ！」  
「してましたよ」

俺としたことがなんたる失態。あれを他人に、よりによってこの腹黒のクソガキに盗み聞きされるとは、大失態にも程がある。自殺級シヨック。

慌ててランスを引つ掴んでその場から逃亡すると、案の定、悪魔の囁き。

「みなさんに知られたくはないでしょう？」

「テメエ今度は何が目当てだ。金か？」

「お金なんて要りません。僕の頼みを聞いてほしいだけですよ」

「要求はなんだ」

「勿論エルメス様です」

「出た・・・とうとう本性表しやがって。お前がエルメスをオトすのを黙認もしくは協力しろってか」

「察しが良くて助かります」

「お前見た目草食系なのに、なんでそんなに獰猛なんだよ。いつそお前の野生が恐ろしい」

「カイ様だって野獣の様にエルメス様に襲い掛かったじゃないですか」

「お前・・・お前本正しい加減忘れる。俺は今それどころじゃねえんだよ。なんでお前が常人以上に根に持ってんだよ」

「勿論わかってますよ。今のカイ様にそんな気が微塵もない事も、エルメス様を大事にしてらっしゃることも。ですが、僕はそれが許せません」

「は？ なんでだよ。これ以上のノープロブレムは存在しねえ」

「いいえ、大問題です。できる事ならエルメス様に近づいてほしく



もありません。ですが、それがエルメス様の望みなので、僕は渋々容認しているにすぎません」

「お前本当どんだけだよ……」

アーサー、ヤベエよこのガキ。相当だよ。もう病気だろ。アンタ本当にうかうかしてらんねえぞ。コイツの策略好きと腹黒さと卑怯さはアーサーを彷彿とさせるな。

ていうかさあ、まあ人には色々欠点なり長所なりあるわけじゃん。でさあ、よく考えてみたらさあ、別にアーサーに似てるところがあるのって俺だけじゃない気がする。

ただ単にアーサーが人の悪い部分の集大成っただけであって、たまたま一致するようなところはみんなあるぞ。

要するにアーサーは悪の代名詞。OK？ 仮にアーサーの資質を継ぐ奴がいるとしたら、俺の目の前でニヤリと笑うこの薄気味悪い腹黒のクソガキだろう。間違いねえ。

「つーかお前、さつさと諦めやがった上に卑怯くせえ。騎士で紳士じゃねえの？ 恥ずかしくねえの？」

「カイ様、ご存じないんですか？ 本物の騎士あるいは紳士は、悪にすら喜んで手を染めるものです」

「それは主人の為にだろ。お前は自分の本能に忠実なだけじゃねえか」

「いずれエルメス様は、僕なしでは生きていられないようにして差上げます。それこそがエルメス様の幸せですよ」

「おま……どこでそんなセリフ仕入れて来るんだよ。お前本当に

「11歳？」

恐ろしい……一応上司としてコイツの面倒を見てきたが、こんな恐ろしい奴に育つとは……ガラードと何が違ったんだろ、コイツ。

ガラードは俺に似てあんなに素直でいい奴に育ったのにコイツときたら。多分コイツの企み好きはジュリオ様の影響だな。間違いない。

アーサー、このガキヤバいぞ。本当にヤバいぞ。弱みを握られた以上、俺はもうエルメスに賭けるしかないぞ。今はまだアーサー、アーサーってばかり言ってるけど、その内寝取られるぞ、文字通り。

あ、でもエルメスがウザくなくなるなら、それはそれでいい気もするな。うん。やっぱ俺ランスに着くわ、悪いけど。決めんのはエルメスだ。せいぜい頑張れ！ ハハハハハ！

以上

FILE - 12 CUT 「熱狂的崇拜」(後書き)

カイの本名アンジェロはイタリア語で天使という意味です。

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

結局あれからどれほど頭を悩ませてみラーカさんの本名はわからなくて、まあ当たり前なんだけど。どうせならインドに連れてきて、クリシュナさんと一緒に眠らせてあげようという事になった。

155

「本来ならちゃんと生まれたところの方がいいんだろっけど、クリシュナと一緒にみラーカさんも寂しくないよね」

「そうだな。お前も毎日会いに行つてあげられるしな」  
「うん」

実際にミラーカさんを迎えに行けるのはまだ少し先になりそうだが、今あの城に行つて、ヴァチカンの調査員にバッタリ遭遇、なんてことになったら本末転倒だからな。

話の流れで、エルメスがミラーカさんのことを話してくれた。

「ミラーカさんはアーサーさんの次に出会った吸血鬼で、私が吸血鬼化したばかりの頃からずっと一緒だったんだ」

「ふーん、じゃあ付き合い長いんだな」

「そうだよ。アーサーさんと暮らし始めた当日に紹介してもらったから。その頃はね、ミラーカさんアンティークショップやってたの。無許可営業だったけど」

そう言うのとエルメスは壊れてしまったコバルトブルーの髪飾りを取り出した。これが壊れてしまったのはあの戦いのせい。ジュリオ様に髪の毛を掴まれた時に一緒に握りしめられて割れてしまった。

「これはね、その時にミラーカさんがくれたの。出会った記念に、お友達になった記念につて。私すっごく嬉しくて、使うのが勿体なさ過ぎて、自分の結婚式とあの時しか使ったことなかったんだよ。だけど、壊れちゃうならもっと普段から使ってあげればよかった」

エルメスは髪飾りを握りしめて悲しそうに俯く。あの日の彼女の死は、彼女の死に方は俺の目から見てもエルメスにとっては恐らく一番心残りだ。ミラーカさんはエルメスとアーサーを守るために、ずっと封印してた力を解放してしまった。そのせいで死んでしまった。

彼女はそれが使命なんだと言ってたし、それは讃えてあげるべきだ。彼女は立派に使命を全うして、そのおかげで今エルメスは生き

てる。彼女のあの決断があったからこそ、今のエルメスがある。だけど、わかつてはいてもエルメスは後悔せずにはいられない。

「アーサーさんにとってのミラーカさんは、私にとってのカイと同じだったのよ。100年前からずっとアーサーさんを支え続けて、私の事にしても他の事にしても、私達に相談できないような事でもミラーカさんには頼ってた。本当にアーサーさんにとってミラーカさんはとても大事な人で、特別な人だったの。あの時のアーサーさんの辛そうな顔が忘れられないの。あの時のミラーカさんの涙が忘れられないの」

あの時の事を思い出す。涙ながらに微笑んで幸せだったと言いなから消滅したミラーカさん。普段の様子からは想像もつかない程取り乱して、ミラーカさんの砂に縋り付いていたアーサー。その隣で慟哭するエルメスの姿。

エルメスの言う通り、アーサーにとってミラーカさんは唯一無二の親友だったんだろう。後になってガイドから聞いた話だと、スパイ活動の事もミラーカさんだけは最初から関与してたと言ってたし、立場的にも心理的にも彼女はアーサーの相談役だったんだな。

「ミラーカさんにとってもアーサーさんは本当に特別だった。あの二人が並んだところは綺麗で、とても綺麗だけどなんだか悲しくてきつと二人とも同じ悲しみを背負って、二人で乗り越えてきたんだと思う。だから私の事もとても大事にしてくれたの。いつも可愛がってくれて、妹みたいに大事にしてくれた。大好きな優しいお姉さんだった」

泣きながらそう言うエルメスにとっても、ミラーカさんは特別だったんだろう。吸血鬼になったばかりの時から傍にいた姉。そういえば俺とエルメスがケンカした時も、真っ先に文句言ってきたのはいつもミラーカさんだった。

そう思い返してみると本当にエルメスを大事にしてたんだなあ。  
・  
・  
・  
もしかして、俺嫌われてたかも。

「私とアーサーさんの為に命を張って、魂を代価にして使命を果たしたミラーカさんには本当に感謝してもしきれない、謝罪してもしきれない」

「そうだな。でも、お前もわかってると思うけど彼女は立派に使命を果たしたんだから、ちゃんと讃えてやれよ」

「うん。でも、できることならアーサーさんの為に、ミラーカさんには生きていてほしかった。ミラーカさんが居なくなってしまつて、アーサーさんは心の拠り所をなくしてしまつた。帰ってきてても、きつとミラーカさんが居ないことはアーサーさんにはとっても辛い事だと思つ」

「確かにそうかもしれないな。100年以上もずっと傍にいた親友がいなくなるなんて、想像するだけでも辛いな。それほどの時間を一緒に過ごしてきて、きつとあの二人は友達の域なんて超えてたんだらうな」

「そうだね。きつとあの二人は心で深く繋がってたんだよ。心で繋がったソウルメイトだったんだよ」

「ソウルメイトか・・・」

話ながら考えた。もし、同様に俺の前からエルメスがいなくなつ

てしまったら？ 想像すらしたくねえ。エルメスのいない世界を想像できねえ。想像するだけで辛い。俺が想像だけで味わう以上の辛さを、アーサーは帰ってきてから実際に体験しなきゃいけない。

きつとアーサーはとても辛い思いをするだろうし、きつと一生忘れられなくて後悔もするんだろう。そんなアーサーを見て、エルメスがどれほど悲しむか。

「それほどの人がいなくなってしまうって、アーサーさんはきつと帰ってきてもすごく悲しむ。ミラーカさんが居ないことはアーサーさんにはきつと耐え難いこと。だから私が支えてあげなきゃ。私がミラーカさんの代わりにならなきゃ」

エルメスは、本当にアーサーの為に生きている。だからこそきつとエルメスはアーサーの支えになれると思う。でも決意をしたような眼でそう言ったエルメスは、すぐに落ち込んだような顔をした。エルメスはミラーカさんじゃないから、及ばない部分もあるとわかってる。だからその事で、すごく苦悩すると思う。考えればすぐにわかることだ。

でも、そう考えていて気付いた。俺とアーサーとの決定的な違い。エルメスがミラーカさんの代わりに、俺がアーサーの代わりにならない理由。

「お前は多分ミラーカさんの代わりにはなれないんだろうな」

「・・・そうだと思う」



「でも、それはお前の力不足とかじゃないぞ」

「え？　じゃあ、なに？」

「元々の関係が違うからだ。人にはそれぞれ役割があるだろ。友達には親にはなれない。家族は恋人にはなれない。人には決まった相手にしか見せない決まった顔がある。ミラーカさんの席はミラーカさんだけの物だ。アーサーにとってのお前はお前でしかない。お前以外にはなれないんだよ。だからこそお前にしかできないこともあるんじゃないか。お前にしか見せない顔もあるだろ」

「・・・そっか、そうだね。そうだよな」

他人が他人の席を補うことは、その関係が深ければ深いほど不可能だ。その人はその人でしかない。その人の席は空けておかなければならない。本人がその席を整理できるようにするまで。

それができるようになるまではきつと苦しむ。心に穴が開いたみたい言葉があるけど、本当にそうなんだらう。けど、それは自分で乗り越えなきゃいけない事だ。むしろ誰かを代理に立てるなんてことはするべきじゃねえ。それは、本来の席の持ち主に対しても、代理にしようとした人に対しても冒涇以外の何物でもない。

それこそかつてエルメスは経験している。“ミナ”の人形。人形が手に入れば楽だろう、自分から人形に成り下がって、人形になりきってしまったら楽だろう。でも、人は人形じゃねえ。エルメスはエルメスだ。俺は俺だ。

エルメスにとってのアーサーは、師であり父であり主人だ。エルメスにとっての俺は友達であり家族であり臣下だ。最初から決定的

に違うんだ。根本的に違う。俺がアーサーになることは最初から不可能だった。俺が俺以外になることは、最初から無理なことだった。

「カイはいつも私の事を考えてくれてるけど、全然私の事見てくれない」

あの時のエルメスの言葉の意味がようやく分かった。俺が見ていたのはエルメスの向こう側にいるアーサーで、アーサーならどうするかって事ばかり考えて、エルメスが俺に求めているものに目が向いてなかったんだと気付いた。俺が俺であることを忘れていた。

でも、それなら俺にしかできないことだってちゃんとあるはずだ。エルメスが俺にしか見せない顔があるはずだ。それに俺がちゃんと気づいてやらなきゃ。

とりあえず、一つだけアーサーに頼みがある。エルメスは以前アーサーに人形扱いされていた時に傷ついたと言ってた。それでも今アーサーの為にミラーカさんの代わりになりたいと思った。

きっとアーサーはミラーカさんが居ないことにとっても傷ついて辛い思いを思うけど、できることならエルメスの思いを汲んでやってほしい。傷ついて尚、自ら人形に堕ちようとしたほどの思いを、いつかわかってやってほしい。すぐには無理でもな。とりあえず、それだけ。

以上

拝啓    アーサーさん

今日はちょっと私の悩みを聞いてください。

カイは普段からいつも私の事を考えてくれて、自分のことを後回しにして、辛い思いを押し込んで、私を励まそうとしてくれます。いつもたくさん心配かけて、いつもたくさん助けてもらってます。

だけど、私は助けてもらってばかりで、カイを助けてあげられません。カイが背負うジュリオさんへの罪悪とか、あの戦争で受けた悲しみを私が癒してあげることが出来ません。

それをカイに話したらやっぱりいつも通り別に、みたいな、俺はいつも自分最優先だ、みたいな感じで。私じゃ助けにならないのって聞いたら、バツカじゃねーの、みたいな顔されて。

だけど、カイは私にいっぱい助けてもらったって、救われたからって言うてくれたんです。でもカイはずっと辛そうな顔してるから、今は何が辛いのかって聞いたたら、アーサーさんが居なくて私が泣いてることが辛いつて言ったんです。

私はそれを聞いてとても嬉しかったけど、とても悲しく思いました。カイは何にも悪くないのに、私の悲しみをカイにまで背負わせてしまっていると思うと、とても悲しくなりました。

私はやっぱり災厄だったようです。私はいつも助けてもらってるのに、私がカイを苦しめてたんです。その事が、すごく悲しかった。

それなのにカイは、いつも助けてもらってるのは自分だからって、お前を救ってやれなくてゴメンって、傍にいる事しかできなくてゴメンって謝るんです。私にはそれがとてもとても辛かった。

私には、カイが傍にいてくれるだけで十分なのに、たくさん助けてもらってるよって言うてるのに、カイは全然わかってくれないんです。

ずっと自分を責め続けて、アーサーさんの代わりに、クリシユナと北都の代わりに、私の幸せの為になら何にでもなるとまで言ってる。そこまでカイを追い詰めてしまった自分が、許せない。

だから、せめて私の泣き顔をカイに見られないように、と思ったんです。それに気づかれたら怒られちゃうかもしれないけど、気付かれないかいいかと思ってる。

でも、問題はここからです。

この前ちょっと色々あって、なんだか最近とてもアーサーさんに

会いたくて、本当にどうしようもないくらい会いたくて。それをずーっとカインに言っていたら、さすがにうぜえって呆れられたんですけど。

そしたら、それを見てたシュヴァリエのみんながまたシスコンとか言い出して、それでカインが怒ってみんなを撃っちゃったんです。それはさすがにあんまりだと思って、私が怒ったら一応おとなしくなっただんです。

でも、前から思ってたけど、アーサーさんとカインって普段は仲悪かったけど、妙なところで意気投合してたじゃないですか。なんか変なところばかり似てると思ってて。

アーサーさんもちょっとしたことですぐクライドさんをランチしたりしてたし。だからそれを言ったらカインがものすごい怒り出して。

なんか色々言ってみましたけど、自分は優秀で完璧で品行方正だから、あんな自己中横暴吸血鬼と一緒にすんな！とか言い出して。もう、何を言ってるんだこの人、と。

しまいには、俺は地上に舞い降りた天使だとかアホみたいなこと言いだして、ヴァチカン一名前負けしてる神父だったくせに、本当にこの自信は一体どこからやってくるのかと呆れました。というか、引きました。

この前はあんなにメソメソ言ってたのに、相変わらずキャラに定まりがないと言うか、気難しいというか、いつそ二重人格なんじゃないかと思う程です。ていうか、絶対二重人格です。良い人の時と悪い人の時でギャップが激しすぎます。いつそ異常者です。

メソメソしてる時のカイはあり得ない程自信喪失してるのに、普段が異常なほど自信満々なのはなぜですか？ どっちが本物なんですか、あの人。もう私にはわかりません。意味が分かりません。

どっちも共通してるのは、結局私の話を聞いてないことです。普段はまあ当然ですけど、メソメソバージョンの時だって、私は助けてもらってるって何度も言ってるのに、全然聞いてなくて助けてやれないって言い張るし。結局私の意見無視ですよ。

つまるところ、あの人自分の考えに絶対の自信があるんですよ。それがいい事でも悪い事でも。しかも思い込みも激しい。俺がそうだったつたらそうなんだよ！ですよ。

私の意見なんか聞きやしないんですよ。私が私のこと言ってるのに完全シカトですよ。世界はカイを中心に回ってるみたいです。

なんかそう考えると、カイの為にと思って隠れて泣いたりしてたのがバカみたいに思えてきました。私は何しても、何もしなくても、カイが考えを改めない以上は変わらない気がする……。そう思いませんか？

あ、でも一つだけ改まったみたいでした。さっきも書いたけど、カイは自分がアーサーさんの代わりにならなきゃってずっと思ってたみたいだったんですけど、それは考え直したようです。

実はミラーカさんの事で少し話したんですけど。ミラーカさんはアーサーさんにとって本当に特別な人で、大事な友達だったでしょう？ だから、アーサーさんがすごく辛い思いをするだろうって思ってます。

だから、アーサーさんが帰ってきたら私がミラーカさんの代わりにアーサーさんを支えてあげなきゃって言ったんです。

そしたらカイが、人には役割があって、その人にしか見せない顔があるから、その人の席はその人の物でしかないって。私は私でしかなくて、だからこそ私にしかできないことがあるって言うてくれたんです。

そう言われて、確かにそうだなあって思って。私は逆立ちしたってミラーカさんにはなれないし、逆にミラーカさんも私にはなれないですもんね。

だから、私は私なりにアーサーさんを支えようって。私にしかできないことをしようって思いました。

そう言えば以前クリシュナに、自分にできる事、自分にしかできないことを考えて実行した方が建設的ですよって言われたのを思い出しました。なるほど、こういうことなのね、と思いました。

カイも自分で言いながら、それだ！ みたいな顔してたので、少しはカイの肩の荷も降りたんじゃないかな、と思います。

私もカイも今は五里霧中を試行錯誤しながら歩いてるけど、この1か月で色んなことを考えて、色んなことが見えてきました。少しだけ、霧が晴れてきた気がします。



アーサーさん、今カイが傍にいてくれることで、より強く思います。ミラーカさんが亡くなってしまったことが本当に心残りで、残念でなりません。

アーサーさんが帰って来た時に、もう今まで支え合ってきた親友はここにはいない。その事を思うと、アーサーさんがどれほど悲しむかと思うと、苦しくて仕方がありません。

アーサーさん、残念だけど、私ではミラーカさんの代わりにはなれません。私はミラーカさんほど世界の事も人の事もわからないし、アーサーさんの事にしてもその気持ちを深く理解してあげられないかもしれません。

だけど、私は私なりにあなたの支えになります。前に約束した通り、ずっと傍にいます。どこにもいきません。一生あなたの為に生き続けます。

私ではあまりアーサーさんの役には立てないかもしれないけど、絶対にあなたを一人にはしません。ずっと傍にいますから。それだけは約束します。それだけは私の役目、私の使命です。誰にも譲つてあげないんです。

きっと私は前の様に一生懸命あなたの背中を追いかけらるだろうけど、あなたの後ろで背中を見守って支えるのが、私の使命です。そこが私の席です。たまに振り返って呆れたように笑う、あなたのその笑顔を絶やさないようにずっと傍にいますから。

アーサーさん、あなたに早く会いたいです。もう1か月も経ってしまいました。あなたに会いたくて、会いたくて、会いたくて、どうにかなってしまいそう。

あなたはいつ帰ってくるんですか？ もう1か月も経ったのに、まだ私は待つんですか？ まだ、ただいまと言ってくれないんですか？

早くあなたに会いたい。早く帰ってきてください。じゃないと、アーサーさんが帰って来た時に話すことが多すぎて、話す方も聞く方も大変ですよ？

まあ、いつまでも待ちますけどね。でも、ホントに帰ってきてくださいよ？ 絶対ですよ！ じゃなきゃアーサーさんの正体みんなバラしちゃいますからね！

敬具

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

やはり、俺は間違っていたようだ。俺の教育方針も、考えも。俺が甘かった。でも俺は悪くねえ。

「カイー、明日お買い物行きたーい」

「そーか。行つて来い」

「一緒に行こうよ」

「断る」

「行こうよー!」

「断固拒否」

「行くの! 命令なの!」

「お断りします」

「んもー! ケチ!」

「ケチじゃねえ。ランスと行け」

我儘でうぜえこのバカなお嬢ちゃんは、買い物に行くのだとうるさい。前回の事があるから、俺は二度とコイツと外出したくないんだけど。

そんなやり取りをしてランスに押し付けようとしたら、ランスが

傍まで寄ってきた。

「僕が同伴するのは構いませんが、それでもカイ様にはご同行頂きたいと思います」

「ああ？　なんでだよ」

「エルメス様になにかあったらどうなさるんですか？　シユヴァリエなんですからちゃんとお守りするのにも仕事のはずですよ」

「アイツが人間に負けるわけねえだろ」

「それだけではありません。また以前の様に警察沙汰にでもなったら、僕には対処しかねます」

そうだった。忘れてた。以前こいつはランスと出かけた際に迷子になった拳銃、ギャングを壊滅させた上に警察沙汰にまでなったんだった。

あの後大変だったな・・・教理省の枢機卿（表）のジーサンから「さすが、と言っておきましょう。さすがに殲滅機関を率いるキング枢機卿の部下だけに、大したじゃじゃ馬ですな。しっかり手綱を握って、調教するがよろしいでしょう」

とか嫌味言われて、特務機関聖堂騎士パラティンの機関長からも文句言われて。散々だったな・・・

全く、何がどうなったらそうなるんだ。アーサーの躰がなくなってせいだぞ。あんな面倒事は金輪際ごめんだ。コイツを野放しにしておくのは危険だな。

そう言う結論に至って、俺も渋々同伴することにした。

んで、翌日。

「カイ様！ 歩くのが早いです！ エルメス様に合わせてください！」

「ああ？ 何言ってるんだ。お前らが俺に合わせる」

「何をおっしゃるんですか。それでもシュヴァリエですか？ それでも筆頭なんですか？」

「これでもシュヴァリエ筆頭だ」

チクショー腹立つ、このクソガキ！ こいつのせいで終始険悪ムードだよ。コイツ空気読むとかそう言うのしないわけ？ 面倒くせえ。腹立つ。

で、イライラしながらもなんとか一度も迷子にならずに、エルメスの行きたがってた靴屋に到着。迷子にならなかったのはよかった。そこは。

椅子に座ってポケーっと買い物をするランスとエルメスを眺めてたら気付いた。ランス、デカくなったなあ。ガキは成長が早ええな。

「カイ、お待たせー」

「お待たされ。エルメスお前身長いくつ？」

「ん？ 150だよ」

「ちっさ！ ガキか！」

「東洋人は西洋人に比べたら小さいものなの！」

「だとしてもチビだろ」

「まあ、だとしてもチビだけど」

「ちよつとお前ら二人背中合わせに並んでみる」

買い物を買わせて戻ってきた二人を早速比較してみることにした。二人を背中合わせに並ばせて、頭を合わせてみる。

「お、ランスももう少しでエルメス追い抜くんじゃねえか」

「本当ですか!？」

「ああ、あと3センチ位」

「ウツソ！ もうランスに追い抜かれちゃうんだ。やっぱり子供は成長早いねえ」

「来年なつたらとつくに追い越してんだろつな」

「うわあ、嬉しいです。僕も早く大人になりたいなあ」

「今から大人んなるのなんかあつという間だぞ」

「へえー・・・」

エルメスと出会ったばかりの頃、約3年前はまだほんのガキだったんだけどなあ。ガキの成長はいつ見てもいいもんだ。ランスは自分の成長が嬉しいようで終始ニコニコだ。10代の時間なんて本当にあつという間だから、コイツもすぐに大人になっちまうんだろつな。

「カイ様は身長いくつですか？」

「180ちよい」

「デカ！ ムダに！」

「ムダじゃねえ」

「じゃあ僕は185目指します」

「目指したからってなれるもんでもねえけどな。つーか何そのムダな負けず嫌い」

「大人になつてまでカイ様より劣る部分があるなんて、自分が許せません」

「どつという意味だコラ」

なんでコイツこんなにムカつくの？ なんで俺に負けたくないの？ もしかして俺見下されてんの？ 俺はコイツ喜ばせてやったのに、この言いようはどついうことだ。なんなんだよ、腹立つ。

店を出てそんなことを考えながら歩いてたら、通りすがりに男に肩がぶつかった。サーセン、と声をかけてそのまま行こうとしたら急に大声でまくしたてられた。が、何を言ってるのかが分からん。

「エルメス、アイツ何言ってるの。何語？」

「あれはヒンディ語だね。ぶつかつといて謝罪もなしかつて」

「あー、じゃあゴメンって言っとけ」

「うん」

エルメスが間に入ってその男を宥めはじめる。でも、事態は俺の予想だにしない展開に。エルメスとその男が段々険悪になってきて、大声で口ゲンカを始めた。

「ちょ、エルメス!? 何やってんだお前!」

「だってコイツ調子乗るんだもん! 病院行くから金出せとか言うから!」

「ああ? 面倒くせえ。んなもんやりやいいだろ。ホラよ、拾え!」

財布から金を抜き取って男の前にはら撒いてやった。で、男が金を拾ってる間にエルメス引き摺ってその場から退散。

「なんかカイ、成金の超ムカつくオツサンみたいだったよ!」

「お前ね、誰のせいだと思ってるんだ。しなくて済むケンカ始めたのは誰だ。なんでもかんでも拾ってくんじゃねえよ、バカ犬が!」

「そうですよ、エルメス様に何かあったらどうするんですか。ケンカはダメですよ!」

ランスにまで説教されたエルメスは、くっ、みたいな顔してる。そりゃランスでも説教すんだろ。この点に関して俺に同意しない奴はいねーはずだ。

しかし、街を見ていて気付いた。首都なだけに色んな地方から人が集まるものなんだろうが、さっきのヒンデイ語と言い、街中では色々な言語で会話がなされてる。洋服を着た男、サリーを着た女。近代的な建物にムガル帝国時代の名残を残す建造物。混在する文明に目を奪われる。

「インドは文化が多様だな!」

「そうだよ。インドは国と言うより大陸だって言葉がある位だもん。



人種も文化も言語も多種多様。面白いよねえ」

「ふーん、すげえな」

「そういう多種多様なインドの文化とかが面白くて、クリシュナは宗教とか歴史とかを研究してたんだよ」

「ふーん、つか吸血鬼なのに宗教研究してたのか」

「そうなの。クリシュナって変わってるよねえ」

クリシュナさんを思い出しながら笑うエルメスに何となく可哀想な気がしてきたが、それ以上に嫉妬むき出しの視線をぶつけるランスが気になる。

しょうがねえだろそこは。お前、思い出位ひたらせてやれよ、と内心呆れた。

思わずランスに溜息を吐いて次の店に入ると、蒸せかえるような香の匂い。

「うっ！ くっさ！ 気持ち悪！」

「本当・・・どうしよう」

「お二人ともどうなさったんですか？」

「この香が気持ち悪い」

「・・・そうでしょうか？」

「前に同じの嗅いだことある。ミラーカさんが言った。サンダルウッドっていう儀式に使われる香だっ」

「なるほど、道理で。オイ、さっさと済ませてさっさと出てい」

「え？ カイは？」

「こんな臭えとこいられるか。俺は外で待ってる」

「わかったー」

しばらく外で待っていると、青ざめた顔をしたエルメスと、その後から心配顔をしたランスが出てきた。

「気持ち悪い……」

「どっかで休むか？」

「うん……」

近くに公園を見つけてベンチに座ると、エルメスはランスに膝枕されながらうだりはじめた。煙草に火をつけてその様子を見ていたら、エルメスがファイとこっちに顔を向ける。

「うう、今はその煙草の匂いがすごくいい匂いに感じるよ」

「さっきのアレに比べりゃあ、だろうな」

「カイ様、煙草って美味しいんですか？」

「吸う奴にはな。ランス、お前も吸ってみろ」

吸っていた煙草をホレ、とランスに向けると、ランスは慌てて首を横に振る。

「い、いいですー!」

「お前早く大人になりてーんだろ? 俺にできることができないま

までいいわけ？ 俺はお前くらいの歳にはもう吸ってたけどなあ。  
非喫煙者はシユヴァリエン中じゃお前だけだぞ」

「ええー…」

「ちよつとカイ、ダメよ。ランスはまだ子供なんだから」

出た、お母さんエルメス。うぜえ。

起き上がってきたエルメスは俺の手から煙草を取り上げ横に離すと、煙草は一瞬で灰になってその場にサラサラと散っていった。

「エルメス様すごい」

「っーかソレまだ吸ってたんだけど」

「あ、ゴメン、つい」

怒られた上に一瞬で灰になったマイハニー。エルメス許すまじ。  
でも慈愛にあふれる俺はあっさり許して新しく火をつけた。

「そついえば、煙草変えた？ なんか匂いが違う」

「そりゃな。こっちで同じの売ってねえから」

「それもそつかあ。ていうか、やめようと思ったことないの？」

「ねーな。コイツと共に生きてコイツと共に死ぬの、俺は。俺が死んだら棺に煙草10カートン入れる。墓にも花じゃなくて煙草を供える」

「どんだけ・・・仮に私がやめてって言ったらやめる？」

「絶対やめねえ。意地でもやめねえ。っーかやめてほしいわけ？」

「んーん、別にどうでもいい」

「どうでもいいのかよ」

日の暮れた公園で紫煙をくゆらせる俺。素敵すぎる。ハードボイルド、俺。いや、ハードボイルドではないな。ニヒリスト、俺。いや、ニヒリズムに煙草は関係ねえ。ワイルドビューティ、俺。そう、これでいこう。

そーいや、吸い始めた頃はよくジュリオ様に隠れてみんなでコソコソやったなあ。で、ソッコー見つかって怒られたっけ。懐かしい。ジュリオ様は煙草、嫌いだったからなあ・・・

「！」

「カイ？ どうしたの？」

「いや・・・なんでもねえ」

「でも、なんか顔色悪いよ？」

「なんでもねえよ」

煙草から昔の事を思い出して、ジュリオ様の事を考えた瞬間に、あの日、ジュリオ様を殺した瞬間の映像がフラッシュバックした。

エルメスの手前と言うのもあるけど、それ以上に自分の為に見て見ぬふりをしている感情、罪悪感。言い訳をしようもないほど、俺はジュリオ様を殺した事を心底後悔してる。

でも、その事をいつまでも引き摺ってたらエルメスが苦しむし、俺も苦しい。早く、忘れてしまいたい。早く、消えて欲しい。

もう二度と、大事な人を手にかけることはしないと誓うから、もう二度と、誰も裏切らないと誓うから、無理やりにも俺の選択を

正当化させてくれ。

悪いのはジュリオ様だ。俺達を裏切って、エルメス達を裏切って、俺達を騙して、エルメス達を騙して、俺達の思いを蹂躪して、エルメスの家族を殺した。

悪いのはジュリオ様だ、俺のやったことは間違いなんかじゃない。主人の間違った判断を是正したに過ぎない。そうだ、俺は悪くない、俺は悪くない。

俺は悪くない・・・けど、あの人が大好きだった。俺の、大好きな父親。

正義の為に親を殺すのは、本当に正しい事なんだろうか。正義なんて立場が変われば悪にもなる。俺のやったことは本当に間違いじゃないかったのか。

仮に誰から見ても正義だ、と言ってもらっても、あの人に受けた恩を仇で返したことに変わりはない。俺達の出自がなんであれ、育ててくれたのはあの人だ。その事実が変わりはないのに。

何度も同じ葛藤を繰り返す。今まで毎日のように同じ問答を繰り返して、このメビウスの輪から抜け出られた試しはない。

時間が忘れさせてくれるのを、待つしかないのか。

「カイ様、火、消えちゃってますよ?」

ランスに言われて煙草を見ると、根元まで短くなってとつくに火は消えていた。その場にポイと放り投げて足で踏みつけると、再びランスが口を開く。

「ジュリオ様の事ですか？」

「・・・別に」

「やっぱりまだ後悔してますか？」

「うるせえ」

「・・・カイ様、もしカイ様がジュリオ様で、僕やガラード様がカイ様だったら、あの時、あの瞬間、カイ様はどう思われますか？」

無駄な鋭さと不躰なランスにかなり腹が立ったが、言われて考えてみた。

もし俺がジュリオ様と同じように、どうしようもない憎悪に憑りつかれて同じことをして、ランスやガラードに殺されるとしたら、それはきつと、本望だ。

目的を果たすよりも、それほどの事をしても尚家族に看取られるなら、泣いてくれたなら、幸せなのかもしれない。

ジュリオ様は俺が嫌いになっただけでないって言ったら、じゃあいや、と言ってた。実に曖昧なニュアンスではあるけど、それは、そういう事なのかもしれない。

でも、それ以上かというとかそれ以前に、自分の息子にそんな責を負わせたくなええから、そもそもそんなことしねえけど。

「元気でな、ってジュリオ様は最後に言っただよなあ」

「じゃあ元気じゃなきゃいけませんね。ジュリオ様を裏切ったと思っ  
つて後悔してるなら、これ以上の裏切りはダメですよ」

「お前、生意気」

驚いたことに、全く持ってランスの言う通りだ。コイツの言う通りだと思っ  
るのは相当癪なんだが、非常に遺憾ながら、なんか気が楽  
になった。

こんな風に、コイツらと楽しく元気に生きてりゃ、その内煙みた  
いに後悔も消えちまうんだろうな。

今日は、素直にそう思えた。

でも、その帰り道。

野良猫に魅了されたエルメスはまんまと迷子になった。

その内ヤキ入れてやる。

以上



これは由々しき事態である。

ペレアス「ヤバいな」

キルシュ「ああヤバいな」

ガラード「どうすんの？」

ガルフ「どうしよつか」

俺「またトリスの力を借りるか」

ランス「何をおっしゃるんですか。働けばいいでしょう。皆さん無職じゃないですか」

幹部一同「シュヴァリエだ！」

シュヴァリエ幹部による円卓会議中。全員で頭を抱える原因は、金欠だ。

俺「折角トリスが大金用意してくれたたつてのによお、お前ら湯水のように使いすぎなんだよ！」

キルシュ「あると使うもの、それが金じゃんよ」

俺「だからってお前ら限度つてもんがあんだろ。毎晩のよう

に夜遊びしやがって」

キルシュ「それ以外に俺ら楽しみないじゃん」

ガルフ「まあ、確かにな。つーかカイだって何から何まで全部アルマーニで揃えやがって。人の事言えねえだろ」

ペレアス「しかもエルメスのもそのレディースラインで揃えてるし」

俺「それは俺じゃなくてアーサーだよ！俺がやったのはアルマーニのエクステンジ！アイツにアルマーニは早ええ！」

ガラード「一緒じゃん」

俺「一緒じゃねえよ！ジオルジオ・アルマーニはエクステンジとは格が・・・」

ペレアス「ハイハイわかったわかった。副長のブランド解説は置いて、どうすんの」

シャンティファミリーに支払う迷惑料及び水道光熱費 月400万

シュヴァリエの遊興費 月800万

被服、日用品費 月500万

その他 700万

残金 150万

ガルフ「どう考えても使いすぎだな」

ペレアス「どんだけインド経済に貢献してんだ」

キルシュ「お陰で俺ら繁華街では既に有名人だぜ」

ガラード「自慢してる場合じゃねーし」

ランス「本当ですよ。遊ぶことしか能がないんですか？」

キルシュ「ランス、もうちょっと齒に衣着せようか」

俺「バカ、ランスの言う通りだ。どんな遊び方してんだお前ら。これからは自重しろ」

キルシュ「なんだよー、自分はエルメスに買いでるくせにさあ」

俺「買いでねーよ！ アイツが買えってうるせーから渋々買  
い与えてんじゃねーか！」

ガルフ「それを世間では買いでるっつーの。全く、どいつもこい  
つも・・・」

この調子だと150万なんて3日で飛ぶ。金は天下の回り物と言  
うが、どう考えても流してばっかで帰ってきやしねえ。

俺「おい、お前らホストクラブでも働け。毎日が遊びだぞ  
キルシュ」やだよ。相手したいんじゃないやなくてされてーの。第一酒飲  
めねーし。お陰でキャバクラ行ったら嫌な顔されんだからな」

ペレアス「キャバクラでもねえのにこの金額はすげえよ。一体どん  
な店で何時間延長して何件ハシゴしてんだよ」

キルシュ「ランスの前じゃ言えねー」

ランス「僕も聞きたくありません。虫酸が走ります」

キルシュ「ランス、もしかして俺のこと嫌いなのか？」

ランス「僕は本来エルメス様しか好きじゃありませんし、エルメ  
ス様に色目を使う人は誰だって嫌いです。いつそ死ねばいいです。

この下種野郎」

キルシュ「クソー！ なんだよお前！ 超ム力つくんだけど！」

ペレアス「ランス、その辺にしとけ。泣くからコイツ。っーかお前  
も子供相手にキレんな」

俺 「つーかランスの性悪っぷりはいつそ将来性を感じるな。アーサーの後継はランスで決まりだ」

ガルフ 「何言ってるんだよ。カイに似たんだろ」

俺 「どこが!? 俺に似たのはガラード! ランスは微塵も似てねえ!」

ガラード「いや、どっちかっていうと俺はエルメス似だから。どうでもいいけど、何度脱線したら気が済むんだよ」

ガラードが溜息を吐きながらそう言っつて、思わずみんなで、そうだった、と現実を思い出した。その時会議室(という名のガルフの部屋)にノックの音が響く。

「カイー、いるー?」

「ああ、なんだ?」

エルメスがドアから顔を覗かせてきた。部屋に入ってきたエルメスは申し訳なさそうにしながら、俺に一枚の紙を差し出した。

「おま・・・俺は今この類の紙を見ると頭痛がするんだけど」

「ごめんねえ」

エルメスの持ってきた紙はまさかの請求書。その額15万。こっちの気も知らないで残金は135万に減少。

「てめえ15万も何に使いやがった」

「本」

「本!?! 本で15万!?!」

「うん。100冊くらい買ったよ!」

「買ったよ! じゃねえよ! テメエ本ばつか買いやがって、もう本棚入りきらねえだろ!」

「心配ご無用! 本棚も買ったよ!」

「そう言う事じゃねえよ! つーか余計な出費すんな!」

「うん、ゴメンね・・・これからは気を付けるよ。だから怒らないで。ごめんね?」

「ハア・・・たくお前は・・・しょうがねえな。俺が払つてやるから」

「わあ! ありがとー! じゃあお願いね!」

「ハイハイ」

上機嫌で部屋から出ていくエルメスに深い溜息を吐いて振り返ると、なぜか白い目線。

ペレアス「副長、エルメス甘やかしすぎ」

ガラード「なるほど、確かに買いでる」

キルシュ「涙目の上目遣いとごめんね? に騙されてんだぜ、このシスコン」

ランス「さすがエルメス様。カイ様をウマイ事手懐けましたね」

俺「は!?! 手懐けるってなんだよ! 騙されてもいいねーし!」

ガラード「それ否定したら副長が率先して買いでる事になるよ」

俺「買いでねーし!」

ペレアス「貢がされてんだよ」

ガルフ「エルメス意外と悪女だな。カイがエルメスにお願いされたら断れないってちゃんとわかってるぜ、アレ」

俺「そんなバカな・・・」

ガルフ「バカはお前な」

なんとということだ。したたか！ 女つてしたたかでズルい！ 畜生、俺の慈愛を弄びやがって、エルメス許すまじ！

怒りと悲しみに打ちひしがれる俺の気も知らねえで、シユヴァリエの奴らは何故か笑いだす。

ガラード「こんなに他人に振り回される副長見るの初めてだ」

キルシュ「確かに。俺らは女で遊んでたけど、副長は遊ばれてるよな」

ペレアス「確かに。俺も女には気を付けるわ。いい勉強になった」

ガルフ「確かに。でもカイは既に手遅れだな」

ランス「確かにそうですね。まあ、エルメス様がどれほどカイ様を弄ぼうが全く問題ありませんが」

俺「バカ言え！ 大問題だコノヤロー！ ざけんなよ、クツ

ソオオオ！ 冗談じゃねえぞコノヤロー・・・アイツ、あのバカ女、その内目にモノ見せてやる。ヤツてやる、泣いて気絶するまでヤツてやる！」

エルメス「そんなことしたら芥子炭にするよ？」

幹部一同「ギヤアアア！」

突然現れたエルメスに一同仰天。エルメスは本当に突然、ガルフのベッドの上に正座して座っていた。

「おま、お前どっから・・・」  
「その前に。あなた、謝罪と焼死、どっちにする？ それとも、バ・ク・ハ？」  
「すみませんでした」  
「わかればよろしい」

思わぬ真相を突きつけられた上に、盛大に驚かされた上に、謝罪までさせられた。俺ちよつと可哀想すぎる気がする。アーサーは本当にどういう教育をしたんですかね。バカかと思えば変なところで妙に頭使いやがって。ムカつく。

ガラード「ていうかエルメス急にどっから、いつの間に？」  
エルメス「エへへ、ジュリオさんにできることが私にできないはずがないと思つて、本で勉強したのだ！」  
キルシュ「もしかして瞬間移動？」  
エルメス「うん！ 体を素粒子まで分解して自分の認識した座標で観測したの！」  
ペレアス「量子力学か？」  
ガルフ「ゴメン、全然意味わからん」  
エルメス「要するに行つたことある所なら行けるって事！」  
ランス「それはすごいですね。迷子の心配ないじゃないですか」  
エルメス「うん。でも人前じゃ使えないけど」  
俺「んなことより何の用ですかね」

俺の質問にエルメスは思い出したような顔をして、デケエケース

を目の前に2つ置いた。

エルメス「お金盗ってきたよ」

キルシユ「は？」

エルメス「お金」

ガルフ「え、ていうか、盗ってきた？」

エルメス「うん。銀行から」

ランス「ご、強盗したんですか？」

エルメス「やだなあ、泥棒だよ！」

ペレアス「相変わらず悪趣味だな」

エルメス「趣味じゃないよ！」

そう言つてエルメスが開けたケースには札束がギッシリ詰まっていた。アーサー・・・アンタ本当にどんな教育したんだよ。まんま、本物の悪女じゃねえか。笑顔で泥棒したとか普通は言わねえよ。

「テメエ、なにやってんだよ。なんで勝手にそう言うことすんだお前は！」

「だつて、お金ないつて言つてたから」

「だからつてお前、やつて良い事と悪い事があんだらうが！」

「でも困つてたでしょ？」

「だからつてこんな金使えるか！返してこい！」

「でも私達はいつも泥棒してたよ」

「マジか」

「マジ。それにホラ、いつも色々買つてくれるでしょ。貰うばっかりつて悪いし、私もたまにはみんなの役に立たなきゃと思つて。だからそんなに怒らないですよ。ごめんね？」



「ハア・・・たくもつ、本当お前はしょうがねえな。今回だけだぞ」

「うん！ ありがとう！」

元気よく返事をしたエルメスはその場からフツと消えていなくなった。それに少し驚いたけど、さすがアーサーの眷属だな。何でもアリか。

エルメスも反省してるようだし、それに俺らの為にと思ってたやってくれたみてえだから、今回は許してやることにした。次回からはやっぱりトリスに助力願う。まあ、結果的には一緒だけど。

ガラード「ていうかやっぱり副長エルメスに甘いよ」「ペレアス」「エルメス甘やかすなって言ったの誰だよ」「

キルシュ「俺らにはいつとも厳しくせにー」

俺「バカ言え。今回だけだ。それに俺らの為だっつてんならしようがねえだろ」

ガルフ「だからお前騙されんだよ。バーカ」

俺「ああ！？」

ランス「カイ様は完全にエルメス様の傀儡ですね。アハハ最高！マジウケる！」

俺「ランス、テメエ素に戻ってんじゃねえよ」

ランス「次期息子、そして次期旦那候補のこの僕がマリオネットのカイより格上なのは当然じゃん。敬語遣ってやる義理ねーし」

俺「誰がマリオネットだコルア！ つーか敬称くらいつけやがれ！ このクソガキが！」

ガルフ「やっぱランスはカイ似だな」

俺「黙れ！ うっせー！ クソボケチクショー！」

ペレアス「副長が一番うるせーよ」

アーサー、俺もう本当どうしよう。タスケテ・・・泣きたい。色々ムカつきすぎてわけわかんなくなってきた。

俺はもう本当、なんなんですかね。どうしたらいいんですか。どうすればいいんですか。全員殺せばいいんですか。そうですか。わかりました。あ、心配するな。エルメスだけは見逃してやっから。

幹部のバカども「ギャアアアアアアアア！」

アーサーの助言のお陰で、心の平穏を取り戻しました。だいぶスッキリしました。ありがとう。

ストレスフリーな俺、プライスレス。

以上

【重要】アーサーへのクレーム報告

疲れた・・・俺にはね、正直理解できないんだよ、そういつの。だから余計面倒くさい。

インドに来て既に一か月を経過。それで最近やっと少しだけ落ち着いてきて、インドの生活にも慣れてきた。それで気づいた。

どうやら俺はシャンティファミリーの一人、アジメールに嫌われているらしい。

なんで？ 俺は何かしたか？ 全く身に覚えがない。でもアイツは俺と目が合った瞬間に逸らしたり睨んだりする。なんだよ、スゲエムカつくんだけど。

別にほっといてもいいんだけど、それにエルメスが気付いたら余計に気を遣わせるだろうと思って、シャンティに聞いてみた。

「ああ、そーみたい。なんか文句言ってたもん」

「なんで！？ 俺何もしてねーじゃん！」

「アハハハハ！ 確かにね。まあでもしょうがねえよ」

「なんでだよ」

「嫉妬だよ、嫉妬」

「はあ？ なにが？ なんで？」

「カイはミナ様と同室で、いつつもつきつきり。ミナ様はカイに頼りつきり。まるで夫婦」

「はああ！？ 同室は俺の意志じゃねえし、しょうがねえだろ！

っ！か俺的には病気で入院中の娘を心配する父親の気分なんだけどっ！

「あ、そっちのがしつくりくるな。まあ、一応あたしはわかってっけどさ、ミナ様に一番近いのはカイだし、ミナ様がカイを傍に置きたがるのが気に入らないんだよ」

「それ、俺のせいじゃねえじゃん・・・」

「まーね。でもしょうがねーじゃん。アジメールはミナ様大好きだし。ライバルだと思われてんじゃねーの」

「あり得ねー・・・大体エルメスにはクリシュナさんとアーサーがいるんだし、っ！か俺無関係なんだけど！ っ！かクリシュナさんとアーサーは良いのに、俺が目をつけられる意味が分からん！」

「まあ、あの二人にはみんな感謝してるし、尊敬してるから。アンタにはしてない」

「デメエ・・・」

要するにとばっちりだ。最悪だ。超面倒くせえ。やっぱほっとくっ！

シャンティと話が終わって部屋に入ろうと思ったら、ダイナが慌てて走ってきた。

「副長！ 大変大変！」

「だから副長じゃねえって。筆頭もしくはカイ様と呼べ」

「それどころじゃないんだって！ ケンカ！」

「は？」

「ガラードとアジメールがケンカはじめてんの！ 止めて！」

「はあああ！？」

普段大人しいガラードがケンカするなんてどうという風の吹き回しだ。ていうか面倒くさいんだけど。

「いや！ お前なんかまだまだだね！」

「お前みたいな新参者に何が分かるんだ！」

「わかるに決まってんだろ！ 俺はエルメスの息子なんだから！」

何を言ってるんだこいつらは。何をやってるんだこいつらは。

「何？ つーかなんでケンカしてんの？」

傍でケンカの様子を眺めてたパーシーに聞いてみると、パーシーは笑って答えた。

「ああ、どっちがエルメスをより崇拜してるか競ってただよ」

「バツカじゃねえの！！ そんなこと競ってどうすんの！？ アホか！」

もう俺やだ・・・面倒くせえ。アーサーさえいてくれたらこんなアホどもが活発になることもなかったのに。もういつそ、これはアーサーのせいだぞ。マジで。

俺 「あーお前らもうやめろ、うぜえ」

ガラード「ゲツ！ 副長！」

アジ 「つーかアンタが一番ムカつくんだよ！」

俺 「あーハイハイわかったから。うるせえ、黙れ」

ガラード「副長も何とか言っちゃってよ！ 俺エルメスの唯一の支配下の吸血鬼じゃん！ 特別じゃん！？」

俺 「あーハイハイそうだな」

アジ 「ていうかガラードもただけどカイが一番ムカつくんだよ！ 急に現れて当たり前みたいにミナ様につきつきりてさあ！」

俺 「あーハイハイすんませんね」

ガラード「ていうか、そうだよな！ 副長ズルい！」

アジ 「だよな！ なんなんだよアンタ！ カイよりも俺の方がミナ様好きなんだからな！」

俺 「あーハイハイそうですね」

なにこれ超うぜえんだけど。もう本当どうでもいいんだけど。なんでケンカしてた二人が俺に突っかかってくんだよ。俺が一体何をした。うるせーし、マジうるせーし。

正直俺は呆れて物も言えない的な感じなんだけど、このバカどもは容赦なく文句を連ねてくる。さすがに腹が立ってきた。

俺 「つーかお前らよお、そんなにエルメスが好きなら言えばいいじゃねーか。それで白黒はつきりさせりゃいいだろ」

ガード「俺のはアジメールと違って不純な好意じゃねーの！ 大体近衛の俺がそんなことしたら本末転倒じゃん！ アーサー様に殺されるじゃん！」

アジ 「誰が不純だ！ つーかできるか！ 俺はアンタと違って厚顔無恥じゃねえんだよ！ ミナ様にはクリシユナ様とアルカード様がいらつしやるんだぞ！」

俺 「誰が厚顔無恥だ。つーか、わかってんならケンカする理由もねえだろ。大体お前らがケンカして一番嫌がるのは誰か考える」

バカ二人「……」

俺 「わかったらバカみてえなことでケンカすんな。お前らがどんなに競つても、エルメスはみんなを平等に見てるぞ、アーサー以外はな」

アジ 「……アンタもか？」

俺 「当然だ。アイツの博愛主義は徹底してるからな。こいつは嫌い、こいつは好きみたいなことをエルメスは出来ない。今俺が一番アイツに近いのは、俺が言い出したから、友達だから、筆頭だから、それだけだ」

やっこのことで黙ってくれた。さすが俺、さすが管理職の威厳。しかし、クリシユナさんにランス、アーサーにコイツら、エルメスがこんだけ愛されてるのは良い事なんだろうけど、そのとばっちりを食らうのは心底面倒くせえ。アイツの博愛主義は八方美人とも言うな。その内絶対自分で責任を取らせる。

ケンカが収束してリビングの人口が減ってきた頃に屋敷のインターホンが鳴った。シャンティが連れて来たのは一組のカップル。

「ミナ様にお客様だ。呼んできてくれねーか？」

「ああ、ランス」

「うん」

ランスに呼ばれてリビングにやってきたエルメスは急に涙目になって、そのカップルに抱き着いた。

「@ ¥ ○ ¥ 。 @ ○ # \$ % ○ # \$ % # ○ !」

「# \$ # \$ % ○ # % & !」

何語？ なんて言ってるかわかんねえんだけど・・・ひとしきり抱き合って不思議語で語り合ってた3人は少しすると落ち着いたようにソファに座った。

「あ、紹介するね。この二人はベトナムでの友達なの。女の子がトリン、男の子がツァン。ベトナムのセーフハウスの守護者たちだよ」

「あーなるほどね。んじゃさっきのはベトナム語か」

「うん。ていうか、トリンとツァンって英語じゃべれた？」

「あたしは喋れるよ。お父さんアメリカ人だしね」

「俺は今義父さんに習って勉強中」

「ツァン上手じゃない！ ていうか、義父さんってまさか！」

目を輝かせたエルメスの前にトリンとツァンはにっこり笑って左手を差し出した。その左手の薬指には光る指輪。



「うわぁ！ 結婚したんだ！ おめでとう！」

「えへへ、ありがとう！ もう、アミン連絡つかないから知らせる事も出来なくて困ったよ」

「ごめんねえ・・・ていうか私も結婚したんだよね、一応」

「マジで！？ いつの間に!？」

目を輝かせる二人の前で、エルメスは寂しそうに笑った。話すのはまだ辛い、か。だけど、この二人が友達だってんなら話して慰めてもらうのもいい。

「エルメス、積もる話もあるだろうから部屋でゆっくり話せ」

「あ、そうだね、ありがとう。カイも一緒に来てよ」

「あ？ なんでだよ」

「私一人じゃ話せないから」

「・・・わかった」

「  
そっか、アルも・・・」

泣きながら一生懸命言葉を繋ぐエルメスの話を聞いて、ツァンは寂しそうに呟いて、トリンは泣いていた。話はベトナムを出国してから今日の事まで。でも序盤からエルメスの顔は曇った。インドに来てすぐにクリシュナさんと出会ったから。

エルメスの話を聞いて思った。本当にエルメスとクリシュナさんは運命の出会いだったんだな。

昔なんかの雑誌で読んだことがある。お互いに一目惚れして出会った男女は、遺伝子で惹かれあってるんだと。遺伝子の引力とでもいうのか。まあ、運命って言うには夢のない話かもしれねえけど。

でもそれは本当に砂漠から砂金を見つけるような確率で、そんな相手に出会えたら運命としか言えねえと思う。

エルメスはアーサーと出会ったからクリシュナさんと運命的な出会いをして、アーサーとジュリオ様が宿命の再会を果たしたから俺たちと出会って、今ここにいる。人の生つてのはわかんねえもんだ。

「でもね、アーサーさんは帰ってくるって言っただけだから待つてるの。ここでカイやみんなと一緒に、クリシュナのお墓を守りながらずっと待つ。きっと帰ってきてくれるから」

泣きながらそう言って、エルメスは二人に笑顔を向けた。その笑顔はやっぱり営業スマイルで、トリンとツァンはすぐにそれに気づいたようだ。

「辛いな、辛いよな。よく耐えてきたな。でも、無理すんなよ」  
「そうだよ。辛い時には辛いって言っていていいんだよ。あたしたちにできることがあったら何でも言ってるね？」

つくづく、エルメスは周りに恵まれてると思う。多分それもエルメスの人徳なんだろうけど。二人の言葉を聞いてやっぱりエルメスは泣き出して、ありがとう、と小さく言った。

しばらく経って落ち着いたエルメスは、二人に何故ここに来たのか尋ねた。

「実はシャンティから連絡を貰ったのよ。会いに来てあげて欲しいって」

「え？ シャンティが？ なんて知ってるんだろう？」

「俺同様にシャンティにも継承したんだろ？ 譲渡書と別に連絡先を残してあったみたいだよ。アルに何かあったら連絡するようにつて」

「ウソ・・・」

エルメスと共に俺も驚いたぞ。アーサー、アンタいつから予測してたんだ。それとも念のためレベルの杞憂か？ いや、アンタのことだ。そんなはずはない。

いつからこうなるとわかった？ もしかして、今消滅してるのは計算の内なのか？ それなら何故、エルメスに何も話してないんだ？

驚いていたエルメスは徐々に考え込むような顔をしてブツブツ言  
いだした。

「そう言えばアーサーさん、インドを出る時にすぐにまた戻ってく  
るとか言ってた。その時、その内話すとか言ってた。そう言えばな  
んかミラーカさんとコソコソしてた。そう言えばなんか対策がある  
のどのの言ってた！ そう言えば私を眷属にしたのは理由があると  
か言ってた！ そう言えば消える瞬間、時が来てしまったとか言っ  
てた！ てことは私に出会う前から、8年前からわかってたの？  
まさか、まさか、今いないのって計算通りなの！？」  
「そーみたいだな」

なぜか俺に突っかかってきたエルメスに俺は肯定してやりまし  
た。ざまあみろ。全くアーサーは大した奴だよ。何重に策を弄してやが  
るんだ。

ていうか、エルメスには話しとけよ！ どんだけエルメスが辛い  
思いしてると思ってるんだ！ このボケ！ アホ！ バカ！

「んもー！ アーサーさん相変わらずヒドイよー！ 教えないって  
言ってたのはこの事だったのか！ そりゃ計算通りなら帰ってくる  
って言えるよね！ 全くもー！ 本当にあの人はー！ バカマスタ  
ー！」

「全くだな」

「本当だね。相変わらずアルは性格悪いな」

「ドンマイ、アミン」

ソファに伏せて暴れるエルメスに俺らは苦笑いですよ。あーでも、ム力つくけど、ちゃんとアーサーが帰ってくるってわかって、正直スゲエ安心した。

つーか話しとけよ！ この件に関しては100回文句言っても足りねえ！ このバカ！ 陰険クソオヤジ！

ひとしきり暴れて起き上がったエルメスは怒ってたけど、でも嬉しそうに言った。

「全くもう、しょうがないなー。待っててやるかあ」

全然しょうがないって感じじゃなかったけどな。いつ帰ってくるのかはわかんねえけど、帰ってくる可能性が高いつて言う保証は、随分エルメスを楽にしてくれた。

帰ってくるかどうかかわからないって不安は、本当にエルメスにとっては辛いものだったから、本当に良かったと思う。つーかマジこのバカ！ ざけんな！

しばらく話して再び4人でリビングに戻った。さっきの話をシュヴァリエやシャンティ達に話して聞かせると、なんだよー！ ってやっぱ怒ってたぞ。でも、みんな安心してた。

当然だ。俺らだってアーサーが帰ってくるのを本当に心待ちにしてんだからな。つっても別にアンタに会いたいわけじゃねーからな。言っとくけど。

つーか、トリンとツァンが結局、爆撃機だった件。

「ていうか、最初アミンが結婚したって言った時、あたしカイくんが旦那さんだと思った」

「あー俺も」

「んなわけねーだろ。たまたま近くにいただけじゃねーか」

「それもだけど、なんていうか雰囲気？」

「そうそう。カイくんがアミンを見る目が超優しいから」

「イヤイヤイヤ、やめてくれ。本当にやめろ」

「えー？ カイが旦那さん？ 想像できな〜い」

「しなくていい！ あり得ねえから！ お断りだから！ 断固拒否

！」

「・・・ちよつとシヨツクなんだけど」

「黙れ！ むしろ喜べ！ バカ！」

「もお、何怒つてんの？ ていうか、喜ぶわけないじゃない！ カ

イが一番仲良しなのに！ カイは特別なのに！」

「うおお！ マジやめるバカ！ 空気読めバカ！ 喋んなバカ！」

「な、何もそこまで言うことないのに・・・」

夕方のことがなきや普通に嬉しかったと思いますよ。でもね、視線がね。痛いんですよ。もうアジメールとガロードがめっちゃ睨んでるしさあ、ランスとかスゲエ形相してるしさあ。マジあのバカ女勘弁してほしい。

「あ、じゃああたし達帰るね」

「アミン、また来るからな」

「二人ともありがと！ 送ってくよー！」

「あたしも一緒に行くよ」

どうも雰囲気を感じたらしいトリンとツァンは足早に立ち去って、エルメスとシャンティも二人と一緒に屋敷を出て行った。俺も着いて行こうと立ち上がると、にっこり笑ったランスに引き留められた。

ガラード「ふーん、副長は特別なんだってさ」

アジ「ウソつき」

ランス「まさかそう言う作戦？ 僕たちを安心させといて、裏から虎視眈々と・・・」

おれ「なわけねーだろ！ エルメスが言ったのはそう言う事じゃねえよ！」

アジ「じゃあなんだよ」

俺「え？ えーと・・・あ、そうだ。付き合い長えし！」

アジ「それなら俺たちの方が付き合い長いけど」

俺「あー・・・えーと、あ、仕事で一緒だったからだ！」

ガラード「それなら俺らも一緒だったけど」

俺「・・・っ！かお前から面倒くせーよ！ 元々友達なんだから普通だろ！ いいじゃねーか別に！」

ランス「よくない！ カイが同室なだけでも僕は嫌なんだから！」

俺「それは俺の意志じゃねえよ！」

アジ「だからムカつくんだろーが！ なんでミナ様はアンタを指名してんだよ！」

俺「部屋が空いてねえからだろ！ っ！かランスも指名されてんだろ！」

ガラード「それはランスが子供だからじゃん。なんで副長なの？」

俺「知るか！ エルメスに聞けよ！ っ！か俺はむしろ誰かに変わってほしいんだけど！」

ガラード「そんなこと言ったらエルメスが可哀想。それ聞いたらエ

ルメス悲しむよ」

アジ 「ミナ様のご指名なのに逆らうのかよ！ 反逆者め！」

ランス 「カイは筆頭なのに命令の一つも聞けないわけ？」

俺 「なにをおおお！？ つーかお前らどっちだよ！ もう面倒くせーよ！」

もー！ アーサー！ アーサー！ 何とかしろよコイツらを！  
付き合いきれねえし、面倒くせーし、もう面倒くせえ！

念のため言つとくけど、俺はエルメスには興味ないからね！？  
忠誠と友情しかないからね！ エルメスも俺にはそう言う興味はないからね！

大体さあ、そう言う嫌疑をかけるのって俺にもエルメスにも失礼だと思わねえ？ 俺もエルメスも友達だって言ってるわけじゃん。俺はエルメスのシュヴァリエとして忠誠を誓ってるわけじゃん。その友情と忠誠を疑われたと思うと、俺は悲しくてしょうがねーよ。

もう本当俺の味方になってくれんのシャンティくらいしかいねえ。アイツはその辺分かってくれてるみたいだからな。やっぱアイツはいい奴だ。

アジ 「とか何とか言つて実際嬉しいくせに」

ガラード 「さすが副長。ポーカーフェイスが上手だな」

ランス 「カイはジュリオ様によく似てウソつきだもんね」

アーサー、アンタ帰ってきたらこいつらを速攻シバキ回してくれ。生きてることを後悔するほどにシバキ回してくれ。頼むわ。



以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

何に囚われて、何に縛りつけられているのか。俺は、分からない。

あれからしばらくトリンとツァンはインドに留まっていた。大体1週間くらいか。その間毎日屋敷に遊びに来ては、エルメスを元気づけてくれた。

209

その時に、トリンの救出作戦だの、デイヴィスファミリーとの抗争だの、トリンに射殺された話だのいろいろ聞いた。

アイツすげーな。こんなにネタに困らねえ奴なんてそうそういねえぞ。なんなのアイツ。ネタ製造機？

「あたしを助けに来てくれた時のアルはさすがだったよ。あたしベツドに手錠で捕まっていたんだけど、鍵かかったドアをバーンって壊して、手錠ブチって引きちぎって「立てるか？」って。危うくホレ

そうだった」

「もう、その事何度思い出してもムカつくよ。その間私撃たれてただけだし」

「まさしく撃たれ損だよな」

思い出話に花を咲かせて笑うエルメスは、以前のエルメスに戻ったような笑顔だ。この二人のお陰で、だいぶ元気を取り戻せたみたいだ。やっぱ持つべきものは友達だな。

ツアン 「でも俺アミンが死んだって聞いたとき本気で泣きそうだったよ」

トリン 「あー・・・ごめんね」

エルメス 「もう済んだことじゃない！ 友達に射殺されるなんて中々経験できない・・・あ、今でもしてるわ」

ツアン 「ええ！？ どゆこと!？」

エルメス 「カイに何度か殺されそうになったし、殺し合いもして何度か撃たれた」

トリン 「カイくん・・・本当に友達なの？」

俺 「親友」

ツアン 「・・・アミン、お前騙されてるんじゃないの」

エルメス 「騙されてはないよ。カイが異常なだけ」

俺 「まあ、そうだな」

トリン 「認めるんだ・・・ていうか、アミンはそれでいいんだ」

俺 「いいに決まってるんだろ」

ツアン 「なんでカイが答えるの？ あのさあ、限度って言葉知ってる？」

エルメス 「まあ、ちょっとくらいなら死なないから」

トリン 「そう言う問題？」

死ななきゃいってモンじゃないよね、とオシドリ夫婦は首を傾げるが、エルメスは終始ニコニコしてた。

コイツの寛容さはもはや寛容とは言わねえ。ただのバカだ。撃つた俺が言うんだから間違いないえ。

俺 「それを水に流しても有り余るほど助けてやってるからな」  
エルメス 「そうだけど、カイがソレ言う？」

俺 「言う」  
エルメス 「バカじゃないの？」

俺 「バカはお前。全く、クソ生意気なバカ娘だな」  
トリン 「ヒド・・・カイくん、本当に友達なの？」

俺 「大親友」  
ツアン 「ウソつけ！」

俺 「マジで。世界で二番目に大事にしてやってっから」  
ツアン 「なんか胡散臭い上にいかがわしいんだけど」

トリン 「ちなみに一番は？」  
俺 「二番と圧倒的に差をつけて、俺」

エルメス 「私が一番じゃなかったの？」  
俺 「日によってごく稀に一番だ。喜べ」

エルメス 「そつか。ありがとう」  
ツアン 「アミン、飼い馴らされてんな・・・」

そーだよ！ 本来俺が飼い馴らすべきだ。ていうか、本来俺がこの駄犬を飼い馴らしてたんだっただ。

じゃあなんで俺貢がされてんだよ。意味わかんねえし。やっぱガルフたちの勘違いか。そうだな。そうに決まってる。俺がエルメス

にいい様に使われるはずがねえ。

大体見てみる、このバカを。終始ヘラヘラ笑ってるだけのバカ娘じゃねーか。コイツの取り柄つつたらバカと巨乳以外にはねーだろ。そんなバカに俺が操作されるはずはねえ。

っーか何回バカを連発させる気だ。いい加減ゲシュタルト崩壊してくるぞ。っーかアーサー本当によくこんなバカに惚れたな。マジで理解できん。

しかし、アーサーと言い、クリシュナさんと言い、ランスと言い、アジメールと言い、まあガロードは別格だが、アタマおかしいんじやねーの。俺には全く理解出来ねえ。

いや、もしかして、俺がアタマおかしいのか？ いや、そんなはずはねえ。まあ確かにちよっと異常なところはあると自覚してるけど、俺はおかしくねえ。

っーか、なーんで俺は今日こんなにイライラしてんだ。多分エルメスに対するストレスがかなり溜ってるんだな。それはそれでムカつくな。エルメスごときの為にストレスため込むなんてバカみてーじゃん。

「ツァン、マイケルさんとはどう？」

「義父さんは、さすがだよ。超やり手。基本的にいい人だし、さすがに元マフィアだけあってコネクション作るの上手いんだよ。見ててすごい勉強になる」

「へえー！ でも、確かにそうかもね！」

「ツアンとお父さんが仲良く上手くやってくれるから、あたしも安心だよ」

「本当だね！　そう言えば子供は？」

「実は今5か月！」

「マジで！？　すごい！　おめでとう！」

「えへへ、ありがとう」

トリンとツアンは本当に幸せそうで、そんな二人ののろけ話を聞きながらエルメスも嬉しそうだ。エルメスは本当にこの二人の幸せな姿が嬉しいんだろうな。

エルメスは、幸せじゃないのに。

夫は死んで、子供だって作れない。主人もいなくなって家族も死んだ。エルメスはもう人並みの幸せを手にする事は出来ないのに、なんで、笑って聞いていられるんだよ。

なんで俺はこんなに、この二人に、エルメスに腹を立ててるんだろう。

エルメスはこの二人の幸せな姿を見て喜んでるじゃねえか。二人の幸せを羨んだり妬んだりしてねえじゃねえか。エルメスが笑ってるなら、それでいいじゃねえか。

エルメスは前のエルメスみたいに、幸せそうな笑顔で笑ってる。この二人の存在が、エルメスを元に戻しつつある。それで、充分だろ。

なんだ？ 俺は、どうしたんだ。どうしたって言うんだ。エルメスが笑ってるのが、許せないなんて。

あり得ない。今日の俺は明らかにおかしい。この二人に妙に腹を立ててる。二人と笑いあうエルメスに腹を立ててる。何故？

わからない。俺は、どうしたいんだ。どうなれば満足するんだ。

エルメスの笑顔を取り戻したいんじゃないのか？ エルメスが幸せになれば、それでいいんじゃないのか？ アーサーが帰ってきて、エルメスが安心できればそれでいいんじゃないのか？

この二人が来たことでそれに近づいているのに、俺はそれを不満に思ってる。自分が、わからない。

アーサー、俺は、どうしたんだ。何に囚われてるんだ。俺はどうしたいんだ。俺はどうなれば満足するんだ。

俺は自分が、わからない。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

この安心は、一体どこからやってくるのか。この不安は、一体どこからやってくるのか。

俺は何を心配しているんだろう。何を懸念してるんだ。

「もうそろそろベトナムに着いた頃かなあ」  
「多分な。わかんねーけど」

あの二人が帰ったことに、安心してる。

「寂しいー！ 今度私達もベトナムに遊びに行こうよー！」  
「そのうちな」

寂しがるエルメスにイラついてる。

「もー、カイどうしたの？ なんか最近冷たい」



「俺はいつも優しい」

「・・・どこが？」

「全部。俺はお前にはいつも優しい」

「まあ、そうと言えばそうだけど。でもなんかおかしい」

「お前ほどじゃねえ」

やっぱり俺はおかしい。

一週間ほどインドに滞在していたトリンとツァンは今日、帰って行った。二人を空港まで見送りに行つて、飛び立つ鉄の鳥を見て、俺は心底安心した。

ああ、よかった。これであの二人にはしばらく会う事はないだろう。これで、エルメスは今までどおり  
今まで  
どおり・・・なんだ？

なんで俺はあの二人が気に入らないんだ。シャンティ達やシュヴァリ工達に、あそこまで腹を立てたことはない。あの二人とシャンティ達とシュヴァリ工達と何が違う？

イラつきすぎて、思わずエルメスに冷たく当たつてしまう。なぜ？ エルメスは何もしてないだろ。俺が勝手にイラついてるだけだ。ただの、八つ当たり。俺らしくもない。

いや、エルメスにもイラついてた。エルメスの笑顔に、イラつい

てた。なぜ？

わからない、わからない。

不安

なにが？ 何度考えても、わからない。

もう、考えるのは辞めよう。どうせわからない。分からないことをいつまでも考え続けるのは、面倒くせえ。

今回の事は、忘れよう。きっと、たまたま虫の居所が悪かっただけ。そうに決まってる。

「カイ、煙草吸い過ぎ！」

最近イラついてたせいかな、明らかに本数が増えてた。空港からの往復だけで、もう既にひと箱空になった。

「うるせーよ。吸血鬼なんだから別に病気になったりしねえよ」

「それはそうだけど。私に煙草の匂いが移っちゃっじゃない」

その言葉に、強烈に感じた

愉悦。

「別にいいじゃねーか」

「まあ、よくないよ。髪についちゃってるもん。ホラ」

エルメスのサラサラとした長い髪から漂う煙草の香り。「俺の」  
煙草の香り。

漂う香りは、まるで、マーキングでもしたように。証拠。エルメ  
スが、俺の物であるという、証拠のよう。

感じた不安、幸福感、行きついた結果。

執着、依存、嫉妬、独占、支配  
スを、支配したい。

俺はエルメ

強烈な、征服欲。異常な、独占欲。  
俺はエルメスを、自分の「所有物」だと思ってる

いつそのこと、これが愛情ならよかったのに。

俺は自分の都合で、自分の好きなように、自分の望むように、俺だけのエルメスを作り出そうとしている。

俺の理想。

エルメスが幸せになって、アーサーが帰ってきて、エルメスを幸せにする。それまでは、エルメスはアーサーを思って、俺の保護の下で、俺の管理下で、俺の手によって笑顔でいなければ気が済まない。

俺以外の他人が、エルメスを笑顔にすることが許せない。俺の手で生み出されるものでなければ気が済まない。

これは愛情なんかじゃない。異常な、所有欲。異常な、支配欲。  
異常な、管理欲。

愛情だったなら、エルメスがただ笑顔でいれば、幸せだと言ったら、それで満足できたはずなのに。エルメスの幸せだけを願えたは

ずなのに。

切望するのは、俺に支配されたエルメスの幸福。

その為に、エルメスの我儘を何でも受け入れて、片時も離れず傍にいて、エルメスに近づく他者を排除する。

エルメスの独占支配。強烈な嫉妬と執着と依存。まるで、ジュリ才様の妄執を引き継いだようだ。

異常な、妄執。

異常

ああ、俺は、異常だ。

LETTER - 4 Cruel 「邪険」

拝啓 アーサーさん

どうしよう、どうしよう。私カイを怒らせちゃったのかな。嫌われちゃったのかな。アーサーさん、私はどうしたらいいんですか？

この前からカイの態度がおかしくて、ずっとなんか冷たい感じがしてたんですけど、最近明らかに避けられてると言うか、冷たくされます。

もしかしたら、我儘を言って調子に乗りすぎて呆れられちゃったのかもしれないし、すぐにケンカになったり、トラブル起こしたりするのを怒ってるのかもしれない。

お金を盗んできたのを怒ってるのかもしれないし、トリンとツァンが遊びに来てた時に、仲間外れにしたみたいに思われて、怒ってるのかもしれないし、全部かもしれない。

トリンとツァンが帰って行った後くらいからますます私を避けるようになって、私が話しかけても適当にしか返事をしてくれないし、私が近づくと逃げられちゃいます。

私はカイに嫌われちゃったんでしょうか。どうしよう、どうした

らしいんですか。

私、カ伊に嫌われちゃったら、生きていきません。ずっとあんな風に冷たくされるなんて、耐えられません。

シャンティと、ガラードとランスに相談してみても、そんなはずないよって、カ伊は私を大事に思ってるよって、気のせいだって言ってくるけど、気のせいのはずない。

謝った方がいいのかもしれないけど、何に怒ってるのかわからないし、そんな状態で謝っても適当に謝ってるみたいに思われて、余計に嫌われちゃうかもしれないし。

それになにより、面と向かって嫌いになったって言われたら、私もう生きていけない。辛くて辛くて、今だって死んじやいたい。

222

私、カ伊がいなきゃ生きていけないのに、カ伊に嫌いって、いらないうって言われたら、どうしたらいいのかわかりません。生きる気力なんて失くしてしまいます。

みんなが、カ伊がいるからアーサーさんを待てるのに、カ伊がいてくれたからちよつとずつ元気になれたのに、私がバカだから嫌われちゃったんでしょうか。

私、カ伊に甘えすぎてたのかもしれない。カ伊に頼りすぎてた

のかもしれない。カイは前から鬱陶しいの嫌いって言ってたし、私のそう言うところに嫌気がさしたのかもしれない。

カイが頼っていいって、甘えていいって言ってくれた言葉を真に受けて、調子に乗りすぎてたのかな。

アーサーさんにも調子に乗って怒らせたりしたこといっぱいありましたもんね。私は、そういうダメな女なのかもしれない。

アーサーさん、もしアーサーさんが同じ理由で怒ったら、私がごめんなさいって、これからはちゃんとするからって言ったら許してくださいますか？

ちゃんと言う事聞くから、我儘言わないからって謝ったら許してくれると思いますか？

ガードとランスとシャンティは、カイが私を嫌いになるなんて絶対にあり得ないって言うてくれるし、私もそうだと思いたいです。

だから頑張って謝ってみようと思うけど、本当にカイが嫌いになってたらどうしよう。そう思うと、怖くて、辛くて、悲しい。勇気ができません。

こんな時アーサーさんが居てくれたら、私もカイも怒ってくれて仲直りできたかもしれないのに、アーサーさんが居ないと私一人じゃ、自分のことも解決できない。



アーサーさん、お願い、助けて。帰ってきて。私、どっいたらいいのかわかりません。怖い、怖い。

カインに嫌われたら、生きていけない。

筆頭にあるまじき思想に対する反省文

あれから俺も、かなり考えてかなり悩んだ。

とりあえず、なんで俺がそこまで異常者なのかという事から考えてみた。で、出た結果。

異常な男に異常な環境で育てられ、加えてこの異常な状況。正常でいられるわけねえだろ！ あの日以前から精神崩壊してたっつーの！ つーか既に10代の頃に「正常」なんてなくなってるじゃん、俺！ それどころか、ガキの頃から既におかしかったのかもしれない。

よし、これはジュリオ様のせいだ。全責任はジュリオ様にある。

次に、なんでエルメスにそこまで執着するのか。で、出た結果。

エルメスは俺にとって友達で、家族みたいに思ってた、俺の主人で、俺のアイコンで、俺の神で。俺の神なら俺の物で・・・いやいや、落ち着け、俺。

とにかく、度が過ぎた。友情とか忠誠とか通り越して、これはもはや信仰、いや狂信だ。

アイツはいつも俺といる時は本当に楽しそうに笑ってて、よく怒るし、泣くし、俺を何度も救ってくれて。だから、アイツのその全てが俺に向いてなきや嫌だと思っようになった。

今こんなことになって、マジ大変なことになったと思っただけど、心のどこかでヤツタ と思っただ節がある。

アイツにはもう頼れる相手は俺しかいないから、俺が支えてやんなきゃって、俺がアイツを助けるんだって、俺が、俺が・・・俺はダチヨウ倶楽部か！

ハア、まあとにかく、俺の手の届かない神々しいエルメス様が地上に、地獄に突き落とされてきて狂喜したわけだ。うわー俺って最低。

で、結果は散々。俺にはエルメスは救えない。俺にはエルメスを幸せにできないという現実に向き合ってしまった。だから、他人がエルメスを笑顔にしていることがものすっごく許せなかった。

その中で、なんでアーサーはいいのかっていうと、俺のエルメス幸せプランにアーサーが最初から組み込まれていたこと、それと実に癪だが、アーサーが俺より圧倒的上位のオスだということもある。

シャンティ達を許せたのもそこだ。幸せプランの一員だったから。何より屋敷で共同生活してても、俺がほとんど寄せ付けねえしな。

だけどトリンとツァンは俺にとってはイレギュラー以外の何物でもなかったわけだ。だからあんなだけ、帰れ！とか思ってたわけだ。

シユヴァリエの奴らなんて、説明する必要もねえ。俺の管理下にあるから。

要するに、全て俺が管理できてりゃそれでいいわけだ。マジ・・・俺とんだけ管理好きなのよ。管理職も職業病とかあんのか。職業病で管理したがつてんのか。

ああ、本当に異常だよ、俺。本物の異常者じゃねえか。あの時ランスが言ってた言葉の意味が、今はよく理解できる。

「いずれ俺なしでは生きられないようにしてやる。それがエルメスの幸せ」

俺はヘンタイか！・・・ヘンタイかもな。ランスの場合、それが恋愛感情から来てるだけまだマシだ。まだ救いようがある。

でも俺違うじゃん！別に愛してねーもん！ただ所有したい！独占したい！支配したい！エルメスは俺の物だ！俺のエルメスに近寄るな！

・・・っていうね。つーか、俺のじゃねえだろ。アーサーのじゃ

ん。なのにさー、なのにさー、もっかい前に書いた報告書読み直して気づいたんだけどさー。

俺今まで何度かさー、エルメスをアーサーにくれてやるだの、プレゼントしてやるだの書いてたじゃん。完全に俺のもんだと思ってるよねコレ。完全に俺の所有物だと思ってるよねコレ。

「俺のだけど、やるよ」

みたいなさー。もう、俺なんなの本当。もう俺本当ヤバいわ。ランスもヤベエけど、俺の方がよっぽどイカレてる。ランス、アイツ本当に俺に似てたんだな・・・もうイヤ。

ハア、もう、コレもある意味裏切りだよな。アイツは俺を家族だと、親友だと思ってんのに、俺の中にあるのはただの支配欲だ。

トリンとツアンの言った通り、友達だなんて思ってたんだ。本当に俺は最低だ。

エルメスは俺の信仰の対象そのもので、エルメスは俺の前ではないつも笑ってなきやいけなくて、俺の前でだけ泣いて、俺だけに怒って、俺だけを救う。

それこそが俺のエルメスであって、俺に向けられるものと同じものが、俺以外に向くのが死ぬほど嫌だ。

エルメスを笑わせていいのは俺だけ、エルメスを泣かせていいのは俺だけ、エルメスを怒らせていいのは俺だけ。エルメスを助けて守って、保護し、管理し、支配し、征服していいのは俺だけ。

もう、マジで他の奴らなんか死に絶えればいい。飛行機落ちろって本気で思った。

異常な執着と異常な嫉妬。

俺はなんて異常なんだ。怖ええー、俺。マジ変なところばっかジュリオ様に似てしまった。本当、ここに至って初めてジュリオ様を殺してよかったとすら思える。マジあの人のせいだ、全部。

ジュリオ様に奪われた俺の人生。普通の家庭、普通の家族、普通の友達、普通の環境、普通の人生。

エルメスに出会うまで、俺は異常な環境で異常な人生を歩んできた。でも、エルメスと出会って、俺の苦悩も呪いも何もかも、アイツが払拭してくれた。

アイツが友達になってくれて、普通の友達みてえに助けて、助け合って、ケンカして笑い合って。

吸血鬼だけど、アイツは俺の理想を、俺の憧れを再現して、俺の願いをすべて叶えてくれた。

エルメスを俺の神と言わず何と呼べばいい。

エルメスが幸せになるなら、俺は何だってやる、何にだってなつてやる。アイツが本当の、本来の神の姿に戻るのなら、俺は何でもする。

アイツは俺の、俺だけのものじゃなきゃいけない。

・・・また暴走した。本当、なんなの俺。そう言えば前にエルメスが、俺の理性のリミッター壊れてるとか言ってたな・・・確かにブツ壊れてつかも。マジ修理出そう・・・どこにだよ。

もう本当にさ、こればかりは完全に隠蔽する必要があると判断した。ていうか、頑張って健常者になる必要がある。

動機としては別にやましいところはないし、いや、やましいと言えばやましいか。そこはおいとして、エルメスが結果的に幸せになるなら、むしろ俺に任せとけて感じてはある。でも、人としてどうなのよっていう。

もしエルメスにこの事を感じかれたら、間違いなく軽蔑される。間違いなく嫌われる。そんなことになったら、俺シヨック死。本当、冗談抜きで死ぬ。マジで、冗談じゃねえ。

あ、ちなみにこれに関してはアーサーに見せる気はねえからな。コレ、ただの懺悔だから。

なら別に書く必要ねえだろってなるかもしんねえけど、どっかに吐き出しとかなきゃ頭バーンなるからな。一層異常になるぞ。

これ以上エスカレートしたら、エルメス連れ出して逃亡するぞ・  
いや、ウソ、冗談。これは本当に冗談。

とにかくそういうわけで、俺は考えを纏めるのに必死だったこともあって、隠蔽&健全者な俺に生まれ変わろうと、とりあえずエルメスを避けてた。

エルメスと離れて、俺にとってもエルメスにとってもお互いが「一番」でない状況を作り出すことが先決だと思ったから。

でも、その俺の行動が思わぬ結果を呼んだ。

今日バルコニーに出て煙草吸ってたら、突然、本当に突然ガラードとランスとシャンティに飛び蹴りされた。3人がかりで。

俺 「うお!?! 何!?! お前ら何すんだ!」

ガラード 「何すんだはこっちのセリフだ!」

俺 「は!?!」

シャンティ 「アンタ、ミナ様が一番大事なんじゃなかったのかよ!」

ランス 「エルメス様、泣いてるんだよ! カイが無視するから!」

ガラード 「なんで急にエルメスに冷たくすんの!?! 理由を言え!」



ああ、どうしよう、状況は分かったけど理由は絶対誰にも言えねえぞ。という逡巡と動揺を上回る歓喜。俺は状況を察した瞬間に、大喜びした。わーい、ヤッター。マジ最低。でも喜んでる場合じゃねえ。

俺 「え？ 理由？ えー・・・別にないけど」

シャンティ「理由もなくあの態度!？」

ランス 「自由にも程があるよ！ エルメス様の気持ちも考えろ！」

ガラード 「エルメス、泣いてたんだよ？ カイに嫌われたらどうしようって。カイに嫌われたら生きていけないって。エルメスに謝れ」

もう、俺にはコイツらが天使に見えた。エルメスが俺に嫌われることを恐怖してる、俺の存在に依存してる。その事をもたらしたコイツらに好きなだけ褒美をくれてやりたい。

あー、俺超幸せ。超嬉しい。ヤッター！

つてのを面に出すわけにもいかねえから、大人しくわかったって頷いてエルメスの所に行った。で、エルメスの隣に座って、ゴメンなって謝った。

「私の事、怒ってる？」

「いや、なんでもねえ。ゴメン、悪いのは俺だから」

「カイ、私の事嫌いになった？」

「そんなわけねえだろ。俺はお前が一番大事だから」

訪れる、最高の、至福の瞬間。エルメスは俺にすがりたいに抱き着いて、泣き出した。

「本当に？ 本当に？」

「本当に」

「ごめんなさい。もう我儘言わないから、カイのいう事ちゃんと聞くから、私を嫌いにならないで」

「バカ、俺がお前を嫌いになるはずないだろ」

「よかった、私カイに嫌われたと思って、嫌われたらどうしようって思ってた、私、カイに嫌われたら生きていけないから」

多分、俺は笑ってたと思う。俺のしたことはエルメスの俺への依存度を急激に高めて、エルメスの中での俺の重要度は生死を左右するほどになった。

その事に俺は幸福を感じて、笑いそうになるのをこらえるのに必死だった。

ああ、エルメスは健気だな。たまに同じことをやってやろうか。それとも、嫌いになるぞって脅迫したら、エルメスは……。

いや、落ち着け俺！ 俺って悪魔！ 最低！ 健常者になるんじゃないのかよ！ ここで喜んだらお終いだっての！ ここは反省するところ！

なんか妙な葛藤に苛まれた。ハア、健常者への道のりは、程遠いな。

俺は異常で、最高に、歪んでる。俺は、悪魔だ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

思えば、俺は昔からそうだった。

普段は誰にも関心を持たない。自分のことしか興味はない。だ  
だけど、特定の人物や感情、現象には異常なほど執着して盲信した。あ  
まりにも執着して、盲信しすぎて、自分をどうでもいいと思っ  
てしまっ程に。

ある時は神に、ある時はシュヴァリエ達に、ある時は栄誉や仕事  
に、ある時はジュリオ様に、そして今はエルメスに。

多分、それは俺にとっての現実逃避の一環なんだと思う。辛い現  
実から目を背けたくて、異常なほど特定の人や物事に執着する。そ  
れしか見えないように自分を固執させる。

この異常な本性は、俺の弱さそのものだ。

なーんで、こんな摩訶不思議なイケメンになったかなーと言う俺の悩みも知らず、エルメスはキ口と遊んでる。

いつそ能天気なアイツが羨ましいよ、全く。俺がおかしいわけだが、半分はお前のせいだぞコノヤロー。

気分的には俺はこんな本性に気付きたくはなかったけど、このままほっといたらヤバイことになってた気がしなくもない。

下手したら俺より先にエルメスや他の奴らに感付かれてた可能性もなきにしもあらず。今、この段階でブレーキかけられんなら、それに越したことはねえ。

俺の狂信の対象が他に移れば楽なんだけど。俺もなんかペットでも飼おうかな

ペットを溺愛する俺、気持ち悪い

！ダメだ、らしくねえ。向いてねえ。ペットはやめよう。

いやあ、しかしこれが愛情なら本当によかったっていうか、まだマシだったんだけど。残念ながら俺にはそれが理解できない。ただ、だからこそ最悪のパターンは回避できる。

今の俺に後から愛情なんて厄介なものが付属されたら、それこそ最悪だ。想像するだけで恐ろしい。もしその時アーサーがいなきや俺の天下、アーサーがいれば殺されて終わり。

そう考えると、マジで俺そう言うの理解できない人で本当に良かった。そこは異常でよかった。いや、良くねえ、良くねえよ。現状で妥協してんじゃねーよ。

いつからこんなカンジになっちまったのかはつきりわかんねえけど、少なくとも最初の内は単純に友達だと思ってたはずだ。

その頃に、戻りたい。

今、俺はエルメスを裏切ってる。エルメスを騙して、ウソをついてる。エルメスが友達だと思ってる俺は、こんな俺じゃない。

そうだ、本当の俺はこんな奴じゃない。こんな弱い奴じゃない。戻るんだ、強い俺に。エルメスの友達に、戻るんだ。

そこで俺は色々考えた結果、手っ取り早く元に戻る方法を発見した。そうだ、催眠術師を探そう。

この超面倒くせえ本性を消し去って戴こう。金と他人の力で俺の悩みは一発解消。うん、いいな、この方法は。

しかし、俺の面倒くさがりが意外な展開に発展した。

「エルメス、俺ちょっと出かけてくる」

「え？ どこいくの？」

「あー・・・人探し」

「クライドさん達探しに行くの!？」

「え、いや、えーと」

「私もいく!」

「え、ええー・・・」

なぜかクライドさんとボニーさんを探しに行くことになった。

「でも、どこから探せばいいかな？」

「え、あ、そうだな。とりあえず城に一旦行ってみるか？ 何か手がかりがあるかもしれないしねえし、もうそろそろ調査も済んだかもしれないし、ミラーカさんの事もあるし」

「うん！ そうだね！ そうしよう!」

元氣よく返事をしたエルメスが俺の手を握ると、気が付いたら目の前にはあの巨大な城。

「・・・お前、行くなら行くって言えよ。すげえビックリしたじゃねーか」

「あ、ゴメン」

一応周囲を警戒。人影、人の気配はなし。調査は終わったのか、今日はもう終わったのか。とにかく誰もいなくて安心した。

エルメスと改めてあの巨大な城を見上げる。石灰質の白い城壁は焼けて黒くなってるし、天守閣の辺りは爆発のせいで崩壊してる。あれだけエルメスが手を入れていた庭も踏み荒らされて、花壇や噴水、石像にもおびただしい数の弾痕。

城の有り様は、荒廃、この一言に尽きる。

3年近くもエルメス達とここで過ごした。楽しく、過ごしてた。3年かけて作り上げた城も庭も関係も信頼も、ジュリオ様に一夜にして滅ぼされた。

エルメスはかつて青いバラが権勢を誇っていた、今では枯れて荒れ果てた花壇の前に座り込んで、枯れたバラを一つ手に取った。

「青いバラは、ジュリオさんだったんだね」

「どういうことだ？」

「他人の都合で、勝手に作り替えられた。バラは青い色なんてきつと望んでなかったんだね。赤いまま、枯れたいと思ってたんだね」

アーサーによって恋人を奪われ、自らも吸血鬼になったジュリオ様は、せめて人間に戻りたいと渴望してた。

人間の事前勝手な夢のために赤を奪われ、青を組み込まれたこのバラも、ジュリオ様と同じことを考えてたんだらうか。



エルメスの隣にしゃがんでバラに手を触れると、かさり、と音を立てる。その中に茶色い蕾のようなものをみつけた。バラの、種子。

「そーかもな。でも、このバラから採れた種子は、んなこと思っ  
てねえよ」

俺は最近になってやっと受け入れられたけど、他の奴らは切り替えが早かったからなー。リオに至っては鉛玉で撃たれても怪我もしないって逆に喜んでたくらいだ。

今更、人間に帰ろうとは思わねえ。むしろ人間に戻ったら、エルメスの傍にいられなくなる。そっちのが願い下げ。

枯れたバラから見つけた種子をエルメスの手に渡すと、エルメスはその種子をぎゅっと握ってそっか、と笑った。

城に入ると中はもつと荒れてた。真っ黒で、焼け焦げた家財が散乱してた。

本当に戦争が起きたんだな、俺達は何もかも失ったんだな。

あの楽しかった日々も、使用人達も、エルメスの家族も、ジュリ才様も。

荒れた城内の静寂さが、一層寂しさを引き立てる。穴だらけでボロボロになったテーブルに目をやると、近くにはアンナさんが旦那さんの快気祝いにとくれた花瓶が割れて転がっている。

ふと、エルメスが再び俺の手を取ったかと思うと、次の瞬間にはインドの屋敷の自分の部屋に戻っていた。

「エルメス？」

「カイ、ごめん・・・私、まだ・・・」

エルメスは俺の手を握ったまま俯いて泣き出した。あの日、あの場所で真実を知らされて、あの瞬間から裏切られた。あの瞬間から、同居人が敵になった。いつまでも、裏切られたトラウマはエルメスに着いて回る。

あの城で3年も過ごして、3年分の楽しかった思い出は、あの一夜に塗り替えられた。あの城での思い出は、ほとんどが劫火に焼き尽くされた。

「どうして、どうして私はあの瞬間まで気づけなかったの・・・」

あの瞬間まで気付かせなかったのは、アーサーと俺たちの責任だ。仮に事前に知らせていたとしても、あの戦争を止めることは不可能だった。

きっと、アーサーとジュリオ様が再会した時点で、こうなる運命だったんだ。それでも思ってたなきゃ、この状況に耐えられない。

しばらく泣きすがっていたエルメスは、少ししてポツリと言った。

「ボニーさんとクライドさんの結婚式、楽しみにしてたのにな……」

拳式当日に起きた戦争。あの二人が恐らく一番残念だったに違いない。あの時

思い出した。

あの時、二人はサルーンに姿を現すことはなかった。呼びに行つたはずのシュヴァリエ達も何の報告もなかった。でも、確かあの時シュヴァリエ達には呼びに行く振りをしてあの二人を殺害しろ、と命令が下りてたはずだ。

まさか、シュヴァリエたちが殺したのか？ いや、それはあり得ない。じゃあ、既にあの二人も殺害されていたのか？ いや、でも直前までミラーカさんとアーサーが二人に着付けをしていたと言つてたし、何よりいくら城が広いからって銃声に気づかないはずはない。ならばサイレンサーを使ったのか？

でも、あの後シュヴァリエ達は何も言っていなかった。生きてるとも、死んでも。あの状況なら仕方がないといえなくもないし、何よりあの後もバタバタしてそれどころじゃなかったし。

今思うと、戦争が終わって逃走の準備をしているときも、俺はエルメスのことで頭がいっぱいでそこまで余裕がなかったけど、誰一人その話題を持ち出さなかったことが不思議で仕方がない。

これは、何か裏があるような気がするな。元々シュヴァリエ達はアーサーの命令でスパイ行為をしていたんなら、俺の知らない事実がまだあったとしても不思議じゃない。

絶対何かある。これはアーサーから俺への挑戦と見た。絶対暴く！

以上

【重要】アーサーへのクレーム報告 2件目

エルメスが落ち着いてから、あの時の状況をガラードに聞きに行った。

「あの時、呼びに行った。あの二人は？」

「実は俺達はアーサー様から二人を呼びに行く振りをして逃げろって言われてたんだ。でも、どうせならあの二人も一緒について思っ部屋に入ったんだけど・・・」

「・・・けど？」

「いなかった。どこを探しても、どこにもいなかった。姿も砂もなくて、生きてるのか死んでるのかも、俺にはわからない。そのことをあの状況で口に出すのはちょっと憚られたから、聞かれるまでは黙ってこうつてみんなと話したんだ」

「そうか、わかった。完全に生死不明か・・・いや、待て、呼びに行く「振り」？ アーサーがそう言ったのか？」

「そうだよ。で、そのまま逃げろって」

「どういうことだ、それはおかしい。」呼びに行きそのまま逃げろ

「じゃなく「振りをしてそのまま」？」

「本当に呼びに行く必要はない、そういうことか。なぜ、必要がない？ アーサーは、あの二人がいないことを知ってたのか？」

「いや、待て、よく思い出せ。いつからあの二人を見なかった？」

「いると思っ込んで、思い込まされていただけで、実は既にいなかったとしたら？」

「いつから・・・戦争の3日前から前日にかけて、アーサーとユアンも見かけなかった。」

「まさか、まさか！」

「いてもたってもいられなくて、ガラードの部屋を飛び出してすぐさまユアンの部屋に飛び込んだ。」

「コルア！ てめえ何隠してやがる！」

「は！？ いきなりなんだよ！」

「てめえ、アーサーに口止めされてんだろ」

「は？ 何を？」

「とぼけても無駄だ。ボニーさんとクライドさんを逃がしたんだろ」

「いや、俺知らねーし！」

「とぼけても無駄だった。俺はもうわかつちまったからな」

言いながら銃を取り出してユアンの眉間に突きつけた。

「オラ、吐け」

「マジ！ マジ知らないから！」

「俺が撃たねえとも思ってたんのか？ 死にたくなけりゃ、吐け」

「マジ副長勘弁しろよ！ 俺は本当に…ギャアア！」

いつまでも口を割らねえもんだから耳を撃った。耳から血を流して悶絶するユアンに再び銃を向ける。

「次は左だ。吐け」

「マジ副長、最悪だよ。無理だつて、アーサー様が一生誰にも言うなって言ってたんだぞ」

「心配すんな、俺も共犯になってやる。誰にも、エルメスにも言わねえ。お前一人で秘密を抱えんのは辛れえだろ」

「副長……」

「なるほどなー。つーか、実はエルメスと二人の捜索に行ったんだよ。いずれはまた探しに行きたいって言出すぞ」

「そうなんだよ。エルメスに限らずみんなだつて言い出しかねない

よな」

「どーすっかなー。その搜索が不毛だなんて俺らにはわかりきってるし、見つからなくて憔悴していくのを見るのもちよっとな」

「いっそ死んだことにしちゃうとか」

「それでエルメスが泣いたら、お前の言う彼女の前でお前のケツに操縦桿ブチ込むぞ」

「いっそ殺せよ。あ、じゃあ、こっ言うのは？ 例えば……」

「あ、それでいいな。それで行こう」

というわけで、エルメスとシュヴァリエ及びシャンティファミリも召集。

シャンティファミリーの奴らは仕方ないが、シュヴァリエの奴らは全員遊んでるか暇なくせしてブーブーうるせえ。

「黙れてめえら。今日は重大なお知らせだ。その機能不全な脳と耳をフル稼働してよく聞け」

「いーから勿体つけてねーでさっさと話せ」

「よし、パーシーは後で射殺な。私語厳禁。喋った奴から射殺する」  
「……」

やっと静かになった。さすが威厳の男、俺。ミスター管理職。

俺 「質問は後で受け付けるからとりあえず聞け。話はボニーさんとクライドさんについてだ」

ガラード「なんか手がかり掴めたの!？」



ガルフ 「二人はどこに!？」

俺 「あの日シユヴァリ工達で呼びに行ったときは既にもぬけの殻で、二人は生死不明だった。それもそのはず」

ガルフ 「シカトかよ・・・」

俺 「あの二人はとつくに城から逃走してた」

エルメス 「ウソ! でも衣装合わせとか打ち合わせとかしてたよ!

俺 「そーだな。二人の代理としてミラーカさんがな」

エルメス 「あ、そういえば・・・」

俺 「あの二人はアーサーの手引きでミラーカさんの協力の元、逃亡した」

シヤンティ 「じゃあ、お二人は・・・」

俺 「ああ、生きてるはずだ」

二人が生きている、その事に屋敷は歓喜に沸き立った。こんなにみんながみんな喜ぶのって初めてだな、と感慨に浸ったのも束の間、歓喜の波は質問の津波になって押し寄せてきた。

ガライド 「つーかなんで副長知ってんの？」

ガルフ 「さては以前から知ってやがったな!」

俺 「や、俺もさっき知った」

そう言っつてユアンを前に引き立てると、全員がユアンに視線を注いだ。

リオ 「え? ユアン、知ってたのか?」

ユアン 「いや、俺もよく知らない」

デйна 「は？ 全然意味わかんないんだけど」

俺 「だからとりあえず聞けって。ユアンは当事者だ。でもよく知らない、これは本当だ」

トリス 「いや、だから意味わかんないって」

俺 「アーサーの不思議能力の一つ、魔眼に最近までヤラれてた」

エルメス 「え！？ そうだったの!？」

俺 「そ。コイツはアーサーに操られてあの二人の逃走を手伝った。その事だけを最近思い出したが、その内容はスッポリ抜けたみたいに覚えてなくて、どこにいるのかもわかんねえらしい。な？」

ユアン 「そう。あの日の数日前に、アーサー様とミラー力さんに呼ばれて部屋に入ったところまでは覚えてる。気付いたら車を運転して城に帰ってるところで、その間の事は断片的にほんの少ししか思い出せない」

ベデイ 「なんでわざわざそんなことまでして・・・」

俺 「さーな。アーサーが何考えてるかわかんねえのは、今に始まったことじゃねえだろ」

エルメス 「確かにね・・・」

アーサーが何考えてるかわかんねえ、てのはものすごく説得力あるな。みんな納得して一気に質問の数が減った。

パーシー 「覚えてることって？ 例えば？」

ユアン 「二人の入った棺を運んでるとこ、飛行機を操縦してるとこ・・・くらいかな」

ランス 「逃がしたことしか本当にわからないんですね。飛行機という事は、イタリアや近隣国ではないんでしょうね」

ユアン 「多分。でもそこがどこかは覚えてないな」

エルメス「うーん、だとしたらアメリカかなあ。でもアーサーさん世界中うろついてたみたいだし、わかんないや」

ユアン「一つ大事なことを覚えてるよ」

ガラード「なに？」

ユアン「アーサー様はあの二人に「待ってる」って言ってた。きつと帰ってきてから、アーサー様がちゃんと迎えに行くつもりなんだよ」

エルメス「アーサーさん、人を待たせるの好きだな・・・」

俺「全くだ。でも、わざわざ二人にもそう言ったって事は、ほぼ確実に帰ってくるって事だ。今あの二人をやみくもに探しても世界は広いし、見つからねえだろ。あの二人の無事が分かってるなら、大人しくアーサーの帰りを待とう」

エルメス「そっかあ。でも、生きてるんだね、良かった。本当に、本当に・・・良かった」

ユアンと俺の話聞いて安堵したのか、エルメスは嬉しそうにしながら泣きはじめた。普通の泣き顔とは違う、エルメスの嬉し泣きは何度見てもいいもんだ。

クライドさんとボニーさんが生きていることが、どれほどエルメスの救いになったか計り知れない。アーサーが確実に戻ってくるといふ事が、どれほどエルメスを救ったか知れない。

アーサーは本当にムカつくな。

ちなみに、この召集に至るまでの裏話。

俺の脅迫と甘言に、渋々ユアンは口を開いた。

「クリスマススイブの3日前、あの二人を連れて、逃がした」

「じゃあ、あの二人は生きてるんだな」

「ああ、生きてる」

「二人はどこだ？」

「それも言わなきゃダメ？」

「当然」

「わわわかった、言うから銃を下ろしてください。あの二人は、日本だよ」

「日本!？」

「そ。アーサー様のご友人の方に預けてある」

「日本・・・なるほど。日本なら吸血鬼は気軽に出入りできねえもんな。それでお前だったわけか。飛行機操縦できるから」

「そういうこと。二人は何も知らねえよ。何も知らされずに彼女の元へ連れてって、アーサー様が戻っていらしてから迎えに行くことになってる」

「つーことはお前、アーサーがほぼ確実に帰ってくることも知ってたんだな」

「・・・ま、そういうことになるかな」

アーサー、俺らはどんだけアンタに踊らされてりゃいいんですか。アンタはあと何個策を立ててんだ！ なんだコレは、謎解きはディナーのあとにしる！

「そか、わかった。撃って悪かったな」

「いいけど、マジで黙っててよ」

「わかってるって。で、その彼女っつーのは信用できんのか」

「できるよ！ アーサー様の友達なんだぞ！ それにあのほうがいい人だ！ 綺麗だし！」

「うお、びっくりした。急に興奮すんな。っつか信用に顔は関係ねーだろ」

「でも彼女はいい人だ！」

「ハイハイ、わかった。お前がそこまで言っなら信用する」

俺の失言に異常に興奮するユアン。知らねえ間にその彼女とフラグが立っていたようだ。

それは置いていて、マジでアーサー・・・アンタはわざとやってんのか。俺らとエルメスがアンタの掌で躍り狂ってんのがそんなに楽しいか。

俺も異常だけど、アンタの秘密主義と悪巧みと性格の悪さは群を抜いて異常だ。

っつーことは、だ。この事を知ってるのは俺とユアンだけ。エルメスは勿論皆にも秘密。なぜ秘密にする必要があるのかはわからない。エルメスの事を思えばすぐにでも話して日本に迎えに行きたいが、残念ながら複雑な山道だったせいでユアンは場所を覚えてねえ。それにアーサーがいない状態で海を渡ることには不安がないわけでもない。

どうせ行けないなら下手に話さない方がいいか。下手に話して探して見つからなかったら余計にエルメスの不安を煽りかねないし、日本だとエルメスの時効だのなんだのしがらみも多いから厄介なことになりかねない。

ん、もしかしてそれで日本を選んだのか。そりゃ、日本ならキリスト教国じゃねえからヴァチカンの人間だって気安くは入れない。吸血鬼も簡単に入れるような国じゃない。潜伏先ならトリンとツァンという選択肢もあるのに、それを差し置いて日本にしたのはその為か？

何より探し出せたとしても、アーサーのいない状態で「宿敵の身内」である俺らがエルメスの傍にいたことを、あの二人と例の彼女がすんなり納得するかが疑問だ。アーサーの説明がなきゃ俺らがどれほど説得しても、策略だと疑われても仕方がない。

あ、それで秘密なのか。なるほど。さすがアーサー、ムカつくぜ。

ていう結果にたどり着いて、真実は闇に葬って生きてることだけを伝えることにした。本当ならすぐにも二人を迎えに行つてエルメスを安心させてやりたい。

でも、エルメスは日本でのこともあるし、ヴァチカンの奴らが日本に近寄る外国人を警戒していないという保証もない。アーサーみたいに魔眼で操れるわけでもねえしな。

だけど、二人が生きているというだけでエルメスはメチャクチャ喜んでたし、俺もすげえ安心した。

つくづくアーサーの策略に躍らせられんのはものすげえムカつくし腹が立つけど、今回はかりは、感謝だ。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

時計の針と同じように時間も動かせたらいいと思うのは、不毛な願いだ。

「バレンタインおめでとう」

そう言ったエルメスとシャンティにプレゼントをもらった。二人はそう言いながら全員にプレゼントを配っている。

それに首を傾げる俺ら。おめでとうっておかしくねーか？ それになんでバレンタインで？ いや、確かに今日はバレンタインだが。

「なんでお前らが贈るんだよ？」

「あのねー、日本では女の子が男の子にチョコと一緒に愛を伝える日なの。外国では逆だって日本を出てから初めて知ったよ。みんなには本当にお世話になってるから、日頃の感謝を込めてみた！」

「ふーん、なんでチョコ？」



「さあ？ 日本人は企業戦略に騙されやすいんだと思う」  
「フーかコレ、中身チヨコなら受け取り拒否」  
「拒否しないでよ！ チヨコなわけないでしょ！ もう！」  
「冗談だつて」

正直、エルメスから貰ったもんなら中身がセミの抜け殻でもいいんだが、いや、よくねえか。

とりあえず、エルメスを虐めておかないと気が済まない。笑いながら箱を開けてみると、中からはシルバーの腕時計が出てきた。

「お、カッコイイ」

「カッコイイ？ 気に入ってくれた？」

「ああ」

「えへへ、シュヴァリエはシルバーで、シャンティファミリーはゴールドで、みんなお揃いな！」

「い、いい年こいてお揃いかよ・・・」

「みんな仲良し！ ちゃんと使つてね！」

周りを見てみると、まんまとお揃い。ガロードとランス以外はみんなアラフォーだつてのに、全員お揃いとか嫌がらせか。

まあ、エルメスだしなあ、せつかくくれたんだし、しょうがねえよなあ、と渋々時計を装着。そしたら、ガルフが覗き込んできた。

「あれ？ カイだけフェースの色違っじゃん」

「あ？ お前の見して」

「ホラ」

俺のフェースの色は黒で、よく見るとゴルフや他の奴らは白だった。

「カイは筆頭だし、リーダーってわかりやすいように！」

「誰にわかりやすくする必要が？」

「・・・それもそっか」

思わずツツコンでしまったが、俺超嬉しい。俺だけ特別扱い！  
ヒヤッホウ！ なんとかバンザイしたい衝動を抑えてエルメスに向  
き直った。

「エルメス、ありがとう」

「やっとお礼言ってくれた！ 遅いよ！」

「ああ、ワリーワリー」

むくれるエルメスに思わずニヤケて謝ったら、またバカどもが騒  
ぎ出す。

パーシー「ちよっと、御覧なさい。副長ったらあのニヤケ面」

トリス「ありや嬉しくて仕方がないんですわよ」

キルシュ「そうですね。なんてったって、自分だけ特別ですもの  
ね」

リオ「大好きなエルちゃんからの特別に愛のこもったプレゼン

ト、そりゃニヤケもしますわよ」

マジ、アイツら・・・という怒りを通り越して、俺は戦々恐々。何故バレた！？ いつの間に俺の本心は白日の下に晒されたんだ！？ 大喜びから一瞬で目が覚めた。

ダイナ 「シスコンのお兄様にとっては至上の喜びでしょうよ」

あ、そっちか。じゃあいいや。いや、よくねえけど。でもバレるくらいなら、シスコンだと思われた方がまだマシだ。

いや、良く考えたら全部シスコンでなんとか通りそつな気がする。いざとなったら、もうそれで行こう。

いや、もしかして本当にシスコン的思想なのか。そうと言われるばそんな気もする。いや、ていうかそもそも妹じゃねえけど。友達なんだけど。つーか、シスコンで何？ なんかワケわかんなくなってきた。

俺 「君たち、ちよつといいかい？」

リオ 「あら、エルメスのお兄様、なにかしら？」

俺 「とりあえずその貴婦人キャラはよせ」

ダイナ 「面白いじゃん」

俺 「全然。不快にして不愉快。つーかそもそもシスコンってなんだっけ」

俺の質問にみんなは、ん？ と首をひねりながら考え始めた。よく考えたら俺らみんな男兄弟みたいなもんだし、シスコンなんて概念がよくわかんねえ。

ガルフ 「とりあえず、妹大好きでー」

キルシュ 「妹を独占したくてー」

パーシー 「妹にベツタリ」

ユアン 「妹に寄りつく奴が許せなくてー」

ペレアス 「でも北都はクリシュナさん許してたから、認めた相手はいいんだろうな」

ベディ 「てことは、妹の相手は自分より上位ならいいのか」

トリス 「えつとねー、シスターコンプレックスは、特に「姉妹に対する恋愛的感情」や「自分のものにしたいたい独占欲」のある兄弟、と言う図式で捉えられる。byウイキペディア」

ガラード 「へえ、そうなんだ。え、ていうか恋愛的感情？」

ダイナ 「っーか「的」ってなに？」

俺 「的もなにも、それはねえんだけど」

ランス 「それ「は」？ それ以外ならあるの？」

俺 「・・・・・・ねえよ」

ガルフ 「何、その間」

え、ちよつと待て、ちよつと待て。全部該当するんだけど。俺ってシスコンだったの？ これってシスコンだったの？

いやでも、エルメス妹じゃねえし。兄妹みたいとは言われるけど、妹じゃねえし。友達だし。じゃあ、なんだ。

ペレアス「アラアラ、悩んじゃってるよ」

ガルフ 「誰がどう見たってシスコンだっつもの。そうじゃなきゃただの異常者だよな」

さすがガルフ、俺の副官だけあつて的確な事言いやがる！ 俺思わず冷や汗かいたやつた！ あー、いつそのことホントに兄妹ならシスコンで済んだものを！ 結局俺はただの異常者じゃねえか！ そうだ、もう認めよう。それを認めて楽になろう。そうしよう。

俺 「ひ、百歩譲ってシスコンだとしても、俺は別に異常じゃねえから」

ガルフ 「は？ シスコンな時点で異常者だ」

俺 「な！ ちょ、じゃあ北都も異常じゃねえか！」

ガルフ 「北都は開き直ったからいいんじゃないかねえの」

ランス 「ていうか、北都くんも、って言った時点で認めちゃってるよね」

ベディ 「確かに。副長も開き直れば？」

開き直れば・・・うわあ、なんて誘惑だ。開き直ったら楽だろうな。開き直りてえー！

でも、俺は明らかに常軌を逸してる。女にすら嫉妬してる位だ。北都の比じゃねえ。完全に開き直ったら、俺は多分エルメスを監禁する。やっぱりシスコンなんてレベルじゃねえ。開き直りは、マズイ。

ガルフ「おやおや、また悩みだしたよ」  
ダイナ「しょうがない兄ちゃんだねえ」  
ベディ「こりやエルメスも大変・・・あれ？ エルメスは？」  
トリス「あれ？ ついさつきまでいたのに」

俺が悩んでると言うのに、エルメスは俺を置いてどこかへ行ってしまった。本当ヒドイ、あの子。俺もコイツらもほったらかしかよ。勝手にやってるってか。なんかすげえムカつくんだけど！

「チクシヨー！ エルメエエス！ どこだあああ！」  
「やっぱシスコンじゃねえか」  
「うるせー！」

一言エルメスに文句を言ってやろうと、エルメスを探し回ってみたものの、屋敷の中にはいない。

まさか一人で城に行ったのか！？ いや、さすがにそんな暴挙はいくらアイツでも・・・やりかねええ！

一抹の不安を抱えつつ屋敷の外も探し回ってみると、いた。

いつもの様にクリシュナさんの墓に花を供えて、プラス今日は小さな箱も添えてあつて。その前にエルメスがしゃがみこんでいた。そうか、今日はバレンタインだ。日本では女が男にチョコと一緒に愛を伝える日なんだから、さつき言ってたな。

すっかりイライラが収まってしまった俺は、エルメスの隣に座った。

「クリシュナさん、きつと今頃天使にメチャクチャ自慢してんじやねーの」

「アハハ、なにそれ」

「愛妻家にとつちや、嫁からのプレゼントは至上の喜びだろ」

「だったら私も嬉しいな」

「間違いねーよ」

少しの間笑ってたエルメスは、段々悲しそうな表情になって涙を零した。

「クリシュナがね、最後に言ったの。幸せになってって、愛してるよって。でも、それって残酷じゃない？ クリシュナがいなくて、愛する人がいなくて、どうやってたら幸せになれるんだろっね」

クリシュナさんはエルメスにとって幸せの象徴そのもの。愛の象徴そのもの。どちらもその愛情の全てを注いでいたのに、あの日に断絶させられた。アーサーとエルメスを守るために、自分の命が削られるとわかっていて、その命を使い果たした。

クリシュナさんが命を使い果たしてでも、守りたいと思った女。その女が泣いているのを見て、きつとさっきまで有頂天だっただろ。うクリシュナさんも、今は悲しい顔をしているんだろっ。

「クリシユナさんは、本当にお前を愛してたんだなあ」

「でも、死んじゃったら意味ない、傍にいてくれなきゃ意味ないよ・

・」

「んなこと言うな。意味ならちゃんとある」

「え？ なに？」

「クリシユナさんはお前を本当に愛してたから、幸せになってほし  
いて思ってたんだろ。生きてなきゃ幸せにはなれねえだろ。だから  
お前をアーサーに託した。アーサーもお前を愛してたから、俺らに  
お前を託した。クリシユナさんの願いがあったから、それが今繋が  
ってるんだろ。クリシユナさんはいなくなっちゃったけど、クリシ  
ユナさんの愛が生きてるから、お前が生きてるんだろ」

「うん、そうだね・・・だけど、やっぱり寂しいよ。私はいつま  
で、こんな思いをするのかな」

さすがにこれ以上はもう、俺には無理だ。それはどうしてもエル  
メス自身が乗り越えなきゃいけないことだ。

エルメスがクリシユナさんの死と向き合って想い続ける覚悟をす  
るか、新しく恋をするか、クリシユナさんを忘れるか。

早くアーサーが帰ってきて、エルメスの傍にいてくれればいいの  
に。いや、この際エルメスが愛した相手なら誰でもいい、ランスで  
もガロードでもアジメールでも。エルメスを愛して、エルメスが愛  
した人が隣にいてくれたら、幸せになれるのに。

こんな別れ方をしたら、ジュリオ様やアーサーの様に100年や



200年では忘れられないかもしれないな。それほど長い月日を、エルメスは苦しみ続けなきゃいけないかもしれない。

そこに至るまで、一体どれほどの時を刻まなきゃいけないだろう。時間は、戻すことはもちろん、進める事も出来ない。時間は時計と同じ動きをしてはくれないんだな。

「お前はきつと、クリシュナさんの事で長い時間をかけて、悩んで苦しむんだろうな」

「・・・そうだね。ずっとずっとこんな思いをするんだろうね」

「でも、場合によっちゃそれもあつという間だ」

「どうして？」

「お前がそのまま足踏みしてたら時間は大して進まねえだろうけど、お前が進んだらその分時間も早く過ぎるんじゃないかねえの」

そう言ったらなんでか知らんがエルメスは驚いた顔をして、笑い出した。

「なに？　なんか俺変なこと言った？」

「アハハ、違うの。クリシュナと同じようなこと言うんだなと思っ  
て」

「クリシュナさんが前なんか言ったのか？」

「うん。いつまでも苦しいって言ってちゃダメだよって。前に進みなさいって。カイにまで言われると思わなくてびっくりしちゃったよ」

「そりゃお前、俺が正しいって事だな」

「そうかもね。カイはそう言うところクリシュナに似てるね」

「・・・アーサーに似てるつつつたり、ジュリオ様だったり、クリシユナさんだったり。俺は何者だよ」

「二重人格かと思ってたけど、多重人格だったんだ」

「お前そんなこと思ってたの」

「思ってた」

どうやら俺は既に異常者だと思われていたらしい。軽くショックなんだけど。折角人が慰めてるつつーのに、本当にこのお嬢ちゃん  
はヒドイ子だ。

ま、でも、結果的に涙が止まって今笑ってくれてるから、まあ、  
いつか。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

もうそろそろ延滞料金100万超えるぞ。早く戻ってこねえと借金地獄だぞ。ご利用は計画的に。

「まさかの3か月経過」

「もう春だね・・・どうしよう」

「つーか俺今日で45じゃん！怖！」

「え？ カイ今日が誕生日なの？ 45歳？」

「あ、しまった」

「別に隠すことでもないじゃん」

「いや、ミステリアスな方がいいだろ、なんか」

「別に？ あ、誕生日おめでとう」

「ハア、この歳になると嬉しくねえ・・・」

ウソです。エルメスに祝ってもらえたら嬉しいです。超嬉しいです。フィーと溜息を吐きながらエルメスと未だ帰らぬアーサーに思いを馳せてたら、急にシュヴァリエ達が笑い出した。

「マジウケる！ これ見て！」

そうやってトリスが見せてきたパソコンの画面。

3月25日生まれ 牡羊座の基本性格

ポジティブキャラクター

- ・ 開拓精神、あらゆることに関するパイオニアに成り得る人物。
- ・ 新しい事を始めるエネルギーに満ちている。
- ・ 人々を牽引していく力、リーダーシップを発揮することができる。
- ・ パワフルでダイナミックな実行力。
- ・ 旺盛な競争心、負けず嫌い。
- ・ どんな分野においても自分が一番になるとする。勝つまで戦つ。
- ・ 瞬発力、素早く機敏に行動する。
- ・ 判断が早い。
- ・ 勇敢、多少の危険や障害はものともしないで行動することができる。
- ・ 独立的、人に頼る事は考えない。自分で考え自分で行動する。
- ・ スポーツマンとしての才能。
- ・ 現実主義者。いざという時に冷静に行動できる。

「おお、まさしくじゃねえか。つーか俺牡羊座だったのか」

「自分の星座位把握してないの？」  
「興味ねえ」  
「それより、ネガティブの方見てよ」

### ネガティブイメージ

- ・ 独善的、自分の行動は常に正しいと信じている。
- ・ おせっかい。
- ・ せっかちで、早く結果を出そうとする。むやみに他人を急がせる。
- ・ あわてもの、判断も行動も素早いが、そそっかしい。
- ・ 勘違いなことをしてかしがち。
- ・ 衝動的、粗野、短気。すぐにカツとなる傾向。
- ・ 尊大。自分はこの世で一番偉いと思っていることがある。
- ・ 自己中心的、宇宙は自分を中心にまわっていると考えている。
- ・ 他人の気持ちを考えられない。無愛想でぶっきらぼう。
- ・ 中途半端、飽きっぽい。
- ・ やりかけたままの事がそのままになりがち。すぐにやめてしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「アハハハハ！ すごーい！ まるっきりこれだよね！」  
「星座占いバカにしたた！ マジウケるんだけど！」

全員大爆笑しやがってム力つく・・・微妙に思い当たるところがあるから余計ム力つく。チクショ！。大体占いなんで、70億いる人間をたったの12種類やそこから大別しようとする事自体がナ

ンセンスなんだよ！

「くっだらねえ。バカじゃねーの。こんな誰にでもあてはまるよ  
うにできてんだよ」

「出た、独善的」

「うるせえよ！」

「出た、短気」

「・・・ムカツク。じゃあホラ、エルメスの見せてみる。お前何？」

「あ、見たい見たいー！」

「だから何座だよ」

「出た、せつかち」

「黙れ！」

「私てんびん座！」

「ハイハイ、てんびん座ね」

10月1日生まれ てんびん座の基本性格

天秤座のポジティブキャラクター

- ・協調性、あらゆる人々との調和を大切にする。
- ・説得力がある。信用されやすい人物。友人が多い。
- ・友愛的、平和主義。人々との良好な人間関係を築く。
- ・外見には気を使う。洗練されたセンスの良いファッション。
- ・正義、フェアプレイの精神を持つ。
- ・芸術的センスがある。ロマンチスト。
- ・如才のなさ、知的で上品な印象を人に与える。
- ・コミュニケーション能力が高く、社交的、外交的。
- ・優しさ、共感的。機転がきく。

- ・なにごととも人とわかちあうことができる。
- ・常に強いパートナーシップを必要としている。

「微妙じゃねーか？ 知的で上品？ 外見に気を遣って、ソレ？」  
「ヒドイ！ 私だって色々勉強してるもん！ カイより絶対物知り！」

「知識と知性は別モンだろ」

「ムカツク・・・」

「じゃあ、ネガティブみてみよう」

#### 天秤座のネガティブキャラクター

- ・気紛れ。
- ・策略的な愛情、人に媚びる傾向。
- ・論争好き。自分を正当化する傾向。
- ・平和至上主義、面倒なことや不快なことには向かっていかない。
- ・波風をたてるのを嫌う。問題をためこむ。
- ・怠け者。贅沢好き。
- ・優柔不断、決断が遅い。諦めやすさ。
- ・ナルシスト、虚栄心から自己陶醉に陥る傾向。
- ・孤独には耐えられない。

「あー、わかるわかる。お前媚びるよな。気紛れだし、面倒事から逃げたがるし、優柔不断で金もかかるし論争好きだな」

「えー？ 媚びてるわけじゃないよ！ 少なくともナルシストじゃない！」

「必死にアーサーに媚びてご機嫌取ってたじゃねえか。電波がナルシストのいい証拠」

「電波じゃないもん！ でも、孤独には耐えられないカモ！ ねえ、これってネガティブなことなの？」

「少なくとも無理やり同室を強いられてる俺にしてみれば、ネガティブ以外の何物でもねーな」

「いい加減それは諦めてよ！ ケチ！」

「我儘に大人しく従ってやってんだから文句位言わせるよ。お前が贅沢言うな」

「むきー！ ム力つく！ なんでネガティブの時だけ食いつくのよ！」

「あー、うるせえ。キャンキャン言うな」

「なんだかんだで合ってるっちゃあ、合ってるか。俺のは合ってるけど。」

それからしばらくみんなの占いを見てワアワア騒いでたら、エルメスがアーサーのを見たいと言い出した。

「アーサーの誕生日知ってるのか？」

「確かこの前調べた時に見たような・・・えーと確かさそり座だったよ！」

「じゃあさそり座見てみるね」

11月10日生まれ さそり座の基本性格



さそり座のポジティブキャラクター

- ・公正で誠実な性質をもつ。
- ・深くて激しい感情の持ち主。
- ・内面的なエネルギーが人一倍強い。驚くべき精神力。
- ・カリスマ的な存在感。強い意志、信念を持つ。
- ・実行力がある。約束は必ず履行する人物。
- ・決断的、合理的、内向的、情熱的、優れたセックスアピール。
- ・神秘的で魅力的。
- ・鋭い洞察力、直感的、気付き、第六感が冴えている。
- ・高い潜在能力。負けず嫌い。
- ・困難、苦境にあっても、かならず這い上がる。
- ・経営的手腕がある。

「うーん、合ってるっちゃあ合ってるか」

「公正で誠実・・・？」

「元王様なら経営手腕もありそうだよな」

「約束守るしね」

「情は深いかもな」

「神秘的で魅力的だな」

「アーサーさんちって美形の家系らしいよ」

「マジか」

「カリスマと言えばカリスマだ」

「情熱的で、セックスアピールってエロオヤジって意味？」

「それは違・・・いや、そうかも」

「ついポジティブ要素がいいトコ取り過ぎじゃね？」

「ではお待ちかね。ネガティブ見てみよう」

さそり座のネガティブキャラクター

- ・執念深い。復讐心を燃やす。
- ・良い事も悪い事もいつまでも覚えている。
- ・妥協しない。
- ・支配的、独断的人物。権力を好む。
- ・なかなか他人と親しくなれない。
- ・なかなか他人を信用しない。
- ・不寛容、神経質、秘密主義。
- ・向こう見ず、暴力的。
- ・策略的、疑い深さ、嫉妬深い。
- ・自己抑制がいきすぎることがある。

「あー、確かに。わかるわかる。策略的、懐疑的、嫉妬深いなんてドンピシャじゃねえか」

「支配的で独断的もだよ。いつも勝手に決めて決定押し付けるし」

「不寛容で秘密主義だし暴力的だよな」

「親しくなれないっつーか、なるうとしないよな」

「自己抑制？・・・ああ、エルメスに関しては抑制してたか。しなくていいのに」

「・・・私は有難かったけどね。執念深い、これもだよ。あの人すーごい根に持つから」

「あー、良くも悪くも妥協しねーよな。神経質で完璧主義」

アーサーも例にもれず、ネガティブキャラクターをいじくられて悪口大会になった。怒るなよ、全部事実だ。星座占い、あなどりが

たし。俺のは合ってねえけど。

アーサーがさっさと帰ってこねえから、みんなで占いなんかやって陰口をたたく羽目になるんだぞ。自業自得だ。

トリス達の思いつきのせいで、一時的に占いが大流行したぞ。占いなんて良いとこだけ信じて悪いとこ忘れちまえば良い気もするけど。つーか、見てもすぐ忘れるし、あんまり意味のあるもんじゃねえよな。

ま、でも、どの占いにしてもアンタのが一番盛り上がった。アンタが謎の男過ぎて、みんなアンタの本質に興味津々だったぞ。

いない間に、どんどん暴かれてくな。ご愁傷様。それが嫌ならさっさと帰ってこい。あ、金も忘れんなよ。

「あはははは！ カイ見て！ 牡羊座の人が12星座中一番占いの結果が合ってないって反論するんだって！」

アーサーのみならず占いにまで踊らされてる俺って一体・・・

以上



拝啓 アーサーさん

んもう！ 3か月ですよ！ もう春じゃないですか！ 待つって決めたけど、正直いつまで待てばいいのかも全然わかんなくて、漠然と待つって決めたもんだから段々不安になってきましたよ。

そう言えば、今日はカイの誕生日でした。別にお祝いとかしなかったけど。それで、トリスが星座占いを見つけてカイの基本性格みたいなのを見たらあまりにもピッタリで、みんなで大笑いしました。

良いところは、パワフルでリーダーシップがあって決断力があって、独立心があって勇敢とか。で、悪い所がそっかしくて、無愛想で、自己中で、短気。ね、ピッタリですよ。本人は絶対間違ってるって言い張ってましたけど。

それで、牡羊座の人は12星座中一番占い結果が合っていないって反発するんだって教えてあげたらすごく悔しそうな顔してました。本当あの人面白いですよ。

私も占い見てもらったんですけど、いいところに常にパートナー

シップを必要としてるって書いてて、悪い所に孤独に耐えられないって書いてました。これは本当に、正解だと思いました。

よくよく思い返してみると、最初の頃はアーサーさんに頼って、クリシユナと出会ってからは、クリシユナにベツタリで、今はカイにまわりついてます。

本当に私って、誰かが傍にいなきゃ生きていけないんですね。なんか妙に実感しちゃいました。

ていうか私、本当にウザいのかも・・・この前カイが私を避けてるって書きましたけど、その後仲直りできたけど理由は教えてくれなかったんですね。なんでもないとか言って。

この占いを見て思ったけど、もしかしてウザいのが嫌だったのかも。よく考えたら、孤独に耐えられない私と、孤独を愛するカイじや相性最悪じゃないですか。カイにしてみたら相当ウザいのかも・・・まあ、でもいいですよ、別に。私は寂しいんだもん。

でね、でね、アーサーさんのも見ちゃいました。アーサーさんは11月10日生まれだからさそり座でした。

で、さそり座のいいところは情が深くて、約束守って、精神力が強くて、何事からも逃げなくて、神秘的なカリスマ。悪い所は、独断的で、支配的で、策略家で、暴力的で、秘密主義で、妥協しなくて、嫉妬深くて、執念深い。

アーサーさんのもピツタリでみんなで超盛り上がりました。

アーサーさんの占いを見て、思いました。あの戦いするとき、私が

逃げまじょうって言ったら、アーサーさんは言いましたよね。それは許されない、それはまるで敗北主義者のようだって。

あれほど大変で辛い状況なのに、そこから一步も逃げようとして立ち向かうなんて、アーサーさんは本当に強い人ですね。

なのに、なのに！ ボニーさんとクライドさんを逃がしたでしょ！　なんで教えてくれなかったんですか！　もう、ヒドイ！　秘密主義も大概にしてくださいよ！　もう！

しかもユアンを魔眼で操ったりなんかして！　もう、本当アーサーさんのやることには着いて行けませんよお・・・

でも、すつごく嬉しかった。二人が生きてるってカイとユアンから聞いたとき、本当に光明が見えました。本当、アーサーさんでかした！　って思いました。

アーサーさん、あの二人を逃がしてくれて、本当に、本当に、ありがとうございます。

どこにいるのかわからないし、いつ会えるのかもわからないけど、生きてればそのうちきつと会える。アーサーさんが帰ってきたら、二人にも会える。

ますますアーサーさんが恋しくなりました。ますますアーサーさんの帰りが待ち遠しくなりました。嬉しいのに余計ソワソワしちゃ

って、正直複雑な気分です。

でも、アーサーさんが教えてくれてなかったから、カイと二人で城まで探しに行ったんですからね！

それで城の有様があまりにも酷くて、あの日の事を思い出して辛くなってすぐ帰っちゃって。泣いちゃったじゃないですか。

これが本当のくたびれもうけの骨折り損ですよ。全くもう。

カイも言ってたけど、本当にアーサーさんの企みには振り回されっぱなしです。踊らされっぱなしです。もう本当、いい加減にしてください。一喜一憂するのも疲れるんですからね！

さすがにもう、これ以上の事はないだろうと思うけど、もう本当勘弁してください。

でも、本当に一喜一憂のふり幅がこれほど大きい事ってなかったと思います。二人が生死不明なことにすぐ落ち込んだのに、二人が生きてるってわかっただけで大ジャンプですよ。

人を絶望にも陥れて、人をこれほど歓喜させることって人の生き死に位なものですよね。

先月、バレンタインの時にクリシュナのお墓詣りついでに、クリ



シユナにもプレゼントあげてたんです。いつも毎年クリシユナが私にくれたり、愛してるって言うてくれたから、今年は私から。

その時カイが来て、一緒にお墓参りしてたらあの日の事を思い出して悲しくなって泣いちゃって。その時にカイが言うてくれました。

クリシユナは私を愛してたから幸せになつてほしくて、生きてなきや幸せにはなれなくて、だから私をアーサーさんに託して、アーサーさんも同じように思つてたから俺らに託したんだぞって。

クリシユナの愛が生きてるから、それが繋がつて私が生きてるんだって。

その時は悲しくて素直にその言葉を聞けなかつたけど、いつまでも足踏みしないで、お前が進めば時間もその分早く過ぎるって言うてくれて、なんか無愛想なクリシユナと話してるみたいでおかしくなつちやいました。

それでちよつと元気が出て、頑張らなきゃって思いました。クリシユナの、今でも生きている愛を、それほどの愛を無駄にしちゃいけないなって。頑張つて幸せになれる様に私も努力しなきゃって思いました。

今はまだやつぱり私の心の中は、あの日の事で、悲しみの青で染まっています。

でも、ボニーさんとクライドさんが生きてた。アーサーさんが帰つてきてくれるってわかつた。カイやシャンティ達が傍にいてくれ

るから、安心できる。

ちよつとずつだけど、心の中は青ばっかりじゃなくなってきました。私をもつと頑張つて元気になったら、もつと青は薄くなるんじゃないかなつて思えます。

私の色は、やっぱり青なんだと思います。カイは、黒かな。ガラードは白。ランスは・・・バイオレット。シャンティはオレンジっぽい。アーサーさんは、やっぱり赤でしょ。

みんなが傍にいてくれて、ゆっくり平和に過ごしていけたら、きっと私の心の中は万華鏡ですよ。

でも、アーサーさんが帰ってきたら全部真っ赤になっちゃうかも。それはそれでコワイ。

でも、帰つてこなくて今みたいにずっとカイに引っ付いてたら真っ黒になるかも。それもそれでコワイ。

赤が加わつたらそれだけですごく明るく華やかになります。赤が入つたらボニーさんの黄色とクライドさんはブラウンかな。それも加わると思うと楽しみ。

早く帰つてきて、色を添えてください。

敬具



宣誓書

何がそんなに面白いのか、エルメスは食い入るように見つめている。ランスも一緒に。

283

「相変わらず手際良いねえ」

「さすがに唯一の取り柄だけあるね」

「ランス、撃ち殺されてえのか」

「やだなー、冗談じゃん」

エルメスとランスは俺が愛用してる銃「ファントム」を整備するのずっと眺めてる。俺的には何がそんなに面白いのかわからんけども、二人はずっと人形劇でも見る子供みてえにガン見してる。

「私に組立させて！」  
「ヤダ、お前絶対壊す」  
「壊さないよ！」  
「信用ならん。それに俺はコイツを他人に触られんのがヤなの」  
「ちえっ、ケチ」  
「ケチじゃねえ」

コイツに触らせて銃が暴発でもしたらコトだ。エルメスならそう言う事をやりかねない。俺はまだマシだけど、ランスは確実に死ぬ。そこまで発想のおよばねえ残念な脳のエルメスには、とてもじゃねえけど触らせるわけにはいかん。

エルメスの我儘を突っぱねて溜息を吐く俺に、興味津々の目を向けてランスが尋ねてきた。

「ねーねー、その銃何年くらい使ってるの？」  
「確かまだ2年くらいか。コイツで7代目」  
「そんなに壊れるもんなの？」  
「使用頻度がハンパなかったからな」  
「ふーん。それお気に入り？」  
「俺には使い勝手がいいからな。名前も俺に似合ってるし」  
「ああ、確かにカイは怪人だよな」  
「お前が言うな」  
「言うよ」

ムカつくガキだ。いつか撃ってやる。イラつく俺の気を知ってか知らずか、俺とランスの会話を見てエルメスは異様にニコニコして

やがる。まあ、エルメスの事だ。何考えてるか想像はつく。

「カイとランスは仲良し親子みたいだね」

ホラ来た。絶対そう来ると思った。ある程度想像のつく言葉に、盛大に溜息を吐く俺とは対照的にランスは文句を並べたてる。

「エルメス様、冗談じゃありませんよ。こんな野蛮な男と僕のどこをどう見たら仲良しに見えると言っんですか」

「丸見えだよ」

「見えませんよ！ 失敬な！」

「お前の発言の方が失敬だろうが」

「ハン、カイに敬意を払う義理なんてないもんね！」

「お前ね、一応俺上司なんだけど？」

「以前はね！ 今は違うじゃん！ 僕はカイの部下じゃなくてエルメス様の部下だから！ 勘違いすんな！」

「このクソガキが・・・喰われてえのか」

「これだから野蛮な男は嫌いなんだよ。ねえ？ エルメス様？」

「そうだよ。カイ、あんまりランスを怖がらせるような事言っちゃダメじゃん」

「お前な・・・」

このクソガキのどこがビビってるように見えるんだ。

「へへーんだ、喰えるもんなら喰ってみろ！ エルメス様に嫌われなくても知らないよ！」

って顔に書いてんぞ。つたく、どんな教育を施したらこんなクソガキに育つんだ。親の顔が見てみた・・・こいつを育てたの、俺じやん。じゃあ、俺のせいじゃねえ。コイツが勝手にこうなったんだ。そうだ、そうに決まってる。

しかし、なんでエルメスはコイツの腹黒さに一切気付かねえんだよ。どこまでバカなんだ。それとも気付いててほっとしてるのか。

「私には優しいから別にいいや！」

とか思ってたそうだな。あ、それだ。絶対それだ。エルメスは変なところで計算高いところがあるから間違いないえ。

溜息を吐きながら銃を磨く俺に、再びランスが質問してきた。

「ねーねー、何歳から銃使ったの？」

「最初は10歳」

「え！？ そんな子供の時から？」

「まあ、ガキの頃から仕込んで一流の兵器に育て上げるのが、ジュリオ様の目論見だったからな」

「嫌じゃなかったの？」

「銃を使うこと自体は、別に」

「人を殺すのはヤだった？」

「最初はな。もう、慣れた」

「慣れたのは、いいこと？」

「さあな」

マセガキが。微妙に嫌な質問してきやがる。つーか、そんなこと聞かれる俺の気持ちも考えろつての。第一、んなこと聞いてどうすんだよ。

と、思ってたら一つの可能性を見出した。

「ランス、お前はダメだ」

「・・・なにがさ」

「お前には一生銃を触らせねえし、教えねえ」

「なんで！」

「お前は銃を使えるようになってエルメスを守りたい、とか思ってるんだろうけど、これじゃエルメスは守れねえぞ」

「守れるよ！ 僕が強くなって守るもん！」

「お前が強くなるのはいい。でも、銃はダメ」

「だからなんでだよ！」

「これは人殺しの道具だからだ。人を殺すもので、人を守ろうなんて滑稽だな」

「・・・・・・」

「お前はいずれエルメスに吸血鬼化してもらうんだろ。実際それで十分すぎるほど強くなれるし、後はガルフやエルメスにでも格闘訓練つけてもらえ」

「・・・・・・ケチ」

「ケチじゃねえ」

ランスにまでケチ呼ばわり。なんだ、俺はそんなにケチか。いや、ケチじゃねえ。このバカ二人が我儘なだけだ。俺とランスの会話を



聞いてエルメスはまたニコニコしてる。何考えてニコニコしてるのか今回もある程度は想像つく。

俺とエルメスの飯を取りに行くつって部屋からランスが出て行ったあと、エルメスは嬉しそうに言った。

「カイは優しいね」

ホラ来たー。またしても的外れな感想で勝手に悦に浸りやがって。エルメスの中で俺は一体どんなキャラクターを構成してんだ。

「優しくねえし、優しさで言っでんじゃねえよ」

「でも、ランスに銃を使って欲しくないっていうのは、ランスに悩んだり苦しんだりしてほしくなかったからでしょ？」

「違う。銃に慣れたら、撃つことに慣れたら、その内人殺しにも慣れる。俺はそれが嫌だっただけだ」

「それはランスの為にでしょ？」

「いや、俺の為。俺の理想をランスに押し付けてるだけだ」

「でも、結果的にそれがランスの為になるなら、やっぱりそれは優しさだよ」

なんて平和な脳してやがる。コイツに掛かればある程度の奴は善人扱いだ。ある意味恐ろしい。

多分コイツは

「私って周りに恵まれてる！ 私の周りっていい人ばかり！」

とか、幸せなことを思ってるんだろうけど、実際そんな事ねえ。そんな事じゃその内また誰かに騙されたり裏切られるぞ。エルメスのこういうところも非常に危険だ。

ジュリオ様の事も、トリンの時も、エルメスは人を信じすぎて傷ついた。それが悪い事だとは思わないけど、そのせいでエルメスを傷つけるなら、もう少し人を疑う事も知らなきゃいけない気もするんだけど。

「お前さあ、その誰でもいい人に見えるのは何とかならねえの」

「ならない！ だっていい人だよ、カイは」

「いい人じゃねえし、仮にいい人だとしてもお前にだけだ」

「じゃあいいじゃん」

「.....」

ダメだ、反論すら思いつかねえ。つーか呆れて物も言えねえんだけど。結局エルメスは自分に優しくしてくれるなら、その本質がどうであれ全然構わねえのか。それってどうなんだ。

エルメスは周りの人間をみんな大事にするけど、それは周りがエルメスに優しくするからだ。もし、今誰かがエルメスに優しくしなくなつて、他人みたいになつたらエルメスはどうするんだらう。

「なあ、お前はさ、人殺しに慣れたか？」

「慣れたね」

「でも最初は嫌だったろ」

「最初は嫌だったよ。でも、慣れちゃった。その事はすごく残念に思うけど、仕方ないよね。だって全然知らない人の命は、重く感じないんだもん。それは誰だってそうじゃない？」

「・・・そうだな。俺も、そうだ」

変わってしまったのは、俺だけじゃなかったらしい。エルメスの性格からして、最初はすごく嫌だったはずだ。その為にアーサーとケンカしたって聞いたことがある。それなのに、今は笑って慣れたと言う。

銃が殺すのは他人だけじゃなくて、使う人の心も殺してしまうんだな。つーか、俺はそれを知ってたけど。

もしあの戦争が起きなくて、エルメスがずっと俺らの隊長として人殺しを続けてたら、いずれはエルメスも俺みたいになってたのか。

狂った化け物は、俺とアーサーで十分だ。今ならまだエルメスは引き返せる。これから戦いのない世界で生きて行けば、エルメスは昔のエルメスに戻るんじゃないかと思う。

エルメスは博愛主義で、それは深いものだけど、狭い。きっと昔は今よりもっとと広がった。そのせいで傷ついてきたこともあっただろう。でも、俺はそっちの方がいいと思う。もし、今後そう言うことが起きそうになったら、俺がなんとかすりゃいいだけの話だ。

俺の心は化け物だ。俺には「ファントム」が似合う。でも、ランスやエルメスに「ファントム」は似合わねえ。

アーサーに一方的に約束しよう。俺はエルメスを化け物にはしない。アイツを俺やアーサーのような化け物にはしない。アイツの博愛主義を本物にしてやる。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

連戦連敗。ただいま10連敗中。どんだけだよ。

「チェックメイト」

「イヤー！ また負けた！」

「エルメス様、相変わらずチェス弱過ぎです」

「ランスが強いんだよ」

「確かにそうですが、僕も手加減してるんですけど」

「そんな真実聞きたくなかった・・・」

11歳のガキにチェスで全敗と言う結果に打ちひしがれるエルメス。今まで何度も挑んで一度も勝てたことがないらしい。やっぱバカだ。

チェスは知恵を図るゲーム。正直エルメスに一番向いてないゲームと言える。エルメスにはジェンガあたりがお似合いだ。

「お前向いてねーんだよ。諦める」

「だって1回くらい勝ちたいじゃん」

「手加減してもらって負けてる奴がよく言うよ。お前にはムリムリ」  
「じゃあカイなら勝てるの？」

エルメスの言葉にランスはギツと俺を睨みつける。なんだそれは、やる気満々か。

「ランスごときに俺が負けるわけねえだろ」

「じゃあ私の代わりにやって！」

「いーけど、圧倒的に勝つたりしたらランス泣くかもしんねえしなあ」

「誰が！ 絶対勝つ！」

「言っとくけど手加減しねえぞ」

「望むところだ！」

というわけで、なんか俺とランスで対決することになった。

ランスは11歳にしてエルメスを全敗させるだけあって、なかなかやりこんでいるらしい。まあ、エルメスが弱いだけだけど。で、結果。

「チエックメイト」

「うわー！ ウソだ！」

「ハハハハ、俺に勝とうなんて100年早ええ」

「カイすごーい！ 強いね！」

「いや、ランスもなかなか強い。でも、俺の方がもつと強い」

「マジあり得ない・・・こんな野蛮人に・・・」

「言っとくが俺は頭脳派だ。お前はやる方だけど、狡猾さに欠けるな。まだまだガキだ」

「くっそー！」

「親子対決はやっぱりパパの勝ちだな」

「親子対決」？ 親子じゃねえ。ふざけんな。でも悔しがるランス、いいもの見れた。

俺とランスのチェス勝負を面白がっていたの間にかシュヴァリエの奴らやシャンティ達も観戦してた。

「ていうか、カイは大人げないな。ランス相手に本気出して」  
「うるせえ。俺はウサギを狩るのにも全力を尽くす獅子のような男なの」

「場合によってはそれってバカだよ」

「うるっせえな！ バカ女に言われる筋合いねえんだよ！」

「自分だってバカのくせに！ ミナ様の命令だってロクに聞けないバカじゃん！」

「聞いているよ！ つーかエルメスのは命令じゃなくてただの我儘じゃねえか！ 俺は十分に聞いてますけど！」

「全然足りない。ミナ様の前に跪いて靴舐める」

「舐めるか！ ふざけんな！」

「俺らは靴以外ならどこでも舐めるよ」

「うわ！ やめろ、お前ら！ エルメスを変な目で見るな！」

「アンタの部下も最低だね」

「も」じゃねえ、「は」だろ！」  
「も」だよ」

全く、ムカつくバカ女とバカなシュヴァリエのせいで勝利の余韻はどっか行っちゃまったよ。エルメスは突然のセクハラ発言に困ってるし。可哀想に。

エルメスをディフェンスしながらシュヴァリエ達に向いた。とりあえず、コイツらにもう一度釘を刺しておかねば。

「テメエら、俺のエルメスに指一本でも触れたらブツ殺すぞ」

「副長のじゃねえじゃん」

「あ、間違えた。アーサーのエルメスに・・・」

「今更言い直しても遅ええよ」

痛恨のミス！ 一番言つてはいけないことを公然と言い放つてしまった俺、残念！ 一瞬激しく動揺したけど、今後の展開は予想できた。次のコイツらの言葉に期待。

「極度のシスコンだな」

ホラ来た！ よっしゃ！ 神様ありがとう！ 思わずガッツポーズしそうになる俺。

シュヴァリエ達は一齐にシスコンコールを送り始めるけど、今回ばかりは全許し。敢えてその言葉を飲み込もう。



「カイ、もう否定しないの?」

シスコン呼ばわりされて安心する俺に、微妙に痛いところを突いてきやがる俺のエルメス。が、そこも計算済みだ。

「いや、認めてねえけど。いい加減反論するのに疲れたから、もう好きにさせる。勝手に言ってるやいいんじゃない」

「ああ、そうだね」

クリアー! さつすが俺! なんで俺こんなに機転がきくんたる、本当。マジ俺の脳は完璧だな。本当神はスゲエな。俺のような完璧な存在を作り出すなんて、本当俺スゲエ。

しかし、エルメスは俺の脳を凌駕するほどの爆弾を投下する。

「ねえ、私カイなの?」

「え! い、え、えー・・・いや、違ええよ。お前はアーサーのだ」

「でもさつき俺のつて言った」

「あー・・・それはお前アレだよ。俺の友達ってことだ」

「そうなの?」

「そうだ。つーかそれ以外に何があるわけ?」

「・・・まあ、そうですね」

「そうですよ」

うつわ、微妙。エルメスは「なんつか釈然としないなあ」みたいな納得できないみたい顔してやがる。

チクシヨ、俺はまだ修行が足りないのか。人生経験と言う名の修行が足りないのか。もう45だというのにまだ足りてねえのか。つーか、良く考えたら今までこんなトラブルなかったからなあ。しようがねえ。俺は悪くねえ。ジュリオ様のせいだ。

困ったことが起きたら全部ジュリオ様のせいだ。これでオツケイ。

とりあえず、場の空気を入れ替える為に以前から気になってたことをシャンティに相談してみることにした。

「つーかお前らさあ、いつまでミナって呼ぶ気だよ。もう今はエルメスなんだからエルメスって呼べ。アーサーも」

「なんでアンタにそんな事言われなきゃいけないわけ？ ミナ様はミナ様じゃん」

「そりゃそうだけど。状況的に見てそれがマズそうだから言ってるの」

「なんでマズイの？」

「今俺らは逃亡中の身。エルメス達がインドにいた頃の事は調査でわかってる。一応死んだことにしてるし、城を焼いてきたから報告書なんかも燃えちまってると思うが、逃亡したことが発覚しないと面白い切れない。もし逃亡先としてここが怪しいってことになって、そんな時調査員たちが俺達とアーサーやエルメスの名を聞いたら、お前らごと抹殺だ」

「それはいくらなんでも心配しすぎじゃないの？」

「しすぎるに越したことはねえ。一応データも消したらいいし、その可能性は低いとは思っけど念のためだ。イスラムの奴らの事もあるし、こっちは生死がかかってんだからな」

「うーん、そっか。それもそうだな、わかった」

何とかシャンティが納得してくれた。ずっとこの事は気にかかってたけど、アイツらはミナと伯爵を崇拜してたわけだし、その気持ちが無下にするのも可哀想な気はしたからな。

でも、命には代えられねえし、何よりシャンティ達まで死ぬようなことになったら大変どころの騒ぎじゃねえ。

とりあえず、納得してくれてよかった、と思ってたらシャンティが何か思いついたような顔をしてもう一度俺に振り向いた。

「でもさ、いくら名前変えたって、顔変えなきゃ見つかったらアウトじゃん？」

「そう、確かにそうなんだよな。でもこん中で顔変えられんのはエルメスとリオしかいねえからなあ」

「え？ リオ顔変えられたの？」

「エルメス知らなかったっけ？ なんか知らんけどアイツはそれができたから、潜入とかさせてただけ」

「あー、そうだったんだ。知らなかった」

「それよりどうすっかなあ。うーん、なんとか頑張って変身能力を開発するか・・・難しいな。じゃあ整形？ いや、俺の美しい顔に傷をつけるなんざ許せん。大体手術中に元に戻りそうだな」

「何言ってるのアンタ・・・ていうか、アンタが目立つんだよ」

「だろうな。主に俺が美しいから」

「違ええよ！ 全員金髪だからだよ！」

「ああ、そういえば。じゃあとりあえず髪色を変えよう」

というわけで、何色がいいかそれぞれアンケートを取ること。

エルメスとリオは除外。ランスもまだ子供だし除外。俺を含め、残りの10人の意見を紙に書かせた。

俺 「黒が1人、ブラウン1人、ライトブラウン3人、ベージュ2人、アツシユ? こいつは却下」

トリス 「なんで!？」

俺 「俺とカブるからダメ。それともお前俺に憧れてんの？」

トリス 「違ええし! もう、じゃあベージュでいい!」

俺 「じゃあベージュ3人・・・オイ、ブリーチって書いた奴誰だ」

パーシー 「俺俺! プラチナブロンド目指す!」

俺 「テメエ相変わらずクリシユナさん目指してんのか。身の程を知れつつたのを忘れたか」

パーシー 「ええ!?! 違うのに・・・じゃあもう黒でいい」

俺 「えれえ極端だな。じゃ、黒が2と。とりあえずこれで全員だな」

ペレアス 「ん? 数が合わねえぞ? あと一人足りなくないか？」

俺 「ああ、俺は現状維持。俺はこの髪の色気に入ってるから」  
キルシユ 「ええ!?! 自分ばっかズリー!」

俺 「うるせえ。俺は筆頭だからいいんだよ。さて、じゃあ明日にでも買いに行くとするか。オイ、チャラ男3兄弟、お前ら暇だろ。明日行つて来い」

キルシユ 「自分だつてヒマなくせに・・・」

シユヴァリエ達はなんかブーブー言つてたが知つたこつちやねえ。一人くらい現状維持がいても問題ねえ。それが俺なら尚更問題ねえ。でも、この3人に行かせたのは俺の大失策だった。

翌日、屋敷に立ち込める異臭から逃げるように部屋から出てエルメスと二人リビングでテレビを見てみると、急にチャラ男3兄弟が全速力で降りてきた。

キルシュ「敵を補足！ 確保！」

パーシー「ヤー！」

リオ「神妙にお縄に着きやがれ！」

俺「は！？ うわ、離せええええ！」

3兄弟に強制連行されてキルシュの部屋に連れ込まれた俺は、パーシーとリオに床に組み伏せられるという無残な姿に。

「てめーら何すんだ！ 離せ！」

「フハハハ、副長殿、そろそろ年貢の納め時ですよ」

そう言ったキルシュがプラスチックの容器を一生懸命シャカシャカ振っている。

「え、ちょ、マジ、マジやめる」

「さーてコレは何色でしょう？ 当てたらやめてもいいけど」

「ブラウン！」

「残念！」

「ギヤアアアア！」

キルシュはそりやもう嬉しそうに笑いながら答えを外した俺の頭の上に、ドバドバとカラーリング剤をブツかけた。

ああ、これがついてしまったら染めねえわけにいかねえじゃねえか。チクシヨ、クツソー！ くせえええ！

そして放置すること30分後。

キルシュ「さあ、カイクンお風呂いこつかあ」

パーシー「お兄ちゃん達がキレーキレーしてあげるからねー」

俺「テメエらマジ覚えてろよ、マジぶつ殺す」

相変わらず捕まったまま今度は風呂場に強制連行。浴室に入ると、そのままシャワーをぶっかけられる。

リオ「ちよつと、俺にも水が飛ぶんだけど」

俺「つーか普通頭にだけかけるだろ！ 服ビショビショじゃ

ねえか！ 着替え持って来い！」

キルシュ「自分で取りに行けば？」

俺「マジ殺す……って、あー！ 服に色移ってんじゃねー

か！ 俺のアルマーニ……テメエらマジ……マジ殺す！」

パーシー「ハイハイ、シャンプーするからじつとして。お客様おかゆいところございませんかー？」

俺「お前らの存在が齒がゆいわ！」

捕まったまま頭まで洗われた上にドライヤーまで丁寧に掛けら

れた。ドライヤーの風になびく前髪を見て俺超シヨックを受ける。

俺 「マジ・・・黒？」

リオ 「カッコいいよ」

キルシュ 「似合ってる似合ってる」

パーシー 「すげえ副長つばい。超ロツク」

俺 「あり得ねえ・・・黒とかマジあり得ねえ。確かに俺はロツクでニヒルなイケメンだけど、黒はねえよ。黒はねえ」

キルシュ 「イヤイヤ、俺の見立てに狂いはなかったね」

俺 「主犯はお前か。覚えとけよ」

で、そのまま引きずられて再びリビングへ。未だテレビに夢中なエルメスの隣に放り投げて、3兄弟は全力でその場から逃走した。

「クソ！ アイツらブツ殺す！」

すぐに追いかけてようとして起き上がると、エルメスに腕を掴まれた。

「カイも髪染めたの？」

「アイツらに染められたんだよ！」

「カッコいいよ」

「そりゃ俺は何してもカッコいいけど！ でも黒は俺の中では想定外だ！ 黒はねえ！」

「そんなことないよ。似合ってるよ、カッコいいよ」

「・・・そーか？」

「うん。こっちの方がカイっぱくて好き」

俺、撃沈。さすが媚びる女。男の喜びポイントをよくわかってる。あ、なるほど。アーサーはこの手管にやられたな。なるほど、良くわかった。

とりあえず、エルメスに免じて3バカトリオは許してやることにした。で、服を着替えて再びリビングに降りると、他の染めた奴らもエルメスに報告していたようだ。

「みんなカツコイイ！ ガラードはブラウンの方が似合うよー」

「そう？ ありがとう」

あのアマ！ 誰にでも言いやがってムカつく！ なんて打算的でズルい女だ！

瞬間的に相当キレて階段の手すりをボコボコにしてたら、後ろからランスが下りてきた。

「あれ？ カイも染めたの？」

「不本意ながらな！」

「ふーん、似合ってるよ。超ダーク」

「ダーク！？」

「うん、すごい悪者っぽい」

なんだろう、今日は本当になんなんだろう。なんで俺はこんなに



イライラさせられるんだろう。

微妙に反論する気力も起きなくて、ランスに手を引かれてリビングに降りると、シユヴァリエ達からもダークだの悪人だの怖いだの言われる始末。しかも最終的にそれが

「副長似合っー！」

どういうことだよ。悪人ぽいのが似合っってどういうことだよ。俺は天使だぞ。ふざけんな。

「まあ、カイ、そんなに落ち込むことないじゃない」

「落ち込んでねえよ！ 怒ってんだよ！」

「ちゃんと似合ってるよ？」

「それがムカつくんだよ！」

「なんで？ ちよいワルっぽくてカッコイイよ」

「・・・ん？」

「なんか黒の方がミステリアスっぽくて、カッコイイ」

「まあ、俺は何してもカッコいいからな」

さすがエルメス。物は言いようとはこの事か。

悪人？ ちよいワル ○

という図式が俺の中で確立してしまった。

キルシュ「ププ、見ろよ。あれ照れてんだぜ」

リオ 「俺らのお陰で大好きな妹ちゃんにカッコいいって言って

もらえたわけだし」

パーシー「むしろ俺らご褒美貰わなきゃいけないんじゃないんじゃん」

俺 「そーだな。礼はキツチり返してやる」

3兄弟 「ギヤアアアア！」

やっぱり許せなかったからとりあえず殴った。次はコイツらピンクとかにしてやる。

「これでみんな変身完了だね。でも、くさい」

顔の前でパタパタ手を振るエルメスに、リアルに落ち込んだ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

バルコニーで煙草を吸いながら、春の夜長に花壇の手入れをするエルメスを眺める俺。

「春になったら植えてみようと思ったの！」

そう言って、城に行った時に俺が渡したあの青い薔薇の種子を握って、外に飛び出していった。

空いたスペースを見つけてせっせと種を植えていくエルメス。種の数はそう多くはない。元々弱い品種だし芽が出るかもわからないけど、エルメスが一生懸命作業する姿を見ると、芽が出て欲しいなと思う。

煙草を消して、再び火をつけようとする火が見当たらない。あれ？ どこやったっけ？ とポケットをパタパタ叩いていたら、ハイ、と目の間に火が出てきた。それに俺超ビックリ。

目の前には、蝶のような羽根を背中に生やして、指先から炎を出すエルメスがバルコニーの手すりに腰かけて微笑んでいた。

「この、化け物が！ ビックリすんじゃないか！」

「ヒ、ヒドイ・・・」

「あ、でも火は貰う。お前便利だな」

「もう本当ヒドイ！」

そう言っただけでエルメスが手を引つ込めようとしたから引つ掴んで火をつけると、エルメスは悔しそうな顔をした。

「もう！ 私は親切でやってるのに！ 文句ばかり！ 便利とかヒドイ！」

「あーワリーワリー」

「・・・謝る気ないよね」

「んなことねえよ。その羽根、綺麗だな」

「そう？ ありがとう」

一瞬でご機嫌を回復したおバカなエルメス。エルメスの体を反転させて羽根をよく見ると、黒地に青と黄色の模様。

「揚羽蝶か？」

「そうだよ。私は青が似合っただけで言ってもらえたし、でも北都の黄

色の羽根も捨てがたいし、クリシュナの黒い羽根もカッコよかつたし。どうしよつかなくて思ってたら、さっき目の前を蝶々が飛んでっつて、これだ！と思って」

「ふーん、でもアーサーは羽根なくても飛べたじゃねえか。お前はソレできねえの？」

「できるよ。斥力を発生させて後はサイコキネシス応用で。でも、羽根に慣れてるから」

「ふーん、意味わからん」

「あはは、カイのバーカ」

「お前ほどじゃねえよ、バーカ。あ、飛んでるとこ見せる」

「きやああ！」

ふと、飛んでる姿が見てみたいと思っつて、手すりに腰かけてたエルメスを突き飛ばすと、そのまま地面まで落ちていった。

ええー、なんで落ちるんだよ。意味わかんねえ。何のために羽根生やしたんだよ。

なかば呆れながら地面を覗くと、ムクリと起き上ったエルメスは怒った顔をしてヒラヒラと戻ってきた。

「ヒドイ！ なにすんのよ！」

「つーか何で落ちてんだよ。飛べばいいだろ」

「急に突き落すからビックリしたんじゃない！」

「その羽根いらなくね？」

「いるよ！ もう、バカ！」

「お前がな」

エルメスはパタパタと滞空しながらキャンキャン吠えている。とりあえず、飛んでる姿を見れたからそれで満足。でもそんなエルメスを見て、飛びながら怒ってるエルメスがなんか面白くて、思わず笑ってしまった。

「何笑ってるのよ」

「いや、綺麗だなと思って」

「ウソばかり！ 明らかにそう言う笑い方じゃなかったよ！」

「イヤイヤ、ホント」

「もう、絶対ウソ！」

怒ったエルメスはそのまま再び花壇にヒラヒラと戻って行った。

春の月の下、ひらりと舞うように飛んでいるエルメスを見て、思わず口にした。

「綺麗だな」

「そうだね」

「うお！？」

まさか返事が返ってくると思わずに、超ビックリして横を見ると、いつの間にかシャンティが隣にいて、ニヤニヤ笑ってた。

「おま・・・心臓から口が飛び出るかと思ったじゃねーか」

「ソレ逆ね」

「そんぐれえビックリしたんだよ」

「ははは、だろうね。綺麗なエルメス様に釘づけだったもんね」  
「うるせえ。っーかなんか用か。エルメスならまだ作業中だ」  
「いや、さっきエルメス様が落ちてきたから何事かと思って」  
「ああ・・・なんか落ちてたな」  
「カイがなんかしたんだろ」  
「俺が？ まさか。何か知らねえけど勝手に落ちてた」  
「いくらエルメス様でも勝手には落ちねえだろ」

全く猜疑心の強い女だ。俺がこれほど知らねえつつってのに。  
まあ、俺が突き落としたんだけど。  
疑惑のまなざしを向けていたシャンティは少しすると諦めたのか、  
エルメスに視線を向けた。

「エルメス様、よく笑うようになったな」  
「そうだな」  
「よく怒るようにもなったし」  
「そうだな」  
「今は泣いてる？」  
「たまにな」  
「そう。アンタの前では泣くんだな」  
「お前の前でも泣くだろ」  
「最近は泣かない」  
「ふーん」  
「だからアタシ、アンタがムカつく」  
「はあ？」  
「お休み」  
「は？」

よし、シャンティの二つ名は「インドの嵐」だ。全然意味わからん。突然話を振ってきて俺を混乱に陥れてさっさと消えやがった。なんなんだあの女は。一方的にムカつくって言い捨てて、理由も言わずさっさといなくなりやがって。

でも、シャンティと話して俺はスゲエ嬉しかった。エルメスが俺の前でしか泣かないことが。確実に本当のエルメスを独占しているという事が。

こつこつ事で喜ぶべきじゃないって自制心ブレーキが機能しない。エルメスにとって俺が特別であるという事が、俺にとってはそれほど重要なことなんだろう。

さっきのシャンティとの話を思い起こして、突然安堵した。

ああ、良かった。俺は異常者じゃなかったんだ。

シャンティはエルメスが俺の前でしか泣かないから、俺にムカついたって言った。それは、俺と同じじゃないか。自分がしたい事を自分にできなくて、他人に先を越された。シャンティのは俺に対する嫉妬だ。

そう思い至って安堵する。良かった、俺だけじゃなくて。シャンティもそうだって事は世の中の他人にもそういう奴らがいるに違いない。良かった、俺は異常者じゃないんだ。

つーことはシャンティはナカーマ！でも、俺の方がランキングは上！イヤッホウ！



風呂から上がって血を飲み終わって、くわえ煙草しながら廊下を歩いてたら、同じく風呂上りのエルメスに遭遇。

「なんかちょっとカラーリング剤落ちっちゃった？」

「ああ、頭洗うたびに黒い汁が出るな」

「真っ黒の方がいいのにー」

「鴉の濡れ羽色と言え」

「なんか気持ち悪い」

「うるせえ」

エルメスのせいでさっきまでのウキウキ気分はちよつと消沈。まあ、いつものことだけど。

寝室に入る前にもかいバルコニーで寝る前ラスト煙草を吸いに出た。一応これはエルメスとランスとアーサーへの配慮だ。アーサーが帰ってきて煙草くせえつつて殺されないように、というのが一番の理由だが。

火をつけて微妙に紺色になった空を見つめてたら、エルメスも外に出てきた。

「さっきシャンティと何話してたの？」

「ああ、お前が落ちてきたのにビックリしたとか何とか」

「それでなんて言ったの？」

「俺は知らねえつつた」

「よくそんな平然とウソを・・・」

「エルメスが勝手に落ちたとも言った」

「・・・ヒドイ」

俺に蔑みの視線をぶつけてくれるこのお嬢ちゃんを虐めるのはマジ楽しい。俺の日課の一つでもある。エルメス虐めに始まり、エルメス虐めに終わる日常、素晴らしい。そして素敵な俺は最後にこう来る。

「それと、ひらひら飛んでるエルメスが綺麗だとも言った」

そう言うてにっこり。するとさっきまで俺を侮蔑の眼差しで見ていたエルメスは、嬉しそうに笑った。マジバカ！ 単純！ コイツ面白っ！

心の中で大爆笑する俺の顔を覗き込んできて、ホントに？ ホントに？ と、エルメスはウザい。

「本当だつて。シャンティに聞いてみるよ」

「じゃあ聞いてくる！」

「バカ、今頃寝てんだから邪魔すんな」

「あ、そっか」

走り出そうとするエルメスの首根っこを？まえて諭すと、すぐに引き下がった。そのままエルメスを寝室まで引きずって行くこうとすると、エルメス大暴れ。

「もー！ 私猫じゃないよ！」

「ああ、犬だっけ」

「違うよ！ 私が主人でしょ！ ご主人様に無礼は許さないわよ！  
・・・わっ！」

カツコつけて俺に背を向けた瞬間に、半開きになっていた寝室のドアに激しく頭をぶつけるエルメス。マジ最高、何なのコイツ。さすがはバカの象徴、やることが違う。

「ああ、お前はなんて可愛い奴なんだ」

「それって、褒めてんの？」

「当たり前だろ。エルメス、なんでお前はいつも俺のハートを驚掴みにするんだ」

「くっ・・・ムカつく」

「エルメス、俺はもうお前の虜だよ。お前は最高だ。最高にラブリーなバカだ」

「むきー！ ムカつくー！」

悔しそうに顔を真っ赤にするエルメスと対照的に俺メチャクチャ上機嫌。ああ、楽しい、楽しすぎる。今日の俺最高にハッピー。

「お静かに。ランスが起きてしまいます」

「むう・・・ていうか、何そのキャラ」

「ご主人様に忠誠を尽くすのがシュヴァリエの役目ですから」

「ムカつく・・・」

「あまり興奮なさると寝つきが悪くなりますよ。さあ、今日は私と一緒に寝ましようか」

「え？ いいの？」

「勿論です。今日はご主人様のお陰ですこぶる機嫌がいいので、私の機嫌を損ねないうちに言う事を聞いた方がよろしいかと思ひますが」

「え？ う、うん。ありがとう」

「結構です。本当に今日は最高に上機嫌ですので、一晩中可愛がつて差し上げますよ」

「なんかヤダ！」

「冗談に決まってるんだろ。うるせえな。棺で寝ろ」

「あ、ウソウソ！ ゴメン！」

「ハハハ。はー、やっぱお前面白い、最高」

「やっぱムカつく・・・」

「お休み」

「・・・お休み」

ここまで大満足して寝たのはインド来て初だ。いや、人生初と言つても過言じゃない。素晴らしい。さすがは俺のエルメスだ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

昨夜は大変ご機嫌麗しく速攻就寝した俺だったが、目覚めた瞬間から意気消沈。

「なにその手。どけるよ」

寝てる間にいつの間にか腕枕してエルメスを抱っこしてたらしい。ランスは俺のベッドの脇に仁王立ちして、その手をグイッと払いのける。

「何って言われても、寝てる間の事まで責任持てるかよ」

「折角、最近時々だけどエルメス様が棺でお休みになれるようになったのに、カイが過保護にするとまた逆戻りじゃんか」

「お前嫉妬だけのくせにそんだけ正論吐けるなんて大したガキだな」

エルメスを起こさないようにそうつと腕を抜く俺を見て、ランス

は怒ったように顔を歪めた。

「前から思ってたけどさ、カイってなんなの？」

「は？ なにが？」

「友達にしては度が過ぎると思うけど」

「んなこと言われてもなあ。友達なのは事実だし」

「じゃあ、この前の“俺のエルメス”ってなんだよ」

「うーん、微妙だけどシスコンのようなもんだ」

「そう言われて、その時安心してたよね」

「あ？」

「その言葉を隠れ蓑にしてるだけじゃないの？」

「何が言いてえんだよ」

内心、ランスの観察力と鋭さに冷や汗の俺。本当にコイツ11歳

？ まさか見抜かれてんのか！？

ランスの返事を戦々恐々として待つ俺に、ランスは俺を睨みつけた。

「本当は、エルメス様が好きなんじゃないの？」

「………は？」

「でも、筆頭だから、立場上隠してるだけじゃないの？」

「違うけど」

「隠さなくたってみんなもそう思ってるよ」

「それはない」

「じゃあなんでエルメス様を自分の物にしたいの？」

「え、いや、それはそういうアレじゃなくて……」

俺が素直にウンと言う筈がない。だって好きじゃねえし。でも否定する割には言葉に詰まる俺にランスは更にキレた。

「カイは裏切り者だ」

「裏切つてねえよ」

「アーサー様への忠誠を裏切ってる!」

「裏切つてねえつて」

「なんでカイが裏切るんだよ!」

「いや、だから・・・」

「カイなんて嫌いだ! 死ね! バカ!」

「あつ、オイ!」

全く人の話を聞かないランスはこの俺に向かって罵声を浴びせて、勢いよく部屋から出て行った。激しくドアの閉まる音に、エルメスも目を覚ましてしまった。

「おはよー。なんかうるさいよ」

「ああ、おはよう。なんだろうな、知らん」

ランスの言葉に自分でも疑問を感じた。確かに俺は友達としては度が過ぎると思う。もしかして、俺がエルメスを独占したいと思ってるのは、本当に恋愛感情から来てるのか?

そう思っただけで寝起きエルメスをガン見してみる。象牙色の肌、黒く大きな瞳、紅く小さな唇、サラサラの長い茶髪、細く小さい臍、それと巨乳。

まあ見た目は悪くねえ。コイツは面白いし、一緒にいるのは楽しい。なんたって俺の神と信仰するほどだ。一般的に考えてこれほど一緒にいて惚れる要素がないわけではない。

でも、どう考えても、どれほど冷静に分析しても、それはない。微塵もそう言う感情が湧き上がってこない。検索してもそんなファイルは見つかりません。やっぱり違うな。やっぱり俺はそう言うのが分からない奴らしい。

ランスはまだ子供だから、人の中に自分が思ってる以上にいろんな感情があることを知らないんだな。自分がそうだから、俺もそうだと思っただけか。でも、直接俺に言ってくるくらいだ。その内大騒ぎしかねえな。一回ちゃんと話すか。

そう決めて、着替えた俺は早速円卓の幹部と、シャンティ・スニル・レヴィも招集した。

「今日集まってもらったのは、俺にかけられる不当な嫌疑を晴らすためだ」

そう言ってランスを見ると、ランスは俺を睨み返す。



「不当？ 正当だろ」  
「残念ながら不当だ。それはあり得ん」  
「じゃあ証明しろよ」  
「ああ、いいぜ。ガルフ、俺の女性遍歴を覚えてるだけ述べる」  
「は？ 自分で言えよ」  
「いや、俺覚えてねえから」  
「相変わらず最低だな」  
「まーな。よろしく」

ハア、全く、と溜息を吐いたガルフは俺の昔を知らない奴らに視線を向けた。

ガルフ 「えーと、カイが女を作ったのはラルフが死んでからガードが3歳になるまでの約4年間の間だけ」

レヴィ 「え？ その期間だけ？ ていうか聖職者じゃなかったの？」

ガルフ 「吸血鬼になつてはっちゃけたっつーのもあるし、その頃は色々あつて荒れてたんだよ。それは俺らもだったけど。4年で辞めたのは、まあ、飽きたらしい」

ガード「飽きたのか・・・」

ガルフ 「で、最初の2年でカイの毒牙にかかった女は約500人」  
シャンティ「はあ！？ ご、500人！？」

ガルフ 「俺の知ってる限りはな。毎晩のようにとつかえひっかえ。一晩に2、3人なんてザラ。勿論水商売とかのプロじゃなくその辺の女。すさまじくコイツはモテてた」

スニル 「ああ、なんか口が上手そう」

キルシュ「副長が一緒にいる時のナンパ成功率100%だったもんな」

ガラード「副長、スゲエ。最低じゃん」

俺 「若エ頃の女なんか大概が性欲処理の道具だろうが」

シャンティ「本当に最低なんだけど」

スニル 「微妙に否定は出来んけど、そんなストレートかつ偉そうに言う事でもねえよ」

ガルフ 「で、残り2年で思い直したのか、ちゃんと付き合うようにした。それが更に最低だった」

ランス 「なんで？」

ガルフ 「その2年で付き合った女は約50人、それでも異常な数だ。それもそのはず。彼女なのに一切興味もたねえのこイツ。連絡はいつも相手から、相手から誘いがなきゃ会いにもいかない上に大概断る。会っててもやることやったら彼女シカト。5股6股は当たり前。そんなんで毎回ついていけないってフラれる。その繰り返し」

スニル 「ひ、ひでえ・・・」

レヴィ 「そりゃ、そうなるだろうな」

ガルフ 「女たちがどれほど尽しても泣いても縋っても、来るもの拒まず去る者追わず。屋敷にまで女が押し付けてきて大騒ぎになったこともある」

ペレアス「あ、懐かしいな、それ。副長その女うぜえつってビンタしてたよな」

シャンティ「最低・・・」

ガルフ 「で、とうとうこイツは悟った。飽きたんじゃないな、あれは間違いだ」

ランス 「悟ったって？」

ガルフ 「自分は人を愛せないってことを。その感情が欠如してるってことに気付いて、女遊びをやめた」

ガラード「え？ じゃあ今まで一度も人を好きになったことないの？」

俺 「いや、そんなことはねえけど、愛だの恋だの言うレベル

までは到達しなかったな。興味とか好意どまり」

ガルフ 「そう。カイはこういう奴だから、心配しなくてもエルメスを好きになるなんてことは、ない」

俺 「そう言う事だ。ガルフご苦労。お前スゲエな。よく覚えてんな」

ガルフ 「普通こんな強烈な女性遍歴忘れねえよ。完全に忘れてるお前もスゲエよ」

俺 「そりゃ忘れんだろ。どうでもいいからな」

ガルフの話聞いた俺の昔を知らない奴らは啞然。あ、違うな。この視線は軽蔑だ。こういつつまらん話を他人に聞かせるのは気分が悪いが、この話を持ち出さなきゃ俺がなんて言っても納得しないだろう。

事の発端、問題児ランスも例にもれず引いてるが、多分納得してくれただろうと思ったたら。

「人を愛する感情がないなんてあり得ないだろ」

「あり得るだろ。そんな奴世の中にいっぱいいるじゃねえか」

「でも、人としての根源だろ」

「一応俺には家族愛とか兄弟愛はある。所謂友愛は存在する。ただ、女に対する恋愛だけがない。理解ができない」

「そんなわけ・・・」

「ある。世の中には自分の子供を虐待する親もいるだろう。それは俺にしてみればあり得ねえ。でも、実際にあることだ。お前が知らないだけで、知らないことを存在しないと決めつけるのはよくねえな」

「・・・カいは、異常だよ」

「ああ、そうだな。知ってる」

「カいはそれでいいの？」

「少なくとも今この状況では、かえって好都合としか思えねえけど？」

「それはそうかもしれないけど・・・」

「俺にとっては、邪魔だ。無駄、無意味、余計なものだ。必要ない」

なんか知らんが、ランスの目は悲しみを帯びてくる。もしかして同情してんのか、俺が可哀想な奴だとも思ってたのか。余計なお世話だコノヤロー。

俺を見つめていたランスは俯くと、少ししたら再び顔を上げた。

「じゃあ、今はなんなの？　なんでエルメス様にあそこまで尽くすの？」

「アイツが俺の親友で、家族で、大事な人で、俺の生きる理由だからだ」

「それは、愛じゃないの？」

「違うな。似て非なる物、依存と信仰だ」

「依存と、信仰？」

「そ。アイツは俺を何度も助けてくれて、俺の願いを叶えてくれた。その事にスゲエ感謝してるし恩を感じてる。それは信仰だ。今まで色々あって、ありすぎて、俺の心はとくにブツ壊れてる。それはアイツも同じ。俺とエルメスは相互に依存し合って、お互いの傷をなめ合ってるだけの間柄だ。それでもお互いがいなきゃ生きていけないから、依存する。エルメスは強烈に他人を求めるし、俺もアイツがいなきゃマトモじゃいらねえから、傍にいて信仰の為に尽くす。それだけ」

「じゃあ、俺のつて言ったのは・・・」

「俺以外の奴に頼る様になって、俺がお払い箱になったら困るだろ」

「じゃあ、恋愛でもシスコンでもないんだ」

「そうだな。恋人でも兄妹でも、下手したら友達とすら呼べねえかもな。俺とエルメスは、そういう可哀想な関係だ」

半ば嘲笑的にそう言うてはみたものの、内心イライラがバースト寸前だ。

チクシヨー、クソガキが、ここまで言わせやがって。あークソ、ここまで俺の本心を白日の下に晒すのは屈辱だ。ここまで言ったんだから納得しねえとブチ殺すぞ。

イライラかつハラハラしながらランスを見下ろしていると、ランスは驚くべき行動に出た。

「ごめんなさい」

「・・・あ？」

「エルメス様がカイは特別だつて言うてた意味が今ようやくわかった。カイにとってエルメス様が崇める人であるように、エルメス様にはカイは導く人なんだ。自分を引っ張って違う世界に連れて行ってくれる人、アリスの白兔」

「アリスの白兔ねえ・・・それはどっちかつーとアーサーだろ」

「今はカイだよ。カイがエルメス様を導いてる」

「そうかもな。アーサーが不思議の国に連れてきて、俺が鏡の国から連れ出そうとしてんのかもな。白兔が導いて、白のナイトがアリスを守つて、アリスが赤の王様にチェックメイトしたら、こんな悪夢からも目覚めるんじゃないの」

「うん・・・ジャバウォックも、バンダースナッチも、僕たちがや

つつける」

アリスの白兔とは上手い事言うじゃねえか。ウサギなんて可愛い代物じゃねえけど。つーか内心俺は自分がジャバウオツクなんじゃねえかとすら思っただけど。まあ、ランスが納得したならいいや。

つーかここまで話したら全員納得すんだろ。上手くすればシスコン疑惑すら払拭。さすがは俺だ。

今のこの状況は、誰の見てる悪夢なんだろう。アリスか、白兔か、赤の王様か、白のナイトたちか。いや、誰の夢でもいい。チエスの間中爆睡してる赤の王様に、チエックしかけて起こしてやんねえと。それまで、俺はアリスを導かなきゃな。

いつか必ず、アーサーにチェックメイトを言い渡してやるから、その時はこの夢を、終わらせてくれ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

この前話し合いをしたおかげか、不当な言いようと不快な視線を浴びることはなくなった。マジ良かった。懸念すべきことが一つ減っただけでも、だいぶストレス解消。

ていうか、ランスに至ってはなんかちょっと優しくされてるような・・・気持ち悪い。

それとは対照的に、どういうわけかエルメスは俺によそよそしい超シヨック。もしや話したのか。シャンティの奴、あの昔話をエルメスに話して引かれたのか。

最初はそのことがシヨックで気づかなかったけど、どうやら避けられているのは俺だけじゃない。シュヴァリエが避けられている。

それに、エルメスが微妙な態度をとることに気付いてから、シャンティ達も微妙に俺らと距離を置いているような気がしてきた。正確には避けられてると言うか、なんかよそよそしいと言うか、何かを取り繕ってるような・・・

初めは大して気にもしなかつたけど、もし集団で俺らに隠し事をしていてとしたら、俺らに関わる重大なことに違いない。そう思っ  
て再び円卓会議を招集。

俺 「オイ、お前らもおかしいと思わねえか？」

ガルフ 「やっぱカイも思った？」

ランス 「僕もそう思った。エルメス様ウソつけないし」

キルシュ 「そうそう、シャンティ達はともかくエルメスがね・・・」

ペレアス 「そう言われてみれば・・・なんで？」

ガラード 「副長、なんで？」

俺 「それがわかんねえから招集してんだよ、バカ」

6人でうーんと頭を悩ませて、とりあえず思いついたことをそれぞれ言ってみることにした。

ガラード 「副長の束縛に耐えられないとか」

ランス 「カイが怖いとか」

ペレアス 「副長が嫌いとか」

ガルフ 「カイが虐めるからじゃね？」

キルシュ 「わかった！ 実はシャンティがカイに惚れてんだ！」

俺 「テメエら、本気で言ってるのか？ だとしたら拷問の末に火炙りにして殺すぞ」

ランス 「冗談じゃーん」

ガルフ 「悪かったって！ 心配すんな、エルメスはちゃんとお前が大好きだって！」

俺 「うるせえよ！ そう言う事言ってるじゃねえよ！ もっ



と真面目にやれ！」

「まったく、マジ使えねえバカどもだ。なんで俺の部下はこんなバカの集合体なんだよ。コイツらはバカ組合の団体職員か。腹立つ。」

俺 「とりあえずエルメスとシャンティファミリー総出で俺らによそよそしくしてる位だ。隠し事してんのは明らかだと思つ。これほど徹底的に集団で俺らに隠蔽しようとするって事は、俺らにとって重大だつて事だ」

キルシュ「そうだなあ。なんだろう、シャンティ達にとっての禁忌を、俺らがそうと知らずに冒した、とか？」

ペレアス「それなら、シャンティの性格からして文句言つてきそうじゃね？」

ガラード「確かに。じゃあ、払つてる迷惑料だけじゃ本当は足りなくて、でも泥棒するのは副長が許さないから困つてるとか？」

ガルフ 「それはどうだろう。それをエルメスに話すと思うか？」

俺 「少なくともシャンティはそう言う話をエルメスにするくらいなら、直接俺に言うだろうな」

ガラード「だよなえ。あーもう、全然わかんない！」

ランス 「折角同居してるのに、仲良く過ごせないのは辛いなあ」

キルシュ「そーだよなー。折角インドまで来たのにー」

とうとう幹部たちは仲間外れにされてることにスネ出した。確かにコイツらの言う通り、今のままじゃ居心地が悪くて仕方がない。俺達がインドに来たのもある意味運命だと思つてただけ

心の中で呟いた言葉に、真相が見えた。

俺 「そうか、なるほどな」

ガラード「副長？ どした？」

俺 「あいつらが俺らに隠すほどの事、そして俺らとエルメス、シャンティ達との共通点と言えば一つしかない」

ガルフ 「え？」

まさか！

俺 「おそらくビンゴだぜ。さて、真相を暴きに行くとするか」

キルシュ「俺わかんないんだけど」

ペレアス「俺も分かんないんだけど」

ランス 「わからなくていいから、行こう」

俺 「テメエ何仕切つてんだコノヤロー」

ランス 「たまにはいいじゃん」

舌打ちしながら幹部どもを引き連れて1階に降りると、エルメスとファミリーの奴らはテレビを見ている。シャンティの姿はない。と、思っていたらシャンティが厨房の方から出てきた。時計の針は既に午前0時を回っている。手を拭きながら出てきたシャンティからは洗剤の匂いがした。

「珍しいな、お前が家事なんて。普段社長業で忙しいお前の代わりに他の奴がやってんだろ」

「あ、うん。たまにはな」

「もう12時まわってるぜ。今まで飯食ってたのか」

「今日は忙しかったからな」

「ふーん・・・お前ら確かヒンドゥー教徒だったよな。でも、洗剤の匂いに混ざって、僅かに牛の匂いがする。ヒンドゥーでは牛肉は禁忌じゃなかったっけ？」

そう言つてシャンティを見据えると激しく動揺して、一瞬だけ俺の背後に視線を向けた。シャンティが目を向けた方向にあるのは地下室への階段。

顔を蒼くしたシャンティに確信を得て地下室に足を向けると、後ろでシャンティが制止する声が聞こえた。

それを気に留めることなく階段を下りていくと、後ろから必死にシャンティとエルメスが俺達を呼び止める。それでも無視して、地下室の前に降りた。

密閉された地下からは微かに食事の匂いがする。予想は、確実に確信へと変わった。

「・・・やっぱりな。初めまして。いや、ひよっとしたら二度目か？」

「？ 君たちは？」

地下室の扉をこじ開けて入ると、中にはひげを生やした老人。その男は俺達を不思議そうに見上げてベッドに座っていた。

「40年も前だもんなあ。忘れて当然だ。俺は忘れた事ねえけど」

「・・・ま、まさか」

「カイ！ 待つて！ やめて！」

「会いたかったぜエ、イルファーン・スレシユ。会って早々悪いが、死ね」

エルメスの声を無視する以外の選択肢は、俺にはない。目の前の男は、俺の目の前で俺の両親を殺して、俺を攫ってジュリオ様に売った。死んで当然。

素早く取り出した銃のセーフティを外し、スレシユのアタマ狙って引き金を引いた。その瞬間、スレシユの前にエルメスが姿を現して、弾はエルメスの左胸を直撃した。胸を抑える指の間隙からボタバタと血を流し、エルメスはゆっくりと膝をつき、その場に倒れた。

その光景と40年前の惨劇が、リンクした。

俺は、俺はなんてことを！ エルメスを撃ってしまった、殺してしまった！

途端に恐怖と絶望に支配されて、すぐにエルメスに駆け寄った。

「エルメス！ エルメス！ オイ！ 誰か血を持って来い！」

「わかった！」

すぐに倒れたエルメスを抱き起すと、エルメスは苦しそうに顔を歪める。クリシユナさんが居なくなつて力を失ったエルメスの、大口径の「ファントム」に撃たれた胸には穴が開き、そこからじわじわと血が広がって水色のワンピースを朱く染めていく。

それを見て猛烈な恐怖に襲われた。エルメスを撃ってしまった。  
もしこのままエルメスが死んでしまったら  
!

恐怖と焦燥に駆られてエルメスの名を呼び続ける俺に、苦しそう  
にしながらエルメスは口を開く。

「うつ・・・大丈夫、ごめんね。大丈夫、心臓には当たってないよ」  
「本当か!？ ああ、エルメス、良かった・・・良かった!」  
「カイ、ごめんね。ごめんね。お願い、この人を殺さないで。ごめ  
んね。今まで隠してて、ごめんなさい」

最早スレシユの事なんかどうでもよかった。エルメスが死なずに  
済むとわかって、心底安堵してエルメスを抱きしめた。

「エルメス・・・良かった。エルメス、なんで俺の前に出てきたり  
したんだ。頼むからこういうことはもうやめてくれ」  
「それはこっちのセリフだよ。銀弾なんて、もう必要ないでしょ?」  
「そうだな、ごめん。もう、捨てる」  
「ありがとう、ごめんなさい」

そうしているうちにガロードが大量に血を抱えてきてそれをエル  
メスに飲ませると、エルメスはムクリと起き上がって、痛みに顔を  
歪めながら胸から銀弾を抉り出した。

赤く染まった銀の銃弾はコロンと床に転がる。その銀弾を見て、俺は久しく忘れていた、人を殺すことの恐怖を思い出した。

あと1、2センチずれていたら、エルメスは死んでいたかもしれない。俺がこの手で殺してしまったかもしれない。その事を、とても恐ろしく思った。

ひとまずエルメスを休ませるために、エルメスを抱えてリビングに戻った。スレシユも連行して。騒ぎを聞きつけた残りのシュヴァリ工達もリビングに集まってきた。しばらくして、傷が塞がって落ち着いたエルメスが着替えを済ませて戻ってくると、エルメスは床に手について、俺たちに深く頭を下げた。

「みんな、今まで隠しててごめんなさい。本当にごめんなさい。スレシユは、生きてたの。スレシユと、私が取引したの。私たちの言うことを聞いて大人しくしている内は、命の保証をすると約束したの。みんなが今までどれほど辛い思いをして来たかわかってるつもり。みんなが何を失ったのかわかってるつもり。でも、約束したの。私と、アーサーさんがスレシユに約束したの。だから、殺さないでください、お願いします」

エルメスにも、きっと俺たちの気持ちはわかってるんだろう。他人に勝手に家族を奪われたのは、エルメスも同じだ。

床に着いてぎゅっと握られた手の甲に、涙をポタリとこぼしたエルメスは、顔を上げてスレシユに向いた。

「スレシユさん、お久し振りです」

「やあ、ミナ、久しぶり。大丈夫か？」

「ええ、平気です。スレシユさん、彼らはかつてあなたがジュリオさんに依頼を受けて攫った子供たちです。彼らはジュリオさんとあなたに、人生を奪われました。家族を奪われました。どうか彼らに謝罪してください」

「そうか・・・やはり、これも報いか。まさかあの子供達が復讐しに来るとはな」

エルメスの話を聞いて俯いたスレシユは顔を上げると、俺に目を向けた。

「君がカイ・・・アンジエロか？」

「・・・よくわかったな」

「ああ、君はおれが頭目になって最初の依頼だったからな。それに、ついさつきシャンティと君たちの話をしていたばかりだ」

「ふーん、なるほどね。覚えてたんなら気分的にはちったあマシだ」

「・・・君は覚えていないようだが・・・君の両親を殺したのは、おれだ」

その言葉を聞いた瞬間、憎悪の炎が燃え上がった。再び銃を向ける俺と、再びスレシユを庇うエルメス。慌てて俺を止めようとしたレヴィを、ガロードが引き留めた。

「副長を止める権利があるのは、俺達とエルメスだけだよ」

ガラードの言葉にレヴィもシャンティ達も黙り込んで、シュヴァリ工達も俺とエルメスとスレシユの様子を静観している。銃を向けられたエルメスはビクツと体を震わせながらも、その場から動こうとはしない。

「エルメス、そこをどけ」

「カイ、ごめんなさい、ごめんなさい。カイの気持ちはわかるけど、スレシユさんを殺さないで」

「黙れ！ そいつは殺す！ どけ！」

「違うの！ カイのご両親を殺したのは、スレシユさんじゃない！」「コイツが殺したって自分で言っただろうが！」

「違う！ ボスが自ら現場に赴くはずがない！ スレシユさん、どういうつもりなんですか！ なんてそんなウソつくんですか！」

「・・・ミナ、どくんだ。約束はもういい。彼の言うとおりにするんだ」

「何を・・・！？」

スレシユの言葉に、エルメスも俺も動揺した。スレシユは驚いて掴み掛るエルメスに悲しげに微笑んでみせる。

「おれはもう70歳だ。どの道もうすぐ死ぬ。今死んでも大差はない」

「そんな！」

「それに、ミナと彼らがここにいるという事は、ジュリオは死んだ



「んだらう？」

「・・・はい」

「君たちが殺したのか？」

「そうです」

「じゃあ、おれも殺されなければ。少なくとも彼らには、その権利がある」

「さすが長生きしてるだけあるな。よくわかってんじゃねえか。お前が直接手を下してようがそうでなかるうが、関係ねえんだよ。エルメス、どけ」

「ダメ！　お願い、これが理不尽だとわかってる！　カイの気持ちもわかってる！　でも、この人を殺さないで。許さなくてもいい、殺さないで。お願い・・・」

「黙れ！　どけつつつてんだろ！　俺にはコイツを殺す権利があるんだよ！」

「ダメだよ！　それじゃ、ジュリオさんと同じになっちゃう！」

泣きながらそう叫んだエルメスの言葉にハツとして、その瞬間から憎悪の炎は沈静化していった。

エルメスの言う通りだ。憎悪と復讐心に憑りつかれてスレシユを殺してしまったら、俺はジュリオ様とやら変わらない。

でも、俺のこの苦悩と憎悪を一体どうしたらいいんだ。許してやることなんか出来ない。あの日の惨劇を、40年経っても、今でも鮮明に脳裏に浮かぶ母さんの血の色を、どうしたら忘れられるって言うんだ。

「カイ、お願い。許せないってわかってる。許さなくたっていい。でも、どうしてもスレシユさんを殺すなら、その前にスレシユさん

に私を殺して貰わなきゃ」

「・・・何、言ってるんだ」

「私達は、この屋敷を奪うために、スレシユさんの部下を大勢殺した。ベトナムの時は、トリンのお父さん以外は全員皆殺しにした。だから、スレシユさんには私を殺す権利がある」

エルメスは再びスレシユに向くと、スレシユの目を真っ直ぐ見て尋ねた。

「スレシユさん、私が憎いのですか？ 殺したいのですか？」

「スレシユがエルメスを殺すなら、俺は容赦なくスレシユを殺す」

「カイ、それは・・・」

「ミナ、おれは君を憎んではない。君は取引の時に言ったね。私は殺したくありません、だから、どうか取引に応じてください、とおれはあの時の決断は間違っていないと思ってる。部下の大半は生き延びることが出来た。失われた部下は、おれの家族も同然だった。でも、それでわかった。自分のしてきたことが、どれほど非道だったか。家族を奪われることが、どれほど苦痛なのか。ミナのお陰でその事を知った。これほどの苦痛を小さな子供に背負わせたおれには、当然の報いだ」

スレシユの言葉を聞いて、エルメスはポロポロと涙を零して、スレシユの膝に額を付けた。

「スレシユさん、ごめんなさい、ごめんなさい。謝って済むような事じゃないってわかってます。許されることじゃないってわかって

ます。ごめんなさい、本当にごめんなさい」

「ミナが謝ることじゃないさ。ミナはおれと取引をしただけ。ミナは何もしていないだろう」

「でも……でも……ごめんなさい、ごめんなさい……」

膝に泣き継るエルメスの頭を、スレシユは優しく撫でて困ったように微笑んだ。

話から察するに、実際にスレシユの部下を殺したのはアーサー達で、エルメスは取引を持ちかけて皆殺しを防いだけなんだろう。それでもエルメスは懺悔する。

今は自分の家族が奪われて、俺も、俺達も、スレシユも、エルメスも、同じだから。家族を奪われる者の気持ちを、知ったから。

俺も、エルメスも、スレシユも同じ

気が付くと、スレシユに向けていたはずの銃口は床に向いていて、俺の腕は下がっていた。

これは、エルメスに免じて今日の所は見逃してやっていいんじゃないのってことか。そう結論付けて、銃をしまった。

「エルメス、悪かった。スレシユは殺さねえから」

未だ膝にすがって泣いているエルメスの肩を撫でてそう言うと、エルメスは驚いたように顔を上げて余計に泣き出すと、すぐに今度は俺に飛びついてきた。

「カイ、ゴメンね、ゴメンね、ありがとう」

「お前に泣かれちゃしようがねえからな」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「もう謝るな。別にお前のせいじゃねえだろ」

「うん・・・カイ、ありがとう」

「ゴメンな、エルメス。ありがとう」

エルメスが止めなければ、俺は憎悪に支配されて、ただ復讐心のみでスレシュを殺そうとした。ジュリオ様と同じように。

あの惨劇を二度と繰り返さちゃいけないと思ってたのに、エルメスが止めなければ繰り返すところだった。

俺と同じように家族を奪われたエルメスは、ジュリオ様を許そうと決めた。今でも悩みながら努力してる。苦しみながらもそこから這い上がるうとしてる。

俺と同じように家族を奪われたスレシュは、その罪を受け入れて懺悔し、反省した。スレシュまで改心したつてのに、俺がそうしないわけにいかねえ。

40年前から止まってしまった時計の針を、いい加減動かしてやらねえと。

泣きつくエルメスの肩を撫でて、シュヴァリエ達に振り向いた。

「俺は、スレシュを許そうと思う」

「副長！？ 本気で言ってるのか！？」

「ああ。エルメスに免じて、だけど。もういい加減、憎むのにも疲れた。お前らはスレシュをどうしても殺したいか？」

俺の言葉に困惑と動揺を隠せないシュヴァリエたちは顔を見合わせて悩み始める。しばらくすると、ランスが前に進み出てきた。

「カイにできることが僕にできないはずないじゃん。いいよ、許しても」

ツンとすましたランスの生意気な物言いに、シュヴァリエ達の両手はWで、とうとう呆れ笑が浮かんだ。続いてガラードが歩み出る。

「俺もいいよ。今は、エルメスがいるから」

ガラードの言葉に、みんなも首を縦に振った。

ベデイ 「確かに思い出としては最悪だけどさ、昔の事だしな」

リオ 「今はエルメスやみんながいるし」

パーシー 「そうそう。その事がなきゃ、みんなに出会えなかったもんな」

ガルフ 「きつとこういう運命だったんだろ」

トリス 「むしろ今の方が大家族で楽しいじゃん？」

ユアン 「だよな。それまで一人っ子だったのに今や12人、いや13人兄弟？」

キルシュ 「スレシュがいなきゃ、きつと一生出会わなかった。みんな

なとも、エルメスとも」

ペレアス「そこを汲むなら、許してやってもいいか」

ディナ「つーかぶっちゃけ、俺覚えてないんだけど」

トリス「あ、実は俺も」

ガラード「そう言えば俺もだ。物心つくころには副長がお父さんだったし」

俺「誰がお父さんだ」

ベディ「うわ、そーいやガキの頃、副長を兄ちゃんって呼んでたわ！」

パーシー「そう言えば！ 懐かし！ 気持ち悪！」

俺「テムエら後でリンチな」

数分前まで殺すだの殺さないだの、相当シリアスな雰囲気だったはずなんだが、バカどもの手に掛ければこのザマだ。コイツらの切り替えの早さと能天気っぷりは、最早賞賛に値する。

いつの間にかエルメスもクスクス笑っていて、エルメスの笑顔を見て改めて、みんなと出会えてよかったと思えた。

「つーわけで、スレシユ。水に流すってわけにはいかねえが、まあ、許してやる」

スレシユに振り向いてそう言うと、スレシユは顔を歪めたかと思うと目に涙を溜めて床に額をこすりつけた。

「君たちには、本当に申し訳ない事をした。本当にすまなかった。」

ありがとう。本当にありがとう。本当に、すまなかつた」

絞り出すような声で謝罪を述べるスレシユに、多分それなりに反省してるんだろつな、そう思った。

そんで、みんな乗り越えてきてるんだから、俺も頑張らなきゃいけねえかってなんとなく覚悟を決めた。

エルメスはジュリオ様を許そうとしてる。俺も、エルメスとコイツらと一緒に頑張って、これから新しく時を刻んでいこう。

この話には、まだ少し続きがある。

その後、少ししてスレシュが落ち着いた頃に、俺らの様子を静観していたシャンティが急に前に出てきて、エルメスの前に跪き頭を下げる。どうしたのかと見守っていると、シャンティはエルメスと俺に目を向けて言った。

「エルメス様と、カイ達シュヴァリエが許してくれるかはわからないけど、お願いがある」

「え？ なに？」

「・・・スレシュを、地下室から解放してほしい」

「は!？」

「え!？」

思わぬ相談に驚いて、エルメスと顔を見合わせた。突然の事にスレシュ自身もとても驚いている。

「えっと、それはどうして？」

「ずっとスレシュの世話をしてて思った。スレシュは根っからの悪人じゃない。利益を求めていただけで、自分のしたことを悪だと知らなかっただけだ。それに頭もいいし、機転も利く。トリンとツァンはマイケルさんに助役をやってもらってるんだろ。アタシも、アタシの会社の相談役として、スレシュを雇いたい」



「ええ！？　そ、それは・・・」  
「お前、本気で言ってるのか？」  
「本気だ。アタシ達は学も経験もない。ブレインとして役立つ素材が欲しい」

何とも野心的なシャンティの言葉に、再び顔を見合わせる俺とエルメス。

「え、あ、カイとみんなはどうしたい？」

「決定権があるのは俺らじゃねえだろ」

「決定権・・・アーサーさんだ」

「よし、アーサー連れてこい」

「無茶言わないでよ・・・アーサーさんならどうするかな？」

「うーん・・・そうだな。あくまで俺の考えだけど、アーサーならシャンティの意見を汲むな」

「え！？　アーサーさんなら怒りそうな気もするけど・・・なんで？」

「アーサーならシャンティの夢を応援するだろうし、それに約束もある。スレシュが約束通り大人しくエルメスやシャンティに従ってれば問題ない。逆らったり妙な真似したら殺せばいい。何よりスレシュはもうトシだ。そんな無茶やつてもメリツトがない。最後に役に立ってもらった方が双方に利潤がある」

「ああ、なるほどお・・・じゃあ、そうしよっか」

「そうしよっかって、あくまで俺の意見だって言ってるんだろ」

「でも、アーサーさんっぽいからいいんじゃない？　アーサーさんはいいつもこっちがビックリするような決断するし」

「まあ、そう言えばそうだな」

結局俺も納得してエルメスと二人でシャンティに向き直った。

「じゃあ、私がアーサーさんの代理として、スレシユさんの地下室からの解放を許可します」

「シャンティ、お前ちゃんと見張っとけよ」

「二人とも、ありがとう」

俺とエルメスの答えを聞いて、シャンティは深く頭を下げる。続いて俺達はスレシユに向いた。

「スレシユさん、突然ですけど、これからはシャンティの会社で相談役として尽力してください。シャンティと共に、会社の発展と不  
可触の民の救済に尽力すると、約束できますか？」

「勿論だ。シャンティの興した会社はいい、素晴らしい。シャンティの夢を叶える歯車になれるのなら、おれの罪の償いにもなるだろう」

「そうだな。言っとくけど、妙な気起こしたら即抹殺だからな」

「ああ、わかってる。信用しろとは言わないが、そんな気は微塵もない。あの男と、アルカードと約束したからな」

スレシユの言葉を聞いて嬉しそうに微笑んだエルメスにつられて、俺もなんだか安心した。

その後の話し合いで、スレシユの居室は結局地下室のままだけど、

鍵はエルメスが壊して、俺達の居室のある4階に近づかないという事で今後の生活指針が決まった。

エルメスとシャンティは今後の細かい話をすると言ってスレシユと共に地下室に行ったから、俺とランスは先に部屋に戻った。

エルメスから貰った腕時計を見ると、もう時間は夜中の3時。ランスも眠そうだ。

風呂でも入るか、と、ピストルのホルダーを外そうと手をかけた瞬間に、エルメスを撃つたことを思い出す。

マシンピストルCZ75-SP01をベースに、化け物を一撃の下に殺せるようにベディが改造したCZ75-SP00 Custom  
om“PHANTOM”

ゴトリ、とテーブルの上に「ファントム」を置くと、傍までランスが歩み寄ってきた。

「お前も見てたなら、よくわかつたろ」

「え？」

「銃は、人を守ることなんか出来やしねえんだ。銃は人を殺す道具なんだよ」

「でも、カイはエルメス様を撃ちたくて撃つたわけじゃないだろ」

「同じことだ。俺が銃を抜かなければ、エルメスを撃つことはなかったんだからな」

「そりゃそうだけど・・・」

「銃が奪うのは、他人の命だけじゃねえ。自分の心も、大事な人を

失うことだつてあるんだ。それが故意か事故かは問題じゃねえ」

「じゃあ、エルメス様の言った通り、銀弾を捨てればいいよ。そしてたらエルメス様が傷つくことはなくなるじゃん」

「ああ、そうだな。でも・・・決めた」

すぐにキャビネットの引き出しを開けて、ストックのマガジンとスピアの「ファントム」を取り出す。するとランスが嬉しそうしながら寄ってきた。

「カイ、意外と騎士じゃん」

「意外は余計だ。お前、証人になれ」

「うん」

俺とランスはその足でガルフの部屋に向かった。ガルフは俺とランスが入って来たのを見て、俺が手にしている物を見て、クスツと笑う。

「どーした？ 百戦錬磨のカイも、さすがに怖くなつたか」

「まーな。つーか、少なくとも今は必要ねえと判断した」

「今は？」

「まあ、コイツが活躍する機会が今後ない事を祈るが、世の中何が起るかわかんねえからな。本当に必要な時が来るまで、お前が「ファントム」を預かっててくれ」

「なるほどね。了解」

ガルフのデスクの上に銃を置くと、ガルフはそれを箱にしまつて戸棚の奥に押し込んだ。振り向いたガルフは俺とランスを見てまたクスツと笑う。

「ランスを連れて来たのは、道德の教育？」

「まあ、そんなとこだ」

「ハツハツハ、ある意味カイは優秀な教育者かもな。ランスは反面教師やつてりや、随分立派な奴になるぜ」

「あはは、確かに！」

「何納得してんだテメエ」

「そりやするよ。ねえ？」

「そーだな。カイ、エルメスを撃つた時、撃つたことが怖かったか？」

「ああ。今思えば、エルメスならああいう事をやりかねえ。それすらも気が回らねえ程に憎悪に憑りつかれて引き金を引いた自分に、エルメスを殺しそうになったことに、怖くなったよ」

「一旦人殺しが怖くなつたら、もう二度とできねえかもしんねえぞ」  
「そうだな。でも、もう必要ねえだろ」

「だな。もう俺達は死を振りまく神じゃなく、エルメスを守護するシユヴァリエだからな」

「白兔に銃なんて物騒な物は似合わないしね」

ランスの言葉に思わず俺とガルフは笑ってしまった。確かにウサギに銃なんか似合わねえ。

「ランスの言う通りだな。白兔の持ち物は、時計だけで十分だ」

俺だけフェースの黒い、鈍く光るシルバーの腕時計を見ると、規則正しく時を刻む。俺は40年も遅刻してしまっただけで、俺の時計の歯車は再び動き始めた。

きつといつか、40年分の時間に追いつける日がやってくる。エルメスとコイツらがいるなら、一緒に努力していけばきっと、スレシュを許してやれる日がやってくる。

この日俺は「ファントム」を手放して、人を殺すことを、やめた。

拝啓 アーサーさん

事件です！ 大事件です！ スレシユさんが生きていることをシユヴァリエのみんなに知られちゃいました！

でも、みんなはスレシユさんを許すって言うてくれたんです！ 本当に良かった！ これを事件と言わず何と言いましょ！ さらには事件はこれだけじゃありません！

ちよつと興奮しちゃった・・・順を追って説明しますね。

この前起きたらカイはすぐにシユヴァリエの幹部会議をするっていなくなっちゃって、仕方なく一人でリビングでテレビ見てたんです。だいが経って、アジメールさんが食事の乗ったトレーを持って厨房から出てきたんです。

「アジメールさん今からご飯ですか？ こんな時間に一人で？」

「え、あ、うん」

なんか妙な態度取るな、と思ってよく考えたら、アジメールさんが向かって行こうとしているのは地下室で、そこに監禁している人がいたことを思い出しました。

というか、完全にスレシユさんの事忘れてました。そう言えばインドを出る時にスレシユさんの処分をシャンティに押し付けて出てきたんだっただ・・・と思って。

でも、同時にシユヴァリエのみんなの事を思い出して、凄く焦りました。アジメールさんに聞いたら、インドに来た翌日にシユヴァリエのみんなとジュリオさんとスレシユさんの関係を話してたから、何とかバレないようにやっててくれたみたいです。でも、それもいつまで隠し通せるかわからない、とも。

アジメールさんの微妙な態度は、多分今がこんな状態だから、私にも心配かけないように内緒にしてくれていたんでしょう。

一回スレシユさんとも話そうかと思っただけど、私が地下室に出入りしてるのを誰かに見られるとマズイし、どうしようと思って頑張っただけで、やっぱり私には女優は向いてなかったみたいで。

とうとうカイの名推理で昨日、バレちゃいました。



カイ達は私達が止めるのも聞かないで地下室に乗り込んで、ドアを開けたカイはすぐさまスレシュさんを殺しにかかりました。それは何とか止めることが出来て、その後カイ達に謝罪して話し合いをしました。

カイもみんなも、両親を殺されて誘拐されたことで今までずっと苦しんでいました。あれから40年経ってもその苦しみに苛まれてきたんです。

今となつては、カイ達の気持ちは私にも痛いほどわかります。大事な人を奪われることがどれほど辛い事なのか、子供の時分に親を失うという事がどれほど辛い事なのか。

でも、それでもスレシュさんを殺してほしくありませんでした。理由としては、私もですが、アーサーさんとスレシュさんとの約束を破らせるわけにいかないと思ったから。

そう説得したら、カイはひとまず引き下がってくれたんですが、ここでまさかの事件です。スレシュさんがカイにカイの両親を殺したのは自分だと名乗り出てしまいました。

当然カイは怒ってスレシュさんを殺そうとします。私にはそれが真実だとは思えなくて、勿論嘘だって根拠ありませんでしたけど一生懸命説得しました。

スレシユさんを殺してほしくない理由はもう一つあります。もしカイ達がスレシユさんを殺してしまつたら、それは憎悪に憑りつかれて復讐したジユリオさんと同じなんじゃないかと思つたからです。

そのことを話したら、カイは少し落ち着いたようで、卑怯だと思ひましたけど、とどめに言ひました。

「カイがどうしてもスレシユさんを殺すなら、先に私をスレシユさんに殺して貰わなきゃ」

カイにスレシユさんを殺す権利があるのなら、スレシユさんにも間違いなく私を殺す権利はあります。正直、賭けでした。我ながら随分卑怯なことを言つたなと思ひます。スレシユさんの部下を直接殺したのは私じゃなかつたけど、それでも見殺しにして容認していったんだから同じことです。

でも、スレシユさんと言ひました。私が取引を持ちかけてくれたおかげで、自分の所業の非道さに気付けたんだと。ミナが謝る必要はないよ、と。

スレシユさんは自分のしたことを反省して、更に私まで許してくれました。私は卑怯な手段を使って話を納めようとしたのに、私達だつてスレシユさん達に酷い事をしたのに、スレシユさんは許してくれたんです。

その事がとても申し訳なくて、本当に申し訳なくて、自分が嫌になりました。スレシユさんは言いました。家族を奪われることは辛いこと、それほどの思いを小さな子供に負わせてしまった自分には、当然の報いだ。

それを聞いて思いました。きっと、今のこの現状も報いなんだと。ベトナムで、インドで、イタリアで、私は大勢の罪もない人を殺しました。たくさん、たくさん殺しました。きっと神様はその事を怒ってたんですね。だから私から家族を奪った。愛する人を奪った。

今私の身に起きていることは、当然の報いだったんです。それは自分で反省して受け止めなければいけないことなのでしょう。ちゃんと後悔して反省して懺悔する必要があることなのでしょう。

だから、スレシユさんに謝りました。謝ったからって今更どうにもならないし、許されることじゃないってわかってたけど、とにかく謝りました。そして、心に決めました。もう二度と、誰も殺さないって。もう二度と、こういうことを起こさないようにしようって、決めました。

スレシユさんの思いが通じたのか、カイもスレシユさんを殺さないって約束してくれました。そしてシュヴァリエのみんなに、俺は許そうと思ってる、お前らはどうするって聞いてくれました。

最初はみんな動揺してたけど、今はみんなが、私がいるからいいよって。スレシュがいたからみんなと出会えたんだし、それを汲むなら許してあげるって言うてくれました。

私はみんなの強さと優しさが、とても嬉しかったです。みんながいてくれて、本当に良かったって思いました。

それで何とか和解が成立したんだけど、ここで第2の事件が発生です。

何とシャンティが自分の会社の相談役にしたいから、スレシュさんを解放してくれて言い出したんです。それには本当にびっくりしました。

スレシュさんは根っからの悪人じゃないし、自分達には学も経験もないから優秀な人材が欲しいって。

相変わらずシャンティは野心的でプライドの高い女の子です。どうしようかってカイに相談したら、カイはアーサーさんならシャンティの意見を汲むはずだって言ったから、じゃあそうしよっかってことになって、結構あっさり決まっちゃいました。

それから今後の話し合いをスレシュさんとシャンティと3人でし

たんですけど、ジュリオさんの事とかを少しだけスレシユさんと話しました。その時にスレシユさんはジュリオさんの最期を聞いて言いました。

「そうか、ジュリオは幸せな最期だったんだな」

それを聞いて、涙が出ました。ジュリオさんが最後にそう思ってくれたなら、カイが辛い思いをした甲斐があつた、と思いました。

そして、今日になって第3の重大事件です。今日ランスがコッソリ教えてくれました。

「カイは銃を封印しましたよ。もう人殺しをしないって決めたようです」

なんでそうなったかっていうと、私の憶測なんですけど、実は最初にカイが地下室に乗り込んだとき、スレシユさんを殺すのを阻止するために私が間に入り込んで、カイの撃った弾に当たってしまったんです。

その時カイもみんなもすごく心配しました。カイの撃った弾は銀弾で、心臓の近くに当たったから。正直な話、ああコレ死んだな、と思いました。

すごく痛くて苦しくて、倒れた私を抱き起したカイは必死に、本当に必死に私の名前を呼んでくれました。大丈夫だよって言った時にすごく安心した様子でした。

その時に、もう銀弾なんて必要ないでしょって言ったら、もう捨てるって言ったんです。

まさか銃自体を封印するって決めるとは思わなかったけど、その事で撃つことを怖くなったのになって思いました。

この前、ランスが銃を習いたがってるって見抜いたカイがランスに言ったんです。

「これは人殺しの道具だ。人を殺すもので、人を守るうなんて滑稽だな」

それを聞いて、カイは優しいなって思いました。そう言ったら本人は否定してましたけど。

その時ランスはむくれちゃったけど、大人しくいう事を聞きました。今回の事を教えてくれた時は、すごく嬉しそうに話してくれました。カイは僕が思った以上に騎士でしたって。

本当に仲良し親子です。なんだか嬉しい。これを言ったらカイはまた怒るんでしょうけど。

でも、その時最後にランスが言ったことが意味が分からなかったんですけど。

「白兔の持ち物は時計だけで十分ですからね」

どついう事でしょう？ カイが白兔なんですかね？ 白兔ってなんでしょうか？ 全然あの人にウサちゃんイメージが湧かないんですけど、どこからやって来たんでしょう。

着てる服もいつも黒いし、性格も黒いし、今は髪も黒く染めちゃって完全に黒猫みたいなイメージなんですけど。白兔とは対極なんですけど。意味わかりません。

聞いてもランスは教えてくれなかったし、考えてもどうせわかんないから諦めます。

そう言えば聞いてくださいよ！ この前カイに猫パンチされたんですよ！ 手すりから突き落とされた上に、心配したシャンティに俺は知らないとか私が勝手に落ちたとか言ってたんですよ！ ヒドイですよね！

そう言えば前にインドにいた時もアーサーさんから窓から落とされたような・・・ここでは落ちる運命なんでしょうか・・・

とりあえずこれからは、銃を持つ人の前に立ちはだからないこと、落ちないことを心がけます。

そうそう、アーサーさんに見せたいものがあるんです。髪を染めたみんなと、まだ咲くかわかんないけど、城から持ってきた薔薇が咲いたらその薔薇と、新しい私の羽根。

それともう一つ、「元ファイア」で「現相談役」のスレシユの姿。

これでアーサーさんが帰ってきたら、シャンティはアーサーさんに共同経営者になってくれとか言い出しそう。

アーサーさん、少しずつ私達はいい方に向かっていってます。運命を受け入れて乗り越える覚悟をして、努力してますよ。

やっぱりまだ辛い事もあるけど、きつとアーサーさんが帰ってくるときに、笑顔でお帰りって言えると思います。

早く帰ってきてくださいね。お願いしますね。

敬具



報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

あれからスレシユは朝シャンティと共に入社して、夜戻ってくる  
と持ち帰った仕事に没頭しているようだった。

俺達は相変わらずスレシユとは距離を置いてるけど、まあ無理に  
詰める必要もないと思うし、正直すぐには無理。でも、インドにい  
た頃スレシユの世話をしていたのはエルメスだって言ってたから、  
エルメスはスレシユには普通にしてる。

それがかなり複雑な気分だけど、それでこそエルメスかとも思う。  
つーか、アーサーが帰ってきた時、スレシユはどうするんだろっな  
やっぱりさすがにアーサーを許すことはできないのか、それとも許  
すのか。まあ、そんな時にならなきゃわかんねえか。

やっぱり俺らは全面的にスレシユを信用できるわけじゃないし、  
ウソについて取り入ってる可能性もあるから、基本警戒してる。

仕事は増えることになるが、俺らはそれでいいと思ってるし、そ

の辺はエルメスやシャンティ、スレシユ本人もわかってるようだ。

っーか、すっかり忘れてただけだ。いい加減、催眠術師探そう。

あれからもっかいよく考えてみたけど、やっぱり俺は異常かなど。シャンティと同類ではあるけど、そのレベルが段違いだと思う。フツツーに考えて、友情が信仰に発展するなんてあり得ねえと思うし。まあ、依存はよくあることだとは思うが。

正直考えるのも面倒くさいから、やっぱり消すことにした。

「エルメス、俺出かけてくるから」

「どこ行くの？」

「ヒミツ」

「私も行く！」

「ダメ」

「どうして？」

「お前には言えない所に行くから」

「・・・いつてらっしやい」

俺の微妙な言い回しに勝手に勘違いしたエルメスは、引きながら渋々送り出した。微妙に腹立つな。まあ、結果オーライって事ではないか。

早速街に繰り出して、あらかじめ予約していた催眠療法をやってるっー先生の所に行った。

「どーも」

「あなたがカイさんね。さあ、そこに座って」

受付をすませてドアを開けると、セクシー美人女医が椅子に座って微笑みかける。ベディが喜びそうだ。

言われたように椅子に座ると、先生はクリップボードを手にして問診を始める。

「ご相談はどういったことですか？」

「催眠術で性格つーか感情の一部を消せるんですか？」

「場合によっては可能ですよ。厳密には消すというか消えたと暗示をかけると言った方が正しいですが」

「ああ、じゃあ俺の異常性を消してください」

「異常性・・・？ 詳しくお話を伺ってもいいですか？」

「いいですよ。長くなりますけど」

とりあえず自分の生い立ち、以前のヤバイ仕事、ジュリオ様の事やエルメスの事、そして俺を悩ませる異常性について話した。勿論そこまで詳しくは話さないし、ヴァチカンの事や吸血鬼の事は黙って、元某国の国家権力ってことにしたが。

俺の話聞いて先生は頭を悩ませる。

「それ、本当の話ですか？」

「信じ難いでしょうけどね」

「一応信じますが、それが本当だとすると難しいかもしれませんよ。とても根の深いもののようなので」

「でしょうね。ずっと同じことを繰り返してきましたから。でも、今回ばかりはそれじゃ困るわけですよ。このままエスカレートしたらアイツに迷惑がかかる」

「そうですね。最悪の場合「アイツを殺して俺も死ぬ」でしょうね」

「・・・思った以上に最悪だ。なんとかお願いします」

「わかりました、やってみましょう」

そう言つと先生は俺に向き直つて、俺の額に手を当てる。

「リラックスして、深呼吸して、落ち着いて私の言葉に耳を傾けてください。ゆっくり、ゆっくり目を瞑つて」

先生の静かな声に耳を傾けながら、深呼吸をしてゆっくりと目を瞑る。少しすると先生は口調を変える。

「それではまずそのお友達の事を思い浮かべてください」

「はい」

「・・・入ってませんね」

「そつみたいですね」

実際俺は平常心そのもの。全然催眠にかかっている感じがしない。

先生はうーんと唸りながら俺の額から手を外すと、もう一回やってみましょう、と同じことをやり始めるが依然として催眠状態に入ら

ない。

「じゃあやり方を少し変えますね」

そうやって今度はライターを取り出した。火をつけて俺の前に差し出すと、それを凝視するように言われて言う通りにやってみる。

「集中してください。この火をよく見てください。炎の中にお友達の事を思い浮かべてください」

「……あー先生、全然ダメ」

「……ダメですか」

先生と二人でガツカリ溜息。どうやら俺は催眠術にかからないタイプの人間らしい。先生の話だとたまにそういう奴がいるようだ。

「もしくは、カイさんは緊張しているのかもしれませんが」

「緊張？ してませんよ」

「いえ、ここに来た事ではなく、状況にです。そのお友達の為に毎日気を張っているんじゃないですか？」

「それは、まあそうですね」

「それに数か月前の事件のせいで、そのお友達とお身内の方しか信じたくない、と思ってるんじゃないかもしれません。あるいはその両方が」

「そうかもしれませんがね」

「カイさん、まずはあなた自身が心身ともにリラックスできる状況

を作ることが先決ですね。可能な限り自分にとって楽な方に見てください」

「俺基本的に自分のことしか考えてないんですけど」

「いいえ、あなたはいつも状況を難しく考えて思い悩む癖があるようです。現に今あなたの頭の中はお友達の事でいっぱいでしょう？」

「・・・ですね」

「お友達の方と距離を置くのは難しいでしょうし、それはあなたにとっては苦痛でしょう。とりあえずは、お友達の方やお身内の方と楽しく過ごすことだけを考えてみてはいかがでしょう？」

「そうですね。そうします」

「困ったことがあったらいつでも相談にいらしてくださいね」

「ああ、はい」

結局俺は何をしに来たんだろうか。ただカウンセリング受けただけじゃねえか。この俺がカウンセリング・・・なんか俺のプライドが許さないんだけど。なんか腹立つんだけど。

どうも催眠術もきかねえみたいだし、やっぱこれは自分で解決しろって事なんだな。柄にもなく他人の力に頼ろうとするところということになる。よくわかった。もう二度と行かねえ。

そう決めてガツカリしながら歩く帰り道、通りかかった店のショーウィンドウに「MADE IN JAPAN」と書かれたガラスの万年筆を発見。それを見てエルメスを思い出した。あ、これアイツに買ってやるつ。

速攻買い物して少しご機嫌回復して屋敷に戻ると、俺を出迎えて

くれたのはニヤニヤ笑ったディナとベディ。

「何笑ってんだよ、気持ちわりいな」

「オニイチャン今夜の相手はどんな女？」

「セクシー美人女医」

「羨ましすぎる・・・」

「ベディお前本当好きだな」

「そんな事よりエルメスがさ、副長が自分を置いて夜遊びしに行つたつてご機嫌斜めだぞ」

「早くエルメスの相手してあげなよ、オニイチャン」

それを聞いて速攻エルメスの下にダツシユしたエルメス思いな俺。そう言えばアイツ俺が夜遊びしに行つたと思つてたんだつた。いっちょ前に嫉妬なんかしやがって、うい奴め。

「エルメス、ただいま」

「あ、カイ、おかえりー」

勢いよく部屋に戻つてドアを開けるとエルメスはキロと遊んで、帰ってきた俺にそう言つてにっこり笑つた。

なんか思つてた以上に普通なんだけど。ハツ、さてはアイツら俺を騙しやがったな！？俺がスツ飛んで行つた様子を見て今頃笑つてやがるに違いない！チクショー！

ドア前でひとしきり打ちひしがれた後、不思議そうにするエルメスの傍に寄ると、エルメスの髪にキ口の羽根がついていることに気が付いた。それに手を伸ばそうとすると、スッと逃げられる。

「汚い手で触らないでくれる？」

「ピイ」

なんか思ってた以上にご機嫌斜めだったんだけど。鋭角に斜めなんだけど。ヒドイ言われようなんだけど。

エルメスは相変わらずニコニコしてるけど、よく見たら営業スマイルだった。笑顔でそんな辛辣なことを言うなんて、エルメスも成長したな。

やっぱりご機嫌を損ねてたエルメスに、思わずニヤケちゃった俺。

「エルメス、なーに怒ってんだよ？」

「別に？」

「俺がいなくて淋しかったんだろ」

「別に」

「俺がお前ほつたらかして遊んでるのがヤだったんだろ」

「違うもん」

「じゃあ何に怒ってるわけ？」

「別に怒ってないし、そんなのカイの勝手じゃん」

「じゃあさっきの触るなっでなんだよ？」

「別になんでもない」



エルメスは段々営業スマイルが消失していく。その様子に俺ご満悦。

こういうエルメスを見れるなら、また夜遊びすんのも悪くない。頻繁に遊びに行くとエルメスが慣れるから、たまーに遊ぶことにしよう。とか最低なことを考えた俺は、さっき買ってきた万年筆の入った箱をエルメスの前に出した。

「そんな怒んなよ。コレ買ってきたんだよ。お前にやる」

訝しげに箱を受け取ってフタを空けたエルメスは、その中のガラスの万年筆を綺麗、と言いながら手に取る。

「ソレさあ、この前雑誌で見かけたんだけど、日本製のガラスの奴でスゲー書きやすいって書いててさあ。お前たまにせっせとなんか書いてんだろ。お前にやろうと思って、探したんだぜ」

俺のウソつき！ そんな情報知らねえよ！ しかし俺のウソにまんまと騙されたエルメスは嬉しそうに笑った後、ハツとした顔を向けた。

「カイ、あの、ごめんね？」

「なにが？」

「なんか、態度悪くて」

「なんで態度悪かったわけ？」

「カイが遊びに行っちゃったから」

「なんで俺が遊びに行くのがヤなの？」  
「だって、なんかヤだ。淋しいじゃん」

もう、エルメス可愛い！ 健気！ よし、やっぱり夜遊び再開しよう。でも面倒くせえから素人女はもうやめよう。

やっぱり最低な俺はそう決めて、エルメスの髪に着いたキロの羽根を取る。

「もう怒んねーの？」

「うん、ゴメンね」

「いーよ」

やはり俺にはエルメスが最高の癒しだ。んで、やっぱり俺って最低。



報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

今思えば、マインドコントロールだったんだろう。

あの戦いが始まる前にアーサーが言ったよな。ジュリオ様は俺らをジュリオ様に絶対的に服従する忠実な兵器として育て上げたんだと。

それを踏まえて考えると、そもそも俺は「そう言う風」になるようになっていたのか。

この前の催眠術の件で、ちょっとだけ精神医学について調べてみた。同じものかと思ってたけど、洗脳とマインドコントロールは違う物らしいな。

【通常、児童からの教育段階で偏った情報を与えて、特定の（一部の者に都合の良い）思想や価値観を持たせてしまう場合はマインドコントロールに、既に成長して主義・思想を持つ人間に働き掛けて、

特定の主義・思想に（本人の意思に関わり無く強制的に）変更してしまう場合は洗脳に分類される。

特に後者では、薬物の使用や過酷な環境下において、人間の精神が極めて受動的になることを利用して行われる】

だとさ。俺はジュリオ様に子供の頃からマインドコントロールされて、きつと今はジュリオ様によって精神的に追い詰められたせいで、エルメスを盲信するように洗脳されたって事なんだろう。

いや、自分からそうなっちまったってことは、セルフマインドコントロールにあたるのか。ま、どっちにしたって異常に変わりはないし、どっちでもいいか。よくねえか。

でも、そこまで精神的に狭搾していたんだとしたら、あの先生の言った通り、俺は色々深く考えすぎるタチなのかもしれない。場合によってはそれは良い事なんだろうが、この事に関しては悪い事なんだろう。

この点に関しては、エルメスを見習った方がいいのか。シュヴァリエ達を見習った方がいいのか。あんなバカどもを見習えと？ スゲエ嫌なんだけど。

しかし、俺には悩みの種が尽きないんだから仕方がない。そりゃ悩み事も山積みになるはずだ。

「はあ、もう半年も待ってるのに、アーサーさんはいつ帰ってくるの？」

「さーな」

「んもー！ バカ！」

「俺に言うな。アーサー帰ってきてから本人に直接言え」

「ムリ、コワイ」

今の所最大の悩みの種はアーサー、アンタだ。アンタのせいで俺が責められてんだぞコノヤロー。

今日は6月25日。半年経ったぞコノヤロー。マジでいつまで待たせる気だコノヤロー。エルメスがどれだけアンタの帰りを心待ちにしてるかわかってんのかコノヤロー。

サンルームで煙と共に溜息を吐く俺の隣で、エルメスもキ口を見つめながら深い溜息を吐いている。エルメスはきつと俺なんかよりもはるかに待ちくたびれてる。辛いだろうな、そう思ってエルメスを見ていたら、エルメスが何かを思いついたような顔をしてこちらに振り向いた。

「あのね、明後日北都の誕生日なんだよ」

「へえ、そうなのか。おめでとう」

「アハハ、ありがとう。北都が生きてればもう18歳だ。アーサーさんと出会ったころはまだ子供だったけど、生きてればもう大人なんだね」

「そうだな」

「きつとランスもすぐに大人になっちゃうね」

「だろうな」

もしかしたら、エルメスはランスに北都の影を見てるのかもしれない。まあ、無理もない。ランスはまだ子供だし、初期の頃からエルメスに懐いてたし。

完全にそう思ってたならランスが気の毒な気もするが、今すぐだと効果が期待できないから、エルメスにモーションかけるのは最低でも16になるまで待てつってるし、まあいいか。

「そついや、お前と北都って年離れてるな」

「実はウチの両親デキ婚だったらしいんだ。本人達は授かり婚だって言い張ってるけど。それで結婚が早くて家に余裕なくてずっと一人っ子で、私が兄弟ほしいってせがんだらしい。覚えてないけど」

「ハハハ、なるほどな。お前ガキの頃から我儘だったんだな」

「ま、ね。今思うとすごい我儘なお願いだよね」

「じゃあ北都メチャクチャ可愛かったろ」

「そう！ もう、私嬉しくてさ、家族全員溺愛だよ。北都を独り占めしたくて傍から離れなかつたもん」

「俺にはどつちかつつーと北都のが溺愛してるように見えただけど？」

「多分小さい時から溺愛しすぎたんだねえ。小さい頃はお姉ちゃんとは結婚するんだって聞かなかつたもん。可愛いよねえ。私もウンつて言ってたけど」

そう言っただけ嬉しそうに笑うエルメス。仲がいいのは大変結構。でも今の発言がアブナイ気がするの俺だけか。エルメスは実はシヨ

タコンなんじゃねえか。

いや、じゃあクリシュナさんは？

「そんだけ溺愛してて、北都はよくお前の結婚許したな。大反対されてもおかしくなさそうじゃん」

「最初聞いたときはアーサーさんに任せるよりは安心できそうって言うってたよ」

「そんな前から仲悪かったのか、あの二人は」

「もう最初からだよ。お姉ちゃんを連れてっっちゃう奴なんか嫌いだって」

初代白兔は狂犬に噛みつかれたか。アーサーに噛みつくとは、北都は怖いもの知らずだな。さすがはケルベロスの再来だ。

そう言えば俺もクリシュナさんと北都にエルメスを虐めるなって散々文句言われたような。虐めてねーし。遊んでただけだし。

「でね、後からもう一度聞いてみたの。どうして結婚許してくれたの？ って」

「そしたら？」

「そしたらね、僕という時よりもお姉ちゃんが幸せそうだから譲ってあげるって」

「なんて姉思いな奴・・・」

「本当に。だから私も北都には幸せになって欲しかったんだけどね。体は消えちゃっても、ずっと一緒に楽しく生きていきたいなって思ってたのにな」

「北都はお前と一緒にいられて幸せだったと思うぞ」

「そうかな？」



「絶対そう。決まってるだろ」  
「そっか。ありがと」

そう言っではみたものの、そう返事をしたもののエルメスは悲しそうだ。当然だ。北都はそれほどまでにエルメスが大好きで、エルメスもそれをちゃんとわかってて大事にしてたのに死んでしまった。キロに目を向けたエルメスの瞳には、とうとう涙が浮かんでくる。

こういう時、エルメスが俺の前でしか泣かないのか、俺がエルメスを泣かせてしまっているのか、どっちなのかわからなくなってくる。

俺だつて北都と同じくらいエルメスを大事に思ってるつもりなのに。きっと北都はエルメスを泣かせたりしなかったはずなのに。エルメスの心は俺が守ると決めたはずなのに。

泣いているエルメスになんて声をかけてあげたらいいかわからなくて、とりあえず頭を撫でてみる。するとエルメスは俺の肩に頭を預けて余計に泣き出してしまった。

ああ、ヤバい、どうしよう。なんで？　なんで？　と、内心大慌てな俺の気を知ってか知らずか、エルメスは泣き続ける。仕方なしに再びナデナデを再開すると、しばらくしてからエルメスは俺から離れた。

ああ、やっぱり俺はエルメスを泣かせてしまうんだな、と軽く自己嫌悪に陥る俺に、エルメスは涙を拭って顔を上げた。

「カイ、ありがとう。もう落ち着いたから大丈夫だよ」

「そか」

「カイは優しいね」

「優しくねえ」

「優しいよ。私を泣かせてくれるから。私が泣ける場所になれるから」

「・・・俺が？」

「うん、あのね、泣いたら、涙と一緒に罪とか悲しみも一緒に流れていく気がして、落ち着くの。カイは前からそうだったでしょ。私の気持ちをわかってくれて、ただ泣かせてくれる。だから、カイが傍にいてくれたら安心して泣けるの。私、カイのそう言う優しさが大好きだよ。ありがとう」

エルメスは勘違いをしている。俺はエルメスの気持ちをわかってない。エルメスがそう言う風に思っていたとは完璧想定外。むしろ俺が勘違い。逆にありがとう。

エルメスも勘違いしてるし、俺も勘違いしてるし、本当にアーサーの言った通りバカコンビだ。

つーか、先生の言った通り俺は本当に考え過ぎなのかもな。少なくとも、悪い方にはあまり考えないことにしよう。その方がストレスの軽減にもなるしな。

そう考え直していると、エルメスはにっこり笑って言った。

「弟は、北都はいなくなっちゃったけど・・・でも、カイはお兄ちゃんみたい。優しくて楽しいお兄ちゃんが傍にいてくれて、私ってホント幸せ者だよね」

なーにバカなこと言ってんだかと思っただが、それで言った俺も、バカだ。

決意表明

届かないとわかっていても、祈らずにはいられない。叶わないと知っていても、願わずには、いられない。

化け物に堕ちても尚、「愛」という感情を消してくれなかった残酷な神よ、地獄に堕ちろ。

主よ、永遠の安息を彼らに与え、  
絶えざる光でお照らしください。  
正しい人は永遠に記憶され、  
悪い知らせにも恐れはしないでしよう。

天使があなたを楽園へと導きますように。

楽園についたあなたを、殉教者たちが出迎え、  
聖なる都エルサレムへと導きますように。  
天使たちの合唱があなたを出迎え、  
かつては貧しかったラザロとともに、  
永遠の安息を得られますように。

自分にやらせてほしい、と名乗り出たダイナのレクイエムと共に  
暗い墓穴に沈められる棺を見て、エルメスは慟哭する。

後悔に眉を顰め、苦悩に顔を歪め、悲壮に涙するエルメスは、レ  
クイエムと二つになった墓石に、改めて思い知らされた。

愛していた大事な家族が、ミラーカさんが、死んだと。

慟哭して泣き絶るエルメスを抱きしめながら、俺は心に決めた。

昨日、エルメスが突然言い出した。

「ミラーカさんを迎えに行く」

以前城に行ったときは、エルメスはそのあまりの荒廃ぶりに耐えきれずにすぐに戻ってしまった。

もう平気なのか、そう聞きたかったけど、エルメスの瞳は自らを奮起するような光が宿っていて、その言葉を飲み込んだ。

さすがに2人だと、というか俺1人だと心許ないと思って、ガラードと3人で城に行った。

城に着いて、その様相に驚愕するガラードと、繋いだ手により力を込めて俯くエルメス。驚いていたガラードはそんなエルメスにすぐに気付いて、空いているもう片方の手でエルメスの肩を撫でる。

「ありがとう」

顔を上げたエルメスは礼を言って微笑むと、手を離して城の裏庭へ歩き出した。俺とガラードもすぐにエルメスの後に着いて行く。

墓石の前に辿り着くと、エルメスはその前に跪いて手を合わせる。

「ミラーカさん、遅くなってごめんなさい。一緒にインドに帰りましょう。本当はオーストリアに連れて行きたかったけど、できなくてごめんなさい。こんな、お墓を暴く様な事をしたくはなかったけど、ミラーカさんを一人にしておきたくないんです。一緒に、帰りましょう」

ミラーカさんに語りかけたエルメスは立ち上がると、墓石を外してガラードに持たせた。エルメスはもう一度手を合わせ礼拝すると、両手を地面に向ける。その直後からボゴツと地面が蠢き始め、土がだんだんと横に流れていき、そこからミラーカさんの棺がゆっくりと這い上がってきた。

棺が完全に姿を現すと避けていた土は元の場所に戻り、更に周囲の土も寄せ集めて、最初からそこには何もなかったかのように均される。

ガラードに持たせた墓石を再び元に戻すと、エルメスは左手を棺に添えて、右手を俺達に差し出す。俺達が手を取ると、インドの屋敷のサルーンに出た。

「カイ、ガラード、葬儀の準備をお願いしてもいい？」

「カトリック式しか知らねえけど、いいか？」

「うん、お願い。その間、私休んでいいかな。まだ力を使うのにはあまり慣れてなくて、ちよつと疲れたから」

「ああ、そうしろ。ガラード、準備は俺が仕切るから、お前はエルメスに着いてろ」

「わかった。じゃ、エルメスいこっか」

「うん、ありがとう」

ガラードと共に階段を上っていくエルメスの背中を見送って、ミラーカさんの棺の前に跪いて十字を切った。

「ミラーカさんは東欧系だったからもしかしたら正教会かもしれま

せんが、俺らカトリックしか知らないので、許してください。そのかわり、これから毎日エルメスが会いに来ますから。もう貴女を一人にはしませんから」

ミラーカさんの棺にそう語りかけて、俺もシュヴァリ工達を招集しに向かった。

俺 「ミラーカさんは吸血鬼として死んだから、吸血鬼らしく弔う。十字架も聖水も聖餅もいらぬ。聖鐘も不要だ。聖水の代わりに血を用意しろ。あとはレクイエムと埋葬だけでいい。ああ、花の準備を忘れるな。ミラーカさんに似合う華やかな牡丹や薔薇を用意しろ。レクイエム覚えてる奴は？」

トリス「あ、俺覚えてるよ」

ダイナ「俺も」

俺 「じゃあどっちか頼む」

ダイナ「俺がやりたい。俺にやらせて」

俺 「ああ、任せた。じゃあ残りの奴らはミサの準備だ。トリス、ユアン、リオ、お前らは花を調達してこい。ベディとペレアスは新しい石碑を用意しろ。逆十字の紋を刻め。パーシーとキルシュは墓穴を掘れ。ガルフ、埋葬するまで彼女はクリシュナさんの部屋に安置しろ」

返事をした面々はすぐに準備に着手した。俺も細かく指示を出して、ミサの進行を練りながらエルメスの事が気になった。

アイツ、きつと今頃泣いてるんだろうな。無理して笑顔なんか取



り繕いやがって。とりあえずガラードに任せてるから安心できると思っただけ。ガラードならきつと、エルメスと一緒に泣いてくれるはずだ。

内心エルメスの事を思うと気が気じゃなかったし、本当は俺が傍にいたかったけど、そう言い聞かせた。

仕事から帰ってきたシャンティ達も作業に合流すると、シュヴァリエ達が「ここは任せてエルメスに着いててやれ」と言ってくれて、その言葉に甘えることにした。

寝室に入るとエルメスは寝ているようで、エルメスの手を握ってベッド脇にガラードが腰かけて、エルメスを見つめていた。

「エルメス、泣き疲れたみたいで寝ちゃったよ」

「そうか、その方がいい。寝てる間は何も考えなくて済むからな」

「うん、そうだね」

そう言えば、インドに来た初期の頃はまだ夜だったのに早く寝たりしてたな。もしかして、眠っている間は恐怖から逃げられるって無意識に眠っていたのか、そう考えながらガラードの反対側に腰かけて、眠るエルメスの髪を撫でた。

「眠り姫みたいだね」

「ああ」

「夢の中くらいは、幸せな夢を見て欲しいな」

「そつだな」

「最近は悪夢とか見てる？」

「たまにな。うなされてたり、飛び起きたりすることがある」

「・・・エルメス、急に迎えに行こうなんて言っつて、まだ早かったんじゃないかな。大丈夫だったのかな」

「どうだろうな。エルメスは乗り越えようとしてるんだろうけど、

一人で我慢させるのは、心配だ」

「そつだね。乗り越える手伝いはしたいけど、無理はさせたくないな」

ガラードと二人でエルメスの様子を見てみると、午前0時を回った頃にランスが寢室に戻ってきた。

「とりあえず、一通り準備は終わったよ」

「そつか、悪かったな。お前はもう寝ろ」

「僕もエルメス様見てる」

「いや、お前は寝ろ。で、朝になってからエルメスを見てる。俺は昼間起きてられねえし、多分エルメスもそつだと思っつが、念の為。

俺がついてるから、二人とも風呂行っつて来い」

「わかつた」

「じゃあ、副長お願いね」

「ああ」

二人が出て行つたあと、エルメスの髪を撫でながら、思っつ。エルメスはあの戦争の後、俺達の前では「普通」にするように努めていた。

勿論、ふさぎ込んで泣いていたけど、それでも明るく振舞っつてい

た。この「異常」な状況で「普通」であるというのは、逆に「異常」なんじゃないか。そう思うと、急激にエルメスが心配になってくる。

裏切りに耐え、家族を失ったことに耐え、アーサーが消滅したことに耐え、ジユリオ様を許そうと努め、俺達にまで気を遣い、アーサーの帰りを待ちながら、自分の力で乗り越えようとしている。

エルメスは強い奴だけど、人は、それほどの苦痛に耐えられるようにできているのか？ 本当は、エルメスの心は無事ではいられないんじゃないのか。

エルメスの以前と変わってしまったところ、以前よりはるかに怒らなくなつて、媚びるようになった。愛想笑いをするようになった。我儘を言うようになった。贅沢をするようになった。よく眠るようになった。人がいないことに恐怖するようになった。悪夢に飛び起きるようになった。俺に銃を向けられた時、恐怖していた。フラッシュバックに悩まされることがあった。

そう考えて、精神医学の本の内容を思い出した。

エルメスは、PTSDだ。

再体験・回避・過敏症状、間違いない。エルメスは何とかそれを踏破しようとしているけど、これ以上無理をさせたら最悪の場合、解離性同一性障害を起こす可能性もある。

我儘や贅沢をするのは無意識に危機介入をしているのか、現実逃避か、あるいは新型の鬱病の可能性もある。

エルメスの精神は、崩壊寸前だ。俺が守らなければ。自分のことで四の五の言っている場合じゃない。エルメスを、助けなければ。

葬儀が終わって、今日もエルメスと一緒に寝た。棺で寝るなんて突き放すのはもう止そう。エルメスの恐怖を少しでも軽減させたい。あんな風に泣くのは、今日で最後にしてあげたい。

「エルメス、もう城に行くのはやめような」

「・・・うん」

「あんまり、無理しようとするな」

「うん」

「最終的に前が幸せになるなら、どれほど時間がかかってもいいから、急ぎ過ぎるな」

「うん」

「一度メンタルクリニックに行つて診てもらおうか？」

「やだ。知らない人になんて会いたくない」

「そうか。じゃあ俺達に何でも頼れよ。前は多少つて言ったけど、何でも言う事聞いてやるから。お前の望みは、全部叶えるから」

「・・・ありがとう」

俺は、決めた。エルメスを幸福に導くことが出来るなら、俺は何でもする。何にでもなる。以前ランスが言っていた。

「本物の騎士は悪にすら手を染めるものです」

俺はエルメスに生涯の忠誠を誓ったシユヴァリエだ。エルメスの為に生きて、エルメスの為に死ぬ。エルメスの望みは、全て実現させてやる。

エルメスが望むなら、何でもする。何だってやってやる。何だって許してやる。それがエルメスの望みなら、何をしても許される。例え誰が困ろうとも、俺が壊れてしまっても、エルメスの幸せが、俺の幸せだ。

神を殺してでも、エルメスを幸福に導いてやる。それが俺の、使命だ。

## 決意表明2

とは言ってみたものの、ちょっと早まったかなとも思ったり。つか、つか俺はもう本当、うつ病になる。

「エルメス、俺ちょっと出かけてくる」

「私も行く!」

「・・・わかった」

「どこ行くの?」

「あー、本屋」

本当は先生にエルメスの事を相談しに行こうと思ってたんだけど、俺の事とはかく、エルメスの事はちゃんとしたプロに聞いた方がいいと思っただけど、あえなく挫折。

よく考えてみたら、エルメスは俺が出かけようとするといつも着いてきたがるし、俺が屋敷の外で単独行動をすることは不可能に近い。

まあ、折角秀才なんだから自分で勉強するか、と諦めて本屋に切り替えた。

「カイ、何の本買いに来たの？ エロ本？」

「違いよバカ！ アレだよ、雑誌。ファッション誌」

「ああ、カイ服好きだもんね」

「そーそー。お前にも好きなの買ってやるから持って来い」

「うん！」

「予算は2万だからなー」

「わかったー！」

元気よく返事をしたエルメスは、すぐに専門書の書架へ向かって言った。それを見てちよつと焦った俺。

つーか、俺もそっちに用事があるんだけど、エルメスの隙を見てなんとかするか、そう思つて陰からエルメスを見てみると、エルメスは順調に本を選別していく。その背表紙を見て呆れた。

量子論、量子力学、ニュートン力学、物理学、相対性理論、宇宙論・・・お前は何になる気だ。ノーベル賞でも狙つてんのか。まあ、俺らのアタマなら狙えるだろうけど。

しばらく見張っているとエルメスは別の書架に移動したから、すぐさま本を選別して買い物済ませた。少し待っていると、エルメスも本を選び終わって俺の所にやってきた。エルメスの身長よりもうず高く本を積んで。

「あ、カイやつと見つけた！」

そう言つて俺の下に走ってきたエルメスに一抹の不安。

「バカ！ 走るな！」

「あつ、わああ！」

「うわっ！」

案の定陳列棚にぶつかつたエルメスは、俺に向かつて本をぶちまける。咄嗟に出でエルメスを抱き留めて、本をバサバサとナイスキヤッチ。俺スゲエ。

回りの通行人たちから拍手と賛辞を浴びながらホッと息を吐くと、俺から離れたエルメスも大喜び。

「うわあ、カイすごーい！ カッコイイ！」

「それよりお前、お約束みたいなことすんのやめてくんない」

「えへへ、ごめんね」

謝罪するエルメスからは微塵も反省の毛色が感じられない。腹立つ。恐らく同じことを繰り返してアーサーに怒られ慣れたんだろうな。

エルメスの抜け作は今に始まつたことじゃねえか、と諦めてそのまま会計を済ませて店から出ようとしたら、意外な人に遭遇した。

「あら、カイさんお久しぶりですね」

「先生！ ここで会つたが百年目ですね！」

「言葉のチヨイス間違えてませんか？」

「こんなところで会えるとは、運命を感じます」

「そんな事おっしゃって、彼女さんに後から怒られますよ？」



苦笑しながら先生が俺の横に視線を移して、釣られて見るとエルメスが膨れっ面をしていた。どうもほったらかしにしていた事に気を悪くしたようだ。

「カイの知り合い？」

「ああ、エルメスわりい。この人はえつとー……」

そこまで言っただけで困った。素直に紹介するわけにいかねーじゃん。言葉に詰まる俺に、エルメスは猜疑と軽蔑の視線を投げかける。

「カイ、まさか……」

「違う違う！ ちょっと耳貸せ！」

「わっ、なに？」

「この人は医者だ。血を盗みに行った時に見つかっちゃって。金握らせて血を盗むのを黙認してもらってたんだよ」

「え？ そうなんだ。カイってドジだね。慎重にって言ったのに」

「うるせえ。吸血鬼って事は言っただけから気をつける」

「うん、わかった」

何とか適当に誤魔化した。我ながらいい言い訳を思いついたもんだ。話に納得したエルメスは先生に向かってにこっと笑いかけた。

「はじめまして、どうもお世話になってます。私彼女じゃないですよ。カイのあるじでエルメスと言います」

「まあ、それは失礼しました。カイさんがお仕えしてる方なのです

ね。私医者をやってます、ジユノと言います。よろしく  
「「こちらこそ、よろしくです」

自己紹介を済ませてほのぼの雰囲気でエルメスとジユノ先生は握手を交わす。その瞬間、エルメスは驚いたような顔をして、それにジユノ先生も気づいた。

「あらエルメスさん、もしかして気付いちゃいました？」

「き、気付いちゃいました」

「は？ なにが？」

「お二人とも、今からお時間あります？」

「はい、私もジユノ先生とゆっくりお話ししたいです」

「ありがとうございます。上階にテラスがあつた筈ですから、そこに行きましょう」

「はい」

「だから、何が？」

俺の何が？ を置き去りにして二人はさつさとエスカレーターに向かつて行き、エルメスが早く！ と急かすもんだから渋々ついて行った。

テラスに到着してエルメスはあたりをキョロキョロと窺って安全を確かめると、すぐに目を輝かせてジユノ先生の手を取った。

「ジユノ先生に出会えて、私感激です！」

「ありがとうございます。もしかしてエルメスさんも？」

「はい！ カイもです！」

「まあ、そうだったんですね」

「だから何がだよ」

「もう！ カイの鈍感！」

「イテ！」

なぜかエルメスにバシッと腕を叩かれた。なぜだ。俺は質問しただけなのに。腕をさすりながらエルメスを睨みつけていると、エルメスは嬉しそうに言った。

「ジユノ先生も人間じゃないよ」

「は！？ ウソだろ！？」

「本当！ だって手を握った時、皮膚の物質がタンパク質じゃなかったもん」

「あら、それでわかったんですね」

「は？ じゃあ先生は何者ですか？」

「当ててみてください」

そう言っつて微笑むセクシー美人女医。背が高くすらつとして、出るところは出た妖艶な肢体。栗色のウェーブのかかった長い髪、弧を描く綺麗な唇、艶やかな白い肌、黒く大きな瞳、見た目はミラー力さんに匹敵するほどの美人。

美しくなけりや化物としての値打ちはないと聞いたことがある。美しさこそが神への背徳だと。それを踏まえたら十分にその資格があるとと言える美貌の女性。こんな美人が化け物なんて勿体ねえ。

「とりあえず、吸血鬼ですか？」

「違いますよ」

「あ、じゃあ妖精！」

「残念」

「まさかの人狼？」

「違います」

「わかった！ 死神でしょ！」

「不正解」

「ま、まさか天使ですか？」

「まさか。違いますよ」

「えー、もうわかりませんよ。先生俺降参」

「わかんない！」

完全お手上げな俺とエルメスに先生はクスクス笑う。しょうがないな、という顔をした先生はにっこり微笑んだ。

「ヒントです。私は国ではこう呼ばれています。ジュノ・アスタロト」

「えええええ！？ ア、ア、アスタロト！？」

聞き覚えのある名前に、エルメスと仰天して顔を見合わせた。

「え、え、ジュノ先生があのアスタロトですか！？」

「あの地獄の大悪魔、地獄の3大領主の一人、アスタロト！？」

「あら、ご存じ戴けてたみたいで嬉しいです。いかにも私が“大侯

爵”ジュノ・アスタロトです」

『マジでえええええ！？』

アスタロトつつつたら以前ドイツに悪魔退治に行った時に、アーサーが逃げられたって言うあの大悪魔アスタロト！

大物中の大物じゃねえか！ しかもこの人の配下の悪魔いっぱい殺しちまってるし、それがバレたら殺される！

「エルメス、あの事は黙ってるよ」

「そ、そうだね。アーサーさんが取り逃がすほどだもん。絶対敵わないよ」

「フーかまさか直接会い見えるとは思わなかったぜ」

「本当だよ・・・うっかり謝罪しそうになっちゃったよ」

「マジお前絶対言うなよ。言うなよ」

「うん、これは本当絶対言わない」

エルメスとヒソヒソ相談を済ませて先生に向くと、相変わらずニコニコ微笑んでいる。悪魔が常に恐ろしい顔をしているとは限らないってこういう事なんだな、と納得するほど綺麗な微笑だ。全く持つて恐ろしい。

「す、すいません。俺ら元神父と元シスターなもんでビックリして「そうなんですよ。まさか実在するとは」

「あら、そうだったんですね。そういえば二人はなんの魔物ですか？」

「あ、私達は吸血鬼です」

「もう悪魔に比べたらカスみたいな化け物ですよ」

「ホントホント」

「元聖職者で吸血鬼？ お二人とも随分と面白いですね」

「えへへへへへ」

「ハハハハハハ」

なんとかご機嫌をとりつつ、媚びつつ、笑って誤魔化すバカコンピ。アスタロトと知って急に怖くなった俺らは必死だ。

はつきり言つてアーサーより怖え。つーかなんでまた人間界にいるんだよ。なんで医者やってんだよ。

「あの、ジユノ先生・・・いや、ジユノ様」

「ジユノでいいですよ」

「いえ、そう言うわけには参りません。ジユノ様は何故医者を？」

「ああその事ですか？ 医者なら効率よく患者の魂を戴けますから」

「あ、ああ、そうですね。さすがジユノ様」

「でもカイさんが術にかからなかった理由がはつきりしてよかったです。吸血鬼なら人間用の術がかからなくて当然ですもの」

アレ催眠術じゃなかったのか！ 俺魂抜かれそうになつてたのか

！ 怖！ この人怖！

意外な新事実に震えあがる俺。そんな俺とは対照的にエルメスはあるうことかジユノ様に食って掛かった。

「術ってなんですか！ カイを殺そうとしたんですか！」

「ごめんなさいね。それが生業ですもの。こうして知己になったか

らには、もう殺そうとしたりしませんよ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ、本当です。吸血鬼の知り合いができる事なんて滅多にありませんからね。殺してしまうのは勿体ないですから」

「そ、そうですか。ならいいです」

意外にあっさり引き下がるエルメス。俺の為に怒ってくれたのは嬉しいんだけど、できる事ならもう少し引っ張ってほしか・・・いや、無理か。無理だな。エルメスがジユノ様の逆鱗に触れなかっただけ幸いだと思おう。

「あの、ジユノ様は男ですか？ 女ですか？」

「エルメスさんまで・・・性別は、悪魔にはありませんよ。普段人間になるときは男の方が圧倒的に多いですが、女医の方が男女問わず安心されますから」

「ああなるほど、さすがジユノ様。さすが知略の悪魔ですね」

「エルメスも見覚え」

「うん、頑張る」

「でも前回来た時にとってもいい男と出会って、その顔を拝借しようかどうか迷ったんです」

「いい男？」

首を傾げる俺らににっこり笑ったジユノ様は、パツと男に姿を変えた。それを見てジユノ様に抱き着いたエルメスに、その瞬間、その一瞬で俺は走馬灯が100回見えた。

「アーサーさあああん！」

「エルメス！ やめろ！ やめろって！」

「だって、アーサーさ・・・あ、しまったああああ！」

無理やりエルメスを引きはがすと、すぐに事態に気付くも時すでに遅し。アーサーの姿をしたジュノ様は、アーサーの様に不遜に笑った。

「お前達、この男と知り合いか」

「ウソ・・・声も喋り方ま・・・むぐっ」

「お前も喋んな！ いやいや、違うんですよ！ エルメスが好きな俳優に似てたから興奮しただけですよ！ 本当！」

「この私にそんなウソが通用するでも思っているのか？ 元ヴァチカンのエクソシスト」

「・・・」

「こ、怖えええええ！ さすが知略の大侯爵！ あっさり見抜かれて俺放心。俺に無理やり口を塞がれたエルメスも放心。」

「これはもう、死んだな。俺ら死んだ。さようならみんな、さようならアーサー。ジュリオ様、今から逝きます。」

死を覚悟して心の中で遺言を呟く俺とエルメスに、偽アーサーは再び不遜に笑う。

「心配するな。さっきも言っただろう。吸血鬼、しかもあの男の知



り合いならば殺す理由はない」

その言葉に生氣を取り戻したエルメスは、口を塞いでいた俺の腕を剥がして偽アーサーに食いついた。

「アーサーさんの知り合いなら殺す理由がないってどういうことですか!？」

「以前あの男、アーサーに会った時に約束をした」

「は!？ 約束!？」

「そうだ。吸血鬼の女は永遠の処女。アーサーの眷属の女吸血鬼、その娘の魂と引き換えにアーサーの身内の者を殺さない、とな」

「ええええええ!？」

「その娘と言うのはエルメス、お前だな？」

「ちつ違います! 違います!」

「私にウソは通用しないぞ。吸血鬼の魂など、そうそう手に入るものではない。楽しみだ」

「ヒイイイ!」

アーサー!？ マジあり得ねえんだけど! 何勝手なことぬかしてんだテメエは! 何勝手にエルメスの魂悪魔に売り渡してんだテメエは! 自分の売れよ! つーかアンタが逃がしたのかよ! マジ最低だなテメエは!

ショックでエルメスは再び放心だよ。エルメス可哀想すぎんだろ。・いくらジユノ様と敵対してアーサーじゃ敵わないってなったからってそりゃねえよ。もうテメエ帰ってくん。むしろ死ぬ。

ジユノ様の登場で、アーサーに反旗を翻した俺の隣で何とか気を

取り直したエルメスは、悲しそうに俯いて呟いた。

「でも、それならあの戦争の時、私の魂と引き換えにみんなを助けてくれればよかったのに」

俺としてはその意見には大反対だが、エルメスの気持ちはわかる。そんなエルメスの様子を見て、ジユノ様は溜息を吐く。アーサーみたいに。

「その件に関してはアーサーに打診したが、拒絶された」

「え？ そんなんですか？」

「ああ、去年の秋ごろだったか。急に現れて「今くれてやるわけにはいかない。それより、ソイツの魂を他人に奪われそうだ。そうなるとお前が困るだろう。そうならないように策を施せ」と言われてな」

「去年の秋？ あ、私の誕生日！ 道理でアーサーさん一人でインドに・・・」

「それで、どうしたんですか？」

「カメルレンゴを操り教皇に入れ知恵させて、敵の首魁を殺させた」

「はあ！？ あれはジユノ様の命令だったんですか！」

「そうだ」

なんてこった・・・マジ、なんてこった。あれはただの教皇命令じゃなかったのか。てことは、俺がジユリオ様を殺したのはジユノ様の、アーサーの策略って事か！ マジでどこまでアンタは・・・俺はどこまでアンタの策略に踊らされりゃいいんだよ！

「マジ最低だよ、最悪だよアーサー・・・アイツ死ねばいいのに」  
「本当、今度ばかりは死ねばいいのにね。最低」  
「ハハハ、あの男は吸血鬼にしておくには惜しいな。死んだら悪魔にしてやるさ」

『やめてください!』

とりあえず、テメエ帰ってきたら殴らせる。撃たせる。つーか殺す! できるかどうかはおいとして。

エルメスの魂を悪魔に売り渡すわ、カメルレンゴ操って俺にジユリオ様殺させるわ・・・まあジユノ様がそういう手段をとると予測してたかは定かじゃねえが、結果としては同じこと。

テメエは悪魔以上に悪魔だ! 最低だ! 死ね! テメエが最低すぎて目の前の偽アーサーにすらムカつく! クソ! 殺してええええ!

「ジユノ様・・・とりあえずその姿やめてもらえませんか? 怖さ5割増しなんですけど」

「本当お願いします。アーサーじゃビビッて誰も食いつきませんか」

「だろうな。せいぜいひっかかるのは頭の悪い女だけでしょうね」

言いながらパツとさっきの美人女医の姿に戻ってくれたジユノ様に感謝。しかしその言葉を聞いて落ち込むエルメス。

ああ、誰よりも引っかかったのはコイツだった。つくづくアーサ

「はロクでもねえ奴だ。」

エルメスはひとしきり落ち込んだ後、急にハッと顔を上げて、恐る恐るジユノ様に振り向く。

「あ、あの、つかぬ事をお伺いしますが、私、ジユノ様に殺されるんですか？」

「今すぐってわけではありませんよ。今すぐじゃつまらないですからね。」

「じゃあ、いつですか？」

「ときにアーサーは？」

「今いないんです。なんか消滅しちゃって。帰ってくるとは言ってるんですけど。」

「そうですね。とりあえずアーサーが帰ってくるまで待って、それから面白く魂を戴ける算段を整えると思います。」

「お、面白く……。」

「エルメスさん、これから仲良くしましょうね。」

「いつ！ あう、ハイ……。」

「その際、カイさんにも役に立っていただくとしましょう。」

「拒否権は……。」

「ありません。」

「ですよね……。」

「アーサー、テメエがクソ野郎なせいで、俺がエルメスの魂を面白く売り渡す手伝いをする羽目になったぞ。どうしてくれんだコノヤロ。」

「つーか面白くってなんだよ。こえーよ。マジこえーよ。何させられんの俺。」

「カイさん、エルメスさん、魂を貰うんですから当然、代価として一つだけ願いをかなえてあげましょう。その願いを達成する為であれば何でもお手伝いしますから、何でも言ってくださいね」

「はぁ・・・ありがとうございます」

「え、つーか俺もですか」

「あなたにも願い事がありましたよね？」

「あれはキャンセルで・・・」

「不可です。今なら変更は可ですよ」

これは、強力な味方だと思っていいんだろうか。願い事の仕方によつてはウマイ事行きそうだが、相手は知略の大公爵だ。相当うまく立ち回らないとあっさり魂喰われるぞ。

あー・・・こういう時にアーサーがいればなあ。エルメスがハンニバルと揶揄したほどの策略家だし・・・いや！ もうアーサーには頼らねえ！ アンタみたいならくでなしには頼らねえ！

どーせエルメスも俺も魂喰われんのが避けられねえんなら、俺がなんとかするしかない！ つーか、俺がなんとかする！ 見てろよ、クソ悪魔ども！

つーか俺、悪魔に魂喰われて死ぬんだ・・・ここまで不幸か、俺の人生。

## 辞表

ガツクリと肩を落として屋敷に帰ると、普段よりも賑やか。リビングに入ると驚くべき光景。

ミニスカートからスラリと伸びた綺麗な足を投げ出してソファに腰掛けるジュノ様と、その爪先にマニキュアを塗るシュヴァリエの姿。

俺とエルメスは思わず手荷物をその場に落下させた。

「何やってんですか!?!」

「何してんだテメエら!」

同時に叫んだ俺らにジュノ様とシュヴァリエ達は満面笑顔で振り向く。

「二人ともお帰りなさい」

「副長、エルメスおかえりー」

「おかえりじゃねーよ! 何やってんだ! つーか何してんですか

「！」

「ジ、ジユノ様どうしてここが・・・」

「うふ。獲物を逃がすはずがないでしょう？」

にこやかな大悪魔とデレデレなシュヴァリエにまたしても放心。どうやら俺らは大悪魔にロックオンされてしまったようだ。

「さすが副長だな。こんな美人の知り合いがいるなんてさ」

「さすがは百戦錬磨」

「さすが色男」

「こつちの気も知らねえで・・・」

俺とエルメスはその美女に殺される予定なんだけど。つかさつきまで偽アーサーされてたせいか、俺にはもう女に見えない。メツチヤ怖い人にしか見えない。獰猛な魔獣にしか見えない。ウサギとアリス大ピンチ。

戦々恐々とする俺とエルメスに残された選択肢は一つしかない。意を決したようにエルメスは俺に向いた。

「カイ、逃げよっか」

「そうだな、それ以外に生き残る術はない」

「瞬間移動なら追ってこれないよね、きつと」

「ああ、そうだな、そうしよう」

「アーサーさんのせいでこんな目に遭うんだから待つ筋合いないよ」  
「全くだ。もう他人に関わるのはよそう」

「そうだね。もうひっそりと引きこもり生活をしよう」

「どっかの山奥か、無人島でも買うか」

「あ、それいいね」

相談が纏まった俺らは手を繋いでみんなに向いた。

「今までありがとうとございしました。もう会う事はないでしょう。さようなら」

「絶対に探すな」

「ええええええ!?!」

突然の別れを切り出した俺らに驚愕の視線を向けるシュヴァリエ達に、バイバイと手を振って着いた先は……どこだ、ここは。

到着した先、俺の目の前にはスレシユの屋敷より一回りデカイ屋敷がそびえたっている。都会的な街並みに、広い庭、デカイ屋敷。賑やかに通り過ぎる東洋人。

「エルメス、もしかして……」

「とりあえず急だし、トリンとツァンにお世話になると思うの」

「やっぱベトナムか……」

「え?もしかしてなんか都合悪い?」

「いや、全然」

全然都合悪い。気まずい。と思ってるのは多分俺だけだとは思う



けど、ぶつちやけあの二人には会いたくねー。

しかし、背に腹は代えられねえし、状況が状況だ。正に藁にも縋りてえ気分だ。と言っても、別にあの二人を藁だと思ってるわけじやねえ。敵だと思ってるだけだ。

気合を入れなおす俺の隣でエルメスが門のベルを鳴らすと、ハイとトリンの声が響く。

「トリン！ エルメスだよ！」

「え！？ 急にどうしたの!？」

「ちよつと色々あって、いかんともしがたい状況に」

「とりあえず門開けるね。入って！」

「ありがとう」

その言葉の直後に耳に着く金属音を立てながらゆっくりと鉄製の門扉が開いていく。門をくぐって広い庭を抜けると、玄関先でツァンとお腹が大きくなったトリンと金髪の老人が出迎えてくれた。

「うわぁ、トリンお腹大きくなったね！ もうすぐ？」

「そう、来月の予定。ていうか、二人ともどうしたの？」

「ていうか二人だけ？」

「あ、あはは、マイケルさん、ご無沙汰してます」

「久しぶりだね、アミン。そっちは恋人かい？」

「いや、友だ・・・」

「下僕です！」

「誰が下僕だ！ ふざけんな！」

「もう、冗談なのにい。カイはすぐ怒るんだから」

「この状況で冗談言えるお前の神経疑うわ！」

「さっきから状況がどうのって何があったの？ 中入って、話聞か

せて？」

「そだね。お邪魔しまーす」

広いエントランスを抜けてリビングに通されると、リビングにはメイド達が待ち構えていて、恭しく首を垂れる。通常ならなかなかいい気分なんだろうが、今はそんな気分ですらなれない。

溜息を吐きながらソファに腰かける俺に、ツァンがニヤニヤしながら尋ねてきた。

「なになにー？ ついに愛の逃避行？」

「そんなわけねーだろ。アホか」

「ていうか、むしろそれならまだ良かったよ。まだマシだったよ」

「確かに、そっちの方がはるかにマシだな・・・」

「本当、何があったのよ」

「愛の逃避行どころか、魂の逃避行だ」

「なにそれ？」

「命がけで逃げてきたの。私とカイは一生逃げなきゃいけないの」

「なにから？」

『悪魔』

「は？」

首を傾げるデイヴィス一族に事の顛末を話してやると、その表情は驚愕から怒りに変わり、段々と呆れた表情を浮かべはじめ。んで、最終的には憐憫に。

「アルの性格の悪さもそこまで来ると悪魔だな」  
「まさかそれほどは思わなかったよ。ちよつと見損なっちゃった」  
「でしょでしょ！ ちよつとどころか私はかなり見損なっちゃよ！  
もう本当あの人何考えてるんだらう。最悪だよ」  
「またしても俺はとばつちりだ。よくよく考えてみたらあの時俺が  
エルメスの傍にいなきゃ、俺まで狙われなかったかもしんねえのに」  
「よく言うよ。とばつちりは完全に私の方！ そもそもカイの知り  
合いで、最初から狙われてたじゃない」  
「・・・そうだった」

現実逃避にエルメスに責任を追及するも失敗。そもそもあそこで偶然会わなければこんな事には・・・やっぱある意味運命か。俺とエルメスは悪魔に魂喰われて死ぬ運命だったのか。

でも、いくつか気になることがある。こうまでなってもアーサーがそんな事をするはずがないと思う部分はあるし、俺もエルメスも、なぜすぐに殺さないのか。

そりゃ、すぐに殺すのはつまらないと言つのはわからなくもないが、アーサーの帰りを待つ必要性を感じない。

ひよつとすると、俺らはジュノ様に嘘を吐かれた？ 本当はアーサーとジュノ様の間では別の約束が取り付けられていて、それを隠蔽するために嘘を吐いた？ その可能性はゼロじゃない。きつと裏がある。

殺さないと明言するほどだから、きつと何かの取り決めは合ったんだらう。

アーサーはあの戦争が起きることを随分前から予測していた。もし、ジユノ様と出会う前から予測していたとしたら？ いや、出会った後でもアーサーはジユノ様に再度会いに行ってる。その際に願いの事の内容を変更していたとしたら？

アーサーはエルメスの魂を売ったりはしないだろう。その策謀の限りを尽くして、ジユノ様の裏を掻こうとするはずだ。エルメスの魂をやり玉に挙げておいて、その魂を狩る条件を付けている可能性は十分にある。ジユノ様をも騙すほどの策を用意していてもおかしくはない。

アーサーの願ひ事、今思いつくのは死者蘇生。そして、エルメスの幸せとアーサー自身の幸せ。それを手に入れるには、過去の清算？ そもそもアーサーがジユリオ様と“ミナ”と出会わなければこんなことにはならなかった。アーサーは過去を変えようとしているのか？

いや、わからない。そんなこと、両方とも可能だとも思えないし、仮にそれが成就してエルメスもしくはアーサーの魂が喰われては意味がない。

うーん、わからん！ 相変わらずアーサーは何考えてんのかさっぱりわからん！ 元々の考え方の違いか、もしくは生きてきた年月の違いか、その両方が。とにかく俺にはどんだけ考えてもわからん。

とりあえず現時点でわかっているのは、

- ・アーサーとジユノ様の間で何かの取引があった。
- ・俺とエルメスはアーサーが帰ってきた後に魂を喰われる。

「こんだけ確実って事か。こんだけわかってても何もわかんねえ。今回ばかりはヒントが皆無だ。謎だらけ。相変わらず俺を悩ませやがる。チクシヨウ。」

「カイ？ どうしたの？ ずっと難しい顔して？」

「え、あ、いや、なんでもない」

急にエルメスに思考を中断されて現実に帰った瞬間、屋敷の電話が鳴り響く。何となく嫌な予感。電話に出て少し話したトリンはこちらにチラリと視線を送る。その視線に横に首を振ると、トリンは頷いた。

「え、あ、そうなんだ。えっと、こっちには来てないよ。うん、本当知らない。ごめんね、うん、うん。じゃあね」

受話器を置いたトリンは溜息を吐きながら再びソファに腰かける。

「シャンティからだったよ。二人がそつち来てないかって」

「ハア、探すなつつたのに」

「いや、急にいなくなったら探すだろ」

「もう会う事はないだろうって言ったのに」

「そんな言い方されたら探すと思うよ」

「ここも時間の問題かもな」

「そうかもね。落ち着いたら本格的に逃げる準備しなきゃね」

「だな」

「二人とも本気だね」

「まあ、しばらくはゆっくりしてなよ。うちなら家業の都合上、食料も簡単に手に入るし」

「ありがとう」

それから屋敷の中を案内してもらった後、部屋を賜ることになった。ここにきて若干揉めた。

「部屋はアミンが前に使ってたのが残してあるけど、そこでいい？」

「うん、いいよ」

「カイくんも好きな部屋使っていいからね」

「ああ、ありが」

「カイもおんなじ部屋でいいよ」

ある程度は予想してたけど、エルメスのその言葉に二人はナヌツと表情を変える。こういうやり取りは久しぶりだ。

俺もエルメスと同室で過ごすには随分慣れたけど、たまには一人で過ごしたい。もう本当我儘言わないから、短期間だけでもいいから一人にさせてほしい。

「ちょっとアミン、そりやおかしいよ」

「どうして？ 今までおんなじ部屋だったんだから問題ないよ」

「えー！？ 同じ部屋だったの！？」

「そーだよ。コイツが我儘言うから。それにあっちの屋敷は部屋が満室で空いてねえし」

「でもウチは部屋いっぱい空いてるから、分けた方がよくないか？」

「俺的にもそうしたいのは山々だけど」

「おんなじ部屋じゃなきゃヤダ！」  
「コレだよ」

溜息を吐く俺に珍しく二人から憐憫の眼差しを受ける。その調子でもっと俺を憐れんで同情した上に畏怖してくれたら万々歳だ。

「アミン、さすがにそれじゃカイくんが可哀想よ」

「可哀想じゃないよ」

「お前な・・・」

「カイはイヤなの？」

「嫌だけど」

「ええー!?!」

「何ビツクリしてんだお前。俺は最初から嫌がってただろーが」

「でも最近は何も言わなかったじゃない」

「そりゃ慣れたただけだ」

「じゃあいいじゃない」

「お前・・・」

「そつ言つ問題か？」

コレもある程度予想していたが、エルメスは俺の意見を汲む気はないらしい。どこまでも我儘な甘えん坊だ。結局どこに行っても俺が折れる羽目になる。

「あーもー、わかったわかった同室でいいから。トリン、どっかの部屋から」

「ベッド持ってこなくていいからね」

「アミン!?!? 何言ってるの!?!?」

「今も一緒に寝てるから問題ないよ」  
「・・・カイクン、本当に友達なの？」  
「一応な」  
「今回はちょっと自信なさげだな」  
「バカ言うな。自信満々だ」  
「カイは友達だよ。ただ私に絶対服従なだけだよ」  
「それ友達じゃなくて主従関係だよな」  
「いつの間に立場逆転したの？ アミンに弱みでも握られてんの？」  
「そんなわけないじゃない！ カイが自分むぐっ」  
「黙れ。とにかく、もう面倒くせえからコイツの言う通りでいい」  
「・・・そう。わかった」

俺が折れて、エルメスの口を塞いだまま引き摺って部屋に荷物を置きに行った。部屋に着いたらエルメスが大暴れするもんだから離してやった。

「ぶは。ていうか、荷物つてさつき買った本しかないんだ」  
「トリン、ツァン、わりいけど今日はお前らの服貸せ」  
「いーけど、俺のじゃカイには小さくない？」  
「今日はしょうがねーからな」  
「ねえ、一瞬だけインドに戻ってみる？」  
「はあ？ それでジユノ様がいたらどうすんだよ。捕まったら終わりじゃねえか」  
「私が捕まったら終わりだけど、カイだけなら私は逃げる」  
「ざけんな！ 死ぬときは一緒だ！ お前も道連れ！」  
「道連れがなければいいセリフだったのに」  
「ていうかアミンなにげにヒドイよね」



ますます増幅する憐憫の眼差し。おそらくこの二人の目に俺はエルメスにいい様にこき使われる気の毒なイケメンに映っていることだろう。つーか俺本当気の毒だ。やっぱりあの誓いは早まった気がする。

その後も風呂の時以外はエルメスは俺に引っ付いて来るし、俺を引き回す。さすがに半年以上その状態だったから俺は慣れてるけど、二人の目には異様に映ったようだ。

エルメスが風呂に入ってる間自由時間をゲットした俺にツアンが話しかけてきた。

「カイも大変だね」

「マジで」

「アミン、前はあそこまでなかったと思うけど、やっぱりあの事件の影響かな」

「多分な。家族がみんないなくなっちゃまって孤独が怖いんだろう。」

この上更に悪魔に命狙われてんだから、不幸極まりねーよ」

「それはカイだって一緒じゃん？ アミンに構ってる余裕あんの？」

「ねえけど。でも、アイツを何とかしてやることの方が先決だ」

「アミンに何かあんの？」

「俺の憶測だけど、アイツは多分PTSDだ。あの事件が相当トラウマになってる。今は悪魔から逃げ回ってるけど、これはこれで良かったかとも思ってる」

「なんで？」

「状況から切り離すことも重要だと思っただけ。インドにはクリシュナさんとミラーカさんの墓もあるし、あの事件を想起させるものが多い。インドから離れて少しでも思い出す機会が減れば、アイツも少しは落ち着けるかなーと」

「ああ、それはそうかもね。カイは思った以上にアミン思いだな」

「まーな。伊達に世界一大事にしてねえよ」

「二番じゃなかったんだ」

「エルメスには言うなよ。アイツ調子乗るから」

「アハハ、なるほどね。わかった」

PTSDの治療法はいくつかある。投薬治療、同じ悩みを抱えた人間が集まって互いに慰め合う集団療法、そして家族療法。

治療には近親者の理解が不可欠だ。一人で悩ませるとより重症化するって書いてあったし、トラウマの原因を連想させるものを極端に避けるようになる、一人で行方をくramしたりすることもあ  
るらしい。

本来ならインドであるの二人の墓参りもちゃんとさせてやって、の方があの二人にとってもいいんだろうが、今は我慢してもらっしかない。

こんな理由で逃げ回るのは本意以外の何物でもねえけど、旅行にでも連れてってやるうかと思ってたし、良かったと言えばよかったのかもしれない。

つーか逆に状況が状況なだけに、これ以上ネガティブになりたくない。可能な限りポジティブに考えてねえと、マジでうつ病になるぞ俺は。少なくともエルメスの事考えてる間は余計なことを考えずに済むから、ある意味俺にとってもいい薬だ。

煙草に火をつけながら考え事をしている隣で、ツァンはクスリと笑う。

「実はね、俺勝手にカイに親近感持つてんだけど」

「何で？」

「俺と同じだから、かな」

「同じって？」

「大事な人との未来の為に、組織と過去を捨てたところ」

「お前も？」

「そう。俺元々デイヴィスファミリーの人間でさ、組織に拾われて育てられた。ファミリーの為にトリンとアミンに近づいて、トリンを売ってアミンを殺すつもりだった。だけど、いつの間にか俺は本気でトリンを愛してて、それに気づいたアミンが言ったんだよ。組織に恩があるのはわかるけど、過去は組織に置いてきて、未来を全部トリンにあげてくれて。それで組織を抜ける決意をした。結果的にはトリンがボスの娘だったお陰で丸く収まったけどね」

「そーか、お前も色々あったんだな」

「その時はやっぱりすごく悩んだけど、どうしてもトリンを幸せにしたかったし、トリンと幸せになりたかったから、今は後悔してない」

「そうか」

「多分カイもその内そう思える日が来るよ」

「だといいいけどな」

「カイは悩んでるだろうけど、努力してるから絶対大丈夫」

にこつと笑いながらツァンはお腹を撫でるトリンに目を向ける。

ツァンは悩んで選択した未来で、幸福を勝ち取った。他人に押し付けられた人生を退けて、自分で悩んで選択した未来。

苦悩と努力の果てに幸福が待っているという、いい前例だ。最初は嫌だと思っただけど、いい話を聞いてイイもんを見れた。ここに来たのは正解だったかもしれない。

「お前らの子供が生まれるまでは、ベトナムにいようかな」

「もしかして、子供好きなの？」

「まーな」

「超意外なんだけど」

「うるせーよ。言っとくけど俺もう2人育ててるぞ。一人は失敗したけど」

「それ聞いちゃうと心配なんだけど」

「任せろ」

「ヤダよ」

この二人の幸福がエルメスの幸福になるなら、俺もちょっとくらいは我慢するでしょう。少なくとも魂喰われる前に、少しくらいは幸せにしてやんねえと可哀想だからな。

吸血鬼だって人間より長生きってだけで、いつかは死ぬ。人間と同じように苦しいことも楽しいこともあっていいはずだ。

髪に見放された存在にだって、幸福になる権利はあるはずだから。

LETTER・7 Complaint 「苦情」

拝啓 バカマスター

私、怒ってるんですけど。本気で怒ってるんですけど！ 一体どういう事ですか！

ジュノ様に聞きました。私の魂売ったらいいですね。どういうことですか。一体今度は何を企んでるんですか。

ボニーさんとクライドさんの時以上に驚くことはもうないだろうと思ってたのに、あっさりビツクリ一位に躍り出ましたよ。一体どういう事ですか。

大体みんなの命を保証するために私の魂を捧げるなら、なんで戦争が起きた時にその契約を執行しなかったんですか？ 私一人の命でみんなが助かるなら、私はそれでよかったのに。

アーサーさんがあの時私だけでも守ろうとしてくれたのはわかるけど、じゃあどうして私の魂をジュノ様に売ったんですか？ 本当に、何を考えてるんですか？

今に始まったことじゃないけど、アーサーさんが何を考えてるの

か、全然わかりません。カイまで巻き込まれて、命を狙われる羽目になりましたよ。しかも、カイは面白く魂を奪う手伝いまでさせられる羽目になりましたよ。一体どうしてくれるんですか。

なんですか、面白くって！ こっちは殺されるんだから、何にも面白い事なんかありませんよ！ 本当ム力つく！

それでも一応冷静だったカイは、なんかずっと考えてましたよ。そりゃ、私だつて何の目論見もなくアーサーさんが私の魂を売るとは思えませんよ。アーサーさんの事だから、絶対何か裏があるはずですよ。

でもね、それを差し引いても裏があるうがなかるうが、ム力つくものはム力つくんです！ 私は本当に怒ってるんですからね！

私はアーサーさんが帰ってくるのを待つって決めたのに、アーサーさんが帰ってきたら私は死ななきゃいけません。

アーサーさんが帰ってきて、やっと前みたいに戻れるって喜んで、ボニーさんとクライドさんにも再会して私が幸せを取り戻した瞬間に、ジユノ様は私の魂を奪うのでしよう。

私はこれからアーサーさんが帰ってくるまで、ずっとその事を心配しながら生きなきゃいけないんです。

アーサーさんが帰ってきて私が死んだら、それまでずっと私を支

えてくれたみんながどれほど悲しむか。みんなの思いと努力が水の泡になってしまうのかと思うと、悲しくて仕方ありません。

だから私はもう、あなたを待ちません。待つのをやめます。アーサーさんが帰ってくるのを待つって事は、自分が死ぬのを待つって事だから。みんなの悲しみを迎えることになるから、もうやめます。

ていうか、もう逃亡しちゃいましたもんね！ もうアーサーさんなんか知らない！ 私にはカイがいるからもういいです！

よくよく思い出してみたら、ジユノ様の配下の悪魔に殺されそうになった時も、助けてくれたのはアーサーさんじゃなくてカイでしたから！

その間アーサーさんは助けるどころか、私の魂をジユノ様に売ってたんですもんね！ 最低！

なんか前はクリシュナと二人でカイが頼りにならないのどの言ってましたけど、アーサーさんに比べたらカイの方がよっぽど頼りになりますよ！ バカ！

アーサーさんが帰ってきたら私の所在なんてすぐにバレちゃうでしょうけど、捕まりっこありませんからね！ なんとって私は瞬間移動の術を習得しましたから！ ざまーみる！ 一生逃げ回ってやりますよ！

もう、事ここに至ってくると、アーサーさんが私を好きだったの

も怪しいもんですよ。アーサーさんならみんなを騙せそうですね。

本当は私の事なんかどうでもよくて、私の魂を代価にして何かしようとしてるんですよ。あの時どうしようもなかったことって言うたら、やっぱりミラーカさんですよ。術者に魂を捧げちゃったから、ミラーカさんはどうしても救うことが出来ませんでしたもんね。

私の魂を代価にして、ミラーカさんを生き返らせる気ですか。そうですね。

まあ、ミラーカさんならいいような気もするけど・・・気が向いたら協力してやってもいいです。でも、今は絶対イヤ！ ていうか、それなら自分の魂売りなさいよ！ バカじゃないの！ 自分だけ幸せになるうとして！ ムカつく！

ていうか、すっかり忘れてたけど二度ならず三度までもキスしましたね！ 腹立つ！ 別に必要なかったでしょ！ 普通に飲めって言われたら自分で血ぐらい飲みますよ！ バカじゃないの！

もう本当なんなんですか。本当ムカつく。今から一時間歯磨きしてきます！

もういいですよ。アーサーさんが自分だけいい思いしようとする



なら、いいです。私だって自分の好きにします。自分の好きに生きて幸せ掴んでやりますよ！

別に私アーサーさんが居なきゃダメってわけじゃないし！アーサーさんが居ないことになんてもう慣れましたもん！

私にはもうカイがいるから、アーサーさんなんていりませーん！  
バーカ！ バカマスター！

ま、アーサーさんがジユノ様との契約を取り消して、謝ってくれるなら許してやるうかなって考えなくもありません。けど、考えた結果やっぱり許せないってなるかもしれないけどね！

でもそれって自業自得ですからね！ バカ！ どうせなら私の魂使って、クリシュナか北都を蘇生させてやりますよ。いつそのことジユリオさんを蘇生させてやりますよ！

まあ、できるかどうかは知りませんが。絶対ただでは死にませんから！ 目にモノ見せてやる！

敬具



俺とエルメスの旅行記

逃亡生活を始めて半月経った。追手の追撃は今のところない。平和そのもの。変わったところと言えば、エルメスが異常に長時間歯磨きをするようになったことくらいだ。

なんなんだろうな、あれは。歯磨き依存症？ 新しい形の精神病か？

「お前もう30分歯磨きしてっけど、なんか意味あんのか」

「ほーほふ！」

「なんて!？」

歯磨き中のエルメスに話しかけたせいか、何を言ってるのかわからん。口をすすいでタオルで拭いたエルメスは、何故か怒ったような顔をしている。

「消毒よ！」

「消毒？ ゴキブリでも食ったのか」

「そんなわけではないでしょ！ アーサーさん！」

「は？ アーサーの消毒？ 意味わかんねえ」

「ん？　もしかしてカイはあの時見てなかった？」

「なにを？」

「・・・なんでもない」

「意味わかんねえ。なんだよ？」

「なんでもなーい！」

って言われても気になるんだけど。アーサーの消毒ってなんだよ。アーサー喰って消毒？　いや、そもそも喰ってねえだろ。

あの時？　あの時見てたって、戦争のときか？　歯磨き？　消毒？　・・・ああ、思い出した。

「なんだお前、舌まで入れられたのか」

「やつば見てたんじゃん！　ていうかそこまではなかった・・・いや、ん？　どうだったかな？」

「そんな連日長時間歯磨きするほど、ロン中搔き回されたんか」

「ヒイ！　嫌なこと言わないでよ！　そうじゃないけどムカつくの！　これは復讐なの！」

プツ。嫌なことだつてよ。残念だったな、アーサー。あーあ、アーサーがエルメスの魂売ったりするからだぜ。

エルメスがアーサーに惚れる確率は、今回の件で相当低くなったな。ざまあみる。それにしても、ちっちええ復讐だな。

エルメスの話を聞きながら笑ってたら、別の復讐を思いついた。

「エルメス、もっと効果的な復讐を思いついたぞ」

「なに!?!」

効果的な復讐という言葉にエルメスはピヨンと飛びついてきた。そのまま体を反転させてエルメスを壁に押し付けて、顔を近づけた。

「俺が消毒してやろうか?」

はつきり言って、これはただの趣味だ。人妻だったくせに、こういう話題になるといつもエルメスは過剰に反応する。いつも通りエルメスを虐めて、怒ったエルメスがキャンキャン言うのが楽しみだ。

「うん! 是非!」

「なんでだよ!」

「ぬゃ!」

相変わらずエルメスは俺の想像の斜め上を行きやがる。思わずツッコみと同時に頭突きした。

つーか、条件反射で頭突きしたもんだから、手加減できなかった。ケロリとするエルメスとは対照的に、想定外の痛さに文字通り頭を抱える俺。

「痛ってえー・・・なんで俺の方が痛てえんだよ」

「さあ?」

「つーかお前アホか。何言ってるんだお前」

「むしろそれはこっちのセリフじゃない?」

「そーだけど、何だよ是非って。お前俺に惚れてんのか」

「違うよ！ ちょっと怒りで我を忘れてただけ！」

「ハイハイ。ああ、俺って罪な男だな。アーサー許せ。まあ、俺に惚れない女の方がどうかしてるけどな」

「何その自信！？ バツカじゃないの！」

「お前がな」

結局エルメスはキャンキャン言いだして、俺の望んだ展開に。さすがはエルメス、面白れえ。よし、もうちょっと虐めてやろう。

「お前の気持ちは嬉しいけど、ゴメン」

「何謝ってんの！？ 気持ちなんかないし！」

俺の謝罪にキーキー文句を垂れるエルメス。そんなエルメスに罪な男・俺は、憤慨するエルメスの両肩をギュッと掴んで、真っ直ぐにエルメスの目を見つめて、笑いをこらえつつ、こう言っただけ。

「でもな、お前の事は本当に大事に思ってる。世界で一番お前が大事なものは変わらない。お前は優しいし可愛いし、その内絶対好きになるから。だから、それまで待つてくれ」

「え？・・・本当？」

エルメスは驚いた顔をしてキョトン顔をしている。そしてその表情のまま左上にヒョイと視線を向けて考え始めて、小さく笑った。恐らくエルメスの心中はこうだ。

「待ってって言われても別に好きじゃないけど。でも、この際アーサーさんなんかどうでもいいけど、カイのことはちゃんと考えた方が

いいのかも。それにしても、カイが私のことをそんな風に思ってくれたなんて・・・そんな風に思ってくれるのは嬉しいな」

絶・対・間違いない。エルメスのそのニヤケた面があまりにもおかしくて、とうとう吹き出した。

「ブツ！ アハハハ！ 何喜んでんだ！ んなワケねーだろ！ バカ！」

「ええ！？ ひ、ヒドイ！ 最低！」

一気に怒り出したエルメスは俺の手を振り払って、更にキャンキヤン吠えだす。そんなエルメスに俺、爆笑。

あー、マジ最高だコイツ。んなこと万に一つもねえっての。確率で言えば宝くじの方が高いくらいだったの。はー、マジウケる。笑いすぎて涙でできた。

「もー！ カイのバカ！ ヒドイ！ 最低！」

「アハハハハ！」

「ちよつと、いつまで笑ってんのよ！」

「はー、マジ面白れえ。マジで最高だな、お前」

「カイは最低だよ！ もおおお！ バカ！」

「！！ 痛ってえええ！」

とうとうキレたらしいエルメスは俺の大腿部に猛烈な蹴りを入れて、その勢いで転倒する俺に一瞥をくれると、その場から走って出て行った。

「痛てええええ！ クソ！ マジ痛てえんだけど！」

ひとしきりその場で悶絶して何とか体を起こした。ブツブツ文句を言いながら痛みをこらえて立ち上がろうとすると、蹴られた右足に妙な違和感。

ゴキン。

「マジかよ！ 骨折してるし！ あんの野郎・・・！」

自分のしたことは棚に上げて、俺は心底リベンジを誓った。

治った足で速攻リビングに攻め込むと、リビングではトリンとエルメスが二人で話していた。さすがにこの場だとまずいと思って、二人の背後に仁王立ち。

「オイ、エルメス。ちょっとツラ貸せや」

「なによ、やる気？」

「当たり前だろーが！ こっちは骨折してんだぞ！」

「何言ってるの。自業自得でしょ？ 別に相手してあげてもいいけど、カイじゃ私の足元にも及ばないよ」

「上等だコルア！ 表出るコルア！」



「フン、威勢だけじゃ私には勝てないよ」  
「え、ちよ、ちよっと、二人とも・・・」

フンと鼻を鳴らして、自信満々に立ち上がるエルメスを制止するようにトリンが声をかけると、エルメスはトリンにっこりと微笑んだ。

「トリン、心配しないで。カイ程度の相手、すぐ終わるから」

エルメスのその言葉にブチ切れた。この俺様に向かって「カイ程度」だと？ ナメやがって！

外に出るのも待たずに、俺に視線を向けたエルメスに殴り掛かると、エルメスは笑ったまま俺の拳をパシッと受け止めた。

「ちゃんと本気出してる？ この程度じゃ勝てないよ」

「テメエごときに本気出すかよ！」

「手加減して負けたらみつともないよ」

「それはテメエだろ！」

「教えてあげてるんじゃない」

そう言ってニヤリと笑うエルメスになんだか嫌な予感がして、腕を引っ込めようとしたけど、エルメスに握られた手はびくともしない。一瞬焦った後、嫌な予感は的中。

エルメスに握られた手が、その部分からパキパキと音を立てながら氷結していく。強烈な冷気から激痛が響く。

あまりの痛みに無理やり腕を振り払おうとした瞬間にエルメスが

手を離した。

「もう、無理に暴れると手が壊れちゃうよ?」

「痛つてえ・・・テメエ能力使いやがつて、卑怯だぞ!」

「戦いにおいては卑怯も正攻法もないんでしょ? 勝ちさえすれば手段は常に正当化されるって言ったのはカイじゃない」

「テメエ・・・」

そう言えば前にエルメスとストリップ剣劇で大喧嘩した時に、そんな事を言った気がする。まさか覚えてやがったとは、チクシヨウ。

「どーせならまた脱いでくれると、俺も燃えるんだけどな」

「そう? じゃあ燃やしてあげる」

そう言つてエルメスがパチンと指を鳴らすと、掌にボウつと炎が燃え上がる。

ヤベ、どうしよう。勝てる気がしねえ。よく考えたら、エルメスに触れた時点で爆破されてもおかしくねえんだった。

正直内心かなり焦つて、作戦立てるべきだったと後悔していると、  
天の助け。

「アミン、屋敷を火事にする気?」

「あつ、そっか、ゴメン」

ソファの背もたれに顔を乗っけて呆れたように溜息を吐くトリン。トリンのその言葉に、エルメスは慌てて炎を引っ込めた。そのタイミングでエルメスに中段蹴り。吹っ飛ばされたエルメスは反対側のソファにドサツと倒れこんだ。

「ちょ！ 今私トリンと話してたでしょ!？」

「だから？ 戦闘中によそ見してんじゃねえよ」

「いや、だから家の中でケンカはやめてくんない・・・」

力なく制止しようとするトリンにイラッと来て視線を向けると、なんだか顔が悪い。不審にトリンを見る俺にエルメスも気づいたのか、エルメスが起き上がってきた瞬間トリンが顔を歪めた。

「うっ・・・痛・・・」

「トリン！ どうしたの!？」

「お腹、痛い・・・」

「ええ!？ もしかして陣痛!？」

「そうかも・・・」

トリンの様子に一瞬でパニックに陥る俺とエルメス。トリンの出産予定日はまだ半月先のはずだったから、トリン本人も予期していなかったようだ。

「ど、どうしよう、どうしよう」

「とりあえずお前はトリンに着いてろ。俺は車回すから、オイそこ

のアンタ、ツアンとトリンの両親呼んで来い」  
「は、はい！」

メイドに呼びに行かせて、俺も車を取りに行こうとエントランスへ向かった瞬間、エルメスが悲鳴を上げた。

「どうした!?!」

「トリン! 破水!」

「破水!?! つて、破水したらどうなるんだ?」

「えっ!?! わ、忘れたけど、なんかヤバかった気がする!」

エルメスも突然の事に相当混乱しているようだ。その時トリンの両親とツアンが上階から慌てた様子で降りてきた。

「おばさん! トリン破水したんです! どうなるの!?!」

「本当!?! それは、もう生まれちゃうって事だよ!」

「マジで!?!」

「ヤバイ!」

俺ら全員大慌て。その間もトリンは苦しそうで、駆け寄ったツアンが手を握って一生懸命励ます。その隣でエルメスは何故か頷いた。

「よし! 私がトリンを病院に連れてく!」

「は!?! お前大丈夫なのか? トリンは妊婦だぞ? 影響ないのか?」

「でも一刻を争うんだよ。人間だって構成物質は基本的には私達と

変わらないはずだから、行けるはず。ツアンも一緒に行こう」

「え、どういうこと？」

「カイは後からトリンの両親と一緒に車で来て」

「・・・わかった」

確かにエルメスの言う通り、チンタラしてたらトリンも子供も危険だ。トリンを抱き上げたエルメスは、戸惑うツアンに腕に捕まるように言う。

「え？ どうすんの？」

「大丈夫、すぐに病院に着くから捕まって」

「わ、わかった」

そう返事をしてツアンがトリンの腕を掴んだ瞬間、3人はその場から姿を消した。それを見届けて驚愕して呆然とするトリンの両親を連れて、俺も病院へと車を走らせた。

病院に到着して処置室の前に行くと、エルメスが部屋の前のソファに座っていた。

「エルメス！ トリンは！？」

「あ、今処置してもらってる。ツアンも一緒にいるよ。たまたま先生が手が空いてたみたいで、本当に良かった」

「そっか。じゃあ後は祈るのみだな」

そう言って俺もエルメスの隣に腰かけるも、トリンの両親はその場をウロウロ。娘と孫の緊急事態に気が気じゃないらしい。トリン

の両親の様子を見て、俺とエルメスはなぜか和んでしまった。

「マイケルさん、おばさん、とりあえず座りましょ。ツァンがついてるから大丈夫ですよ」

「そうそう。それに俺らの祈りは神様聞いてくんねえから、二人も祈ってくんなきゃ足りねえよ」

「あ、確かにね。むしろ私達が祈ったら、トリンまでとばっちり受けちゃうかも」

そう言っただけで力なく笑うエルメスを見て二人も落ち着いたのか、大人しくソファに腰かけた。その時、処置室から悲鳴が響き渡る。

「ううー！ 痛い痛い痛い！」

「トリン！ 頑張れ！」

いよいよ本格的になって来たらしいトリンの悲鳴とツァンが励ます声。聞いてくれないとわかっていても、俺もエルメスも必死に祈らざるを得なかった。

それから待つこと5時間、処置室から出てきた医者全員で立ち上がって詰め寄った。

「先生！ トリンは、赤ちゃんは!？」

掴み掛るマイケルさんに、先生は病室に視線を移す。開けられた

ドアからは微かに赤ん坊の泣き声が聞こえた。

「ちゃんと検査しなければわかりませんが、破水してましたし逆子でしたけど、赤ちゃんは無事に生まれましたよ。対処が早かったおかげですね」

その言葉に全員でバンザイして大喜び。とうとうトリンの両親は泣き出してしまって、その様子を見た医者も嬉しそうに笑った。

「病室に移ったらはじめましてのご挨拶ができますから。もう少し待っててくださいね」

「はい、先生ありがとうございます！」

少しするとツアンも出てきて、トリンは裏から病室に赤ちゃんを搬送されたようで、少しするとナースが呼びに来た。

案内されて病室に入ると、ベッドで横になるトリンの隣には小さな赤ん坊が静かに寝息を立てていた。その赤ん坊にみんな一瞬でメロメロだ。

「うわあ、すごい、生まれたての赤ちゃんってこんなに小っちゃいんだね」

「うーん、トリンに似てるか？ 男？ 女？」

「女の子だよ。名前はまだ決めてないけど、この子には感謝しなきゃ」

「そうだね、そうだね」

「アミン、違いわよ」

「え？」

てつきり生まれてきたことに感謝、的なことだろうと思ってた俺とエルメスはトリンに視線を移すと、呆れたように笑った。

「この子のお陰で二人の喧嘩が止められたんでしょ」

「あ、そうだった」

「そう言えば、忘れてたな」

「仲直り出来てこっちも安心したわ。この子に感謝してよ？」

「すいません」

「ありがとうございます」

謝罪とお礼を述べる俺とエルメスにまた呆れたように笑いかけたトリンは、赤ん坊に視線を移して微笑む。その表情は母親の慈愛そのもので、見ているこっちも幸せな気分になった。

が、急激に懸念すべき事案が発生する。

「エルメス、俺ちよっともう限界」

「実は私も」

安心したせいか、どっと疲れが押し寄せてくる。ベッドの傍から離れて後ろに行こうとする俺らに、みんなはどうしたの？ と首を傾げた。

「私達、昼間の眠りには勝てないの。ごめんね」



「あ、そう言えばもう朝か」

「そうそう。このままここにいたら俺ら寝ながら灰になるから、悪いけど先に屋敷に戻る」

「そうだな。二人ともありがとう」

「いえいえ、じゃ悪いけどお休み」

「トリン、夜になったらまた来るね」

「うん、二人ともありがとう。お休み」

見送るデイヴィスファミリーにお休みの挨拶をして、手を取った俺らは屋敷の部屋に転移した。

部屋に着いた瞬間に、猛烈な眠気に襲われる。もうフラフラな俺はベッドに倒れこんで、エルメスはクローゼットを慌てて開ける。

「うう、早く着替えなきゃ、このまま寝落ちしちゃう」

「俺もう、無理。寝る」

「ダメだよ、ちゃんと着替えなきゃ」

「うるせー、お前が骨折させたせいで修復にエネルギー使ったんじやねえか。もー無理」

そう言ってそのままベッドに潜り込んだ瞬間に記憶が飛んだから、そのまま寝たつばい。

翌目が覚めると、エルメスは既に起きたようではなかった。丁度着替えが終わった頃に、エルメスが部屋に入って来た。

「カイ、ご飯持ってきたよ。それとお風呂も準備してもらったから入ってね」

「お、気が利くな。ご苦労」

「なんでいちいち偉そうにすんの？」

「偉いから」

「私の方が偉いよ？」

「俺の方が人として偉い」

「人じゃないくせに・・・ていうか前も同じ会話をした気がする」

「そつえばそうだな」

前に同じ会話をした時は、スペインで人殺しの真つ最中だったんだっけ。あの時人殺ししながらこんな話をしてたのに、今は人の誕生を祝いながらこんな話をしているのか。

うつわあ、平和だな。これが人並みの幸せと言う物か。ていうか今の方が本来なら普通なんだよな。

エルメスも同じようなことを考えていたのか、毒気を抜かれたような顔をして俺に血を渡しながら、隣に腰かけた。

「トリンも赤ちゃんも無事で、本当に良かったね」

「あー、昨日は超焦ったな」

「本当。でもいい経験が出来て良かった！」

「本当だな」

今まで俺もエルメスも、人の「死」しか見てこなかった。人の「生」を見るのと人の「死」を見るのは全然違う。

俺達は人の血を食らう化け物で、人を殺さなきゃ生きられない。

トリンとツァンがいなければ、きつと一生出会う事がなかったであろう人の「生」と言う物は、本当に素晴らしい。

俺もエルメスも吸血鬼だから、自分の子供を手に入れることは一生叶わない。不老不死でも、強くて、こんなに不幸なことはない。人間が羨ましい。人間は素晴らしい。

人ってすげえんだな。母親は偉大だ。赤ん坊は人類の宝だ。生まれてきただけで、人に幸福を振りまく。

人間じゃない俺らにとってその瞬間に立ち会えた経験は、貴重な財産だ。

俺とエルメスの旅行記

支度をして再び病院に向かった。今度は普通に車で。その事になぜかエルメス上機嫌。

「カイが運転してるの初めて見た！」

「あー、そーいやそーうだな」

「ドライブー！」

「いや、違うだろ」

まあ吸血鬼に本来車なんて必要ない。ただ、人間として生活するうえで車があった方が色々都合がいい。でも城にいた頃はエルメス達は車を所有してなかったし、今までも所有したことがないんだろう。と、考えていたら。

「あー！　そう言えばインドの空港に車放置しっぱなしだ！　アレどうなったんだらう？」

「なんだ、車あったのか」

「うん、クライドさんとボニーさんは運転できたから。インドから出る時に空港に放置してそのままだ」

「もう3年も経ってんなら、さすがに廃棄されたんじゃないのか」

「だよねえ、懐かしいなあ。クライドさんのフォード」

「フォードだったのか」

「うん、ボニーさんとクライドさんは生前からフォード愛好家だったんだって」

「へえ、なんで？」

「速いから。強盗の際に逃げるのに役に立つからって」

「・・・へえ」

エルメスもそうだが、つくづくアーサーのファミリーの人間は変わり者だ。あの二人、生前は強盗犯かよ。どうりでチンピラのはずだ。つーか一般人と、大学教授と強盗犯と貴族と王族が同居してたのか。スゲエ環境だな。

勝手に納得して呆れる俺の横でエルメスは更に興奮してハシヤギだす。

「でもね、基本的に長距離移動の時にしか車使わなかったから、こういう風に日常的に乗るのってなんか新鮮！　楽しいー！」

「ああ、そーですか。そりゃよかつたな」

「うん！　カイも楽しいでしょ？　ドライブ」

「別に。つーかドライブじゃねえって」

「もー、カイつまんなーい」

「うるせえ。つーかもう着くぞ」

「ちえっ、ケチ」

「そこでケチはおかしいだろ」

途端にむくれるエルメスをほっといて病院に到着。駐車場に車を停めて車から降りると、何故かエルメスから熱い視線。

「なに、気持ちワリイんだけど」

「ヒド！ 人が感動してたのに！」

「は？ なんで？」

「車をバツクで停めてる時の男の人はカッコよく見えるって、本当だったんだと思って」

「まあ俺は何してもカッコいいけど。お前俺に惚れるなよ、迷惑だから」

「惚れないわよ！ ていうか迷惑とかヒドくない！？」

「ヒドくねえ。マジ迷惑」

「やっぱヒドイ・・・ていうかムカつく！ 何様？」

「俺様」

「バカじゃないの？」

「お前がな」

「ムカつく！ もう二度とカイの事褒めてやんないから！」

「いらねえ。お前からの褒め言葉に有難味なんてねえよ」

「むきー！」

と、言いつつちよつと残念な俺。しまった、言いすぎた。まあでも、エルメスの事だからすぐに忘れるだろう。バカだから。

暴れるエルメスを引きずってトリンの病室に行くと、トリンの両親がベッド脇に座っていて、その反対側でベッドに持たれる様にツアンが眠っていた。

「ツアンさっきまで起きてただけど、さすがに一晩中起きてたから眠くなつたみたい」

「アハハ、そうなんだ。マイケルさんとおばさんも私達が来たから大丈夫ですよ。一旦屋敷に戻って休んでください。お風呂もお食事も用意してもらってるから」

「あら、エルメスは気が利くわね。ありがとう。じゃあ帰りましょ  
うか」

「そうさせてもらおう。ツァン、起きなさい。帰るよ」

「んあ、はい……」

トリンの両親に揺り起こされたツァンは眠そうに顔を上げる。そ  
んなんで運転して帰れんのか。と、考えていたら一つ気付いた。

「そーいや、おばさん今エルメスって呼んだか？ 今までアミンっ  
て呼んでたのに？」

俺の質問に目が覚めたらしいツァンがにこつと笑う。

「一緒だと紛らわしいからな」

「一緒？」

首を傾げる俺とエルメスに笑ったトリンは、赤ん坊を抱き上げて  
エルメスに抱かせた。

「この子の名前決めたの。アミンって名前にする」

「ええ！？ 本当に！？ 嬉しいー！」

「ふっ・・ふう、ふぎゃあ、んぎゃあ」

「あわわ、泣いちゃった」

赤ん坊の傍で大声を上げたエルメスのせいで赤ん坊が泣きだして、エルメス大慌て。エルメスは必死にあやすも、中々泣き止まないの  
で、俺が赤ん坊を取り上げた。

「お前抱き方が違うんだよ。よーしよし、怖いオバチャンはもういないからなー」

「誰がオバチャンよ」

そう言っ  
て抱いた赤ん坊の背中をたたきながらあやしていると、すぐに赤ん坊は泣きやんだ。それを見たエルメスをはじめ全員驚愕。

「カイすごい！ 伊達に二児のパパじゃないねえ」

「当たり前だろ。お前とはキャリアが違うんだよ。つーかもう俺の事褒めないんじゃないのか」

「あ、そうだった」

ほら、やっぱり忘れてた。やっぱりバカ。俺一安心。なぜか悔しそうな顔をしてるエルメスの横で、ツアンもトリンも感心した視線を向ける。

「すげー、カイ本当にパパやってたんだな」

「ていうか、カイくんがパパって似合わなさすぎるよね」

「確かにね。カイはどう見ても子供好きには見えないもん」

「うるせー。余計なお世話だ」

尊敬されてもいいはずなのに、なぜか笑われる俺。俺が子供好きなのそんなにおかしいか？ つーかむしろ俺は慈愛の天使だぞ。お



かしいはずはない。コイツらがおかしい。

ひとしきり笑った後、ツアンとトリンの両親は「じゃあお願いね」と病室を後にして、俺らも赤ん坊をベッドに戻して、そのわきに座った。

「ねえトリン、どうして私の名前にしてくれたの？」

子供ベッドの赤ん坊を覗き込みながらエルメスがトリンに問いかけると、トリンは嬉しそうに笑う。

「エルメスみたい女の子になってほしいと思ったんだ」

「え？ 私みたいに？」

「娘にバカになってほしかったのか」

「違うわよ！ エルメスは、私達にとって運命の友人だから」

「運命の友人？」

「そう。エルメスと出会わなかったら、ツアンにも出会ってなかった。ツアンもずっとファミリーの人間だっただろうし、相変わらずお父さんはマフィアでお母さんと結ばれることもなかったんだと思う。エルメスと出会って、ツアンと出会って、私達もお父さんたちも結婚して、赤ちゃんまで生まれて。エルメスがいなかったら、今私きつとこんなに幸せになれなかった。私達はことごとくエルメスに運命を変えられたの。運命が変わって、今最高に幸せ。だから、この子にもエルメスみたいに、誰かに幸福を振りまく運命の女の子になってもらえたらなって思ったんだ」

トリンのその言葉を聞いて、エルメスは涙を零した。きつと、エ

ルメスにとってその言葉は何よりも嬉しかったに違いない。あの戦争で家族が死んだことで自分を責めていたエルメスなら、なおのこと。

「トリン、ありがとう。すごく嬉しい。トリン達が今幸せだっと思ってくれて、私も凄く嬉しいし、幸せだよ。本当にありがとう」

「お礼を言うのはこっちの方だよ。ありがとう、エルメス」

泣き出したエルメスの頭を撫でてトリンは嬉しそうに、ちょっと困ったように笑う。

幸福を振りまく運命の女の子。エルメスには、人を変える力がある。エルメスの傍にいたらみんな心を動かされて、幸せを望んでしまう。そしてエルメスの望んだとおりに、幸せになるんだ。

エルメスを、取り残して。

それでもエルメスは、自分の周りが幸せでいることが幸せだと思ってる。それは俺も同じかもしれない。エルメスの幸せが、俺の幸せだと思う。

もしエルメスがもつともつと昔にジュリオ様と出会っていたら、運命は変わっていたのかもしれない。

ジュリオ様の心を支配した憎悪を溶かして、人生をやり直す勇気を与えてくれたのかもしれない。そんなこと今考えたって不毛なんだけど、エルメスにならそれが出来たのかもしれないと思うと、いっそのことジュノ様にそれをお願いしたくなる。

あ、でもダメだな。そうなると、俺達とエルメスは出会わないことになる。それは嫌だな。うん、無理。

きつと、今はこうなる運命だったんだろう。変わるのは、これからか。

帰りの車の中、エルメスは未だに思い出し泣きだ。最近気付いたけど、コイツ感動屋だな。

既に若干呆れてきた俺の様子に気づくこともなく、エルメスは口を開く。

「私、すつごく嬉しかった」

「ああ、よかったな」

「うん、あのね、私ね、私は災厄だと思ってたの」

その言葉に思わずエルメスに視線を移すと、「危ないから前見て」と笑われた。前方に視線を戻しながら「なんで？」と尋ねると、エルメスは小さく笑う。

「まだそんな事言ってるのかって思うかもしれないけど、やっぱりあの戦争でのことで後悔はあるんだ。私をもっと早く覚醒してればみんなを助けられたのに、助けられなかった。あの時私は最後まで何もできなかった。生き延びてなお、カイやみんなに心配かけて、迷惑かけて、私はみんなを不幸にしてる。これを災厄と言わずになんて言うのかわかって」

「そんなこと思ってる奴一人もいねえよ」

「うん、わかってる、わかってるんだけどね。でも、私のせいで誰かが苦しんでるのは間違いないから」

「たとえ苦しんでたとしても、それはお前のせいじゃない。単なる足掻きだ」

「うん、その事にさっきやっと気づいたよ。トリンは私が運命を変えたって言ったけど、違うんだ。トリンもツアンも自分たちで悩んで考えて、幸せになるうって足掻いて勝ち取ったんだよ。私が変わたわけじゃない。私は友達に幸せでいて欲しいって思っただけ。でも、私がお前のきっかけになれたことは、凄く嬉しい」

「お前がアイツらの幸せを願って説得したから、アイツらも足掻こうと思えたんだよ。お前は災厄なんかじゃない。少なくともアイツらにとつちゃ、お前は幸福の象徴で、幸福を振りまく運命の女……うおっ！」

いきなりエルメスがタツクルをかましてきたせいで、ハンドル操作を誤って対向車にぶつかりそうになった。

何とかエルメスを引きはがすと、エルメスも驚いた顔をしていた。

「びつくりしたー……」

「ソレ俺のセリフ！ 危ねえだろ！ 状況考えろ！」

「ゴメン。嬉しくて、つい」

「つい、じゃねーよ。全くお前は……」

「えへへ、ゴメンね？」

「笑い事じゃねーし」

さっき泣いたカラスがもう笑いやがる。エルメスの喜怒哀楽はパラパラ漫画並に高速で切り替わる。気紛れにも程がある。まあ、慣

れたからいいけど。

事故未遂ですっかりテンションが上がったらしいエルメスにはこつと笑った。

「ねえ、カイは今幸せ？ それともやっぱり不幸？」

「ん？ フツー」

「普通って何？」

「状況的には不幸極まりねーけど、お前虐めんのが楽しすぎる。プラマイゼロでフツー」

「なにそれ・・・ああ！ 私というの楽しいんだ？」

「全然」

「もー、素直じゃないな！ 私は楽しいよ！ カイも楽しいでしょ？」

「いや、疲れる」

「んもおおお！ カイのバカ！」

「ハハハ！ あー、やっぱりお前面白ねえ。ウソウソ楽しいって」

「ウソ！ 今のは意地悪言うのが楽しかったんじゃない！ バカ！ バカはお前な」

本当の所を言うと、俺は全然幸せじゃない。あれから半年以上経ってだいぶ落ち着いてきたけど、あの出来事はどう転んでもいい思い出にはならない。

ジュリオ様の事もそうだし、スレシユのことだってすんなり受け入れられたわけじゃねえし、アーサーの事もジュノ様の事も自分のことも、俺の苦悩の種は順番待ちをしてる位だ。

でも、エルメスという時は、エルメスと笑い合ってる時だけは忘れられる。それに、エルメスが楽しいと言ってくれるなら、俺はそ

れでいい。そう言う日が続くことがエルメスの幸せならば、俺はそれでもいい。

そう言う日が続いて、それが当たり前になって以前の様に、「楽しいし、幸せだよ!」と明るく笑顔で言ってくれる日がやってくるなら、俺は幸せだ。

そうなってくれるなら、いくらだって足掻いてやるぞ。

俺とエルメスの旅行記

トリンの出産から約2週間後、ベトナムに来てからちょうど一か月が経過。あの戦争から7か月が経過。

夏真っ盛り。ベトナムは暑い国だと聞いたが、吸血鬼の俺らには大して影響はない。とりあえず、インドもだけど暑い国で昼間に起きてる奴が気の毒だ。

そのせいなのかなんなのか、エルメスは買い物に行きたいと言い出して、今スポーツショップ。

「お前バカだろ。何が悲しくて真夜中に水遊びしなきゃいけないだよ」

「絶対楽しいよ！ 夏は海と花火って決まってるんだよ！」

「知らねーよ。面倒くせえ」

「行く前から遠足は始まつてるんだよ！ ほら、カイも早く水着選んで！」

遠足なのか？ つーかエルメスのハシヤギっぷりが超うぜえ。第一俺ら海行つても楽しくねえだろ。海に拒絶されてんだから。

まあ、既に花火は買っちゃったし、気分だけでも楽しみたいって事なんだろう。だからってわざわざ水着を必要もねえと思うけ

ど。

適当に買い物を済ませて、例によってハイテンションなエルメスと共に海へGO。到着した時には既に午前0時を回ってて、さすがに海には誰もいなくて閑散としてる。

車を停めて浜辺に降りると、エルメスは速攻波打ち際に走り出した。

「うわーい、海ー！ ヒー！」

案の定海に拒絶されて、後ずさりするエルメス。さっきまであんなに浮かれてたのに、泣きそうな顔をして俺に振り向いた。

「カイ、どうしよう。水遊びできない」

「やっぱりな。今日は花火だけで我慢しろ」

「えー、折角水着買ったのに！ 着たかった！」

「じゃあ着れば？」

「うん！ そうする！ そこで待ってて！」

アイツは無意味な行動が大好きだな。そう言ってエルメスは車に戻って行った。どうせなら車から降りた時に花火持って、エルメスが戻ってくる間に全部やっつくんだった。

10分ほど待たされて出てきたエルメスはまんまと水着に着替え、両手に花火を持って嬉しそうに走ってきた。



「えへ、どう？ 可愛いでしょ？」

そう言っつてその場でクルリと回ってみせるエルメス。白のホルタ  
ネックのフリルのついたビキニに、下はスカートみたいなやつ。  
水着自体は可愛い。

「うーん、32点」

「辛口！ もつとイケるよ！ 70点くらい！」

「微妙に謙虚だな。他の女が着てたら96点だが、お前が着てるこ  
とで3分の1になる」

「・・・カイの目には私はどう見えてるの？ 普通の女の人の3分  
の1にしか見えてないの？」

「そーだな。でもお前の首から下はまあまあだ」

「ヒドーイ！ もう、バカ！ 眼科行け！」

「お前がな。首、値札ついてんぞ」

「あぁっ！」

慌てて首元に着いた値札を引きちぎるエルメスに俺大爆笑。エル  
メスは悔しそうに顔を真っ赤にして、笑い転げる俺を憎々しげに見  
つめていたが、少しすると花火をガサゴソと漁り始める。

パチンと指を鳴らして花火をつけると、俺に向けて発射した。

「うお！ お前何すんだ！」

「笑い過ぎなのよ！ ムカつく！」

「むしろそれはお前のせいだろ！ お前が笑かすからじゃねーか！」

「くっ・・・でもムカつくんだもん！」

「責任転嫁すん・・・うわっ！ やめろって！」

「アハハ！ 面白い！」

ムカつくつつて怒ってたはずなのに、いつの間にか嬉しそうに笑って俺に花火を向けるエルメス。この小悪魔め。悪魔の恐ろしさを思い知らせてやる。

俺もすぐに花火を漁って、おあつらえ向きの花火を発見。すぐに火をつけてエルメスに向けると、ひゅううと音を立てて、エルメスに到着した瞬間、パァンと火の花を咲かせた。

「きゃあ！ ケホっ、打ち上げ花火とかズルい！」

「ハハハ、今の花火のお陰で40点まで上がったぞ」

「いらないわよ！」

それからはしばらく花火で迫撃ゴッコだ。良い子のみんなは悪い子になってから真似しろ。ぶっちゃけ、意外と楽しかった。

でも、飛び道具系の花火が尽きてくると、さすがに大人しく花火を楽しむことにした。

「あ、っーか俺の服焦げてるし。買ったばっかなのに」

「カイも水着に着替えればよかったのに。そしたら焦げるの水着だけで済んだのに」

「なんだお前、俺の下半身に恨みでもあんのか」

「何言ってるの！ バカじゃないの！」

エルメスはプリプリ憤慨しながら、消えた花火を捨てて再び漁り始める。すると、あ、と声を上げて嬉しそうに向いた。

「カイ、線香花火入った！ コレやろう！」

「線香花火？ なんだそれ」

「日本の伝統的な花火でね、日本人はみんなこの花火好きなの」  
「へえ」

火をつけたエルメスは一つを俺に持たせて、もう一つを自分で持って花火にじつと見入る。線香花火はパチパチと火花を散らせて、徐々に火の玉を形成していく。

「地味だな、オイ」

「地味とか言わないの！ 控えめで、侘び寂びがあって、趣があるでしょ？」

「ワビサビ？」

「人の一生は花火に似てるって聞いたことがあるよ。きっと線香花火みたいに、最初はゆっくりはじけて、どんどん元気にはじけて行ってそれから徐々に衰えて、最後に一際パチンってはぜて・・・」

「あ、落ちた」

「こんな風に死んじゃうのが、人なんだね」

そう言ったエルメスの花火も、最後にパチンと爆ぜると火種はフルフルと揺れて、ポトリと地面に落ちた。

「なんつかこの花火、寂しくねえ？」  
「それが侘び寂びというものですよ」  
「俺にはわかんねえなあ」  
「カイにはわかんないかもねえ」

笑いながらエルメスがもう一度線香花火を差し出してきて、再びその花火を見つめる。  
すげえシンプルな花火だけど、なんとなくエルメスの言っていたことが分かった。なるほど、この儂い感じがいいのか。  
線香花火の魅力を理解した俺に、エルメスは声をかけてくる。

「あのね、線香花火の火種が最後まで落ちなかつたら、願い事が叶うんだよ」  
「なんだそれ。ロマンチストにも程があんぞ」  
「昔からそう言うの。落ちなかつたことないけど」  
「なるほど、だから叶うんだな」  
「そうそう。カイも何かお願いしてみたら？」  
「急に言われてもな」

そう言いつつ、ひそかに願ってみる。すると、エルメスの火種はポトリと落ちた。それを見てエルメスは残念そうだ。  
しかし、俺の火種は一向に落ちない。紅いまま身を震わせた火種は、少しすると大人しくなって黒くなって動かなくなった。

「あ、すごい！ カイなにかお願い事した？ きつと叶うよー！」

「残念ながらしなかった。エルメスは何お願いしたんだよ？」

「世界平和！」

「アホか。壮大過ぎて花火レベルじゃ叶えきれないだろ。もっと手頃なのにしねえからだぞ」

「カイはお手頃なお願いしたの？」

「いや、そんなに手頃では・・・」

「やっぱお願いしたんだ！ なに？ なに？」

「チツ！ 秘密」

「もう、ケチ！ いーなあ、カイのお願い叶うよ、きつと。羨ましい！」

「だといいけどな」

俺の願い事なんて言わずと知れた「エルメス限定ラブ&ピース」だ。また前みたいにエルメスが愛と平和に包まれた世界に生きられたいと思っただけ。

神は聞いてちゃくれねえだろうけど、線香花火は俺の願いを聞き届けてくれただろうか。

エルメスがきつと叶うと言うのなら、叶うんだろう。俺の願いが叶う日がやってくることを花火とエルメスが保証するのなら、俺も頑張りがいがあるってもんだ。

そうしたら、死ぬ前に一際デカく火花を散らせて、潔く死んでやる気にもなれる。

悪魔に魂喰われて死ぬ前に、エルメスに大輪の花火を見せてやる。

俺とエルメスの旅行記

アンタ本当に元マフィアのボスなのか。ウソじゃねえのか。

「アミンちゃん、おじいちゃんであゆよー」

かつてベトナムの麻薬取引の総元締めと言われた大侠客、「麻薬を中毒にする男」ドン・デイヴィスはすっかり孫娘中毒だ。その様子にみんな半笑い。

「今の様子を見て誰が元マフィアって思うだろうね」

「マジで。既に疑わしい」

「アハハ、確かにね」

ベトナムの屋敷には、幸せが溢れてる。デイヴィスファミリーは全員が全員幸せそうで、毎日仕事に家族サービスに大忙しだ。正直なところ、メチャクチャ羨ましい。

「ハア、俺もまっとうな人生歩んでたら、今頃子供が成人しててもおかしくねえのによ」

「本当だよねえ。私だって子供の一人くらいいてもおかしくないのに」

「いや、お前はおかしい」

「おかしくないよ！ 失礼ね！」

「うるせーよ。あー、俺も子供欲しかったなあ」

「作ればいいじゃん」

「できねーじゃん」

「私は無理だけど、カイは出来るよ？」

「マジで!？」

エルメスの言葉に希望を膨らませて勢いよく顔を向けたら、エルメスはちよつとビックリした顔をして笑い出す。多分俺の目は超キラキラしてたと思う。

「うん、前にアーサーさんが言ってたよ。吸血鬼の男と、人間の女の間なら子供は出来るんだって。でも・・・」

「マジか！ 俺ちよつとナンパしてくる!」

人生に光明が見えた俺はすぐに立ち上がって嫁探しに向かおうとした。が、エルメスが服の裾を掴んで引き留める。

「ちよつと待って、待ってよ」

「なんだよ！ 俺はナンパで忙しいんだよ!」

「だからちよつと待ってってば」

「なんだよ！ 2時間で戻ってくるから、お前が待つてる！」  
「リアルだし色々早すぎだよ！ じゃなくて、まだ話には続きがあるの！ 大事なことから聞いてっつてば！」

エルメスが必死にそう言って引き留めるし、まあ嫁探しはいつでもできるわけだしな、と俺もちょっと落ち着いて座りなおしたら、エルメスは大きく溜息を吐く。

「あのね、確かに子供は出来るんだけど、出産の確率は相当低いんだって。で、もし出産できたとしても、その子供はヴァンパイアハントーの能力と宿命を背負って生まれてくるんだって」

「マジ！？ じゃあ俺自分の子供に殺されんの！？」

「そう言う事だね。で、その子供も死んだら吸血鬼になっちゃうんだって」

「子供まで吸血鬼に・・・それは嫌だあ」

チクシヨウ、神のクソ野郎。テメエ性格悪すぎなんだよ、コノヤロ。さっきまでの俺の希望を返せ。俺の高揚感を返せ。

ソファにバツタリ倒れこんでメソメソする俺に、エルメスは励ますように半笑いで肩をたたく。

「チクシヨウ、神のバカヤロー。エルメスのバカヤロー」

「なんで私？」

「お前が余計なこと言わなきゃよお、こんな天国から地獄に落ちるようなこともなかったんじゃないかねえか、チクシヨウ」

「・・・それは、ゴメン。でも、もしかしたらなんとかなるかもよ」



「なんとかしろ！」

新しい希望にガバツと起き上った俺にエルメスは再び驚いて、再び笑いだす。

「何とかしろ！ 何とかなるなら何としても何とかしろ！」

「ちょ、落ち着いてよ。そう難しい事じゃないよ」

「何！？ なんだよ！」

「ジユノ様をお願いすればいいじゃん」

「その手があつたかー！！ いや、でも待てよ・・・」

ジユノ様をお願いするって事は、それが成就したら俺は死ぬって事だろ。子供が生まれて俺が死んだら全く無意味。普通に人間の子供でも、その成長を見届けられないなら意味ねえ。

てことは、普通の子供を作った上に成長を見届けたいって願えばいいのか。でも、それだとあの大悪魔の事だ。本当にその願いしか叶えないで、子供に超不幸な人生を歩ませそうだ。

じゃあ、普通の子供が幸せに成長するのを見届けたいと願えばいいのか。いや、それだけなら死後吸血鬼化する可能性もある。それにその子供が化け物嫌いとかに育ったら、その子供にとっての幸福が化け物のいない世界となれば、俺は間違いなく子供に殺される。あの悪魔なら、そう言う風に仕向けかねない。

クツソー、どうしたらいいんだ。少なくとも俺に想定し得る都合の悪い事態は、ジユノ様も想定することに間違いないし、それどころか俺も気づかない隙を見つけて実行する。

あの大悪魔を出し抜いて、俺の希望を全部叶えるのは相当難しい

な。

うーんと頭を悩ませていると、クスクス笑いながらエルメスが口を開く。

「ていうかそもそもさ、カイはお父さんにはなれるかもしれないけど、旦那さんに向いてないよね。カイのお嫁さんになる人大変そう」「嫁？ んなもんどうでもいい。俺が欲しいのは厳密には嫁じゃなくて、見た目だけ完璧で健康な“子供生産機”」

「最低・・・普通に考えて、女の人が自分の子供手放すはずないんだから、ちゃんと夫婦しなきゃダメじゃん」

「面倒くせえ。あ、良い事思いついた」

「なに？」

「契約の代価に、嫁の魂を捧げる。これで全部解決だ。そーか、この手があったかあ」

「本当に最低だね。カイに見初められる人が現れないことを祈るよ」「むしろ俺の運命の出会いを祈れ」

「祈らない。私その人とどうお付き合いしたらいいかわかんないよ、気の毒すぎて」

「その必要ねえだろ。嫁は悪魔に食われて死ぬんだから」

「・・・最低」

この会話だけで俺は何度最低と言われただろうか。そんなに最低か？ そつでもねえだろ。目的の為に手段を選ばないなんて使い古された言葉だ。俺は手段を目的とすり替えるような愚者でもねえしな。

そんな賢者な俺にエルメスははじめ話を聞いてた連中は白い視線を向ける。何だつてんだコノヤロー。

相変わらず白い視線をぶつけるエルメスは、視線を外すと大きく溜息を吐く。

「でもさあ、カイはまだいいじゃん。私はクリシュナもないし、子供だつて産めないし、希望があるだけカイの方がマシだよ」

「まあ、確かに。つーかそれこそジユノ様に頼めばいいだろ」

「死者の蘇生なんてできるのかなあ。ていうか私が子供産めるようになったら、呪いが解けちゃうつて事でしょ？ それつて私が人間になるつて事じゃん」

「そう言えば、お前は人間に戻りたいとは思わないのか？」

「最初は思ってたけど、今は全然。だつてみんなもカイも吸血鬼なんだよ。私だけ先に死んじゃうなんて嫌だもん。ずっと一緒にいたい」

「ま、そーだな」

「カイは、今は？」

「俺も今は別に戻りたいとは思わねえな。理由はお前と同じ」

「えへへ、そつかあ。嬉しい！」

「うざ！ 離れる」

「いーじゃん、ケチ」

「ケチじゃねえ」

さっきまで軽蔑の視線を投げてたくせに、今度は尻尾振って抱き着いてくる。コイツの切り替えの早さは音速だ。そして鬱陶しい。

この鬱陶しさは恐らくアーサーの嫉の賜物だな。クリシュナさんが調教がどうのこつと言つてた成果だ。非常に迷惑。

すっかりご機嫌を回復したエルメスはエア尻尾をプリプリ振ってニコニコしてやがるが、俺は今の会話でちよつとだけ気分が沈んだ。

エルメスには人並みの幸せを掴むことはもう、不可能だ。吸血鬼になったせいで子供は出来ない。その事はもう諦めたのかもしれないけど、クリシュナさんももういない。エルメスが願いを叶える事は出来ないのに、俺だけ叶えることはできない。

そう考えていたら、エルメスがフイと俺に向いて、じっと見ていると思ったら口を開いた。

「カイ、私に遠慮してるなら、別にいいよ？　カイはカイの幸せ追いかければいいんだから。カイが幸せそうにしてたら私も幸せだよ」

表情で、悟られたのか。コイツはたまに変なところで聡い。でも、エルメスのその言葉で、遠慮するのはやめようと思った。

「遠慮じゃねえよ。俺はエルメスの面倒見なきゃいけないからな。そっちの方が大変で、子育てなんてやってる暇ねえよ」

「そんなことないよ！　私手がかからないよ！」

「いや、超大変。しかもそれが今後何十年も何百年も続くと思うと、既にネグレクトしてえよ」

「えー！　ダメ！」

「じゃあいい子にしてろ。ちゃんと俺の言う事聞け」

「むう、わかった」

「むしろお前が俺の世話しろ。俺には絶対服従な」

「ヤダ！」

「俺の言う事聞かねえなら一生シカトだ」

「えー！ ヒドーイ！ でもイヤ！」

「黙れ小娘。我儘言うな」

「カイがね！」

全く我儘な奴だ。でも自分で言っただけで、確かにコイツの相手してる間は子育てなんてしてる余裕ねえな。コイツの相手でもコイツパイパイだ。なんて手のかかるお嬢ちゃんだ。

しかも一生傍にいるって自分で言っただけであらう。まあそのこと自体はいいけど、その時点で俺の生活と一生はコイツ一色だ。コイツを中心に世界が回ることになる。なんか腹立つ。つーか既に回ってる気がする。

でも、それは俺の望みでもある。ある意味、俺は幸せと言えるのかもな。

未だ憤慨しているエルメスに視線を向けると、視線に気づいたエルメスはちよつと落ち着いて、不思議そうに覗き込む。

「なーに？」

「お前の幸せって、何？」

「え？ 私の？ うーん、なんだろう。とりあえず、平和で、みんな仲良しで、ボニーさんとクライドさんに再会出来たら言うことないかな」

「アーサーは？」

「アーサーさんは、契約取り消して土下座して謝ってくれたら許してあげないこともない」

「ハハ、珍しく強気だな。それちゃんと本人に言えよ」

「え、カイが言つて」  
「なんでだよ。自分で言え」  
「保護者自称するなら、それはカイの仕事！」  
「ハア！？ なんでも責任押し付けてんじゃねーよ！」  
「いーじゃん、ケチー」  
「ケチじゃねえよ！ この甘えん坊が！」  
「えへへ」  
「なに喜んでんだ・・・」

褒めた覚えはねえんだけど、何故か喜ばれた。途中で会話の内容がすり替わつて、結局最初の質問がよくわかんなかった。

結局は、やっぱりコイツの幸せはラブ&ピースって事か。本当に化物とは思えない理想だな。それは、少しずつコイツが元のエルメスに戻りつつあるんだと思つていいんだろうか。

もしそうだとしたら、俺が傍にいることも無駄じゃないと思つていいんだろうか。俺がエルメスの役に立てたと思つていいんだろうか。

なぜか喜んでニコニコするエルメスは笑顔で言った。

「だってカイにはなんか甘えなくなるんだもん。カイが傍にいたらなんでも大丈夫って思っちゃう。頼りにしてるって事だよ！」

「・・・物は言いようだな」

「だってそうなんだもん。カイの事は頼りにしてるし、一緒にいると楽しいし、カイは私にいつも意地悪いうけど、大事にしてくれるってわかってるから、カイが傍にいてくれたら安心なの。私、カイが傍にいてくれて楽しいし、幸せだよ！」

なるほどなるほど、ガルフが言った意味が今頃わかった。確かに俺、エルメスに騙されてる。エルメスのこういう言葉に騙されてる。いい様に操られてる。

でも、それでもいいか、とってしまった俺は、病気だ。病名、エルメス中毒。

俺とエルメスの旅行記

「と言うわけで、お世話になりました！」

「マジ世話になったな。その内また礼しに来るわ」

「もつとゆっくりしていけばいいのに」

「そうだよ、最近はシャンティからも連絡来なくなったのに」

「だからこそだよ。音沙汰ないのが余計怪しいからな」

「それで、今度はどこに行くの？」

「幸せの国に行くの！」

「どこそれ？ 天国？ まさか死ぬ気？」

「んなわけねーだろ」

次の目的地は幸福の王国、ブータン王国。

ヒマラヤのシャングリラ（桃源郷）として知られる仏教王国。20世紀後半まで鎖国に近い政策だったこともあり、手付かずの美しい自然と、自給自足を基盤にした伝統的な生活文化が残る国だ。

中国とインドの2大国に挟まれているが、インド文化の影響は少なく、チベット文化圏に属し、広大な仏教圏、チベット文化圏の文化と伝統を伝える残されたサンクチュアリでもある。国内の治安は非常にいい。

面積は日本のキュウシュウほど。緯度はオキナワと同じだけど、



標高が2000mある為に気候はカルイザワに似てるらしい。

キユウシユウとかオキナワとかカルイザワってどこだ。エルメスは納得してたけど。

ある調査によると、「今あなたは幸せですか?」という質問に、国民の97%がYESと答えたというデータがあるらしい。

そのデータを見たエルメスがブータンを見逃すはずがない。次の目的地はすぐに決定して、即銀行に泥棒に行って資金集めしてきやがった。

血もツアンの財団にかなり提供してもらったし、車も買ったし、準備を終えて涙ながらに別れを告げた俺らは、ベトナムを後にしてブータンへと向かった。

途中一番苦労したのはホテルでの宿泊だ。インドやベトナムの屋敷みたいな大豪邸ほどうっかりした建物でも、吸血鬼向けに改造された家でもないホテルでの寝泊まりは、息苦しかった。

「うう、狭い、苦しい」

「文句言つな、しょうがねえだろ」

「なんでカーテンないの? 棺持ってくれば良かった」

「しょうがねえだろ、あの状況じゃ。どこでも豪邸に住めると思うな」

「はあ・・・」

真夏だと言うのにエルメスと二人、暗幕を3重にして包まって寝た。とりあえず、俺もエルメスも寝相がいい方で良かった。それだけはよかった。じゃなきゃ死んでた。間違いなく。

俺的には問題は国境警備をどう突破するか、だった。ベトナム、インド周辺にかけては宗教派閥によるテロや土地の占有紛争が頻発しているせいで国境警備が厳しい。この辺りは未だに紛争地域だ。許可どころかパスポートも持ってない俺らがどうやって突破するか、実力行使に出るしかねえよな、と思ってたんだが、難なくクリア。

「国境見えてきたな、どうする？」

「そのまま突っ切っちゃって」

「そのままって、このままか？」

「そう、大丈夫だから」

って言われても不安なんだけど。俺の心配をよそにエルメスは国境が見えてきた瞬間に国境警備隊たちに視線を向ける。

心底不安を抱えながらも、スピードを落とすことなくそのまま突っ切った。本当にそのまま突っ切った。何事もなく。

「あれ？　なんだこれ！？　何したんだお前！」

国境のフェンスも壊すことなく、警備隊を轢き殺すこともなく、ましてや止められることも気づかれてもない。

驚く俺にエルメスは顔の前でピースしてにっこり笑う。

「えへへ、すごいでしょ？ 1つは錬金術の基礎！ 分解！」

「どういうことだ？」

「分子結合を緩めてすり抜けた！」

「ああ、なるほど。でもなんで気付かれてないんだ？」

「そして新技！ 光学迷彩！」

「おお、光の屈折率を変えたって事か」

「正解！ 厳密には私には光は変えられないの。でも私達の方の屈折率を変えた！ だから見えてないよ！」

「お前スゲエな」

「もつと褒めて！」

「よしよし、いい子いい子」

「えへへー！」

褒めて頭ナデナデしてやったらエルメス大喜び。お前は犬か。でも本当コイツはスゲエな。羨ましい。俺が勝てるはずねえよ、クソ。俺も活躍してえ。

活躍の機会は案外すぐにやってきた。国境周辺や山岳地帯になってくると、泊まれるような宿や村がみつからなくて、必然的に車内泊を迫られる。で、その日も車の中で暗幕に包まって寝て、夕方になって目が覚めたら車に向かって数人の男達がダッシュしてきた。

「うお、なんだあれ？」

「多分山賊だよ」

「山賊！ スゲエ、初めて見た！」

「なんで喜ぶの？ 面倒なだけじゃない」  
「じゃあお前はそこで大人しくしてろ、俺が片付ける」  
「ふわあ、頑張ってるね。殺しちゃだめだよ」  
「おう」

あくびしながらエールを送るエルメスに若干イラついたけども、車から降りると駆け寄ってきた男達は急ブレーキをかけて立ち止まる。一番奥にいた奴に視線を向けて、フンと笑ってみた。

「なんか用か？」  
「大人しく金を寄越せば命まではとらない。金を出せ」  
「やなことだ」  
「金を寄越せと言ってるんだ」  
「ヤダって言うてんだろ」

やり取りをしている間も山賊たちは俺の周りを取り囲む。初めての山賊でテンションが上がった俺は、例によってワクワクしてきた。

「なんだ？ やんのかコラ」  
「あの世で後悔するんだな」  
「お前らがな」

吸血鬼じゃなくても、ガキの頃から戦闘訓練受けてた俺に、山賊じゃ相手にもならねえ。例え俺が人間だったとしても俺を倒すなら軍人を連れてこい。10人程度いた山賊は物の3分程度で沈黙。

「ハッ、口ほどにもねえな」

煙草に火をつけながら車に戻ろうとすると、エルメスがニコニコしながら下りてきた。

「カイ戦闘上手だね！」

「まあ、俺ら全員訓練受けたしな。昔はよくガルフと組手やったし」「そうなんだあ。ガルフ対人格闘得意だもんね。どっちが強いのか？」「俺に決まってるんだろ」

「へえー、すごいねえ。ところで殺してないよね？」

「ああ、気絶させただけ」

返事を聞いたエルメスは、伸びている山賊たちに視線を向けたと思っただら、車に戻って荷物を漁りだした。

「こんなこともあるのかと、こんなものを用意していたのだ！」

ジャジャーンと取り出したのは、なんと応急処置セット。エルメスは山賊たちの前にそのセットを置くと、ペコリと頭を下げる。

「まだ怪我治してあげらんなくてごめんなさい。これでおあいこね」

頭を上げたエルメスはまたにこつと笑って「行こつか」と車に戻っていく。コイツの行動は、本当に俺の想像を超える。

「お前そんないい子だったのか」

「そうだよ、カイに比べたら全然いい子だよ」

「うるせーよ」

「フフン、キリスト教のファシストよりも仏教徒の方が全然いい子だね」

「なんだお前仏教だったのか」

「家が浄土真宗の檀家だね。ていうか日本は基本仏教だよ。別に信仰ってほどはないけど。神様信じてないし。でも考え方は好き」

「ふーん、どんな？」

「なにごともしやらずはいけませんよ。感謝を忘れずに、人を大事に、自分を大事にしましょうねって感じかな。キリスト教ほど細かくも厳しくもないけど」

「ああ、だからキリスト教は仏教を宗教って認めてねえんだろうな」

「かもね。でもその仏教のお陰で平和なんだよ、ブータンは」

「そうかもな」

そして到着した幸福の王国、ブータン。

二つ名の通り、首都はとても賑やかで道行く人はみんな笑顔だ。人々は明るく挨拶を交わして、笑顔ですれ違う。なぜか道端にツバを吐く奴が多いけど。なぜかツバが紅くて道端には赤い斑点が至る所にあるけど。

「うわあ、すっごくいい雰囲気だね！」

「ああ、なんつーか、さすがだな」

「本当だね！」

「つーか、ブータン人ってお前と顔の系統似てねえ？」

「本当だねえ。不思議ー」

二人で夜の市をキョロキョロ見渡しながら歩いていると、服屋のおばちゃんに声をかけられて、思わず足を止めた。

「あんたら旅行者かい？」

「いや、この国に滞在しようと思って」

「おや、お嬢ちゃんはブータン人だね」

「いえ、私は日本人で・・・」

「日本人!？」

なぜかその単語に過敏に反応するオバチャン。傍で聞いていた人達も何人が集まってくる。何だっただ、日本人。

「うわあ、日本人に会ったの初めてだ」

「本当に似てるー！」

「ちっちゃい女の子だねえ」

「天皇によろしくね」

「え、ちょ、天皇によろしくって言われても、会える人じゃないんですけど。ていうか、なんで日本人知ってるんですか？」

戸惑う俺とエルメスにっこり笑ったブータン人たちは、嬉しうに話してくれた。

その昔、ブータンでは高山地帯のせいで慢性的に農作物が育たなくて飢饉に陥っていたそうだ。そこで日本が派遣した農業研究者によって収穫量が爆発的に伸びた。その研究者は没年までブータンに留まって、国内農業の水準向上に尽力したそうだ。

その後も日本とブータンは親交があって、度々天皇も来訪しているし、数代前の天皇が崩御した際は、国王が弔問に足を運んで1か月も喪に服したそうだ。

どういうわけか顔もよく似ているし、民族衣装も、鎖国という歴史も共通点が多い。それで、ブータン人は大親日家らしい。

「うわあ、そうだったんですね。道理で！ 確かに衣裳も着物に似てますね」

「そうそう。嬢ちゃんも兄ちゃんもこの国に住むなら、家以外の場所では男はゴ、女はキラを着るのは法律で義務づけられてるからね。買ってきな」

「そうなのか、知らなかった。じゃあとりあえず10着ずつくれ」

「まいどあり！ 兄ちゃん気前がいいね」

「どうせ要るもんだからな」

服を買つと、店のおばちゃんは「奥の部屋で着替えてきな」と言ってくれて、エルメスと二人着替え始める。が、着方が分からん。

「エルメス、これどうやって着るんだ」



「アハ、そつか。カいはわかんないよね」

そう言うのとエルメスは俺に着付けを始めた。想像以上に手際よく。ブータンに来たのは初めてのはずなのになんで知ってたんだ。

「なんでお前この着付け知ってたんだ」

「男の人の衣装は日本の民族衣装とすごく似てるの。日本では民族衣装着る人あんまりいないけど、私は昔剣道やってたから着方は知ってるよ」

「ふーん、ケンドウってなんだ」

「日本の剣術だよ」

「ああ、だからお前剣だったのか」

「そうだよ」

そうこうしているうちにあつという間に着付けは終わって、今度はエルメスが着替え始める。着替えの終わったエルメスはどう？と振り向いた。

「女の衣装はインドのサリーに似てるな」

「そうだね。どっちも着付けの仕方知ってる服でよかったよ」

「だな。どうでもいいけど、俺らの荷物9割が服だな」

「本当だね」

店に戻ると、ギャラリーはまだ残っててエルメスが出てくるのを待っていたようだ。俺らが出てくるとなぜか大喜びだ。

「お嬢ちゃんはその格好するとブータン人にしか見えないね」

「兄ちゃんは微妙だな」

「余計なお世話だ！」

思わぬ非難を受けてイライラしながら煙草を取り出して火をつけようとすると、傍にいたオッサンから煙草を叩き落とされた。

「オイ、何すんだよ」

「兄ちゃん知らねえのかい？ ブータンは国内全面禁煙だよ」

「はあああ！？ マジで！？」

「国内では製造も販売もしてないからね。ブータンでは喫煙は禁忌なんだよ」

「マジ！？ 買えねえ上に吸うのもいけねえのかよ。家も？」

「いけないだよ、コレが。家もダメ」

「観光客は少しなら持ち込みOKだけど、決まりだからね」

「マジか・・・シヨック」

知らなかった。ブータンが国内全面禁煙なんて知らなかった。コレ吸い終わったらお別れかよ。ああ、別れたくねえよマイハニー。そんな俺の気も知らないで、がっくりとうなだれる俺の肩をたたいてエルメスは半笑いだ。

「これを機に禁煙にチャレンジしてみたら？」

「無理だ・・・俺はコイツがいなきゃ生きてけねえんだよ。煙草は

「お前、俺の生涯の恋人だぞ」

「別れちゃいなよ、そんな悪女」

「悪女とわかってても俺はもうコイツの虜なんだよ。チクショー、ブータン出るか」

「それはダメ！」

「兄ちゃん心配すんな。そのかわり別の嗜好品があるからよ」

オッサンの言葉に顔を上げると、おっさんは何かわからん白い粉と葉っぱを取り出す。おもむろにオッサンはその葉っぱと粉を口に入れて噛みだして、俺にもそうしろと差し出す。言われたとおりにしてみると、口の中に渋みが広がった。

「なにコレ、渋っ」

「コイツの良い所は味じゃないんだよ」

「確かにこの渋味は慣れるまでは欠点だねえ。紅いツバがイッパイ出るのも」

「あ、それでツバ吐いてる奴多かったのか。あ、確かに溜ってきた」

ペツと吐き出すとツバは真っ赤だ。口の中もきつと真っ赤だな。

まあ血で慣れてるしどうってことねえか、と思ってたなら、なんか頭が軽くボワっとしてきた。

「おや、さすがに初心者はくるのが早いね」

「なんだ、コレ」

「コレには覚せい作用があるんだよ」

「マジ？ 覚せい剤？」

「ってほどでもないよ。酒程度なもんさ」

「ああ、なるほどね」

「ソレ、”ドマ”はどこでも売ってるから、気に入ったら買いなよ」  
「おお、サンキユ」

おばちゃんたちに別れを告げて、車に戻ってホテルを探そうと思っただけど、どうも頭が微妙に酩酊してる。こりゃ明らかに酒気帯び運転だ。イヤ、酒気とは言わないか。

幸福の正体見たりか。

もしやこの国の幸福率の高さは、この”ドマ”によるものなんじやねえのか。これがあれば毎日ハイテンションでハッピーに暮らせるだろう。しかも麻薬ではないらしいし。

まあ、でも煙草の代わりにはなるか。でも、ご利用は計画的にだな。これ以上ブツ飛んだら俺は病院送りだ。気を付けよう。

FILE - 40      Crimson drug      「紅いドラッグ」(前書き)

もしかしたら、R-18かもです。18歳以下はUターンでお願い  
します。基準がよくわからない。

俺とエルメスの旅行記

なんとか宿泊先をゲットして、そのホテルに滞在して既に1週間経過した。その間まんまと俺は煙草を吸い終わって泣く泣くハニイと別れを告げ、“ドマ”に乗り換えた。

どうにかして家を探さなきゃなあ、どうでもいいけどこの“ドマ”ってガムつぽくなんねえのかなあ、と考えながら噛んでたら、風呂から出てきたエルメスが隣に座ってきた。

「それ、おいし？」

「美味くはねえ」

「どんなかんじ？」

「酒飲んだ時みてえな。なんかハイになる」

「へえ、吸血鬼には麻薬はクソ不味い大敵だつて聞いたけど」

「麻薬が混じった血は確かに不味いな。これは合成じゃなくて葉っぱだし、しかも喰う物じゃねえから平気なんじゃねえか。知らんけど」

「ああ、だから煙草もいいのかな。私もちよつと頂戴？」

「ホレ」

エルメスも真似して噛み始めるも、すぐに顔を歪める。この渋味

がお気に召さなかったようだ。それでも我慢して噛み続けるエルメス。なんだその無駄な忍耐強さ。

「嫌なら吐き出せよ」

「ちよつとしかないのに勿体ないよ」

日本発MOTTAINAI精神はここでも発揮された。しばらくして立ち上がったと思ったら、洗面所に吐きに行つてたようだ。俺も続いて吐きに行つたら、エルメスが洗面所からフラフラしながら歩いてきた。

エルメスの横を抜けてペツしてエルメスに向いたら、なんか目がトロンとしてる。

「なんかフラフラするう。なんでカイは平気なのお？」

「いや、俺も酩酊してるけど」

「ふうーん、カイ、だっこ」

うわあ、イツてるわ。何とか引きはがそうとしても例によって剛腕でとてもじゃねえけど離れない。

仕方なくそのままエルメス引き摺ってソファに座っても、ベタベタ引っ付いてきやがる。うぜえ。

「オーイ、いい加減離れようぜ」

「やーだ」

「ウザいんだけど」

「ウザくないもん。カイは私の事キライなの？」  
「いや、嫌いじゃねえけど」

嫌いじゃねえけど、本当面倒くさいこの子。なんなのこのラリった吸血鬼。顔をそむけて横にハアとデカい溜息ついてたら、首筋に息がかかって思わず戦慄が走った。

「お、お前やめろよ。噛みつくなよ。俺はお前の眷属にはなりたくねえぞ」

「大丈夫だよ。契約するわけじゃないし、ちょっとくらいなら、眷属にはならないよ」

「そう言う問題じゃ・・・うっ」

まんまと噛みつかれた。皮膚を突き破る音がしたと思うと、ゆっくりと少しずつ血液が吸われる感覚がする。それと同時にこみ上げてくるゾクリとした感覚。

なんだこれ。これはヤバイ、これはマズイ、超気持ちいいんだけど。何だこの性的快感は。

うっかりその感覚に吞まれてたらエルメスがぶはつと口を離して、なんか変な気分になってきた俺に微笑んで、唇に着いた血を指で拭いて舐めとる。

「カイの、美味しい」



危ねえ！！ 今一瞬理性飛びそうになった。ふー、  
危ない危ない。なんて恐ろしい酩酊エルメス。そして悲しい男の性。

妙な葛藤に苛まれる憐れな俺に、酩酊エルメスは更に大胆な行動に出る。いきなり俺の膝の上ののって来たと思ったら、風呂上りで濡れた髪を掻き上げて「ハイ、どうぞ」。

「い、いや、なにが？」

「カイもお腹空いたでしょー？」

「いや、いいです」

「私だけ貰うの悪いもん。ちょっとだけなら大丈夫う」

ちょっとだけなら、いいですかね。あっさり誘惑に負けた残念な俺は、メガネ外してエルメスの首筋に牙を立てた。

俺の牙が首筋に突き刺さった瞬間、エルメスはピクンと体を震わせる。あれ、これはもしかしてエルメスもなのか、そうなのか。

溜息に似た吐息を漏らすエルメスに、段々と俺の理性が外出の支度をはじめやがる。エルメスがちよつとつったからすぐに口を離すと、首筋に一滴血が流れた。それを舐めたらまたエルメスは体を震わせて、小さく声を漏らした。

それで俺の理性は「ちよつとコンビニ行ってくる。3時間くらい」  
つって外出しやがった。

エルメスの首筋に舌を這わせてキスをすると、エルメスは体を震わせて甘い声を漏らす。

「やつ、カイ、ちよつと・・・待って」  
「待たない」

よしよし、抵抗は弱いな。でかした合法ドラッグ。ちよつとくらいならいいだろ。いいはずだ。俺はエルメスの為に日々頑張ってるから、ちよつとくらい褒美をもらってもいいはずだ。

首筋から顔を離して、エルメスの頭を引き寄せてキスした。何度も何度も。エルメスは抵抗をするものの、本気で嫌がる様子はない。どうやらエルメスも雰囲気にもまれて、ドマでブツ飛んでるようだ。

徐々に深くキスして舌を絡ませてたら、俄然ノリノリになってきた。

段々下にキスを移して、首筋にキスしながら風呂上りでキャミソールしか着てなかった無防備なエルメスに感謝。

キャミソールとブラのストラップを一緒に下して、ブラを外すと腰までストンと落ちた。さすがにそれにはエルメスも慌てて前を隠すような仕草をする。

「やだ、ちよつと待ってってば」  
「待たねえって」  
「や、本当ちよつと待って!」  
「無理」

膝の上に載ってたエルメスを反転させて、後ろ向きに座らせて後ろからがっちり腰をホールド。

どうもエルメスはビックリしてちょっと正気を取り戻したようだ。これは雰囲気でごまかそう。

「お前が誘ったんだろ」

「さ、誘ってないもん！」

「嫌じゃねえだろ」

「ヤだよ！」

「その割には気持ちよさそうにしてんじゃねえか」

「そんなことな・・・んっ」

後ろからエルメスの胸を触ったら、ビクツと体を震わせる。エルメスの巨乳はイイ。実にイイ。本格的に愛撫を始めると、さすがのエルメスも大暴れ。なんだよチクショウ。

「あ、もう！ ヤダ！ ヤダ！」

「暴れんな、気持ちよくしてやるから大人しくしろ」

「いやー！」

「暴れんなって」

「ちよっと、ダメ！」

俺の手をどかさそうとする指に関節技をキメて防御を阻止。ショー  
トパンツの中に指を侵入させたら、指先にぬるっとした感触。

「なんだよ、嫌がってる割には濡れてんじゃねーか」

「やだ・・・違う、んっ！」

「違うってなにが？ 気持ちいいならそう言えよ」

「あっ、やだ！」

「お前と違って体の方は正直だな」

「もう、お願い、やめて！」

必死に閉じようとする足を開かせて間に俺の脚を挟んで封鎖を阻止。嫌がってるくせに指を動かすたびに反応して声を漏らすエルメスに超興奮。

んー、エルメス可愛いな。それもこれもドマのおかげだ。素晴らしきかなブータン文化。

最早ノンストップな俺のゴールドフィンガーに、徐々にエルメスの息遣いが荒くなってくる。

俺の手をギュッと握って、一際体を震わせた後クタツとなるエルメスに激萌え。何なのこの子。可愛すぎる。ぐったりするエルメスに後ろから抱き着いた。

「気持ちよかっただろ」

「はあ・・・もう、ヒドイよ。なんでこんなことするの」

「なに？ もう一回？ しょうがねえな」

「や、ちが、あっ！」

もう一回気持ちよさげにしてるエルメスが見たくなった。それで

更にテンションが上がって、新しくドマを口に入れてしばらく噛んで、更にハイになってきた頃にエルメスに口移しで流し込んで、手で口を塞いでやった。

最初の内は必死に手を剥がそうとしたけど、覚醒作用のせいかな抵抗しなくなって、素直に反応するようになってきてから手をどけてやると、再び絶頂に達したエルメスは咳込んで、吐き出した口元から紅い唾液が零れた。

ちょっとくらいと思ったけど、コレはもうヤツちゃっていいかな。うん、いいだろ。いいと思います。

合法ドラッグのせいで、俺の理性はとうとう家出した。

ぐったりエルメスを寝室まで抱えて俺が服を脱いでエルメスの服も脱がすと、さすがに逃げ出そうとするがガッチリ捕獲。しばらくキスしていると諦めたのか、大人しくなった。

さーで、いただきますーす、と本番に突入しようとした瞬間、再び正気に返ったエルメスは大暴れ。

「もー！ やー！ やー！」

「痛てっ！ お前暴れんなよ」

「もー！ ヤダって言ってんじゃん！」

「まあ、いいからいいから」

「よくないよ！ バカ！」

「ぐっ！」

まさかの強烈なボディブローに、思わずエルメスの上に倒れこんだ。チクショー、もう一息だったのに。

倒れこんだ俺に「もー！ どいてよ！」と、エルメスは執拗にボ  
ディブロー。

その痛みで、俺の理性は慌てて帰宅した。

うおおお！ 何してんだ俺！ 何てことしてんだ俺は！ 最悪！  
ドマ最悪！ やっべー、どうしよう。絶対嫌われた。ヤベー、マ  
ジどうしよう。

ああああ、俺は本当に何てことしちゃったんだ、チクショー。マ  
ジどうしよう、どうしよう、本当どうしよう。

頭を抱える俺の横でエルメスはバサバサとシーツを被って、怒っ  
たように息を吐く。

うわあ、怒ってる。当たり前だけど怒ってる。どうしよう、謝っ  
て許してくれんのかコレ。

つーか、俺は本気でこういうことを望んだのか。そりゃエルメ  
スを独占したいか思ってたけど、こういうことは別に・・・まあ  
オプシオンとしてはアリだけど、別に本気でこうなりたいか思っ  
てたわけじゃないのに、何でこんなことに。

チクショー、合法ドラッグチクショー。そうだよ、そもそもエル  
メスにアレやらせたせいだ。もう二度とアレには手をださねえ。

つーか俺もう死のうかな。うん、そうしよう。俺が男だからいけ  
ねえんだ。俺が生きてるからいけねえんだ。どーせエルメスも許し  
てくれないだろうし、もう嫌われただろうし、そしたら俺生きる意  
味ねえし。よし、そうしよう。

ガバッと起き上がって服を着てエルメスに土下座した。当然エルメスはまだ怒ってる。

「すみませんでした」

「謝ったからって許さないよ」

「わかってる。お前とはここでお別れだ」

「え？」

「今まで楽しかった。ありがとう。ごめんなさい。さよなら」

「え、ちょ、ちよつと待って。どこに行く気？」

「ちよつと、ジュリオ様の所に行くってくる。じゃーな」

「え！？ ちょ、ちよつと待って！」

「なんだよもー！ 離せよ！」

「待ってってば！」

エルメスに腕を掴まれてグイッと引っ張られたはずみで再びベッドにダイブ。力ではかなわないと悟ってシーツに泣きつく俺。

「もー！ なんだよもう！ 悪かったと思ってるよ本当に！ だから死なせてくれよ！」

「あの、ちよつと落ち着いてよ。なんでさっきから待ってって言うてるのに聞いてくれないの？」

「・・・ああ、そうか。お前が自分の手で殺したいんだな。わかった。似るなり焼くなり好きにする。本当にすみませんでした。お前に殺されるなら本望です」

「や、だから私の話聞いてよ。落ち着いてってば」

「いや、俺は落ち着いてる。さすがに落ち着いた。だから俺に生きる価値はないと悟った。本当に俺は最低だ。エルメスに嫌われるのも無理はない。許せなくて当然だ。だから俺に生きる価値はない。殺されて当然だ。ああ、俺はなんて最低なんだ。別にこういうことしたいと思ってたわけじゃないのに、エルメスを大事にしようと思ってたのに、大事にしてるつもりだったのに覚醒作用に負けてしまった。俺は結局その程度の男だったんだ。エルメスにこんなことして、もう傍になんていらねえし、嫌われたら俺生きてる意味ねえしなあ。ああ、そうだ。ジユノ様に頼んで今日の記憶を消して貰おう。いや、いつそのことエルメスから俺の記憶を消して貰おう。うしよう。それで俺が死んだら世界は平和だ。記憶が無くなればエルメスが嫌な思いすることもないし、俺も死んで一石二鳥・・・」

「もう、さつきから何言ってるの！ 落ち着いてったら！」

シートにすがってメソメソ言っていたら、エルメスにバシッと頭を叩かれた。それでエルメスの顔を見たら、俺を見下ろしてそれはもうデケエ溜息を吐いた。

「なんでこういうことしたの？」

「・・・なんでかな。強いて言えばドマのせいだ。どうかしてました」

「あれがなければしない？」

「絶対しない」

「本当に？」

「本当に」

「絶対？」

「絶対」



しばらく会話して視線を合わせると、エルメスはフィと視線を外して立ち上がった。

「私お風呂行ってくるから」

「いつてらっしゃい」

「そこ、動かないでよ」

「ハイ」

「カイも一緒に入る？」

「え!？ い、イヤ、いつてらっしゃい」

「・・・そこを動かないように」

「ハイ」

危ねえ、今のは罠だ。良かった、ひっかからなくて。とりあえずエルメスの言う通り大人しくしよう。  
ベッドでゴロゴロしながら待っていると、1時間ほどしてエルメスが風呂から出て寝室に戻ってきた。

「カイもお風呂入って、頭冷やしなさい」

「ハイ」

「私は先に寝るから」

「ハイ」

「寝てる間に何かしたらハッ倒すからね」

「絶対しません」

「おやすみ」

「おやすみなさいませ」

入浴しながら懺悔。

チクシヨ、いつその事この残念スティック切り落としちゃうか。イヤイヤ、それなら普通に死にたい。ああ、エルメス怒ってたなあ。きつと嫌いになっただろうなあ。俺を殺さないのは、生きながら死にたいとか思わせる様に仕向けようとしてもしてんのか。

いや、でも罪は生きて償わないといけないのか。俺もう本当マジでエルメスに絶対服従しよう。そうしよう。マジでエルメスの忠犬になろう。いや、そういう乳製品的な犬じゃなくて。

風呂から上がって寝室に入ったら、エルメスは既に寝てて、静かに寝息を立てていた。

今日は、さすがに一緒に寝るのはちょっとな。ソファで寝るか。そう思ってベッドの端に置いてあった暗幕を一枚取って、エルメスの寝顔を見てみた。その寝顔に思わず溜息が出る。

「ハア、エルメス、本当ゴメンな」

寝室を後にしてソファで暗幕に包まって再び反省会。何で俺男に生まれてきたんだろう。死ねばいいのに俺。明日あたり死ねばいいのに。ヒマラヤの山頂から落ちて死のうかな。

朝まで続いた反省会と自分の犯した暴挙のせいか、この日は悪夢を見た。



俺とエルメスの旅行記

そう言えば俺気を付けようって思わなかったっけ。思ったよな。なんで気を付けないわけ？ 俺なんなの？ バカなの？ 死ぬの？ 死ぬか。

翌日目が覚めても、悪夢の為に寝ざめも悪く、相変わらずソファで暗幕に包まりながらウダウダと反省会。

ああ、絶対エルメスまだ怒ってるよなあ。嫌われたよなあ。つか顔合わせづれえ。できる事なら昨日の俺を切り刻んで、ヒマラヤ山中の獣たちの餌にしてやりたい。

溜息を吐きながら反省会をしていたら、寝室のドアを開く音がしてエルメスが起きてきたんだと気付いて、つい寝たふりをした。

あ、俺のバカ。今寝たふりしたら起きるタイミング逃すじゃねえか。あー、しまった。どうしよう。と、思ってたら、俺の前にエル

メスがしゃがんだ雰囲気。

俺の顔の前で、エルメスは大きく溜息を吐く。

「カイのバーカ」

「すみません。」

「なんてことするのよ」

「本当すみません。」

「私にはクリシュナがいるのに」

「そうでした！ すいません、本当すみません。」

「カイには1000年早い」

「そうですね、すみません。いや、1000年後ならいいのか？ 違うか。」

「死ぬとか言ってバカじゃないの」

「ハイ、俺はどうしようもねえバカです。」

「ハア、本当バカ」

「ハイ、すみません。」

「でも、まあいつか」

いいのかよ！

「カイがいなくなるくらいなら、許してあげるしかないよねえ」

マジですか！

「あ、でも初犯じゃないんだった」

そうだった！ 俺前科者！

「でも反省してたし、許してやるか」

エルメス優しい！ ありがとう！

「で、いつまで狸寝入りする気？」

思わぬ言葉に思わずパチツと目を開けると、目の前でエルメスがニヤリと笑っていた。

「お、おはようございます」

「おはよう」

「すみませんでした」

「反省してる？」

「猛省してます」

「私怖かったんだけど」

「誠に申し訳ありません」

「これは重大な背徳だよ。わかってる？」  
「わかってます。申し訳ありません」  
「そう、とりあえず今後私には絶対服従ね」  
「勿論です」  
「人に話したら爆破するよ」  
「勿論です」  
「ヤダって言ったらちゃんとやめてね」  
「勿論です。エルメス様には今後指一本触れません」  
「それを決めるのは私」  
「はい、すみません」  
「とりあえず家探しに行くから支度して」  
「畏まりました」

俺の返事を聞いたエルメスは、立ち上がって洗面所に向かって行った。なんか今のやり取りが微妙に腑に落ちなかった。

俺がエルメスに触れるのがエルメスの裁量次第というのはどういうことだ。あ、もしかしてアレか。アーサーの調教による過剰なスキップに慣れたせいで、不可触なのはさすがに寂しいとかそういう事か。

まああの合法ドラッグさえなければ今後こんなことは起きないはずだし、それでもいいか。

起きない、よな？ 一回こんなことがあってリミッター壊れてたりしねえよな？ いや、自分に自信を持って！ 俺はやればできる！  
できる子だ！

起き上がった俺はテーブルの上に残っていたドマを握って、窓を開けて思いっきりブン投げた。

諸悪の根源は絶った。クソー、やっぱ俺の恋人は煙草しかいねえ。でもこの国は禁煙だしなあ。エルメスの言う通り、禁煙にチャレンジするしかねえな。

エルメスと入れ違いで洗面所で顔洗って寝室のドアを開けると、エルメスは着替え中だった。それで慌てて「失礼いたしました！」とドアを閉めて溜息ついたら、寝室からも溜息が聞こえた。あ、溜息で起きてるってバレたのか。ウツカリしちゃった。

寝室のドアが開いて、着替えの終わったエルメスを見て俺は驚愕した。即寝室に入ってエルメスの荷物の中から小物を取り出してエルメスに差し出した。

503

「エルメス様、誠に申し訳ありませんが、こちらをお召ください」「ストール？ なんで？」「なんでもです。お願いします」「別にいらな・・・あ、まさか！」

思いついたような顔をしたエルメスは、首元に手をやるとすぐに顔が赤くなって表情に怒りを表した。エルメスは俺をキッと睨みつけると、ストールを奪い取って首に巻きつける。

「ホントもう、バカ！」  
「申し訳ありません」



「なんでキスマークつけてんのよ！」

「いや、なんかノリで」

「もう！ バカ！」

「申し訳ありません」

キャンキャンと俺を罵倒しながらキレるエルメスに謝罪しつつも、内心なんか嬉しくなった俺。

うわあ、なんか俺のモノって感じじゃね？ ってイカンイカン！

ここで喜んだら負け！ イカンイカン、昨夜の件で異常性に拍車がかかった気がする。イカンイカン、これは本当にイカン。遺憾。

もう最低でも2次元の趣味を3次元に召喚しないように気を付けなければ。エルメスはきつと怒った以上に傷ついたよなあ。背徳、裏切りだもんなあ。怖かったって言ってたしなあ。ハア、俺って本当最低だ。

折角最近エルメスが元気になって来たと思ったのに、俺は本当取り返しのつかない事したなあ。何なの俺。本当なんなの。何がしたいの俺は。エルメスを幸せにしてあげたいんじゃないのかよ。ハア、本当俺ってどこまでも役立たずだな。俺死ねばいいのに。もの凄く苦しい死に方して死ねばいいのに。

着替えながら反省会を通り越して、最早自己嫌悪会議だ。本来自信家の俺がここまで自分の死を望んだのは人生初だ。

自己嫌悪に陥っていたら、とんでもない事実を思い出した。

そうだ、そう言えばエルメスはアーサーの眷属じゃねえか。エルメスの思考はアーサーには筒抜けだ。もし今回の件がアーサーにバ

したらどうなってしまうんだ。

さすがに今回は見逃しちゃくれねえよな。絶対殺される！ 間違  
いなく殺される！ いや、いいか。しょうがねえよな。それほどの  
事だ。本当しょうがねえわ。

案外すぐに諦めが付いた。つーか、今ならジュノ様に魂捧げても  
いいな。何お願いしよっかな。あ、でもジュノ様に頼みごとするな  
らインド戻らないと。でもそうになるとエルメスが危険だしなあ。ま  
あ、気が向いたらでいいか。

「もう、カイ遅いよ？ 着付けまだわかんない？」

「え、いえ。ただいま参ります」

考え事に夢中で手が動いてなかった。急いで支度を済ませると、  
ドアの前でエルメスが待ちくたびれた顔をして立っていた。

「申し訳ございません。お待たせいたしました」

「ハア、いこっか」

「はい。お荷物お持ちいたします」

「ありがとう」

夕方の市内に繰り出して、不動産屋を探した。近頃急激に欧米化  
しているブータンは意外と首都は都市っぽい。すぐに不動産屋に入  
ると、その不動産屋のオヤジに驚愕。

「おう、この前の白人兄ちゃんと日本人の嬢ちゃんじゃないか」  
「うお、オッサンこの人かよ！」

俺に悪魔のドラッグを教えやがったオッサンが、不動産屋のオヤジだった。なんだろう、これは嫌がらせか。

昨夜の暴挙など当然知らないオッサンは、ニコニコしながら例の話題を降りやがる。

「ドマ気に入ったかい？」

「え、い、いや、俺の口には合わなかったからな」

「そうか、そりゃ残念だね。でもその方がいいかもしれん」

「な、なんで」

「ありや依存性があるからな」

「マジかよ！ うあ、最悪だあ・・・」

てことはなんだ、俺はニコ中とドマ中に苛まれなきゃいけないって事か。最悪だ。本当最悪だ。最悪の天罰だ。インド帰ってえー！  
煙草位吸わせろ！

よよよ、とドアにもたれ掛る俺にオッサンは相変わらずニコニコしながら不思議そうな視線を向けるが、エルメスの視線は純白だ。その視線に気づいてすぐに姿勢を正す。

「いえ、エルメス様、何も問題ありません」

「本当にいい？ 大丈夫なの？」

「勿論です！」

勿論ですよ、チクシヨウ！ チクシヨウ、何だって俺は常に苦悩を抱える羽目になるんだ。俺が一体何したって・・・したんだった！ チクシヨウ、マジ俺死ね、チクシヨウ。

再び自己嫌悪に陥る俺をよそに、オッサンとエルメスは順調に新居を選別しだす。

「希望は？」

「駐車スペースがあつて、とりあえず2LDK以上で地下室のある一戸建てで」

2LDK・・・俺と同室はもうイヤつてことか。以前から俺の方が望んでたことなのに、なぜか素直に喜べない。いや、その方が色々都合はいいんだけど。

「鍵の交換は？」

「全室バラバラのものをお願いします」

うわ、俺完全に信用失くしてる。当然だけど悲しいなあオイ。

「予算は？」

「改築が可能なら100万まで」

「それだけありゃ豪邸に住めるよ。ところで国籍は取得したかい？」

「・・・いえ」

「んじゃ無理だ」

がつくりとうなだれるエルメス。そう言えばイタリアの時はどうしたんだ。アーサーの不思議能力で何とかしたのか。

どの道俺らは国籍の取得は不可能だ。悩んだエルメスはなおもオッサンに縋る。

「実は私達難民なんです。国籍取得できなくても住める様のところってありません？」

「あるとしたら南部地区だね。あの辺は無国籍のネパール系が多いからね。昔それで暴動が起きて、難民が続出してから空き家も多いはずだよ」

「本当ですか！？」

「でも治安は悪いよ」

「住めるなら治安の良し悪しなんかどうでもいいです！ ありがとうございます！」

「いえいえ、役に立てなくて悪かったね。気を付けるんだよ」

「ありがとうございます！ じゃ、カイ、早速チェックアウトして南部行こうか」

「畏まりました」

すぐにホテルに戻ってチェックアウトを済ませて南部へ向かった。ブータンは狭い国だ。ものの3時間で着いた。到着してビビった。これは、俺ら生活出来ねえぞ。

いや、人間なら生活できる。でも、俺らには不可能だ。家はまあ普通だ。だが公共施設が見当たらない。要するに病院が見当たらない。

いや、無いわけではないんだが、圧倒的に数が少ない。という事

は輸血用血液を入手できる伝手がないという事だ。俺らのせいで現地の人たちの血液を奪うわけにはいかない。

さて、どうしたもんかと考えていたら、エルメスも悩んでいた。

「エルメス様、いかがなさいますか？」

「うーん、まあまだ血は残ってるし、どの道この時間じゃ家を探すこともできないから、とりあえず宿を探そうか」

「そうですね。わかりました」

さすがに観光すら制限されてる地区なだけあって宿はすぐに見つかった。勿論部屋は別々だ。でもエルメスと別々の部屋なんてかなり久しぶりでむしろ違和感。そんな違和感の為なのか何なのか、今日も悪夢を見た。

翌日、慌てて飛び起きた俺の横にはいつの間にかエルメスがいて、不安そうな顔をしていた。

「カイ、どうしよう」

「もしかしてエルメス様もご覧になりましたか」

「うん、見ちゃった」

悪夢だった。夢を見た。

夢の中の俺は真つ暗な空間にいた。吸血鬼に暗闇なんてものは存在しないはずなのに、相当久しぶりに味わう暗闇に動揺した。

前も後ろもわからないその真つ暗な空間を歩いていると、目の前には人影。目を凝らしてみると、だんだんと輪郭がはっきりしてきて、突然暗闇にその姿が浮かんだ。

「ヤベツ！ ぐっ！」

「もうカイさんったら、何もそんなに力の限り逃げることはないでしょう？」

突然現れたジユノ様に背を向けて走り出した瞬間に、首元をロツクされて止められた。

なんて力だ、どれだけ暴れてもピクリとも動かない。大暴れする俺とは対照的に背後からクスクスと笑う声が響く。

「ブータンっていいところですよね」

「は！？ な、何がですか！？」

「私にウソは通用しませんよ。どこに逃げても無駄な努力です。私にはお見通しです」

「チクシヨー！ 千里眼でも持ってるのか！」

「ご名答。なかなかやりますね」

「マジかよ……」

「冗談で言ったのにまさかの正解。千里眼あるなら確かにこの逃避行は最初から頓挫しているも同然だ。」

「で、でも流石に瞬間移動はできないでしょ。別に見つかっても逃げ続けてやりますよ」

「確かにできませんよ。でも私は悪魔ですから、あちらとこちらを行き来できるんですもの。どういう事かわかりますよね？」

「次元とか空間を渡れるとでも？」

「正解です。瞬間移動よりも効率的ですよ。いつかあなたにも教えてあげますね」

「じゃあ今教えて下さい。逃げますから」

「それはできません。それより、もうそろそろバカンスはお仕舞にしましょう。今まで黙って見逃してあげたんですから、自発的に戻ってきませんか？ 連れ戻しに来ても構いませんが、私のプライドが許しません。ご自分の意志で戻ってくるなら、許してあげますよ」

「もう、仕方ありませんね。ではカイさんをバカにするしかありません。あの事、みんなにバラしちゃいますよ」

「あ、あの事って？」

「私は千里眼があると言いましたよね。勿論見えましたよ。昨夜の事」

「うわああ！ やめてください！」

「やめてほしい？ 本当に？」

「お願いします、黙っててください！」

「うふふ、カイさんの秘密、2つも握っちゃいましたね。黙ってほしいなら、私の言う通りにした方がいいんじゃないありませんか？」

「くっ、卑怯ですよ！」

「ありがとうございます。最高の褒め言葉です。あなたも煙草吸いたいでしょう？ あんなドラッグにまた翻弄されたいですか？ 戻ってきた方がお互いにメリットがあるので？」

「くそ……」

「うふ。待ってますからね」



「あ、待つてくだ・・・消えた」

ロックされていた首が解放された瞬間に後ろを振り返っても、そこには闇が広がっているだけ。

まさか夢にまで出てくるとは。つーか夢の中で夢って自覚するこ  
とってあるんだな、と軽く現実逃避な思考をした。

「クッソー・・・これって夢なんだよな。マジなんで俺いつも誰か  
に見られてんだよ!」

「忘れてました、不動産屋の店主から伝言です」

「うおああ!」

暗闇の中でブツブツ独り言を言っていたら、急に目の前にジユノ  
様の顔が現れて、思わず腰を抜かしそうになる俺。

「な、なんですか! え、不動産屋のオヤジ!？」

「あのですね、「俺がやった奴は特別キツイ処方だったから、相当  
ブツ飛んだだろう。依存性が強いからリハビリ頑張れよ」だそうで  
す」

「ちょ、ちょ、まさかジユノ様がオッサンになんかしたんですか!」

「うふ、なんてね。ま、兄ちゃん頑張れよ」

話ながらジユノ様は突然姿を変えたと思うと、不動産屋のオッサ  
ンの姿になった。

「うおあああ! マジかよ!」

「じゃ、インドで待ってるよ、白人の兄ちゃん」  
「チクシヨオオオ!!」

ジユノ様に嵌められたことに気付いたその瞬間に目が覚めた。

俺の夢の話聞いたエルメスはドン引きだ。それは当然の反応だ。まさかあの未遂事件がジユノ様の策略によるものだとは想定外にも程がある。

同時に溜息を吐いて、俺の話聞いたエルメスは悲しげに視線を向ける。

「カイのバカ」

「本当に申し訳ありません」

「カイは本当はインドに帰りたかった？」

「いえ、そのようには考えておりませんでした。エルメス様は？」

「私も帰りたいとは思わなかったけど、夢のせいで今はどうしても帰りたい」

「どんな夢を？ 何を話されたんですか？」

「話はすぐに終わったよ。ジユノ様が一方的に話してただけ」

ジユノ様がエルメスに迫った脅迫は、2つ。

- ・ 勿論例の事件の暴露。
- ・ インドの屋敷の人間皆殺し。

「そんなの、帰らないわけにいかないじゃない」

「そうですね・・・帰りましょうか」

「うん・・・」

ジユノ様の言った通り、俺達は自発的に即帰ることになった。さすがは悪魔。痛い所突いてきやがる。

こうして俺らの幸せかと思いきやそうでもなかった旅は、最低な結末で終わった。

動報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメス様の行

瞬間移動でインドの屋敷に戻り、玄関を開けた瞬間にシャンティがエルメスに抱き着いてきた。

「もー！ エルメス様もカイも！ 心配したんだから！」  
「いきなり失踪したりしてゴメンね、シャンティ」  
「どういふことかちゃんと説明しなさいよ！」  
「う、うん」

シャンティと3人リビングに行くと、ある程度想像してはいたものの、やっぱりビックリさせられる。

楽しそうに微笑むジュノ様と、大悪魔にデレデレと傳くシュヴァリエの姿。デジャヴなその光景にやっぱり荷物を取り落す俺ら。

「二人とも、おかえりなさい」  
「くっ・・・ただ今戻りました」  
「うふ。カイさん、顔色がよくありませんよ。大丈夫ですか？」

「余計なお世話です」

「オイオイ、副長。帰ってそうそう心配かけといて態度ワリいな」  
「ジユノさんに感謝しろよ。副長とエルメス心配して、毎日の様に屋敷に様子伺いに来てくれてたんだぞ」

何が心配だ。そりゃ顔色も悪くするぜ。憎らしい、なんて憎らしいんだクソ悪魔。

悔しさでイライラする俺にっこり微笑んだジユノ様は、立ち上がって俺の前に来ると紙袋を差し出した。

「はい、カイさんにプレゼントです」

「は？」

「どござ」

差し出された紙袋を受け取って中を見ると、俺が吸ってた銘柄の煙草が2カートンと、別に小さな箱。

クソ、煙草とか嫌がらせかよ、と思いながら小さい箱は何だろうと取り出そうとして、取り出す前にそれが何かわかって、窓を開けて紙袋を勢いよくブン投げた。

それを見てニヤニヤ笑うジユノ様はめっちゃ楽しそうだ。俺の傍まで顔を寄せると、ジユノ様はコッソリと耳打ちする。

「折角用意したのに。使っただけじゃないんですか？」

「絶対使いません！」

「うふ。避妊は大事ですよ？」

「心底余計なお世話です！」

チクシヨウ、なんて性悪だこの大悪魔。人の気も知らねえで、いや、わかかってやってんなコノヤロー。コイツのせいで、コイツのせいだつてのに！

イライラしすぎて血管が八ちきれそうな俺に、エルメスは不思議そうに視線を送る。

「カイ？ 何が入ってたの？」

「いえ、なんでもありません」

「そんなに気に入らなかつたの？」

「ええ」

「でもジュノ様からのプレゼント投げ捨てちゃうなんて、後が怖いよ」

「・・・そうですね。それでも私には必要のないものです」

俺の苦々しい表情で余程嫌なものが入ってたと察してくれたのか、エルメスはそれ以上質問しては来なかつた。

その質問が終わった頃に、俺らの帰還を聞きつけたランスとガラードが笑顔で階段を下りてきた。

「副長ー！」

「エルメス様！ おかえりなさい！」

その様子に、ああ心配かけたんだな、とちよつと反省したが、エルメスに飛びつこうとするランスに対して、エルメスが若干ビクッとしてるのに気付いて、ランスがエルメスに到達する寸前に阻止。

「うう、オイ！ 何すんだよ！」

「黙れ、エルメス様に触れるな」

「なんで！？ ていうか、エルメス様？」

「うるせえ。シャンティ以外の奴がエルメス様に接触する事は許さない」

「なんで？」

「なんでもだ」

ランスとガラードは不思議そうかつ不服そうにしていたが、思いついたような顔をしてガラードが俺に向いた。

「でもさあ、副長はいいの？」

「例外はない」

「じゃあ部屋どうすんの？」

「！！！ そーだった！！！」

すっかり忘れてた・・・この屋敷は満室だったんだ。どうしよう、マジどうしよう。こうなった以上、エルメスは確実に一人部屋にする必要がある。俺とランスの居室を絶対確保する必要がある。

悩みに悩んだ俺は、選択肢は一つしかないと思ってエルメスに向いた。

「エルメス様、お願いがございます」

「なに？」

「クリシユナ様の部屋を改修して、私とランスの居室として使用する許可を戴けませんか？」

「えー、僕カイと二人部屋なんてやだ」

「うつせえ！ テメーは黙ってる！ エルメス様、お願いします」

最早これしかない。エルメスには本当に申し訳ないけれども、クリシユナさんの部屋以外にもう選択肢がないのだ。

しばらく考え込んだエルメスは、わかった、と溜息を吐きながら許可してくれた。

「改修が完了するまでの間は、私はガルフ、ランスはガラードの居室に移動しますので、それでよろしいでしょうか？」

「うん、わかった」

「イヤイヤ副長？ 何勝手に決めてんの？」

「オイオイ、俺はお前と同室なんて嫌だぞ」

「うるせえ、短期間なんだから我慢しろ」

「ていうかカイ、なんで急にそんな執事っぽくなってんの？ どうしたの？」

「生まれつきだ」

「ウソにも程があるよ」

確かに程があるが、そこに突っ込まれたくない。古傷どころか真新しい傷を抉られたら化膿してしまう。



とりあえずみんな集合してきたのを見計らって、勝手に逃亡したことをまず謝罪して、逃亡した理由を話すことにした。

なぜか当たり前のようにジユノ様が溶け込んでるのは気になったけども。

「や、実はな、ジユノ様は悪魔だ」

「え？ ジユノさん人間じゃなかったんだ」

「しかも聞いて驚けコノヤロー。地獄の大侯爵、ジユノ・アスタロト様だ」

「あ、あ、あ、アスタロトオオオ!?!」

もしかしたら話すことを妨害されるかと思っただけど、そんなこともなくジユノ様は相変わらずニコニコしてやる。

それが逆に怖い気もしたけど、驚愕して次の言葉を待つ面々からの視線が痛かったから話を続けた。

「で、俺とエルメス様はジユノ様にめでたく獲物と認定されて、逃げ回ってたわけだ」

「獲物ってまさか」

「ああ、いずれはジユノ様に魂抜かれて死ぬ運命だ」

「な、なるほど。そりゃ逃げもするよな」

「お前らを人質に取られなきゃ、戻ってくる予定はなかったんだけどな」

「俺達人質だったんだ・・・」

目の前で微笑む美女が大悪魔だと知ったみんなは戦々恐々だ。

とてもじゃねえが、俺らが東になっても敵うような相手じゃねえ。

俺らはまさに蛇に睨まれた蛙だ。

でも、この件で1つ可能性を発見したから、はつきりさせておこう。

「ジユノ様は俺達に嘘を吐きましたね」

「半分は真実ですよ」

「半分は真実というのは真っ赤な嘘ということです。ジユノ様、ホントはアーサーはエルメス様の魂を売ったりはしていませんね？」

「なぜそう思われたんです？」

「あなたがここにいるからですよ。願いも叶えていない、魂も得ていない状態でアーサーが消滅して、ジユノ様の千里眼を持ってしてもアーサーを見つけることはできなかった。偶然俺達に遭遇したジユノ様は、アーサーに逃げられないように保険としてエルメス様を人質にとった。俺達をすぐに連れ戻すことができたのにそうしなかったのと、頻繁にこの屋敷に足を運んでいたのは、自分が空間転移している間に、帰ってきて状況を察したアーサーに再度逃亡されることを懸念したから。そうでしょう？」

恐らくアーサーがエルメスの魂を売ったと言うのは、真っ赤な嘘だ。でも、それ以外は確証も何もない完全な憶測。できることならジユノ様がそれを肯定して、エルメスが安心してくれさえすればいい。真実はアーサーから聞き出せば済むことだ。

俺の話聞いたジユノ様は嬉しそうに微笑む。

「うふ。だから私、あなたの魂がほしいんです」

「お褒めに預かり光栄です。それは俺の推論が正解だと解釈しても？」

「ええ、さすが異常者はなかなかやりますね」

「ありがとうございます」

やっぱり、あのアーサーがエルメスを陥れるはずがないんだ。これで満点とはいかないだろうが、恐らく80点くらいだろう。

つかやっぱり俺の魂が狙われてるのは別件だったか。チクシヨウ。

とにかくアーサーがエルメスの魂を売ったのが嘘だというのは間違いない。相手は悪魔だ。俺達に最初から真実を話す保証なんてどこにもない。

この話を聞いていたエルメスをはじめとしたみんなは驚いた顔をしていたが、次第に安堵の色が浮かんでくる。ここでランスが口を挟んできた。

「ねえ、でもカイは？ カイも死ななくていいんだろ？」

どこか心配そうなランスに嬉しいような悲しいような。思わず笑いそうになった。

「いや、俺はジュノ様に魂を捧げる」

「なんで！ カイが悪魔と契約しなきゃ済むことだろ！」

「そうしてでも、叶えたい願いがあるんだよ」

「なんでだよ！ カイは自分一人でもできるだろ！ 自分の願ひなら自分で叶えろよ！」

「これは、俺にはどれほど願っても叶える事は出来ねえからな。俺にだって、出来ねえことくらいあんだよ」

「ウソだよ。カイは今までずっと自分で何でもやって来ただろ。隊長しながらジュリオ様の執事もして、僕やガロード様も育てて、ずっとエルメス様の事も支えて。僕ずっとカイみたいになりたいって思ってたのに。カイみたいに頭もよくて強くて、一人で何でもできる男になりたいと思ってたのに、なんでそんな事言うんだよ……なんでカイが死ななきゃいけないんだよ……ううっ……」

そう言ったランスは悔しそうに涙を零し始める。ランスの奴そんな風に思ってたのか。嬉しいな。そう思ってランスの頭を撫でると、大人しく撫でられている。

「何もすぐにつてわけじゃねえ。そうやすやすと叶う願ひじゃねえし、お前が一人前のシュヴァリエになるのを見届けるまでは死なねえよ。ガキの成長見届けるのは、親の責任だからな」

「うるさい、いつまでもガキ扱いするな」

「俺から見たらお前はずっとガキだ」

「いつか絶対カイを超えてやるからな、クソオヤジ」

「そうだな。それが親孝行ってもんだぜ。せいぜい頑張れ、クソガキ」

本物の騎士が悪にすら手を染めると言つのなら、俺は悪魔にだって魂を売ってやる。願ひは、絶対に叶えてもらう。でも、そうやすやすとは死なねえぜ、クソ悪魔。



拝啓 アーサーさん

あの、なんていうか、すいませんでした。ジュノ様ウソついてたんですね。バカマスターとか言ってますいませんでした。本当すいません、許してください。

ていうか、なんか、あの、色々すいません。本当、あの、ごめんなさい。とりあえず謝罪だけさせてください。理由は聞かないください。

あ、そんな事より、私すごく素敵な経験をしたんです、ベトナムで！ 何とトリンの出産に立ち会っちゃいました！

しかもね、聞いてくださいよ！ トリンったら生まれた赤ちゃん女の子だったんですけど、赤ちゃんの名前「アミン」ってつけてくれたんです。凄いでしょ？ 嬉しかったなあ。

生まれたての赤ちゃんって初めて見ました。小っちゃくて可愛かったです。でも、あの日はすごく焦ったなあ。急にトリンがお腹痛いって言い出して、破水までしちゃって大慌てでした。

なんとか無事に出産できたんだけど、後でトリンが言ってたんです。

「先生は逆子だったって言ってたけど、数日前の検診ではそんなこ

となかったのになあ」

もしかして、私が瞬間移動で病院に連れて行ったせいですかね。もしかしたら、赤ちゃんの配置を間違えたんですかね。でも、検査の結果はいたって健康って事だったし、無事に出産できたから結果オーライですよ。

ていうか、マイケルさんの豹変ぶりがヤバかったです。もうアミンちゃんにメロメロです。とてもマフィアとは思えませんよ。人って変わるもんですね。

でもやっぱり赤ちゃんっていいですね。人が生まれる瞬間っていいですね。本当にいい思い出が出来ました。

今まで人の死しか見てこなかったから、間近で人の生に触れることが出来て本当に良かった。赤ちゃんを見て、生きてるってこういう事なんだなあって思いました。

ベトナムには一月ちよつといて、それからブータン王国に行きました。ブータンは幸福の王国って呼ばれてるんですよ。知ってました？

なんか国王が政策で国民総幸福量っていう指標を打ち出したらしくて、国の発展には国民の幸せが不可欠だ、みたいな。凄い発想ですよ。尊敬しちゃいます。

しかも親日家で、日本人に顔も衣裳も歴史も似てるんです。すごいですよね、こんな偶然。

ブータンの人たちはみんな素朴で、優しくて、明るい人ばかりで、もつと長期滞在したかったなあ。

そう言えばブータンに行く道中で新技開発しちゃいましたよ。光学迷彩。すごいでしょ？ アーサーさんが錬金術のお勉強しろって言って、それから今までもずっといろんなこと勉強してるんですよ。帰ってきたら褒めてくださいね。

結局ブータンには10日くらいしかいませんでした。移動にかかった日数の方が長かったなあ。

夢にジユノ様が出てきて、帰ってこなかったらインドの仲間を皆殺しにするとか言うから、帰っちゃいました。本当ジユノ様怖い。とりあえず、私の魂をアーサーさんが売ったわけじゃないってわかって心底安心しました。疑ったり怒ったりしてごめんなさい。いっぱい文句言っでごめんなさい。

アーサーさん、帰ってくるとき気を付けた方がいいですよ。ジユノ様、待ちかまえてますよ。でもアーサーさんなら、なんか乗り切っちゃいそう。

なんか、色々あったけど、もう書くことなくなっちゃった。最後に、アーサーさんに質問させてください。

アーサーさんは、私の背徳を、許してくれますか？

敬具



動報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメス様の行

謝罪会見を済ませて、部屋の移動を完了させた後、ガルフの部屋にガロードとランスを呼び出した。

「ねー、別にいいんだけどさ、なんで急に部屋を別々にすんの？」  
「今までずっと一緒だったのに、エルメス様寂しがるよ?」

当然その質問は予測してたけど、答える気にはなれない。ハア、と溜息を吐いて視線を上げると、3人はなんか心配そうだ。

「別に。とりあえず、俺は筆頭の座を降りてシュヴァリエも辞する。今からガルフが筆頭だ」

「はあ!?!」  
「なんで!?!」

俺の発言に、3人は目を丸くしてつんのめってきた。アララ、あまりにも急すぎたかね。でも、致し方のない事だ。

「なんでも。ランスは引き続きエルメスの従者。ガードは俺の代わりにエルメスに着いて執事をしろ」

「ちよつと待つてよ副長。どうしたんだよ」

「オイ、お前ら旅先で何があったんだ？ 急にどうしたんだ」

「別に。ただ、俺がエルメスのシユヴァリエたる資格を喪失しただけの事だ」

そうだ、俺にはエルメスの傍にいる価値はない。その資格は喪失した。最早エルメスにとつて俺は一番どころか臣下でも友達ですらもなくなった。ただの、裏切り者。

「ちよつと待つてよ。カイ、どうしたの？ 一生エルメス様の傍にいるんじゃないの？」

「本当にどうしたの？ 副長が傍にいたからエルメスは元気になつて来たのに」

「そうだぞ。それにお前はエルメスの傍にいたいんじゃないのか？ 資格を喪失したつてどういうことだ？ お前はどつするんだよ？」

「どうもこうも、その通りだ。俺にはその資格はない。一応責任がある以上屋敷を出る事はねーけど」

「責任つて、友達としてのつて事か？」

「いや、贖罪の責任だ。そうでなくても俺はずつとエルメスを欺いて裏切り続けてきたんだから、今更ですらある」

「副長・・・？ 何言つてんの？」

「とにかく、そう言う事だ。頼んだぞ」

俺の一方的な言いつけに3人は全く理解も納得もしていなかったけど、無理やり話を区切って部屋を出た。

部屋を出てリビングに出ると、俺に気付いたジユノ様がつこりと微笑む。

「ジユノ様、今いいですか」

「ええ。ここは人が多すぎますね。書斎にでも行きましょう」

ジユノ様と書斎に入ると、誰もいなくて安心した。ハア、と溜息を吐く俺にジユノ様は相変わらずにこにこと笑いかける。

「契約、ですか？」

「ええ」

「うふ。嬉しい。では早速契約を」

「その前に、ジユノ様でも万能じゃありませんよね。不可能なことがありますよね？」

「ええ。神殺し、死者の蘇生、時間の操作はできません」

「そうですね。それ以外なら何でもできるんですね？」

「そうですね」

「その言葉に偽りは？」

「契約者に嘘を吐かないのは悪魔の掟です」

「まだ俺は契約してませんが？」

「でも、あなたは契約するでしょう？」

「・・・そうですね」

「私は願いが成就するために協力は惜しみません。カイさんの願いがすべて成就した時点で、カイさんの魂は私のモノとなります。よろしいですね？」

「ええ」

俺の返事を聞いてにつこり笑ったジユノ様が差し出してきた手の上に俺が手を乗せた瞬間に、布を広げたように空間は真っ黒に染まった。その足元に白く魔方陣が光る。ジユノ様は何やら呪文を唱え出して、ジユノ様の手に添えられた俺の手の甲に口付けをした。

そこに、ジワリと入れ墨のように五芒星に逆十字で、周囲にAS T A R O T Hと銘の入った魔方陣が浮かび上がってきた。

「これは私の印章です。私のエモノだと言う印」

「ハハ、もう逃げられませんかよって事ですか」

「そのとおりです。願いは？」

「本当にさっき言った3つ以外なら何でも叶えるんですね？」

「ええ」

「では、お願いします。俺の願いを、1つではなく3つ叶えてください」

それを聞いたジユノ様は一瞬、大きな瞳をより大きく開くと、ケラケラと笑いだす。それはもう、愉快そうに。

「ウフフ、あなた本当に面白い人ですね」

「不可能ですか？」

「いいえ、可能です。ウフフ、いいですね、カイさんの強欲さ」

「それこそが人でしょう」

「ええ。では、一つ目の願いをどうぞ」

「一つ目の願いは」

「

「あなたの一つ目の願いはもう叶っていますよ。ご自分でお確かめください」

ジュノ様が手を離すと、書斎を包んでいた黒い空間は、布を引きずるように消失した。

書斎からジュノ様と出てきたタイミングで再び3人に出くわした。俺とジュノ様が出てきたことで察したのか、3人は表情を変える。

「カイ、お前まさか」

「ああ、これで晴れて俺はジュノ様のエモノだ」

「なんで、なんでカイはいつも一人で勝手に決めるの!? なん  
でそう言うことするんだよ!」

「それが俺の望みだからな」

笑いながらそう答えた俺に3人はとうとう怒ったのか、ゴルフが俺の腕を掴むと階段の踊り場まで引きずられた。

「なんだよ、痛てえじゃねえか」

「・・・お前、死ぬのか」

「いずれはな」

「エルメスの為か」

「自分の為だ」

「いつ、死ぬんだ」  
「まだずっと先だ」

その返事を聞いて少しだけ表情が柔らかくなったガルフに溜息を吐いていたら、エルメスが階段を下りてきた。

「あれ？ ガルフ、そんなところで何してるの？」

不思議そうに首を傾げながら階段を下りて、俺と目が合ったエルメスは更に首を傾げた。

「ガルフ、その人、だあれ？ ガルフの友達？」

エルメスの言葉に、一瞬激しく心が傾いた。何とか精神を立て直して顔を上げると、ガルフとランスとガライドは驚いた表情をしてエルメスを見つめていた。

「エルメス様・・・？ 何、言ってるんですか？」

「え？ なにが？」

「 ! カイ、お前！」

怒りを表して俺を睨みつけるガルフを離して、エルメスの前に跪く。

「エルメス様、初めまして。先月からこの屋敷に住みさせていただいております、カイと申します。以後よろしく願います」

「あ、そうなんですか。私のいない間に新しい人入ってたんですね。カイさん、よろしく願いますね」

そう言って微笑むエルメスに胸が痛んだ。完全にエルメスの中からは消失してしまったようだ。

「エルメスの中にある俺の記憶を、全て、消去してください」

「一つ目の願いは、成就した。」

俺は裏切り者だ。今までもずっとエルメスの友情を裏切り続けてきた。今度の事で俺が裏切り者となったのは決定的になった。

それでもエルメスは俺がいなくなるくらいなら、と許すと言ってくれた。

だからこそ、俺は自分が許せない。俺の理想に、エルメスの望む幸せに程遠い現実なんて、いつそ消えた方がいい。

本来なら俺はあの場で殺されても文句は言えなかった。本来なら屋敷を出ていくべきだ。それでも留まるうと思っただのは、エルメスへの贖罪。自分への断罪。それ以上に自分の甘さ、我儘だ。

例えエルメスが俺の事を忘れてしまっても、一からやり直すと思えばいい。それでも、きつと以前のような関係には戻らないだろう。

それでもいい。エルメスが俺の事を忘れてしまっても、エルメスの近くでエルメスが幸せになる姿を見届けたい。エルメスが俺を忘れてもいい、エルメスの傍にいたい。

人は記憶の中に生きるものだ。記憶されない奴なんて死んでも同然だ。エルメスの中の俺の記憶は消えた。

俺は、死んだんだ。



もう一度、やり直す。これからは友達でも臣下でもなく、他人として。

動報告

シユヴァリエの活動報告及びエルメス様の行

本当はわかってた。ジュノ様の策略によってもたらされたもう一つの成果。いや、本来の目的はこっちだったのかもしれない。

ジュノ様の仕掛けた罠に掛かって、インドに戻らざるを得なくなった。でも違うんだ。ジュノ様の目的は、俺自身に取り返しのない問題を起こさせて、切迫した俺が契約するように仕向けること。

ジュノ様は知ってた。俺の性格を。俺とエルメスの関係性を。そこに付け込まれた。

思い詰める癖、特別な友情、エルメスへの友愛と信仰を利用した、いい手だとしか言えない。

心からエルメスの幸福を願う俺に、俺の手でエルメスを傷つけさせて、追い込まれた俺に囁かれる、悪魔の甘言。

いや、囁かれなくても目の前に悪魔がいれば、自然と縋りたくもなる。そういう、計略。

それでも、俺はそれをわかってて契約した。吸血鬼だっていつかは死ぬんだ。俺の魂を奪うまでは、ジユノ様は俺がそれ以外の方法で死なないようにするだろう。

あらかじめ自分の死に方を把握できるんだ。自分の死を管理できると思えばいい。

だからといって、この不具合まで考えなかったのは俺の不明だ。

「ガルフ、お前もつとそつち詰める」

「ふざけんな！ お前真ん中いんじゃないか！ 俺落ちそう！」

「はあ、何が悲しくてお前とベッドインしなきゃいけないんだ」

「それは俺のセリフだ！ お前が言い出したんだろーが。っーか気持ち悪いこと言っんじゃないよー！」

男が二人、ベッドで領地争い。なんだこのBL展開は。

アーサーのベッドはキングサイズだったし、エルメスが小さかったから二人でも広々だったけど、ガルフの部屋のベッドは狭くて二人じゃ寝苦しい。

今夜も悪夢に苛まれそうだ。

同じ血統だからだろうか、ガルフとほぼ同時に目が覚めた。癖で怖いな。俺もガルフも寝起き早々ブルーだ。

「・・・これはお前、普段の癖か」

「まーな」

「いつもエルメスに腕枕して寝てたんか」

「まーな」

「俺、男に腕枕されたのは人生初だ」

「俺も男にしたのは人生初だ」

「・・・気持ち悪っ」

「お前がな」

「いや、お前だよ!」

ウダウダやっててもしょうがねえ。つーか一刻も早くこの狭い領地から解放されたい。俺が言い出したことだけど。大工さんガンバ。報酬ははずむから。

普段なら起きて最初にすることは、エルメスがキロに餌をあげる準備をしておく。が、もうその必要はない。

前日にエルメスが散らかした本を片付ける必要もない。ランズを呼びつけてエルメスの衣装の支度や侍従をさせる必要もない。

エルメスと関係なくなったら、なにもすることがない。本当に暇だ。暇なのは性に合わねえな。

リビングに降りていくと、シュヴァリエ達が俺に視線を注ぐ。

「副長おは。エルメスは？」

「知らん。それと、俺はもう副長じゃねえ。名前で呼べ」

「は？ 今更何言ってるの？」

「知らんって、部屋分けたくらいで職務放棄かよ」

「その通りだ。俺はもうシュヴァリエじゃねえからな」

「は!?!」

「トリス、タバコ一本寄越せ」

「え、うん。ていうか、副長本気で言ってるの？」

「嘘だと思っならガルフにでも聞け。つーか次から副長って呼んだらシバキまわすからな」

そう言いながらトリスからタバコを強奪して火をつけていると、ランスとガロードと一緒にエルメスが降りてきた。

「みんなおはよー。あ、カイさん、おはようございます」

「エルメス様、おはようございます」

実に馬鹿馬鹿しい話だが、あーやつぱ夢じゃなかったか、とか思ってしまった。

他人行儀に俺に挨拶するエルメスに、シュヴァリエ達は昨日の側近達よろしく、驚愕の視線を注ぐ。

まあ、こいつらがどれほどエルメスを問いただそうが、エルメスの記憶が戻ることはもう、ない。

「エルメス様、長旅でお疲れになったでしょう。ゆっくりお休みになれましたか？」

「はい。今までランスと二人だったから、一人は少し寂しかったですけど」

本当は3人だよ、そう言いたくなるのを、ぐっところらえた。

断罪のため。これは自分への罰でもある。エルメスに忘れられたことをエルメスの傍で体感しながら生きること。

想像していた以上に、辛い罰。

エルメスに視線を戻して、首元に目をやった。さすが吸血鬼、俺のつけた痕跡は、もう消えてしまった。

もうエルメスは、俺のものではなくなった。完全に。

俺を忘れてしまったエルメスの傍にいるのが辛くて、一礼して屋敷を出て庭に出た。

庭に出ると、春にエルメスが植えたバラが随分と育っているのに気づいた。

ああ、随分とでかくなった。ちょっとだけ蕾ができて始めてる。そ

ろそろ剪定しなきゃ、バラの生長が止まってしまっな。

作業小屋から剪定鋏を持ってきて、間引いていたらここでまさかのエルメス登場。

「あれ、カイさん、ここでなにを？」

「バラの剪定をしております」

「ありがとうございます。もうそろそろかなって思ってたところだったんです」

どうやらエルメスもバラの様子が気になったらしい。エルメスの隣で、少し悲しそうにガライドが微笑む。そんな顔されたら余計悲しくなるぜ、チクシヨー。

バラに視線を戻すと、エルメスも俺の隣にしゃがんできた。

「このバラね、青いバラなんですよ」

「へえ、そうなんですか。珍しいですね」

そんなこと、知ってるよ。

「そうでしょ？ 私のお気に入りなんです」

「そうなんですか、咲くのが楽しみですね」

知ってるよ。エルメスはいつも大事に育ててたから。

「本当に咲いてくれたらいいな。このバラには、色々思い出があるから」

「大事なバラなんですね」

覚えてるよ。エルメスの誕生日の時のこと、青いバラがよく似合ってたエルメスの事、よく覚えてる。

「少ないけど、これだけでも持ち帰れてよかった。種を見つけてもらえなかったら・・・」

あれ？ 私が見つけたんだっけ？」

言いながらエルメスは悩み始めた。消失した記憶。消えたのは俺だけ。思い出までは、消えなかったか。

「エルメス？ どしたの？」

不思議そうにかがんだガイドにエルメスは頭を捻りながら向く。

「んー？ 城に帰ったときね、このバラの種、誰かが見つけて私に渡してくれたような気がするの。私一人だったはずなのに、おかしいなあ」

「ランスとか、じゃない？」

「んー、でも思い出しても誰もいないんだよね。思い違いかな」  
「そうかもね。エルメスが見つけたんだよ」



エルメス、その時隣にいたのは俺だよ。俺が見つけてお前に渡したんだ。

どうしようもない、矛盾。

自分で願っておきながら、自分でエルメスの記憶を消しておきながら、心底思う。

エルメス、どうか俺の事を思い出して、俺を忘れないでくれ。俺の心と記憶はこんなにも、お前に支配されているのに。

悔しい、悔しい。俺があんな事をしなければ、エルメスの記憶から消えることもなかったのに。こんなに辛い思いをすることもなかったのに。エルメスを傷付けることもなかったのに。

惑わされていたとはいえ、何故俺はあんな事をしたんだろう。心のどこかで、望んでいたんだろうか。

「俺はエルメスの為に日々頑張ってたんだから、ちょっとくらい褒美をもらってもいいはずだ」

そんなのは、友情じゃない。少し考えればわかることだ。その「

褒美」の為に、今までの努力が水の泡になることを。考えなくてもわかることだ。エルメスを傷つけてしまうことを。

それでもあの時の俺は、エルメスを心の底から、求めていた。

俺はお前の為に頑張ってる。だからお前を俺に寄越せ。俺はお前の事を考えてる。だからお前も俺の事を考えろ。俺はお前を大事に思ってる。だからお前も俺を大事に思え。俺がお前を幸せにするから、だからお前を支配させてくれ。

支配されているのは、俺の方だから。俺の頭も心もエルメスの事でいっぱい、エルメスに支配されているから、エルメスの中に俺がないことが、心を引き裂かれるように苦痛なのは。

ああ、そうか。俺は今まで知らなかったから、ずっと勘違いしてたんだ。何も知らなくて、気付かなくて、そう、ずっと前からエルメスを裏切ってたことに。

何も知らないのに、探したってわかるわけなかったんだ。何も知らないのに、考えたってわかるわけなかったんだ。

それ以前に、探す気など最初からなかったんだから。それ以上に、考える気など最初からなくて、全否定していたんだから。

そんなことがあるはずがない。在ってはならない。責任を超越した強迫。

俺の立場と責任とエルメスとの関係が、阻んでいた。いや、隠してくれていたと言った方が正解かもしれない。強迫観念が、自分をも欺いて。

こんなにも汚いものだとは思わなかった。こんなにも醜いものだとは思わなかった。こんなにも歪んでいて、狂おしいものだとは思わなかった。

今まで知ろうとしなかったから、わからなかった。分かりたくなかった。知りたくなかった。

こんなことがなければ、一生知らずに済んだかもしれないのに。今更知ったって、もう遅いのに。

俺の思考を惑わせて、俺を苦しめる感情。これが

恋だと。

今更知ったって、歓迎してやることなんか出来ない。俺を苦しめるだけの、背徳の種。これこそが、呪いなのか。これが神罰だといふのか。

神罰は、悪魔との契約の代価に引き受けた罰は、俺には、辛すぎる。

動報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメス様の行

今まで知らなかったから、俺の世界には存在しないのだと思い込んでいた。

俺の本心を知ったら、ガルフたちは驚くだろうな。少し前なら場合によっては喜ばれたかもしれないけど、今向けられるものは憐憫以外にはないだろう。

547

本当に、俺は知らなかったんだ。存在しないと思ってたんだ。するはずがないと思って、思い込んでいた。

それに、こんなにも汚く淀んだ感情だなんて、思ってたなかった。幻想を抱いていたと言ってもいい。

例えば、エルメスとクリシュナさんの間にあっただのは愛で、それはとても美しかった。

俺の抱いている感情は、きつと愛ではなく恋と呼ぶ方が正解なん

だろう。よくよく思い返してみると、昔の女にもそういう奴がいた。俺の行動を全部把握してなきや気が済まなくて、俺が100%自分に向いてないと、嫉妬する女。

自分本位で、相手の都合なんて考えないで、自分の感情を押し付けたがる。

俺はそういう女が心底嫌いだったし、軽蔑すらしていたのに、結局は俺も同類だったようだ。本当に、俺は最低だな。

これは裏切りだ。最悪の背徳だ。エルメスの友情を裏切った。アーサーへの忠誠の誓いを裏切った。もう誰も裏切らないと決めたのに。

この感情を歓迎してやることなんか出来ない。罪悪以外の何物でもない。罪としか思えない。罰だとしか思えない。

だからこそ、この罰を甘んじて引き受ける。俺みたいな最低な奴は、一生苦悩に苛まれてりゃいいんだ。

どちらにせよ報われることはないし、俺はきつと諦めることも、忘れることもできないから。

これ以上悩むことを諦めよう。どんなに悩んでも、考えても、思考で苛烈な感情を操作できるのなら、誰も苦勞したりしない。

それはそうとして、アーサーが消滅してから既に9か月が経過した。アンタ本当に帰ってくんのか。もうすぐエルメスの誕生日だぞ。つーか、俺とエルメスが他人になってんのを見て、アンタはどう思うんだろうな。喜ぶのか、悲しむのか、何とも思わないのか。まあ、どうでもいい。今更だ。

つーか、エルメスの誕生日なんか企画すっかな。実行委員には入らねえけど。プレゼント何しようかな、と考えていたら、シユヴァリ工達から強奪した煙草が尽きたことに気付いた。

買いに行くのが面倒くさくて、シャンティの会社に電話した。

「シャンティ、お前もう仕事終わりだろ。帰りに俺の煙草買ってきて」

「ええ？ 自分で買えよ」

「面倒くせえ。買ってこい」

「それが人にものを頼む態度!？」

「そーだ。銘柄わかんたろ。カートンで買ってこい。代金2倍払ってやつから」

「ったく！ アタシはアンタの使い走りじゃねえんだけど！」

「そーだな、よろしく。忘れたら殴る」

「何様だ、バーカ！ 禁煙しろ！」

乱暴に電話を切ったシャンティに思わず溜息だ。随分と乱暴で上

から目線のパシリだ。元強盗団のリーダーとは聞いたが、女のくせに言葉遣いがなってねえ。仕事ん時どうしてんだコイツは。俺もしくはエルメスを見習え。」

しばらくするとシャンティが帰宅して、「買ってきてやったぞ！」と喚きながらカートンを投げつけてきた。それを難なくキャッチ。

「ご苦労」

「何様！？ さっさと金出せ！」

「おお、とうとう強盗の本性を現したか」

「なんでそうなるんだよ！ わざわざ買ってきてやったのに！ 奢らねえぞ！」

「冗談だろ、うるせえな」

約束通り2倍の代金を払って、カートンの封を切ってやっとのことで久しぶりにマイハニーに再会。

フーと煙を吐きながら宣誓した。俺はもう二度と血と煙草以外は口にしねえ。何が何でもそれは厳守しよう。

そーいや、エルメスの血飲んだんだけ。俺のも飲まれたんだ。アレ本当に問題ないのか。よく考えたらエルメスの事だからいまいち信憑性に欠けるな。ウツカリ眷属になってたらどうしよう。

いや、だとしたら俺の事を完全に忘れてるのはおかしい。眷属になっちゃったなら俺の思考が流れてるはずだし、「あれ、もしかして知ってる人なのかな」みたいな反応があってもいいはずだ。

それがなかったってことは問題なかったって事だな。安心した。エルメスの眷属になるのだけは絶対に嫌だしな。本気で御免こうむる。

そんな事を考えていたら、憎らしさの権化、ジュノ様襲来。

「カイさん、ご機嫌麗しゅう」

「全然麗しくありません。どういふことですか。俺は記憶を消してくれと言った筈ですけど」

俺的には、エルメスの中の俺に関する思い出とかそう言う物も消えてくれると思ったんだが、そうでなかったことは俺にとっては迷惑千万だ。

エルメスにとっても悩みの種になってしまいうに違いない。出来事は覚えてるのに人だけが消失したなんて、ミステリー以外の何物でもないからな。

俺の質問に、いつも通りジュノ様はにっこり笑って答えた。

「だって、カイさんは「俺の記憶」とおっしゃったでしょう?」

「俺の記憶だけってナイでしょ」

「それなら最初から「俺に関わる記憶」と言っていただけなら良かったのに」

「ジュノ様はゆとり世代ですか」

「創世記世代です」

「そーですか」



やっぱりジユノ様性格悪つ。絶対わざとだな。チクシヨ、やっぱり悪魔は悪魔だ。タダじゃ願いを叶えてはくれねえか。魂くれてやるっつーのによ。

それとも俺が欲張って3つつたせいか。いずれにしても、腹立つな。

イライラしながら煙草吸ってたら、シャンティが隣に座ってきた。なんか悲しそうな怒ったような複雑な表情で。

「アンタさ、なんでエルメス様から記憶消したの？」

「ヒミツ」

「なんでヒミツなんだよ」

「それもヒミツ」

「アンタ何考えてんだよ」

「エルメスの幸せ」

「本気で言ってるのか？」

「当然だ」

「アンタがいないことが、エルメス様にとってどれほど辛い事なのかわかんねえのか？」

「記憶がなけりゃそんな思いせずに済むだろ」

確かに、エルメスは俺がいなくなるくらいならって許そうとしたほどだ。実際にエルメスは俺の存在に依存していた部分はあつたし、俺がいなくなったり死んだりしたらエルメスは悲しむだろうし、最悪自分を責めるかもしれない。

だけど、そのままじゃエルメスが可哀想だ。きっと以前ほど俺を

信頼できなくなっただろうし、俺が傍にいる限り悩まされ続けるんだろう。記憶すらもなくなってしまうえば、悩むことも悲しむこともないんだから、何も問題は無い。

そこまで考えて、嫌な考察に行きつく。ジユノ様は俺の記憶しか消してない。出来事は覚えてる。てことはあの日のこと自体は覚えてるって事か！ 人だけ消えてそれだけ覚えてたら、完全にホラーの世界じゃねえか。

いや、でもあれほど強烈な出来事を覚えてるのに、相手を覚えてないなんて普通あり得ねえし、悪夢でも見たと思ってくれるといいんだけど。本当、エルメス様、ごめんなさい。

話してる最中に考え込んで頭を抱えだした俺に、シャンティは溜息を吐いてる。突然こんなワケわからん事態に巻き込んで、シャンティ達にもシュヴアリエ達にも変に気を遣わせて申し訳ねえなと思う。

でも、これもすべてはエルメスの幸福を願うての事だ、許せ。まあ、全面的に俺のせいだけ。

ハア、と煙と一緒に溜息ついてたら、ランスと一緒にエルメスがリビングにやってきた。本当にエルメスは一人ではいられないんだな。常にランスかガロードかどっちかが脇を固めてる。

あーあ、少し前までそのポジションは俺のもんだつたのにな、と考えてまた煙溜息を吐いてたら、何故かエルメスはハツとした顔をして俺の傍まで寄ってきた。

「カイさんの煙草の香り、なんか久しぶりです」

「煙草、ですか？」

「ちよっと前までいつもその香りがしてて・・・あれ？ 誰が吸ってたんだっけ？」

「え、さ、さあ？」

「私、その煙草の香り好きなんですよ。でも、よく匂いが移っちゃうって怒ってたんですけど・・・あれ？ 誰に怒ってたっけ？ んん？」

「つか、本当に俺の記憶しか消えてねえ。煙草の香りまで覚えてやがる。エルメス大混乱。可哀想に。」

もしかして、俺は余計なことをしたか？ いや、そんなことはねえ。多少の副作用はしょうがねえ。エルメスには悪いけども、ジユノ様がやっちゃまったことだからしょうがねえ。」

そういえば、エルメスに髪に煙草の匂いが移るって怒られて、そんな時に初めて自覚したんだっけ。エルメスの髪から漂う俺の煙草の香りがなんか嬉しくて、一瞬めっちゃ舞い上がった気がする。

エルメスは俺が煙草吸ってたのどうでもいいとか言ってたけど、この香り好きだったのか。なんで俺には言ってくんねえかな。いや、言ってるけども。

内心ちよっと喜んだ俺とは対照的に、複雑な謎に悩みだすエルメス。

これはもしかして俺の願いは失敗だったか。つーか、以前傍にすぎたな。俺の日常のほとんどをエルメスと過ごしてたって事は、エルメスにとってもそうだって事じゃねーか。

「なんか最近すごい違和感あるんですよ。物足りないと言っか、いつも傍にいたはずの人がいないんです。それが誰かわかんないんですけど。誰ですか？」

「え、いや、さあ？ 私はここに来たばかりなので、存じ上げません」

「そっか、そうですよね。カイさんに変なこと聞いちゃった。すいません」

「いいえ」

照れたように謝罪するエルメスに、申し訳なくて仕方がない。ごめん、それ俺。目の前にいるイケメンさんがその人ですよ。

隣で聞いてたシャンティもすっげえ複雑な表情をしてる。なんかごめん。

エルメスとの話が終わった頃に、急にガードが俺の所に来て、手を引いてバルコニーまで連れ出された。

「なんだよ？」

「副長・・・じゃなかった、カイの記憶全然消えてないよ」

「消えてんだろ。綺麗サツパリ」

「消えてないよ。エルメスが言ってた」

「・・・なにを」

やっぱりあの時の事覚えてたのか。意味不明な記憶としてガライドにチクったのか。そう思ってたなけば怯えながら尋ねたら、ガライドは悲しそうに微笑んだ。

「誰かわからないけど、ずっと傍にいたはずの人がいなくて、凄く凄く淋しい。その人の事がとても大好きで、すごく大事だったはずなのに、その人がいなきゃ生きていけないとすら思ってたはずなのに、どうして思い出せないんだろって。カイの事は忘れても、カイを思ってたことは、忘れてないよ」

ガライドの言葉を聞いて、俺は不覚にも、泣いてしまった。今までエルメスにしか見せたことがなかったから、屈辱だ。

俺の記憶が消えても、俺に対する感情が残されてしまったエルメスに申し訳なくて、でも、本当に嬉しくて。涙が出るほど、それほど、嬉しかったんだ。

泣いてんのが見られるのが嫌で、ガライドに抱き着いて声を殺して泣いたら、最初はガライドは超ビックリしてたけど、俺の背中をたたいて溜息を吐いた。

「泣くくらいなら、記憶消さなきゃよかったのに」

「うるせえ」

「カイでも泣く事あるんだね」

「うるせえ」

「エルメスも、泣いてたよ。その人はどこかに行ってしまったのになって。きつと自分を責めて苦しんでると思うから、傍にいてあげ

たいのにつて。許してあげるつて言ったのにつて。ねえ、エルメスの記憶を戻してあげてよ。エルメスは、カイがいなくて淋しがつてるよ」

「・・・それは、できない」

「なんで？ エルメスはそれを望んでるのに？」

「俺が傍にいたら、記憶が戻ったら、アイツを苦しめる。今よりもつと。淋しがつてるだけなら、まだマシだ」

思い出や感情が残されてしまつても、俺の記憶が無くなつてしまつたなら、俺にとつては十分罰に値する。

エルメスが許すと言つてくれても、淋しがつても、俺はどうしても自分を許してやる事が出来ない。それほどまでに信賴していた友達に裏切られた事を、その裏切り者の事を、その裏切り者が俺だということ、エルメスに覚えていてほしくはないんだ。

そんな奴の事なんか、忘れた方がいい。俺にはもう、純粹にエルメスを大事にしてやれる自信はないから。

「別に俺じゃなくても、エルメスの支えにはなる。お前はエルメスの息子でもある。お前なら、俺以上にエルメスを大事にしてやれるよ。エルメスの事、頼んだぞ」

「・・・そりゃ勿論頼まれるけどさ、気が変わつたら戻してやつてね」

「気が変わつたらな」

気が変わつたら、俺の思いが変わつたら、前みたいに友達だと思

える様になつたら・・・

きつと気が変わることなんてない。一生、このままだ。

## シユヴァリエの活動報告及びエルメス様の行

## 動報告

俺が言ったんだ。懺悔をするなど。でも、俺が懺悔をしている。

「クリシュナさんの大事な女を傷つけて、ごめんなさい。クリシュナさんの愛した女を好きになって、ごめんなさい。ちゃんと償いませぬ。もう泣かせたり辛い思いをさせたりしません。エルメスが幸せになったら、ちゃんと死にます。本当にごめんなさい」

クリシュナさんの墓の前で懺悔して、謝罪をした。アーサーにもそうだけど、クリシュナさんにだって本当に申し訳ない。今頃天国から俺に向かってなんとか隕石でもぶつけようと躍起になっているに違いない。

クリシュナさんとミラーカさんの墓参りを済ませて、ユアンとペレアスと一緒に街に出た。もうすぐエルメスの誕生日。そのプレゼントと誕生日パーティの準備の買い出しだ。



「オーイ、ペレアス、エルメスは最近なんか欲しいとか言ってたか」  
「うーん、あ、アインシュタインの脳が欲しいとか言ってたな」  
「・・・どこに売ってたよ」  
「さあ？」

2年前も買えないものを要求された気がする。確か以前は賢者の石とか言われたか。アイツはマジでかぐや姫か。無理難題にも程があるぜ。

エルメスのプレゼントが、まだ決まってない。エルメスと言えば本なんだが、アイツの蔵書量は半端なくて、好きそうなものを買っても既に持ってそうな気もするし、アクセサリーとかもエルメスはなんかない限りはあまりつけたりしないから、お蔵入りすること間違いない。

「なあ、副・・・カイ、キロの相方とかは？」  
「あー・・・そっぴやキロってどっちだ」  
「どっちだっけ」  
「メス？」  
「わかんねえ」  
「なんでカイが把握してねえんだよ」  
「うるせえ。一羽だけなら性別関係なしに飼育できんだろ」

キロの性別なんて気にかけたことなかったな。気にかげときゃよかった。エルメスの欲しいもの、好きそうなもの・・・なんだろう。エルメスもアーサーとは違った意味で、何考えてるかよくわかんね

えし、わからん。アイツの趣味嗜好はいまいちよくわからん。

そついやベトナムでは結局、海水浴も水遊びもする機会はなかったな。どの道海水浴は不可能だったけど。どつかのリゾートホテルのプールとかに連れてってやるか？ いや、なんかあの姿を他人に見せるのは嫌だな。俺の思い出に取っておきたい。

ドライブつって妙にはしゃいでたし、どつか遊びに連れてってやるか？ どっかってどこにだよ。いや、でもインドは観光名所も多いし、見どころは山の様にあるしな。

あ、でも俺が連れてってやりてえけど、立場上俺は同行出来ねえ。エルメスの誕生日を間近で祝ってやるほど、俺はもう親しい間柄じゃなかったんだ。

そこまで考えて人知れず落ち込む俺を二人は完全シカトだ。雑貨屋の前で、あれでもないこれでもない、商品を選別している。

仕方なしに俺も陳列棚に目を向けて、何がいつかなあと選り好みしている、棚の奥に押し込まれる様にした小さな箱に目がいった。

奥からその箱を取り出して見ると、中からは青いバラの髪飾りが出てきた。エルメスには青いバラが似合う。これにしよう。2人に見せると、すぐにそれと決まった。

今日は、シャンティ達の腕に絆創膏が張ってある。エルメスの為に今年も血を提供したらしい。健気な奴ら。

「28歳の誕生日おめでとう!」

「みんなありがとう!」

みんなに祝ってもらえて、エルメスはとても嬉しそうだ。本来ならこの場にアーサーがいることも望ましいんだけど、いないものはない。アンタの分まで俺達が祝う事にした。

少しして、シャンティ達がエルメスの前にプレゼントを持って歩み出た。

「誕生日おめでとう。アタシ達からのプレゼント」

「うわぁ、ありがとう。開けていい?」

「どーぞ」

嬉しそうに受け取ったエルメスが箱を空けると、中からは冬物の白いウールコートが出てきた。エルメスはそれを「可愛い!」と感動しながら身にあてがって喜んでる。

「あ、アルマーニだ!」

「エルメス様、アルマーニ好きだろ。いつもアルマーニ着てるし」

「うん。『あの人』がいつも買ってくれてたから。シャンティ、みんな、ありがとう」

エルメスはどうしても思い出せない「あの人」との思い出に、い

まだに悩んでいる。ずっと一緒にいたのに、突然いなくなつて記憶までも消滅してしまつて、混乱するのも無理はない。

厳密には死んだわけじゃないしほつとけばその内忘れるんだろうけど、エルメスの中の俺はとうに死んでいて、いずれは死ぬ奴だ。さつさと忘れてしまふに限る。

続いてガライド達がエルメスに髪飾りをプレゼントした。エルメスはそれを早速髪に着けて、ランスたちに似合うと言つてもらえて嬉しそうだ。喜んでもらえたみたいで、俺も安心した。

しばらく歓談してから、10時を回つた頃にガライドとガルフが先導してみんなでバルコニーに出た。

「エルメスに見せたいものがあるんだ」

そう言つたガライドに不思議そうに視線を向けて、微笑んだガライドが指さした方向にエルメスが目をやった。その時、ひゅうううと音が響いたかと思うと、少ししてドオンという爆発音とともに、夜空に大輪の花が咲いた。

打ち上がるたくさんの花火に、エルメスは大喜びだ。手を叩いて飛び上がつて、何度も綺麗だと言つては大はしゃぎ。

「すごい！　すごい！　綺麗！　もしかしてこの花火私に？」

興奮して腕を掴むエルメスに、ガライドは少し切なそうに微笑んで返事をした。

「そうだよ、エルメスに「あの人」からのプレゼント」  
「え……?」

驚いた表情を浮かべたエルメスにガラードはまた微笑んで、話を続ける。

「決めてたんだって。最後にエルメスの為に大輪の花火を打ち上げてやるんだって」

「最後って、どういうこと?」

「あの人は、どうしようもない理由があって、もうエルメスの傍にはいられないんだって。それはエルメスのせいじゃないし、忘れたこともエルメスのせいじゃない。だから、全部あの人のせいにして忘れて欲しいって」

「忘れるなんて……できないよ」

「だろうね。でも、忘れて欲しいんだって、あの人とエルメスの為に。ただ、ただ、エルメスの幸せだけを願ってる。世界で一番、エルメスが大好きだったって」

「……どうして、過去形なの」

「もう、会えないから。エルメスの幸せが、あの人の幸せだって言ってたよ。エルメスがあの人を大事に思うなら、それを聞いてあげて。それと、誕生日おめでとうって。今まですごく楽しかった、ありがとう、ゴメンねって言ってたよ」

花火の明かりの下で、ガラードの話を聞いてエルメスは泣き出してしまった。やっぱり俺はエルメスを泣かせてしまうんだな。クリシユナさんの墓前に誓ったと言うのに、不甲斐ない。

エルメスは強い奴だから、きつと俺の事も乗り越えて忘れるだろう。もう俺は他人だから、友達じゃないから、前みたいに一緒に花火して遊んだりすることもできない。祝う事も、お礼を言う事も、謝ることすらも、もうできない。

「・・・直接、私に言って欲しかった」

「どうしても会えない事情があったんだよ」

「あの人が、私の中から記憶を消したの？」

「そうだよ。エルメスに幸せになってほしいから」

「やっぱり、いつも自分のことは後回しにしちゃうんだ。それとも、私の傍にいるのに疲れたのかな」

「まさか。あの人はいつだってエルメスの事ばかり考えてるよ。」

エルメスが泣いてたらあの人が悲しむから、もう泣かないで」

「そんなの、勝手だよ」

「本当、自分勝手だね」

泣きつくエルメスを撫でながら、ガラードは俺に顔を向けて困ったように笑う。自分勝手、確かにそうかもしれない。だけど、エルメスの為にどうしても俺を忘れて欲しかった。

ガラード達シユヴァリエがいれば、俺がいなくても何とかなるはずだ。俺の代理は、誰にでも勤まる。

俺が傍にいてもエルメスは幸せにはならないから、俺は遠くから幸せを願ってる。他人になっても、忘れ去られても、世界で一番大好きなのは、変わらないから。



拝啓 アーサーさん

今日は私の誕生日でした。みんなに祝ってもらえて、凄く嬉しかったです。できたらアーサーさんにもお祝いしてほしかったな。それともう一人、お祝いしてほしい人がいたけど、その人にも会えませんでした。

私はまた一人、大事な人を失ってしまいました。ずっと傍にいたはずなのに、どうしてもその人のことが思い出せません。

男なのか女なのか、大人なのか子供なのか。肌の色も、瞳の色も、髪の色も、声も、どんな顔をしていたのかも、どのくらいの背丈なのかも、その人がどんな人だったのかも、名前すらも思い出せません。

その人の事や、その人との関係や、その人の言葉や行動は、全く記憶に残っていません。私は誰かと話しているのに、そこには誰もいなくて、何も言葉は帰ってこないのに、私はすごく楽しそうにしてて。



楽しそう、ううん、すごく楽しかった。その人と一緒にいると、元気になれた。いつも笑顔になれた。その人がいてくれたから、今まで頑張ってきたのに。

なんとかその人の痕跡が残ってないかと思つて、前の手紙を読み返してみたけど、私には見えないようになっていたのか、それとも消えてしまっているのか、とにかくその人に関する記述を読むことが出来なくて、結局何もわからなくて。

お屋敷の新人さんの吸ってた煙草の香りが懐かしかったから、きっとその人は煙草を吸う人だったんだろうな、ってことくらいしかわからなくて。

私がある人に言ったことは覚えてるけど、私の口から出た言葉でさえ、その人の名前も、容姿も、性格も、無音になって聞こえないんです。

だけど、その人の事は何も思い出せないのに、その人との思い出だけが残って、辛いです。

イタリアにいた時から、お仕事も一緒にしてた。キロやたくさんのお洋服とかいっぱいおねだりして買ってもらったこと、一緒に買い物に行ったり、いろんな話をしたり、ケンカしたりしたこと、撃たれたこと、一緒にベトナムに逃げて、花火したり、ドライブしたり。

私が笑ってたり、怒ってたりしても、その相手が誰もいない思い出は、きつとその人との思い出なのでしょう。見えない相手と過ごしていた過去の私は、とても楽しかった。

手紙を読み返して気づきました。私は本当にその人の事が大好きだったんだって。よく考えたら、こんな手紙、アーサーさんに見せられない。私の手紙には、その人の事しか書いてない。その人との思い出しか書いてない。

私とその人は、どういう関係だったんでしょうか。家族？ 兄妹？ 友達？ 恋人？ 恩人？ 師匠？ 弟子？ 上司？ 部下？ 全然、思い出せません。

ただ、多分男の人だったんじゃないかなーとは思ってますけど。なんとなく。でも、そのせいかな、やっぱり。いなくなったのは。

すごく自分を責めてる印象を受けた覚えがあるし、でも、ひよつとしたら私がヤダって言ったから、怒っちゃったのかなあ。それで怒るって事は、もしかして恋人だったのかな。

いやでも、私にはクリシュナがいるし。それはどうだろう・・・いや、ほぼ24時間体制で傍にいたんだし、その可能性もあるけど。私の好きはそういう好きなんだっけ？ ん？ わけわかんなくなってきた！

でも、その人はずるい。私は許してあげるって言ったんです。傍にいて欲しかったから。許してあげないと、嫌われちゃうと思ったから。なのに、その人はいなくなっただけで私から記憶まで消して、私に忘れろって。

とりあえずその人が、私を大事に思ってくれてたんだって事と、自分勝手だっただけはわかりました。

その人に、最後についてプレゼントをもらいました。とても綺麗な大きな花火でした。凄く嬉しくて、凄く感動しました。

だけど、花火にサヨナラって言われた気がしました。

その人がいなくなっただけで済んだのがそれだけのせいじゃなくて、前にも無視されたりしたみたいだし、私の事嫌いになっちゃったのかなって思ったりしたけど、ガラードは違うよって。

あの人はいつもエルメスの事ばかり考えてるよって、世界で一番好きだったって言うてくれてすごく嬉しかったけど、ガラードの言葉は過去形で、もう終わっちゃったんだって。

あの人は花火の様に、強い力で私の心を震わせて、大輪の花で私をいつも笑顔にさせてくれて、あつという間に消えてなくなっただけで済みました。

花火が散ってしまった後の侘しさは、例えようもないほどに淋しいです。

私はもう、あの人に会えないんでしょうか。あの人の事を思い出せないんでしょうか。

会いたい、会いたい。もう一度だけでいいから、会いたい。アーサーさんの様に待っていて、会えるかどうか分からないけど、どうしても、会いたい。

もう・・・待ち人が増えるなんて予想外もいい所です。

忘れろなんて、勝手すぎる。あんなに傍にいたのに、忘れられるわけがないのに。もし会えたら、今度こそ絶対許さない。

私はいいつて言ったのに勝手にいなくなって、勝手なことやって、許さない。もし会えたら、逃げられないように眷属にしてやる！

最後なんて許さない。これからだって、何度だって私の誕生日に花火を打ち上げてもらう！

敬具

動報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメス様の行

オイオイ冗談も大概にしるよ。アンタ今日何日だと思ってんだ。  
ふざけんなよ。

ふざけんなムードの漂うインドの屋敷の外は、浮かれまくってる。  
今日はクリスマススイブだ。アンタが消滅して、ちょうど一年経過。

「ねー！ もう、アーサーさん本当に帰ってくるの！？ もう一年  
だよ！ 冗談じゃないよ！」  
「うーん、俺もここまでとは予想してなかったなあ。いつ帰って  
くるんだろうね？」

「知らないよ！ もー！ ガラードのバカ！」  
「俺に言われても・・・」

アーサーが帰ってこねえせいで、ヒステリーを起こしたエルメス  
に怒られる可哀想なガラード。助けを求める視線を周囲に振りま  
いでいるが、誰も助けようとはしない。気の毒な奴だ。でも、内心俺  
は気の毒通り越して、超羨ましい。チクシヨウ。

あれから、俺はエルメスとは挨拶と用事がある時以外、ほとんど会話すらしない。極力エルメスに近づかないようにして、ガラードやランスからエルメスの様子を聞いたり、二人からの相談に乗ったりしてる。

相談内容は大概一緒。

「エルメスの我儘を切り抜ける方法を教えてくれ」  
「自分の時間って、どうやって作るもんなの？」

大概答えも決まってる。

「諦める」

その返事を聞くと決まって二人は溜息ついて、「だよねえ。カイトを散々振り回してたもんねえ」「カイトも死ぬほど溜息ついてたもんねえ」と納得する。

そのリアクションが軽くムカつくんだけど、正直な話今の俺は、振り回されたいです。

バルコニーで煙草吸いながらキャンキャン喚くエルメスを見て、チクショー俺も混ざりてえとか思ってたら、ニヤニヤしながらガルフもバルコニーに出てきて、笑いながら俺の肩をたたいて、煙草を吸いだした。

「ジエラシーファイヤー燃え盛ってんな」

「うるせえ」

「お前本当バカだよな」

「うるせえ」

「自分で決めた事だろ。そんな顔してると、悪魔に笑われるぞ」

「・・・俺、どんな顔してた？」

「泣きそうな顔」

「してねーよ！」

「してた。どうしようもなくエルメスが好きなのに、もう手の届かない人になってしまって、悔しさで泣いちゃうんじゃないかかって顔」

「・・・！ ゲホツゲホツ！」

フツと笑いながら言ったガルフの言葉に、思わずむせた。それを見てガルフは笑ってやがる。

さすがは俺の副官なだけはある。昔っからコイツは的確なこと言いやがるから、たまに恐ろしい。

「バレてねーとでも思った？」

「思った」

「つつても気づいてんのは俺だけだ、多分」

「だろうな」

「だから、記憶を消して他人になったのか。それが、裏切りになると思っただから」

「そーだよ。あ、そういえばお前に渡すもんがあったんだっ」

「なんだ？」

「ホレ」

パチンと腕から時計を外して、ガルフの掌の上に載せてやったら、

なんか今度は悲しそうにしてやがる。そんな顔すんなバカ。俺泣い  
ちやいそう。

「これは、エルメスがお前に贈った物だろ」

「いや、これはエルメスがシュヴァリエの筆頭に贈った物だ。この  
時計はお前の腕にあるべきであって、俺にはその時計を所有する資  
格はない。それに俺がコレつけてたら、その内バレちまうかもしん  
ねーだろ」

「そうか。俺はいいけど、後から返せつつつても返してやんねえぞ」

「俺のモンじゃねえのに返せなんて言えるかよ。それ、壊すなよ」

「ああ、わかってる。じゃあ俺の時計使うか？」

「いや、いい。その時計はシュヴァリエのモンだ。俺はシュヴァリ  
エじゃねえから、いい」

「そうか。お前は筆頭でもシュヴァリエでも、ウサギでも友達でも  
なくなつて、今は何なんだ」

「さあな。今の俺は他人で、過去の俺は幽霊ファントムなんじゃねーの」

思い出の中に存在しない人、存在していたはずなのに存在しない  
人。そんなモン幽霊以外にねえよな。エルメスにとつてアーサーは  
ミステリーだったようだが、俺はホラーだったようだ。

俺に微笑んで、火を消したガルフが時計を腕に装着しながら家の  
中に戻っていくのを眺めていたら、ガルフを見て、エルメスが立ち  
上がった。

「ガルフ、その時計！」



「え、お、なに・・・」  
「それどうしたの！」

タイムリーにも程がある。つけながら戻ってたからたまたま気付いたのか、さすがのガルフも動揺してる。俺も慌てて背を向けて、背中に聞き耳を立ててみた。

「これは、まあ例のあの人が、自分はもう筆頭じゃないからつつて俺に」

「てことは、あの人は筆頭だったのね？」

「まあ、そうだなあ」

さすがのガルフも歯切れが悪い。やっぱクリスマス嫌いだ。とんだ災難だ。ハア、と溜息を吐いたら、突然ガンとデカい音が響いてその音に驚いて振り返ると、エルメスがテーブルを叩いて真つ二つに叩き割っていた。

「エ、エルメス、どした」

更に動揺するガルフを睨みつけたエルメスは立ち上がってガルフの前まで来ると、その手に持っていた時計を取り上げて、ギョツと握りしめる。

「ねえ、この時計、私が持ってたいい？」

「あ、それは勿論構わねえよ。その方がアイツも喜ぶ」

「アイツ・・・ガルフと仲良かったんだ」

「うーん、まあ」

「ガルフと仲が良くて、ガルフに筆頭の後継を頼んだのね・・・許せない！」

「は？」

急にエキサイトし始めたエルメスに一同は目を丸くする。やっぱりクリスマス大嫌いだ。本当に、とんだ災難だ。

「だってそうでしょ？ シュヴァリエ筆頭のくせに職務放棄して私をほったらかして！ 責任感ってものがないの！？ あの人は！ というかあの人って呼びにくいのよ！ えーと、じゃあ、もうクロでいいや、クロは！」

俺、猫かなんかか。なんでクロ？ さらにエキサイトするエルメスは、勝手に俺に妙な仮名をつけても尚飽き足らず、キャンキャン吠える。

「もう、ヒドイよ！ ガラードやガルフには会いに来るのに、どうして私には会いに来てくれないの！ 私の事なんかどうでもいいの！？」

「いや、そうじゃねえんだけど・・・」

「じゃあなんでよ！ もう、バカ！ この時計だって、クロには黒が似合うと思って選んだのに！ もおおお！ バカ！」

「う、ゴメン」

なぜか謝罪を始めるガルフ。悪いな、反撃するか謝罪するかは本人の力量次第だけど、お前の性格じゃ謝罪しかねえな。

でも、そっか。俺の為に選んでくれたのか、あの時計。それをエルメスが持っていてくれるなら、こんなに嬉しい事はない。

散々エキサイトして興奮したのか、エルメスはとうとう泣き出して、ガルフがオロオロしながらエルメスの肩を撫でると、ガルフに泣きついて。

ああ、また泣かせちゃった。俺はやっぱりエルメスを泣かせてしまっただな。でも、俺がエルメスの涙を拭いて、頭を撫でて抱きしめてやりたかったな。もう、それも俺の仕事じゃねえけど。

なかば、どこるかバツチリ羨望の眼差しでガルフとエルメスを見ていたら、エルメスは涙を拭いて、腕に時計をつけ始める。細いエルメスの腕には、時計はブカブカだ。装着した時計をギュッと握って、少し落ち着いたようにエルメスは口を開いた。

「私は絶対に許さない。私のシュヴァリエの筆頭だつたくせに、全然私の言う事聞かないで勝手にいなくなつて、職務放棄なんか認めない」

「そうだな。一生エルメスの傍にいるって言い出したのは、アイツなのにな」

「やっぱり、そうなんだね。クロが言い出したんだ。なのになくなくなつちゃうなんて、本当に許せない。もう、絶対決めた。絶対そうする」

「なにが？」

不思議そうに視線を送るガルフに、キツと目を向けたエルメスは強い口調で言い放った。

「もしクロに会えたら、今度こそ絶対捕まえる！」

「捕まえるって、猫かなんかかよ」

「そうよ！ 猫みたいな自分勝手は許さない！ 犬にして首輪つけてやる！ 私から逃げられないように眷属にする！ クロに会ったら伝えておいて！ 次に私に会うときは、傍にいらっやして約束を絶対守ってもらう。一生私の傍にいて、私の為に生きる覚悟をしなさいって！」

「アハハ、わかった。伝えとくよ」

うん、聞こえてるけど。ていうか、マジか。次にエルメスに会うときは俺眷属にされるのか。絶対嫌だ。絶対会いたくねえ。いや、会ってるけども。いよいよ正体バレちゃ困るじゃん。

これはクリスマスプレゼントという名の神罰だ。馬鹿馬鹿しい話だが、俺は心のどこかで、いつかエルメスに会いに行きたいと思ってた。いつかは前みたいになら、エルメスの傍にいられるようになりたいたいと思ってた。でも、もう本当に会いに行けなくなつた。

エルメスに会って眷属になったら、俺の思いを知られてしまう。そしたら、きつとエルメスを傷つける。エルメスを傷つけて、困らせて、怒らせてしまふんだらう。なぜ、友情を裏切つたのかと。

俺は責められるのが怖くて、眷属になりたくないんだ。どうせ知

られるなら受け入れて欲しい、それが無理なら、一生知らないでいて欲しいなんて、バカみたいだ。

俺はエルメスを傷つけるのに、自分が傷つくのは怖がってる。エルメスを泣かせてるのに、自分が責められるのを嫌がってる。

そんな風に思ってる内は、エルメスに会う事なんか許されないいや、違う。そう思ってる時点で、俺に会う資格はない。

自分で決めたはずだ。エルメスの中の俺を殺して、エルメスにはもう二度と会わないって。いずれ、俺は死ぬんだから。

猫は死ぬ前にひっそりといなくなって、孤独に死ぬものだ。自分の死にゆく姿を、飼い主に見られたくないから。

俺も、そうあるべきだ。

経過報告

これはあくまでもエルメスとシュヴァリエの報告書だ。エルメスと関わらなくなって、何も書くことが無くなった。紙面じゃわかんねえだろうけど、実はアーサーがいなくなって既に5年が経過してる。

エルメスと俺は相変わらず他人だ。最初の頃は転校生に興味を持った在校生よろしく色々尋ねられたが、気が済んだら特に興味も持たれなくなった。

以前エルメスは知らない人になんて会いたくないと言っていたし、他人を信用するのが怖くなったんだろう。それが男ならなおさら。

ついでに俺のキャラ設定は、ヨーロッパ系移民の2世の人間で28歳。シャンティの仕事の絡みで同居することになって、昼間働いてるってことになってる。寝てるけど。

まあ、一応未だにシュヴァリエの陰の指揮者的な仕事はしてるけど。暇なのは性に合わねえしな。それでも、エルメスの傍にいた時に比べたら雲泥の差で、暇だ。

5年もほったらかしといて急に再開したのにはわけがある。イベント

トが同時発生した。せつかくだから、この間の変化と併せて簡潔にまとめて書いておこうと思う。

- 1、ランスと同室は解消された。
- 2、 ジュノ様と2つめの契約をした。
- 3、 16歳になったランスが猛アタックを開始するかと思いきや、全然だ。
- 4、 あのアジメールが結婚した。
- 5、 実に信じられないことだが、シャンティとレヴィが結婚した。

まずは1から。俺らがきた頃は満室だった屋敷だけど、今は同室の奴は一人もいなくて、むしろ空室がある。屋敷の人間たちが何人が結婚して出て行ったせいだ。その為にスレシユも地下室から解放されて、一室を賜った。

今は俺が一人でクリシユナさんの部屋を使わせてもらってる。それまでエルメスなりランスなり同室だったから、最初は違和感あった。可笑しい話だけど。でも、すぐに慣れた。やっぱ一人はいい。

2について。ジュノ様に契約した2つめの願いは、勿論エルメスの幸せだ。コレが成就するのにはアーサーの帰還が不可欠。どう転んでもアーサーが帰ってこなきゃエルメスの本当の幸福はないし、裏を返せばアーサーが帰還しなきゃ俺は死なない。

しかもエルメスの幸福にはボニーさんとクライドさんも含まれてるから、あの二人に再会しない限りは、アーサーが帰ってきてもそれだけじゃ成就しない。

エルメスには申し訳ないんだが、アーサーの帰りが遅いせいで、なんとかランスの成長を見届けられそうだ。

ちなみに、お願いした時、俺はエルメスの心からの幸せとしか言わなかった。何がエルメスの幸福なのか探るところから始めなきゃいけないから、ジユノ様は相当苦戦しているようだ。ざまあみる。エルメスの望みを一つ一つ叶えていっては、これでもダメか、って落胆してる。エルメスはジユノ様が自分に親切にしてくれると思って、なんか懐いてる。アイツ本当にバカだよな。

とりあえず、いずれ叶うであろう2つめのお願いが叶ったら、以前エルメスの願っていたお願いを3つ目に持ってこようと思ってる。

そう、世界平和。

絶対叶いっこねえ。仮に叶ったとしても数百年単位の時間を要するはずだ。ざまあみる。

次に3つ目。これは実に驚いたんだが、ランスは諦める宣言を発令した。ランスは頭がいいから、気付いてしまったようだ。エルメスが自分を弟の様にしか思っていないことに。それに超意外なことを言われた。

「エルメス様の為に自分の記憶まで消して、忘れ去られても尚、傍で幸せを願ってるようなバカがいるのに、僕がエルメス様を追いかけたら卑怯者みたいで超イヤ。カイに負けたみたいなのがして超ムカつく」

相変わらず、アイツは俺に負けるのが嫌いらしい。それ以上に、アイツは立派な紳士だな。

まあ、そうでなくても普段からエルメスの我儘に振り回されて、よくガラードと愚痴ってるし、だいぶゲンナリしてるから、もういいかと思えるようになったのか。



ちなみに昨日聞いた愚痴。

「カイって実はマゾなの？ よくあの我儘と過剰なスキンシップに耐えられたよね」

「本当だよ。俺たまにスゲエ疲れるよ」

「いや、俺も普段から相当疲れてたし、かなりキレてたけど。俺はアイツをイジメてストレス発散してたから」

「ああ、そういえば。俺には無理だ」

「僕もエルメス様をイジめる気にはなれない。さすがは鬼畜野郎だね」

「うるせえ。お前らもやってみる。超楽しいから」

「確かにカイめっちゃ楽しそうだったよね。僕は遠慮するけど」

「俺も遠慮する。エルメスも楽しそうだったけど、それやって許されんのはカイとアーサー様くらいだろ」

「ふーん」

「プクク、嬉しそう」

「嬉しそう」

「うるせーよ！」

嬉しいけど嬉しくねえよ。羨ましいよチクシヨー。まあ、俺の後継がランスとガラードなだけまだマシだ。まだ許せる。他の奴だったらエルメスの名前呼んだだけで殴りそう。

それは置いといて、次4。

あれほどエルメスを崇拜してたアジメールも、とうとう結婚した。まあ恩人だのどうのこうのの前に、まず生物としての種別が違うし、

当然と言えば当然だ。

アイツは会社で庭師として派遣に入っで、その仕事で取引先のエクステリア業者の担当者だったイギリス人の女と恋愛結婚した。

結婚式は昼間だったから俺らは不参加だったけど、その後のパーティには顔を出した。アジメールの嫁にしては結構美人だ。子供が生まれたら嫁に似ることを祈る。

当然エルメスは大喜びして、二人の為に自分は食えないくせにケーキなんか焼いて渡してたんだけど、お約束。

砂糖と塩を間違えて、味見も出来ねえからそれに気づくこともなく二人に渡して、二人に変に気を遣わせてた。

あとでこっそり味見したランスが、「ちよつと、ナイ」って言ったから余程だな。ランスが言うんだから、本当に余程だと思う。つーか、自分で味見できねえ様なものを人にやるのは失礼なんじゃねえかと思うのは俺だけか。

何と言っても最大のイベントはらだ。これにはマジ驚いた。つーか、この二人を説得するのが大変だった。

というのも、ある晩に俺は部屋で灰皿ひっくり返して、掃除用具を探しに掃除用具置き場のある階段下に向かったわけだ。そしたら、通りかかったシャンティの部屋の前から声が聞こえた。

「でも、ダメだ」

「なんでだよ。俺はお前が好きだし、お前も俺が好きだって言うて

くれただろ」

「そうだけど、でもダメだよ。そんなの、できない」

「だから、なんで」

「だって、エルメス様にはもうクリシユナ様もアーサー様も、カイすらもいなくなったのに、アタシだけ幸せになるなんて、できないよ」

「関係ねえよ。お前が幸せになれば、エルメスは喜ぶぞ」

「そうだよ、シャンティ・・・ってギヤアアア！ なにしてんだ！」

「うわあああ！ カイ、何勝手に入ってきてんだ！」

勝手に部屋に入ったらシャンティとレヴィはベッドでイチャコラやってた。つーか、この二人がそう言う関係だとは知らなかったな。つーか、シャンティ女だったのか、とか今更思った。

「ちょ、マジでアンタ何してんの！？ 出てってよ！」

「うるせえよ。何？ 結婚話？ すればいいだろ」

「や、あの、カイ。俺の味方してくれんのは嬉しいんだけど、とりあえず出てってくんね？」

「まーまー落ち着け。俺に任せろ。シャンティ、お前はエルメスに幸せになってほしいか？」

「ええ？ そりゃ、まあ。つーか出て行って」

「エルメスだって、お前に幸せになってほしいと思ってるぞ」

「それはわかるけど、エルメス様を置いていきたくない。つーか出て行って」

「まあお前の気持ちは分からなくもねえけど、お前本当はレヴィと結婚したいんだろ」

「そりゃそうだけど、別に今じゃなくても・・・つーか出て行って」

「これは大事なことだ。人生に関わることだぞ。自分に正直になれ。」

じゃねーと出てかねえし、ドアブツ壊して全解放するぞ」

「・・・アンタ、説得するか脅迫するかどっちかにしてくんない？」

で、俺の説得と脅迫のコラボレーションでシャンティが折れて、見事婚約したわけだ。翌日シャンティとレヴィがみんなにその報告をしたら、エルメスは超大喜びして、シャンティに抱き着いて号泣だ。

結婚式の準備をしている間も、エルメスはシャンティと一緒にドレスのカタログを見たり、シャンティの衣装合わせの写真にはしゃいだりして楽しそうにしてた。

シャンティ達の結婚式は、俺らに合わせてくれて夕方からだった。さすがに社長なだけあって、来賓客は千人を超えてたし、超盛大。その中でもエルメスは主賓の席に座って、席を決めたのはレヴィだったから、俺はガルフの隣だった。丁度エルメスの反対側。

で、シャンティの友人代表でエルメスの祝辞。

「シャンティに初めて会った時、私はすごく感動しました。仲間の為にプライドを捨てる勇氣と、窮地に陥っても仲間を見捨てない勇氣にすごく感動しました。シャンティはプライドが高いし野心的で乱暴なところがあるけど、とても情が深くてすごく優しい女の子で、私は大好きです。レヴィはそんなシャンティにずっと片思いしてて、シャンティも憎からず思ってたはずなのになかなか成就しなくて、私はヤキモキさせられました。けど、久しぶりにインドに帰ってきたら二人はなんかフワフワしてたから、すぐに付き合ってるんだって気付いて凄く嬉しかったです。今日という日まで長かったけど、

私は、二人が幸せになってくれて凄く嬉しい。シャンティとレヴィに本当の家族が出来て、本当に良かった。ずっとそうなってほしいって思ってたから、本当に本当に嬉しい。私の願いをかなえてくれて、ありがとう」

エルメスの祝辞にシャンティは号泣だ。つーかエルメスは気付いてたんだな。自分の時は全然気付かなかったくせに。

ずっとこの二人の幸せを祈って、それが成就して、エルメスもすごく幸せそうにして喜んでた。

結婚式の後2次会でシュヴァリエ達は大暴れだ。酒も飲めねえくせに、雰囲気酔ったらしい。ベデイに至ってはナースと結婚したいとか言い出す始末。ナースの吸血鬼なんざ見た事ねえよ。無理だ、諦めろ。

ハイテンションなシュヴァリエ達を眺めて煙草吸ってたら、ユアンが傍までやってきた。

「いーなあ、人間は結婚できて」

「お前まで・・・でも、お前は頑張ればできんじゃないか。例の彼女はアーサーの友達なら吸血鬼だろ」

「無理だよ。もう5年も会ってないんだよ。俺の事なんか忘れられちゃってるよ」

「忘れられたって、また仲良くなりゃいいじゃねーか」

「・・・カイが言っと重みがスゴイ」

「だろ。頑張れ」

「うん、頑張ってみようかなあ」

なんだこの恋愛フラグ祭り。アホか。でも、ユアンが羨ましいな  
と思った。もし忘れられてても、何の憂いもないんだから。俺は忘  
れられて、再び仲良くなりたいてって思っちゃいけねえんだもんなあ。

何となく落ち込んで煙溜息吐いてたら、シャンティとレヴィが隣  
に座った。

「もー、カイ、本当ありがとう」

「おう、感謝しろよ」

「するする！ エルメス様にあんなに喜んでもらえて、アタシも超  
嬉しかった。あ、じゃあね」

「早っ！」

どうも礼を言いに来たようだったけど、慌てて二人は席を立って  
別の席に行ってしまった。なんなんだ、と思ってたら、エルメスが  
やってきて、俺の隣に腰かけた。

一瞬超ビックリして、体引いたら椅子から落ちそうになった。こ  
の5年間、エルメスに近寄ることがなかったから免疫が落ちたよう  
だ。

「カイさん、大丈夫？」

「ええ、すいません」

「あのね、カイさん、ありがとう」

「何がでしょう？」

急に礼を述べられて意味不明な俺にエルメスはにっこり笑って、俺の手を取った。それに超ドギマギする俺にエルメスは意にも介してくれない。

「聞いたよ。カイさんがシャンティを説得してくれたんでしょ。カイさんのお陰で幸せになれたって二人ともとても喜んでた」

「いえ、別に私は」

「カイさんのお陰であの二人が結婚できて、私凄く嬉しい。カイさん、本当にありがとう」

「え、いいえ・・・」

それから少しだけ話して、しばらくするとエルメスはシュヴァリエと呼ばれて席を立てていった。それをずっと隣で見てたユアンはクスクス笑い出した。

それになんか気分を害される俺。ユアンから視線を外してシャンティとレヴィに視線をやったら、まだユアンは笑ってやがる。

「良い事ってのはしとくもんだね」

「んー」

「よかったね」

「別に」

「何照れてんだよ。子供かよ」

「うっせえ、バカ」

正直な話、本当に良かったと思ってしまった。あれ以来、俺に向けられた感情のある笑顔は、実に5年ぶりだった。

エルメスの笑顔を見て、ああ、やっぱり好きだなあとか思ってしまった。やっぱりどうしても、その笑顔を独占したい衝動に駆られた。喜ぶべきじゃないってわかってるけど。

とりあえず、今回貰った笑顔は、シャンティとレヴィの恋のキューピッドを引き受けた褒美だと思って、有難く受け取ることにした。

ま、デカイイベントはこんなところだ。また何かあったら書くかな。できれば、エルメスにとって良い事をたくさん書いていきたいと思う。



経過報告

アーサーがいなくなつて、7年経つたぞ。今日はランスの18歳の誕生日で、成人式だ。今日という日を迎えられて、本当に良かった。

エルメスがなんか恥ずかしいからつって追い出した部屋に、ガードとガルフの立会いの下、ランスの吸血鬼化が行われた。

ガードの時みてえに、しばらくランスの呻き声が聞こえてきたと思うと静かになって、部屋から出てきたランスはニツと笑つて牙を見せた。

「これで晴れて僕もエルメス様の血族に仲間入り！ 嬉しい！」

「私も嬉しいよ！ こんな、こんな美少年が私の息子だなんて、鼻血でちやう！」

「あはは、エルメス様は僕のお母さんにしては若いし小さすぎですよ」

「そんなことないわよう。でもランス、本当に大きくなったね」

「はい！ 目標達成できて嬉しいです！」

ランスの目標は、俺を超えること。その目標は、とうに達成された。

ランスは、本当にデカくなった。少し前までただのガキだと思っただのに、昔宣言したとおり、俺の身長は追い抜かれた。今ではエルメスが鼻血を出すほどの美少年だ。

声も低くなって、手足も男っぽい太さになって、男の子なんかじゃなく、どこからどう見ても男になった。

妙に負けず嫌いなところは相変わらずだけど、ガキの頃より少し落ち着いて前より頭もよくなった。機転も利くし、正義感も強くて、エルメスの事も大事に思っただけで、アイツは立派な紳士だ。本当に、ランスはいい男になった。

成人式が終わった後、すぐにランスとガラードが俺の所にやってきた。

「どーだ！ これでもうガキなんて呼ばせないからな！」

そう言っただけで得意げに胸を張るランスに思わず笑った。やっぱりランスはガキだ。俺から見たら、何歳になっても、俺のガキだ。

「フン、バーカ。そう言うところがガキだってんだよ」

「なんだよ！ 僕の方が背も高くなったじゃん！」

「2センチしか変わらねえだろ。でも、お前デカくなったな、本当に」

「だろ？」

「ああ、立派になった。お前はもう、一人前だ」

そう言ってランスに笑ったら、ランスは驚いた顔をしていたけど、ガロードと共に段々悲しそうな顔をしてきた。

「なんて顔してんだ。成人式だろ」

「カイ、僕が大人になったら・・・」

「んー、とりあえず、これでアーサーが戻ってきたら、俺はもう思い残すことは何もないな」

「・・・なよ」

「ん？」

ランスが呟いた言葉が聞き取れなくて、聞き返しながらランスの顔を覗き込んだら、今にも泣きそうな顔をして俺に目を向けた。

「死ぬなよ。僕はまだガキなんだろう？ もっとちゃんとした大人になるまで見届けるのが、親の責任なんだろう。だから、死なないで」

ランスのその言葉は、素直に嬉しかった。だけど、俺の命は既に俺のものではない。俺には、どうしようもない事だ。俺の死は、既に決定事項なんだから。

「ありがとうな。でも、仕方のない事だ」

「なんとかならないの？」

「ああ、無理だ。俺は死ぬ」

「カイは、バカだよ」

「ああ、よく言われる。でも安心しろ」

「なにを」

「俺は死ぬけど、そりゃ300年くらい先の予定だ」

「・・・は？」

「そんだけ長生きすりゃ充分だろ」

「・・・だからテメーはバカなんだよ！ クソオヤジ！」

誰に似たのか、口の悪いガキだ。俺の余命を聞いたランスは突然キレだした。ほぼ同じ身長だから、耳に直接響いてきてうるさい。コイツのこういうところは、残念ながらエルメスに似てしまったようだ。

ガミガミうるさいランスの横で、ガラードは呆れたように溜息を吐いている。ガラードの溜息は、俺になのかランスになのか。恐らくランスだ。

あーあ、うるせえガキだぜ、と思って溜息を吐いて視線を横に向けたら、俺達の様子をじっとエルメスが見ていたことに気付いた。それに激しく焦燥。

「ちょ、お前黙れ」

「ぐっ！」

エルメスから見えない角度でランスにジャブで黙らせていると、エルメスがトコトコやってきてガラードに向いた。

「前から思ってたけど、ランスとガラードって妙にカイさんと仲良しじゃない？」

「あ、え、そう？ 特別そんなつもりはないけどな」

「うっん、一番仲良しだよ。よく考えたら最初から懐いてた。どうして？」

「えー？ カイはエルメスがいない間にきたし、まあその間に仲良くなつたよ。それはみんな同じだけど」

その返事を聞いたエルメスはまだ不服そうで、今度は俺に視線を向ける。

「でも、私だってもう7年近く一緒に過ごしてるのに、カイさんは私には他人行儀だね。敬語やめてって言ってるのに」

「エルメス様はこの屋敷におけるトップなのですから、当然です」

「でも、その事はカイさんには関係ないはずでしょ？」

「ええ、無関係ですから、なおさらです」

シャンティの結婚式以来、エルメスが俺に話しかけてくることは多くなった。でも、俺はその度に逃げ回って、エルメスが歩み寄るたびに、俺は後ずさりする。それを繰り返してきた。エルメスはその事を不服に思っていたようだ。

でも、関係ない、その言葉に傷ついた。だから自分から無関係だと言った。俺は本当にバカなんじゃないか。その言葉を聞いてエルメスは傷ついたような顔をする。でも、俺の口先は止まってはくれない。

「エルメス様はこの屋敷におけるトップです。シャンティにとって恩人ならば、私にとっても恩人なのでしょう。ですが、エルメス様と私の間には何のかかわりありません。あなたと私に直接の関係

性は必要ありません。無関係の赤の他人です。適切な距離感だと思いますが」

「じゃあどうしてシユヴァリエのみんなやジユノ様とは仲良くするの？」

「彼らが私の上に位置する立場ではないと言うだけです」

「ウソつき！ カイさんはいつも私を避けるじゃない！ 私から逃げてるのはどうして？」

そりゃあ逃げもするさ。必要以上に傍にいたら、死ぬのが怖くなる。前の様な関係を築きたいと望んでしまう。それは俺にとってもエルメスにとっても地獄でしかない。エルメスの記憶を消した意味が無くなってしまふ。

でも、本当は自分から逃げなきゃいけないことが辛い。誰よりも傍にいたい。誰よりも近くで、お前の笑顔を見ていたいんだと言えたらいいのに。

「本当のことを言っても構いませんが」

「なに？」

「私はエルメス様が、嫌いです」

ああ、俺はもう死んでしまいたい。誰か俺を殺してくれ、今すぐ。誰か俺の口を縫ってくれ、今すぐ。

エルメスの顔を見ても。傷ついて、今にも泣きだしてしまいう。保身のために、またエルメスを傷つけた。保身のために、平気で嘘を吐く。俺はどこまでも身勝手に、最低だ。

「私、カイさんに何かした・・・？」

「いいえ、エルメス様のせいではありませんよ。ただ、単純に化け物が嫌いなだけです。無害そうな顔をして人殺しの化け物なんて、不快です。気分を害されるのがお嫌でしたら、私に関わらないことをお勧めします。私自身、あなたと今こうして話していることも苦痛以外の何物でもありませんし、あなたと関わりたくありません」

「化け物だからって別に私はカイさんに危害を加えようなんて思っていないよ」

「それはどうでしょうね。信用できません。私はこういう人間ですから、今後いくらかでも平気であなただを侮辱しますよ。それが嫌なら近づかないでください。私があなただを嫌悪していることは、あなたのせいではありませんよ。悪いのは化け物嫌いの私ですから、そう思っただいつもどおり泣いていくだされば結構」

俺の言葉を聞いたエルメスは黒い瞳に涙を浮かべて、俺に背を向けてその場を走り去ってしまっただ、その後を慌ててランスとガラードが追いかけて行っただ。

当然自己嫌悪に陥ろうとする俺に、同時に5本くらいの脚に蹴っ飛ばされた。

「痛つてえー・・・」

「お前何考えてんだ！」

「マジ最低！」

「自分が何言っただかわかってんのか！」

「テメーもバケモンだろーが！」

「エルメスの気持ちも考えろ！」

まるで雨のように降り注ぐ罵声に俺は返す言葉もない。当然だ。すると、罵声マシンガンを放つシュヴァリエの背後から、腕組みしたジユノ様がニコニコと笑いながら歩み出てくる。

「カイさん？ あなた一体どうつもりですか？ 自分で願っておきながら私の仕事を邪魔するなんて。あなたのせいでエルメスさんの幸せメーターは急降下ですよ」

笑顔のジユノ様が怖い。そうか、俺はジユノ様の仕事を邪魔したことになるのか。本気で後が怖いな。

んで、当然ながらかなりエルメスを傷つけてしまったようだ。だが、それでこそ、だ。

「エルメスは、俺の事嫌いになりましたかね」

「そうですね」

「ならいいです。そっちのがエルメスにとっては幸福でしょうから」

「・・・そういうことですか。浅薄ですね」

「ハハ、そうですね」

「カイさんならもつとうまくやれるでしょうに。どうせなら屋敷を出られてはどうです？ その方が徹底的ですよ」

「うーん、そうですね。少し考えておきます」

俺の返事を聞いたジユノ様は、笑顔ながら幾分か不機嫌そうにしてその場から消えていなくなった。俺とジユノ様の話を聞いてシュヴァリエ達の頭には「？」が浮かんでるけども、別に理解してほしわけじゃないからどうでもいい。が、ここでコイツが出張ってき



やがる。

「浅薄、軽率。お前らしくもないね」

「ガルフくん、お説教かね」

「当然だ。俺らはエルメスのシユヴァリエだぞ。お前の考えも気持ちもわからなくはねえけど、エルメスを守護するのが俺らの仕事なんでな。エルメスに嫌われてしまえば、自分が死んだ時エルメスが悲しまない。エルメスと親しくならなければ、死を恐れる必要はない。安直だな」

「まーな。本来なら記憶消してんだから俺はここにいない方がいいんだろうけどさ。まあ、そこは俺の甘えだ」

「お前昔は自分に厳しい奴だったのになあ」

「今でも割と厳しいと思うぜ」

「ビミョー。エルメスの為に自分見失ってる系だ」

「あ、やっぱそうか。アイツ影響力強ええからなあ」

「お前にとってはな。でもエルメスのせいにするな。お前が一人で決めて一人で始めたことだ。手段の為に目的を見失うな。エルメスを不幸にするのは、お前の仕事じゃない」

「そーだなあ。じゃ、やっぱ謝罪して、俺ここを出るわ。人間って称してる以上、その内出ていくつもりではあつたしな」

「うーん・・・」

俺の家出宣言にガルフを悩ませていると、予想だにしない事態が発生した。ランスとガロードを引き連れて、エルメスが舞い戻ってきた。それを見て、ガルフは立ち上がってその場を退いた。

蹴られたまま座り込んでいる状態で驚く俺の前に腰を下ろしたエルメスは、真っ直ぐに俺の目を見て言った。

「私は化け物だけど、心までは化け物じゃない。カイさんにも誰にも危害なんて加えない。人殺しなんてしない。お願いだから、私を信じて」

なんつー強者だ。でも、そうだ。エルメスはこういうやつだ。ガイドを吸血鬼化した時だって、本気でエルメスを殺そうとした俺を、本気でエルメスを恨んだ俺を説得して説き伏せやがったほどの猛者だ。

今回に限っては俺がエルメスを嫌いなのは嘘なわけだし、うっかりしていると家出宣言を撤回してしまえそうさ。さっさと謝罪して出ていくに限る。

「カイさんは私が化け物だから嫌なんでしょう？ 私自身が嫌いなわけではないんでしょう？ 信じてとしか言えないけど、私は今までお屋敷の人たちにも、町の人たちにも危害を加えたことなんかない。7年も一緒にいたんだもの、わかるでしょう？ 私はカイさんに感謝してるの。私、カイさんと仲良く暮らしたいの。どうしたってあなたの事は嫌いになれないよ。これからの私を見て、私を好きになって？」

いつも見てるしもう好きだけど！ どうしよう、コイツ。つーか俺がどうしよう。背後からの「ウンって言えばポケコルア」って視線が痛すぎる。

既に謝罪と家出宣言は手遅れになってしまった。いや、まだいける。もう強行に出る以外に道はない。

そう思っていたら、退いたはずのガルフが、俺とエルメスの間にしゃがみ込んだ。そしてエルメスに向いて困ったように笑いかける。

「エルメス、ゴメンな。コイツとんでもねーウソつきなんだよ」

「え？ ウソって？」

「ま、見てろよ」

そう言ったガルフは俺の方に顔を向けて、後ろ手に隠し持っていたと思われる包丁で、俺の腕を一気に切り裂きやがった。

「痛って！ おま、お前何すんだよ！」

「いいからいいから」

「よくなーし！ 服破れてんじゃねーか！」

「まあまあ」

笑いながら適当に返事をするガルフは、俺の腕を掴んでただでさえ破れた袖を引きちぎった。

「お前マジなんなの！？」

「ホラ、エルメス」

「・・・カイさん。なんで傷塞がってるの」  
「え」

見ると、露出した腕は綺麗サツパリ修復完了。エルメスの疑惑の眼差しにアワアワしだす俺の首にガシツと腕を回して引き寄せたガルフはまだ笑ってやがる。

「いや、実はな。カイはあいつ、クロが呼んだんだよ」

「え？ クロが？」

「そ。前にクロが吸血鬼化させてな。コイツはクロに懐いてたから呼ばれてすぐにやってきたわけだ。で、来てみたら肝心のクロはいなくなつてて、クロがいなくなったのはエルメスのせいだっと思いついてたみてーでさ。それでもクロの帰りを待つつつって屋敷に留まってるんだ」

「・・・そうなんだ」

「最近やつとそれが誤解だっけわかつたみてーだけど、なんか引つ込みつかなくなつたらしい。バカだよなあ。ゴメンな。ホラ、カイも謝れ」

どっちがとんでもねーウソつきだよ。そんな設定初耳だぞ。しかもマジどうしよう。吸血鬼だって事はバレてしまった。しかも屋敷に留まる理由までつけられた。クソー、ガルフの奴。選択肢なんて謝罪しかねえし。

「・・・ヒドイ事言ってますませんでした」

別に謝罪自体はいいさ。ああ、いいさ。何がムカつくってガルフに言わされたのがムカつくんだよ！ チクショー！

イライラしながら謝罪して、チラリとエルメスを見たらエルメス

と目が合った瞬間に、エルメスはにこつと笑った。

「カイはクロの子なの？」

「・・・はい」

「ていうか、クロも吸血鬼だったの？ ジュリオさんの血統？」

「・・・はい」

俺の無然YESの返事を聞いたエルメスはより一層笑顔になって、俺の手を取る。

「じゃあカイさんも私と同じアーサーさんの血統だね！ 家族だね！」

「え、あーそう、なんですかね」

「もう、カイさんもガルフももっと早く教えてくれればよかったのに！ これから仲良くしようね」

「う、ああいや・・・」

「一緒にクロに会える日を待とうね」

「・・・はあ」

「よそよそしいのはもうナシ！ ねえ、カイって呼んでいい？」

「はあ」

「カイも私の事エルメスって呼んで？」

「いや、私は、いいです」

「なんでよ！ もう、敬語もやめてよ！ 家族なんだからそう言うのはダメなの！」

「いえ、いいです」

「もう！ やめてったら」

「や、いいです」

「もー！ カイのケチ！」

うわぁ、ソレ相当久しぶりに言われた！ なんか懐かしっ！ してなぜか嬉しい。複雑な心境の俺とは裏腹にエルメスは嬉しそうだ。

「一日に血族が二人も増えちゃうなんて嬉しいな！ カイも血族なのに関係ないなんて言っ、ゴメンね。これからは仲良くしようね！」

「・・・はぁ」

ていうか、どうしよう。他人から家族に一気に昇格。俺の7年間の苦悩と努力は、水の泡だ。んで、多分これからもっと苦悩する羽目になるんだろう。

つくづく俺って、不幸。

経過報告

とりあえず、後で改めてエルメスに暴言の謝罪をした。エルメスは笑顔でいいよ！と許してくれて、相変わらず寛容だ。

「本当にすいません。本当は私は別に、エルメス様を嫌いではないです」

「ホント？ よかった。でもカイに嫌われてもしょうがないよね。クロがないのは私のせいなんだもん」

「エルメス様のせいではないとクロ本人が言っているのですから、あなたのせいではありません」

「でも、原因を作ったのは私だから」

「いいえ、悪いのはクロですよ。クロがバカなせいです」

「・・・もしかして、知ってる？」

「ええ」

俺の返事を聞いたエルメスは途端に顔を真っ赤にして俯いてしまった。エルメスには申し訳ないけれども、エルメス可愛い。なんかイジメてやりたくなる。しかし、エルメスは段々と身をプルプル震

わせてきて、拳を握ったと思うとバルコニーの手すりを破壊し始めた。

「え、エルメス様!？」

「あのバカ! 誰にも言うなって言ったのに!！」

あ、そうだった。つい誰にも言っていないけど、俺は他人だったんだ。エキサイトするエルメスを何とか宥めてバルコニーの全壊は免れたけども、エルメスは興奮冷めやらない。

「エルメス様、私は誰にも言っていないから。それにその手紙もすぐに焼き捨てましたし」

「ムカつく・・・クロってばどこまで私を裏切れば気が済むのよ!」  
「本当ですね。なんにしてもさっさと忘れてしまった方がいいですよ」

「それが出来れば苦労しないわよ! それができないからカイもここにいないんじゃない!」

「・・・そうですね」

違うけど。でも、エルメスの言う通り、俺は一体どこまでエルメスを裏切って嘘を吐き続けなきゃいけないんだろう。

既にエルメスに吐いている嘘の数は、数えたら3ヶタ越えてると思う。吐いた嘘が多すぎて、何言っただか覚えてねえくらいだ。ホント、こんな最低な奴の事なんていつまでも覚えててもいい事ねえんだから、さっさと忘れてくれりゃいいんだけど。



「私は確かにそのつもりでこの屋敷に留まりましたが、今はそれが全てではありませんし、やはり悪いのはクロですから、エルメス様ご自身の為にも忘れた方がよろしいかと」

「だからそれが出来たら苦労しないって！ 男にはわかんないでしょうけどね、こっちは軽くトラウマなのよ！」

「・・・ですよね、すいません」

「なんでカイが謝るのよ」

「・・・クロの代理です」

俺はエルメスのトラウマをなくしてやりたいと思ってたのに、まんまとトラウマの一つになったようだ。本当俺って最悪。

興奮するエルメスの横で密かに自己嫌悪に陥っていると、いきなりエルメスは俺の手を取った。

「ねえ、前から聞こうと思っただけけど、どうしていつも手袋してるの？」

切り替え早っ！ そうだ、コイツはすげえ気まぐれで切り替えが妙に早かったんだ。その調子で忘れてはくれないのか。それは何故だ。謎だ。

つーか、うっかり馴染んでしまっている。あまり関わらないようにしないと。とりあえずエルメスの取った手をパツと離して、さっさと質問に答えてこの場を去ることにした。

「殺人神父時代の名残りです」

「そういえばみんな手袋してたもんね。でも普通の神父さんはしてないよね」

「手に硝煙がつかないようにするためです。それと焼けた薬莖で火傷をしない為」

「なるほどお。でももう必要ないでしょ」

「ないと落ち着かないんです」

「あはは、そうなんだ」

本当は無い方がいいんだけど、実際無いと落ち着かない。別にそれは殺人神父時代の名残じゃなく。

ジユノ様と契約をした直後から俺は人前では手袋をして、それを外さない。手袋外したらジユノ様の印章がバレてしまう。

クロであつてもカイであつても、エルメスには俺がジユノ様と契約したと知られてはマズイ。どうせならもつと目立たないところに押印してほしかったぜ。移植できねーのかな、コレ。

さつさと話を切り上げて、一礼してバルコニーから出て部屋に戻った。部屋のドアを開けると、何故か俺のベッドでジユノ様がゴロゴロしていた。

「人の部屋で何してるんですか」

「待ってたんですよ？」

「怖いんですけど」

「うふ。さあこっちに来て」

「怖っ！！」

「もう、とって食べたりしませんよ」

ウソ吐け、俺の魂喰つくせに、と思いつつ恐る恐る手招きするジユノ様の横に座った。

とりあえず、家出宣言を撤回したことを話しておかねば。それに今後の方針を新たに練り直す必要がある。

「つーかジユノ様、俺家出できなくなりました」

「そのようですね。でもエルメスさんの幸せメーター急上昇でしたから、いいんじゃないですか」

「ハア、これからどうしようかな」

「また以前のように仲良くなればいいでしょう。その方がエルメスさんにとつて幸せでしょうし、あなたにとつても」

「・・・俺の願いのせいですかね。ジユノ様がスゲエいい人に見えるのは」

「そうですね」

「ああ、願いついでに物は相談なんですけど、この印章別の所にてきませんか？ エルメスに見られたら悪魔に魂売ったってバレルし、折角血族が増えたつて喜んでたのにソイツが死ぬとわかったらアイツが悲しむでしょうから」

「いいですよ。ではズボンを脱いでください」

「何故下半身！？ 背中とかでいいです！」

「照れ屋さん」

「照れっっていうより怖いです」

言ってみるもんだ。右手の甲にあった印章は俺の右わき腹の背中の方に移動した。自分でも見えるし、服を脱がない限り人から見えることはない。これで手袋とはおさらばだ。手袋に慣れてたせいもあるけど、もっと早く言ってみればよかった。

「とりあえず、今回の事で状況はかなり好転しました。ですが、どの道私が今どれほど手を尽くしても、アーサーが帰還しなければ無意味。エルメスさんが本当の意味で幸せになる事は出来ません」  
「そうですね。アーサーさっさと帰ってくりゃいいのに」  
「あら、いいんですか？ あなたの死期が早まるだけですよ」  
「3つ目の願いに無理難題押し付けてやるから問題ありません」  
「何をおっしゃってるんです？ エルメスさんの幸せが3つ目ですよ」

「・・・は？」

むしろ何をおっしゃってるんだかこの悪魔は。2つ目じゃねえか。まだあと一つ残ってんだろ。

睨みつける俺の視線をもともせず、ジユノ様は相変わらずここにこだ。

「私は既に2つ叶えてますよ」  
「いやいや、まだ1つでしょう。記憶を消してつてのが1つ目」  
「いいえ。最初に願いを増やせという願いを叶えましたよ」  
「ええ！？ それカウントされるんですか！？」  
「当然です」  
「でもジユノ様、その後一つ目って言ったじゃないですか！」  
「言い間違いは誰にでもあることですよ」  
「マジか！ ちょ、マジですか！？」  
「マジですよ」

ウソ吐け！ 絶対わざと！ さては最初からそのつもりだったな。クソ、やられた。エルメスの幸せを2つ目に持ってきたのは不幸中の幸いだが、延命措置としての世界平和が無くなったとなると、いよいよ本気で策を講じなきゃいけないな。

でなきやアーサーはいつ帰ってくるかはわかんねえし、アーサーが帰ってきてからボニーさんとクライドさんを迎えに行つて、その後こまごました用を済ませてしまえば、早ければ帰還後2か月程度で死ぬ事になる。

死ぬ事自体は構わねえけど、アーサーが帰ってきて喜んだのも束の間、その後すぐに血族が死んだんじゃエルメスが可哀想だし、最低でも1年は延命したいところだ。全くどうしろってんだコノヤロ！。

ああ、やつぱりエルメスと近くなるんじゃなかった。やつぱり死ぬのが怖くなる。エルメスの傍にいられないことに恐怖してしまう。

つーか、今更だけど俺やつぱバカだな。本当ガルフの言った通りだ。エルメスの為に自分を見失つてる。悪魔と契約しなければそんな憂いも発生しなかったのに、あの時は俺が死んでエルメスが悲しむかもしれないなんて思いもしなかった。つーかまさか記憶の消去に失敗するとは思わなかったもんなあ。

でも、今更後悔しても遅い。俺の余命があとわずかとなれば、腹を括る以外にはない。この際だ、何が何でもエルメスを幸福に導けるようにジユノ様コキ使つてやる。

「わかりました、仕方がありません。エルメスの心からの幸せと言

う俺の願いは、完全に遂行してもらえますよね？」

「ええ、勿論」

「ではお願いです。最低でもコレはやってください。エルメスが悪夢を見ないように、トラウマの払拭、クリシユナさん、ミラーカさん、北都、ジュリオ様の輪廻転生をして、彼らの死の悲しみを払拭し、戦争当時並にエルメスの力を復活させ、エルメスに人を治癒する能力を授け、ヴァチカンおよびイスラムなど俺らやエルメスに対抗する可能性の芽を摘み取り、あらゆるトラブルを回避させ、北都の事件を迷宮入りのまま時効を成立させ、エルメスの友人・家族などエルメスが大事に思う人間をその魔力で庇護し、エルメスが愛し愛された者との間に子供ができるようにして、永久にその子の幸福な成長を見届け、この世界から戦争を消し去ること」

「・・・随分欲張りますね」

「強欲なのはエルメスの方ですよ。これまでのエルメスの過去と、以前エルメスが願っていたことを申し上げたにすぎません。それがエルメスの幸福ですから。できるでしょう？」

「いいでしょう。わかりました」

ジュノ様は幾分か不機嫌そうだ。ざまあみろ。「それがエルメスの幸福」と銘打って、その内「面倒くさいコイツ。もう諦めて地獄に帰ろう」って思うくらいに、これからもガンガン無茶ぶりしてやる。

今思えば「エルメスの幸せな姿を見続けたい」と願うのが正解だった。それならよかったんだが、まあ今の状態でも構わない。エルメスの博愛主義と平和主義、それとあの我儘っぷりに掛かれればエルメスの願いは泉のように湧き出てくる。

エルメスはスレシユの件で過去に死神として活動していたことも後悔していたし、いまだにあの戦争の事を思い出して泣いてるとガ

リード達が言っていた。

「エルメスの心からの幸福」は、一筋縄では叶う事のない無理難題だ。「ラブ&ピース」に強欲なエルメスの望みにいつまでジユノ様が付き合ってもらえるか、楽しみだ。

訃報

残念ながら、悲しいお知らせだ。スレシユが死んだ。享年78歳。

実は、スレシユはここ半年間ずっと入院してた。半年前、体調を崩して会社で倒れて救急搬送された。その時の検査で膵臓にガンが見つかって、膵臓ガンののは発見されにくくて、症状が出る頃にはもう末期って事が多いらしくて、スレシユもそれだった。

最初は治療の為に入院して投薬治療とかしてたけど、本人の希望でホスピスに移った。治療してた頃は薬の副作用でスゲエ辛そうだったけど、ホスピスに移ってからはずっくりと死を待つのも悪くない、と言って幾分か穏やかになってた。

それでも病による痛みにうなされてたりして、その度にシャンテイヤエルメスはスレシユに見つからないように泣いていた。

先月、本人が強く希望してスレシユは屋敷でホスピス療養をすることになって、屋敷でホスピス看護師を3人も雇って、専属のドクターまでつけて、スレシユが穏やかに余生を過ごせるように手厚い看護を施した。



屋敷に帰ってきてからは、スレシユは本当に穏やかだった。それまでの自分の人生とか、マフィア時代の事や、シャンティの会社に入ってから的事や、若いころの夢なんかを俺らに語って聞かせてくれた。

スレシユの葬式には、多くの弔問客がやってきた。マフィアとしてではなく、シャンティの会社の重役としてのスレシユの死を悼む人たちが大勢詰めかけた。関連企業や提携企業の間人や、シャンティの会社で働いている奴らなんかがたくさん来て、若い奴らの中には泣いている奴さえいた。

スレシユはもう、マフィアでも人殺しでもなくなっていた。ただのサラリーマンのオッサンだ。弔問客の涙がそれを証明した。

アーサーの言う死んで喜ばれる奴ではなくなったんだ、スレシユは。ちゃんと泣かれる奴になったんだよ。エルメスはそのことをとても喜んでいた。

スレシユは遺書、というか手紙を遺した。その文面にはこう記してあった。

おれは、人ではない。人の皮を被った鬼だ。その鬼がガンで死ぬという。おれにとっては果報過ぎる。

おれの半生は、血で染まった汚いものだ。他人の血と、他人の涙と、他人から奪った人生で、おれは生きていた。そのおれが、病気で死ぬのだ。他人から全てを奪っておきながら、おれにこれほど幸福な死を与えられてもいいのだろうか。

屋敷にいる若者たち。皆それぞれ辛い人生を歩んできた。特にシユヴァリエ達には、おれは謝罪してもしきれないほどの罪悪を感じる。彼らの全てを奪ったのは、このおれだ。彼らになら全てを奪われたって、おれには文句を言う筋合いもない。むしろ、感謝するべきであろう。

しかし、シユヴァリエ達はおれを許すと言った。その言葉の通り、シユヴァリエ達はおれを殺さず、とくに辛く当たったりするわけでもなく自然体で接した。

その心のうちに、どれほどの葛藤と憎悪を押し込めていたのか、おれには図る術はない。だが、彼らの強さと優しさと思いやりは、痛いほどに身に染みた。

おれがこれほど幸福な死を迎えられるのは、彼らのお陰だ。おれは死んだら地獄行だ。彼らもきつと地獄行だ。ならばおれにできる事は一つだけだ。

彼らが来た時に地獄で苦しまないように、沸き立つ血の池におれの血を流して、少しでも温度を下げてやるう。鞭打つ鬼が現れれば、その前に立ちはだかるう。閻魔に賄賂を送って彼らの魂を天国に導けるように取り図ろう。もし、おれも彼らも生まれ変わって、再び出会う事があつたなら、彼らに全てを与えよう。

それでも、おれがどれほど手を尽くそうとも、彼らから受けた恩は、人生を何度繰り返しても返しきれるものではない。それほどのものを、おれはもらったのだ。

彼らに許しを得、シャンティの会社で働いたことは生涯の思い出だ。おれの生涯の宝物だ。

70を過ぎて初めて知った。人を生かすという事の素晴らしさを。それまでおれの知ることのなかった美しい世界だ。

シャンティは気高く、美しい娘だ。その家族たちも誇り高く、友愛に満ち溢れている。

社会の底辺を這いまわって生きてきたと言った。地獄を見たと言った。泥水を啜り、人から奪われ、人を殺され、人から奪い人を殺して来たと言った。

それほどの生があつて尚、絶望することもなく前だけを見て突き進む力強い横顔は、ひどく印象に残る。

シャンティ達はインドの現実が生んだ悲劇そのものだ。その大きな現実すらも踏破して、矜持と野心と精神力で社会の現実ではなく、自分たちの現実を構築する。

彼らの誇り高さは、おれにはないものだった。彼らの真摯さは、おれにはないものだった。

彼らの敬愛する人々、その人達への恩と感謝を込めて作り上げた会社と幸福は、確実に周囲を巻き込んで、大きな幸福の樹を育て上げている。

彼らの思想に突き動かされ、目的を同じとした同志たちが多く集い、ただ助けるだけでなく、助けられた者も助ける側に。なんと素晴らしい事か！

夢のようだ。おれは夢の世界を生きているようだった。この世の美の集成を見たのだ。人々が手を差し伸べて、差しのべられた相手も誰かに差し伸べる。それこそが愛なのだ、愛は繋がるものだと知ったのだ。おれにそれを見せてくれたのだ。

この世に存在する美の頂点をおれは見たのだ。その頂点を見せてくれたのは、エルメスだ。彼女がいなければ、俺はただ死んでいたのだろう。この世の美を見ることもなく、シュヴァリエ達に謝罪することすらも出来ず、ただ豚の様に死んだのだろう。

エルメスは殺しを嫌った。人を愛した。愛を愛した。よく泣き、よく笑う、小さな可愛い子だ。彼女もまた辛い運命を背負い、それでも生きた。

彼女を支えた物は、友情と忠誠と信頼だ。それによって生まれる彼女の強さと美しさはまばゆいほどに輝いて見える。

エルメスは太陽だ。地上の太陽だ。エルメスの傍にいと、後ろ暗い心は焼き尽くされる。それは苦しみを伴う。しかし、焼き尽くされて灰になつて消えた後、心に残るのは、優しく暖かな光と、涙だ。

彼女が人の為に流す涙の、なんと美しい事か。彼女が人に向ける笑顔の、なんと暖かな事か。彼女の語りかける声の、なんと優しい事か。

おれの運命を変えた太陽の女神は、シャンティ達の恩人でもある。シユヴァリ工達のアイコンでもある。

エルメスの傍にいる事は、苦しみだ。焼かれるのだ、心を。焦がされるのだ、汚い心を。その苦しみを超越すると、愛が待っている。言い知れない幸福が待っている。

誰もがその恩恵を受ける。エルメスの愛した者は皆、愛と幸福を享受される。だからこそ、燦然と輝く太陽の暖かな光は、人を惹きつけ、愛さずにはいられないのだ。エルメスは人を変えずにはおかないのだ。

エルメスは愛の化身の様だ。まるでバッハの音楽の様で、その旋律は重厚で、深く、美しい。

おれは地上で女神に会つたのだ。こんなうす汚れた老人にでさえ、女神は愛を教えてくれたのだ。人と愛と生と言う物が何なのか教えてくれたのだ。これほど幸福なことがあるだろうか。

ありがとう、ありがとう、ありがとう、何度言葉を繰り返しても、感謝してもしきれない。この恩を返す方法を、エルメスにふさわしい幸福と愛をお返しする方法を、誰か教えてくれ。

エルメスと出会えた運命を心から感謝する。おれのような人間にも暖かな生と、穏やかな死を提供してくれた屋敷の若者達に、幸多からんことを。

イルファーン・スレシュより、愛を込めて。

葬式の後、その手紙をみんなの前で読み上げるシャンティは途中で泣いて言葉に詰まり、代わりにスニルが読み上げた。

みんな、泣いていた。シュヴァリエ達ですらも。俺はその手紙を聞きながら、何歳になっても、人はいくらかでも変わる機会はあるんだな、と思った。

エルメスは、人を変えずにはおかない、その通りだ。みんな変わった。今のシユヴァリ工達に、あの頃のように人殺しの目をしている奴は一人もいない。

エルメスが人生をやり直させた。人を殺すのではなく、人を守る人生を俺らに与えた。それは俺達にとっても見たことのない世界で、なによりもエルメスを守護するという事は仕事である以上に大きな喜びでもある。

それほどもでにエルメスの存在は大きく、その価値は重い。

スレシユの墓前で泣きながら、エルメスはスレシユにしきりにお礼を言っていた。

「私はスレシユさんに何もしてあげられなかったのに、スレシユさんに辛い思いをさせただけなのに、こんなこと書いてもらえるような人間じゃないよ。スレシユさんは、自分で知ったんだよ。スレシユさんが自分で知ろうとしたから知ったんだよ。お礼を言わなきゃいけないのは、私の方。スレシユさん、私を許してくれてありがとう。優しくしてくれてありがとう。スレシユさんは鬼なんかじゃないよ。優しいおじいちゃんだった。もつと、あなたと一緒に過ごしたかった。もつと、あなたの話を聞きたかった。もつと、あなたと家族でいたかった」

エルメスの言葉は、きつとスレシユには嬉しかったに違いない。今頃きつと地獄で俺らが来るのを待ってるんだろなあ。

スレシュとジュリオ様にいの一番に会いに行くのは、恐らく俺なんだろう。二人に再会したら、「マジでアンタら最低だよな」って言いながら、今まで二人に言う事のなかった言葉を、タイミングを待ちつつ言っつてやるうと思う。

それを言ったら、きつとスレシュなんか喜ぶんだろうな。多分ジュリオさんも喜んでくれると思う。でも、泣いていたエルメスを抱きしめていたガードに先に言われちまった

「アンタも俺達の家族だったよ」

そう思えるようになったのも、エルメスのお陰だ。エルメスが俺達に赦すという事を教えてくれたおかげだ。

俺が言うのはまだ後に取っつておこう。死んで再会したら、言っつてやるう。



LETTER・10 Comrade 「仲間」

拝啓 アーサーさん

今日は悪いお知らせといいお知らせがあります。悪い知らせから聞くものだと前にテレビで言ったので、まずは悪い知らせから。

今日、スレシユさんのお葬式でした。とてもとても悲しくて、みんなでいっぱい泣きました。私達、泣いたんですよ、スレシユさんの為に。

死んで言われることがあっても、泣かれることはないっていう理由で彼の屋敷を襲ったけど、私達は彼の為に泣きました。彼は泣かれる人になりました。

私はスレシユさんが大好きでした。彼は優しいおじいちゃんのような人でした。仇である私にでさえ優しくしてくれる、とてもいい人でした。

スレシユさんのしわのある手で頭を撫でられるのが好きでした。スレシユさんの少しかすれた声で名前を呼ばれるのが好きでした。メガネをかけてペンを走らせる、仕事中のスレシユさんの横顔が好きでした。

その事を、生前スレシユさんに言ってあげられなかったことが、とても心残りです。お礼も謝罪もちゃんと言ってあげられなかった。この二つはちゃんと言わなきゃいけないって、ずっと前から思ってたのに言ってあげられなかった。

そしたらきつとスレシユさんは喜んでくれたに違いないのに。今となつては後悔してももう遅いです。語りかける相手はもうお墓の中なのです。

スレシユさんは幸せだったでしょうか。私達と生きて人生をやり直せたでしょうか。もしそうなら、これほど嬉しい事はないです。

スレシユさんはお手紙を遺してくれました。その中で私を太陽のようだと行って、たくさんたくさん、褒めてくれました。たくさんお礼を書いてくれました。

私はそんな立派な人間じゃないのに、そんな事を思ってもらえる資格のある人間じゃないのに。

でもシュヴァリエ達に、エルメスがそう思つても、スレシユにとつては太陽の女神だったんだよ。スレシユがそう言うんだからそこに違いない、と言ってもらえました。

シュヴァリエ達にそう行ってもらえたことがとても嬉しかった。シュヴァリエ達はいつしかスレシユさんの事を許してくれていました。あの日の言葉の通り、みんなスレシユさんを許してくれて、スレシユさんの為に涙を流してくれました。

そのことが、心の底から嬉しかった。シュヴァリエ達の過去の出来事は、私にはどう頑張っても癒す事は出来ませんでした。もしスレシユさんと出会わなければ、シュヴァリエ達はきつと一生スレシユさんを許すこともなく、解夏されることもなく、苦しみ続けたのでしよう。

感謝していると言っていたけど、感謝するのは私の方。スレシユさんと出会えて本当に良かった。スレシユさんが10年前にしてくれた決断は、かけがえのないものを生み出してくれました。

スレシユさんは優しい人でした。愛と慈しみにあふれた人でした。仕事に厳しい人でした。とても頭のいい人でした。お酒の入ったスレシユさんは冗談が好きで面白いおじいちゃんでした。困ったような顔をして怒る人でした。シャンティの作るカレーが好物だと言っていました。

スレシユさんは私達にとっては優しく明るいおじいちゃんでした。

彼にもう会えないことが悲しい。彼の半生を顧みると、彼はきつと地獄行です。勿論私達も同罪だから地獄行です。だけど、彼は人生をやり直して更生したんです。その事を神様が見てくれたらいいなっと思っています。

次はいい知らせです。シャンティとレヴィが結婚しました。アジメールが綺麗なイギリス人の人と結婚しました。ランスが18歳になっ成式を迎え、私の血統の吸血鬼になりました。新しい血族

が増えました。

私は、幸せです。スレシユさんが死んでしまつて、家族が一人いなくなりました。でも、家族はこれからもきつと増え続けていくのです。

人間が人間である以上、私達より先にシャンティ達は死んでしまふのでしよう。でもきつとその内生まれるシャンティの子供たちが私達の家族になってくれます。

その子たちがシャンティの会社を継いで、幸福の樹をもつと大きくしてくれるんだと思います。

愛の連鎖をとめなければこれからもどんどん肥大して、きつといつかスラムに孤児なんていなくなると思います。きつといつかそうなる。シャンティ達はそれだけを考えて毎日頑張つてるから、絶対その夢は叶うと思うんです。

ランスを吸血鬼化して、私の息子がまた一人増えました。ランスは大きくなりましたよ。もう子供じゃありません。立派な男の人になりました。

ランスは吸血鬼化をとて喜んでくれました。これで血族の仲間入りだと喜んでくれました。私も嬉しかった。

本当は、イヤイヤなんじゃないかなつて思つてたんです。吸血鬼になつて良い事もあるけど、悪い事はもつと多いから。

もう人には戻れないよ、太陽を仰ぐことはできないよ、人の血を

飲むんだよ、それでもいいの？

吸血鬼化の前に確認しようとしてそう聞いたら、ランスは悩みもせずに答えました。

「人間のままエルメス様を遺して死ぬ事程、辛い事はありません。それに比べたら太陽や血なんて苦にもなりません。どうか僕を一生エルメス様の傍にいらせてください。僕がクロの代わりにずっと傍にいますから」

ランスは優しく素敵な紳士です。その言葉が凄く嬉しかった。そこまでランスが私の事を思ってくれていることが、とつても嬉しかった。

昔約束して丁度10年なんですよ。あのランスとの結婚話です。ランスは何か言ってくるかな、と思ったけど、なにも。気になって自分から聞いちゃいました。そしたらランスは言いました。

「エルメス様は僕の母です。僕の仕事は父の代わりにエルメス様の傍にいる事ですから。父がエルメス様と再会したら、その時考えます」

ちょっと意味が分からなかったんですけど。ランスのお父さんになんて会ったことないんですけど。ジュリオさんの事でしょうか。なんでジュリオさん？

お父さんってことは私の旦那さん？でも、そもそも私クリシュナとの間に子供いないし。ランスは私の実子ではないし。まあ、血族

の関係上は私の子供に間違いありませんけどね。

そうそう、以前ちよつとだけ話したお屋敷の新人さん。彼、血族でした。ジュリオさんの血統で、クロの子だそうです。私にとつては甥っ子の子供になるのかな。アーサーさんにはひ孫ですね。

彼、カイっていうんですけど、私は彼と仲良くしたかったのに、いつも避けられてたんです。シャンティ達に結婚するように説得してくれたのはカイだったから、私は本当にカイに感謝してて、だから仲良くしたかったんですけど。

私ひよつとして嫌われてるのかな、とか思ってた矢先に、面と向かって嫌いだって言われちゃって、凄く落ち込みました。化け物だからイヤだって。

でも、私はカイと仲良くなりたいたいで、殺したりしません。信じてって言うても証拠もないし、そう言うしかできないけど、お願いだから信じて、これからの私を見て、私を好きになってほしいと思います。

そしたら、カイをガルフが切りつけて、そしたら、カイも吸血鬼だったんですよ。傷はあつという間に治っちゃって、その瞬間カイは、あ、ヤベ、みたいな顔をして。

ちよつとさっきのはどういう事よ、と思ってたたら、ガルフが言うには、カイはクロを追いかけてきたけど私のせいでいなくなっただと思っ、私を嫌いになっただって。でも、それはもう誤解だっただってわかったからって言うてくれて、それで仲直りできました。

その後カイはすいませんって謝ってくれて、少しだけ話しました。その話の中で信じられないことを聞いて凄い腹が立ちましたけど、カイはクロがいうんだから私のせいじゃないって言うてくれたし、なぜかカイはクロとの秘密を共有してるみたいだし、カイがクロの子ならきつといい人で、楽しいと思うから、ちゃんとこれから仲良くなれそうです。まあ、それでも他人行儀なスタイルは貫き通すようですけど。

その話の中で、気になったことを聞きました。カイは初めて会った時から、ずっと手袋をしてました。それはどうしてって聞いたら、殺人神父時代の名残だって。無いと落ち着かないんだって言うてました。

でも、その後会ったら手袋してなくて、どうしたのって聞いたなら、もう必要ないと思ってって。なんかそれが嬉しかったです。

それで嬉しくて調子に乗って、カイもみんなと一緒に私のシユヴアリエにならない？ って聞いたら断られちゃいましたけど。でも、一応血族だし、屋敷にはいますよって言うてくれたから、ソレで我慢します。

インドに来てからいなくなってしまうた人もいたけど、その分増えました。大事な人が増えました。それは私にとってとても幸せなことです。

大事に思える人が、これからもたくさん増えるといいな。そう言う人たちとずっと仲良く楽しく暮らして、アーサーさんとクロに会える日をみんな待とうと思います。

アーサーさんが帰ってきたら、きっとアーサーさんの知らない人がいっぱいいるんでしょうね。ちゃんと紹介してあげますから、ちゃんと仲良くするんですよ？

敬具



吉報

ヤベエ、マジスゲエ。マジヤベエ。俺は生まれて初めて、シャン  
ティを尊敬した。

アーサーが消滅して、今年で記念すべき10周年を迎えた。いつ  
の間にかアンタとの付き合いより、俺らとの付き合いの方が長くな  
ったとエルメスは言って、さっさと帰ってこねーと顔を忘れそうだ  
とか言い出す始末だ。アイツなら忘れかねない。その辺覚悟しとけ。

この記念すべき10年目に驚くべきお祝いイベントだ。シャンテ  
イに第一子が誕生した。レヴィによく似た男の子だ。

シャンティとレヴィはなかなかニクい真似をしゃがる。その子の  
名前、クリシュナってつけたぞ。勿論エルメスは大喜びだ。

「やっぱアタシ達は実質クリシュナ様に面倒見てもらってたからさ、  
あの方が好きだったんだ」

「絶対この子はクリシュナの生まれ変わりだよ！ 絶対そう！」

「アタシもそうだったらいいなと思うよ。女の子が生まれたらミィー

ナってつけないんだけど」

「ホント！？ 嬉しい！ そしたらミーナとクリシユナはずっと一緒だね！ クリシユナが大きくなったら私のお嬢さんにちょうだい！」

「いくらエルメス様の頼みでもそれはきけねーな」

「ちえっケチ」

ケチっつーか生後数週で運命が決まるクリシユナのが気の毒だろ。

覗き込むエルメスにシャンティがクリシユナを抱かせると、クリシユナは敏感に気づいてぐずりだす。

今度はそれを取り上げてガイドがあやすも泣き止まず、更にランスの手に渡っても泣き止まず。

「お前ら、そんなたらい回しにしたら余計泣くだろ」

「じゃ、カイ交代」

「ハイハイ。クリシユナ、俺がパパだぞ」

「ちげーよ！」

「冗談だろ、静かにしろよ」

俺の冗談に食って掛かる本物のパパは、俺の腕の中で泣き止んで笑いだすクリシユナに目を丸くした。

「カイすげー」

「今頃気づいたか」

「さすがベテラン」

「だろ」

「ベテランってなーに？」

子供慣れした俺に尊敬な眼差しを向ける面々に得意になってたら、エルメスに現実引き戻された。

「あ、私は以前妻帯者だったのよ」

「え、そーなんだ！ でもそれならなんで今ここにいるの？」

「え？ あー、妻子に先立たれたのよ」

「そうだったの……でも、じゃあ私とお揃いだね」

「お、お揃い……」

微妙に憐憫の目を向けるエルメスには悪いけど、俺はまだ未婚だ。つーか神父は結婚できねーってコイツに言わなかったっけ？ あ、忘れてんのか。

ウソつきな俺に周囲は尊敬から一転して白い目を向ける。じゃあ他になんと言えば？ あ、修道士って言えばよかった。まあいいや。この程度の嘘でもエルメスは十分騙せる。

「そっついえばベトナムのアミンちゃん、今年で9才だ。大きくなっただろうな。見に行っちゃおうかな」

それを聞いてマズイと思った。ベトナムの二人には悪魔との契約の話なんかしてないし、何も知らない二人に会ったら、俺がクロだとバレてしまう。

なんとか先回りして口止めしたいがエルメスは瞬間移動ができる。ヤバイ、どうしよう。

内心焦っていると、突然ジュノ様が現れて耳打ちした。

「ご心配なく。既に口止めはしてあります」

「マジすか!」

「ええ、9年前にね」

「そんな前に?」

「エルメスさんはあなたがいなくなつてすぐにその足跡を追いかけようとしたから、先回りして口止めしました」

「マジか。いや、ありがとうございます」

「どういたしまして」

さすがジュノ様、やるな。俺も死ぬ前にジュノ様に空間転移教えてもらおうかな。便利そうだ。

歓喜の中心のクリシユナに視線をやりながら、ジュノ様に気になったことを尋ねた。

「クリシユナ、もしかしてあのメンバーの誰かの生まれ変わりですか?」

「ええ、あなたの言った通り転生させてあげましたよ」

「マジすか! さすがジュノ様! ちなみに誰?」

「うふ、誰でしょうね。当ててみてください」

「やっぱり名前の通りクリシユナさんじゃないですか?」

「ハズレ」

「ええ!?! じゃあ北都?」

「残念」

「じゃあジュリオ様ですか」

「そうです」

「マジか・・・クリシュナがジュリオ様、なんかややこしいですね」「命名したのは私ではありませんから、その点に関して私に責任はありません。人間で、しかも同じ性別にしてあげただけ感謝してほしいものです」

「・・・ありがとうございます」

そう言われてみればそうだ。俺は転生としか言っていないから、人間以外のものに転生される可能性もあったのか。他の人達、八工とかになったらどうしよう。ジュノ様ならそう言う事をやりかねない。

「エルメスの幸福に関わることなんですから、エルメスとちゃんと関連する人として転生させてくださいよ」

「勿論わかっていますよ」

「ところで前世の記憶は？」

「あなたには前世の記憶がありますか？」

「・・・そうですよね。ならよかった」

いくらジュリオ様でも前世のあの辛い記憶がなければ、ジュリオ様自身は素晴らしい人だ。クリシュナはきっといい奴になるに違いない。紳士で真摯で頭もよくて優しい、そういう男になるに違いない。

そう考えていたら、ジュリオ様を殺した時の事を思い出した。あの時、エルメスは死の間際のジュリオ様の為に“ミナ”に顔を変え

て安らかに死なせてくれた。

ジュリオ様が生まれ変わった時、愛し愛されて、信頼した人がいたことを忘れないように。

ジュリオ様は生まれ変わって、シャンティとレヴィに愛されて育つ。その周りの人々や、俺達やエルメスに愛されて育つ。きっと幸せになれる。そうなるに違いない。そうなってもらわなきゃ困る。そうなってくれたら、俺が殺した甲斐がある。俺も報われる気がする。

そんな事を考えていたら、エルメスが思いついたようにシャンティに提案した。

「ねえねえ、こっちにはカイがいるんだからさ、夜の間は私達がクリシュナの面倒を見るよ。夜泣きしたらシャンティ達も育児鬱とかになっちゃうかもしれないし、こういう時こそ助け合わなくっちゃ！」

「うーん、それはありがたいんだけど・・・」

困ったように視線を俺に向けるシャンティに目を合わせる。

「俺は別にいいぞ。慣れてるし」

「うーん、でもなあ。そこまで頼むのはさすがに悪い」

「なんならシャンティ体調戻ったら会社に復帰しなよ。私最近昼間起きられるようになったし、安心して！」

「・・・不安だよ」

その不安はごもつともだ。とてもじゃねえけど、エルメスに任せ

られない。エルメスに任せるくらいなら犬にでも頼んだ方がマシだ。

「シャンティの職場復帰の件は置いといて、夜の間は面倒見るぞ。

俺これでも二児の父なわけだし、言っとくけどお前より慣れてるぞ。子供の前じゃ煙草も吸わねえし」

「それもそうだな。じゃあこの子の為に子供部屋を用意するよ」

「ああ、そーしろ」

というわけで、暇で仕方がなかった俺は、まんまとベビーシッターの仕事をゲットした。結構嬉しい。しかもジュリオ様の生まれ変わりとか、かなり嬉しい。

このクリシュナの面倒を見てやることで、ジュリオ様に恩返しができるかな、とか思ってみたりした。

シャンティ達の隣の部屋に子供部屋を設えて、俺はそこに本やらパソコンやらを持ち込んで常勤で待機。新生児の面倒見るのに必要な物も全部持ち込んだ。

深夜になってシャンティ達が寝る前にクリシュナの様子を見に来た。

「カイ、悪いな」

「別に。暇だし」

「アハハ、確かにな」

子供の寝顔を覗き込むシャンティの顔は、トリンと同じように母親の顔だ。いつもは乱暴でうるさい女だが、子供に向ける目はなによりも優しい。

俺の視線に気づいたシャンティは、シャンティらしくもなく優しく笑う。

「なあ、アンタら吸血鬼ってさ、子供できねーの？」

「できねーなあ」

「エルメス様も？」

「できねーなあ。あ、でも、それジユノ様をお願いしたから叶うかも」

「マジ？」

「多分な。エルメスさつき言ってた。昼間起きれるようになった。あれも10年前当時と同じくらいの力を戻せて言ったんだよ。ちなみにクリシユナも」

「え？ この子が、なに？」

「あの戦争で死んだ人たちを転生させろって言ってやった」

「・・・アンタ強欲だな」

「ジユノ様と同じ事言うんだな。でも、強欲なのは俺じゃなくて、それを本気で願ってるエルメスだろ」

「ああ、確かに。じゃあこの子は本当にクリシユナ様の生まれ変わりなのか？」

「残念ながらクリシユナさんじゃねえな」

「じゃあ誰？」

「俺の育ての父親」

「・・・そうか、だから面倒見るの引き受けてくれたのか」「まーな」



俺の話を聞いていたシャンティとレヴィは複雑そうだ。それもそうだ。エルメスの家族を殺した張本人が、自分たちの子供に生まれてきてしまったんだから。話すべきじゃなかったか、と後悔したが、言ってしまった物は仕方がない。

「お前らがジュリオ様をよく思ってねえのはわかってるよ。でも心配すんな。クリシュナにはジュリオ様の記憶はない。それに、ジュリオ様は本当はスゲエいい人なんだよ。優しくて大らかで紳士で、頭もよくて嘘を吐くのが嫌いだった。アーサーと“ミナ”が出会わなきゃ、アーサーともずっと友達だったはずなんだ。あの人が道の間違ったのは、ヴァチカンに来たからだ。教授の下で過ごしてればよかつたんだ。ヴァチカンに来て一人になってしまったから、誰も信頼できなくなっただけなんだ。だからクリシュナを一人にしないで、いつも誰かが傍にいて守ってやれば、クリシュナはスゲエ立派な奴になると思う。実際、生前ジュリオ様は弁護士だったんだぜ。本当は人の為に働くのが好きだったんだ。本当のジュリオ様は、悪い人じゃねえんだ」

自分で言いながら、つくづく思う。俺は本当にあの人が好きだったんだ。ジュリオ様に褒められるのが好きだった。優しい声が好きだった。優しい笑顔が好きだった。ジュリオ様の優しさが好きだった。例えばそれが嘘にまみれた物だったとしても、俺には大好きな父親だったんだ。

俺の必死の説得を聞いたシャンティは呆れたように溜息を吐く。

「別に心配しなくなたって、ネグレクトしたりしないよ。愛する我が

「子だし」

「ハハ、まあそうだよな」

「でもアンタがそこまで太鼓判押すなら、この子は立派な子になるんだろうね」

「間違いねえよ」

「アンタを育てた奴なんだ、立派な父親だったってのは、みりゃわかるよ」

「お、何だ。もしかして褒めてんのか」

「まーね。アンタはエルメス様大事にしてるしさ、女見る目もあるし」

今のはどういう意味だ。もしやバレてんのか。ハラハラして思わず沈黙する俺に、シャンティはニヤニヤと笑う。

「エルメス様を陥落させんのは難しいだろうね」

「は？ 何言ってるんだ」

「エルメス様ぽやーっとしてるしなあ」

「は？ なにが？ なにが？」

「せめてカイがクロだって名乗り出りゃね」

「イヤイヤ意味わかんねーし」

「ま、頑張んなよ。今度はアタシらがキューピィやってやるよ」

「いや、マジで意味わかんねーし」

「じゃ、おやすみ」

最後のは本気で意味わかんねえ。キューピィってなんだ。お前はマヨネーズにでもなる気が。

っーかやっぱバレてんのか。シャンティはエルメスとも仲がいい

し、さすがに気付かれたか。

「つか心底余計なお世話なんだけど。俺そんなの希望した記憶ないんだけど。そんな恩返し有難迷惑だチクショー。」

「はあ、と溜息吐きながらベビーベッドの柵に頭預けてクリシュナを覗き込んだ。子供はいいなあ。可愛いし、見てるだけで癒される。子供はいい。純粹で無垢で、良い事も悪い事も何も知らない。いつそ俺も何も知りたくなかったなあ。」

クリシュナには愛とか友情とか、そう言うのをちゃんと教えてやりてえな。そしたらジュリオ様みたいな暴挙を犯すこともないんだし、きつと人の役に立つのが好きな奴になるはずだ。

ジュリオ様、立場逆転ですね。今度は俺があなたを育てる番ですよ。とか心の中で呟いてみたら、クリシュナが夜泣きし始めた。

「コレは「ええ、お前が？　なんかイヤなんだけど」って言ったんのか。それっばいな。」

夜泣きクリシュナをあやして何とか寝かしつけると、ムニムニと口を動かしてちよつと笑ったように見えた。その笑顔に思わず微笑んでしまう。

アーサーが帰って来た時に、今度はこのクリシュナとアーサーが友達になれるといいなあ。シャンティ達が親なら、それも不可能じゃねえ気がするな。

やっぱり子供はいい。子供は、希望の象徴だな。

俺の魂をドブに捨てる結果になった件

リビングでガールズ(?) トークに花を咲かせるエルメスとジユノ様を、バルコニーで煙草吸いながら眺める俺。

「いーなあジユノ様。女の格好してるってだけでエルメスとイチヤイチャしゃがって、チクシヨウ。アタマ撫でてんじゃねーよ。」

本当は性別不詳のくせにエルメスに気安く触んな。と内心毒づきながら見ていたら、エルメスは思い立った顔をしてジユノ様に尋ねた。

「ねえ、ジユノ様、本当のところどうなんですか？ ジユノ様が私の記憶消しちゃったんですか？」

「さあ？」

「ねーもう、教えてくださいよ。ていうか戻してくださいよ」

「私はなあんにも知りませんよ」

「ジユノ様ウソつき！ ジユノ様以外にそんなことできる人いない

でしょ！」

「仮に私が消したとして、もしそうなら願いが成就した時点で既にクロさんは死んでます」

「え！？ 死んでるんですか？ そんな・・・」

「死んでいたら、花火を上げること、ガルフさんに時計を継承することも、カイさんに手紙を送ることもできないでしょうね」

「あ、そっか。あれは記憶が消えてからだだったんだ。てことは生きてるんだ！ じゃあやっぱりジユノ様の仕業じゃないのかあ」

ジユノ様を詰問していたエルメス。確かにそんなことできそうなのはジユノ様とアーサー位にはいねえだろ。

そしてまさかジユノ様をお願いを3つにしろと要求したとは予想できなかったようだ。

未だにエルメスはクロの幻影を追いかけているようだ。さっさと忘れりゃいいものを。どんだけだよ、クロ。

つかクロって俺だよな。俺なのに、俺は軽くクロにすら嫉妬を覚えるくらいだ。俺がどんだけだよ。

「クロ、どこいったのかなあ。アーサーさんが帰って来ても、クロもいなきゃ私ヤダな。もう二度と会えないのかな。クロがいたから元気になれたのに。楽しかったのにな。また遊びたいな」

エルメスはクロの思い出に浸ってブルーに入ってしまった。それを見ていたジユノ様はエルメスを見つめながら、エルメスの頬を撫でた。その感触にエルメスがジユノ様に視線を向けると、顔を向けたエルメスに、ジユノ様がキスをした。

うん、いや、状況に脈絡がなさ過ぎて意味が分からない。ジユノ様の中で一体どんな化学反応が起こってそう言う行動に駆り立てたんだ。

突然のジユノ様の行動にエルメスは驚いたように目を見開いている。うーん、ジユノ様は女じゃねーけど女の格好をしてるだけに、中々の耽美っぷりだ。綺麗系と可愛い系の百合はなかなか悪くない。BLと違って百合は美しいな。っーか、エルメスが百合に走ったらどうしよう。っーか、何この状況。

どうでもいいことを考えて二人を見ていたら、ジユノ様が唇を離れた瞬間に、エルメスが俺の方にダッシュして来て抱き着いてきた。いよいよ脈絡のない状況に意味が分からない。

突然のエルメスの行動に動揺してワタワタしていたら、エルメスの体が小さく震えて、呻くような声が聞こえてきて、泣いていることに気が付いた。

「あの、エルメス様？ どうなさったんですか？」

急に泣かれていよいよ意味の分からない俺がそう尋ねると、エルメスは俺から体を離して、俺に目線を合わせた。その瞬間に、乾いた音と共に頬に鋭い痛みが走る。どうも平手打ちされたようだ。

更に意味不明な状況と、頬の痛みで大混乱する俺にエルメスは泣きながら掴み掛ってきた。

「カイのバカ！ ウソつき！ ヒドイよ、ずっと私を騙し続けて！ 私ずつと寂しかったんだから！」

「え、あの、エルメス様？ なんのことですか？」

大混乱して問いかける俺に、エルメスはキツと涙に濡れた目で睨みつける。そして知る、ジユノ様の裏切り。

「もおおお！ カイはどこまでバカなの！？ もう信じらんない！ カイがクロだったなんて！！！」

「いつ！？ え、いや！ なんのことか私にはさっぱり・・・」

「今更スツとぼけたって、全部思い出したわよ！ バカ！」

さっきのジユノ様のキスは記憶を戻してたのかと悟って思わずジユノ様に視線をやったら、ジユノ様はなぜかピースサイン向けやがる。

いや、なに裏切ってるの。契約したじゃん。何戻してるの。うーわー、記憶が戻るとは予想外もいい所だ。マジどうしよう。俺の10年の努力を返せ。

ジユノ様の裏切りにショックを受ける俺に、なおもエルメスは掴み掛ってエキサイト。

「私の記憶勝手に消して他人に成りすますなんて、アンタ何考えてんのよー！」

「う、あ、いや、ゴメン」

「ゴメンで済むと思ってんの！？ しかも中途半端に消して！ 私がこの10年どんな思いで過ごしてきたと思ってんのよー！」



「すみません・・・」

「なにがク口の血族よ！ まんま本人なんじゃない！ バカじゃないのー！」

「すみません・・・」

「なんで記憶消したの！？」

「いや・・・」

「ちゃんと言いなさい！」

エルメス激怒。そりゃ怒るよなあ。当然だ。周りで様子を見守ってる奴らがアララって顔してるけども、俺が一番アララだよ。マジどうしよう。

「や、いや、俺が傍にいたらエルメスを傷つけると思って」

「バツカじゃないの！ 急に記憶失くしていなくなる方が傷つくに決まってるでしょ！ そんなことも分かんないの！」

「・・・ゴメン」

「だーから、ゴメンじゃ済まさないって言ってるでしょ！ 大体いるじゃん！ 記憶消してんのにいるじゃないの！ なんでよ！」

「それは、まあ、傍にいるって約束したし、罪を償わなきゃいけないし」

「贖罪！？ もう、バカ！ 本当バカ！ 私言っただよね、許すつて。カイは言ったよね、なんでも私の言う事聞くつて！ なんで聞かないのよ！ 許すつて言ってるんだからカイはそれを聞いて大人しくしてりゃいいでしょ！ バカじゃないの！ なんでそうなるのよ！」

確かに、エルメスの言い分はご尤もだ。どうでもいいが、ここまですら大激怒するエルメスを見るのは初めてだ。なんか逆に冷静になっ

てきた。

エルメスは本当に怒ってる。裏切った上に、勝手に記憶を消して騙し続けてきた。そりゃ怒って当然だ、ゴメンじゃ済まされない。でも、許して貰えないかもしれないけど、わかってしまった以上、知ってほしい。

掴み掛るエルメスの腕を離して、ちゃんとエルメスの目を見た。嘘じゃなく、本当のことを言うために。

「あのさ、俺はお前を傷つけて、裏切った。俺はお前を一生裏切らないと10年前のあの日に誓ったのに、裏切り者になってしまった。その事でお前を苦しめなくなかったし、俺が傍にいたらお前が嫌な思いをすと思うた。俺も、俺なりに反省して、だから記憶を消した。俺の記憶が無くなれば、お前が嫌な思いをすることはないと思っただから。正直、思い出とかが残ったのは俺の誤算だったけど。でも、記憶を消してしまっても俺はお前の傍にいたくて、ずっと他人のふりをしてた。お前に忘れられることが、俺への罰だと思って。裏切り者のくせに勝手だっかわかってるけど、俺を忘れてお前が幸せになるのを傍で見えていたかった。つーか、本当のことを言うと、例えお前に忘れ去られても、俺がただ傍にいたかっただけなんだけど。その事でエルメスをかえって苦しめることになるのは俺もちよっと予想外だったから、本当に悪かったと思ってる。ゴメン」

9割がた本心を言ってしまった。エルメスはバカだから多分気付かないと思うけど、周りの奴らにはバレたかもなあ。まあ、もう仕方ないけど。

俺の話を聞いていたエルメスは少し落ち着いたのか、涙を拭って溜息を吐くと、胸ぐらを掴んでいた手を緩めた。

「そうだね。カイは裏切り者だね」

「うん、ゴメン」

「私に絶対服従するって言ったくせに全然いう事聞かないし」

「は？ そっち？」

「そうよ。でも、もう心配ないね。もう二度と逃げられないし、裏切ることもできないよ」

「・・・なに」

俺に顔を向けてさっきまで泣いてたくせにニヤリと笑うエルメスに、一抹の不安。反射的に身を引く俺の腕をエルメスはガシッと掴んで引き寄せる。

「言った筈よ。次に会ったら逃げられないように私の眷属にするって」

うわぁ、やっぱりアレ本気で言ってたのか！ 焦燥と恐怖すら感じて慌てて逃げようとするも、掴まれた腕を強引に引かれて床に倒れこんだ。すかさずエルメスは俺の上に乗ってきてマウントを取ると、ニヤリと笑った。

「眷属になったら考えてることも居場所も全部わかる。覚悟してね」  
「エルメス、本当ゴメン！ 本当に悪かったと思ってるから、それだけは勘弁してくれ！」

「悪いと思うならいう事聞きなさいよ。抵抗しないの」

「そりやするだろ！ マジゴメンって！ それだけは許してくださいさ

い！マジで！」

「もー！大人しくしてよ！」

「頼むからやめろ！本当ゴメンって！」

床の上で二人でジタバタ大暴れ。エルメスは俺よりも強いから、必死の抵抗を試みるも本気出しても勝てそうになくてピンチ。ここはもうどれだけ無様でも謝罪と説得で切り抜ける以外にはない。

「マジやめろって！本当、本当悪かったと思ってるから、それだけはやめろ！眷属になる以外なら、これからはなんでもいう事聞くから、どこにもいかないから！もうお前に嘘ついたりしねえから！本当ゴメン！ゴメンって！」

もう本当無様。俺らしくもない必死の懇願。頼むから聞き届けてくれ、と半ば叫ぶようにそう言うと、エルメスは攻撃の手を緩めてじつと俺を見据えた。

「その言葉に嘘はない？」

「ない。誓う」

「もう記憶消したりしない？」

「絶対しない」

「もうどこにもいかない？」

「絶対行かない」

「私の言う事なんでもきく？」

「きくし、できることはなんでもする」

「もう私を裏切らない？」

「え、と、それはどういう意味で？」

「全部」

「全部・・・裏切らない」

「絶対に？」

「ああ、絶対に」

「もう嘘ついて騙したりしないでね？」

「ああ、もうお前に嘘はつかない」

その言葉を聞いて、エルメスはやっと笑ってくれたけど、俺は早速嘘を吐いた。これから裏切らないっていうか、現在進行形で絶賛裏切り中なわけだし、その事に関して一生嘘を吐き続けなきゃいけないわけだ。

やっぱりウソつきで最低な俺にエルメスは嬉しそうに笑って、体を起こした俺の首に腕を回してギュツと抱き着いてきた。それに一瞬ギョツとする俺。

「もう、そんな警戒しなくても噛みつかないよ」

「・・・ゴメン」

「でも、よかった。カイにまた会えて嬉しい」

耳元で聞こえるエルメスの声は安堵の音色。顔は見えないけど、多分笑ってるのかな、そう思って俺もエルメスを抱きしめた。

「ゴメンな。もうこういうことはしねえから」

「絶対だよ。約束だよ」

「ああ、約束する」

「私、淋しかったよ」

「ゴメン」

「ずっと会いたかった」

「ゴメン」

「中途半端に記憶が残って辛かったよ」

「ゴメン」

「忘れるどころか、余計カイのこと考える羽目になったよ」

「ゴメン」

「そのせいだよ」

「ん？ なにが？」

「なんでもない。ねえ、もうちょっとこうしていい？」

「うん」

うん、ていうかお願いします。実はエルメスのハグに有頂天な俺。

エルメスのサラサラで長い髪、甘い香り、小さくて柔らかい躰。

さっきまでのドタバタが落ち着いたら急に別方面が落ち着かなく

なってきた。どうしよう、落ち着け俺。公衆の面前でニヤニヤする

な、俺。っーか、よく考えたらこれから毎日生き地獄？

「えーと、エルメス、もうそろそろ離れようか」

「やーだ」

「いや、ちよつと一旦離れようか」

「やーだ。10年分なの」

「それはこれからおいおい・・・」

「もーうるさいよ。大人しくいう事ききなさい」

「ハイ」

この小悪魔め。人の気も知らねえで、いや、知られたら困るんだ

けど。自分を励ましつつ宿めすかしつつ溜息を吐いて目線を横に流すと、ニコニコしたジユノ様。

ジユノ様は何を考えて記憶を戻したんだか。2つ目の願いはペアだ。俺の今までの努力も水の泡だ。こうなったことはエルメスも喜んでるし俺も嬉しいけど、あとで問い質す必要があるな。つかキスする必要あったのか？俺に対する嫌がらせか。腹立つ。

大体大誤算もいい所だ。どうするんだこれから。エルメスの記憶が戻ってまさしく元の木阿弥。それなのに、俺はいずれ死ぬんだ。折角喜んでくれたエルメスを遺して。今はこんなに喜んでくれているエルメスを、俺はまたいつか泣かせてしまうんだ。

そうか、ジユノ様の意図が分かった。俺はエルメスの幸せを願った。俺の記憶が戻ったことでエルメスを悩ませるものはなくなつて、再び友達が戻ってきた。それがエルメスにとって幸福の一つになるはずだと考えたんだろう。3つ目の願いの為に2つ目の願いを反故にしたのは恐らくそう言う理由だ。

でも、俺はエルメスの幸せしか願わなかった。完全に俺の失策だ。永遠とまではいかなくても、俺の死後もエルメスが幸福であるように、幸福の継続を願うべきだった。

ジユノ様は俺が願った通り、エルメスを幸福へ導く。でも、俺の死後までは責任持たないし、願いを叶えた後の事なんて関係ないね、という事なんだろう。

エルメスが幸せになった時点で俺の願いは叶って、そして俺は死

ぬ。ジユノ様は俺の言った通りに契約を遂行したことになるから、俺が死んでエルメスが悲しもうが関係ない、そう言う事か。

チクシヨー、やっぱ悪魔は悪魔だ。考えることが違うな。完全に計算が狂った。またどうにかして策を考える必要があるなあ。ま、アーサーが帰還してからでも遅くはねえと思うけど。

考え事をしていていつの間にか落ちて着いて、落ち着き通り越して軽くブルー入った俺から、やっとエルメスが離れた。

立ちあがったエルメスはシャンティとガロードやガルフ達に何やらキャツキヤ言いながら話して、少しするとガロード達がいなくなつて、エルメスもソファに座りなおした俺の所にまた戻ってきて、俺の腕に抱き着いてベタバタし始めた。

うん、嬉しいんだけどコレはイジメですかね、と溜息吐きながら空いた手で煙草を取り出して火をつけて煙草を吸いだしたら、エルメスがなんかじっと見てる。

「なに？」

「私の記憶、どうやって消したの？ カイもアーサーさんみたいな不思議能力使えたっけ？」

あ、忘れてた。その説明がまだだった。勿論エルメスにジユノ様と契約したと告げる気はない。それをエルメスに知られたら元も子もない。再び俺はウソつきだ。



「いや、催眠術かけた。微妙に失敗したけど」

「いつの間に・・・」

「催眠術かけられてるって本人にはわかんねえもんなの」

「なんでそれが急に解けたの？」

「ジユノ様がスイッチをオフにしたから」

「もしかして、キス？」

「そ」

「またキスしたらオンになるの？」

「いや、もうならない。またかけない限りは」

「ふーん、そつか。よかった！ キスする度に記憶消えたらヤダも  
ん」

「・・・お前そんなに何度もジユノ様とキスする気か。とうとう百  
合に目覚めたか」

「違うよ！ もう、バカ！」

怒られた・・・！ なぜか怒られて喜ぶ俺。俺はヘンタイか・・・  
・ヘンタイかもな。

しばらくするとエルメスは風呂に入ると言ってやっと解放してく  
れた。

疲れた・・・色々と疲れた。これから死ぬまでずっとこんな疲労  
を味わうのか。他人の方がまだマシだな。

そんな事を考えてたら、隣にガルフが座った。それはもうニヤニ  
ヤしながら。

「辛そうだな」

「辛れえよ。なにコレ？ イジメ？」

「見てる分には面白い」

「だろうな。腹立つ」

「よかつたな」

「・・・まあな。でも、どうすりゃいいんだこれから。俺死ぬのに」「死ぬ事は避けられないのか？」

「無理だな」

「そうか・・・じゃあ生きてる間に目一杯エルメスを大事にしてやるしかねえんじゃないか」

「でもよ、そうなると死んだ時の反動がデケェんじゃないか」

「それこそ催眠術の出番だろ。お前が死んだ時点で本当にエルメスに記憶を消す催眠でもかけてやるよ」

「あー、そうだな。そうしてくれ」

「ま、お前は死んだ後の心配なんてすんな。自分から命捧げた奴がそんなこと考える資格がそもそもねえんだし。お前は生きている間にどれだけエルメスの幸せメーター上昇できるかだけ考えとけ」

「うーん、まあ、そう言われてみればそうだな」

俺は自分の死を望んでるわけじゃねえし、俺の死を望む人がいるわけでもないのに、自分から悪魔に魂を売り渡した。それは身勝手に他人の気持ちを顧みない我儘。

そんな我儘をしておいて心配するのは確かにお門違いだ。そんなら最初っからするなよっつー話だ。

俺はエルメスの為に生きる覚悟も出来てなければ、死ぬ覚悟も出来てねえって事なのか。まあ、俺の覚悟なんて関係なしに、願いが成就すれば俺の意志とは関係なく死ぬんだから、死ぬ覚悟は必要ねえ。

「死んだ後の心配は無用だ。だからエルメスに言えよ」

「は？ なんてだよ。言うわけねえだろ」

「言えばいいだろ」

「言わねえ」

「その方が面白いだろ」

「面白くねえ。これ以上お前を喜ばせてたまるか」

「俺だけじゃなくみんな喜ぶのになあ」

「マジ腹立つな、お前」

面白いもの見たさだけで勝手なこと言いやがる。マジ腹立つコイツ。つーか今コイツみんなって言ったか？ みんなって聞こえたけど、気のせいじゃねえよな。あれ、もしかしてみんな知ってるのか？ ウソ？ マジで？

頭を抱えてたら、俺らの所にユアンがやってきて、何故かガルフの前で敬礼。

「会長、例の件準備整いました」

「おう、ご苦労さん。エルメスは？」

「協力的どころか是非にと」

「ハツハツハ、やっぱりな。エルメスの事だからそうだろうと思った」

二人の態度と会話がなんだか気にかかる。つーか俺に内緒で何か企んでやがる。

「オイ、会長つてなんだ。お前いつから何の会長になった」

「さつきから“カイの恋を応援する会”の会長だ」

「なんだそれ！？ バカじゃねーの！？」

「ちなみに会長は俺、副会長はシャンティ、あとのメンバーはレヴィ・ユアン・トリス・・・まあエルメス以外の全員だ」

「全員!? 全員でそんなバカな会合を!?!」

「まあいいじゃねーか。面白れーし、暇だし」

「本当暇だな! だからお前、面白いだけで余計なことすんなよ!

「っーか余計な世話焼くな!」

「お節介はお互い様。お前だってシャンティ達の世話焼いたろ」

「それとコレとは話が違うだろ!」

することがない暇人どもは、新しい遊びを発見して大いに楽しむ腹積もりのようだ。迷惑以外の何物でもない。大迷惑極まりない。

大体俺は一生エルメスに話す気はないし、さすがにそこまで裏切れない。っーか全員ってなんだよ。俺結構演技派のはずなのになんでみんな知ってんだよ。で、なんでみんなその会に参加してんだよ。どんだけ暇なんだ。っーかランス、アイツは反対派だよな? そうだよな、そうに違いない。

キョロキョロ見回してランスを探すと、ランスが階段を下りてやってきていた。すぐにランスの下に駆け寄って、例のアホらしい会のことと詰問してみた。

「僕も会員だけど」

「なんでお前まで!」

「カイならいいかかって」

「無駄な信頼! いらねえってそんなの! 俺にもエルメスにも超迷惑!」

「でもカイはエルメス様好きだろ?」

「~~~~~だからって俺はそんなの望んでねえんだよ!」

「カイが望んでなくても、僕らはそれを望んでるから」

「はあ!？」

「カイならきつとエルメス様を幸せにしてくれるし、アーサー様もカイなら許すよ。それに・・・」

「バカ言つな! 俺にできるわけねえだろ! 俺は死ぬんだぞ!

もしそうなくても俺はすぐ死ななきゃいけねえんだぞ! そんな時エルメスがどれほど悲しむかわかるだろ!」

「・・・そんなのわかってるけど、もう既に手遅れだよ。カイが悪魔と契約した時点で、カイが傍にいる時点でどんな関係だろうとエルメス様は悲しむ。それなら、生きている間だけでも幸せになつてほしいよ」

「そんなの、エルメスの幸せにはならねえよ」

「違う。僕らが望むのはカイの幸せ。カイはいつもエルメス様の事しか考えてなくて、自分のことを考えてない。僕はカイにも幸せになつてほしい。できる事なら死んでほしくはないけど、それが無理なら生きている間だけでも幸せでいて欲しい。家族の幸せを願うのは、当然のことだよ」

反論できなかつた。他の奴らの事は置いといて、ランスの言う事は正論だ。悪魔と契約したのは俺の我儘だ。俺が追い込まれて精神衰弱していたせいだ。ジユノ様の策略で契約したことは自分でも重々承知していたけど、それは俺だけで周りの奴らは承知なんてしてない。

エルメスが以前言っていた。

「誰かが生きていてほしいと願つてる内は、死んじゃいけないんだよ。他者との間で交わされるその願いは大事な命の約束なんだよ。それを破っちゃダメなんだよ」

本当俺はバカだな。エルメスの言う事を聞かないからこういうことになる。脳内が「ラブ&ピース」なエルメスの言う事きいてりゃ、最初から苦しむことなかったのになあ。

ま、今更後悔しても遅い。アーサーが帰還した時点で俺の命は風前の灯だ。それが変わることはないんだし、生きてる間にできる事をするしかないか。このアホみたいな会の事は別として。

苦し紛れに「勝手にしろ」と言い残して部屋に戻ると、不思議現象だ。部屋のドアが開かない。どうも鍵がかかっているようだ。鍵をかけた覚えはないし、鍵を持って出てもないから、俺の脳内はミステリーだ。

鍵が壊れたのか？ ドアブツ壊して入るか？ と考えていたら、ガラードとクリシユナを抱っこしたシャンティとペレアスがやってきた。

「あ、ゴメン。カイの部屋はこっちの都合で引越しちゃった」

「ああ？ 何勝手なことしてんだ。許可した覚えはねえぞ」

「形式上屋敷の持ち主アタシだし？ 所有権はアタシにあるんだけど、法にでも訴える？」

「チツ、なんだよ。じゃあどこだ」

「ついてきて」

3人の後を着いて行くと、最上階の一番奥の部屋へ進んでいることに気が付いた。それに気づいた俺は猛然とその場から逃亡を試みるも、ガラードとペレアスに捕まって強制連行。

「離せ！マジやめろ！マジ無理！」

「まあまあそんなこと言わずに」

「無理！！本気で無理！」

「エルメスの希望だから諦めろ」

「はああ！？アイツバカじゃねーの！マジやめろ！頼むから  
ああああ！」

ズルズルと引きずられて居室に入ると、デスクの傍でセレス（キ  
口の2世）と戯れる風呂上りエルメス。引きずられてソファに放り  
投げられた俺の所にエルメスは嬉しそうに駆け寄ってきた。

「えへ。今日からまた一緒のお部屋ね」

「ええ・・・マジお前あり得ないんだけど」

「イヤ？」

「イヤです」

「どうして？」

「どうしても。ついがお前がイヤじゃねーのかよ」

「全然！」

平然と全然と言えるエルメスの神経が理解しかねる。コイツには  
学習能力つーモンはないのか。いや、そう言えばなかったな。

いやでも、軽くトラウマだとか言ってたか？言ってたよ  
な・・・あ、俺がジュノ様にトラウマ払拭しろって言ったからか  
！俺のせいか！思わぬ副作用！

「・・・お前は棺で寝ろよ？」

「なんで？」

「なんで！？　ちよ、待て、お前一緒に寝る気！？」

「折角なんだもん、当然じゃない！」

「と、当然かよ・・・」

「そつだよ。やっと会えたんだから」

100回を超える溜息をクリシュナに吹きかけて、シャンティと交代して今日の子守りを終了。案の定仕事を終えた俺には、地獄が待っている。

神様神様、これはイジメですか。風呂から上がって部屋に入ったらエルメスは持ってた本を放り投げて、嫌がる俺を無理やり寝室に連れ込むんです。暴れる俺を無理やりベッドに押し込んで、がつちりホールディングして密着して離れてくれないんです。俺もう泣きそう。

「もう、ちゃんと腕枕して」

「ええー・・・」

「いう事聞きなさい」

「・・・ハイ」

「ちゃんとカイも抱っこして」

「・・・ハイ」

「えへ、カイと寝ると落ち着く」

俺は落ち着かない。ジユノ様にニヤニヤと笑われてる方がまだ落ち着く。そうか、ユアンの言ってた準備とはこの事か。やってくれだなコノヤロー。何が応援だよ。ただの嫌がらせじゃねーか。



ハア、と溜息を吐いたらその拍子にエルメスの前髪が揺れた。何となく髪に触れなくなつてエルメスの髪を撫でると、サラサラと流れる髪は指先に心地いい。

くすぐつたがるように俺の胸に顔をうずめるエルメスに激萌えした。10年も他人のふりをしていたせいで、余計にラブが加速したようだ。

ああ、エルメスが可愛すぎる。なんでそんなに可愛いんだお前は。しかし俺はなんて残念な男なんだ。

超キスしてえ！！

イヤイヤ、落ち着こう、一旦落ち着こう。考えても見たまえよ君、10年前の君が今の君を見たらなんて言うと思うね？

「お前アタマおかしいんじゃないの。エルメスだぞ、エルメス。病院いくか？ とりあえず、脳外・精神・眼科予約しといてやつから。あと泌尿器科行って去勢しろ」

そう言うに決まってるとは思わないかね。どこで何を間違つてそうなったのかね、ん？ 確かにね、君の言う通りエルメスは可愛いと思う。優しいし楽しいしほっとけないしイジメがいもあるし健気だし、エルメスは君を喜ばせる天才だよ。エルメスのキャラクターはまさしく君にはドストライクだとは思ふよ。

だがね、君は恥ずかしくはないのかね。仮にも主人だよ、君。考えても見たまえ。10年前まで君は散々あり得ないと言いつらしていたじゃないか。それをあっさり撤回して、君は男に二言はないという言葉を知らないのかね？ 仮にもシュヴァリエの分際で守護すべき対象者に、紳士にあるまじき願望を抱くなど沙汰の外だとは思

わないかね？

うるせー！俺は紳士じゃねーよ！俺は自由人だ！自分の好きに生きて何が悪い！俺のやりたいようにやる・・・のは、やめときます。落ち着きます。おやすみなさい。ごめんなさい。男でごめんなさい。生まれてきてごめんなさい。

よかった。俺の中では優等生天使の方がよほど強い。優等生天使がメガネをキラリってさせて睨んだだけで不良悪魔は沈黙した。安心した。自分がそこまでアホじゃないことに安心した。

俺の中の天使と悪魔の大論争を知る由もないエルメスは、俺とこうしているのが本当に嬉しいのか、ニコニコしながら抱き着いている。

ああ、やっぱりエルメスの笑顔が一番好きだ。この笑顔を曇らせるようなことをしたくはねえな。

そう思うとすっかり落ち着いてしまつて、エルメスが俺の腕の中で笑顔でいることが嬉しくなった。

「エルメス」

「んー？」

「今まで、ゴメンな」

「うん、いーよ。許してあげる」

「・・・前から思ってたけど、お前ちよつと寛大過ぎねえ？」

「そんなことないよー」

「そうかあ？」

「カイだから、許してあげるの」

「・・・そーか、ありがとな」

本当にコイツは何なんだ。天才か、俺を喜ばせる天才か。エルメスは俺を喜ばせるために生まれてきたんじゃないかねえかとすら思う程だ。いや、それは激しく勘違いだけでも。

エルメスを幸せにするのが俺の仕事だ、なんて言っではいるけど、このままじゃ俺が勝手に幸せになるぞ。そこは昔から変わらないんだな。

俺にはエルメスを泣かせたり困らせたり怒らせたりしか出来ねえし、救う事も出来ないのに、俺ばかり救われて喜ばされて、エルメスを置いて俺だけ幸せになるんだ。

男のくせに情けねえな。惚れた女に幸せになってほしいのに、悲しい事だが悪魔に頼らなきゃ俺にその力量はない。ただ死を待ちながら願うしか出来ねえのか、俺は。

仮にそうだとしても、エルメスが俺が傍にすることを望むなら、そうしよう。今まで何度も誓って、その度に破ってきた。いい加減、約束を守らないと。

「エルメス、今度こそ絶対に誓う」  
「なにを？」

「絶対にどこにもいかねえから」

「うん」

「ちゃんとお前の言う事をきくから」

「うん」

「だから、お前も約束してほしい」

「なに？」

「幸せになれよ」

「・・・なんか、さよならしちゃうみたい」

「しねえよ。でも、吸血鬼だっていつかは死ぬだろ。多分俺の方が先に死ぬから、俺が生きてる間は、お前に笑ってほしいと思っただけ」

「もう、いつも大袈裟なんだから。カイが傍にいてくれたら、ずっと笑ってられるよ」

「そうか、ならいい」

「カイは私が傍にいたら笑ってられる？」

「当たり前だろ」

「そっか、じゃあ傍にいるね」

「俺も傍にいるから」

「絶対だよ。死が二人を分かつまでだよ」

「なんだそりゃ。でも、死んだらさすがにさよならだな」

「じゃあ死んでからも」

「ハハ、道連れかよ。っーかいつまでだよ」

「死ぬときは一緒だってカイが言ったんじゃない。ずっとだよ。ずーっと」

そう言えばそんな事を言った気もするけど、何につけてもエルメスは俺を喜ばせる天才だ。

やっぱりエルメスの誘惑に勝てなかった俺は、バレないようにそつとエルメスの髪にキスをした。

「どーせならおでこがいい」

「うるせー」

「ちえっケチ」

バレてた。

結局何もかも元通り。完全に元の木阿弥。俺の10年の努力と苦しみは無駄。魂を無駄に捨てる結果になっただけで、ただの徒労に終わってしまった。

でも、まあいいや。

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

エルメスはなんもわかってねえ。いや、わかってほしくないけど、自重しろ。

目を覚ますと目の前にエルメスの顔があつて、寝起き速攻ギョツとした。寝起きだったせいもあるけど、エルメスと元通りになつたことを忘れてて、他人がいたことに驚いたんだ。その時点ではな。

寝起き早々驚かされて不整脈を起こしかけた団塊ジュニア世代の俺に、エルメスはにっこり笑つた。

「おはよ」

「・・・おはよ」

「なにビックリしてんの？」

「いや、10年近く離れてたから、完全に独りに慣れてた」

「明日には二人に慣れてね」

「無茶言つな。全く、我儘なのは相変わらず・・・うおっ」

そう言いながら起き上ろうとしたら、エルメスに体を支えていた腕を払われて再びベッドに倒れこんだ。そこをすかさずエルメスク

ラッチだ。何この連続技。

倒れこんだ俺に抱き着いたエルメスをやりわり引きはがそうとするも、離れるどころか気にも留めてもらえない。

「・・・なに、どした」

「いいからいいから」

「えー、もう起きようぜ」

「やーだ。あと5分」

「ハア。つたく、しょうがねーな」

なにこれ。なんでこんなにラブラブなんだよ。俺勘違いしそうなんだけど。もう辛い。寝起きから辛い。どうしようこの子。

いや待て、恐らくコイツのこういところも原因だ。コイツが甘えてくるから、毎度毎度しょうがねえなって思って散々付き合ってきて、なんかほっとけねえいつの間にかほだされてしまったのか。んで、恐らく以前ガルフの言った通り、エルメスは俺がエルメスにお願いされたら断れないとわかった上での我儘に違いない。

リーダーシップの権化である世話好きな俺にしてみたら、「エルメスの我儘 しょうがねえから聞いてやる それなりに楽しい」という図式はいとも簡単に成立してしまう。

その事をエルメスは俺より先に気付いて我儘放題というわけか。何という事だ。この悪女、小悪魔。むしろ悪魔だお前は。

盛大に溜息を吐いて、しつこく催促するもんだからエルメスの背中に腕を回して頭を撫でてたら、行動心理学の基本に倣って段々エ

ルメスが可愛く感じてくる。そのせいで、いくらビートルズ世代とはいえ、体の時間は止まっていたのだと思知らされた。

エルメスおよび女性諸君は知っているだろうか。ぶっちゃけて言うが、男は寝起き時に女とイチャつくくと、通常時よりはるかにムラムラします。それが惚れた女なら尚更です。

たいていの場合において、寝起きはピ　　が臨戦態勢なんです。それはこっちとしても不可抗力だが、更に言つと、寝起きで頭がポ　　ーっとしてるので、比較的本能に忠実なんです。本能の奴隷に成り下がるのです。

女性諸君にはその辺をちゃんと理解してほしいものです。それで「朝っぱらから何すんのよ」とか言われても知ったこっちゃないんです。それが嫌なら男より先に起きてさっさとベッドから出なさい。勉強になったかね？

というわけで、俺は本能と言う名の悪魔と激戦を繰り広げてるわけだ。このバカのせいで戦局は劣勢だ。俺の中の崇高なる天使は満身創痍だ。俺ピンチ。むしろエルメスがピンチ。

とか思ってたらエルメスが急に起き上がって、俺の肩をたたいた。

「もう、カイ、いつまでゴロゴロしてるの？　起きるよ」

「ああ！？　誰のせいだ！　お前が甘えてくるから渋々付き合ってたったんじゃねーか！」

「だってもう五分経ったよ」



ひでえ、マジひでえコイツ。もう本当俺泣いちゃいそう。でもなにかこういうの超久しぶりだ。腹立つけどウレシイ。何この複雑な愛憎模様。

そついや俺は昔っから散々コイツに振り回されてたんだっけ、と溜息吐きながら起き上ってエルメスの支度をさせるためにランスを呼んだ。

「おはよございませーす」

「おはよー！」

「おはよ」

なぜか嬉しそうにしながら入ってきたランスにシートを持たせると、一瞬不思議そうな顔をして、すぐにニヤツと笑う。そのまま俺に近づいて耳打ちした。

「前は気にも留めなかったくせに」

「バカ違う。ジユノ様の印章が俺の背中にあるから、エルメスに見つからないようにするためだ」

「ハイハイ」

ハイハイじゃねーよ。そうなの！ 着替える時に背中向けたら、エルメスから印章丸見えになるじゃねーか。アスタロトの銘が入ってたんだから即バレするじゃねーか。

なおもニヤニヤ笑うランスはシートで目隠ししながら、エルメス

と話し始めた。

「エルメス様、元通りになってよかったですね」

「うん。本当に良かった。カイも大喜びしてるし」

「ブツ！ くくく・・・そうですね。これからは10年分の我儘しなきゃいけませんね」

「本当だね。カイも退屈してたはずだし」

「アハハハ、間違いありませんね」

チクシヨ、ムカつくぜ。ちゃんと持ってるよお前。笑うから下がってんだろコラ！ つーか何笑ってんだ腹立つ。

つーか何を言うんだエルメス。いや、そうなんだけど。なんか釈然としない。エルメスに言われることに釈然としない。お前ランスたちにも散々我儘言ってたじゃねーか。それでも飽き足らねえのか。

着替えて3人でサニタリー行って、顔拭いて出ようとしたら、エルメスがニコニコしながら腕に抱き着いてきた。

スゲエ嬉しいんだけど、容易に想像がつく。この様子を見てニヤニヤ笑うバカな会員どもの顔が容易に想像できる。既にランスはニヤニヤしてる。スゲエ嫌だ。

「ちょ、お前歩きにくい。離れる」

「やーだ」

「離れるって。ウゼえ」

「ウザくないもん」

うん、ウザくはない。確かにな。エルメスだからな。だがな、ホラあやっぱり予想通りだよ。

俺らがリビングに入って挨拶した瞬間、全員ニヤニヤだよ。腹立つ。スゲエ腹立つ。

そんな俺の気も知らないでエルメスは相変わらずベタベタ引つ付く。一体お前の何がそうさせるんだ。前はここまで甘えん坊だったか？

「おはようお二人さん。仲が良くて大変結構。久しぶりに同室になって落ち着かなかったんじゃねーの？」

「ううん、落ち着いた！ ガルフのお陰。ありがとう」

「ハツハツハ。ならよかった」

すれ違いざま、カイは落ち着かなかつただろうけどな、と視線で笑いながら通りすぎるガルフがムカつく。ソファに座ろうとすると、急にチャラ男3兄弟がやってきた。

「エルメス、ちょっとカイ借りるね」

「ええー！」

「ちょっと、ちょっとだから」

「もう、わかった」

俺の許可は？ 誰も俺の意見を聞くことなく3バカトリオにバルコニーに連れ出された。ついぞと思つて煙草に火を点けたら、案の定ニヤニヤした3人は声を揃えて聞いてきた。

『ヤツた？』

「アホか！ んなわけねーだろ。つーか開口一番ソレか」

「だって気になるじゃん」

「あの“千人斬りのアンジェロ”が手を出さないなんて、どういう事？」

「どうもこうも・・・つーか、俺そんなアダ名ついてたんか。つーかお前らソレしか聞くことないわけ？」

「ねーよ」

「ねーのかよ」

バカどもめ。やっぱりコイツらの頭ピンクで染めてやるか。コイツらにはお似合いだ。つーか誰だ、俺に変なアダ名をつけやがったのは。いくらなんでも千人も斬った覚えはねえぞ。

ハア、と溜息吐きながらエルメスに視線をやると、なんかこつちをチラチラ見ながらガロード達とキャツキヤ話している。なんだ、なんか俺の話してんのか。なんか嫌なんだけど。と思ってたら3人がニヤニヤ笑ってやがる。

「なんだよ」

「いや、良かったなと思って」

「俺らもこの10年苦労したんだからな」

「まあ、そりゃ悪かったと思ってる」

「本当かよ？ もうエルちゃん泣かせんなよ」

「わーってるよ」

「いやわかってねーな。しばらくしたらまた泣かせるだろ」

「だよな。カイはアタマかてーし」

「カタすぎ」

「はあ？ カタクねーし」

「かてーよ。ガッチガチの保守派だろ。極端だし」

「・・・仮にそうだとして、それが泣く理由にはならねえだろ」

「なるだろ。今回だってそうだったんだから。何があつたか知らねえけど、エルメスが許すつつつてるのに、勝手に自分責めて追い込んでっからこうなったんじゃねーか」

「そうそう。そんな肩ひじ張って疲れねえ？ もうちよつと気楽になれよ」

「そーだよ。逆にさあ、もう死ぬのが避けられねえなら口だけじゃなくて本当に好きに生きれば？ カイは責任とかそう言うのに縛られ過ぎ」

「うーん・・・」

実に不本意ながらコイツらのいう事はもつともだ。エルメスが許すって言うならいいか、で済ませてりゃよかったわけだ。確かにコイツらの言う通りかもなあ。

しかし俺が本気で好きに生きてたらとんでもねえ事になる。それがエルメスの幸せだからと銘打って、ジユノ様の悪魔パワー悪用すること間違いナシ。そんで身を滅ぼして、エルメスも周りも不幸にしてスゲエ嫌な死に方するんだろうな。それは嫌だな。

とりあえずエルメスの言う事きいてりゃ間違いはないだろうから、それ以外は現状維持でいいや。

「まあ、あんま極端には考えねえようにする」

「そーしろ。“まあいつか”って言葉を覚えた方がいいぞ、カイは「そーだなあ」

なんか雑誌に載ってたな。ストレス軽減する魔法の言葉「まあいっか」。事あるごとにリフレインさせてりゃ、大概の事はどうでもよくなるんだろうなあ。

煙草消してリビングに戻ると早速エルメスが引っ付いてくる。その様子は正にアレだ。室内犬が千切れんばかりに尻尾振ってまとわりつくって感じた。

しばらくほっといてたら、エルメスが俺をじっと見てることに気付いた。なぜか不服そうにして。

「なに」

「なんか、ムカつく」

「なにが」

「なんか私ばかり手の内晒してるみたいでムカつく」

「・・・意味がわかんねえんだけど」

「カイも嬉しいでしょ？ 私と仲直り出来て」

「そりゃ、まあ」

「じゃあもつと嬉しそうにしてよ」

嫌だ。いや、別にいいいいけど、それを見たバカ会員たちにニヤニヤされるのが嫌だ。とりあえず、エルメスが以前より執拗にベタベタするのが、嬉しさ爆発してるせいだったのはわかった。それは嬉しいんだけど、嫌なものは嫌です。

「十分喜びを表現してるつもりだけど」

「全然だよ！ 普通じゃん！ いつもどおりしれっとしてるじゃん

！」

「なに、俺がどうすれば満足するわけ？」

「もつとこう、エルメス好き好きーみたいな」

「ざけんな！ そんなの俺じゃねえ！ 完全にキャラ崩壊してんだる！」

「そんなわけわかんないキャラよりそつちのがいいよ」

「お前の方がわけわかんねーよ！」

「なによ、ケチ。クリシユナだったら絶対そうしてくれたのに」

もうカッチーン来ました、俺は。よりによってクリシユナさんと比較するとはどういう神経してんだ。なんでよりによってクリシユナさんを引き合いに出すんだコイツ。

エルメスが愛して、愛された男の名前が出てきたことで、俺は猛烈に腹が立って、猛烈に嫉妬した。

あまりにも腹が立って、エルメスが掴んでいた腕を乱暴に振り払って立ち上がった。エルメスは驚いた顔をして俺を見上げる。エルメスを見下ろしながら、冷たく吐き捨てる様に言った。

「テメエ、なんか勘違いしてねーか。俺はクリシユナさんじゃねーし、クリシユナさんの代わりでもねえよ。お前の人形遊びになんて、付き合ってられるか」

そう言っただけでその場から立ち去って、ガルフの部屋に逃げた。自分でも酷い事を言ったと思う。そもそも俺が悪かったんだとわかってる。でも、どうしても腹が立って、悔しくて仕方がなかった。

乱暴にドアを開けて入ってきた俺にガルフは驚いたものの、すぐ

に何かを察したのか心配顔を向けてきた。

「エルメスとケンカでもしたか？」

「いや、俺が勝手にキレた」

「何か言われたのか」

「別に。バカらしいことだ」

勝手に入室して勝手にベッドに寝転んだくせに何も言わない俺に、ガルフはそれ以上は聞かないで溜息を吐くだけ。それに少しだけ安堵して、少しずつ落ち着いてきた。

全く、ガルフは大人だな。助かるわ、ホント。それに引き換え、俺は子供だな。バカみてーだ。そもそも俺には嫉妬する資格も、エルメスを好きになる権利すらもないのに。エルメスが俺に懐いて、それに調子に乗ってこのザマだ。本当バカみてえ。

よくよく思い返してみると、エルメスが俺にクリシュナさんの影を重ねてるような節は結構あった。容姿が似てるとか、考え方が似てるとか、俺と寝るとクリシュナさんを思い出すとか言ってたなあ、そう言えば。キャラ180度違うのに。

前にエルメスは、俺は俺だと言ってくれたのに、どうしてもクリシュナさんを忘れられなくて、淋しくて、一番身近な俺に影を重ねてしまったのか。それはエルメスだってわざとじゃねえんだろーし、状況的にも仕方のない事で、責めるようなことでもなかったよな。

それとも、俺の思い過ぎしかな。だとしたら謝らなきゃいけねー



か。いや、どつちにしても謝らなきゃいけないか。エルメスが悪いわけじゃないんだから。

「フーか折角仲直りして早速ケンカなんて、俺もしかして空気読めねえタイプか。どう考えても、あそこは耐えるべきところだったな。反省せねば。いや、とりあえず謝罪が先か。」

落ち着いて思考したら考えがまとまって、ベッドからガバツと起き上ると、ガルフが気付いて顔を向けた。

「謝るのか？」

「ああ」

「本当にお前が悪いのか？」

「そーだよ」

「・・・お前がそうしたいのならそれでもいいと思うけど、嫌なことを嫌って言うのは悪じゃねえし、エルメスは話の通じる奴だろ」

「いや、エルメスに責任はない。仕方ない事を責めた俺が悪いから」

「全く、お前本当エルメスの事しか考えてねーな。フーかつくづく甘いな」

「うるせーよ。ハア、邪魔したな」

「マジで」

「・・・」

最後に軽くイラついたものの、溜息で誤魔化してガルフの部屋から出て、いざ謝罪とリビングに向かうと、既にエルメスの姿はなく、キョロキョロ見渡していると、ガラードが寄ってきた。

「エルメス泣いちゃったよー」  
「うわ、やっぱりか。エルメスは？」  
「今シャンティの部屋に泣きつきに行ってるよ」  
「そうか、わかった」  
「あ、待って！」

早速シャンティの部屋に向かおうとガードに背を向けると、慌ててガードが腕を引いて止めに入る。なんか目を泳がせながら。

「なんだよ」  
「い、今は行かない方がいいんじゃないかなーなんて」  
「なんで」  
「え？ えーと、ホラなんていうかこう、女の子同士の話って言うか、そう言うのを」  
「意味わからん。じゃーな」  
「ああ！ 待ってって！」

ガードの態度は非常に気にかかったけども、今は何よりもさっさと謝罪して仲直りが最優先。掴まれた腕を離してシャンティの部屋に向かった。

シャンティの部屋の前に到着すると、ドアの内側からすすり泣くような声が聞こえてきた。エルメスがシャンティに愚痴っている真っ最中のようだ。

終わってからにすべきか、いや、先にエルメスが謝罪してくる可

能性が高い。そうだったら俺が言いだしにくくなる。さっさと謝罪  
してしまおう。

そう考えてドアをノックしようとして手を伸ばした瞬間だった。

「シャンティのウソつきいい」

シャンティのウソつき？ それはどういうことだ。シャンティが  
何か言ったのか。意外な言葉に思わず傍耳を立てる俺。

「シャンティがクリシュナの名前出せば確実に言ったから言っ  
たのにい」

「う、ゴメンね」

「カイ怒ってた・・・私嫌われちゃったよ・・・どうしたらいいの  
！」

「ゴメンね、ゴメンね」

なんだそれは、どういうことだ。あれはシャンティの入れ知恵で  
意図して発言したって事か。

つーか確実にって何がだ。確実に怒るぞ、俺は。何が目的だ。そん  
なに俺を怒らせたいのか。その先には何があるんだ。俺の怒りの向  
こう側に何が待っているというんだ。

「ていうか、全然意味わかんないよ！なんでクリシュナが出てく  
んの！私カイをクリシュナの代わりにしたことないもん！大体  
全然似ても似つかないじゃない！人種から何から全部違うじゃん

「！」

その意見には俺も激しく同意だ。つーかやっぱエルメスはそんな風に思ってたわけじゃなかったのか。じゃあやっぱり謝罪あるのみ。つーか目的が見えない。

「だってクリシュナ様の名前出したらカイ怒るじゃん？」  
「怒ったよ!？」

そりゃ怒るぞ。

「で、カイは負けず嫌いじゃん？」  
「うん」

それが、なに？

「だから是が非でもクリシュナ様の上を行こうとするんじゃないかな、と思っただけだね」  
「あー、そういうことかあ」

どういうことだ。意味わからん。上ってなにが？ クリシュナさん以上にイチヤつけど？ そういうことか？

正直俺はクリシュナさんとエルメスの様に、他人の目をはばからずにイチヤつくのは相当抵抗あるんだけど。つーか、なんだ？ なんか意味わかんねえぞ。

「でも怒らせちゃったんだよ。すごく怒ってたの。嫌われたら意味ないじゃない」

「嫌いになるなんて絶対ありえないね。そこまで怒ってたなら効果があつたつて事よ」

「ええ？ そうかなあ」

「そーだよ。それにほつといてもあつちから謝ってくるし、勝手にカイが自分が悪いって思い込んで一件落着しちゃうつて。そんで仲直り完了だよ」

「それつて、いいのかなあ」

「いいんだつて」

いや、よくねーよ。なんだシヤンティ、お前ガルフ2号か。なんで見透かしてんだお前。つーか腹立つ。マジでシヤンティの奴腹立つ。マジ本当なんなの、俺にわざと嫌がらせして何がしたいの。俺を怒らせてどうしたいわけ。マジ腹立つ。

「シヤンティの言う通りなら、嬉しいけど。でもやつぱり、カイはそう言うの許さないとと思うの」

「そんなことないよ」

「あるよ。カイ頭堅いもん」

「まあ、確かにね」

「それに、アーサーさんだつてきつと許してくれない」

「それはわかんないじゃん。みんなエルメス様応援してるんだから、アーサー様もわかつてくれるつて」

「ありがとう。でも、裏切りなんだよ。アーサーさんの気持ち知ってるのに、アーサーさんのいないうちにカイの事好きになるなんて、私は裏切り者だよ」

全つっ力で逃走した。必死でその場から逃げて、廊下で思わず頭を抱えた。

なんか、聞こえたよな。気のせい？ 気のせい？ え、なに？  
エルメスなんつったっけ？  
なんか俺の事好きとか聞こえた気がしたけど気のせい？ だよな？  
だよな？ そうだよな。そんな事あるはずがない。あつていいはずがない。それは裏切りだ。あ、裏切りとか言ってた。イヤイヤ  
イヤイヤ。

廊下の壁に額つけてブツブツ言っていたら、背後に人の気配がした。振り返ると、苦笑するガラード。俺は多分泣きそうな顔してると思う。

「その様子だと、聞いてちゃった？」

「き、聞いてちゃった・・・」

「何その顔。喜んでいいんじゃないの？」

「いや、っーかお前知ってたの？」

「俺って言うか、みんな知ってるけど」

「マジで!？」

「まあエルメスだから。だからみんな“カイの恋を応援する会”の会員なんじゃん」

「あ、なるほど！ その為に言いふらしたのか、このヤロオオオオ  
!!!」

「ちょ、苦し！ エルメスは知らないよ！」

「・・・そか、ならいい」

ガラードの首を締め上げた手を離すと、ケホケホむせて涙目で睨

まれた。

「つーかちよい待ち。エルメスが知らないからと言っているいいはずがない。コレは由々しき事態である。この屋敷には裏切りが蔓延している。奸賊討つべし！ あ、俺も裏切り者だ。どうしよう。死ぬか？」

再び思索に耽っていたら、そこにガルフが通りかかった。すかさずガルドはガルフにチクリ初めて、それを聞いてガルフは楽しそうに笑いだした。

「ハツハツハ、だから言ったじゃねーか。エルメスに言えつてさあ」「いや、お前ね？ 知ってたなら尚更だぞ？ コレはお前許されざる裏切りだぞ」

「じゃあ聞くけど、このまま現状維持もしくはエルメスを拒絶して傷つけるのと、エルメスを受け入れて幸せにしてやるのは、どっちがエルメスにとって幸福だ？」

「う、うーん・・・いや、そりゃ現状維持が望ましいだろ。受け入れても俺すぐ死ぬじゃん。アーサーと入れ替わりでサヨナラじゃん。それはエルメスが可哀想だろ」

「バーカ。昨日ランスが言ったろ。お前とエルメスがどんな関係でも、お前が死ねば悲しむことに変わりはないんだよ。だったら短期間でも幸せにしてやれよ。それはお前にしかできないんだから」

「うえええー・・・うーん・・・いや、厳しいなあ」

「・・・このカタブツが。まあちよつとゆっくり考えなさい」

「そうします」

「で、謝罪は出来たのか？」

「・・・完全に忘れてた。ちよつと謝罪だけ言ってくる」

「ついでに告白してこい」

「するか！」

すればいいのに、面白いのになあ、と笑うお気楽バカどもはほつといて、再びシャンティの部屋の前に到着。今度はボヤボヤしないで、さっさとドアをノックした。

「シャンティー、俺。エルメスいるか？」

「ああいるよ。ホラ来た、エルメス様」

ホラ来たって腹立つ。トコトコとドアに近づく足音に、さっきの会話がリフレインしてなんか緊張した。いや、俺は何も聞いてない。俺は何も知らない。俺は謝罪しに来ただけだ。言い聞かせていたらドアが開いて、エルメスが顔を覗かせた。

「あ、エルメス、さっきは言いすぎた。ゴメン。別にお前が悪いせいじゃねーのに、なんかクリシュナさんと比較されてもどか思っ・  
・どした？」

謝罪の途中だというのに急に抱き着くエルメス。その後ろではシャンティが「ほーらやっぱりね」と言わんばかりのしたり顔だ。もしやエルメス笑いをこらえてんじゃねえかと思ってたら、離れたエルメスはおれを見上げる。

「私こそごめんね。傷つけた？」

「いや、全然。ヒドイ事言っただけ悪かった」



「ううん、ゴメンね。カイすごく怒ってたから嫌われちゃったかと思っただけ」

「まあ確かにさっきは怒ったけど、俺が悪かったし。俺がお前をキライになるはずないだろ」

「本当？」

「ああ」

好きだし。と心の中で呟いてたら、エルメスは急に俺の手を取って歩き始めた。

「エルメス？ どした？」

尋ねても振り返りもせずエルメスはどんどん歩を進めて、とうとう屋敷を出てしまった。手を引かれるまま着いて来ると、裏庭のクリシユナさんの墓の前に連れてこられた。

「カイと一緒に墓参りするの10年ぶりだね」

「あ、ああ、そうだな。つーか、どうした？」

「なんでもないの。ただ、一緒にお墓参りしてほしかっただけ」

相も変わらず不明瞭な思考回路だ。突然だし、意味わからんし。まあ墓参りはいいんだけど。

エルメスと共にクリシユナさんの墓の前に跪いて、十字を切る。

クリシユナさん、面倒なことになりました。俺はどうしたらいいんですかね。ガルフの言う事も一理あるけど、俺仮にもシユヴァリ

工なんですけど。仮にもアーサーの配下なんですけど。そう言うの  
って裏切りじゃないですかね。

いやもちろん、俺はエルメス好きですけど。あ、すみません。で  
も俺死ぬし。それってエルメス可哀想じゃないですか。クリシユナ  
さんに続いて俺まで死んだら、エルメスもさすがに辛いじゃ済ま  
れないじゃないですかね。

まあランスの言う通り、現状維持でも泣かれることに間違いはな  
いんでしょうけど。でも、それとコレとはまた違う気がするんです  
けど。

ちよつと、なんか言ってくださいよ。ヘルプミー。

物言わぬ墓石に語りかけるも、当然ながら応答なし。諦めて顔を  
上げて横を見ると、エルメスはまだ熱心に祈りを捧げていた。

長い祈りを済ませて顔を上げたエルメスは、すぐに立ち上がった  
屋敷に戻っていく。連れてきといて置き去りか、と思いつつその後  
を追いかけた。

屋敷に戻ってリビングに入ると、エルメスは足を止めて周りを見  
渡す。入って来た俺とエルメスにみんなが視線を注いで、振り返っ  
たエルメスは俺の目をじつと見つめて言った。

「好きです！ 私をカイの彼女にしてください！」

突然の先制攻撃に眩暈を覚えた俺。徐々に涙目になるエルメス。

どよめく観衆。

期待の眼差しを向けられる俺。不安を湛えた目で見つめるエルメス。段々ワクワクしだすバカども。

なぜ、こんな公衆の面前で・・・あり得ねえ。恥も外聞もないとはこのことだ。さてはコレもシャンティの入れ知恵だな。この状況で俺の逃げ道を塞いだか。

逃げ道も何も、俺はエルメスよりもずっと前からエルメスの事が本当に好きだ。好きで、好きで、その為に魂まで売り渡したんだ。嬉しくないはずないだろ。こんなに幸せなことがあっていいはずがないだろ。

心底好きな女が俺を好きだという。もう、俺は死んでもいい。返事なんか、最初から決まってるんだ。

決意した俺はエルメスに視線を向けた。エルメスの瞳に映った俺は、胸の前で腕をシュバツとクロス。

「断固拒否!!」

その瞬間、大音量の罵声と共にエルメスが泣き出したなんて、  
うまでもねえ。

シユヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

悪魔が来たりて喉笛を突かれた。

「ゲホツゲホツ！ ジュ、ジュノ様・・・痛いんですけど・・・」  
「カイさん？ あなた何度言ったらわかるんですか？ 何度私の仕事の邪魔をすれば気が済むんですか？」

「ソレ言うなら俺の魂回収するのをナシにしてくれたら考え直しますよ」

「それはできません。あなたから言いだしたことですよ。今更そんなことがまかり通るはずがないでしょう。あなたは自分の魂を捧げてでもエルメスさんを幸せにしたかったのでしょう？ これは絶好の機会だというのに、なぜそれをみすみす見逃すんです？」

「だからこそじゃないですか。天国から地獄に突き落とされたら、誰だって嫌でしょう」

「そんな事を言っつて、本当は自信がないんじゃないですか？ 死んだ前の夫よりも、アーサーよりも、エルメスさんを幸せにしてあげる自信がないんでしょう？ だから私を頼ってきた。そうでしょう？」

ジュノ様の言う通りだ。俺には自信がない。俺はいつもエルメスを泣かせてばかりで、エルメスに助けてもらえばかりで、俺が力に

なつてやったことなどない。

アーサーの様に強くもない、クリシュナさんの様に優しくもない、そんな俺がエルメスを幸せにできるはずがない。

何よりも、俺は死んでしまうんだ。これから死ぬ奴が、誰を幸せにできるっていうんだ。俺といっても、辛いだけ。

今だって、エルメスは泣いて逃げてしまった。きっと今頃追いかけてったランスが慰めてると思うけど、折角仲直りしたのに、折角同室でまた仲良く暮らせると思ったのに、それを壊したのは、俺だ。やっぱり俺はここにいるべきじゃなかったんだ。俺の甘えが招いた事態だ。もう、自分を甘やかしてはいられない。

「ジユノ様、俺、ここを出ます。だから、もう一度完全にエルメスから俺と俺に関する記憶を消去してください」

「本気で言ってるんですか？」

「はい。その方がエルメスに・・・ッ！」

突然、割り込んできたシャンティに平手打ちされた。相手は人間の女だ。勿論痛くなんか無い。でもシャンティは、悔しそうな表情の中に瞳に涙を湛えていた。

「アンタ、本当に最低だよ！ また同じ事繰り返す気か！」

「心配すんな。今度は完全に消去してもらおうから」

「・・・エルメス様、本気でカイの事好きなんだぞ」

「それも忘れるさ」

「アンタは、それでいいのかよ」

「当然だ。俺には逆立ちしたってエルメスを幸せにしてやれねえから。つーか俺もだけど、エルメスもエルメスだ。アイツ何考えてんだ。絶対にあり得ねえはずだったのに」

俺の言葉を聞いて逆上したシャンティが再び殴りかかろうとするのをレヴィが抑える。それでも、シャンティは俺に向かって叫んだ。

「そんなこともわかんねーのか！ 当たり前だろ！ 自分のこと後回しにしていつも幸せを考えて傍にいてくれて、世界一大事にしてくれる人を好きにならない奴なんかいない！ アンタはわかってないみたいだけど、エルメス様はもう昔の事で苦しんでない。笑顔を取り戻せたんだ。それは全部アンタがいたからだ。アンタがいなくなっただけで、エルメス様は知ったんだ。アンタが自分にとってどれほど重要で特別だったか。アンタのいた時間がどれほど幸福だったか。アンタのいない時間がどれほど淋しいか。心の底から傍にいて欲しいのがアンタだって、また恋をできたって、それがアンタだったことが嬉しいって、エルメス様は言ってたんだ。アンタは、エルメス様の太陽なんだよ」

泣きながらそう言ったシャンティをレヴィが宥める。とうとうシャンティまで泣かせてしまった。スマン、レヴィ。

正直、シャンティのいう事は俺的には納得いかない。俺がエルメスの為にしてやれたことなんて何も無い。ただ、傍にいただけで何の役にも立てなかった。エルメスが笑顔を取り戻したのは、アイツの強さであって俺の功績じゃない。

「俺は何もしてない。何もできなかった。エルメスがそう思ってるなら、それはエルメスが勘違いしてるだけだ」

「でも、アンタはエルメス様が泣ける場所になっただじゃねーか」

「それはただ、アイツが泣いてただけだ」

「違う。エルメス様はアタシ達の前じゃ泣かなかった。アンタだから泣けたんだよ。アンタが傍にいることに安心できたから」

「仮にそうだとしても、それ以上に俺はアイツを泣かせた。今だつてそうだ。俺はアイツを泣かせることしかできない」

「そんなことない。エルメス様言つてた。アンタが傍にいると楽しいからずっと笑つてられるつて。それはアンタもわかっているだろ。」

なあ、アンタなんで逃げるんだ。アンタだつてエルメス様の事好きなのに、何がアンタを拒絶に向かわせてるんだよ」

他の奴もそうだろうけど、シャンティは俺の言い分に納得する気はないらしい。確かに俺はエルメスが好きだし、エルメスもそうだと云ってくれたけど、だからって許されない。

「拒絶の理由？ そんなの決まってるんだろ。それが裏切りだからだ」

「それは、アーサー様につて事？」

「そうだ。俺以上にエルメスはダメだろ。俺は殺されてもいいけど、アイツはどうなるんだ。エルメスにとつてアーサーは神のような存在だ。それを裏切るなんて許されて良い事じゃない」

「普通、人は神を崇めても、神に恋する奴はいない。アーサー様がエルメス様を思うなら許してくれる」

「確かにアーサーは俺を認めてくれたがな、それは友人としてだ。」

「こんな異常事態、想定外だろうよ」

「アンタさあ、いつもエルメス様とかアーサー様ばかり言ってるけど、アンタ自体はどうしたいんだよ。責任とか立場とか忘れて考



えられねえのか？」

「そりゃあな。仮に忘れて考えたとしても、俺じゃエルメスを幸せにできない。それ以前に、忘れて良い事じゃねえ」

自分で言うのもなんだが、頑なに拒絶する俺にシャンティはいい加減辟易してきたようだ。レヴィから腕を離して、冷めた目で俺を見つめた。

「あつそう。じゃあ、もういい。そうやっていつまでもウジウジ考えて、エルメス様を不幸にしてればいい」

そう言うと踵を返したシャンティはリビングから出て行ってしまった。それを見送って溜息を吐く俺に、チャラ男3兄弟が近づいてくる。

「もー、言ったじゃん。もっと気楽に考えろって」

「ハア、あの話はこのための伏線か。それとコレとは別問題だ」

「結局エルちゃん泣かせてるじゃねーか。本当カイはダメ男だな」

「そうだな。だからこの件に関してこれ以上議論の必要はねえ」

「アンタそれでも筆頭かよ。本当にエルメスの幸せ考えてんのか？それで大事にしてるなんてちゃんちゃら可笑しいぜ。それでも男かよ」

リオの言葉に頭に血が上った。俺を睨みつけるリオに思わず掴み掛る。

「じゃあどうしろってんだよ！俺は死ぬんだぞ！俺が受け入れればエルメスは幸せだなんて欺瞞だ！そんなの今だけだ！」

「仮に短期間でも幸せにしてやりたいとは思わねーの」

「思わないわけねーだろ！でも、俺はもう・・・」

「男に生まれてきたなら、それ以外がダメでも惚れた女位は幸せにしてやんねえと男じゃねえ。アンタ責任とかアーサー様への忠誠ってばっか言ってるけど、それはエルメスよりも大事なことが。アンタにとつて、エルメスはその程度のもんなのか」

「そんなわけねえだろ！アイツは、俺が魂を捧げた女だぞ！」

「じゃあ幸せにしてやれよ。魂捧げるくらい大事なら、それほどまでに幸せを願うなら、カイの手で幸せにしてやれよ。それが責任つてもんだろ」

リオの言葉に反論できずに、静まり返るリビング。その時、カタンと音が響いた。音の方に視線を向けると、ランスとシャンティと共にリビングの入り口にエルメスが立っていて、悲しそうな視線を向けて俺の下に歩み寄ってきた。

「ねえ、今のどついうこと？魂を捧げたって、どついうこと？」

しまった。怒鳴り散らしたせいで、聞かれてしまった。尋ねながらもエルメスはその答えを知っているようで、再び瞳に涙が溢れてくる。

「ジュノ様に、魂を売った」

「・・・なんで、そんなことしたの」

「別に」

「ねえ、待って。じゃあ、カイは死んじゃうの?」

「そうだ」

「!!!・・・いつ?」

「アーサーが戻ってきたら」

「そんな・・・ヒドイ、ヒドイよ・・・」

再び泣き出したエルメスにランスが駆け寄って宥めても、落ち着く様子はない。そんな二人を見下ろしながら、諭すように言った。

「もうわかっただろ。俺は死ぬから、これ以上お前の傍にいないことに意味はない。むしろ俺が死ぬのを目の当たりにして、お前が苦しむだけだろ。だから言っただろ、俺の事は忘れろって。俺を追いかけるのは、お前の為にはならない」

俺の言葉を聞いたエルメスは少しすると涙を拭って、濡れた瞳で真つすぐに俺を見上げた。

「それは、私の為なのね?」

「・・・そうだ」

「私の幸せを願ってした事なのね?」

「そうだよ、だから・・・」

「じゃあ、期限付きでもいい。死んじゃってもいい。それでもいいから、傍にいたい。カイが傍にすることが私の幸せなの。分かるでしょ?」

「それは、わかるけど。でも、俺もお前も裏切り者だ。アーサーはどうするんだ」

俺の言葉にエルメスは俯いてしまった。エルメスだってわかってるはずなんだ。これが裏切りでしかないことを。

でも、すぐに視線を上げたエルメスは、また真っ直ぐに俺を見た。

「私は、カイが好き。カイは私とアーサーさんとどっちが大事なの？ カイは私の事好きでしょ？」

エルメスの言わんとしてることも求めてる答えもわかるが、それ以上に気になる。

「でしょ」ってどういうことだ。まさかと思って視線を斜め前に注ぐとシャンティとランスが「いつまでもウダウダ言ってるからだ。ざまあみる」と言わんばかりの顔だ。

チクショーやられた。エルメスに知られたか・・・その上で当人に交渉させに来るとは、なかなか味な真似をしてくれやがる。非常に断りにくい。完全に逃げ道遮断された。とガツクリしてたら、更に追い討ち。

いつものごとく、ジュノ様が俺の耳元で透明感のある声で囁く。

「いいんですか？ アーサーの為に逃がす魚は、今後あなたの人生で二度と出会えないほど大きくて美味ですよ。生きている間に、人生最後の自分へのご褒美だと思って、自分に素直になりなさい。ず

つと彼女を独占したいと思ってたでしょう？　みすみすこのチャンス逃す気ですか？　彼女の愛は、今間違ひなくカイさんにしか向けられていないんですよ。彼女はあなたのものですよ」

なんとという誘惑。さすがは悪魔。既に逃走経路を絶たれた俺の心臓は、マグニチュード8を超え始める。

「それとも、あなたへの想いを抱えたままアーサーの手に墮ちるエルメスさんを傍で見たいですか？　あなた、本当はエルメスさんを手に入れたくて仕方がないくせに。喉から手が出るほど欲しいくせに。本当はエルメスさんと二人で、誰も知らないところに逃げたいくせに。本当はアーサーにも誰にも渡したくなんかないくせに。それほどまでに思い煩っている女性から愛を囁かれて、逃げる理由などないでしょう？」

「・・・ジュノ様、もうわかりましたから・・・勘弁してください」  
「うふ、それでは最後にダメ押しプレゼント。これはあなたがエルメスさんを受け入れた場合の未来をシミュレートしたものです」

そう言ったジュノ様が俺の額に手のひらを当てると、途端に目の前に映像が流れ出す。

その映像を見た俺は、完っ全に吹っ切れた。アーサーのことなんかどうでもよくなった。俺の目にはもう、エルメスと、エルメスとの未来しか見えなかった。一瞬で自分の好きに生きる宣言をした俺はエルメスの手をとった。

「エルメス、愛してる！ 結婚しよう！」

180度態度を変えた俺に屋敷は騒然だ。

エルメスも超ビックリして固まっている。徐々に驚愕の渦が沈静化してくるとそれに伴ってエルメスは笑顔で頷いた。

「ふつつかものですが、よろしく願いします！」

「こちらこそ」

途端に飛び付いてきたエルメスを抱き締めると、屋敷内は万歳コールの嵐だ。

シャンティとガイドが泣き出して、相変わらずゴルフとランスはニヤニヤ笑ってるし、3兄弟に至っては踊り始めた。

ちなみにあの映像は何だったかというと、秘密だ。俺の思い出の1ページに取っておく。

とりあえず、俺がエルメスを幸せにできる確信を得るには十分すぎる代物だったとだけ言っておこう。一応言っておくがエロ動画ではない。

マジこの件に関してはジュノ様に大感謝だ。

そっからはエルメスはもうベツタリだ。クリシュナの子守りはもちろん、風呂にまでついてこようとする始末だ。だから風呂場に連れ込んで脱がそうとしたら大暴れして逃げやがった。意味わからん何がしたいんだアイツは。

あ、あれか。またトラップ仕掛けたつもりか。今更トラップが通用するか。

そのせいか、セレスの傍で本を読みながらエルメスを待っても中々部屋にやってこない。二人きりの空間ならいくらでもイチャついてやんのに、と思いながら部屋を出てエルメスを探しに行ってみたら、廊下でジユノ様に遭遇。ちょうどいい、ジユノ様に聞こう。

「エルメス知りませんか？」

「エルメスさんは・・・ああ、ペレアスさんの部屋ね」

「ナニイイイ!？」

「うふ、その調子ですよ。頑張ってくださいね」

「超頑張ります! アイツ、エルメスに指一本でも触れたらブツ殺す!」

にこやかにエールを送る大悪魔に背を向けて一直線にペレアスの部屋に駆け込んだ。ドアを開けると、エルメスとペレアスは本を大量に広げて何やら話し中だった。なんか楽しそうに。それに、イラスト。

「エルメス、お前なにしてんだ」

「ん？ 今ね、ペレアスと一般相対性理論と特殊相対性理論の事でお話してたの。ペレアスくらいしかこういうお話しできる人いないだもん。ねー？」

「ねー？ つーかカイが何してんだ。勝手に入ってきて」

「お前は黙ってる。エルメス、お前早速浮気か。そう言えばクリシユナさんも言ってたもんなあ。エルメスがフラフラするから気が気じゃないってさあ」

「そんなわけないじゃん！ 何言ってるの！ ねえ？」

「ねえ？ 俺はまだ命は惜しい」

「だからお前は黙ってる。ハア、結局俺もクリシユナさんと同じ苦悩を背負うのか。俺はこんなにお前を愛してるのに、お前は俺をほったらかして他の奴の相手してんだもんなあ」

「よく言うよ！ 私の事10年もほったらかしてたくせに！」

「だからさあ、俺は心を入れ替えたわけよ。人前だとみんなに気イ遣わせるしさあ、二人の時くらい目一杯甘やかしてやるうと思ってたのにさあ」

「え！ 本当?!」

途端に瞳を輝かせて立ち上がるエルメス。しめしめ、引つかかった。最早室内犬モードのエルメスは慌てて広げた本を片づけだす。

「ペレアス、続きました明日でいい!？」

「・・・いいけど、童話みてーだな」

「なにが？」

「なんでもない。お休み」

「うん、お休み」



呆れたような笑顔をしてエルメスを見送るペレアス。ふと俺に視線を向けると、「Good ruck!」と言った風に親指を立てた。それにニヤリ。

笑顔で駆け寄ってきたエルメスの肩を抱いて、まんまと居室へ連行。そのまま寝室に入ろうとすると、エルメスが足を止めた。

「もう寝るの?」

「お前は起きてられるだろうけど、俺は朝になると強制寝落ちするから。お前といるのが楽しすぎて、いつの間にか部屋で寝落ちしたら面倒くせえだろ」

「あ、そっかあ。エへへ」

説得に成功してベッドに座ってイチヤイチャ開始。寝落ち推定時刻まで後2時間。十分です。ありがとうございます神様、いや悪魔様。俺は今日から悪魔を崇める。

早速抱き着いてきたエルメスを抱きしめて頭をナデナデすると嬉しそうにしている。なんて可愛い奴。なんでそんなに可愛いんだお前は。なんかもうスゲー可愛いな。どうしよう。っーか俺がどうした。

エルメスは見た目はまあそこそこ可愛い方だけど、昔はそんなに可愛いとか思ったことなかったんだけどなあ。惚れた女はどんなのでも可愛く見えるという例の魔法か。

そんな事を考えながらひとしきりエルメスを愛でていると、抱き着きながらエルメスが言った。

「ねえ、カイは本当に私の事好きなの？」

その疑惑は誠に遺憾である。エルメスの為に魂まで売り渡したというのに、とんでもない言いがかりだ。

「当たり前だろ。つーかむしろその質問はそっくりお前に返す」

「えー？ 私は好きだもん」

「俺的には絶対あり得ねえと思ってたけど」

「私も前はそう思ってたけど」

「つーかみんなそう思ってたよな」

「だよ。ていうか昔のカイはヒドイよね。ジュリオさんに病院行けって言ったりアーサーさんが悪趣味って言ったり」

「あー、そう言えばそんな事言ってたな。じゃあ俺明日病院いくわ」

「なんでよ！ 撤回って言う選択肢ないの？」

「ねえなあ」

「もー！」

だって、しょうがないだろ。ビョーキなんだから。かといって治す気はないけども。でもアーサーには通院をおススメしなければ。アーサーと取り合いして勝てる気がしねえ。

とか思ってたら急に心配になってきた。

「お前さあ、もしアーサーが帰ってきて絶対許さん、別れろつったらどうする？」

「許してもらえらるまで説得する」

「それでもアーサーが折れなかったら？」

「うーん、うーん、あ、でもカイすぐ死んじやうなら問題ないじゃ

ん

「・・・そう言う問題か？」

「その点についてはね。ねえ、でも、本当に死んじゃうの？」

「死ぬなあ」

「ジユノ様に何をお願いしたの？」

「エルメスが幸せになれる様に」

「そっかあ、ありがとう。もしかしてコレもそのお願いのお陰かな」

「・・・んん？ そうなのか？ いや、でもなあ。お前がずっと前からそう思ってたならその可能性もあるけど」

「カイはいつから私の事好きだったの？」

「もうずっと。10年間」

「・・・意外に一途だね」

「俺も意外だ」

マジ意外だ。俺が誰かを好きになること自体意外だったのに。今まで誰も好きにならなかったのは、エルメスの為なんだろうか。お前はいずれ魂を捧げるほど大事な女に出会うから、その女に全身全霊傾ける、みたいな？

生涯で一人しか愛せないなんて、ギャンブルにも程があるな。もしエルメスに出会わなかったら、俺は何も知らないで死んだんだろうな。俺は前世で一体何をやらかしてそんな業を背負ったんだ。まあ、いいけど。

ふと、エルメスが離れたと思うと、微笑みながら視線を絡ませてきた。

「ねえ、私の事好き？」

「うん」

「うん、じゃなくて！」

「ああ」

「相槌じゃなくて！」

「なに、言っただけなの？」

「うん」

「じゃあ言わねー」

「んもー、ケチ！」

途端に機嫌を損ねるエルメス。面白れえコイツ。やっぱり可愛いな  
ーと思いつつながらベッドに押し倒して、キスをした。

「好きじゃなきゃ、こんなことしねえよ」

ちょっとウソ入ったけども。でも、もうエルメス以外の奴なんか  
いらぬ。今後俺の人生に、エルメス以外の女は必要ない。

何度もキスをして、深く舌を絡ませて、漏れる吐息と唇を離して  
目を開けた時の、紅潮して潤んだ瞳をしたエルメスの表情に、情欲  
を掻き立てられる。

首筋にキスをして舌を這わせると、エルメスは声を漏らして体を  
震わせた。服の裾から手を入れると、急にエルメスは大暴れ。

「ちよ、なに」

「なにっていうか、なに！？」

「なにって決まってるんだろ。セツ」

「イヤー！ 早いよ！ 気も手も早い！ なんでそんなにせっかち

なの！」

「うるせーよ。お前ちよつと黙れ。大人しくしろ」

「や、待って」

「待たねえ」

「んんっ」

うるさい口はキスで塞いで、と。服を上までたくし上げて胸を揉みだすとエルメスは更に大暴れ。

「ちよ、なんでお前暴れんの」

「もう、待ってってば！　なんでカイはいつも待ってって言うてるのに聞かないの！」

「待たねえって。ホラ手えどける」

「ヤダー！」

なんでこんなに拒絶されてんだ俺。さすがに傷つくぞ。っーか何でコイツは拒否るんだ。本当に俺の事好きなのか？　それを怪しく感じるほどの抵抗っぷりだ。

ハア、と溜息を吐いてエルメスの頬を撫でると、目を合わせてくれた。

「お前さあ、俺に抱かれないとか思わないわけ」

「いつ！　え、いや、そ、そういうことじゃないけど・・・」

「俺はお前を抱きたいんだけど」

「ええ！？」

「なにビククリしてた。当たり前だろ」

「っー・・・もうちよつと待って」

「なんで」

「私にも心の準備とか、ね？」

「バツイチが今更何言ってるんだ」

「クリシユナとはそういうの全然しなかったもん」

「ハア！？」

「ただだよ、クリシユナさん。ただ紳士だよ。信じらんねえ、ちゃんとチンチンついてる？　っーか惚れた女を前にしてよく我慢できたな。あの人やっぱ聖人だ。その聖人のせいで俺がとばかりを食らうのか、チクシヨウ。」

再び溜息を吐いて、エルメスの上からどいて横に転がってエルメスを抱きしめた。

「しよーがねーな。待っというてやるから」

「ありがとう、ごめんね」

「明日までな」

「明日！？　もうちょっと我慢できないの！？」

「無理」

「・・・」

残念ながらお預けを食らった。腹立つ。お楽しみは明日に取っしておいて、今日はエルメスと気持ちが通じた喜びを抱いて寝よう。それで我慢しというてやる。

全く、俺はなんて受容力にあふれる男なんだ。エルメスもその辺考慮してほしい。



拝啓 アーサーさん

とか言って絶対アーサーさんにこの手紙見せられない！ 見せな  
いつもりで書きます。それって書く必要ないよね？ まあいつか。

うふ、もうね、私ね、幸せ絶頂です！ あ、でもあんまり浮かれ  
るとカイ死んじゃう！ 程々に浮かれなきゃ！

自分でも、いつからそう思っていたのかはつきりしません。でも、  
確信したのはカイが記憶を消してから。

記憶がないあの人、クロの事ばかり考えて、ずっと考え続けて  
忘れられなくて、思い出の中の私はとても楽しくて、あの日に戻り  
たい、クロに会いたい、ずっとそう思っていました。

インドに来たばかりの頃、私は毎日落ち込んで、泣いてばかり  
で。カイにはすごく心配も迷惑もかけたのに、それでもずっと傍に  
いてくれた。

カイだったたくさん辛い思いをしたのに、私の為に私が寂しくな  
いように、私が怖い思いをしないように、ずっと傍にいてくれた。

カイが傍にいてくれたらとても安心できた。カイの傍にいたら、  
泣いてもいい気がした。カイの前でなら笑える気がした。実際のその



通りで、カイの傍にすることがとても楽しくて、私はカイにずっと頼って甘えてた。それが、当たり前なんだと思ってたんです。

でも、カイがいなくなつて、厳密にはいなくなつたわけじゃないけど、記憶の消えてしまった私には、いなくなつてしまつたも同然で。

淋しくて仕方なかった。辛くて苦しくて、カイが傍にいないことが不安で。もう、どうにかなつてしまひそう。

カイが他人に成りすましていた時に香つた煙草の香りに、胸が締め付けられるような郷愁を感じて、カイのいない部屋はただでさえ広いのに、余計に広く感じました。

カイは忘れろつて言ったけど、忘れられなくて、私はみんなに内緒で何度かあちこち探しに行つたんです。

イタリアやドイツやスペインやベトナム、ブータンにまで。でも、自分に記憶がないせいを探しようもなくて。

でも、3年くらい前だったかな。どうしてかなつて思つたんです。友達との別れは、今までだつて何度でもありました。吸血鬼になつた時も、日本を出る時なんて両親とすら別れてきたのに、これほどまでに引きずるのはどうしてだろうつて。

それで、気付きました。私はカイに恋をしてるんだつて。でも、それに気づいた時からずっと悩んでました。

私はまだクリシュナを愛してた方がいいんじゃないか。これは裏

切りなんじゃないか。私はきつと何十年もクリシュナの事を思い続けて苦しむんだろうと思ってたのに、あっさり次を見つけて恋をするなんて、とんだ薄情者だ、そう思ったんです。

それに、アーサーさんの事にしてもそう。アーサーさんだって私を好きになつてくれて、私の為に辛い思いをして守って、絶対帰ってくるって言ってくれたのに、私が次に恋をするべき相手はアーサーさんだって思ってたのに、裏切った。

自分について回る裏切り者のレットルに、すごく悩んで、でも氣付いてしまつてからはどうしようもなく。カイが好きで好きで会いたくて仕方がなくて、でも悩んで、辛かった。

どうしても耐えられなくて、クリシュナが生まれた後、シャンティに相談しました。そしたらシャンティはすっごく喜んでくれて、カイなら絶対私を幸せにしてくれる！間違いない！って断言してくれました。

そしてこうも言ってくれました。

「クリシュナ様は、エルメス様の事を本当に愛してらしたから、きつと喜んでくれる。だって相手はただの男じゃないんだ。エルメス様を世界一大事にして、エルメス様の為に記憶を消すほどの奴だ。それはバカだと思うけど、それほどまでにエルメス様を大事にする奴を、クリシュナ様が反対するわけないよ。クリシュナ様はエルメス様を大事にしたから、同じように大事にする奴なら、きつと大歓迎だよ」

シャンティがそう言ってくれて、そう言えば北都とクリシュナの次期旦那候補の選別基準が、私を大事にしてるかどうかだったなあって思いだして、それに、最後にクリシュナが言った「生きて、幸せになつて」って言葉を思い出して、少しだけ、罪悪は消えました。

「ただどやっぱりアーサーさんに対しての罪悪は消えなくて、ずっとどうしようって思ってたけど、程なく転機がやってきて。」

カイの記憶が戻って、すぐ傍にカイがいたってわかって、すぐ傍にずっといてくれたんだってわかって、カイに会えてどうしようもなく好きになつてしまつて、正直、アーサーさんの事を忘れてしまいたかつた。

自分でも、どうにもならなかつた。好きで、好きで。でも、せっかく会えたのにカイが私を見てくれないことが辛くて、ケンカしました。

それでシャンティに相談して、やっぱりアーサーさんを裏切つてすることに罪悪を感じて。でも、もうカイを諦めるなんてできなくて。そしたらシャンティが

「エルメス様の幸せを決めるのは、エルメス様だよ。アーサー様でもカイでもない。カイはエルメス様の幸せを心から願つてる。クリシュナ様も、勿論アーサー様もね。アタシたちだつて、二人が上手くいってくれたら凄く嬉しい。二人に幸せになつてもらえたら、アタシ達も幸せだよ。エルメス様にだつて幸せになる権利はあるんだよ。自分の幸せを願うのは、当たり前のことだよ。エルメス様は前

にアタシに言っただろ。これからは幸せになることだけを考えてって。エルメス様には、今がその時なんだよ」

そう言ってくれて、決心が付きました。あなたを裏切る決心が出来ました。それで、カイと一緒にクリシユナのお墓にいきました。そこでクリシユナに報告しました。

私、好きな人が出来たよ。その人は私を好きかはわからないけど、でも、すごく大事にしてくれるの。私はずっとこの人の傍にいたい。この人がいると、凄く幸せなの。クリシユナは、わかってくれるかな。勝手だけど、わかってくれたら嬉しい。これからカイに言うから、もし許せないなら、私の恋を成就させないで。

そう祈って、いっぱい謝りました。その後カイに告白したら、すごい勢いで拒否されました。

私の一世一代の告白を「断固拒否！」です。すごく勇気を振り絞って言ったのに、ヒドイです。本当あの人ヒドイです。

断られたことも悲しかったし、クリシユナは許してくれなかったんだって思っ、耐えられなくて泣いて逃げました。

その後をランスが追っかけてきてずっと慰めてくれてたんですけど、急に怒り出したランスが言いました。

「エルメス様、カイは本当バカなんですよ。本当どうしようもないバカなんですよ。いいですか、カイは本当はエルメス様の事をずっと前から好きなんです。本当に好きなんです。エルメス様から記

憶を消したのもそのせいです。エルメス様の事を好きになつたのを罪だと思つたからです。そのくせ、エルメス様に忘れられて泣いてたつてガードが言つてたんですよ。記憶を消しといて傍にいたのも、エルメス様から離れたくなかつたからです。本当バカですよ。バカでしょ？」

それを聞いて思わず「バカみたい」つて笑つちやいました。そして、そこにシャンティもやってきて、ランスと悪だくみ始めました。

「エルメス様！ 何とか言つてやって、あのバカに！」

「あ、シャンティさん、ちょうどいいところに。今エルメス様にカイの本心をチクつてたんです」

「おお、ランスやるね。じゃあこう言えばいい。「アンタだつて私を好きなら彼女にしなさい、これは命令よ」つて。あのバカはエルメス様に絶対服従するつてんだから、是が非でも服従させてやる」

「ああ、ソレいいですね。面白いし」

「ええ、それはちよつと・・・」

「そうと決まれば早速いきましよう」

「よし、エルメス様いくよ！」

「ええー！？」

それでリビングまで連れて行かれたら、信じられないことを聞きました。カイが私の為にジユノ様に魂を売り渡したつて。もう、目の前が真っ暗になりました。好きな人には拒絶されて、しかもその人が私の為に死んでしまうなんて、また愛した人が死んでしまうなんて、耐えられない。

でも、すぐに考えました。ただ、彼の死を待つだけでいいの？ 私はそれでいいの？ カイはそれでいいの？ 彼が死んでただ泣くだけでいいの？

うつん、いいはずがない。カイが死ぬのは決定事項。でも、例えカイが死んでしまっても、生きている間に幸せにしてほしい、カイを幸せにしてあげたい、死んでからも幸せだったと思いたい、そう思って、言いました。

そしたらすかさずジュノ様も助け船を出してくれて、ジュノ様が何か話して何かして少ししたら、カイが急に私の手を握って言うてくれたんです。

「エルメス、愛してる。結婚しよう」

すっごくビックリしました。この短時間で一体何があったんだろうって。ジュノ様は一体何をしたのか、それともあれほど頑固に拒否してたカイを、これほど転換させる程の話術を使ったのかと、ジュノ様に感動を覚えたくらいです。

心の中でカイの言葉が何度もリフレインしました。愛してる、愛してる。カイにそう言うてもらえたことが本当に本当に嬉しくて、それに、成就したって事はクリシユナが許してくれたって事かなくて思えて、それも嬉しくて、よろしくお願いしますって言ったら抱きしめてくれました。

それで浮かれて、忘れてました。カイが危険人物だって。カイのせっかちさには驚かされず。

いやまあ、別に好きだし、いいんですけど、いいんだけど、懸念すべきはカイの趣味ですよ。知ってます？ あの人の2次元の趣味、超コワイんですよ。完璧鬼畜系ですよ。それを私にも強要されたらと思うと、もう、怖い！！ あの女刑事と同じ目に遭うと思うと、怖すぎる。

まあさすがに2次元の趣味を、そのまま3次元に持って来る人はそんなにいないとは思ってますけど。

でもカイの事ですからね。婦女暴行未遂前科2犯ですからね。油断できません。

でもそれ以上に納得できないのが、あの人元神父のはずなのに、異常に慣れてるんですけど。どういことでしょうか。今度聞いてみたいと思います。

まあそんな鬼畜野郎は今寝ちゃってます。もう昼ですから。寝顔は天使です。可愛いです。起きてる時は悪魔ですけど。

カイは、一緒にいて楽しい。カッコいい。頼りになるし優しい。カイの腕に抱っこされて、頭を撫でられるのが好き。カイに怒られるのも好き。無愛想でぶつきらばうただけど、そういうところも好き。大好き。

前はそんな風に思ったことなかったのに、不思議です。自分でも不思議でなりません。10年前の私が今の私を見たら「あり得ない

い！ どうしたの？ 変なものでも食べたの？」って言うと思います。

でも、好きなんだからしょうがないです。全部好きになっちゃいましたから、もう私ノンストップです。止められるもんなら止めてみる、です。

アーサーさんが帰ってきたら、超頑張って説得してみせます。だって、カいは勿論だけど、アーサーさんだって仲良くしたいですから。

私ってズルいですよね。でも、いいですよ、別に。みんな仲良く、ラブ&ピースは人類の願いですから。

あ、私達人間じゃなかった。でも人型だから、まあいつか。

敬具



FILE - 56 Cutie Pie 「可愛い人」(前書き)

R - 18!! 18歳以下はUターンをお願いします。

FILE - 56 Cutie Pie 「可愛い人」

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

エルメスは、可愛い。

目が覚めると、目の前でエルメスがにっこり。寝起きから可愛い。昨日から恋人同士になったんだっけ、と思い出し喜びする俺の頬を撫でたエルメスは、小鳥のようなキスをして、「おはよう」と照れたように笑った。

なんとという可愛さ！ なんなのこの子！ もう、スゲエや！ 感動して思わずエルメスを抱きしめた。

もう本当なんなんだろう。願いの成就を待たずして、俺は心筋梗塞で死ぬな。間違いない。っーか死んでもいいか。とか思ってたなら、前述したように男は寝起き時に女とイチヤツry

というわけで、エルメスにキスしたら、最初は逃げ回っていた小さい舌は段々と絡まり合う。抱きしめた腕を裾からTシャツの中に侵入させて素早くブラのホックを解除して、唇を離してエルメスの上に覆いかぶさり服をたくし上げると、俺の早業にエルメスは驚愕。

「ちよ、ちよ、ちよっと」

「ハイ、手をどかしなサイ」

「待ってってば」

「無理。今日で待つのは終わりだ」

エルメスの「待って」はシカトすることにして、胸を隠していた手を押さえつけて、胸に顔を埋めた。胸のピンク色を舌で弾くと、エルメスは声を漏らしてビクツと体をのけぞらせる。それに気をよくして舐めていたら、エルメスの抵抗の手も徐々に弱まってきて、手で愛撫しながら吸い付くと、一層反応は大きくなる。

キスを少しずつ下にずらしながら、エルメスの腰を浮かせてショートパンツと下着を一瞬で撤去。慌てて閉じようとする足の間に足を挟んで無理やり開かせると、さすがにエルメスは嫌がりだす。

「もう、や、ダメってば」

「ダメって言う割には濡れてるじゃねーか」

「だって、カイが・・・んんっ」

「俺が、なに」

「や、あっ・・・だって、やっ」

「なに、もう喋る余裕もねーのか」

「んっ、はあっ、んん」

指先で弄り始めると、既に濡れているのにエルメスが敏感に反応して声を漏らすたびにどんどん溢れてくる。顔を隠すようにしていた手をどけて、キスしながらナカに指を入れると、塞がれた口から一層声を漏らして反応した。

オヤオヤ、これは処女膜ですかね。さすがに再生してるだろうし、吸血鬼なら破れても即再生。なるほど、永遠の処女ってそういうことか、と一人納得しつつ指の本数を増やししながらエルメスの反応の強い場所をしつこく掻き回す。

少しすると、エルメスが俺の肩をギュッと握りしめて、ビクビクッと体を震わせた。

「あつ、やつ、あああつ！・・・はあ、はあ」

「メチャクチャ濡れてるぞ。そんなに気持ちよかったか？」

「はあ、もう、カイのバカ」

この際バカでもなんでもいい。力尽きたエルメスを見下ろしながら指を舐めて笑うと、エルメスは顔を真っ赤にして涙目で見上げる。可愛い。超可愛い。

「もう、待ってって言うてるのに、なんでするの」

「はいはい、もう一回な」

「ヤダ、もう、待って、ダメって・・・あつ！」

だからお前の「待って」はシカトだ。感じてるエルメスが可愛くて、そういうエルメスを見たくて、そこから回くらいイカせると既にシーツもビショビショ。カイさん、もういいでしょう。

「お願い、もう、やめて」

「ダメ」

「あ、あつ、んんっ！」

「ハイ7回目。お前エロいな」

「はぁ、はぁ、違うもん」

「気持ちいいくせに」

「違うもん」

「ハハ、今からもっと気持ちよくしてやるから、安心しろ」

「やだ、なに・・・やあつ！」

服を脱いでエルメスの中にゆっくり沈めると、エルメスは俺の首に腕を回してギュツと抱き着いてくる。メチャクチャ気持ちいいし、エルメスはスゲー可愛い。

ああ、俺はなんて幸せなんだ。今なら死んでもいいな。腹上死つてもアリだな、とかアホなことを考えた。

エルメスが可愛い、愛しい、エルメスとこういうことをできるのが幸せだ。他の女とは違う、愛した女は全然違う。初めて感じる、悦び。

アーサーへの裏切りだとか、背徳だなんてもう、どうでもいい。俺の腕の中にエルメスがいることが幸せだ。俺の腕の中でしか見せないエルメスの表情も、声も、仕草も、唇も、髪も、臍も、心も、全部俺のモノだ。

俺だけの、最愛の可愛い恋人。

「　　っ、はあ、エルメス、愛してる」  
「んっ、私も、愛してる」

軀を重ねて、言葉を重ねて、唇を重ねて、心も重なった。可愛いエルメスと、エルメスとの愛のあるセックスに、完全に虜になった。

「カイー、ティッシュー」

「ハイハイ・・・おお、危ねえ。ラストじゃん」

「使い切るとかどんだけ!？」

「お前がな」

「いや、カイだよ!」

「しょーがねーだろ。俺はお前の誘惑に勝てる気がしない」

「私のせいなの?」

「そう。もうマジお前サイコーだわ。ごちそうさま」

「・・・なんかすごい嫌なんだけど」

「他の奴とヤツたらお前とソイツ殺して俺も死ぬからな」

「そんな心配無用です! バカじゃないの!」

「どーだかね。お前防御力低いし、そんだけ可愛・・・イヤ」

「今可愛いつて言おうとしたでしょ?」

「別に」

「もう、カイってばすぐ照れるんだから」

「照れてねえ」

「素直じゃないなあ」

絶倫の限界に挑戦しようと思ってたけど、ティッシュにストップ

をかけられてあえなく挫折。まんまとエルメスをご馳走になった俺は、ラブが止まらない状態に陥ってしまった。

もう、存在が可愛い。何しても可愛く見える。何もしてなくても可愛い。そんな可愛いエルメスを抱きしめて、髪を撫でるとエルメスも嬉しそうだ。

「エルメス、可愛い。愛してる」

「えへ、私も愛してる。やっぱり素直が一番よ」

「うるせえ。あ、俺に抱かれんの、気持ちよかっただろ」

「ええ、うう、うーん……」

「お前こそ素直じゃねーな。あんなに気持ちよさそうにしてたくせに」

「う、うるさいよ」

「まあいいけど。これから調教するから」

「ええ!?!」

「お前調教しがいがあるな。楽しみだ」

「ええ、やだ……」

「そう言ったられんのも今の内だな」

「もう……」

不服そうにしてるのは口先だけで、抱き着いてくるエルメスはニコニコしてる。あーマジ幸せ。俺って三國一の幸せ者だ。

そう、幸せだから、俺は絶対誰にもエルメスを渡さん。指一本触れさせない。コイツは俺のモノだ。ちよっかいかける奴が現れたら、全身全霊をかけてブツ殺す。アーサーは……うーん、頑張る。頑張って説得する。

いや、説得できなくてもいいか。世界中の全てが認めてくれなく

ても、エルメスが俺を好きならそれでいいか。少なくともその間、俺が死ぬまではエルメスの彼氏の玉座は誰にも譲らん。

エルメスの絶対彼氏宣言を心の中で済ませて、服を着て二人で風呂に入ってからリビングに行く、全員にニヤリとされた。そのニヤリ集団の中から、ペレアスがニヤニヤしながら尋ねてきた。

「もう12時回ってるけど。二人とも、こんな時間まで何してたわけ？」

「なにつて、そりゃ勿論セツグフツ！・・・おま、何も殴る事ねーだろ・・・」

「うるさい！もう、バカ！」

エルメスにボディブローされて、脇腹をおさえてエルメスを見るとプイと怒ったようにそっぽを向かれた。

それすらも可愛い。なんなのお前。やることなすこと可愛い。つか俺が何なの。重症じゃねーか。やっぱ病院行くか。

ご機嫌を損ねたエルメスの傍にシャンティが寄ってきて、エルメスに何か耳打ちすると、途端にエルメスは顔を真っ赤にして悶えだした。一体どうした。

「なんだ？」

「・・・」



聞いてもエルメスが答えないので、聞く相手をシャンティにチェンジ。

「どした」

「いや、カイ達が遅いからランスが呼びに行ったら、途中でエルメス様の声が聞こえてきたって言って、今落ち込んでる」

それを聞いて思わず吹き出した俺とは対照的に、エルメスはヘコんでる。つーかやっぱランスもまだエルメスのこと好きだったのかなーと思い至って、ちよつと申し訳ない気もした。しかし、譲ってやる気はさらさらないので、頑張って失恋を乗り越えてもらおうとしよう。

しばらくしたらお仕事タイムだと思って、バルコニーで夜空を見上げながら煙草吸ってたら、ランスがやってきた。

「この悪党。手え早すぎ」

「なんだ、お前嫉妬してんのか」

「そうじゃないけど」

「お前、まだエルメスが好きか？」

「・・・」

「言っとくけど、謝らねえぞ」

「謝ってほしくもないね」

「ハハ、どうしても諦められなかったら、俺から奪い取れば？」

「気が向いたらね。でも、いいや。エルメス様は幸せそうだから」

「そーか」

ランスは優しい男だな。ランスに思われてるエルメスは幸せ者だ。俺が死んだ後もランスがいるならヘーキか、と安心してしまった。

「俺が死んだら、頼んだぞ」

「言われなくてもわかってるから、さつさと死ね」

「お前・・・ホント可愛くねーガキだな」

「可愛くなくて結構だから死ねば」

ムカつくガキだ。何笑ってんだコノヤロー。昔は俺に死ぬなってピーピー泣いてたくせに。あの時のランスは可愛かったというのに。今のランスは可愛くねえ、腹立つ。やっぱりコイツはムカつくガキだ。イライラしていたら、ニヤニヤしていたランスは急に思いついたような顔をして、再びニヤニヤしだした。

「さつきエルメス様に聞かれたから答えといたよ」  
「なにを」

「神父だったはずのカイが女の扱いに慣れてる理由」

「ハア！？ おま、お前なんで言うの！？」

「エルメス様の質問に答えないわけにはいかないじゃん」

そう言ってニヤニヤ笑うランス。コノヤロー、仕返しか。やっぱり腹立つコイツ！

すぐさまエルメスの様子を覗き見ると、目が合った瞬間にムツと

してブイツとそっぽ向かれた。やっべー、怒ってる。どうしよう。  
一先ず謝罪と弁明をと、ニヤニヤ笑うランスに舌打ちしてリビングに戻る、シャンティに呼び止められた。

「クリシュナ一応寝かしつけてきたし、アタシ寝るからよろしく  
「あ、お、おう」

タイミング悪くお仕事タイム開始……。クリシュナを1人ほつとくわけにもいかず、そのままリビングを抜けて子供部屋に行った。

クリシュナに溜め息を吹き付けながら反省文を草案。

昔の事だし関係ねーだろ、これは完全に開き直りだな。今はお前だけ、なんか俺が言うと胡散臭い気がする。なぜだ。じゃあもうひたすら謝罪と土下座？ でも今は悪いことしてねーしなあ。

悶々と考えていると、ゆっくり開いたドアからエルメスが入ってきて、俺の隣に腰を下ろした。

「カイって、昔から危険人物だったのね」  
「……すいません」

溜息をつきながらそう言ったエルメスに思わず謝罪。

「勿論私は別格だよな？」

「当たり前だろ。お前の事はちゃんと……まあ、好きだし」  
「……もうちょっとサラッと行ってほしいんだけど。まあいいや、  
じゃあ許してあげる」

その言葉に思わずエルメスを見つめたら、エルメスはにこっと笑った。

「許すしかないじゃない。それ以前に責めるようなことじゃないよね、昔の事なんだし。それにランスが言ったの。その話をガルフから聞いたって。カイは付き合った人達の事覚えてなかったから。でも、私の事は10年も想っててくれて、私の為に魂まで捧げて、いつだって私の事考えてくれてるから、それで充分。充分愛されてるって、わかるから」

それを聞いて、俺ってエルメスに愛されてるんだな、と初めて実感した。俺の愛をエルメスが分かってくれて、エルメスも俺を愛してくれて、それだけで十分だ。他に必要な物なんて何も無い。

エルメスの言葉が嬉しくてエルメスを抱きしめたら、エルメスも腕を回して抱きしめ返してくれる。

「エルメス、俺、本当にお前を愛してる。今までも、これからも、お前一人だけ」

「知ってる。今まではともかく、これからは確実だしね」

「ああ、確かに」

これから死ぬのに、エルメス以外愛せるはずない。当然と言えば当然だ。それでエルメスが安心できるならいいか。俺が死ぬ事もマイン要素だけじゃなかったか、と妙な安心を覚えた。

シャンティと交代して、俺達は寝る時間。ベッドでエルメスを抱きしめながら気になっていたことを聞いた。

「なあ、お前はさ、俺が死ぬ事はどう思ってたんだ？」

その事に関して、エルメスは何も言わない。何も言わないけど、辛いはず。また辛さを一人で抱え込んでるんじゃないかと心配になつて聞いた。

その質問を受けたエルメスは少し体を離して、悲しそうに微笑んだ。

「そんなの、イヤに決まってるよ。私、カイのこと本当に好きなんだよ。それなのにいつか死んじゃうなんて、あんまりだよ。クリシユナも、カイも、私が愛した人はみんな死んじゃうのかなって思つて、凄く悲しい。でも、それがわかってるから、カイの事本当に大事にしてあげられると思うの。カイに幸せにしてほしいし、カイを幸せにしてあげたいよ。カイが死んじゃってから、もっとこうすればよかったって後悔しなくて済むように」

エルメスの考え方は、本当に尊敬に値する。エルメスは自分の考え方はクリシユナさんにすごく影響を受けたんだと言っていた。エルメスにも、クリシユナさんにも感謝しなければ。

できれば、俺もクリシユナさんの様にエルメスに何かを遺してやりたいけど、今はまだ無理だから、これから過ごす中で考えよう。

「お前スゲエな。そんな風に思えて。俺は幸せモンだな」

「えへへ、そう？ 嬉しい」

「でもお前バカなこと考えるなよ」

「え？ あ、心配しないで。カイに死なれたくない余りに自分から不幸になるうとかは思わないから。カイが魂まで捧げて私を幸せにしてくれようとしたのに、それを無駄にするような事、しないよ」

「そうか、ならいい」

「ねえ、カイは死ぬのは怖くないの？」

「前は怖くなかったけど、今は怖い」

「どうして？」

「お前と離れたくないから。ずっとお前の傍にいたいけど、それができないことが怖い」

「私も離れたくないよ。でも、避けられないことなんだよね」

「そうだ」

「じゃあ、生きてる間にいっぱい思い出作ろうね。いっぱい遊んでいっぱい笑って、すっごく幸せに過ごすの。そしたら、別れの時が来た時にきつとこう言えるよ」

「なんて？」

「楽しかったよ。幸せだった。カイに出会えて本当に良かった。生まれ変わったらまた会おうねって」

「・・・本当お前すげえな」

「カイも、あー疲れた。でも楽しかった。またなって言って死ねたら、幸せじゃない？」

「ハハ、最高だな、ソレ」  
「でしょ?」

エルメスは、半端ない。恐怖の対象でしかない死すらも、幸せに変換できるという猛者だ。エルメスの前では、死神すらもピエロ。

エルメスは可愛い。優しい。強い。そんな女に出会って、愛して愛されたことが幸福で仕方がない。

俺の今までの人生は、全てエルメスと出会ったための布石だったに違いない。今まで誰にも注がなかったものを、全てエルメスに注ごう。

俺の魂を懸けて、エルメスを大事にして愛そう。死ぬときに、後悔しないように。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

失くした物がまた一つ、帰ってきた。

「ハイ、やっとカイに返せた。もう二度と外さないでね」  
「ああ」

エルメスが箱を開けて取り出したのは、シュヴァリエ筆頭の証のシルバーに黒フェースの腕時計。それを受け取って腕に着けると、エルメスにはこっと笑う。

「嬉しいな。やっぱりその時計はカイの腕になきゃダメだよ」  
「そうだな。もう外さねえよ」

嬉しそうにしているエルメスの頭を時計をつけた腕で撫でると、更に嬉しそうにして撫でられている。可愛い。ふと、エルメスはいついたような顔をした。



「ねえ、前にランスが言ってたんだけど、ウサギの持ち物は時計だけでもいいって、どういう意味？ ウサギってなーに？」

超懐かしい。そう言えばそんな話題があつた気がした。時計が戻ってきて、シュヴァリエ筆頭に戻って、俺はウサギにも戻ったのか。エルメスに記憶が戻ってから手に入った物が多すぎて、整理が追い付かぬーな。

「ああ、前にランスがな、俺はエルメスを幸福に導くアリスの白兔だとかなんとか言ってる。アリスに出てくる白兔は時間気にしてよく時計見てるだろ」

「ああ！ そういうことかあ。なるほどお。でも、カイはあんまりウサギっぽくない」

「確かにな」

「キャラ的にはチエシヤ猫の方が合ってるよ」

「そうだな。俺はウソつきだし、ずっとお前騙してたしなあ」

「本当だよ。今もカイに騙されてるし」

「それはどういう意味だ」

「そう言う意味」

どういう意味だ。俺を好きになつたのは間違いだつたとしても言いてーのか。俺が誑かしたとでも言いてーのか。なんかいたずらっぽく笑ってるけども。

「へえ、お前そう言う事言うんだ。悪女のくせに」

「誰が悪女よ!? カイには言われたくないよ、この悪党!」

「この俺が悪党? どこが? 完璧慈善家だろ。鋭意ボランティア活動中だ」

「それはどういう意味?」

「そう言う意味だ」

「ヒドイ!」

途端に機嫌を損ねるエルメス。相変わらずイジメがいがあって面白い女。つーか先に言いだしたのはお前じゃなかったか? 憤慨するエルメスにニヤニヤ笑って、頭を撫でる。

「本気で俺がヒドイ奴だと思う?」

「思わないけど」

「だろ? じゃあなんも問題ねえな」

「全然釈然としないんだけど」

「俺はお前の為に魂まで売り渡してんのに?」

「・・・そうですね」

エルメスは怪訝そうな眼をしたまま黙り込む。恐らく内心「そんなの頼んだ覚ええないし! 自分でやったんじゃん! 私のせいみたいに言っで!」とか思っただろうが、さすがに口に出すのははばかられるようだ。俺的にはどうでもいいけど。

「お前とこうしてられるのも、ジユノ様と契約したおかげだ」

「どういうこと?」

「ジユノ様に魂を売り渡して契約しなかったら、多分俺は一生お前

への気持ちに気付かなかったから」

「私から言っても？」

「誰に言われても。ジユノ様に何を言われても絶対折れなかっただろっし、拒否し続けてたと思う」

「でも、魂売り渡した後に気付いたなら、辛かったんじゃない？」

「まーな。でも、そんなぐらいの価値はある」

「・・・昔は私の事大した女じゃないって言ってたのに」

「今でも大したことねーよ」

「もう、どっちなの！？」

「ハハハハハ」

俺の言葉一つで百面相するエルメスは面白い。相変わらず俺はウソつきで、相変わらずエルメスは俺の言葉に騙される。

本当は何よりも大事で、何よりも価値のある女だけど、それを言ったらなんか負けた気がする。なんかわからんけど、言いたくねえから言わねえ。

そんな楽しいロゲンカより、今日は予定があったのだ。エルメスには言っただけでなかったけど。憤慨して溜息を吐いて、エルメスが少し落ち着いてきたのを見計らって誘った。

「エルメス、今からデートしようか」

「え？ 本当？」

「ああ」

「えー！ 嬉しいー！ 急にどうしたの？」

「たくさん思い出作るんだろ？」

「うん！ じゃあちよっと待ってて、出かける支度するー！」

「泊まりで行くから、1泊分の荷物用意しろ」  
「うん！」

15分くらい待たされて、小さなスーツケースを抱えたエルメスと2人でリビングに降りていくと、ちょうどガラードが出てきた。

「おう、俺らでかけてくるから。明日には戻る」

「えー？ デート？」

「うん！ お土産買ってくるね」

「いーなー、俺も行きたい」

「ダメー！ 水入らずなの！」

「あはは、冗談だよ。いつてらっしやい」

「ああ。クリシユナの面倒頼むぞ」

「わかった。気をつけてね」

「うん、お留守番よろしくね」

「はいはい」

屋敷を出てガレージに停まっている数台の車の中から、新品のBMW7シリーズに乗り込むと、エルメスは大はしゃぎ。後部座席に荷物を放り投げて助手席に座ると、ワクワクしながら尋ねてくる。

「ウチこんな車あったっけ？」

「俺とお前用に一昨日買った」

「キヤー！ 私とデートするために？」

「YES！」

「もう、カイってばなんでそんなにカッコイイの？」

「生まれつき」

エルメスの俺を見る視線が熱い。どうやら俺に惚れ直したようだ。さすが俺。やることなすこと二枚目。

つーか本当の事言つと、ベトナムで買った車をブータンに放置してきたことを最近思い出して、あ、イツケネって思ったただけだ。

ま、でもこれからエルメスと思い出作りは沢山していきたいし、エルメスは俺とドライブするの好きみたいだから、とりあえず俺ら用に買ってみた。

屋敷を出てしばらく浮かれていたエルメスは、その時ちょっと困っていた俺を助けてくれた。

「ハイ、火」

「お、サンキュ。お前気が利くな」

「えへへ、でしょ？」

煙草を取り出したのはいいけど、ライターを忘れたようで困ってたらエルメスがパチンと指を鳴らして火を出してくれた。コイツ本当便利。そして気が利く。マジ嫁に欲しい。

フツと火を消したエルメスは、運転中だと言つのに俺の腕を揺さぶって尋ねる。

「ねーねーどこ行くの？」

「ちよ、お前運転中はやめろ。危ねーから」

「ねーねーどこ行くの?」

俺の静止はシカトだ。俺が返事をするまでやめる気はないらしい。また事故りかけたらどうすんだ。その辺考える気はないのか。

渋々溜息を吐いて、俺の方が先に折れることにした。

「・・・ジャイプル」

「どこそこ?」

「デリーの南あたりか」

「遠くない?」

「だから泊まりなんだろう」

「あ、そっかあ。でもどうしてジャイプル?」

「ジャイプルの名産品に用がある」

「なに?」

「着いてからのお楽しみ」

「お楽しみかあ。なんだろう?」

ジャイプルでのお楽しみが何か考えるのに夢中なようなエルメス時々思いついたような顔をしては不正解を連発して落胆している。俺的には今言い当てられたらつまらないわけなんだけど、その辺考慮する気はないようだ。実にマイペースだ。

正解を中々出せないせいで、エルメスの思考はどんどん得体のしれないものになっていく。

「ねーねー、ジャイプルってどんな街なの?」

「確かヒンドウーの戦士の砦だったとか何とか。マハーラージャールの城がある街」

「ううん、てことは、わかった！ お城だ！」

「観光位はいくけど」

「え？ 買わないの？」

「買えるか！ つーかいらねえよ！」

「そっかあ、残念」

その残念は、不正解だったことになのか、城を買えないことになのか。相変わらず何を考えているのか、俺には生涯コイツの思考は読めないんだろう。

エルメスは城が欲しいのか？ 何故？ だとしたらとんでもなく金のかかる女だ。文化遺産レベルの物を要求するとは、相変わらずのかぐや姫だ。嫁にするにはハイリスクだ。

うっかりノリで結婚してくれとか言ったのはちよつと早まったな。つーか別にその必要ないよな。よく考えたら、その場合俺が死んだらエルメスはバツ2と。まあいいか。千人斬りよりはバツ2のがまだマシだ。

結構長い事車を走らせて、到着したのは既に深夜。戦士の街ジャイプル、別名“ピンクシティ”。城壁や王宮の土壁が薄いピンク色をしていることからそう呼ばれるらしい。

城門をくぐって旧市街へ。城壁の内側にある旧市街は、かつての王朝時代の名残を遺した古い城や宮殿がいくつもある。

「ふおおー、すごい。凝ったお城ー」

ホテルまでの道すがら通りかかった宮殿に見惚れるエルメス。急に車を止めると言い出して、停めてやると即降りて宮殿に走っていった。

昼間は人通りも多いであろう観光名所「風の王宮」も、深夜は道行く人は数少ないし、中に入れるはずもない。

明日の夕方観光に行くつつつてるのに、聞かずに宮殿の外観を堪能するエルメスが楽しそうだったので、そのままほっとくことにして車に戻ろうとしたら腕を掴まれた。

「もう！　なんで一人で戻ろうとすんの！」

「ええ？　俺は車で待ってっから」

「私一人で思い出づくりしても意味ないの！　カイも一緒にいなきやダメ！」

それを言われたら確かにそうだ。しかし懸念すべきは、買ったばかりの車を路駐して盗難されないか心配だ。鍵かけてりゃ平気だろうけど。

結局エルメスの言い分に勝てなくて、エルメスが満足するまで王宮観光に付き合っ、車に戻った。盗られてなくて安心した。

少し車を走らせて丘の上の予約しておいたサモード・パレスというホテルに到着。そのホテルにエルメスは再び感動してくれたようだ。

「うわぁ、すごい！　ここって宮殿！？」

「らしいぞ」

「うわぁ、すごいこの壁画！　モザイク画っていうのかな、すごい」



「い！ 博物館みたい！」

「わかったわかった。夜中なんだから騒ぐな。チェックインするぞ」  
「うん」

花の咲き乱れる中庭を通る回廊を渡り、ムガル建築の意匠を随所に施された美しい建築に目を奪われながらフロントへたどり着くと、ターバンでヒゲのおっさんがつこり。

「いらつしゃいませ。ご予約のお客様でしょうか？」

「ああ、遅くなってすいません。予約のカイ・ペンドラゴンです」  
「ペンドラゴンご夫妻様ですね。最上階のロイヤルスイートになります」

「ありがとうございます。ホラ、いくぞ」

俺の背後でポケットとつつ立ってたエルメスの手を引いて、ターバンおじさんの案内について部屋に入ると、エルメスは再びハイテンション。

「わあ、綺麗！ 天蓋つきのベッド！ テラスもあるー！ もー、カイ！ ありがとう！」

「どーいたしました」

こんだけ喜んでもらえたら誘った甲斐があるってもんだ。エルメスの正直な性格は宝だな。俺も嬉しい。

ハイテンションエルメスはテラスから見える景色を堪能したり、

風呂場や色んな部屋を覗いたり、建築様式に感動したりして忙しい。

「もしかしてお前建築とか好き？」

「知らなかったの!？」

「知らなかったけど」

「知っててここにしたのかと思った」

「いや、知らなかった」

「私高校は建築科だったんだよ。お父さんが建築士だから」

「そうなのか。どうりで庭作りとかインテリアとか好きなのか」

「そうだよ」

「へえ、なるほどねえ。じゃあ風呂入ってから宮殿探検でもするか」

「うん!」

風呂から出てエルメスと二人宮殿探検。館内は迷路のように入り組んで、次から次へと意匠を凝らした装飾が目飛び込んでくる。

若草色の回廊、褐色の大広間、細密画に彩られた謁見の間、それらに夜中だというのにエルメス大はしゃぎ。静かにしなさい。

迷路のような回廊に、迷子にならないように手を繋いでやると、エルメスは更に大喜び。デートしようって誘ってから、エルメスはずっとニコニコしている。本当にエルメスは喜んでくれているようで、俺もそれに嬉しくなった。

エルメスを喜ばせてあげられることが嬉しい。もしかして、シャントイの言った通り、本当に俺がエルメスの笑顔を取り戻せたのか。俺が? そうなら、嬉しい。

こんだけ喜んでくれるなら、銀行から金盗んで城買ってやるか、とかアホなことを考えた。

部屋に戻っても、俺が大いに甘やかしてやったお陰でエルメスは上機嫌だ。ここまで喜ばせてやったんだから、今度は俺の思い出づくりに付き合ってもらおうとしよう。

「エルメス」

「んー？」

「おいで」

「うん」

テラスに出ていたエルメスに呼びかけると、すぐに返事をしてソファの所までやってきた。隣に座ったエルメスは、すぐに抱き着いてきた。

「カイ、本当にありがとう。なんか今日だけですっごい感動しちゃった」

「まだ明日もあるんだけど」

「私こんなに喜ばされたら、カイすぐ死んじゃう」

「ハハハ、まさしく本望だな」

「もー、冗談じゃないのに」

エルメスを俺の手で幸せにできて、ソレで死ねるなら本望だ。今は本気でそう思う。やっぱみんなの説得に応じて、エルメスを受け入れて正解だったな。俺も幸せだ。というわけで。

「俺とデートすんの楽しい？」

「うん、楽しい！」

「じゃあ俺も愉しませろ」

「う？ うん」

エルメスにキスをして舌を絡ませたら、最初は戸惑っていた舌も深く絡まり始める。何度も何度も深くキスして唇を離すと、エルメスが潤んだ瞳で俺を見上げた。

「ベッドいくか？」

「・・・うん」

YES!! 調教の成果が表れてきた！ 思わずガッツポーズしそつになる衝動を抑えつつエルメスと寝室に入って、俺も初デートの思い出づくりができた。

気付けばもうすぐ夜明け。そろそろ寝る支度しなきゃなーとベッドから起き上がって、荷物を漁って暗幕を取り出していると、エルメスはなんか残念そつな顔をしている。

「カイも太陽平気になればいいのに。そしたら一緒にいられる時間もっと増えるのに」

「つつてもなあ、俺は血統としては血が薄い方だしなあ。アーサーやお前ほどのレベルになる為に、何人喰えばいいんだっつー話だ」

「だよねえ。アーサーさんもクリシュナも戦時中だったからできたって言ってたし」

「うーん、そうなら俺もいいんだけど・・・あ、そうか、その手があった!」

思いついた俺は不思議そうに首を傾げるエルメスを無視して、すくぐに心の中で語りかけた。

「ジユノ様! ジユノ様! ジユノ様って! どうせ見てるんでしょ!」

「はい、見てたし聞いてました」

語りかけに応じてくれたジユノ様が急に目の前に姿を現して、エルメスは驚いてシートに潜った。

「やだ、ジユノ様なんで・・・」

「カイさんが呼んだからですよ」

「あー、エルメス気にすんな。どうせいつも覗かれてるから」

「そうなの!? いやあああ!」

「まあ気にすんな」

「・・・気になるよお」

「もう手遅れ。時にジユノ様、聞いてたんですよ?」

困ったように顔を隠してシートに潜ったもぐらエルメスはほっといてジユノ様に向くと、やれやれと言った風に溜息を吐く。

「聞いてました。エルメスさんはそれが望みなんですね？」  
「ええ。そう言う事なんで、オーダーは「太陽に負けない俺」で」  
「はあ、わかりました」

溜息を吐いたジユノ様が俺の胸に手を置くと、ドクン、と心臓が脈打って、体中の血が沸き立つような感覚がした。

体にも見た目にも変化はないけど、体の中に流れる感覚が以前とははつきりと違つとわかる。血液の流れるスピードが変わつてしまつたかのような感覚。

「朝になればわかるでしょう。ああ、その前に強制寝落ちもしなくなっているはずですからわかりますね。用件はこれだけでしょうか？」

「はい、マジありがとうございます」

「全く、私をここまでコキ使つたのはあなたくらいです」

「ハハハ、光栄です」

「まあ、他人の幸せを願う人間なんて今までいませんでしたからね。では、ご機嫌よう」

幾分か不機嫌そうではあったけども、そう言つたジユノ様は寢室から消失した。変わった感覚に浮かれながらベッドに視線をやると、シーツの隙間からピョコつとエルメスが顔を出した。

「ジユノ様帰つたの？」

「ああ」

「ジユノ様本当に見てるの？」

「現に見てたから今来たんだろ」

「・・・最悪」

「悪魔にしてみたらどうでもいい事だろ。今更だし」

「まあ、確かに今更だけど、カイはよく耐えられるね？」

「慣れた」

「・・・そう」

「お前も慣れる」

「うう・・・やだ」

折角の調教の成果がジユノ様の覗き趣味のせいでパアになりそう  
だ。まあ、それは今度何とか頑張るとして、それよりも「太陽に負  
けない俺」を体感したくて仕方がない。朝が待ち遠しいなんて吸血  
鬼になって初だ。

落ち込むエルメスをよそに浮かれて朝を待つ俺の前に、太陽が徐  
々に顔を覗かせはじめ。差し込んできた曙光は、部屋のモザイク  
画にはめ込まれた鏡に乱反射して部屋を万華鏡のように照らし始め  
る。

その様相にエルメスも顔を上げて、二人で煌めく部屋と朝日を眺  
めた。

徐々によってくる俺達の天敵は、その明るく眩しい光を強烈に照  
射し始める。眠くはならない。もしかして本当にイケるのか、そう  
思っていたら、光の筋が顔を照らした。

30年ぶりに見た太陽は、美しかった。強く、熱く、眩しい光。

太陽って、こんなに綺麗な物だったのか。こんなに綺麗で強いものを、今まで仰ぐことを許されなかったのか。そう思っ、強烈な感動を覚えた。

「スゲエ、太陽って、こんなに綺麗だったんだな」  
「うん、本当に、綺麗だね」

威風堂々、姿を現した太陽をエルメスと眺めた。太陽に感動する奴なんて、太陽を崇拜している奴か、太陽に嫌われている奴か、そのどちらかくらいだろう。

太陽の恩恵を享受されているのが当然だと思っている奴らは、きっと俺のような感動を味わう事は一生ないんだろう。

もちろん、その方が幸せだ。あつて当たり前の奴の方が幸せだ。それでもその時の俺は、少なくとも吸血鬼たちの中では相当幸せな部類に入るだろうな、と思った。

エルメスが願ってくれたから、実現できた。エルメスによって取り戻せた、時計、笑顔、そして、太陽。

強く心に残った。俺の目に焼き付いて離れない。俺は一生、死んでも、この日の事は忘れない。



夜を生きる魔物になって初めて取り戻した、  
燦然と輝く太陽の姿  
を。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

「太陽に負けない俺」に進化を遂げた俺は無敵ですが、何か？

エルメスと二人太陽を眺めて、上りきった太陽をもっと見たくてテラスに出た。眩しい、明るい、日の光が暖かい。夜間のエルメス並にテンションが上がる俺。

753

「スゲエ！俺日光浴してるよ！」

「嬉しい？」

「超嬉しい！」

「アハハ、カイがそんなに喜んでるの初めて見たかも」

「いや、マジ嬉しい。エルメスのお陰だな。ありがとう」

「いーえ。私も嬉しい。カイと一緒に太陽の下で過ごせるなんて思ってたから」

「本当だなあ」

吸血鬼にとっては夜だつて別に暗いわけじゃない。普通に見えるし、視力が良すぎる分、天体望遠鏡でも覗いたかのように夜空は綺麗だ。でも、何億個の星ですら、たった一つの太陽の輝きには勝てない。

千人斬りとかアホなアダ名を付けられときながら、誰にも心を動かされることも関心すらも持たなかったのに、たった一人の女にこれほど人生を左右される。

エルメスの価値は重い、重すぎる。「不可欠の一人」に出会ったことが幸福で、同時に恐怖だ。傍にいられることが幸福だ。傍にいられなくなることが恐怖だ。

俺はきつと死んでしまつたら地獄で受ける罰なんかよりも、エルメスが傍にいないことが辛くて、辛すぎて、ジユノ様に懇願して、エルメスの傍にまたいられる様に転生をお願いするかもしれない。記憶がなくても、多分また俺はエルメスを好きになるんだろうなあ。

そんな事を考えながら隣のエルメスに視線を注いだら、俺の視線に気づいたエルメスはにっこり笑った。

朝日に照らされたエルメスの笑顔は本当に可愛くて、昔のような太陽みたいな笑顔で、その笑顔を向けられたことが泣きたくなるほど幸福に感じた。

太陽は誰にでもその恩恵を享受して、誰にでも平等に光をそそぐでも、どうしてもエルメスは俺だけのモノにしたい。そう、強く思った。

目が覚めると、太陽は中天よりも少し傾いて鬱陶しいほどに照り付ける。この町は砂漠の傍なだけあって太陽光の攻撃が半端ねえ。それにも耐えうるインビンシブルな俺。ジユノ様、エルメスありがとオ！

内心昨日のエルメスばりに大はしゃぎな俺は起きてソッコ―電話をかけて、ゆっくりと支度をしてチェックアウトを済ませてエルメスと街に繰り出した。

最初の目的地は旧市街のすこし外れにある店。GEMPALACEと大きく銘の入った店の前に車を停めて、すぐ戻るから、とエルメスに待てを言いつけて買い物を済ませて次の目的地へ。

また旧市街に戻って、エルメスが楽しみにしていた城の観光をすることにした。その道中、夜の間目にするものなかつた光景にエルメスは興奮。

「うわ、すごい！ラクダ！」

「おお。普通に乗るもんなのな」

「砂漠の近くだからかな」

「かもな」

市街地を車と共に悠然と通り過ぎるラクダや牛。海の街ムンバイでは見かけなかつた光景だ。

エルメスが楽しみにしていた最大の目的地、アンベール城の麓に

辿り着き、車を降りて別の乗り物に乗り換え。それにもエルメス大興奮。

「うわー！ 象とか初めて乗ったよ！」

「この城の象のタクシーは名物なんだってよ」

「へえ、すごーい！ カイよく調べたねえ」

「そりゃもう、お前の為ですから」

「キヤア！ ありがとう！」

お前の喜ぶ顔が見れるなら何だってしますよ。という俺の期待の通り、エルメスは大層喜んでくれているようだ。

太陽門までの急勾配のスロープをゆっくりゆったり象は歩く。足を投げ出して座るエルメスも、他のたくさんのお客たちもゆったり景色を眺めて城を眺めて、さながら王族気分だ。

ゆったり象タクシーが送り届けてくれた太陽門をくぐると、その王宮の城内には俺も驚かされた。

ミラーワークを施された豪華なモザイク画に彩られた城内は、かつての栄華を窺わせる緻密かつ繊細で豪華な作り。

エルメスのハートは存分にくすぐられたようで、あっちが見たいこっちが見たいと、一生懸命俺の手を引いて観光を満喫してくれたようだ。

日が傾いて西日が差してくると、ハイハイもうお仕舞ですよと言わんばかりに観光客の数は激減してくる。俺はこの時を待っていた！

人の少なくなつた太陽門の前でエルメスを呼び止めると、日の光に照らされたエルメスの微笑は、とても綺麗だ。

砂漠の熱風になびく長い髪を抑えるようにした左手を取って、その手の薬指に指輪をはめた。

エルメスは俺の行動と、その手に輝くブルーダイヤを象嵌された指輪に驚いて、俺に視線を向けた。

「言うのは二度目だけど。エルメス、愛してる。結婚しよう」

「・・・本当に?」

「本当に。本当にお前を愛してるから、死が別つまでお前だけを愛して、ずっと傍にいて幸せにする」

「カイ・・・ありがとう。どうしよう、私、すごく嬉しい」

「返事は?」

「よろしく、お願いします」

エルメスは指輪を撫でて泣き出して、抱き着いてきたエルメスを抱きしめた。その瞬間に居残り観光客と、現地スタッフからは拍手喝采とおめでとうコール。超嬉しい。

自分で言うのもなんだが、初デートにしてプロポーズ。俺って本当せっかちな。

でもいつアーサーが帰ってきて、いつ死ぬかもわからない身だからさっさとしとくに越したことはねえ、という算段でデートに持ち込んだわけだ。

無事にミツシヨンコンプリート出来て安心した。マジ安心した。マジ良かった。俺超幸せ。

観光客たちの熱も冷めてエルメスも落ち着いてきて、象に乗りながら城を後にした。

我ながらいい思い出作りができたんじゃないかな、と思う。つーか今日の事忘れられたら泣くぞ。自殺級シヨック。まあ、エルメスはそっち方面にはアホじゃねえから、心配は無用か。

そんな事を考えながら運転して帰路についていた道中、嬉しそうに指輪を眺めながらエルメスが聞いてきた。

「ねえ、指輪いつ用意したの？」

「城に行く前に買った」

「あ、あの店？」

「そ」

「もしかして用事ってこの指輪？」

「そ。ジャイプルは別名宝石の街だ」

「そうなんだ！ 計画的犯行？」

「計画的ではあるけど犯行は違うね？」

「そーだけど！ んもう、本当カイってばもう、なんなの！」

「なんなのって、お前の旦那2代目」

「ツキヤー！」

ハイテンションにも程があるエルメスは、何度言っても聞かずに抱き着いて離れない。運転が危ぶまれるほどだ。折角の記念日に事

故つたらシヤレになんねえんだけど。そんな思い出はいらねえ。

でもまあ、喜んでるし可愛いし、いいかと思つてたら、新たな質問。

「でもでも、指輪のサイズよくわかつたね？ いつの間に図つたの？」

「手、繫いだろ」

「それでわかつたの!？」

「まーな」

「もう、カイつてなにやらせてもソツがないね」

「まーな」

今回のデートで俺の株は急上昇だ。この件に関しては歴代彼女たち  
ちに感謝。

昔、指輪買えとかねだられた時はブツ殺してやろうかと思つたけど、おかげでエルメスの指輪のサイズを、手を繫いただけでわかるほどのレベルに到達しました。

顔も名前も憶えてねーけど、ありがとう。お前らとの経験は全てエルメスの為に活かしていきます。俺とエルメスの役に立てることを喜べ。

心の中でそう呟いていたら、エルメスは俺の左手の薬指にはまっている指輪と、自分の手に輝く指輪と見比べている。

「ねえ、私のはサファイア？」

「でもいいかと思つただけで、せっかくだからブルーダイヤ」



「カイのは？」  
「ブラックダイヤ」  
「なんでブラック？」  
「お前が俺には黒が似合うって言ったから」  
「私のは・・・」  
「お前には青が似合うから」  
「もー！ カイってばなんでそんなにカッコイイの？」  
「生まれつき」

なんか段々エルメスがハイテンション過ぎておかしくなってる気がする。別にそこはそんな言う程カッコよくもない気がする。嬉し  
いんだけど、俺が言うのもなんだけど、病院連れてってやるか。  
なぜか心配になる俺をよそに、エルメスはつけた指輪を外し始め  
て、指輪の内側を覗いて更に大喜びし始めた。

「ねえ、このコってカイ！？」  
「そ」  
「ねえ、このHって私！？」  
「そ」  
「カイより私へ、愛を込めて！？」  
「込めてる」  
「ツキヤー！！・・・ヤダ、もう、カイ、ごめんね」  
「なにが」  
「多分カイ明日あたり死ぬよ」  
「ハハハハ。じゃあ今日中にまた思い出作りさせる」  
「うん、いいよー！」

YES！ 死んでもいいです！ 異常にハイテンションなエルメス万歳！ いや、まあそれはいいとして、これほどまでに喜んでくれるとは思わなかったな。スゲー嬉しい。

エルメスの幸福を願って魂を売り渡した。裏を返せば俺が死ぬときはエルメスが幸せだったことだ。俺が死ぬときにエルメスが幸せでいてくれるなら死んで本望だ。

こんなにエルメスが喜んでくれて嬉しい。明日死ぬって予言される位喜んでくれたことが嬉しい。マジ死んでもいい。いや、ダメか。俺には達成すべき目標がもう一つあるんだ。結婚式くらいはしてやりたいし。

でも、エルメスをこれほど喜ばせることができたのは本当にうれしい。彼氏から旦那に昇格。既にエルメスの為に魂だって売り渡してる。

今の俺は完全に、無敵だ。

結婚報告

みんなのリアクションが楽しみだ。BMWから降りるとエルメスはすぐにニコニコしながら腕に抱き着いてくる。

「みんなびっくりするだろうねえ」

「だろうな」

「よく考えたらスピード婚にも程があるよね。まだ1週間だよ。アメリカのコメディドラマみたい」

「なんだ、不満か」

「ううん！ 全然！ 時間なんて関係ないもん！」

「どっちだよ」

屋敷に帰還。帰ってきた俺らをみんなは笑顔でお出迎え。エルメスと俺はニヤニヤ。

異常にハイテンションなエルメスに不審を抱いたガードが即寄ってきた。

「おかえりー、楽しかった？」

「うん！ すっごく楽しかった！」  
「よかったねえ。ところでお土産は？」  
「あ！ 嬉しすぎて忘れてた！」  
「あはは、いいけど。嬉しすぎてって何が？」

ガラードの言葉にエルメスと顔を見合わせて、ニヤニヤしながらみんなの前に二人で左手を出した。

「俺ら結婚するんで、ヨロシク」  
「えへ、結婚します！」  
『マジでええええ！！』

突然の結婚宣言に屋敷は騒然だ。まあ無理もない。付き合ってた間もないし無理もない。どよめく観衆は大挙して押し寄せる。

ユアン 「スゲエ！ コレが噂の電撃結婚！」  
ディナ 「マジ！ うわ、同じ意匠の指輪！」  
ガルフ 「エルメスはともかく、あの独身貴族のカイが・・・」  
ペレアス「信じられない、冗談かと思ってた」  
ベディ 「うわー、マジ羨ましますぎる！」  
パーシー「っーか気イ早ええな、オイ！」  
トリス 「すげー！ おめでとう！」

なぜか祝言が少ない気がするけど、気のせいかな。でも、驚きに包まれていたみんなは、段々喜びを表してくれて口々にお祝いを述べ

られ、なぜか俺はバシバシ叩かれた。

「つーわけでお前ら、俺の女に指一本でも触れたらブツ殺すからな」

という宣言になぜかざわつくシュヴァリエ。

リオ 「ス、スゲエ。あのカイが俺の女宣言！」

キルシュ 「今まで女に執着したことなんかなかったくせに」

ガラード 「スゲエ、エルメス狂じゃん」

パーシー 「エルメス狂！」

ランス 「むしろ病気」

ベデイ 「重症患者」

ガルフ 「中毒患者」

ユアン 「愛妻レベルではクリシュナさん超えるんじゃない？」

途中まではイラッとしたけども、最後に聞こえてきた言葉に内心狂喜乱舞。俺はクリシュナさんと違ってエルメス以外の奴に優しくする気はねえし、ガッチリディフェンスします。エルメスの防御力の低さは俺が補う。

「すごい、俺の女とか初めて言われた。なんか感動しちゃう」

「俺の女だろ」

「うん！ もう、本当カイってばどうしてそんなにカッコイイの」

「生まれつき」

「お前らバカじゃねーの・・・」

初めてこのやり取りに突っ込みが入って、何故か安心を覚えた俺。主にエルメスが開けてはいけない扉を開けそうになってた気がする。ぼさつとしているとボニー&クライドのようなバカップルになってしまいかねない。気を付けよう。

電撃結婚の話題で夜中まで大盛り上がり。盛り上がりすぎて俺らよりも先に結婚式の段取りを決めはじめの始末。

ガラード「挙式どこでする！？ 教会！？」

ディナ「俺ら立ち入り禁止じゃん」

ペレアス「屋敷でよくね？」

ガルフ「だな」

シャンティ「マジ！ エルメス様ここで挙式するの二度目じゃん！」

エルメス「本当だ！ 私インドで結婚する運命なのかな！」

ベディ「かもね。日取りは？」

パーシー「あ、カイとエルメスの誕生日の間とかは？」

ランス「えっと、10月1日と3月25日の間？」

トリス「だとすると・・・スゲエ！ クリスマスイブじゃん！」

俺「ゲツ・・・それは無い」

エルメス「私もなんかイヤ」

ガラード「運命を感じるね」

キルシュ「因縁の間違いだろ」

リオ「逆に読んだらいつ？」

ユアン「えっと、6月・・・27か」

エルメス「わあ！ 北都の誕生日！」

ガルフ「マジ！？ スゲエ！ なんなのお前ら！」

ベディ「もう決まりだろ、決まり！」

ランス「えー、じゃあ後9か月後かあ。待ち遠しいなあ」

ガラード「だなあ。エルメスの花嫁姿早く見たい！」  
パーシー「じゃあ明日でよくね？」

俺「バカ、急すぎ。トリン達呼べねえだろ」

リオ「じゃあやっぱイブにしようぜ」

エルメス「やーだーよー」

ガルフ「でもよお、カイの事だから結婚記念日とか絶対忘れるぜ。  
イブなら嫌でも忘れねえだろ」

俺「確かにそれは一理あるな」

エルメス「納得しないでよ・・・」

ガルフ「じゃ、決まりな」

アイツらに失礼なことを言われたが、他の女はともかくエルメスとの結婚記念日を忘れるはずはない。あり得ねえ。

俺は何度が言っているとと思うが、クリスマスは嫌いだ。更に言うところにいる全員がクリスマス嫌いだ。

でも、俺にもエルメスにも、シュヴァリエの奴らにとっても憂鬱でしかないクリスマスに結婚式を挙げることで、嫌な思い出しかない日をその年以降はいい思い出のある日にできたらいい、と思った。

「でもクリスマス挙式かあ、ボニーさんとクライドさん、結婚式出来なくて残念だっただろうなあ。一緒に合同結婚式したいなあ」

エルメスの言葉におお！と目を輝かせるシュヴァリエ。ギクリと冷や汗を垂らす俺とユアン。そんなギツクリユアンにエルメスは視線を向ける。

「ねえ、ユアン。やっぱり全然思い出せない？」

「え、うん。思い出せないなあ」

「そっかあ、じゃあ迎えに行こうにも行けないねえ・・・ああ！  
そっだ！」

一瞬シユンとしたもののエルメスはすぐに思い立った顔をして立ち上がった、あたりをキョロキョロし始めた。

「ねえ、ジユノ様ならあの二人見つけれないかな！？ 大陸にいるなら私迎えに行く！」

「あの二人と言われても、会ったこともない人を探すのは骨が折れますね」

エルメスの言葉に応じて姿を現したジユノ様は、面倒くさそうに溜息を吐く。確かにジユノ様の言う通り、面識も写真すらもなく名前しかわからない人を探せなんて、無茶ぶりにも程がある。

でも確かにジユノ様ならできそっだよなあ、と考えていたらエルメスも唸りながら考え始める。

「ねえ、トリス。あの二人は元強盗犯で死刑囚だったらしいの。昔の写真どこかから探せないかな？」

「そっ言う事ならお安い御用。任しとけ！」

すぐにパソコンを開いてカタカタいじりだしたトリスを背後から皆で見守ると、あっという間に検索結果に辿り着く。



「探すどころかあの二人、超有名人じゃん」

「え、そうなの？」

「世界恐慌時代に強盗働きまくって、一般市民から熱い支持を得て社会の敵とまで呼ばれてたみたいだね」

「へえ・・・それっていいことなの？」

「さあ？ でもホラ、市民から愛されてた証拠。この二人のエピソード、映画化してる」

「ウソ！？ あの二人そんなすごい犯罪者だったんだ・・・」

二人の意外な姿に思わず感嘆。金持ちと銀行以外に金はないという時代に強盗働きまくってたことは、市民からしてみれば痛快だったに違いない。ギャングのボスとその右腕として働いた恋人。若い奴なんか憧れたりしたんだろう。

「ますます会いたい！ ジュノ様！ 写真出てきましたよ！ 探せますよね！？」

「・・・しかたありませんね」

ウキウキと瞳を輝かせてジュノ様に振り向いたエルメスに溜息を吐いて、ジュノ様はキョロキョロすると、東の方角で視線を停めた。

「見つけました」

「本当ですか！？」

「ええ、でもエルメスさんが迎えに行くのは無理ですね。海を渡る

必要があります」

「そんなぁー……………じゃあ、ジユノ様ぁ、お願いできませんん？」

「……………まったく、わかりました。迎えには誰が同行しますか？」

怖いもの知らずなエルメスのお願いに渋々オツケイを出したジユノ様がそう問うと、全員がシュバツと手を挙げた。それを見たジユノ様は再び溜息。最近のジユノ様はコキ使われ率急上昇だ。ざまあみる。

シュヴァリエ全員がジユノ様の周りに集まり、途端に布が広がったように真っ黒い空間に支配されたと思うと、次の瞬間には見たことのない景色が広がっていた。

鬱蒼と茂る木々、周りには民家どころか灯り一つないというのに綺麗に舗装された広い道路と、目の前には巨大な屋敷。その屋敷を見て、エルメスは驚愕した。

「ウソ……………もしかして、日本ですか？」

「ええ、そうですよ。二人はこの屋敷の中にいます」

目の前の巨大な屋敷。坪なんて単位ではかれないんじゃないかという程広大な塀に囲まれた純和風の屋敷の前には、日本の民族衣装を着た男が二人立っていた。その男の前に歩を進めると、男二人は

警戒して持っていた剣を抜いて語りかけてきた。

「\$%&@」

なんて言ってるかわからん。日本語か？一瞬で全員がエルメスに視線を移すと、エルメスは男達と何やら語り始める。しばらく必死に説得するような語りをしていたエルメスに折れたのか、一人が屋敷の中に入って行って、しばらくしたら女を同伴して出てきた。

膝程まである黒髪に、雪の様に真っ白い肌をしてこれまた日本の民族衣装に身を包んだその女を見た瞬間、エルメスとユアンは声を上げて同時にその女も声を上げた。

意外にも、その女はユアンを見るとイタリア語で語りかけてきた。

「ミナ、オリバー、久しぶりね」

「山姫さん久しぶりです！」

「覚えててくれたんですか・・・」

「当然でしょ。こんな所で立ち話もなんだし、お友達も屋敷に入りなさい」

エルメスの様に長い髪を翻して屋敷に入って行く「山姫さん」と呼ばれた女性の後に着いて行くと、エルメスはスススとユアンに寄っていく。

「ちょっと、ユアン。どういうこと？」

「え、なにが？」

「久しぶりって何、覚えててくれたって何？」

「え、あ」

「ユアン、山姫さんに会ったこと覚えてるんじゃない。さてはカイと共謀して私を騙したわね」

その言葉に顔色を変える俺とユアン。俺とユアンを睨みつけるエルメスと愉快的仲間たち。

「オイオイどういうことだ」

「またウソつきかよ」

「ハイ出ました。10年越しのウソ。何個目だよ」

「エルメス可哀想になあ。何度カイに騙されりや気が済むんだ」

「本当だよ。二人とも、どういふことかちゃんと説明してよ！」

詰め寄ってくるエルメスと愉快的仲間たちの剣幕に、ユアンと顔を見合わせて溜息を吐いて、観念して口を開いた。

「ゴメン、本当は覚えてたよ。でも、アーサー様に口止めされて」

「そうそう。それに場所までは覚えてねえって言ってたし、アーサーが口止めしてる以上はしょうがねーだろ」

「でも、だからって日本ってことくらい、山姫さんの所にいるってことくらい教えてくれたってよかったのに」

「言ったらお前迎えに行きたがったろ。俺らだけじゃ迎えに行けな理由が……そうだった！俺らだけで来てよかったのか……？」

ジユノ様の登場ですっかり忘れてた。俺らだけで事情を説明したのち、あの二人を説得できるんだろつか。甚だ疑問だ。こりゃ結婚式どころじゃねえかもな。

急に悩みだした俺にエルメスは不思議そうに首を傾げる。

「どうしたの？」

「・・・あの二人は何も知らねえんだよ」

「そう、だね。それがどうしたの？」

「お前、立場逆ならどう思う？ 敵方の身内と、自分の身内があれほどの戦いの後一緒にいて、それをすんなり受け入れられるか？」

ジユリオ様の敵討ちを企んでそうだとか、何かしらの策謀だと疑われても仕方がない」

「うーん、そう言われてみれば・・・」

「あの二人にしてみれば、俺らはハムレットみてーに見えるだろうよ。それがあるから黙ってたのに、やっちゃまったー・・・うっかりしてた」

「・・・カイツて時々抜けてるよね」

「うるせえよ」

「まあいいじゃない、来ちゃったものは仕方がないよ。私が頑張つて説得する！」

「マジお前しくじるなよ。マジ頑張れよ」

「うん、頑張るー！」

話しながら山姫さんの後に着いて行くと、しばらくするとある部屋の前で足を止めて、山姫さんが障子に手をかけた。

「10年ぶりのご対面ね」

「なんか緊張しちゃう！ どうしよう！」

「ミナ、あんた泣く準備しときなさいよ」

「あ、そ、そうだ！」

そう言っただけでエルメスがポケットをゴソゴソ漁ってハンカチを取り出そうとしていると、山姫さんが開ける前に障子が開かれた。

「姫、人の部屋の前で何やってん……」

「てゆうか今ミナって言う……」

障子から顔を覗かせたボニーさんとクライドさんは、屋敷の人間たちと同じように和服に身を包んで、エルメスと俺らに視線を向けて言葉を詰まらせて驚きの視線を向けると、すぐにエルメスに駆け寄ってきた。

「ミナ！」

「ミナアアア！ 会いたかった！」

「キヤア！ ボニーさんクライドさん、本当に生きてた！」

「生きてたって当たり前じゃん！」

「お前大袈裟！ でもマジ久しぶり！」

「大袈裟じゃないもん！ 本当に、本当によかったあ！ ううっ、うわぁーん！」

「いい！？ ミナ、そんな泣く程！？」

「泣くほどですよ！ ホント、グスッ。本当に良かったあ……」

号泣するエルメスに戸惑いながらも二人も嬉しそうに、少し困ったようにエルメスを抱きしめて、再会の喜びをかみしめているようだ。

ひとしきりエルメスが号泣した後落ち着いてから部屋に通されて、俺らも入室してこれまでの10年、10年前のクリスマススイブからの話をすることにした。

「つーか何で死神の奴らも一緒？」

「ていうかアルカードは？ アルカードが迎えに来るって言ったのに」

「それには恐ろしく長い話を聞いてもらわなきゃいけないんですけど」

「恐ろしい程長げえのかよ」

「いえ、恐ろしくて長い話です」

「マジか」

エルメスは、一つ一つ丁寧に語り始める。数十年前からのジユリオ様の思惑、クリシュナさんの死の真相、何年も前から張り巡らされていた計略、その事をアーサーが気付いてガロードをはじめとしたシュヴァリエたちがスパイをしていた事、止めようとしていた事、止められなくて戦いになったこと、その戦いで、ミラーカさんと北都とクリシュナさんが死んだこと、アーサーが消滅したこと、俺がジユリオ様を殺して、戦争を終わらせたこと。

エルメスの言う通り恐ろしく長い話を、エルメスは涙ながらに語り、それを聞いたボニーさんとクライドさんは最初は信じられない

という顔をしていたが、エルメスの様子に真実だと認めざるを得ず、涙を零した。

「ウソ・・・ミラーカ様が、あのミラーカ様が？」

「クリシュナと、北都も死んだのか？」

「はい。ミラーカさんのお墓は、インドのクリシュナの横に作ってあります。ミラーカさんは最後に、二人にお別れを言えないのは悔やまれるけど、ありがとうって伝えておいてって・・・」

「うっ・・・ああ、ミラーカ様・・・」

「クソ、ジュリオの奴・・・信じてたのに」

クライドさんの言葉に、少しだけ胸がざわついた。クライドさんの言う通りだ。悪いのは全てジュリオ様。二人にはジュリオ様を罵倒する権利がある。エルメスが許したことの方が異常なんだ。それに慣れて甘えてはダメだ。この程度で苦しんではいられない。

これから来る非難に耐え抜く心の準備を急いだ。案の定、クライドさんは俺達に視線を向けて、睨みつけた。

「じゃあよお、なんでお前らがミナと一緒にいるんだよ」

「そうだよ、おかしいじゃん」

その問いにも、エルメスは丁寧に答える。アーサーがシユヴァリ工を信じて認めていた事、アーサーの一連の動きは、自分の消滅後に俺らにエルメスを託すための物だったという事、エルメスへの忠誠を誓ったこと、この10年俺らがいたことがエルメスの支えになった事、一緒にアーサーの帰りを待っている事。



エルメスの話を聞きながら、二人は徐々に懐疑の眼差しを緩めてくれる。

「そうか、わかった」

「アンジェロがジュリオを殺したのは、ミナの為？」

「まあ、半分は」

「残りの半分は？」

「自分の為です。ジュリオ様よりエルメスの方が大事だっただけです」

「そうか。つーかエルメスって誰？」

「え？ ああ、コイツですよ、ミナ。今はみんな名前変えてるから」

「ふーん、そうなんだ。面倒くさっ」

「・・・まあここなら別に前の名前でもいいですけど」

お気楽カップルは改名に馴染んでくれる気はないようだ。一応理解は示してくれたものの、何となく警戒されている感じはまだする。まあ、当然だな。

エルメスと共にアーサーの帰りを待ちながら、帰った瞬間にアーサーに総攻撃を仕掛けるとか懸念がないでもないだろうし、エルメスはバカだから俺らに騙されるとか危惧してんのかもしれねえし、マジそれは仕方がない。

「ボニーさん、クライドさん、私はこの10年すごく辛かったんです。シュヴァリエのみんながいてくれなかったら、私はあの日死んでたんです。みんなが止めてくれなかったら、私は死んでいたんです。仮に生きていたとしても、たった一人でアーサーさんの帰りを待つことなんてできなかつた。みんながいてくれたから今日まで生

きてこれた。多分アーサーさんはそれを見越して、シュヴァリエのみんなを味方につけてくれたんです

「みんなだつてあの戦いで傷ついたんです。たくさん大事なものを失ったんです。それでも私の為に一緒に生きるって誓ってくれて、ずっと支えてくれたんです。みんなのそれほどの思いを、私は疑う事なんてできない。私が今生きていられるのも、笑っていられるのも、泣いていられるのも全部シュヴァリエのみんなのお陰なんです。だから、みんなは何にも悪くありません。みんなには悪意どころか善意しかないですよ。みんなは私の生きる希望なんです」

エルメスの言葉を聞いてボニーさんは俯いて溜息を吐いて、クライドさんはガシガシと後ろ頭を搔いて見せて、二人は顔を見合わせると、大きく溜息を吐いた。

「ま、ミナがそこまで言うなら信じるけど」

「確かにミナの言う通りかもね。ミナ一人じゃ耐えられなかっただろうね。ミナ、よく耐えたね。アンタたちもミナを支えてくれてありがとう」

二人の言葉に安堵したエルメスは再び泣きはじめて、頭を撫でると泣き継ってきた。エルメスを抱きしめながら思う。支えられてたのは俺らも同じだと。

エルメスの存在が生きる理由で死ぬ理由だ。エルメスがジュリオ様の為に流してくれた涙、俺達の為に流してくれた涙にどれほど救われたか。信じて支え合う存在にどれほど救われたか。

泣きつくエルメスを見ていたボニーさんとクライドさんはホウと溜息を吐くと、やっと笑顔を見せてくれた。

結婚報告 2

「ミナとアンジェロは昔っから仲良しだったから、まあ信頼はできるかな」

「ジヨヴァンニもミナの配下だし。っーかその、そこはかたなく見覚えのあるデケエのもしやレミか？」

急に話題を振られたランスはピクリと反応してにっこり笑う。

「はい、そうですよ。僕もエルメス様に吸血鬼化してもらいましたから、エルメス様の息子に仲間入りしました」

「マジか。お前デカくなつたなあ」

「そりゃ僕ももう21歳ですから」

「想像以上のイケメンじゃん。相変わらずミナのケツ追っかけまわしてんの？」

「昔から追っかけまわしてませんよ!」

「追っかけまわしてたよなあ」

「ねえ」

そのやり取りを聞いてやっと涙の止まったエルメスがクスツと笑

つて、ランスとガラーダの腕にエルメスの腕を絡めてグイッと引いた。

「私もいつの間にか二人の子持ちですよ。ね」

「母親にしては若いし頼りないけどね」

「本当ですよ。カイと3人、僕らがどれほどエルメス様に振り回されたか」

「まあいいじゃない」

「まあいいけど」

「まあエルメス様ですからね」

エルメスの「まあいいじゃない」で妥協するのが完璧に癖になったこの兄弟に、ボニーさんとクライドさんも呆れたように笑った。と思っただら、ところで、と二人は話題を切り替える。

「でさあ、10年経って今いきなり迎えに来たのはなんで？ 今来れたって事は前からこれたんじやないの？」

「あ、あー・・・いや、前は来れなかつたって言うかさつき手段を思いついたって言うか、どうしても行きたい理由が発生したって言うか・・・」

「なんだよ、ハッキリしねえな。とりあえずお前らだけでどうやってきたんだ？」

「それはジユノ様のお力で・・・」

「ジユノ様って誰？」

その問いに全員でざざつと道を開けて、後方に微笑んで座ってい

るジュノ様を恭しくご紹介。

「ご紹介します。こちら地獄の大公爵、ジュノ・アスタロト様です」  
「ジュノ・アスタロト？ アスタロトってなんか聞いたことあるけどなんだっけ」

「あれじゃない？ チューリツヒの悪魔」

「あー、あん時の。ハイハイ、ミナが腕喰われた時のな」

「だったね！ 懐かし！ ミナぼやっとしてるから。あん時焦ったよねー」

想像を遥かに超えるリアクションの薄さ。あまりの薄さにジュノ様が機嫌を損ねないか不安になるほどだ。なぜ驚かないのか不思議で仕方がない。

「あの、なんでそんな普通なんですか」

「なにが？」

「だって悪魔様ですよ。大悪魔ですよ、ジュノ様」

「それが？」

「だって、アーサーさんが取り逃がすほどですよ」

「それほど強い悪魔がいてもおかしくねーじゃん？ 俺らみたいな化け物もいるんだから」

「別に不思議ではないよねえ」

「そうですか・・・」

二人の順応性の高さや頭の柔らかさには感服だ。さすがに二人でアメリカ社会を敵に回しただけはある。豪胆さが半端ねえ。

感心と呆れ半分でエルメスと顔を見合わせて、再びボニーさんとクライドさんへ視線を戻した。

「そう言うわけで、ジユノ様のお力で二人を見つけてここまで連れてきてもらったんです」

「ふーん、なるほどね」

「いつからその人一緒にいんの？」

「10年くらい前ですかね」

「10年間気付かなかったのかよ」

「ていうわけでもないんですけど、ジユノ様に頼みごとするなんて恐ろしくて・・・」

「ふぁーん、そんな恐ろしい悪魔に頼んでまで、アルカードの帰りも待たずに急に来たのはなんで？」

「もしかしてこない方がよかったですか？」

「なわけないじゃん！ ミナに会いたかったんだよ。普通にインド行くよ」

「姫、帰っていい？」

「いいわよ。後から籠がちゃんとあいさつに来ればね」

「あ、よかった。ちゃんと来ます」

「っーか理由は？」

クライドさんの問いにニヤニヤしだすシュヴァリエと、モジモジしだすエルメス。そしてなぜか俺は言いたくない気分になったけども、エルメスと顔を見合わせて二人で左手を出した。

「俺ら結婚しようと思って」

「ハア！？」

「ウソ!!」

左手の指輪と俺の言葉を聞いて二人は驚いて絶句してしまった。まあ無理もない。そのリアクションは本当無理もない。10年前の様子を知っている二人なら本当無理もない。何よりアーサーの配下の二人にしてみたら本気で無理もない。

「ちょ、二人ともマジで言ってるの!？」

「マジあり得ねえんだけど!」

「俺もあり得ねえと思ってたんですけどね」

「マジです」

俺とエルメスの肯定に二人は頭を抱えだす。この二人は確実にアーサー派のはずだから祝福してくれるかどうか微妙だ。反対されてもおかしくない。

ひとしきり悶えた二人は泣きそうな顔でエルメスを見つめた。

「またミナに先を越されるなんて・・・」

「・・・そつちですか」

「マジあり得ねえよお前、つーかお前アンジェロに騙されてんじやねえの。バカだし」

「あーその可能性あるよね。ミナとアンジェロのカップリングは予想だに出来なかったもん」

「そんなことないですよ! 確かにカイは大ウソつきですけど!」

「・・・お前な」



エルメスの余計な一言に、ボニーさんとクライドさんからは俺に向かって「この結婚詐欺師め」みたいな視線が向けられる。まあその反応は無理もない。本当無理もない。でも失敬な。

「大体さあ、アルカードどうすんの、アルカード」

「クリシユナ今頃、草葉の陰で泣いてるぜ」

結局この二人は反対なようだ。遠回しに言うのは一応優しさか。でもその言葉はこっちとしても非常にネックだ。

しかしここで諦められない俺とエルメスは、必死の説得を試みる。

「クリシユナには、沢山謝りました。クリシユナは死ぬ前に私に生きて幸せになつてって言ったんです。勝手だけど、クリシユナは許してくれると思うんです」

「アーサーに関しては問題ないですよ。一応説得はしますけど、アーサーが許そうが許すまいが、アーサーが帰還した時点で俺とエルメスはサヨウナラですから」

その言葉に二人は首を傾げて、どういふこと？ と尋ねてきた。その質問にエルメスは俺に後ろを向くように言って、気付いた俺は後ろを向いてシャツをめくった。

それを食い入るように見る二人。

「なにそれ、タトゥー？」

「ん？ 魔方陣か？ アスタロト・・・？」

更に首を傾げる二人に、エルメスは真つすぐ目を向けた。

「これは、ジユノ様の印章です」

「印章？」

「ジユノ様のエモノだという印です」

「・・・どうということ？」

「カイは、私の為にジユノ様に魂を売り渡しました」

「は！？ じゃあお前死ぬのか！？」

「ええ、アーサーが帰還したら死にます」

「なんで、アンジエロはそんなことを？」

「カイは、私の幸せを願ってくれたんです。騙してなんかありませんよ。私の為に魂まで捧げてくれてるんですから。アーサーさんが帰ってきて元通りになって、私が幸せに暮らせるようになったら、カイの魂はジユノ様に奪われて、カイは死にます」

エルメスの言葉を聞いて再び絶句する二人から視線を外して、シヤツを戻して向き直った。

「あの戦いの日から、カイはずっと私の為に生きてくれました。ずっと傍にいてくれました。私の為にここまでしてくれる人を、好きにならずにはいられなかつたんです。アーサーさんには申し訳ないと思うけど、どうしようもないんです」

「俺は本気ですよ。じゃなきゃ魂まで売ったりしません。エルメスは俺の生きる理由で、死ぬ理由で、十分にその価値のある女です。」

俺はエルメスが幸せならそれでいいんです。エルメスの望みは全部叶えるし、俺にはエルメスを絶対幸せにできる自信があります。エルメスの為なら、俺は死んでもいい」

「ボニーさん、クライドさん、お願い、わかって？ カイは本当に私を大事にしてくれるんです。それに私だって、本当にカイのこと愛してるんです。カイはいつか死んじゃいます。でも、生きている間だけでも傍にいたいんです。お願いだから、許してください」

「お願いします」

俺とエルメスの必死の説得を聞いた二人はうーんと頭を悩ませて、少して顔を見合わせると、二人で大きく腕でマルを作って笑った。

『合格！』

二人から貰った「合格」にエルメスと手を取り合って喜んで、シユヴァリエ達も大喜びしてくれた。大喜びする俺達にボニーさんとクライドさんも嬉しそうに笑ってくれた。

「いや、アンジェロお前すげえよ。そこまでされたら反対のしようもねえよ」

「だよ。さすがのアルカードも太刀打ちできないよ」

「そりゃもう、俺は世界一自称してますから」

「それに比べて・・・ミナお前、本当相変わらずだな」

「え？ なにがですか？」

「お前いつつもじゃん。いつつも誰かしらにドロッドロに甘やかされてんじゃん」

「・・・それって私のせいなんですか？」

「そーそー。ミナもアンジエロの為に悪魔に魂売れば？ それでおあいこじゃん」

「いや、それだと俺が困るんですけど」

「まあアンジエロはクリシユナみたいに溺愛するあまりミナを野放し、ってことはしないだろうけど。あんまり甘やかしたら危険だよ、ミナは」

「重々承知してます」

「大変だぜ、このじゃじゃ馬は」

「バツチリ調教中です」

「・・・・・・・・」

なぜか非難的になったエルメスは黙り込んでしまったけども、まあお許しを戴けたってことでよしとしよう。エルメスはいつまでもブスくれているけども、さてここで本題だ。

「で、今回は報告だけじゃなくて、ボニーさんとクライドさんの結婚式も一緒にできないかなと思っただんですが」

「あ、そうだった。合同で、しません？」

やっと現実に戻ってきたエルメスとそう尋ねると、二人は再び悩み始めて、山姫さんに顔を向けた。

「ねえ、姫。姫の読みではアルカードいつ帰ってくると思う？」

「うーん、そうね。あたしが15年だから龍は10年くらいだと思っただけだ」

「でももう10年経ってるぜ」  
「後2・3年かな？」

3人の会話に俺達は超ビックリ。え、なに、もしかしてアーサーが帰ってくる時期の予測？ どういうことだ？

「あの、どういうことですか？ 山姫さんが15年とかあと2・3年とかなんでわかるんですか？」

エルメスの言葉に思いついたようにクライドさんが視線を向けた。

「あ、お前知らなかったっけ。吸血鬼には休眠期つー期間があるんだよ。言ってみりや冬眠みてーな。俺らもまだ未経験だけど、前にアルカードに聞いたことがあった。な、姫」

「そう。休眠期は全ての吸血鬼に訪れる眠り。個体差はあるけど、一定の期間の覚醒と一定の期間の休眠期を永遠に繰り返す。休眠期はその吸血鬼の力に比例するから、強ければ強いほど期間は長くて弱いほど短い。あたしは30年覚醒して15年眠る。普通の吸血鬼はだいたい200年周期で1年ほどの眠りね。今まで見た最短の休眠期は5日で起きてきたヤツもいたわよ。その間は体は必要ないから、血液と精神と記憶だけの状態になる」

その話を聞いた俺らの反応はマチマチだ。話に感心している奴もいれば、隣のお嬢ちゃんは怒ってる。そりゃそうだ。俺も腹立つ。

「え、ちょっと待ってください。じゃああの非常時にアーサーさんは寝ちゃったってことですか」

「そういうことになるわね」

「消滅したとかそういうことじゃなくて、寝てるって事ですか」

「そうね」

「……………んもおおお！ あの人はどこまで私を怒らせれば気が済むの！ 私がどんな思いで待つって決めたかわかってんのあの人は！ なんて教えてくんないのよ！」

とうとうブチギレたエルメスは畳をドンドンと拳で殴って破壊し始める。その怒りはもつともだ。最初からアーサーが言うてりゃエルメスも辛い思い半減で済んだろうに。しかし畳に罪はない。

「エルメス、気持ちはわかるが落ち着け。人ん家だぞ。それ以上人ん家破壊すんな」

「だって！ マジでムカつくー！！ もう本当、なんなの！ なんなの！？」

「俺に言うな。もうわかったから落ち着けて」

怒り心頭でなぜか俺に掴み掛ってきたエルメスをやっこのことで宥めて、とりあえず推論を述べておくことにした。

「一応アーサーはお前には話す気だったはずだ。前に言ってたろ、インドが出る時その内話すって言われたって」

「言ってたけど結局聞いてないよ！」

「それは多分ジュリオ様がいたせいだな。ジュリオ様が攻撃を仕掛

けてくる可能性を危惧して言わなかったんだよ」

「なんで？」

「アーサーが弱つてると見せかけた方が得策だと思っただんじゃねえか。200年周期ならジュリオ様も休眠期は未経験で、知人にそれまで吸血鬼はいなかったから存在すら知らなかったはずだし。でもその事を先にお前に話したら、お前の事だからボロが出てその事がバレる可能性が高い」

「……確かにそうかもしれないけど」

「実際ジュリオ様は、何故か知らないけどアーサーの力が落ちてる今がチャンスだと言ってたから、むしろあの戦争は時期に関して是指向性のあるものだったんだろ。可能であれば戦争を回避する予定だったんだろが、定期的に自分だけ休眠期に入ってしまうと残されたお前達が危険だ。だから敢えて自分の休眠期直前に開戦させた可能性はある」

「……なるほど、アーサーさんっぽい」

「アーサーにしてみたらミラーカさんの死とヴァチカンの勢力は計算外だったはずだ。本来ならミラーカさんより先に能力を解放するはずが、ミラーカさんが先に開放してしまった。それに当初2000人だと思われた勢力は実は5000人でした、となれば自分が寝る時間に間に合わなくなる。ちなみに本当は7000人以上だ」

「ええ！？ そうだったの！？ でもガードたちスパイしてたなら知ってたはずでしょ！？」

「いや、俺とジュリオ様と教皇しか知らない。兵法の基本だ。敵を欺くにはまず味方から。世界最大の宗教の殲滅機関だぞ。機関員は世界中にいるんだ。そのくらいの兵力はある」

「ヴァチカンって怖い……」

「そうだな。でもその誤算さえなければ、全てアーサーの目論見通りに行ってたはずだ。ジュリオ様とヴァチカンの勢力を全滅させて、俺達を味方に引き入れた上で全員生き残ることも可能だったんだからな。アーサーのがよっぽど怖ええよ」

「そつだね・・・」

十中八九間違いない。アーサーの事だからこのくらいの事は最低限考えただろう。でもアーサーの事だからまだ何かありそうな気がするが、まあいい。わからんからいい。

ひとまず俺の推論を聞いて納得してくれたようで、エルメスは落ち着きを取り戻して山姫さんに向き直った。

「でも、じゃあアーサーさんが起きてくるのはあと数年以内って事ですよ？」

「おそらくね。私以上に長いってことはないだろうけど」

「そつかあ・・・じゃあカイと夫婦できる時間も数年か・・・」

確か、結婚の報告に来たはずだ。しかしエルメスのこの一言で雰囲気はまるでお通夜だ。気の早いエルメスが脳内で俺の通夜を開いている。俺が死ぬにはまだ早いぞ。

エルメスは何故か考え込むような顔をしている。それに一抹の不安を抱えて、エルメスの頭に手を置いてグリーンとこっちを向かせた。

「オイ、エルメス。お前アホなこと考えたら今度こそ完全に記憶消去して、俺は出ていくからな」

そう言った俺の言葉にエルメスはわたわたし出して「え、な、なにも考えてないよ」と狼狽える。どうせしょうもない事を考えていたに違いない。ジユノ様にクーリングオフ頼もうとか無謀なことを。



とりあえず脅迫しておけば問題ないだろう、と溜息を吐いてボニーさんとクライドさんに向き直った。

「つーわけで、俺らは時間がないので今年結婚するつもりです。二人はどうしますか？　アーサーの帰りを待ちますか？」

「うーん、あと数年でしょ？」

「だったら俺らは辛抱するか」

「だねえ。アルカードに誓わなきゃいけないし」

「だな」

というわけで、この二人の挙式は先送りで俺達だけの挙式という事になった。話がまとまっつてしばらくここ10年の思い出話なんかをしていると、気付けばもうそろそろ夜明け。山姫さんは泊まっつていけば？　と言ってくれたが、いかんせんこっちはジュノ様のお陰様だ。これ以上機嫌を損ねると後が怖いので、俺達は一旦インドに戻ることにした。

「ボニーとクライドはあたしがそっちに送り届けるわ」

「本当何から何まですみません。山姫さんには出会ったところから迷惑ばかりかけて、本当頭が上がらないです」

「全くよ。この落とし前は龍に着けてもらっつわ」

「私にも恩返しさせてくださいね。絶対お返しします！」

「フフ、期待しないで待っつてる」

「招待状送りますから絶対来てくださいね！」

「バカね。ウチに郵便物は届かないわよ」

「え！　そうなんですか？」

「でも今年のイブでしょ。来るわよ」

「あ、よかった」

別れの挨拶を交わしているエルメスと山姫さん。出会ったところから、日本での出会い、アーサーと暮らしていた初期の頃からの知人か。だとすると　　迷惑、逃亡の手助けか。なるほど、この人は本当のエルメスの姿を知っている人なんだな。そう考えていると、不意に山姫さんが俺に視線を向けて、目が合うとすぐにエルメスに視線を戻した。

「ミナ、聞いたわ。アンタ結婚してたんでしょ。クリシュナって人」と

「あ、はい」

「あの彼、アンジェロに恋をした事、後悔した？」

「……はい」

エルメスの答えを聞いてふふつと微笑んだ山姫さんは、エルメスの頭を撫でて言った。

「恋をするのは、良い事よ。ひとが恋をするのは、一度きりじゃないわ」

「……ありがとうございます」

「それと、龍の気持ちも聞いた」

その言葉にエルメスは顔色を変えた。それで気づいた、山姫さんの心のうち。気付いた瞬間に、後方のユアンの様子が気になったけど振り向くわけにもいかない。エルメスもそうだろうが、俺も複雑

な心境で山姫さんの言葉を待った。

山姫さんは雰囲気を感じたのか、明るく笑う。

「ミナ、あたしがどうやって吸血鬼になったか、話したことがあったかしら」

「え？ いえ、聞いたことなかったと思います」

その返事を聞いて少し寂しそうに笑った山姫さんは話を続けた。

「私ね、捨てられたの、男に。この山の中に」

「え、そうなんですか？」

「そう。二人で駆け落ちしてね、ここまで逃げてきて、彼が言ったの。里に残してきた妹が心配だ。様子を見てくるからここで待っていてくれって。それで、待ったわ。暗い山の中、水も食料も人も明かりもない山の中で、たった一人で、何日もずっと」

「・・・その男の人は？」

「死んだのか、捨てられたのか知らないけど、とにかく来なかったわ。食べ物もなくてひもじくて、獣の声に怯えて怖くて、彼が来ないことが怖くて、苦しくて、辛くて、彼を憎んだ。その憎悪で吸血鬼になったの」

山姫さんの悲しい恋の昔話にける言葉が見つからない様子のエルメスは、悲しげな視線を向けて山姫さんの手を取り、それに山姫さんは俯いて微笑む。

「ミナは優しいわね。ありがと。あたし、彼を本気で愛してた。彼以外考えられないくらいに。彼を憎んで死んで吸血鬼になって

からも、彼を忘れられなかった。でも、あたしはまた恋をした。そのことはとても嬉しかったし、片思いでも幸せだと思えた。だけど」

ふと顔を上げた山姫さんはエルメスに強い視線を向けて、フツと笑った。

「あたし過去のトラウマがあるから、人を待たせる男って嫌いなよね」

その言葉にエルメスはキョトンとして、すぐにクスツと笑ってみた。正直山姫さんの言葉には俺も少し安心を覚えた。恐らくエルメスを安心させる為に言ったことであって、真実かどうかは定かじやねえけど。

にも関わらず、いや、わかっていて敢えてそうしているのか、エルメスは笑ってとった手を両手で握った。

「山姫さんは優しくて綺麗な人だから、山姫さんの事好きな人なんていっぱいいますよ。待たなくたって勝手に向こうから寄ってきてます」

「まあね。実際よりどりみどりよ。問題は相手が全員人間だって事ね」

「ああ、惜しいですね。なら吸血鬼化しちゃうとか？」

「あたしにふさわしくなかった場合を考えると、嫌ね。まあその内また現れるわ。吸血鬼であたしにふさわしい、あたしを愛してくれる人が」

「絶対現れますよー!」

エルメスと山姫さんのやり取りを聞きながらチラリとユアンを見ると、ユアンも俺の視線に気づいて「頑張る！」みてえな顔を見せて、それに思わず笑った。

話が一段落して二人とも気が済んだのか、エルメスが俺達の所に歩いてきて、山姫さんに向き直った。

「それじゃ、山姫さんお邪魔しました」

「また来なさいよ」

「はい！」

エルメスが笑顔でそう返事をした瞬間に周囲の空間が黒く隔離されて、気付いたらインドの屋敷に戻っていた。

屋敷に戻った俺らは一仕事終わったかの爽快感だ。マジジユノ様感謝。超便利。

時間はもう朝だ。もうそろそろシャンティ達も起きてくる時間で、シユヴァリ工達はおねむの時間だ。みんなはよかったなあと口々に言いながら部屋に戻って行って、俺とエルメスも風呂に入ってから部屋に戻った。

エルメスは昔の友人に再会出来た上に、ボニーさんとクライドさんにもお許しを戴けたという事が余程嬉しいのか、息を吐いて部屋のソファに腰を下ろした俺の隣に座って、腕に抱き着いてベタベタし始める。

今日はプロポーズも受け入れてもらえて、ボニーさんとクライドさんにもお許しを貰って正直俺もそっち方面にテンションが上がっているの、今は何となく「ヤメロ」と言う気にはなれなくてそのままほったらかした。が、以前からちよつと疑問に思ってたことがあったので、聞いてみることにした。

「オイ、お前さあ、クリシユナさんともいつつも仲良かったけど、クリシユナさんが生きてた頃もこんな鬱陶しかったんか」

「うーん、ここまではなかったね。ていうか鬱陶しいの?」

「鬱陶しい。じゃあなんで俺には鬱陶しいんだ」

俺の質問にエルメスは少し考えたように顔を傾けると、すぐに「わかった!」と言う顔をしてこちらに向いた。

「えっとね、クリシユナは落ち着いてたからそういうの嫌いかなって思ったの」

「・・・ツッコみどころが多すぎんだけど」

「それにカイには甘え慣れちゃった!」

「ああ、そう」

マジでツッコみどころが多すぎる。クリシユナさんは落ち着いてたって俺は落ち着きがないのか。いや、そんなはずはない。相当落ち着いてるぞ。大体クリシユナさんには「嫌いかと思った」って懸念で遠慮できるのに、普段から「うぜえ」つつてる俺に遠慮しないのは何故だ。意味わかんねえ。

その差別はどこからやってくるんだ。友達やってた期間があったせいか? と思いつつなんかちょっとムカつときてエルメスを腕からグイッと離すと、エルメスは不服そうに睨む。

「もう、どうして離すの? 二人きりの時は甘えていいって言ったのに」

「Don't touch me」

「Hug me!」

「No」

「Please!」

「No」

「Kiss me!」

「Sure」

「なんで!?! んっ」

さすがに「キスして」と言われてしないわけにはいかねえ。言っ  
といて驚いてるエルメスは相変わらず意味わからんけども。

でも、驚いたくせにエルメスの頭を引き寄せてキスして唇を離す  
と、目を開けたエルメスは恍惚のような表情を試みせる。

「なんだ、その顔。もっとしてほしい？」

「うん」

「しょうがねえな」

全然しょうがない。俺はエルメスの誘惑には修行したって勝  
てない。メガネ外して再びエルメスの頭を引き寄せてキスをする。  
絡まる舌と小さく柔らかい唇の感触を堪能していると、エルメスも  
俺の首に腕を回してきた。ので、俄然ノリノリになってソファの上  
にエルメスを押し倒してキスしたら、エルメスは押し返すような  
仕草をして唇を離れた。

「もう、カイ、なに？」

「なにつて？」

「キスだよ？」

「してるだろ」

「・・・しないですよ？」

「する」

「ダメだよ。だってジュノ様見てるんでしょ。恥ずかしいもん」

「今更。それにお前帰りがけ、いって言っただろ」

「言ったけど、でももう朝だし、シャンティ達起きてきちゃう」

「お前が声出さなきゃいいだけの話だ。もう黙れ」

「待つ」

だからお前の「待つて」はシカトだ。何度言わせる気だ。ゴチャ



ゴチャとうるさいエルメスにキスを再開して突き放そうとする手を頭の上でまとめ固定。ジユノ様のお陰で進化した俺の腕力はエルメスと拮抗。マジでジユノ様感謝。

キスしながら服の裾から手を入れて胸を揉み始めると、エルメスは身をよじって逃げようとする。唇を離して首筋に舌を這わせると、エルメスからまたしてもストップがかかる。

「ま、待って」

「待たねえって」

「や、待って待って、どこですの?」

「うるせえよ、黙れ」

「もう、ダメってば」

「はあ、俺は後数年の命なのに小せえ希望すらも叶わないとは、悲しいね」

俺の言葉に口をつぐんで大人しくなったエルメスに、心の中で「バーカ」と笑ってまんまと継続。あと数年ってあと何日あって、この機会が何度訪れると思ってるんだヴァーカ。

バカで可愛いエルメスは恥ずかしがりながらも、小さな体で俺を受け入れる。至福と言言葉はこういう時に使うんだな、充足、この一言に尽きる。必死に首に縋り付いてくるエルメスが可愛くて、愛しい。

「んっ、あっ」

「は、調教の成果が出てきたな。お前、感度よくなったじゃねーか」

「も、やだ・・・あぁっ! やっ!」

「そんな声出して、聞こえるぞ」

「んっ、だっ、て・・・んんっ」

必死に声を殺そうとするさまが可愛い。本当はもつと声を聞きた  
いけど、たまにはそう言うエルメスも可愛くていい。

俺が死ぬまで、こういう機会は何度でも訪れる。エルメスが俺の  
恋人だから。結婚するから。俺がエルメスを愛してて、エルメスも  
俺を愛してくれるから。

今日はエルメスにプロポーズしたこともあって、俺としては異常  
事態だ。俺はきつと普段からエルメスに好きだとか愛してるとか、  
口に出すことはほとんどない。何故か言いたくないし、素直に言え  
ないから。

だから、行動で示させてくれ。示して、愛してると、ちゃんと伝  
わっていてほしい。本当は一人が好きなのにそれでも傍にいたいん  
だと、魂を捧げていいと思えるほど愛してるんだと、わかってほし  
い。

文字通り、死ぬほど愛しているんだと、エルメスにわかってほし  
い。俺はウソつきだから、わかってもらうには言葉だけでは、頼り  
ないから。

朝日が上って、髪を伝って滴る汗が煌めいた。息が上がったエル  
メスの、汗で体に張り付いた髪を優しく避けて抱きしめる。

「エルメス、愛してる。死ぬまでずっと、死んでからも愛してる」

「もう、カイはこういう時しか言ってくれないんだから」

「うるせーな」

「でも普段言ってくれないから、余計に嬉しい」

「ハハハ、だろ」

「ねえ、もう一回言って」

「愛してる」

「もう一回」

「愛してる」

「ふふっ、私も愛してる」

「俺の方が愛してる」

「なんでそこで負けず嫌い発揮するの」

「事実だから」

事実

エルメスはまだ、心のどこかでクリシュナさんを愛してる部分はあると思う。でも、それでもいいんだ。忘れて欲しいなんて思っただけ。エルメスにとってどれほど大事な人だったかわかるから。それを含めて愛してるから、良いんだ。

でも、クリシュナさんよりも俺の方がエルメスを愛してる。愛ゆえにエルメスを野放しになんてできない。本当は誰の目にも触れさせたくない。誰の目にも映ってほしくない。エルメスの目に俺以外の誰かを映してほしくない。

本当は二人きりで誰もいない、誰も知らない所に行きたい。片時も離れずに束縛して監禁すらしてしまいたい。それがエルメスの為にならないと思うからそうしないだけで、本当はずっと腕の中に閉じ込めていたい。

もしかすると、クリシュナさんも本当はそんな風に思っていたのかもかもしれないけど。

でもやっぱり俺が一番大事に思ってる。俺が一番愛してる！

番外編 ガラードとランスロットの兄弟トーク(前書き)

G・ガラード

L・ランスロット

番外編 ガラードとランスロットの兄弟トーク

G「最近良い事尽くしだ」

L「ムカつくけどね」

G「・・・ランス、まだエルメス好き？」

L「まあ・・・でもしょうがないよ。10年以上前にフラれてるんだし」

G「でもランス、本当は昔からわかってただろ。なんかこうなりそうな予感」

L「まあ、実はね。カイ以上にエルメス様にはその予兆があったし」

G「あー・・・でもカイの昔話を聞いた以上、カイはあり得ないって思ってたけど」

L「確かに。人ってここまで変わるもんなのかな」

G「変わりすぎにも程があるよな。昔はどっちも断固拒否ってたけど」

L「本当だよ。むしろ今の状況はジユノ様が作り出してんじゃないかとさえ思う」

G「その可能性が否定できないところが怖い」

L「まあ、仮にそうだととしても、結果的にカイとエルメス様が幸せならいいけど」

G「お、なに。カイも含まれてんだ」

L「・・・うるさいな」

G「ランスはカイに似て素直じゃないな」

L「冗談じゃないよ。似てないし」

G「ソックリじゃん。女の趣味まで」

L「それはカイがパクツたの」

G「ま、そう言う事にしとく。でもさ、カイが死んだ後、どうしょ

う

L「エルメス様せつかく元気になって幸せにもなれるのに、カイがバカなせいでまた泣かなきゃいけないなんて、可哀想だ」

G「本当だよ。そう言うところカイってムカつくよね。いつつも自分一人で勝手に決めて勝手に実行するから。俺達に相談とかないし」  
L「そうそう。重大なことに限ってそう言うことするから、本当参るよね」

G「俺らをなんだと思っただろうね。ムカつく」

L「本当だよ。死ねばいいのに」

G「まあ、死ぬから。でも、カイの何がそこまでさせるんだろうね。普通愛情だけなら魂捧げたりなんかしないと思うんだけど」

L「普通ならね。カイ普通じゃないじゃん」

G「そう言われてみれば」

L「エルメス様に尽くすのは依存と信仰だって昔言ってたじゃん。その時は本当にそれだけだったのかもしれないけど、それに愛情がプラスされて異常性に拍車がかかった的な。上手い具合にいいタイミングでジユノ様も登場して」

G「うーん、そう考えると、ジユノ様の登場は偶然だったのかな」  
L「ちよ、それ考え始めると怖いよ。もしそれが必然だとしたら、いつからって話じゃん」

G「まあね。でもジユノ様はカイの魂を狙ってた的な感じだったけど、それはなんでかな」

L「・・・まさかと思うけど、アーサー様の手引きとかじゃ・・・」

G「いや、それはさすがに・・・理由がないじゃん」

L「まあ、だよねえ」  
G「カイはあの性格だし、悪魔にしてみたら美味しそうに見えたとかじゃない」

L「その可能性は十二分にあるね。最悪死んでから悪魔になって再登場とかしそうだよ」

G「ああ、しそう」

L「現時点で既に悪魔だしね」

G「でもさ、小悪魔なエルメスに翻弄される悪魔なカイって見てて面白いよね」

L「超面白い。それで僕ご飯3杯イケる」

G「血液ね」

L「細かいな。でも僕もカイの泣き顔見たかった！」

G「アハハ、あれね。なんか俺ちよつと嬉しかったよ」

L「マジ見たかった。あの男、泣き顔どころか笑顔すらも似合わないし」

G「ああ、確かに。ニツコリ的な笑顔は似合わないね。ニヤリが似合う」

L「そんな人格破綻者を泣かせるなんて、エルメス様って本当大した人だよ」

G「本当。そう言えば俺が吸血鬼化した時の話したっけ？」

L「そういえばあんまり詳しくは聞いてないかも」

G「俺撃たれて瀕死の重傷を負ってさ、エルメスに人間として死ぬか、吸血鬼として生きるか選んでって言われて、俺は生きることを選んだ。その後さ、カイはエルメスにめっちゃくちゃ怒ったんだよ。本気でエルメスを殺そうとしたくらいに、本当に心底怒ってた。俺とペレアスが止めに入って、エルメス殺すなら俺を殺してからにしろって言ったら、ガンって床に銃叩きつけてブチ切れ。マジ怖かった」

L「なんでそんな怒ったの？」

G「エルメスに随分後になって聞いたんだけど、カイは吸血鬼になったことがずつと苦痛だったんだって」

L「それでガラードには人間でいて欲しかった、てことか」

G「そうみたい。それなのにエルメスが吸血鬼化してブチ切れたわけだ。俺は命を救ってもらったから全然よかったんだけど。でも、カイはエルメスに希望を絶たれたって思ったらしくて、それでそこまで怒った」

L「普段から暴虐で手が付けられないのに、本気でキレたらどうなるの、あの野蛮人」

G「マジ怖かったよ。俺スゲー事言われたもん。みっともなく生にしがみつきやがってとか言われて。本当俺らも焦ったし、あーマジヤバイよ、どうしようって感じだったんだけど、エルメスがやってくれたんだよ」

L「おお、もしかや論争で看破？」

G「そう。俺のことが大事だから、死ぬくらいならどんな姿でも生きていてほしかった。誓約の為に死ぬよりも、人の為に生きることの方が大事だって。それを聞いてカイもわかっているって言って、俺は神に見放された存在になったから、お前が呪いも懺悔も何もかも引き受けると約束しろってエルメスに言ったら、エルメスも絶対守るって言うてくれて。俺らドア越しにコッソリ盗み聞きしてただけど、俺感動して泣いちゃいそうだった」

L「ウソだね。泣いただろ」

G「・・・ちよつとね。それでもう俺には、エルメスが女神のように見えたよ」

L「エルメス様人を大事にするもんね。それに言葉に妙に説得力あるし。本当大した人だよ、エルメス様は」

G「本当だよ。でもその後ちよつと面白くてさ、吸血鬼化した俺がいつまでも人間のふりできないからって、その内ヴァチカンから失踪しなきゃいけないってことになったんだけど、その為にはジュリオ様とアーサー様の同居を解消する必要が出てきたんだよ。それでエルメスはアーサー様を選ばなきゃいけないってことになって、エルメスはヤダ！ つって、カイもジュリオ様を裏切る気か！ とか言うて反対したんだけど、シュヴァリエのみんなで勝手に決定したら二人とも呆然としてた」

L「あはは、そんな理由でアーサー様に軍配があがるんだ。想定外にも程があるね」

G「本当だよ。あの戦争が起きなきゃ、エルメスの左手にはまっ



てるのはカイからの指輪じゃなかったよ」

L「それもそうだね。もしそうならヴァチカン組とエルメス様たちはサヨナラしてたんだからね」

G「あの戦争が起きても起きなくても、俺だけはエルメスの傍にいただろうけど、戦争が起きなきゃみんなとは離れ離れになってんだ。そう考えると、良・・いや、良くはないよな」

L「う、うーん。微妙に良いとは口にしづらいね」

G「まあコレも運命だったって事だ」

L「運命って便利な言葉」

G「良くも悪くもね」

L「でもさあ、話は戻るけど、カイがエルメス様と恋人同士になったのはこの際いいとして、結婚て必要？」

G「そこは俺も疑問に思う。吸血鬼だし、戸籍の適用なんてないし、恋人と一緒にただの口約束だしな。なによりも、あのカイが。未だに信じられない」

L「別に昔話聞いてなくなっただって信じられないよ。誰がどう見ても孤独を愛する男なのに。絶対結婚に向いてないタイプだよな」

G「だよな。適性ゼロだよ」

L「相手がエルメス様じゃなかったら、仕事一筋で家庭を顧みない上に、絶対年中不倫してるよね」

G「あ、間違いないね。その割に離婚ってなったら親権だけはかつさらってくんだよ」

L「あー・・・バツ10くらいいきそう」

G「確かに。ていうかエルメスに出会わなかったら神父じゃなくても生涯独身だと思う」

L「そうだよな。でもさあ、今までカイが相手にしてたのも一般人でしょ？ エルメス様も普通の一般人だったわけだし、元カノとエルメス様と何がそんなに違ってたんだろ」

G「うーん、なんだろう。俺達からしたらエルメスみたいな人ってすごい特殊だけど、世間一般では普通の女の子なんだろうしね。や

つば女じゃなくて最初に友達から入ったからじゃないかな」

L「ああそつか。元カノたちは最初から女としてみてたからそれほど関心が湧かなかったのか。でも女友達としてのエルメス様は最初から別格だったわけか」

G「多分ね。元カノたちは暇潰しくらいでしかなかったただろうけど、エルメスには友情とか信頼とかフイーリングみたいなのが生まれたから大事だったんだよ」

L「フイーリングねえ。まあ確かにある意味相性いいかもね。あの二人」

G「見てる分には面白いしね。うるさいけど」

L「あの二人のケンカ面白いよね。エルメス様が勝つてるところみたことないけど」

G「確かに！ ていうかカイの毒舌に勝てる人そうそういないよ。

あ、でもランスはその内勝てそうじゃん」

L「勝ちたいけど、あそこまでヒドイ事言えない」

G「ああ・・・マジでヒドイよな。まともに応戦しようと思ったら規制がかかるよ」

L「間違いないね。暴言も下ネタも裁判レベルだし」

G「その辺俺ら似なくてよかった」

L「本当。僕もガライドもあんなのに育てられて、すすすくいい子に育ったもんだよ」

G「マジで。あ、でもさ、育ての父と血族の母が結婚するとか、なんか運命的」

L「ガライド、運命って言葉好きだね」

G「イーじゃん、別に」

L「いいけど。ロマンチストなのはエルメス様っぽいね」

G「マジ？ 嬉しい」

L「素直なところもね」

G「そういえば昔アーサー様に、すぐ泣くのはエルメスの遺伝かって言われた」

L「アハハ！ 実子でもないのに遺伝って」

G「実子どころか俺とエルメス、北都よりも歳近いんだけど。血族の母で親子設定って厳しくない？」

L「そんな事言ったらエルメス様とアーサー様は500歳差で親子設定じゃん」

G「ああ・・・もう、何でもアリか」

L「どうでもいいんじゃない？ 僕らみたいなファンタジックな生物に、年齢なんて微々たる問題だよ」

G「ま、確かにね。でもアーサー様と言えばさ、許すと思う？」

L「あの二人の結婚？ うーん、正直カイは公開処刑だと思う」

G「エルメスがやめてって言っても？」

L「その時アーサー様が冷静さを取り戻さなきゃ、死刑執行だね」

G「まあどっちみち死ぬんだけど。でもそうなった場合さ、エルメスはアーサー様を恨むんじゃない？」

L「恨むかもねえ。そこまでアーサー様が気を回せば説得も可能かとは思うけど」

G「正直厳しいよね。殺さないとしても許さない可能性の方が高いよ」

L「最悪の場合、魔眼でエルメス様操って強奪するかもよ」

G「そうになったらヴァルプルギスの惨劇が再び、だ」

L「その時僕らは誰に味方すればいいの？」

G「うーん・・・俺らはエルメスのシユヴァリエだし、エルメスの味方でいいんじゃないかな」

L「あ、そつか。そうだよな。でもエルメス様がアーサー様に操られてたらエルメス様の意志とは限らないよ」

G「エルメスにとつての幸福を考えて、でいいんじゃない？」

L「どっちが幸せなんだろう」

G「エルメスの事だから両方だよ。どっちにも愛想ふりまいて、仲良くしてね？ これに決まってる」

L「調子いいなあ・・・無茶ブリにも程があるっていうか、厳しす

ぎるよ。カイも言っただけど、本当エルメス様はかぐや姫だね」

G「全くだよ。でも、だからこそカイが延命できる時間を長くとれる可能性もあるよ」

L「あ、それを考えたら今後もガンガン無茶ブリお願いしたいね」

G「アハハ、やっぱランスはカイ好きなんじゃん」

L「違うし！」

G「今の発言でどう違うって言えんの？ 本当ランスはカイに似て素直じゃないなあ」

L「違！ だから似てないってば！」

G「ハイハイ。ランスは可愛いな」

L「ムカつく・・・」

## シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

アーサーが消滅して10年と8か月経過。9月に入って、もう少しで9か月だ。もはや延滞料金の計算も面倒くせえ。

あれから1か月経って、今日ボニーさんとクライドさんが山姫さんと共にインドにやってきた。

「うっわ！ この屋敷に来るのもスゲエ久しぶりだな！ ミナ、ただいま！」

「シャンティ久しぶり！ 老けたね！」

「二人ともお帰りなさい！」

「ボニー様もクライド様もご無沙汰しております。正直申し上げますと、老けないお二人の方が不気味です」

「あははは！ 確かに！」

ものスゲエ丁寧な口調で話すシャンティにシュヴァリエはビックリだ。意外過ぎる。あいつやればできる子だったのか。

なぜかシャンティに感心させられて、みんなでリビングに移動。

ソファに腰を下ろして、みんなで思い出話やらなんやらすることに。それで、ボニーさんがシャンティの抱っこするクリシュナを

指さしながらワクワクした眼差しを向けた。

「ねーねー、ていうかシャンティのその抱っこしてる赤ちゃん。もしかしてシャンティの子供？」

「ええ、そうです。レヴィと結婚して、子供をもうけたんですよ」

「マジ!? レヴィと結婚したの!? よかったじゃん!」

「はい、ありがとうございます」

「え、その子、男? 女?」

「男の子ですよ。名前は、クリシュナといいます」

クリシュナの名前を聞いた瞬間、ボニーさんはドバツと涙を流してクライドさんと山姫さんは驚いて喜び始めた。

「シャンティ、レヴィ、お前らマジなんでそう言うことすんだよ」

「え、い、いけませんでしたか?」

「違ええよ! お前らマジ憎い事してくれんな! 超嬉しいよ!

マジお前ら最高だよ!」

「うわー! マジ嬉しいよー! クリシュナあああ!」

「きつとクリシュナも天国で大喜びしてるわよね。それって最高の恩返しじゃない」

山姫さんの言葉に、シャンティは瞳を潤ませる。シャンティ達を直接面倒見ていたのはクリシュナさんだと言った。シャンティ達にとっては敬愛する上司のような人。その人に恩返し出来て喜んでもらえるのは、シャンティ達にとってもとても嬉しい事だろう。

興奮冷めやらぬハイテンションのまま、ボニーさんとクライドさんはこの10年の間に起きた出来事を話せと催促する。エルメスもその様子に笑いながら、話し始めた。

「実はね、あの戦いの後シュヴァリエ達が私の配下になったんです

けど、それって前から決めてたらしいんです。ね？」

「そう。実は、俺がジュリオ様を殺したってのは教皇からの命令もあつたんですよ」

「え？　じゃあ教皇がジュリオを裏切ったのか！」

「そうなんですよ。ちなみにソレはジュノ様の仕業ですけど」

「マジ！？　ジュノ様どつから絡んできてんの」

「うふ、ヒミツです」

「で、その教皇命令を聞いてみんなに伝達した時に、話し合っただけです。アーサーは生き残りと共にインドに逃げろって言ったらしくて、どの道俺らはジュリオ様を殺してヴァチカンを離れなきゃいけないことに変わりはないし、元々俺らはエルメスの部下として活動してたから、エルメスが生き残ったらエルメスの配下になろつって」

「へえ、アルカードそんなこと言ってたのか。本当にお前ら信用してたんだな」

「アーサーさんがね、あの戦争の時にシュヴァリエ達に裏切り者って言ったジュリオさんに言ったんです。コイツらは裏切り者ではない。コイツらの信頼を裏切ったお前の方が反逆者だって。シュヴァリエのみんなはジュリオさんに反旗を翻したわけじゃなくて、人生をやり直してほしかっただけで、それが本物の忠誠だって」

「昔アーサーとクリシュナさんに言われたんですよ。上が誤った判断をしそうなとき、それを是正するのも部下の仕事だ。それが本物の忠誠だって」

「でもカイだけ仲間外れだったよね」

「・・・悲しい事にな」

その話を聞いてボニーさんと山姫さんは首を傾げて、クライドさんは何故か笑いだす。

「なんでアンジェロは仲間外れだったの？」

「もしかしてアンジエロ、ジュリオの味方やめる気なかったの？」  
「違ええよ、アンジエロはアルカードと仲悪かったからだよ。どー  
せすぐケンカなるだろ」

「違いますよ！ 立场上協力できなかつたからです！」

「本当かよー」

「本当ですよ」

笑いながら失礼な疑いをかけるクライドさんに、背後からガラードも笑いながら俺の味方になってくれた。

「俺達がスパイヤつてたのをカイに言わなかつたのは、カイの立場と責任があつたからです。カイはそれを知つた以上、ジュリオ様に報告しないわけにはいかないでしょうからね。エルメスとの関係うんぬんよりも、それが仕事ですから。その事でカイを苦しめたくもなかつたし」

「あー、お前仕事には異常に厳しかったもんな」

「まあそうですね。多分知つてたらスパイヤめさせてたと思います」  
「結局命令が下りてから、その戦争を先に知つてたつてばれたんですけど、カイはその時俺に言つたんですよ。俺はお前になりたいつて。その戦争を止められる立場の人間に、本当はなりたかつたんですよ、カイは。そのせいで、命令降りてからカイの荒れっぷりがすさまじくて……」

「……あん時は悪かつたな」

ガラードの言葉に、何故かワクワクしだすボニー&クライド。どんな風に荒れてたの！？ と身を乗り出す二人に、何故かガラードも笑いながら答える。

「みんなの前じゃ普通にしてみましたけど、俺達の前ではヒドかつたんですよ。常にイラついてるか、ふさぎ込んで落ち込んでるか。落



ち込んでたと思っただら急に煙草握りつぶしてあちこち破壊したり。  
マジ手が付けられなかったですよ」

「スンマセンね」

「俺らが普通に話しかけても何故か怒られるし、シカトされたりうるせえって怒鳴られるし。仕事の時もエルメスの言う事全然聞かないで、前線に出てきて皆殺し」

「スンマセンね」

「仕舞にはその様子を心配したエルメスに八つ当たりですよ。ただでさえ開戦直前で俺達も心配事は山積みだったのに、カイのご機嫌取りすんのめっちゃ大変でしたよ」

「スンマセンね」

今考えるとその時の俺はアホらしいほどに荒れてた。本当シユヴ  
アリエの奴らには迷惑かけた。エルメスにも心配かけときながらキ  
レたりした。今では笑い話にできることも、その時の俺は本当に辛  
かったんですよ。その辺分かって頂戴。

ガラードの愚痴を聞いたクライドさんは、なぜか優しく笑った。

「まあ、アンジェロにとってはジュリオも大事だったろうけど、そ  
んだけ荒れるって事はジュリオと同じくらいミナを大事に思ってた  
って証拠だな。死神の奴らもお前も、辛かったんだなあ」

「あ、まあ」

わかってくれたクライドさんに感謝。この人いいひと。それを聞  
きながら、ガラードが思いついたように声を上げた。

「そうそう、その八つ当たりの時にね、みんなで話したんですよ」  
「なにを？」

「エルメスとカイはまるでロミオとジュリエットみたいだって。悲  
劇は戯曲で十分だから、絶対戦争を止めようって。止められなかつ

ただ」

「お前らそんな話してたのか」

「してた。だってそうでしょ。敵同士の息子と娘なんてロミ×ジュリじゃん。とりあえず二人が死ななくてよかったよ」

「心中でもしてえ気分ではあったけどな」

その言葉に今度はエルメスが振り向いた。

「でも、そうだよ。あの時私カイに殺してって言ったんだ」

「ミナ、お前そんな事言ったの？」

「言っちゃったんですよ。だってミラーカさんとクリシュナと北都が死んで、アーサーさんまで消滅しちゃったんですから。完全に生きる気力なくしました」

「そうだなあ、あの時もシユヴァリエの奴らが傍にいなかったら、俺はエルメスが死ぬのを止めるところか、確実に心中してた」

「そう考えると、やっぱりみんながいてくれてよかった」

「それは俺達もそう思ってたよ。もしエルメスとアーサー様に逃げるって言われなきゃ、俺達はきつとあの場で死んで、二人が死ぬのを止められなかっただろうなって。多分アーサー様はそこまで考えてたんだね」

「だろうな。ミナとアンジェロの関係性と性格を考えれば、戦争が終結して生き残っても、状況的に二人が二人だけで生き続けることは難しいだろうからな。ミラーカ様達も生き残ってたら話は別だったんだけど」

「その事も、約束できないって言われましたよ。俺達が全員で逃げるって約束してくださいって言ったなら、それは約束できないって。カイの言ってたアーサー様の目論見通りになつてたらそれも叶ったかもしれないけど、現実的に考えて難しい。だから俺らを保険として残しておいたんでしよう」

「なるほどね。相変わらずアルカードは策略家だな」

「本当ですよ。そもそもシュヴァリエを味方に引き入れたのも、アーサー様の策略で俺がそうなるように仕向けたんですから」

その言葉に全員がええ！？ とガラードに向いて詰め寄ると、ガラードは得意げに解説を始めた。

「運よく俺がエルメスの配下になったことで手駒を得たアーサー様は考えた。ジュリオ様の幹部である死神を掌握出来たら強いぞ、と俺も戦争になってみんながジュリオ様の命令通りに攻撃を仕掛けた場合に、みんなが死ぬ事を危惧してたからアーサー様にお願ひしたんだよ。みんなをどうか殺さないでくださいって。そしたら、奴らが味方になれば殺す理由などなくなる。お前も自分のやっっていることを単独でこなすのは心細いだろう。味方が欲しいだろうって。実際そうだったしね。で、アーサー様と利害が一致して、わざとパソコンにデータを流して、みんなの前で必要以上におかしく振舞って半年くらいかかったけど自然に味方にできた、と。こういうわけ。そもそも、エルメスが死神の隊長に収まったことを黙認してたのもそこにある。エルメスであれば俺達の信頼を得ることは容易いと踏んだから。実際みんなはエルメスを信頼して、エルメスの為に活動を開始したでしょ」

ガラードの解説にシュヴァリエの奴らは頭を抱えてその場にしゃがみ込んだ。

トリス 「マジかよ・・・じゃあ俺がお前のパソコンにハッキングしたのも、お前とアーサー様の計算って事？」

ガラード 「そうだよ」

ダイナ 「マジかよ！ じゃあ俺とトリスがお前の説得に行ったのも計算！？」

ガラード 「そうだよ」

ガルフ 「マジかよ！　じゃあ俺達がエルメスの為に動く事すら計算だったのか！」

ガラード「そうだよ」

全員 「マジかよ！！」

アーサー・・・アンタがスゴイのはもうわかったから、これ以上驚かさないでくれ。狭心症で死ぬから。ホラもうみんな泣きそうじゃねーか。いつそ活動に参加してなくてよかったな、俺。多分メチャクチャ暴れてキレル。

みんなの様子に申し訳なさそうに笑いながら、ガラードはガルフの肩をたたく。

「確かに全部アーサー様の策略だけど、俺は結果的にそれでよかつたと思ってるよ。みんなで生き延びて、エルメスもカイも死なずに済んで、ジュリオ様も安らかに死ぬ事が出来て、こうやってアーサー様の帰りを待てるんだから。エルメスと仲良くなったのはアーサー様の策略によるものだけど、俺はエルメスの傍にいられることは嬉しいから全然問題ないよ。みんなもそうでしょ」

ガラードの言葉にみんなは溜息を吐いて、それもそうだな、と笑った。そんなみんなの様子を眺めてたら、不意にガラードが俺に向いた。

「俺は関係ないって顔してるけど、そもそもカイがいたからだよ」

「は？」

「カイが死神の隊長だったから、エルメスが死神に籍を置くことを良しとしたんだよ。前にアーサー様が言ってた。エルメスの為に明らかに格上である自分にすら牙をむくほどの奴だ、小僧は間違いないエルメスに味方する。小僧がそれほどまでに信頼したなら、それを見た隊員たちも自然にエルメスを信頼することは明白だ、って」

「マジかよ!」

「ちなみにこうも言ってた。いつそのこと小僧がエルメスに惚れてくれたらあっさりジュリオを裏切るだろうから、優秀なスパイとして活動してもらえたんだが、小僧は色恋に興味のない憐れな唐辺木だから、生涯エルメスのピエロになってもらうとしようって」

「マジアイツ・・・アイツ・・・殺してえー!!」

結局俺も頭を抱える羽目になったんだけど。なんなのアーサー。なんでアンタそんなに性格歪んでんの。誰がピエロだコノヤロー。

ソファに倒れこんでメソメソする俺の肩をたたいて、エルメスが呆れたように笑った。

「でも今好きになってくれたから、ピエロじゃないよ」

「・・・そうだけど、スゲエ腹立つんだけど」

「まあ、しょうがないよ。アーサーさんだから。でもアーサーさんの言った通りに、あの時から私の事好きだったら、ジュリオさん裏切った?」

その言葉に体を起こして、考えてみた。心情的には両天秤。でも結局俺はジュリオ様を殺してるわけだし。でも、スパイ自体はどうだろう。エルメスの為にジュリオ様への忠誠を裏切るだろうか。

「うーん、多分その場合、スパイの事をジュリオ様にリークしたりはしなかったかもな。でも、結局活動には参加しなかったと思う」

「え、結局そうなんだ」

「そう。で、開戦前にお前連れて逃げる」

「あ、そっちな。完全にアーサーさんの目論見外れてるじゃん」

「少なくともあの時点での話ならな。あの時は俺は別にアーサーに仕えてるわけじゃないし、アーサーに遠慮してやる義理はねえ」

「・・・それもそうだね」

「まあでも、少なくともあの時点での話ってんなら、絶対あり得ねえけどな」

「確かにね」

多分俺ならそうするな。少なくとも10年前はあり得なかっただろうけど、今同じことが起きたらそうする。

すると、俺とエルメスの話を聞いていたボニーさんが不思議そうに尋ねてきた。

「確かに10年前はあり得なかったよね。ていうか今でも信じられないよ。二人とも本当に好きなの？」

その質問にエルメスはムツとして、俺の腕に抱き着く。

「そうですね！ 大好きです！ 勿論カイも！ ね？」

「あ？ ああ、まあ」

「もう、ちゃんと好きだって言っつてよ」

「ヤダ」

「もう、カイはすぐ照れるんだから」

「チツ！ うるせーな。っーかウゼエ！ 離れる！」

「もう、ケチ！」

なんで公衆の面前でそんな事言わなきゃいけないんだ。絶対言わねえ。意地でも言わねえ。そしてウザい。人前でベタベタすんな。ベタベタ引っ付くエルメスを引きはがそうとする俺に、ボニーさんとクライドさんはクスクス笑う。笑い事じゃないんだよ。わかる？ おたくらは普段からイチャついてるから感覚麻痺してつかもしんねーけど、俺、異常事態。わかる？

「アハハ、アンジェロとミナはそう言うところは相変わらずなんだ」

「相変わらずミナ尻尾振るのな。で、アンジェロは相変わらずウザいの嫌いなのか」

「そーですよ。コイツ人の話聞きやしねえ。俺の意志は相変わらず完全シカトですよ」

「ああ、ミナいつも人の話聞かないで突っ走るからねえ」

「そーなんですよ。コイツと出会ってから今まで、俺がどんだけコイツに振り回されたか。コイツの傍にいとマジでロクなことがない」

「でも、好きなんだろう？」

「………まあ」

「アハハ、アンジェロ、アンタ面白いね」

なんか腹立つ。まあ確かに好きだけどね。大好きだけでもね、よく考えてみると昔っから俺はエルメスに振り回されてばかりだ。エルメスが傍にいと完全に俺のペースが乱される。それでよく怒ってケンカにもなったし、腹立つコイツとか思ってた。

でもそれを楽ししいと思っただこともあったし、だからこそだったのか、とも思う。エルメスが傍にいとスゲー大変だけど、それ以上に楽しいし、エルメスの笑顔が向けられるのは嬉しい。今思うとエルメスとケンカすんの楽しいとか思ってたよな、と思いつてなんかおかしくなった。

「でも本当今でも信じられない。アルカードとか他人が絡んでこなかったとしても、絶対二人はあり得ないと思っただもん」

「それは俺も思っただけど」

「なんでそうなったの？」

「なんで？ なんてって言われても……なあ？」

「まあ、私は自然だと思っただ。カイはなんで？」

「って言われても……知らん」

「つーかそれを聞かれても知らんだろ、普通。俺が聞きたい。そう思っていたら、何故かここでジユノ様が話に入ってきた。」

「カイさん、椿姫ってご存知？」

「椿姫？ ああ、アレクサンドル・デュマのですか？ それが何か？」

「あなた達は正にそれ」

「・・・もしかして、カメラリア・コンプレックスですか」

「あら、よくご存知ですね」

「俺はよくご存じだが、他の人たちは知らないようで首を傾げる。なのでジユノ様と講義を始める。」

「椿姫は不幸な娼婦。その娼婦と出会った純粹な青年が恋に落ちて、彼女を不幸から救い出し、幸せに暮らすも引き離され、最後に椿姫が死ぬという話です」

「要するにカメラリア・コンプレックスつーのは、女性がどんな人であろうと余計な事であっても救い出そうとする男性の心理全般の事を「カメラリアコンプレックス」と呼ぶ」

「カイさんがアルマン、エルメスさんがマルグリットという図式になりますね。カメラリア・コンプレックスから恋愛に発展するなんてよくあることです」

「そーみたいです」

「でも、カイさんは愛を知らない人のようでしたから、苦労しました」

「俺とジユノ様の会話にフンフン納得していたみんなだったが、ジユノ様の最後の一言に全員でえ！？ とジユノ様に視線を注いだ。」

「え、ちょ、苦労ってどういう意味ですか」



「あら、口が滑っちゃいました」

「ちよ、もしかしてジユノ様が仕組んだんですか！ 俺がエルメスを好きになるように!？」

「うふ、そうですね」

「ええええ!？ 意味わかんないんですけど！ 何故そんなことを!？」

なんと恐ろしい大悪魔。俺の恋さえも操作されたものだとは、どういうことだ。そしてその必要があったのか。いや、いいんだけど。今幸せだから別にいいんだけど。でもそのせいで俺は10年間苦悩したんだけど。マジどうということ。

いつも通りふふつと微笑んでジユノ様はエルメスを撫でる。

「勿論、あなたの願いの為ですよ」

「イヤイヤ、契約する前だったじゃないですか」

「でも、あなたの事ですから何を願うか想像はつきましたよ」

「・・・そういえば俺が契約したこともジユノ様の策略でしたっけ」  
「そうですね。ですが、正直申し上げますと、あなたの願いは想像とは逆でした。私はてつきりあなたがエルメスさんを独占したいと願うと思ってたんですよ。だからあなたがエルメスさんに恋をすればもっと面白くなると思ったんですが」

「そんな理由で・・・」

「あなたが愛を知らない人だったせいで、大変でしたよ。トリンの出産を早めたり、海から邪魔な若者を追い出したり、山賊を差し向けたり、不動産屋の主人に化けて、ラリった二人に既成事実を作らせたり」

「ギヤアア！ ジユノ様やめて!」

「それ全部ジユノ様の仕業だったんですか!？」

まさに激白だ。恐ろしいかな大悪魔。確かに俺がエルメスを俺だ

けのものにしたいと願った場合、俺がエルメスに恋をしたら相当面白いことになる。つーか最悪なことになる。ジユノ様は面白く事を展開するためにそう仕向けたのか。性格悪っ！

「そう、全部私の仕業ですよ。楽しかったでしょう？ 二人つきりで3か月も旅行して、ベトナムでは幸せな家庭を目の当たりにして羨んで、二人つきりで海で花火してエルメスさんの可愛い水着姿を見て、二人つきりでドライブして、二人つきりで寄り添って過ごして、山賊にも親切なエルメスさんに感心して、二人つきりの甘い夜を過ごして」

甘くはなかった。全然甘くなかった。渋かった。アレにはそういう効果も含まれてたのか。なんてことだ。

「甘い夜事件は大成功でしたね。あなたもエルメスさんもお互いを意識せずにはいられませんでしたもの。でも大失敗でした。契約してからあなたが願った願いには心底ガツカリしましたもの。それまでやったことが全部無駄になりましたから。それで腹が立ったので消す記憶を一部だけにしてやりました。だけど、2つ目の願いとカイさんの恋心が3つ目の願いに生きてくることになったので結果才ライです。それも苦労させられましたけど」

「ああ、カイが拒否したからですか」

「そうですね。全く難儀な人ですよ、カイさんは。恋愛に酷似した感情を持ちながら、全くそちらに発展しないんですもの。私が手を加えなければ、エルメスさんは一生片思いですね」

「・・・もしかして、私にも何かしました？」

「あの3か月の愛の逃避行はエルメスさんにも大いに効果はあったようですが、エルメスさんの場合はほっというつもりになりましたから、何もしてません」

「・・・そうですか」

なるほどなるほど、確かにそうだな。道理でおかしいと思ったんだよ。3か月も連れ戻しに来なかったのはそのせいもあったわけかなるほどな。確かにジユノ様が手を加えなきゃ、絶対そうならなかった自信がある。

隣でエルメスも複雑そうな表情だ。ていうかみんな複雑な表情だ。

ガルフ 「やっぱりなー、そうでもしなきゃあり得ねえと思ったんだよ」

リオ 「だってカイだもんな、カイ」

ペレアス 「確かに3か月も二人きりで逃避行やってりゃ、さすがのカイもほだされるだろうしな」

ガラード 「元々エルメスの事は好きなわけだし、そのジャンルが変わっただけか」

ランス 「カイってバカだね。まんまと悪魔の手に踊らされて」

トリス 「まあエルメスはそうなるだろうとは思ってたけどね」

ダイナ 「ああ、そうだね。カイが遊びに行った時もめっちゃ嫉妬して暴れたもん」

ジユノ様 「そうですね。エルメスさんは私と初対面の時、明らかに私に嫉妬しましたから。カイさんがエルメスさんに愛し愛される人が現れる様にと言った時に、エルメスさんの夢にカイさんで出てあげたので確定したようです」

エルメス 「してるんじゃないですかあああ！」

ジユノ様 「でもよかったですよ？ でなければ気付くのはもっと遅かったんじゃないですか？」

エルメス 「まあ、そうでしょうけど」

ジユノ様 「私から見れば10年以上恋煩いしていたのはエルメスさんの方ですよ。前の夫の事も勿論愛してたようですが、同じくらいカイさんの事も好きになって、前の夫の存在がその感情の隠れ蓑になっていましたからね」

俺 「マジですか」

ジュノ様「マジです。同時に好きな人が2人できるなんて、そう珍しい事でもありません。エルメスさんはそれに気づくのが遅かっただけです。全く、二人揃って難儀ですよ」

ジュノ様、俺正直感謝した方がいいのかどうなのかわかりませんが、エルメスと恋人になれたのは嬉しんだけど、それがジュノ様にもたらされた指向性のあるものだったのがスゲエ納得いかない。

大体エルメスに愛し愛される者が現れる様について言った時も、俺は一言もその相手を俺にしるなんて言った覚えはないんだけど。確かにエルメスが俺を前から好きだったなら、その方が幸せかもしれないけど、ランスとか他にも候補はいたのに、それを俺にしたのもアレか。手っ取り早くつてのもあるだろうが、後々アーサーとケンカになりそうだと面白そうとか、そういうアレか。つーか絶対そうだとこの悪魔め。

頭を抱える俺の周りでもみんなも溜息だ。シュヴァリエ達は両手がWだしボニーさん達もなんか引いてる。シュヴァリエ達は「でも結果的に二人とも幸せだからいいんじゃないかねーの」と言い始めたが、いいんだろうか。ソレで。

とうとうボニーさんとクライドさんも両手がWだ。

「ま、ミナが幸せならいいんじゃない」

「つーかアルカードどうすんだらうな。寝てる間にアンジェロにミナ寝取られて」

「いや、別に寝取ったわけじゃ・・・つーか言ってきたのエルメスの方ですから」

「は!?!? そうなの!?!?」

「そうですね。マジあり得ねえと思いました。みんなが見てる前で急に告白ですよ。恥も外聞もあつたもんじゃなかった。ヒデエ目に

遭いましたよ、マジで」

「イヤ、ヒドさで言ったらカイの方がヒドイじゃん。私の一世一代の愛の告白を断固拒否！　って一言で断るんだもん」

「え？　アンジエロ断ったの？」

「当然ですよ。そしたらコイツ泣いちゃって。そのせいで全員から締め上げ食らって、シャンティには殴られるし、長時間説教されるしで。結局ジユノ様の悪魔の囁きに負けて折れました」

「本当、みんなとジユノ様が説得してくれなきゃこうならなかったね」

「そーだな。つーか俺、お前が言ってきた時点でまた記憶消して、出ていく気満々だったしな」

「マジ・・・」

「マジ」

「でもアンジエロもミナ好きだったんだろ？」

「まあ、ですね」

「じゃあなんで断ったんだよ？」

「そりゃ勿論アーサーに悪いからですよ。エルメスの為にもならないと思いましたが、何よりエルメスも俺もアーサーにしてみたら裏切り者でしかありません。俺の理想は次世代のクリシュナさんの後継は、アーサーって断定してましたから」

「はー、なるほどねえ」

「アンジエロは役人並に頭かてーな」

「それも言われました」

「アンタ意外と忠臣じゃん」

「意外は余計ですよ」

　　なんだか二人は感心しているようだ。ヨッシャ、俺の株上昇中。一回断つといてよかった。それに気づいたのか、心なしかエルメスも嬉しそうだ。しかし、顔を見合わせた二人の質問に、俺は口ごもってしまう。

「じゃあさ、そこまで拒絶しといて結婚までしようと思ったのはなんで？」

「えー！？ あ、いや、それは・・・」

「別にすぐ死ぬなら必要ねえだろ？」

「え、あ、えーと、やつぱ俺も死ぬ前になんかエルメスに遣してやりたいなと思つてですね」

「んー？ なんか怪しい。なんかあるんじゃないの？」

「いや、なんもないですよ！ ただ生きてる間はエルメスは俺の女だつて約束が欲しかつただけですよ」

「本当にい？」

「そうですよ、愛した女と結婚したいと思つのは普通じゃないですか」

「まあ、そりゃそうか。死ぬなら尚更だな」

「そうですよ」

フリー、良かった、誤魔化せた。ナイスウソつき俺。俺の壮大な計画を悟られるのはまだ早いぜ。その計画は何かつて？ 勿論ヒミツ。エルメスにもヒミツ。その為に本来なら必要のない結婚までするんだ。まあ、それ自体は俺も嬉しいからいいけど。

「でもまあ、お前がそこまでアルカードに気を遣つたうえでミナを愛して幸せにするんなら、俺は文句ねえ」

「あたしも。ミナを幸せにしてね」

「勿論、お任せください」

「おー自信満々かよ」

「当然です」

当然だ。自信がある。俺はエルメスを世界一幸せにできる。世界

「愛してる女を世界一幸せにするのは男の義務だ。」

この二人とも再会して、許可も得た。この事は俺の死期を早める可能性もある。でも、それ以上に延命できる可能性が高くなった。

二人と再会したことで、今日から本格的に計画を始動させる。「かぐや姫のラブ&ピース」でジュノ様に目にモノ見せてやる。

ジュノ様の出来心によってもたらされた愛情。ジュノ様のオモチヤとして生み出された感情。今に見てる。フル活用して地獄に追い返してやる。

シユヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

晴れ時々晴れのち晴れ。今日も姫は晴れやかで美しい。

と言わんばかりにエルメスと楽しげに話している山姫さんを見つめるユアン。エルメスのお願いを聞いてくれた山姫さんは、インドに半月ほど滞在してくれることになった。ユアンには絶好のチャンスだ。

「ナンパしてこいよ」

「うわ！」

背後からいきなり声をかけたせいか、ユアンは驚いて壁に激突した。つーか壁越しに見つめるとか、お前はストーカーか。ヤバい道に行く前にアタック開始させなければ。

「なにぼさつとしてんだ。話に行けよ」

「でも何話せばいいかわかんないし」

「バツカお前、そんなの誘えばいいだろ」

「デート誘うにはまだ早いよ」

「ホテル誘えばいいだろ」



「もつと早いよ！ カイと一緒にすんな！」

「冗談だろ、うるせーな」

「全く、コレだから神速の遊び人は・・・」

「なんだそのアダ名」

「手を出すスピードが神がかり的に早いっていう」

「神がかってねーよ。つーかソレ、エルメスの前で言うなよ」

「言わなくてもせつかちなのはエルメスが一番わかってんじゃん」

「・・・確かに。いや、今はそれはいい。それより声かけて来い  
て」

「ええー・・・」

なぜか渋るチキン野郎をバシバシ叩いていると、ここで賢者ガル  
フくん登場。嫌がるユアンをボディブローで黙らせてガルフに話す  
と、ほほう！ と愉快そうに笑った。

「なるほどねえ。道理でお前様がおかしいと思っただよな」

「マジ、なんでカイ喋んの？」

「まあ、いいじゃねーか」

「そうそう。折角だから、カイが会長な」

「え、ちょ、待って、まさか」

「そのまさか。“ユアンの恋を応援する会” 会長はカイ、副会長、  
俺」

「嫌だあああ！」

「応援する側に回ると楽しいなあオイ」

「される側は嫌だよ！」

「俺だって嫌だったんだぜ」

「クソ！ 仕返しか！」

「ハッハッハ、まあいいじゃねーか」

「そうそう、恋の百戦錬磨であるこの俺に任しとけ」

「エルメスが初恋の奴がよく言うよ！ ただの遊び人のくせに！」  
「うるせーよ！」  
「うっ！」

再びユアンにボディブローで黙らせて、ひとまず作戦会議の為に俺の部屋にユアン引き摺って集合。するとなぜか部屋にはボニーさんとクライドさんが居た。

「あれ？ 何やってるんですか？」

部屋のドアを開けて尋ねると、二人はセレスの鳥籠を覗いていた顔をこちらに向けた。

「ここアルカードの部屋じゃん？ 探検中」

「ああ、今は俺とエルメスが使わせてもらってんですけど」

「そーみてーだな。羨ましいぜ」

「ん？ 何故ですか？」

「ベッド広いじゃん」

「ああ、部屋変わりましたよっか？」

「いいよー、アンジエロとミナがまぐわったベッドで寝るの、なんかイヤだもん」

「そうですね」

「否定しねーのかよ」

「ハハハハハハ。ちなみにそのソファも現場ですから、汚れてたらすみません」

「お前、スゲエな・・・」

そのスゲエはどういう意味かはさておいて、自室に許可なく他人が入っていることは、俺的には相手が誰でも正直ムカつくんだけど、この会の進行にはこの二人の存在は非常に役立つはずだ。特別講師

として協賛願おう。

「ときにお二人に相談があるんですが」

「ん？ なにー？」

「ちょ、カイ！ やめろよ！」

「うるせえ」

「うっ！」

早速察知したらしいユアンが止めに入って来たのを再びジャブで制止。足を払って床に倒したユアンの上に乗って動きを封じることにした。

「ちょ！ どけよ！」

「うるせえ、ガルフ」

「ヤー」

「ちょ、マジ、むぐぐ……」

優秀な副官ガルフくんは即座に口を塞いでくれた。うむ、ご苦労。その様子を見ていたボニーさんとクライドさんはケラケラ笑っている。エルメスやシャンティが見たら引いている光景をこの二人は大爆笑だ。いいなあ、この二人。スゲエ楽。

「実はですね、先ほど会を創設しまして」

「会？ なんの？」

「その名も“ユアンの恋を応援する会”です」

「なにそれ！？ 超面白そう！」

「マジ？ オリバー恋してんの？ 誰に？」

「山姫さんです」

「ウォ！ オリバー女見る目あるじゃん！」

「ウォ！ イイね！ 俺も応援する！ で、相談って？」

意外にも超ノリノリ。あっさり会員になってくれた。足元でジタバタ暴れるユアンをドガツと踏みつけて大人しくさせて話を続けた。

「俺ら山姫さんの事よく知らないじゃないですか。彼女がどういう人なのかって事と、好きな男のタイプとかわからないかなと」

「あーそれもそっか。とりあえず姫は、優しくて面倒見がいい」

「でも怒ると超怖ええ」

「けど余程の事じゃなきゃ怒らないね」

「まーな。普段から割とテンション高めではあるけどな」

「あと仕事とかはテキパキこなすキャリアウーマン的な」

「そうだな。プライド高けーし、頭もいい」

「長生きしてる分、色んなこと達観してるみたいなところがあるね」

「彼女、何歳ですか？」

「それがよお、本人も覚えてねえらしくて」

「1000歳超えたあたりから数えるのやめたって」

「ええ！？ そんなですか！」

「そう。だから姫はアルカード以上に伝説級の吸血鬼。階級で言えばアルカードより上の真祖の中の真祖、吸血公主に当たるね」

「うおお、マジですか。ユアン、スゲエ高嶺の花じゃねーか」

「そうだね。格差はアンジェロとミナの比じゃないね」

おお、そうか。俺とエルメスは格差婚か。いや、今はそれはいい。山姫さんがそれほど高嶺の花だったとは。高嶺にも程がある。エベレストクラスの最高峰だ。しかも彼女の性格も最高峰だ。陥落させるには難しいタイプの女だ。

ユアンの上からどいてやると、背中と腹をパタパタ払いながら起き上って、睨まれた。

「マジでヒドいんだけど」

「気のせいだ。それよりお前どーすんだ。この手の女は基本的に自分より上の男じゃなきゃ認めねーぞ」

「上ええ？ どうしたら俺が上になれんだよ」

「階級は無理だな。少なくとも頼りがいがあるって、紳士で堂々とした余裕のある感じの男にならないと。今みてーなチキン野郎じゃ無理だぜ」

「ううーん・・・」

ユアンと共に頭を悩ませていると部屋のドアが開いて、エルメスが戻ってきた。俺らの様子に首を傾げるエルメスに、閃いたようにポニーさんが手をたたいた。

「そーだ！ 日本人の事は日本人に聞けばいいじゃん！」

「え？ なにがですか？」

「実はオリバーがさあ」

「うわあ！ やめてくださうっ！」

「だから黙れって」

再びボディブローでユアンを制止して口を塞いで、ポニーさんに話を進めてもらった。それを聞いたエルメスは嬉しそうにユアンに振り向く。

「やっぱりそうだったんだね！ 応援する！」

「お前気付いてたのか」

「当たり前じゃない！」

「毎回自分のことは気付かないのに、なんで他人の事には気付くんだよ」

「アーサーさんもカイもあり得ないと思ってたからじゃない？」

「ああなるほどな。つーかお前脱線させてんじゃねーよ」

「ええー、私のせいじゃないのに・・・」

「うるせえ。お前はどう思う?」

うーんと唸り始めたエルメスは、難しい顔をしながら顔を上げる。

「とりあえずアーサーさんの時だけど、あの人初対面の人にはA面使うの」

「A面?」

「あの人ね、人格を人によって使い分けるんだけど、A面の時はこの世にこれほど完璧な人がいるのかってほどの紳士を演じるのよ。優しくて親切ですごく気が利く、そう言う紳士」

「本性と真逆じゃねーか」

「そうなんだけど、その紳士っぷりに山姫さんは惹かれたらしいのよね」

「つーかお前もそれに騙されたんだろ」

「・・・まあね」

「つーかミナは基本紳士好きだよな。クリシユナなんて紳士の代名詞みたいな奴だし」

「そうですねえ。なんでカイを好きになったんでしょう」

「お前後で覚えてるよ。泣かすぞ」

「うっ、ゴメン!」

とりあえず今日はエルメスが泣いて懇願するまでお仕置きするとして、アーサーのA面ちよつと見てみてえな。俺絶対笑うな。しかし完璧と思われるほどの紳士か・・・元々ユアンは優しい気質だし、そう難しい事でもないだろうけど、西洋人と日本人では優しさも感覚が違うだろうからな。その辺考慮せねば。

「例えばさあ、お前ならこうしてくれたら嬉しいとか嫌だとか、日本人特有の物つてあるか?」

「そうだなあ。日本人は余程親密じゃない限り、基本的にハグとか

キスとか、そう言うボディタッチは全くしないんだよね。握手するくらいしか基本的に他人に触れないし、それも滅多にしない。女性  
は特に」

「ウソ吐け！」

「本当だよ！」

「お前いつもベタベタすんじゃねーか！」

「親密になったら話は別なの！ もう・・・で、多少仲良くなった  
ら是非トライしてほしいトキメキポイントがある」

「なに？」

「日本にはこんな言葉があるの。髪は女の命。山姫さんの黒髪はす  
ごく綺麗でしょ？ 褒めて褒めてその流れで髪を撫でる」

「ふーん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、ホントだ」

試しにエルメスの頭を撫でてみると嬉しそうにしている。その様  
子からエルメスの話にみんな納得。最後にエルメスの頭をグシャグ  
シャ撫でまわしてやると、鳥の巣になった髪を戻しながら猛然と抗  
議してきた。

「もー！ なにすんのよ！」

「お前その方がいいぞ。可愛さ5割増し」

「んなわけないでしょ！ もー、バカ！」

「お前の方がバカっぽいぞ」

「ムカつく・・・」

「そんな怒んなよ。折角可愛くしてやったのに、台無しじゃねーか」

「こんなの可愛くないもん！ やっぱカイ眼科行け！」

「お前こそレーシック受ける。脳に」

「意味わかんないし！ ムカつく！」

あー楽しい。エルメスマジ可愛い。なんでコイツこんなにイジメ

「がいがあるんだろ。やっぱりエルメスは俺を喜ばせるために生まれてきたな。間違いない。」

「キャンキャンうるさいエルメスを今度は普通に撫でて黙らせていると、ガルフがニヤニヤ笑っていたと思ったら、ユアンに振り向いた。」

「な？ “恋を応援する会”の成果がコレだ。羨ましいだろ」

「うーん・・・まあね。エルメスが可哀想な気もするけどね」

「でもお前見たろ。あのカイの顔。超幸せそうにしてんじゃねーか」

「ああ、エルメスが困ってんのが楽しくて仕方ないって顔だったな」

「確かにそう言う顔してっけど。よく見るよ、エルメスが可愛くしょうがねーって顔してんだろ」

「恐ろしきかな賢者ガルフくん。つい顔をパツとそむけたらなんかクスクス聞こえてきて、しまったと思った時は時すでに遅いだ。」

「な？ あんなんでも内心ラブラブなんだよ。人の見てねーとこじや溺愛してる。アイツはもう恋の奴隷、っーかエルメスの奴隷。それが“恋を応援する会”の戦果だ」

「誰が奴隷だ！ ふざけんな！」

「奴隷じゃねーか。エルメスのお願いに逆らえるようになってからそう言え」

「は！？ 普通に逆らうし！」

「いつも文句言いながら結局言いなりになるじゃねーか。振り回されて貢がされて。一見そうは見えねーけど、溺愛して甘やかして。」

「エルメスが可愛くて可愛くしょうがねーんだろ」

「カイってばそんなに私の事好きなの？」

「クソ！ 喜ばれた！ なぜか喜んでるエルメスが腹立つ！ 何故か知らんけど腹立つ！ 確かにそんなに好きだけどなんか腹立つ！」



「カイってば照れ屋さん。素直じゃないんだから」

腹立つ。セリフも口調も腹立つ。なんか上から目線でニヤケてんのが腹立つ。

「ああ、そうだなあ。俺はこんなにお前を愛してんのに、それを理解されないのが悲しいぜ」

「理解してるよ！」

「いやしてねーな。俺はお前を大事にしてやってんのに、お前は誰にでも愛想振りまく八方美人だもんなあ」

「そんなことないもん！ カイしか好きじゃないよ！」

「ハッ、どーだかね。怪しいもんだぜ。どーせ俺もクリシユナさんの二の轍を踏むんだろうよ。俺は死ぬまでヤキモキさせられながらお前に振り回されて、短い余生を過ごすんだろうなあ。お前は俺を大事にするって言ったのになあ」

「もう、わかつたわよう。ちゃんとカイのいう事きくから。そんな意地悪言わないで」

「じゃ、お前今日から俺の奴隷な」

「いつ！？ ヤダ！」

「お前言う事聞くて言っただろ。オラ、俺の飯持って来い」

「んもー！ 横暴！」

「さつさとしろ。じゃねーとこの場で犯す」

「んもー！ わかりました！」

憤慨しながらもエルメスはその場からフツと消えた。ヘッ、ざまあねえ。俺の上に立とうなんざ100年早ええ。

なんかユアンからはスノーホワイトな視線を感じるけども、躡とはごうやるんです。のさばらせちゃいけません。

「アンジエロ、お前スゲエな」  
「なにその起死回生」  
「アイツ本来奴隷体質じゃないですか」  
「ああ、まあね」

ボニーさんの相槌と共に、沢山血を抱えたエルメスがフツと現れた。

「おお、お前もしかしてみんなの分持ってきたのか」  
「そーです！」  
「エライなお前。さすがエルメスは気が利くなあ」  
「そーあ？」  
「そー。いい子いい子」

そう言つて頭を撫でると、ブスくれていた顔は段々笑顔になつて嬉しそうに笑う。マジコイツ単純。バーカ。

単細胞エルメスがみんなに血を配つて、ソファに腰かけて再び作戦会議再開。

ガルフ 「つーかエルメスは普段から気が利くよなあ」  
クライド 「そーだな。昔っからな」  
エルメス 「んー？ 普通ですよ。心掛けてはいますけどね。気配りは日本人の美德ですから」  
俺 「ふーん、じゃあ日本人に西洋人が紳士とか気が利くつて認定されんのは、ハードル高そうだな」  
エルメス 「うーん、確かに海外来てよく思ったけど、なんでコレしてくんないの？ つて思う事は多々ある」

俺 「例えば？」  
エルメス 「買い物した時こつちが言わなきゃ小さいものとか袋に入れてくれない、とか」

俺 「普通言わなきゃしねーだろ」

エルメス「日本は言われなくてもするのが普通。むしろ断られない限りは絶対する」

ボニー 「確かに日本は行き過ぎつてくらいサービス行き届いてんだよね。日本のサービス精神は感動するレベルだよ」

クライド「しかもそれに慣れきってる」

ガルフ 「つーことは高級ホテルのホテルマン並に気遣わなきゃ、紳士とは認定されねーな」

ユアン 「うえー、マジでハードル高い」

面倒くせえ、日本人。ただ優しいだけじゃ紳士じゃねーのかよ。良かった、俺日本に生まれなくて。

とりあえずユアンが山姫さんのハートを掴むためには、相当気と頭を使う必要があるのか。元々女に気遣いするような環境にいなかっただけに、マジでハードル高けえ。

みんなが頭を悩ませていると、ふと思いついたようにエルメスが顔を上げた。

「や、もしかしたらそんな難しくないかも」

「なにが？」

「多分、山姫さんは該当すると思う」

「だから何が？」

「ユアンも該当すると思うんだよね」

「だから何がだよ！」

一向に話の進まないエルメスに一瞬キレたら、「もう、すぐ怒るんだからー」と溜息を吐かれた。溜息吐きたいのこっち。

「あのね、日本で一時期草食系男子とか年下系男子ってのが流行ってたんだ」

「・・・なにそれ」

「最近日本でも女性の社会進出が増えて、地位の高い女性が増えたことでストレス抱える人が多くなったのよ。それで優しくて穏やかで年下の可愛い男の子に癒されたいって言う」

「あーなるほどな。比較的ペット的な」

「ああ、それに近いかもね。そう言う人って基本面倒見もいいから、紳士に甘やかされてばかりってよりも、母性くすぐられる人の方がいいんだよ」

「母性くすぐられるような奴って、どんなだ」

「基本的には優しくて、ちよつと頼りなくて。でもいざって時には男らしさがあるといいよね。ただのYESマンはダメ」

「ああ、じゃあユアン、今のままで案外イケんじゃねーか？」

「うーん、そーかあ」

女心は小説より奇なり。複雑怪奇な女の思考回路はよくわからん。なんだ年下系男子って。

クライド「じゃあよお、俺って何系男子？」

エルメス「私は吸血鬼の男の人はみんな化物系男子って呼んでました」

ユアン「そのままじゃん！」

エルメス「強いて言うならクライドさんはチンピラ系です」

クライド「やつばそのままじゃねーか」

俺「じゃあ俺は？」

ガルフ「お前は鬼畜系だろ」

エルメス「ああ、だね」

ユアン「そのままっつーかそのものだ」

クライド「鬼畜って言葉がこんなに似合う奴、アンジェロくらいだな」

ボニー 「言えてるー！」

満場一致かよ、チクシヨウ。天使の再来のこの俺が鬼畜系とかふざけんな。俺ほど慈愛に満ち溢れた男はそうそういねーぞ。

つーかまたしても脱線。すぐ脱線するのは吸血鬼の習性か？

「んなことより、現状維持も可となりやウダウダやる必要はねーな。ユアン、声掛けに行け」

「ええ！ でも何話せばいいかわかんないし」

「バカ、今がチャンスだぞ。失恋した女程落としやすい女はいねえからな。話なんて普通でいいだろ。覚えててくれて嬉しいです。あの時はあんまり話せなかつたから、二人でゆっくり話したいと思つてたんです、とか」

「ふ、二人で・・・」

「そーそー。随所にあなたに興味があるんですって匂わせる単語を織り込んで。後は仕事の話とか彼女の話とか聞いて、疑問形で相槌返して聞き役に徹しろ。女は話すの好きだからな」

「さ、さすが恋の百戦錬磨」

「あと、「あなただけ」みたいな単語を連発しろ。特別扱いは誰でも喜ぶ。それから話す時に「あの」じゃなくて名前で呼べ。名前を連呼されると承認欲が満たされて親近感が上がる。それから・・・」

「あ、ちよつと待って！ メモるから！」

一度に言いすぎて覚えられないのか、ユアンは突然ストップをかけて、それを聞いたエルメスがメモとペンを持ってきた。

「ハイハイ、それから？」

「それから、さりげなく彼女の仕草を真似しろ。同じ仕草をすると無意識に好感を持つ。あと、足を組むときは彼女に向けて、姿勢を彼女の方に傾ける。コレはあなたに興味がありますっていう深層心

理のサインだ。これを逆にやると、この場から逃げ出したい、の合図だ。あと大事なものは、お世辞を言うのも言い過ぎには気を付ける。ただチャホヤすりゃいいってもんじゃねえからな。アメとムチを使い分ける。山姫さんだったら、そうだな「つれない事言いますね、でもそう言うノーブルなところ、俺は好きですよ」とか。で、最後にデカく褒める。「あなたみたいな魅力的な人に今まで出会ったことありません」くらいに荒唐無稽にな。最初は「何を言ってるのかしら」と思われても効果は後日出てくる。で、ここが一番重要。会話が一番盛り上がったところで話を切り上げる。すると、「楽しかったな。また話したい」と思われる。告白する時ははっきり「好きだ」と言え。これで完璧だ」

会長の俺によるモテ講座に一同感心。一人だけ俺の可愛い子羊ちゃんが引いてるけども、まあ、いい。

ユアン 「さすが・・・」

ガルフ 「お前マジさすがだな。さすが百戦錬磨の女ったらし」

クライド 「お前スゲエな。モテるだろ」

俺 「モテますよ」

ボニー 「うわぁ、ミナ、気を付けなきゃ」

エルメス 「本当ですね・・・」

疑惑の眼差しを向ける俺のエルメス。そんなエルメスに優しく微笑み、肩を優しく抱き寄せて、髪を撫でる。

「バーカ。エルメス、今はお前にしかモテたくねーよ」

「ホント？」

「当たり前だろ。後にも先にも、俺にはお前しかいないんだから。知ってるだろ？」

「うん・・・」

「愛してる。ずっと、お前だけ」

そう言いながらエルメスの左手を取って、指輪にキスしてキュッと手を握ってにっこり。すると、ほんら引っかかった。エルメスはほんのり顔を赤くして嬉しそうにしてやがる。このアルティメットバカ、単細胞エルメス。

バカなエルメスがおかしくて思わずニヤツと笑って「まあこんな感じだ」と、パツと手を離してみんなに向き直ると、途端にエルメスはムツとした。

エルメス「悔しい！ 思わずドキッとしちゃった！」

ボニー「なんかあたしまでドキッとしちゃった」

クライド「え、ちょ、ボニー？」

ユアン「うおお、もうさすがとしか言いようがない」

ガルフ「マジさすがだな」

ユアン「スゲエ、師匠って呼んでいい？」

俺「おう、呼べ呼べ」

これでユアンの準備はバッチリ。後はユアン次第だ。頑張れユアン。会長として壁の影から生暖かく見守るぜ。

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

そう言うわけで戦場に舞い降りたユアンと俺達。戦場と言つ名の  
リビングを覗くと、とんでもねえ邪魔者がいた。

キルシュ「ねーねー、姫さんって彼氏いるんスカー？」

山姫 「残念ながらいないわ」

リオ 「マジ？ そんな美人なのに？ 休みの日とか何やってん  
スカー？ 彼氏いないなら暇でしょ？」

山姫 「彼氏作る暇もないのよ」

パーシー「つーか姫さんマジ綺麗。超美人」

山姫 「よく言われるわ」

なんとチャラ男3兄弟が山姫さんを口説き中。それを目の当たり  
にしたユアンは悶絶。しかしそれを軽々躲す山姫さん。伊達に長生  
きしてねえな。

すぐさま飛び蹴りをお見舞いしたいところだが、これはきつとユ  
アンの勉強になるだろうと思つて、影から見守ることにした。つい  
でに気の利くエルメスが、光学迷彩でみんなの姿を消してくれた。  
それで姿が見えないのを良い事に、ソファの付近までそーりと近



づいて監視することに。

結構近くまで近づいても、勿論4人は俺達の存在になんて気付きゃしねえ。相変わらず3兄弟は必死に口説いてる。

リオ 「ねーねー山姫さん、趣味とかなんスか？」

山姫 「趣味？ と言う程ではないけど、華道は好きね」  
キルシュ「カドーって？」

山姫 「生け花よ。西洋で言ったらフラワーアレンジメントに似てるかしら」

パーシー「へえー。花好きなんスか？」

山姫 「ええ。女は綺麗な物が好きだもの」

キルシュ「花何が好きなんスか？」

山姫 「一番好きなのは椿ね」

リオ 「へえー意外。薔薇とかじゃないんスね」

山姫 「そうね」

パーシー「他には何が好きツスか？」

山姫 「そうね・・・若い男が泣き叫んで命乞いをする様を見るのが好きよ」

キルシュ「・・・へ、へえー」

ダメだ。アイツら全然なつてねえ。俺ならとっくにデートに持ち込んでるぞ。アイツらのダメさをすぐさま見破った山姫さんに、バツサリ拒絶されてんじゃねーか。

3兄弟のダメさを目の当たりにした俺は、すぐさま戻るように一同に合図を送って、本営（壁の影）に戻る。

「オイ、ユアン。わかったか？」

「ダメなのは分かったけど、どうダメなんだ、あれ」

「趣味を聞くのはいい。誰だって自分の好きなことを話すのは楽しいからな。でも好きなものを否定したり、知らないからと言って話題を切り替えるのはNGだ」

「ああ、確かに」

「自分が知らないっつーのは一見不利のように見えるが、とんでもねえ誤解だ。知ったかぶりよりは遙かにマシ。お前だって車とか飛行機の話聞かせてって言われたら何時間でも喋れんだろ」

「おお、確かに」

「でも山姫さんが椿好きってすごく神秘的。お仕事に関係あるのかな？」

「ん？ どういうことだ？」

「日本で言う椿のイメージって言うのは、死を意味するの。椿の花が落ちる様は、首を斬り落とされた人に似てるから」

「なんだその発想。日本人怖ええ」

「大昔は処刑の際、首を斬り落とすものだったから。日本人は死ぬ事に意味を見つけるのが好きだし。武士道とは死ぬ事と見つけたり、よ」

「ふうん、てことは山姫さんって人の生死にはかなり真摯なんじゃないか」

「多分ね」

山姫さんは長生きしてるだけあってかなり頭もいいし、達観してるってことは色々経験豊富で知恵もある。そう言う人は自分の生き方に哲学を持っていて、人をよく見ている。

プライドが高く、それでいて穏やか。怒るとメチャクチャ怖いって事は、面に出さないだけで本来は感受性の豊かな人か。

しかもあんだだけの美人で長生き。口説かれるのも褒められるのも

辟易するほど慣れてる。はっきり言って超難しい女。俺には、だけど。でもユアンには案外イケそうだ。

考えがまとまって、ユアンに向いた。

「オイ、俺があの子バカ蹴散らすから、お前は山姫さん連れて庭に出ろ」

「え？　なんで？」

「話がしたいから散歩しませんかつつて、エルメスのバラの所まで行け。丁度咲いたばかりだからな。で、あのバラにまつわる話をする。エルメスやアーサーやジュリオ様やお前の事なんかを軽くな」

「わ、わかった。その後は？」

「その後は、山姫さんに任せろ」

「ええ？　なんか不安だよ」

「心配ない。じゃ、ちょっと蹴散らしてくっから」

不安げに見つめるユアンの肩を叩きリビングの4人のとこまで駆け寄って、3人纏めて飛び蹴りをお見舞いして文字通り蹴散らした。

「オラア！　てめーら何やってんだ！」

「痛つてええ！」

「テメエら、エルメスとボニーさんとクライドさんのお客様になんて失礼な真似してんだ。諦めて退散するか死んで詫びるか、どっちか選べ」

「ナンパした位で殺す気か！」

「殺す気だ」

「また渾身の力で蹴りやがって！　つーかなんか強くなってるない！

「？」

「なんだよ！ 俺らの説得のお陰でエルメスと付き合えたくせに！」

「そーだ！ 自分こそ“生けるナンパ神”のくせしやがって！」

「よーし、3つ数える間に立ち去らなきゃ冥府から死神がナンパしに来るぞ。いーち、にーい、さー・・・」

「わ、わかった！ クソウ・・・カイのバーカ！」

見下ろしながら指をバキバキならして、キルシユの胸ぐらを掴んで拳を振り上げたら、何とか諦めてくれたようで退散した。

それにしても生けるナンパ神って、なに？ 俺いくつアダ名あんの？ アホか。そしてエルメスに聞かれたらどうしてくれんだ。

ハア、と溜息を吐いて山姫さんに向くと、可笑しそうにクスクス笑っていた。

「あー、山姫さん、ウチのバカどもがすいませんね。アホで」

「気にしないで、慣れてるから」

「そのようですね。でもエルメスが気にしますから」

俺の言葉に何故か山姫さんは一瞬間をおいて、少し下に視線を逸らした。はっはーん、これは「気にしてるのは、ミナだけ？」ってことか？ すぐに視線を俺に戻した山姫さんは、いたずらっぽく笑ってみせる。

「それにしてもアンジェロ、あなた乱暴すぎよ」

「いーんですよ、バカにはあれくらいがちょうどいいんですから」

「ミナはイジメてないでしょうね？」

「まさか。世界一大事にしてやっていますよ」

「胡散臭いわよ」

「よく言われます。あ、そろそろ戻ります。俺の大事なエルメスは、俺がいなきゃ淋しがるんで」

「あはは、ミナはシアワセ者ね」

「全くです。じゃ、失礼します」

そう言っただアに振り向いて大本営（と言う名の壁の影）に戻ると、何故かむくれる俺の大事なエルメス。

「別にカイがちょっといないくらいで淋しがったりしないし。自惚れないですよ」

さっきエルメスでお手本演技をした事を根に持っているのか、そう言っただふくれっ面だ。俺的には正直な話、自惚れっただより願望に近いけど。仕方がないのでご機嫌取りだ。エルメスにちょっとシユンとした顔をしてみせる。

「そーか、俺は淋しいけど」

「え？ そうなの？」

「当たり前だろ、俺は本当はお前から片時も離れたくないんだから、淋しいに決まってる」

そう言っただ少し淋しげに微笑んでエルメスの頬を撫でると、ふくれっ面は照れたような笑顔になった。

「えー、嬉しい。カイもそう思うことあるんだね」

「当たり前だろ」

「カイはいつもしれっとしてるから、そう言っただ私だけかと思っただ」

「お前が傍にいなきゃ、俺は昼も夜もあけねーよ」

「そんなに？ 嬉しい。本当？」

「いや、ウソだけど」

「ええ！？ んもー！ バカ！」

エルメスマジ可愛い。なんでお前そんな面白いの？ スマイルは途端に怒りんぼだ。本当コイツの百面相はスゲーな。なんつーか、めまぐるしい。

むきー！ と憤慨するエルメスに萌えて、笑いながら頭を撫でた。

「お前は本当可愛いな」

「ム力つく！ バカにして！」

「バカにしてねーよ。可愛い可愛い」

「むう・・・いや、やっぱりバカにしてるよね！」

「いや、ミナあんたマジ可愛がられてんね」

「本当エルメスが可愛くてしょうがねーんだな」

おっと、俺としたことが他人の存在を忘れるとはどういう事だ。

割と素直な感想を述べてしまった。エルメスはバカにされたと思ったらしくて更に怒ってるけども、周囲のモブはニヤニヤだ。なんだよ、可愛くてしょうがねーよ。悪いか。

ボニーさんとガルフの茶々にちよつと正気に戻った俺は、山姫さんを放置中だったことを思い出してユアンに向いた。

「ユアン、今だ、行け」

「う、うん」

「言った通りにな」

「わかった」

勇気を振り絞るように深呼吸するユアン。とてもアラ5世代のやることとは思えないけども、案外恋とはそついうもんか。よしつと

気合を入れたユアンに、エルメスが笑って向いた。

「ユアン、どんな口説き文句よりも、スマイルだよ。スマイル」

そう言って笑顔を作って指を頬に当てるエルメスに、ユアンもわかった、と笑って山姫さんの許に歩いて行った。

それを見届けて、再び俺らはエルメスの光学迷彩で静かに尾行。ユアンは山姫さんの前まで行くと、ちよっとオドオドしながら話しかけた。

「あ、山姫さん、あの、今いいですか？」

「ええ、どうしたの？」

「山姫さんに見せたいものがあるんです。一緒に来てもらえませんか？」

「ええ、いいわよ」

山姫さんにはっこり笑ってユアンの隣に並んで、二人は並んで庭に出て行った。連れ出しには成功。こっからが本番だ。頑張れユアン。

二人は庭に出ながらもゆっくり少しずつ会話しながら歩いていく。この二人のカップリングはなんだか、穏やかと言っか和む。不思議だ。

「急にすみません。俺、10年前はあまり話せなかったから、山姫さんと二人でゆっくり話したいと思って」

「ありがとう。あたしもよ」

「え、う、あ、ありがとうございます」

山姫さんの切り替えしに狼狽えて赤くなるユアン。なにアイツ。なんか可愛いんだけど。薔薇の前に到着したユアンはその場にしゃがんで、続いて山姫さんもその隣にしゃがんだ。

「あら、珍しいわね」

「でしょ？ これ、エルメスのバラなんです」

「へえ、ミナの。あの子バラなんて好きだったんだ」

「エルメス庭いじり好きらしいですよ。前イタリアに住んでた時も造園業者と専属契約して、エルメスの企画した庭を造らせてましたから」

「へえ、なんだか意外。でも本当に好きなのね。育てるの難しいのよ、アプローチは」

「あ、これアプローチって名前なんですか？」

「そうよ。日本の企業が研究開発したバラなのよ」

「山姫さん詳しいですね」

「花好きだもの。私もミナの企画した庭、見てみたいわ」

「綺麗でしたよ。青と白の花が咲き誇ってて、春になったら桜が咲くんです」

「ああ、桜はいいわね。桜は日本人の心だもの」

「なんかそんな事言っていました。桜は心の美しさの象徴なんだとか。でも、今はもうその庭も荒れ果てて、見る影もないようです」

「やっぱり、あの戦いのせい？」

「俺は直接見たわけじゃないけど、枯れ果てて荒れ果てて、あまりの荒廃ぶりにエルメスが泣いてしまう程だって、カイが」

「そう……」

穏やかだった雰囲気は、途端に侘しさに包まれる。それを話してしまったユアンが慌てたように山姫さんに笑顔を向けた。

「あ、でも、その時にこのバラの種、見つけてきたらしいんです。」



カイが見つけて、エルメスがここに植えたんですよ」

「そう、泣いたのも、無駄じゃなかったのね」

「そうですね。このバラはエルメスにとっては思い出深いもので、俺らにとっても」

「オリバーにも？」

「はい。このバラを見てると、ジュリオ様を思い出します。ジュリオ様もこのバラは大事にしてて、“100年前のミナ”を思い出すと行ってたから」

オリバーの言葉に山姫さんは少し視線を持ち上げると、すぐに思い出したような顔をして見せた。どうやらアーサーとジュリオ様の因縁は、ボニーさんとクライドさんがチクリ済のようだ。

薔薇に手を伸ばすユアンに、山姫さんもそれに倣ってバラに手を伸ばして柔らかい花卉に白い指を触れた。

「後悔、してる？」

「全然してないって言えば、ウソになります」

「ジュリオって人の事、好きだった？」

「はい。優しくかったし、育ての親ですから。でも、ジュリオ様のしただことはエルメスは許そうとしてるけど、それが有難い反面俺達にも辛くて。なんでこうなっちゃったのかわかって。あの頃は楽しかったから、余計に」

ユアンの言葉を聞きながら、ユアンに向けていた視線をバラにやめた山姫さんは、少しだけ微笑んで口を開いた。

「あたしね、仕事の都合上ジュリオって人と良く似た人には、結構出会うのよ」

「そつ、なんですか？」

「ええ、そう言う人ってね、怖いよ、憎悪だけで孤独に生きてるから。憎悪こそが、その人のアイデンティティと言えるほどになっているから、その憎悪を誰かに消されてしまうことが、怖い。だから人を欺いて、人を裏切る。憎悪を捨てて人を信じて、また裏切られるのが怖いから」

「そつか、そうかもしれませんね」

「憎悪を失ったら、その100年が無駄になる。憎悪が彼のプライドになっていたんでしよう。だけど楽しく過ごしていたのなら、もしかしたらジュリオも葛藤していたのかもしれないわ。ミナや龍たちと和解して楽しく暮らす未来と、自分の恨みを晴らす未来と。だけど、引き返せなかったのかもね」

「ジュリオ様、悩んでたのかなあ」

「もとが優しい人なら、そうかもしれないわ」

「そつか、それなら少しだけ、救われる気がします」

顔を上げて山姫さんに儂げに微笑んだユアンに、山姫さんは頬杖をつくと優しく微笑んでユアンの顔を覗き込むように見つめる。

「どうして私にその話をしようと思ったの？」

「どうして、かな。なんか山姫さんなら俺の欲しい言葉を知ってると思ったから、かな」

「年の功って言いたいの？」

「やだな、違いますよ。クライドさんが言ってたんですよ。山姫さんは優しくして面倒見がいいって。だから、それに甘えなくなったのかも。すいません」

「ま、いいけどね。若い子の相手するの、嫌いじゃないし」

山姫さんはそう言いながら頬杖をついたのと空いた手でユアンの髪を撫でて、それにユアンは驚いた表情を浮かべた。

「髪、染めたの？」

「え、あ、はい。人相が割れてるから、カモフラージュで」

「あたし、前の金髪の方が好きだわ」

「あ、じゃあ戻そうかな・・・あ、でもカイに怒られる」

「あたしが戻してって言うても？」

「・・・戻します」

探るような視線を向けた山姫さんに負けたユアンはあっさり戻すと決めて、それを聞いた山姫さんはいたずらっぽく笑ってみせる。その時、強い風が吹いて山姫さんの長い髪を攫って、ユアンの頬を撫でた。

「あ、ゴメンね。長すぎよね、切ろうかしら」

「ダメ」

ユアンの肩に掛かった髪を取った山姫さんがそう言葉を放った瞬間、その手を握ってまっすぐに見つめるユアンに山姫さんはキョトンとした視線を向けて、一瞬見つめ合った後ユアンはすぐに正気を取り戻して手を離れた。

「あ、す、すいません。山姫さんの髪、すごい綺麗だから、勿体ないなって思っちゃって。すいません」

自分でしたくせに自分の行動に顔を赤くして俯いて謝罪したユアンに、山姫さんは自分の髪をつまみながら眺めた。

「オリバーがそう言うなら、切るのはやめるわ」

「え、あ、いや、俺の希望なんて」

「あたしがそうしたいのよ」

「あ、ありがとう、ございます」

オイオイなんだよ、いい雰囲気じゃねーか。二人の甘酸っぱい雰囲気に「あとは若いお二人で」と、俺らもニヤニヤしながら庭から退散して、二人っきりでお散歩デートを楽しんでもらう事にした。

屋敷に戻って窓から二人の様子を覗いていると、二人とも楽しそうに会話している。その様子に会員一同ご満悦だ。

エルメス「なんか、なんだろう。あの二人見るとドキドキしちゃう」

ボニー「なんかすごいじれったい感じがするんだけど、なかなか進展しなさそうところが大人の恋っぽくて、イイね」

ガルフ「イイなあ、なんか俺も恋愛したくなってきた」

クライド「クリスが？　なんか似合わねえな」

ガルフ「カイほどじゃありませんよ」

エルメス「確かに」

俺「なんでお前が納得すんだよ」

しばらくすると2人は屋敷に戻ってきて、戻って速攻ユアンはボニーさんとクライドさんとガルフに連行されて、事情聴取を受けているようだ。ニコニコするエルメスの隣に座った山姫さんは、俺とエルメスにニヤリと笑って思わぬことを言った。

「ミナ、なにを企んでるの？」

「え？なにをって、何も企んでませんよ」  
「フン、バカね。姿を消しても、足音と気配が消えてなきや意味ないわよ」

さすが吸血公主。光学迷彩は山姫さんの前では役立たずだったようだ。内心冷や汗の俺と、リアルに冷や汗のエルメスに山姫さんはいたずらっぽく笑った。

「あんた達、お節介ねえ」

「え、あ、う」

「でも、迷惑じゃないわ」

戸惑うエルメスにそう言って笑った山姫さんは、「お風呂いただくわね」と立ち上がってリビングから出て行った。

それを黙って見送ってエルメスと顔を見合わせると、エルメスは嬉しそうに微笑んだ。

「山姫さん、もしかして前向きに考える気になったかな？」  
「かもな」

「山姫さんも幸せになるといいな」

「そうだな」

「それがユアンだったら言うことないね」

「だな。意外にうまくいくかもな」

「あとは本当に応援するだけだね」

「ああ、ユアン次第だな。お前の新技も役に立たねえし」

「役に立たないとか言わないの！」

「俺は事実を言ったまで」

お節介。確かにお節介だな。でも、俺はユアンに幸せになってほしいと思うし、エルメスも山姫さんの幸せを願っているから、いざとなりゃジユノ様。パワー駆使してでもくっつけてやる。

いつの間にか、俺もエルメスに感化されたい。みんなが、幸せになりますように。

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

セレスに餌をやるエルメスを見て、勿体ない事をしたと思い出した。

「エルメス」

「んー？」

「こっち来い」

「ちよつと待って」

「さつさと来い」

「自己中！ そっちが来れば？」

「チッ！」

セレスに餌をやっている最中に呼びつけたせいか、反抗的なレジスタンス・エルメス。仕方なしに舌打ちしつつ立ち上がって、窓辺のセレスの鳥籠を覗くエルメスに歩み寄って、後ろから抱きしめた。

「ん？ なに？ どうしたの？」

「別に」

「意味わかんない」

そう言いながらも嬉しそうにしたエルメスは、セレスの餌箱を窓辺に置いて、俺の腕に小さな手を添えて頭を預ける。

そんなエルメスが可愛くて、より一層強く抱きしめて服の中に手を侵入させると、エルメスは慌てだした。

「え、ちょ、急に何!？」

「昨夜お仕置きすんの忘れてた」

「お仕置きって、私何もしてないよ!」

「昨日泣かすつつつたる」

「イヤー!」

「うるせーよ。大人しくしろ」

「ヤダ! なにも今じゃなくなつていいでしょ!」

「ダメ、今してーの」

「もう、やっ」

首筋に舌を這わせると、エルメスはすぐに嬌声を上げる。だいぶ俺に体が馴染んできたらしい。エルメスの両足の間に膝を割り込ませて、足を閉じないようにして、スカートの中に手を滑らせると、案の定エルメスは必死に閉じようとする。

「ま、待って、こんなところで」

「お前が来いって言ったんだろ」

「だからって・・・んっ」

「お前が恥ずかしがらなきゃ、お仕置きの意味ねえからな」

「や、ちょ、カイ! やめて!」

「ダメ」



「や、あつ！ もう！ ヤダ！」  
「グッ！」

とうとう怒ったエルメスは俺の鳩尾に渾身のエルボーをブチ込んだ。そのはずみで手を離れたすきにエルメスはパパッと服を整えて、デスクにもたれて悶える俺の頭をバシッと叩いた。

「バカじゃないの！ やめてよ！」

「だーかーらー、お前が恥ずかしがらなきゃお仕置きの意味ねえだろ」

「最低！ 限度って言葉知らないの！」

「さあ？ 知らねえな。お前こそ本気で肘鉄食らわせた上に叩きやがって」

「当たり前でしょ！ もう、バカなんだから！」

「なんでそんなイヤがるんだよ。お前俺の事好きなんじゃねーのよ」

「好きだけど、なんでいつも私のいう事無視するのよ！」

「そりやするだろ」

「カイはいつも自己中すぎなのよ！」

「ハア？ 我儘放題のお前に言われたくねーよ」

なんだか段々と険悪になってくる口論。徐々に雰囲気重くなつてなんだか引き下がれない空気に。

「カイこそ、本当に私の事好きなの？ 未だに信じられないよ」

「何言ってるんだよ。むしろそれはこっちのセリフだ」

「どついう意味よ」

「お前まだ俺よりクリシュナさんが好きで、クリシュナさんへ

の義理立てしてんだろ」

「違うわよ!」

「ハッ、まあ別にいいけどよ。俺はそれも含めてお前を愛してるけど、お前はそうじゃねえみてーだな」

「違うつてば!」

「どーだかね。お前、誰にでも愛想振りまいて調子良い事ばっか言うもんな。お前は気紛れだし、お前の言う事なんかいちいち信じてられるかよ」

「違うつて言ってるじゃない!! カイのバカ! 最低!!」

「! 痛つてえ・・・あ、オイ!」

俺の言葉に怒ったエルメスは俺に思い切り平手打ちして、部屋から走って逃げだしてしまった。すぐに追いかけようと部屋から出るもエルメスの姿は見えず、代わりにボニーさんとクライドさんが立っていた。

「ミナと、ケンカでもした?」

「・・・はい」

「お前大事にしてるつて言っただろ。あれはウソか」

「ウソじゃないです。でも、悪いのは俺です」

「じゃ、さっさと謝つてこい。下降りてったから」

「ありがとうございます」

二人に言われて礼を言つてすぐにリビングに降りると、俺を見つけたランスが慌てて走ってきた。

「カイ! エルメス様となにがあつたの!？」

「ケンカした、けど・・・どうした?」

「エルメス様、指輪外しちゃったよ!」

「はああああ!?!」

ランスが驚く俺に突き付けてきたのは、まぎれもなく俺がエルメスの左手にはめたブルーダイヤの象嵌された金細工の指輪。

なんてことだ、まさかの婚約破棄! あんなことで、たったあれだけの事で!? あり得ねえ! ショック、自殺級ショック!

悶絶する俺にランスは一体何があったのかと詰め寄ってくるけど、ショックと怒りで我を忘れそう、俺。いつそ泣きそう、俺。

頭を抱えて壁にもたれ掛って、肩を揺するランスに視線を向けて口を開いた。

「ランス・・・頼みがあるんだけど」

「エルメス様どつかいつちやって、どこいるかわかんないよ!?!」

「いや、ガルフの部屋行ってこい」

「え? ガルフの部屋? なんで?」

「ガルフの部屋の戸棚からファントム持ってきて、俺の眉間をプチ抜け」

「な!?! ちょ、大丈夫!? ショックで頭おかしくなった!?!」

「・・・なった。だからもう死にたい。エルメスに嫌われたら、俺もう生きていけない」

「ちょ、本当大丈夫!? ていうかどんだけ!?!」

「大丈夫じゃねえ、全然大丈夫じゃねえ」

「うつわあー、ダメだこりゃ」

「そーだ、俺はダメだ・・・死ぬ。エルメスに捨てられた俺なんて生きる価値ないもんな。今の俺に比べたらティッシュの方が価値がある位だ。いつそ軍手にすら負けてる。エルメスに嫌われたら生きる意味ねえしな、やつぱ死のう。そうしよう。ランス、ファントム持ってきて。俺死ぬから。死んだらクリシュナさんに謝らなきゃな、北都にも怒られんだろうなあ」

「マジどんだけ・・・しつかりしなよ」  
「もう無理、俺は死ぬんだ・・・」

呆れたように盛大に溜息を吐くランスに抱き着いてメソメソ言っている、急にランスが俺の背中をバシバシ叩いて後ろを見るように言う。血の気の失せた顔で振り返ると、これまた呆れたようにしたシャンティが腰に手をやって立っていた。

シャンティの姿にちよつと正気を取り戻した俺は、すぐさまシャンティに掴み掛った。

「シャンティイイイ!!」

「うわっ！ なんだよ！」

「エルメスどこだ！？ お前の部屋!？」

「・・・さっきまでいたけど、家出するって言って消えた」

「はあああ!？ マジで!？」

「マジで」

「エルメスどこだよ！ どこ行った!？」

「知らない。自分で探しなさい」

「シャンティ頼むから教えるよー!!」

「だから知らないってば。ていうか、必死だね」

「そりゃそうだろ！ もう俺本っ当エルメスがいなきゃダメな男なの！ うわあー！ エルメスー！」

「うわっ！ ちよ、離れてよ！」

半ば錯乱状態の俺が思わずシャンティに抱き着いたら、シャンティは驚いて必死に引きはがそうと大暴れする。しかしそれ以上に違和感が半端ない。

「ダメだ！ 抱き心地が違う！ お前はエルメスじゃねえ！」

「違げーよ！ アンタ頭大丈夫か！？」

「いや、シャンティさん、ダメみたい」

「エルメス、どこ行つたんだ、エルメス、エルメス……」

「……マジでダメだな」

再び壁とイチャつく俺にシャンティとランスは深い溜息を吐いている。エルメスの指輪が手元にある以上、エルメスは本気だ。しかも行先をシャンティにすら告げてないし、どうしたらいいんだ。

「カイ、僕らも探すからしっかりしなよ」

「エルメス、エルメス……どこいったんだ、俺を置いて、エルメス……俺死ぬけど、確かに死ぬけど、エルメスに嫌われて死ぬなんて予期してなかった。俺はエルメスがいなきゃダメなのに。本当はエルメスがずっと傍にいなきゃダメな男なのに。昨日言ったことも存外ウソじゃなかったのに。エルメスの事本当に愛してるのに。」

そりゃ俺が悪かったけど、俺が最低だからいけなかったけど、俺が最低なのなんか今に始まったことじゃねえじゃん。出会ってものの30分でレイプしようとした上にドラッグキメてやるうとした男だぞ。ちょっとキレたくらいで撃ち殺そうとする男だぞ。別にキレなくても撃つ男だぞ。人殺ししながらエルメスイジメて遊べる男だぞ。俺に正常を求める方が間違ってる。つーかエルメスも俺が異常者だつてわかってるくせに。わかってて好きだつて言つたくせに、やっぱりアイツは俺の事愛してなかったんだ。そうだ、俺はやっぱり騙されてたんだ。エルメスは俺が翻弄されて溺愛してるのを内心ほくそ笑んでいたに違いない。でもエルメスがどんな悪女でも、俺はもうエルメスなしじゃ生きられないんだよ。エルメス、エルメス、俺はこんなにお前を愛してるのに、お前はちょっとケンカしたくらいで婚約破棄する程度だったのか。それってやつぱり、俺は死んだ方がいいって事だよな。そうだよな。よし、死のう」

「……なんかすごい衝撃的な事件を複数聞いたんだけど、どうしようコイツ。本当異常者だ。ヤバイ」

「シャンティさん、とりあえずこの異常者、病院送りにしましょうか」

「そうだな……」

「コイツ、変なところジユリオ様に似たなあ」

壁と会話する俺を病院送りにしようと企むシャンティとランスの前に、ガルフが姿を現した。ガルフはいつも通り半笑いで俺を見ているけれども、俺は今それどころじゃない。

やれやれと言った風に溜息を吐いたガルフは、壁とスキンシップを図る俺に一通の手紙を差し出した。それを受け取ると、ガルフはまた溜息を吐く。

「それ、ボニーさんとクライドさんがお前のデスクの引き出しから見つけてきたって。エルメスが、アーサー様にあてて書いた手紙だ」

「アーサーへの？　なんでそれを俺に？」

「まあ読んでみる」

他人宛の手紙を勝手に読むのは気が引けたが、今はエルメスの事で頭がいっぱいで、ガルフの言う通りに手紙を広げた。

拝啓　アーサーさん

最近良い事尽くしです。ボニーさんとクライドさんをお迎えに行つて、久しぶりに山姫さんに会いました。今、山姫さんもインドの

お屋敷に滞在してくれてるんですよ。凄く嬉しいです。

そもそもアーサーさんが迎えに行くって言うたのに、私が行ってしまっでごめんなさい。でも、どうしてもそうしたかったんです。

今年のクリスマスイブにカイと結婚式を挙げることになりました。アーサーさんは許してくれるかはわからないけど、仮に許してくれなくてもいいやって思うくらい、嬉しいです。

付き合っただけ1週間しかたってなかったけど、初めてのデートでカイはプロポーズしてくれました。そのデートで私のためにカイは色々手を尽くしてくれて、すごく楽しかったし、すごく嬉しかったです。

私の為に車買ってくれて、綺麗なホテルを取ってくれて、私が好きだって言ったら一緒に探検してくれて、手を繋いでくれて。

次の日もお城の観光に連れて行ってくれて、名物とかも調べてくれて。お城の門の前でカイに指輪をはめてもらった時は本当にうれしくて、思わず泣いちゃいました。

あの日のデートの事、一生忘れられません。カイに結婚してくれて言われたことも勿論嬉しかったし、それと同じくらい嬉しい事があつたんです。

ジュノ様のお陰で、カイが太陽平気になつたんですよ。カイは数十年ぶりに見る太陽に大はしゃぎして凄く嬉しそうで、それを見て私も凄く嬉しかった。カイがそんな風に喜んでるのを見るのは初めてだったし、私のお願いでカイを喜ばせてあげられたことが嬉しかった。

それに、これからカイと一緒にいられる時間が一分でも一秒でも長くとれるんだって思うと、こんなに嬉しい事はありません。

カイはウソつきだし、意地悪だし、素直じゃないし、時々嫌な奴でいつも私をイジメて遊んでは大笑いします。本当最低です。

でも、好きなんです。カイは、私にとっては太陽みたいな人なんです。カイがいたらすごく楽しくて、嬉しい事がたくさん起きる。カイが傍にいたらすごく幸せ。

カイは優しくて頼りになるし、私を大事にしてくれて、いつも私の事を考えてくれて、そう言うときのカイはすごくカッコいいんです。

そう言うカイを見たら、きっとアーサーさんも許す気になっちゃいますよ。まあ、なかなか見せてくれませんがね。

でもカイはああ見えて一途なんです。ずっと私を好きでいてくれて、これからもずっと好きだって言うてくれるんです。そう言うところはジュリオさんに似てるんでしょうね。

あと極端なところと思ひ込みの激しいところもジュリオさん似ですね。変なところが似ちゃうのはどうでしょうね？ 紳士なところは全然受け継いでないのが不思議です。

でも、そういう変なところも好きなんです。私病気かな？ でもカイは自分の方が愛してるって言い張るけど、私の方がずっと前か



ら好きだったんだから、絶対私の方が勝ってます。

私だって、カイの事が世界で一番好きです。言ってもどうせ「ウソ吐け」とか言われるんでしょうけど。

いつか絶対カイに私の方が好きだってわかってもらいます。そしてたらカイは世界一幸せに死ぬると思うから。

## 敬具

エルメスがアーサーにあてて書いた手紙は、アーサー宛てとは名ばかりと言ってもいいほどに、俺の事しか書いてなかった。

その手紙を読むまで、気付きもしなかった。エルメスが本当に俺を愛してくれてたことを。心のどこかでエルメスが言う「好き」という言葉を疑って、それを口に出してエルメスを傷つけたことを。手紙を持つ手を下した俺に、ガルフはやっぱり半笑いで口を開く。

「お前がエルメスを本当に好きなのはみんな知ってるし、エルメスもそれはちゃんとわかってるぞ。分かってねえのはお前だけ。エルメスの事が好きすぎて、エルメスまで見えなくなってるお前は本当に病気だな。一途過ぎ、溺愛しすぎ。エルメスも書いてるけど、本当変なところかエルメスまで見えなく

なるほどのめりこむくらい大事なら、エルメスの言う言葉を信じてやれ。エルメスだって、お前と同じようにお前を世界一愛してるんだって、そう言ってきたはずだし、そう書いてあるだろ」

「エルメスは・・・どこ行ったんだ」

「まだわかんねえのか。エルメスは、お前の傍から離れられねーよ」

その時、しんとした廊下に踵を返して走り去る足音。聞き覚えのあるその足音の方に目を向けても誰もいない。でも、俺が聞き間違いするはずがない。

「エルメス！」

すぐにその足音の方に向かって走り出して、走り去る足音を追いかける。すると、階段の踊り場で驚くべき光景を見た。

光学迷彩を使っているせいかなんなのか、階段の踊り場の鏡に、目の前には誰もいないのにエルメスの姿が映し出されて、その背後には誰も映らない。

驚いて鏡を見つめていた鏡の中のエルメスを確認しながら、後ろからエルメスを抱きしめた。

「エルメス・・・ゴメン。俺を嫌いになった？」

「・・・なつてないけど」

「でも、指輪、もういらないのか」

「誰のせいよ。私の事信じられないなんて、ヒドイ事言ったくせに」

「ゴメン、本当は違うんだ。ただ、怖かった」

「怖いって、なにが？」

「俺、本当にお前が好きで、死ぬほど好きで、お前だけが好きだから、お前がそうじゃないことが怖くて、お前の言葉を信じるのが怖

かった。お前の言葉を信じてそうじゃなかった時、裏切られたと思いたくなかった」

「そっか、そうだね。カイはジュノ様に魂売り渡してるけど、私には証拠がないから」

「いや、証拠なら、さつき見せてもらった手紙で、十分だ」

「・・・全く、あの二人は勝手に人の手紙引つ張り出して。後で説教しなきゃ」

「俺からは、礼言つとく」

「本当、カイってバカなんだから」

「ゴメン」

許してくれたのか、パツとエルメスの姿が現れたと同時に、鏡の中のエルメスの姿は消えた。

「カイはウソつきだから、人の言葉を信じるのが怖いのね」

「ゴメン、でもお前の言葉だけは、信じるから」

「うん、私もカイが私を信じてくれるように、毎日何回でも言っよ。たくさん言えば、その内信じる気にもなるでしょ？」

「ああ」

「カイ、大好きだよ。愛してる。世界で一番愛してる。本当に本当に、カイの事が好き」

「俺も、死ぬほど愛してる」

「・・・なんかズルい。カイは一回しか言ってないのに、カイの方が重い気がする」

「やっぱ俺の方が勝ってる」

「違うよ、カイは普段言ってくれないからだよ」

「ああ、そうかも。男は言葉より態度で示す生き物だから」

「でも、言わなきゃわかんない事もあるよ。私にウソついてもいいけど、隠し事しないで。何でも話して。自分一人で抱え込んで考え

込んじやうのは、カイの悪い癖だよ」

「そうだな」

「私の事だけは、怖がらないで」

「エルメス、本当にゴメン」

「私も、カイの不安に気付いてあげられなくて、ゴメンね」

「いや、悪いのは、俺だから。エルメス、もう一度コレ、受け取ってくれないか？」

「うん」

指輪を出すと、エルメスはその小さい左手を差し出す。その薬指に指輪をはめて手を握ると、エルメスも握り返してくれた。

「エルメス、俺が悪い。俺が悪いんだけど、お願いだから、もうそれを外したりしないでくれ」

「うん、わかった」

「ウソじゃないんだ。俺は本当に前がいなきゃ、昼も夜もあけない」

「うん、私も」

「エルメス、愛してる」

「私も、愛してる」

言葉が、怖かった。エルメスの言葉は不思議といつも説得力があつて、信じたくなる。でも、もしそれが嘘だったら？ そう思うと、素直に信じるのが怖かった。俺が、ウソつきだから。

本当はエルメスは人を裏切ったりウソを吐いたりできる奴じゃないのに、それすらも忘れて。

人を信じるのを怖がって自分の繭に閉じこもって、本当に変なところがジュリオ様に似てしまった。このままじゃ、アーサーが帰って来た時、ジュリオ様のリメイク版を演じてしまいそうだ。

エルメスの為にも自分の為にも、エルメスの言葉だけは信じないと。俺が閉じこもる繭を、エルメスが焼き捨てるというんだから。エルメスの言う事を信じれば、大丈夫だ。

## シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

罰ゲームだ。

「カイ、私の事好き？」

「……………好き」

「もう、もうちょっとサラっと言ってよ」

「……………好き」

「もう一回言って」

「好き」

「愛してる？」

「……………愛してる」

「もう、ちゃんとできるまで包囲解かないよ」

そう、今俺は包囲されている。エルメスの婚約破棄騒動を聞きつけた奴らに包囲されながら、エルメスに尋問を受けている。いや、拷問の間違いだ。

公衆の面前でこの仕打ち。恥辱まみれの俺。包囲陣はニヤニヤしてるか爆笑してる。

ランス 「ブツククク……今日のカイは相当ハジケてるね」

ガルフ 「あの廊下での様子、記憶には残ったけど記録にも残し  
ときたかったなあ」

シャンティ「ていうかマジ引くわ。ジュリオって奴にあんな裏の顔  
があったとは。クリシュナも好きな子が出来たらあんななっちゃう  
のかなー？」

クリシュナ「あぶー」

ガルフ 「なるってよ」

ランス 「躰の徹底をおススメしますよ」

シャンティ「そうする」

クソ！ マジ腹立つ！ 超悔しい！ 俺本当どうかしてた！ つ  
ーかやっぱ俺どうかしてる。マジで異常者。それをコイツらの前で  
露呈してしまった自分が憎い。

でもさ、でもさ、しょうがねーじゃん。俺にとってはエルメスは  
それほどの女なんだからしょうがねーじゃん。マジ好きなんだから  
しょうがねーじゃん！ ムカつく！

心で泣いて顔で怒ってたら、エルメスが俺の手を取ってみんなに  
ちよつとムツとした顔を向けた。

「もう、みんなそんな事言ったらカイが可哀想だよ。私だって悪か  
ったんだから、カイ、ゴメンね」

「いや、悪いのは俺だから、ゴメン」

エルメス優しい。なんでお前はそんなに寛大で慈しみにあふれて  
るんだ。お前天使？

そうだ、俺が天使だと思ってたけど、実の所エルメスが俺の天使  
なんだ。そうだ、そうに違いない。

エルメスが味方してくれたことに感動していたら、エルメスは俺  
になっこり笑いかける。

「私も見てて正直呆れたけど、なんか嬉しかったよ！」

「ええ！？ お前見てたの！？」

「見てたよ。シャンティと一緒に来たから」

「マジかああああ！ シャンティ！ てめっ、知らねえつつつたる！」

「言ったけど、それが何？」

「おま・・・マジお前・・・」

シャンティ、アイツはエルメスと違って悪魔だ。マジヒドイ。どうせ光学迷彩使わせたのもシャンティの入れ知恵に違いない。

顔を覆ってうなだれる俺の肩をエルメスは励ますように叩いてるけど、そもそもお前も共謀してんじゃない。いや、俺が悪いんだけどね。ゼーんぶ俺が悪いんだけどね！ チクシヨウ！

悲しかったり悔しかったりイライラしたりでとうとう貧乏ゆすりを始める俺。そんな末期な俺の横に、急にジユノ様が現れた。

「カイさん、ダメですよ。ちゃんとエルメスさんを幸せにしてあげないと」

「うわかつてます！」

「いいえ、わかってませんね。エルメスさんだつて本気で指輪を外したわけじゃありませんよ。怒ったその場の勢いで、ついランスロツトさんに押し付けてしまっただけ。押し付けた手前返せとも言えなくなつて、シャンティさんの所に逃げたのはいいものの、腹は立つけど本気で家出する気もなくて困ってらしたんですよ」

「・・・っーことはアレですか。ジユノ様も一枚かんでたんですか」「少しだけですけどね。ボニーさんとクライドさんに手紙のありかを教えことと、エルメスさんに光学迷彩を使うように言っただけで



す

「全部じゃないですか！一枚どころか大枚じゃないですか！」

「でも、よかったですよね？」

「……ありがとうございます」

「全く、あなたが痴漢なんかするからですよ」

「……反省します」

シャンティは悪魔だけど、本物の大悪魔はここにいた。そんなやつは見てた。どんだけ暇なんだこの悪魔は。クリニツクはどうした。配下の悪魔にでも押し付けて遊んでんのか。そしてジユノ様の叱責を聞いて赤くなるエルメスに萌え。

ジユノ様の話を聞いて安心した。エルメスが本気で指輪を外したわけじゃないという事が聞けて、超安心した。マジ良かった。

と、ここでボニーさんと山姫さんも話に入って来た。

「アンジェロは相変わらず鬼畜なんだから」

「デリカシーがないわね」

「ミナそういうの苦手なんだから」

「女の子には優しくしなさい」

「そうそう。ミナの喘ぎ声廊下まで響き渡ってたよ」

「ウソ！ イヤー！ もう、カイのバカ！」

「……めんなさい」

「苦手だつてわかってるからこそですよ」と言いたいところだけど、女5人に取り囲まれて怒られるという状況に思わず白旗。

人口が増えたとはいえ相変わらず男女比率の異常なこの屋敷におい

て、女性全員を敵に回した俺。一人は女じゃねえけど。なにこれ、なんか俺本当に女の敵みてえじゃん。これが世にいう四面楚歌か。こういうことでまでモテたくないからちよっと自重しよう。残念だけだ。

でもそんなことより、やっぱりあの廊下での錯乱した俺をエルメスに見られたのがショックすぎる。マジで俺変なところがジュリオ様に似てしまった。エルメスにだけは紳士でいる様に努めよう。

心の中で一人反省会を開いていたら、ふと思い出した。

「ジュノ様、そう言えばエルメスが光学迷彩使ってた時鏡に映ったんですけど、アレはジュノ様の？」

「いいえ、違いますよ」

「じゃあ光学迷彩だから起きた不思議事故ですか」

「そうですね」

エルメスの姿を鏡越しに見たことを思い出して、ワクワクした。エルメスがいるとどういうわけか、俺はいろんなものを取り戻すよ。うだ。

隣で「そういえば」と思い出し驚きするエルメスに振り向いて、手を取った。

「エルメス、よかった。お前といっぱい思い出も作れるし、その思い出の証拠も残るな」

「証拠？」

「そう。これからもお前の言った通りたくさん思い出作って楽しく過ごして、沢山写真を撮ろう」

俺の言葉にエルメスはパアツと顔を輝かせたと思うと、「誰か、カメラ、写真！」と急にワタワタし始める。別にそんな急ぐ必要ないだろ、つーか今？ と思ったが、エルメスが浮かれはじめたら、もうどうにも止まらない。そして驚いたことにカメラはすぐにエルメスに差し出された。

「早！ 何お前、持ってたのか!？」

「そりゃもう、すすすす成長するクリシユナの輝きをファインダーに収めるためにね」

どうも既に親バカなレヴィは常にデジカメを携帯しているようだが、しかもデジイチ。すぐにデジカメを操作し始めたエルメスは俺に渡すと、パツと姿を消した。

「カイ！ 画面見て！ 映ってる?」

誰もいないのに話しかけられる状況に少しおかしさを感じながら画面を覗くと、目の前には誰もいないのに、画面にはしっかりエルメスが映っていた。

「おお、映ってる」

「やったあ！ じゃあボニーさん、写真撮って!」

「え、あ、うん」

エルメスは俺が持っていたデジカメを奪い取ると、ボニーさんに撮るように押し付ける。デジカメだけが宙に浮いているように見え、てなんか可笑的い。

ボニーさんがデジカメを受け取ると、エルメスが俺の腕を掴んだ

瞬間にエルメスの姿が見えた。

「わ、すごい。二人とも消えたけど、画面には映ってるよ」

「ボニーさん早く早く！」

「ハイハイ。じゃー撮るよー」

「カイもピースして！」

「ハイハイ」

「いくよー」

ピピッと電子音が鳴ったあとフラッシュが焚かれて、画面を見るボニーさんは満足そうに向けてきた。

「よく撮れてるよー」

「キヤア！ 本当だ！ ヤバい嬉しい！ カイ、ほら！」

ハイテンションエルメスは、今度はボニーさんからデジカメを奪い取って突きつけてきた。デジカメの画面を見ると、にっこり笑って俺の腕に抱きついて顔の前でピースするエルメスと、無表情でピース突き出す俺。

「つーか俺、自分の顔30年ぶりに見た。相変わらずいい男だな」

「写真よりも実物のがカッコいいよ」

「まーな」

「カイ、謙遜って言葉知ってる？」

「知らねえ」

「あたしも自分の顔みたーい！」

「俺もー！」

「俺も！」

「俺も！」

みんながわらわら集まってきたエルメスに光学迷彩を施せとばかり、写真の撮り合いが始まった。

みんなで撮っては久々に自分を見た目の目を瞑ってるだの大騒ぎ。しまいにはエルメスがトリスにこの場でプリントアウトしろと言い出して、レヴィに写真用紙を分けてもらってデータをパソコンに移したらまたしても撮影会。

気の毒なことに、トリスは印刷と写真のデータを自分のパソコンに送れとうるさいシユヴァリエの為に撮影に加われない。

さすがに気の毒に思ったのかエルメスが作業を交代すると言い出したので、俺が交代した。

「俺がやるから、お前はみんなと一緒に写真撮ってる」

「ええ？ いいよ」

「よくねーよ。みんなお前と撮りたがってたから」

そう言っただけを指さすと、デジカメを持ったクライドさんが一生懸命エルメスにこっち来いと手招きしている。ホラ、と促すと、エルメスは「ありがとう」と笑って撮影会に混ざって行った。が、しばらくするとデジカメは根を上げた。

「あー！ バッテリー切れた！」

酷使しすぎたらしい。デジカメは黒く沈黙して労働を拒否しているようだ。諦めきれないらしい吸血鬼組は「他に持つてる奴いないか」と有志を募るもいなかったらしく、渋々諦めて俺の所に来ると、

今度は印刷済みの写真を見てはしゃぎだした。

しばらくすると印刷済みのネタが切れたようで、さっさと印刷し  
るとつるさい。遅いのは俺のせいじゃなくてプリンタの性能のせい  
だ。

俺 「お前らもうわかったから、今日の所はこのくらいにじと  
け。今後いくらでも撮れるだろ」

トリス 「えー！ まだ遊び足りねーよ！」

俺 「明日んなつたら充電できてんだろ。それかお前ら自分の  
デジカメ買いに行けよ」

クライド 「アンジェロ、俺ら金ねえ！ くれ！」

俺 「・・・後で渡します」

ボニー 「服とか色々買いたいから10万くらい！」

俺 「10万でいいんですか？」

クライド 「じゃあ15万！」

俺 「わかりました」

当然と言えば当然だけど、無一文のボニーさんとクライドさんに  
金をたかれ、渋々この二人の分も別口で管理することにした。

デジカメ含めて10万ちよつとしか必要としないとは意外だ。思  
い返してみると昔一緒に住んでた頃に見てた分には、この二人は豪  
遊するタイプじゃなかったようだから、その辺は安心だ。元大強盗  
なだけあって金に関しては計画的なようだ。本だけで15万浪費す  
るエルメスとは大違いだ。

「そういえば、インド来てからエルメスが贅沢するんですけど、前  
からそんなでしたっけ？」

イタリアにいた頃もエルメスとは行動を共にすることは多かった

けど、城の中か仕事がほとんどでプライベートなことには付き合った記憶はほとんどない。つか、ない。なのでその辺考えてみたら俺はよく知らない。俺の問いにボニーさんとクライドさんは首を傾げる。

ボニー 「ミナは、昔は贅沢したりしなかったよ。どっちかかっていうとミラーカ様とアルカードの貴族コンビが湯水の様に使っていて、それに怒ってた」

クライド 「あの二人半端なかったもんなあ。何千万とか億単位の金ポーンと使うから」

俺 「億単位で!？」

ボニー 「そ。あの城だって350万ユーロ(約4億)位したんだよ。それを現金一括払い。ね」

エルメス 「そうですね、あの時は本当ビックリしました」

俺 「マジか・・・マジ半端ねえな」

クライド 「アルカード、アイツ何やらせても半端ねえよな。飛行機だって2回も買ったし」

エルメス 「私やみんなの服買ってくれた時も、高級ブランドの服30着くらい買いましたもんね。造園業者さんと専属契約しちゃうほどだし」

ボニー 「そう言えば、ミナは趣味とか研究の為なら金に糸目つけなかったよな」

エルメス 「そう言えば、そうですね」

ボニー 「多分そのせいもあるんだねー。ミナ金銭感覚ズレたんだよ。アルカードと熱中症のせいで。それを咎める人もいなかったし」  
エルメス 「・・・かしんないです」

アーサー? 躡って言葉、知ってるか? アンタ、なんてダメな親なんだ。やっぱアーサーはモンスターペアレンツじゃねーか。

ボニーさんの言う通り、エルメスは気になった本を見つけたら片っ端から手を伸ばすし、可愛い服を見つけたら当たり前のように「ここからここまでください」をやる。これは躓しなおす必要があるな。

エルメス「昔はそんな浪費家じゃなかったんだけどなあ？ 気を付けなきゃ」

俺 「そうだな。躓してやる」  
エルメス「なんか怖いんだけど」

これからはエルメスの機嫌を損ねない程度に、浪費癖にリミッターを再構成させるよう考えないと、と思ってたらガルフが半笑いで話に入ってくる。

ガルフ 「カイには無理じゃねーか」

俺 「は？ 余裕だろ」

この俺に不可能はない。ガルフの無理宣言にちょっと気を悪くした俺に、相変わらずガルフは半笑いだ。

ガルフ 「無理だろ。なあ？」

ガラード「無理無理。いつもエルメスのおねだりに逆らえないじゃん。今まで一体いくら貢いだ？」

俺 「・・・１００万くらい」

話を振られたガラードも無理宣言だ。俺は貢いでるつもりはないんだが、そう言われるとなんか無理のような気がしてきて、バツが悪くなって金額をちよつとだけ控えめに設定。しかし目聡い賢者ガルフ。



ガルフ 「ウソつけ。1000万は買いでるだろ。エルメスが欲しいつったモン片っ端から買ひ与えて、エルメスの好きそうなもん見つけたらその度にプレゼントして、エルメスの為に高級ホテル予約してエルメスの為に高級車買って。だからお前奴隷なの」

ガルフの説教にボニーさんとクライドさんは呆れたようで溜息だ。何故呆れる。そのどこがいけないというんだ。いや、いけないのか？ いや、いけなくない。

クライド 「お前も熱中症かよ」

ボニー 「甘やかすなって言ったのに。アンタもダメだねー」

俺 「別にいいじゃないですか。エルメスが喜ぶなら」

エルメス 「私は嬉しいよ」

俺 「ホラ」

ランス 「ホラじゃねーし。カいは本当ダメだな」

俺 「ダメじゃねーよ！ エルメスが喜ぶなら何しても許されるだよ！」

シャンティ 「ダメだろ。マジでコイツヤバイ」

何だコノヤロー、チクシヨウ。俺はエルメスの喜ぶ顔が見たいだけなのに、エルメスのそう言う顔が見れるなら何でもするのに、そのどこがいけないというんだ。確かにエルメスに買いでるとか甘やかしてるとか言われてみれば否定のしようもないが、それとコレとは別問題だ。

つーかエルメスの浪費癖を糾弾してたはずだったのに何故か俺が糾弾されてる。どういうことだ。

ガルフ 「つーか正直なところ、俺らがそれを黙認してんのは、それがエルメスだからだぞ。他の女ならお前もその女も全員で長時間

説教だぞ」

ガルフの言葉にウンウンと頷くシュヴァリエ一同。腹立つ。

トリス 「そうそう。俺があちこちからかき集めてきた金、女に貢ぐのに浪費されんのはぶっちゃけ腹立つ。エルメスだから許せるけど」

俺 「なんでエルメスなら許せるんだよ」

ガラード「そりゃ、エルメスが喜ぶから。エルメスが喜んでるのを見るの嬉しいじゃん」

ランス 「カイには呆れるけど、エルメス様が喜んでたら、まあいっかってなっちゃうよね」

トリス 「なっちゃうなあ」

ペレアス「なるなる」

ランスの言葉になると顔を見合わせて頷くシュヴァリエ一同。これはこれで腹立つ。なら別に問題ねーだろと思うんだが。俺だけ責められる意味が分からん。

キルシュ「カイには呆れるけどな」

俺 「なんでだよ！ 結局お前らも一緒じゃねーか！」

ベデイ 「そこは思ってるだけの奴と実行しちゃう奴の差だ」

俺 「そりゃ実行するだろ！ お前らもエルメスと買い物行った時何かしら買い与えてたじゃねーか！」

俺の反撃に目を泳がせるシュヴァリエ。結局みんな一緒じゃねーか。俺だけ非難しやがって、チクシヨウ。まあ確かに俺は他の奴らの1000倍くらい貢いでるけど、チクシヨウ。

そんな俺らの様子を見て溜息を吐くカップルと山姫さん。

クライド「お前ら揃いも揃ってミナ溺愛してんだな。お前らダメ男の集団か」

ボニー「全員でミナ甘やかすってどんだけ？」

ガルフ「・・・じゃあこの件に関しては今後一切不問って事で」

山姫「反省とか是正をする気はないのね」

「ないです。エルメスの幸福の為なら何しても許されるんだから勿論、ないです。」

まあそんな経済談義を超えての翌日。何故かみんなで購入物。なぜ全員で来る必要があるんだ。観光客か、俺ら。全員が全員外国人だから超目立つ。で、全員で来ているせいかなのか、妙にテンションが高い。

「あーお前らはしゃぎ過ぎんなよ。面倒見るのダリイから好き勝手買い物してさっさと帰れ」

俺の指導にシュヴァリエ達はハイハイといつもの様に適当に返事をして散開。仲良し兄弟ランスとガライドは何故かその場から動かない。そして逃げようとするもその兄弟に引き留められるユアン。

「カイは？」

「俺はクライドさん達と一緒に他の買い物にも付き合うから」

「じゃあ俺らも付き合う」

「いや、いい。お前らも好きにしろ」

「でもカイはエルメス様の相手で手一杯だよ、きつと」

「カイ一人である3人の相手できないよ」

「・・・じゃあ頼む」

そう言われるとそんな気がする。エルメスはもとより、あの二人からは俺以上に自由な匂いがプンプンする。自由の国アメリカからやってきた強盗犯だ。多分俺一人で手におえない。

「それにホラ、山姫さんの相手はユアンにお任せ」

「ああ、そうだな。つーかユアン、お前山姫さんと二人でどっか行け」

「えー！！ ムリムリ！」

「ケツ、チキン野郎が」

結局この兄弟+ユアンも同行することになって、そんな話をしてたら俺の子猫ちゃんが視界から消えていくのを発見。

「あ、コラ、エルメス。チヨロチヨロすんな。迷子になったらダリイ  
だろ」

そう言ってエルメスの腕を掴んで引き戻すと、エルメスは右手を差し出してきた。

「じゃあ手エ繋いで」

「ヤダ」

「ちえっ、ケチ」

真夜中の閑散とした宮殿探検ならいざ知らず、こんな公共の場で公衆の面前で手を繋いだりとかしたくねえ。

しかし手を繋ぐのを断ったせいで、エルメスは差し出した手を俺の腕に絡ませる。

「ていうか、引率の先生みただね」

「そりゃこんだけ手のかかる奴がいればそうなる。っーか離れる」  
「やーだ」

「歩みにくい」

「歩みにくくない。だってホラ、ボニーさんとクライドさん見てよ」  
「あの二人と一緒にするな」

この我儘女め。視線の先にはボニーさんの肩を抱いて歩くクライドさんがいるけども、あんなん歩みにくいだろ。隣で山姫さん呆れてるぞ。そして羞恥って言葉知らない？

アーサーの嫉のせいもあるんだろうが、あのカップルにも影響受けたなコイツ。と思いつながらエルメスにぐいぐい腕を引かれて山姫さん達の下へ連行された。

デカイ家電量販店のデジカメコーナーに辿り着いてデジカメを食い入るように見つめる吸血鬼たち。来て気付いたが、ボニー&クライドとエルメス以外の常識人は気が気じゃない。

至る所にモデルとして置いてあるデジカメやビデオカメラ。それに一切姿が映らない俺たち。他の客にそれを気付かれたらどうしようかと考えたら、マジ気が気じゃない。さっさと買い物済ませて出たい、こじ。

「コレ可愛いなー、でもこっちのカッコイイのも捨てがたいな」

「さっさと選べ。どっちでもいいだろ」

「でも迷うよ」

「じゃあどっちも買ってやるから」

「あ、その手があつたねえ」

「また・・・カいは本当エルメスに甘いな」

呆れたように笑うガードと溜息を吐くランス。なにか問題でも

？ 二人の呆れ視線を振り切って買い物済ませて、ボニーさんとクライドさんの買い物が終わるのを待っていると、ユアンと山姫さんも二人でプラプラしているのを発見。

「俺掃除機欲しいんですよ」

「じゃあこれは？ 自動で勝手に掃除してくれるのよ」

「へえー、今は便利なものがあるんですね。って10万!? 高っ！」

「他のはそんなに高くないけど、ホラ」

「あ、メイドインジャパン。道理で」

「今は日本製はなんでも高いから、国内で買うに限るわよ」

「そうですね・・・最先端と言っても掃除機でこの値段は・・・」

「じゃあこつちがいいわよ。性能はそれに劣るけど、値段は手頃」

「あ、じゃあそれにしようかな。山姫さん物知りですねえ。家電好きなんですか？」

「実は家電とか文房具とか大好きなのよ。新製品出ると欲しくなっちゃって、「また蔵の増設をさせる気ですか」って、よく部下に怒られる」

「あははは。じゃあまた今度二人で見に来ましょうか」

「それって、デートのお誘い？」

「え！ う、あ」

「ありがとう。嬉しい」

なんかいい雰囲気。ユアンの場合気を引きたくてやってるんじゃない、山姫さんに喜んでほしくて、みたいなのが感じられるのがいな。自分で誘っておいて赤くなってるし、なんかアイツ本当可愛いな。いじらしい。

妙に甘酸っぱくフワフワした山姫さんとユアンの様子をエルメスとニヤニヤしながら見ていたら、何故か健康器具コーナーが騒がし

い。

不思議に思っただエルメスとその方に視線を向けたら、乗馬型健康器具にまたがったクライドさんが大はしゃぎしているのを発見した。

「ヒヤッホウ！」

「クライド、次あたしー！」

「ちょ、二人とも静かにしてくださいよ！」

ランスとガラードにあの二人の面倒は荷が勝ちすぎるようだ。全然いう事聞きやしねえ。自由そのもの。

あー、全く、と溜息吐いてそっちに行こうとしたらエルメスが二人の下に駆けだした。

「もう、ボニーさんクライドさんダメでしょ？ 他のお客さんに迷惑じゃないですか」

「ミナもやってみろって。超楽しいコレ」

「ダメです。ホラ、降りて降りて」

「ちえっ、ミナのケチ」

「もう、二人ともいい年こいて無邪気なんだから」

何と珍しい光景か。ていうかすっかり忘れてたけど、そもそもエルメスはそっち側の立ち位置の奴だった。本来俺と同じ立場の奴だったんだ。それを10年ぶりに思い出した。

なるほど、エルメスが今我儘放題好き放題にやってんのは、自分より上の奴とか面倒見なきゃいけない奴がないせいだったのか。要するに調子乗ってるって事だな。

てことはこの二人が戻って来た事で、本来のエルメス復活するな。そうなる俺の手間も半減・・・いや待て、この二人が来たことで倍増する可能性もあるな。結局、お世話係からは逃れられないのか。

さつさと展開させた未来予想図に溜め息を吐きながらエルメスに視線を戻す。エルメスはあのカップルに小言を言っただけは茶化されてむくれているが、楽しそうだ。

あの二人が戻ってきて待ち人はあと一人だけ。アーサーが帰ってきたら、エルメスはどんなに喜ぶだろう。そう考えると嬉しい反面、悔しいし辛い。アーサーの帰還と同時に俺は死ぬ。エルメスとは永遠にお別れ。

ダメだ、俺は本当にどうかしてる。最低だ、こんなことを考えるなんて、どうかしてると思えない。

アーサーが、帰ってこなければいいなんて

エルメス、最低で愚かな俺を許してくれ。一瞬でもそう思ってしまったことをちゃんと悔いるから、許してくれ。

お前の不幸を願ってる訳じゃない。ただ、お前から離れたくない一心でそう思っただけなんだ。

懺悔、それは言い換えればただのいいわけ。どれほど懺悔して言い訳を並べ立てても、もう確実になってしまった。それほどにエルメスを愛してしまった。

俺はエルメスと永遠に共にありたいが為に、いつかアーサーを裏



切ってしまうだろう。そうすればエルメスはお世辞にも幸福とはいえない。俺が死ぬこともない。

エルメス、わかってくれ、これは俺たちの為なんだ。お前が俺と幸せになる為なんだ。俺はお前を愛してる。お前もそうだと言うなら、俺を一番だと言うならわかるはずだ。いや、わからなければおかしい。じゃなきゃエルメスの言葉はウソになる。

わかるはずだ、エルメス、お前が俺と同じ思いなら同じことを考えたはずだ。俺を背徳の道へ引きずり込んだのはお前だ。俺だけが裏切り者であつていいはずがない。エルメス、二人で反逆しよう。俺とお前は、共犯なんだから。

アーサーなんか、忘れるよ。あんな奴より俺の方が大事だろ。俺は一生お前の味方だ。お前だつてそうあるべきだ。アーサー、アイツは敵だ。俺たちの敵だ。アイツの為に俺たちは引き裂かれる。そんな奴、いないほうがいい。

どこかへ逃げよう。永遠に二人で暮らそう。その方がお前だつて

「あなたは本当にそれがエルメスさんの幸せだと思ってるんですか？」

突然背後に現れたジユノ様がそう囁いて、正気に返った。突然現れた事と、考えを見透かされたことに驚いてジユノ様に振り向くと、相変わらずその表情は宝石のように美しい微笑。

「昔はもつと自分に厳しい奴だったのに、エルメスの為に自分を見失っている。以前ガルフさんにそう言われたでしょう?」

「・・・わかつてます。ちよつと、どうかしてました」

「あなたは本当に素敵です。あなたはいつも私の期待を裏切って、私の期待を超える。あなたのそう言うところ、好きですよ」

鳥肌が服を突き破るかと思った。これは警告だ。「これ以上私の仕事の邪魔をしたらただじゃおきませんよ」そう言う警告だ。脅迫とも言う。

自分で決めた事だ。悩んでたら悪魔に笑われる。俺一人で決めて俺一人で始めたことだ。他人を巻き込んだじゃいけない。

ああ、辛い、悲しい、淋しい、悔しい

で

も、諦めなければ。

孤独であることが恐怖なんて。孤独になることが耐えがたき辛酸なんて。俺らしくもない、俺は自分を見失ってる。

やはり怖い、俺は弱い。「不可欠の一人」を手に入れたことで以前よりはるかに弱くなった。愛の為に強くなれるなんて、欺瞞だ。バカバカしい妄想だ。

10年前からエルメスと付き合うまで毎日のように思ってた。これからもきつと毎日のように思うんだろう。

エルメスと出会わなければよかった。エルメスを愛さなければよ

かった。

愛はかけがえのないもの。愛は世界で一番美しい。そして醜く狂おしくひどく汚い。俺はやっぱり孤立無援で、四面楚歌で、これからも孤独に愛の責め苦に耐えなきゃいけない。マクベスの3人の魔女の言葉が思い出された。

きれいは穢い、穢いはきれい

悪魔が、笑った。

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

なまめかしく輝く黒い高級車、着物の男2人、牡丹柄の臙脂色の着物を着た山姫さんは、名残惜しそうに玄関先で向かい合う。

「山姫さん、クリスマス絶対来てくださいね！ 私も椿寿楼に遊びに来ます！」

「どっちも楽しみにしてるわ。龍が結婚式に帰ってきて祝福してくれるといいわね」

「そうですねえ・・・」

結婚式に帰ってきて  
俺が質問した答えだ。

その言葉の真意は、先日

山姫さんの休眠期は15年。アーサーがそれ以上長いはずはないだろうという予測、そして既に10年経っている。今年のクリスマスで11年を迎える。

いつ帰ってきてもおかしくはない。結婚式前に帰ってくる可能性もあるし、そのせいで結婚を頓挫するかもしれない、そう思って山姫さんに聞いた。

「休眠期から復活する日って決まってるんですか？」

「真祖は基本年単位の睡眠だから、休眠期に入る日も復活する日も決まって同じ日。その本人が死亡、または吸血鬼化した日よ」

「ということは、何年かはわからないけど12月25日と言つのは確実という事ですか」

「そうね。ただ時間はバラバラよ。0時過ぎかもしれないし、24時前かもしれないわ」

「へえ、なるほど。というかアーサーの命日クリスマスなのか。皮肉だな」

「本当ね」

一人ごちる俺にそう相槌を返した山姫さんは覗き込むように俺を見る。

「今年かもしれないわね」

そう、その可能性だって大いにある。山姫さんの休眠期講義からすると、結婚式を挙げてその翌日には、下手したらその直後に俺は死ぬ事になる。挙式した直後にアーサーが帰って来たとなれば、エルメスは間違いなく幸福絶頂だ。

確かに、その瞬間なら死んで本望だ。死ぬ価値はある。だけど、死にたくない。離れたくない。

黙り込む俺に山姫さんは小さく溜息を吐いて、静かな口調で語る。

「アンジェロ、あなたミナ的幸福を願って魂を捧げたのよね。その事を今になって後悔する気持ちはわかるわ。誰だって愛する人と離れたくはないもの。誰だって死ぬ事は恐ろしいわ。だけど、どれほど後悔してももう遅い。あなたは腹を括って運命を受け入れるしか、

道はないのよ。それとも、龍を裏切つてミナに生涯苦惱させたい？  
そんなはずはないわよね。あなたにとって大事なのはミナだけではないはずよ。本当のあなたは、そんな軽率で愚かな人ではないはずよ。あなたは目的と手段を見誤るような人ではないはず」

恐らく、山姫さんにはわかつてる。切迫した時の俺は一つの事しか目に見えない。その時が来たら、シユヴァリエの奴らの事もエルメスの事でさえ見えなくなって、自分の欲望の為にだけに動くであろうことを。だから、釘を刺された。

目的と手段を見誤ること。エルメスの幸福が目的。俺の愛はその手段。手段の為に目的を見失つてはいけない。

俺だつて、わかつてる。今は、わかつてる。だけど、耐えられそうにない。エルメスと離れて、俺一人で死んでしまふ事が。エルメスを遺して死ぬ事に、耐えられないだろう。

軽率で愚か  
契約した時点で十分軽率で愚かだ。  
今更変わることもなんか出来やしない。

だけど、そうだ。俺は、本当の俺はそんな軽率で愚かな奴ではなかったはずだ。目的の為に手段を択ばないのが俺だ。目的を達成させれば、それがどんな手法であれ正当化される。俺がエルメスに言ったことじゃないか。

黙り続ける俺に山姫さんは再び諭すように視線を向ける。

「ねえ、拳式の日取りを早めたら？ そうすればミナと夫婦として過ごせる時間もたくさん取れるじゃない」

「そうですね。でも、実際結婚しても今と変わらないと思うし、1月24日に拳げることの意味があるんです。その日は俺とエルメ

スの誕生日の丁度真ん中で、なによりあの戦争が起きた日、クリシユナさんとミラーカさんと北都の命日でもある。だから、憂鬱でしかないその日に、いい思い出を残してあげたいんです」

「・・・そう。でも、あなたはそれでいいの？」

憐憫と配慮で彩った声色。その気持ちは有難いが、俺には嘲笑しか浮かばない。

「ハハ、よくありませんよ。でも、山姫さんの言う通り腹を括るしかないでしょう。エルメスを幸せにして、最後にデカク潔く、散つてやりますよ。もう悪魔に笑われるのはうんざりだ」

俺の言葉を聞いて山姫さんは悲しげに笑って見せたが、言ってみてスッキリした。そうだ、潔く死んでやろう。武士道とは死ぬ事と見つけたら。俺の騎士道もそうあるべき。

惚れた女を世界一幸せにして、最高にカッコよく潔く死んでやろうじゃねーか。死からは逃れられない。それなら、一生記憶から離れられない程に、美しく死を飾り付けてやろう。

なんとか立ち直れた、と思う。今は根を上げてウダウダ悩んでる場合じゃない。そんな暇があるなら、一つでもエルメスを喜ばせてやるべきだ。俺は哲学者じゃねーから、愛だのなんだのの行先に悩んでる暇はねえ。俺は忙しいんだ。

俺の気概が転換したのに気付いたのか、山姫さんはひまわりのように笑った。

「ミナを幸せにしてね」

「勿論です」

「あなたも幸せになるのよ」

「もう十分幸せですよ」

「もっと、なれるわ」

「……ありがとうございます」

山姫さんに礼を言っつて、俺らしくもなく思わず微笑んだ。この人も不思議な人だ。なんとというか、教師のような、先輩のような、そんな頼れる人だ。山姫さんの口から紡がれる言葉の安心感が半端ねえ。なんとなく、ユアンが山姫さんに惚れた理由が分かった気がした。

ふとにぎやかな声が聞こえてきて、その声の方に山姫さんと振り向くとボニーさんとクライドさんとエルメスが一緒に入って来た。3人は俺と山姫さんの姿を認めると、「珍し！ 何喋ってんの？」と間に入ってくる。

「や、別に」

「ただの人生相談よ」

「……まあ、ですね」

適当に話をはぐらかす俺と山姫さんの様子に、何故かニヤニヤするクライドさん。

「とか言っつてこのプレイボーイ！ 姫まで口説く気かよ！」

「んなわけないじゃないですか！」

思わず反射的に全否定してしまっつて、すぐにハツとして山姫さんの様子を窺うとしれつとしてしている。続いてエルメスの様子を見ると、これまたしれつとしている。

怒っつてないことには安心したが、なぜか残念な気分になる俺。そんな俺に続いてニヤニヤするボニーさん。



「そーだよなー？ アンジエロはミナ一筋で溺愛してんだもんねー」  
「ミナがいなきや眠れねーんだろ！」

「H A H A H A H A ! ! !」

「チツ、クソ。笑ってんじゃねーよ」

「あ？」

「いえ」

この二人のアメリカン爆笑に気を悪くして思わず悪態をついたら、クライドさんに本物のチンピラ睨みをされた。なんか面倒くさそう  
で思わず退いた。

溜息を吐いて何とはなしにリビングの入り口に目をやると、いた。

だからお前はストーカーか。もしくは張り込み中の刑事か。あんな  
パンと牛乳しけ込んでんのか。

半ばあきれながら「お前もこっち来い」と視線で促すと、遠慮が  
ちにやってきたユアンは山姫さんの隣に腰かけた。それで、思い出  
した。

「つーか、ユアン。ボニーさんとクライドさんの逃走劇の一部始終  
知ってんのはお前だけだ。どういいういきさつだ？」

そう尋ねると、ボニーさんとクライドさんも「そうだった！」と  
ユアンに視線をやる。

「俺ら気絶させられてたから知らねーんだけど！」

「そーだよ！ マジアルカードってヒドイ！」

まさか当事者が知らないとは思わなかったが、ユアンもそういえば、と言う顔をして事の顛末を語り始めた。

10年前 12月14日

「ミラーカ、ボニーとクライドは逃がそう」

アーサーの提案に寸分も間を置くことなくミラーカは頷いた。

「あの二人は100年間待った。もう、幸せになってもいいはずだものね」

「ああ、あの二人をこんなことに巻き込むことなどできない。あいつらは、彼女に託そうと思う」

「そうね、彼女なら安心だわ」

話し合いを終えた二人はすぐにユアンを呼びつけた。

「オリバー、お前飛行機は操縦できるか？」

「はい、できます」

「そうか、ならば21日の夜ボニーとクライドを連れて飛べ。私も同行する」

「あの二人を逃がすおつもりですか？」

「そうだ。あの二人は本当に関係ない。あの二人は幸せになる権利がある」

「そうですね。わかりました」

「この事は誰にも一生活すな。時が来たら私から話し、二人を迎えに行く」

「わかりました」

「このままでは戦いを避けることは難しい。ついでにお前らも逃げる用意をしておけ」

「・・・はい」

12月21日

嫌がって暴れるボニーとクライドと犬を無理やり気絶させ棺に押し込み、城から抜け出したアーサーとユアンはすぐに空港に向かい飛行機に乗った。

到着した先では、リムジンの横で女性が待っていた。

「久しぶりね、龍」

「その名で呼ばれるのは本当に久しぶりだな。山姫、あの時は世話になった」

「やっぱりまた世話する羽目になるわけね。その金髪の子は新しい眷属？」

「いや、コイツはミナの部下だ」

「そう、ミナは元気？」

「今のところはな」

話しながら車に乗り込むと、車はゆっくりと走り出す。港から船に乗ってどこかの島に上陸した。

そこから更にかなりの時間車を走らせると、どんどん山奥に入っ  
て行く。すると、一旦停車して運転手が道端の祠に跪いて何かをす  
ると、木々しか生えていなかった場所に突然舗装された道路が現れ  
た。

車は更にその道をひた走り、しばらくすると古く巨大な屋敷にた  
どり着く。アーサーとユアンはその屋敷をもの珍しそうに見渡した。

「着いたわよ、さ、二人とも降りて」

「おかえりなさいませ」

「おかえりなさいませ、提督」

「ただいま」

「提督、お手荷物お預かりします」

「ありがとう」

促されて降りると、着物を着た大勢の男女が女性に頭を下げ出  
迎える。すぐにユアンはキョロキョロとあたりを見まわした。

「すっげえ」

「珍しいか？ 世界中飛び回っているお前等でもアジアには入り辛  
いだろう」

「ええ、確かに。キリスト教国以外には立ち入れませんでしたから」

話ながら歩いていると急に女性に振り向かれる。

「あら、少年。イタリア人なのね」  
「あ、イタリア語喋れるんですか」  
「あたしも仕事で世界中飛び回るからね」  
「そうなんですね。あ、俺オリバーって言います。出身はドイツですけど、今はイタリアに」  
「そう、オリバー、よろしく」  
「よろしくお願ひします、ヤマヒメさん」

それを聞いてアーサーと山姫は笑って中に入って行き、“お手荷物”と呼ばれたボニーとクライドの入る棺を部下が運んで行った。

屋敷に入っしてしばらくすると、ボニーとクライドは目を覚ますと同時に、違う場所にいることに気付いてすぐに怒りだした。

「アルカード！ 我儘にも程があんぞ！ どういうことだ！」  
「そうだよ！ ヒドイよ！ 結婚式明後日なのに！」

ぎゃあぎゃあ文句を言う二人を何とかユアンが宥めると、アーサーは沈痛な面持ちで口を開く。

「これから、大変なことが起きる。それにお前達を巻き込むわけにはいかない。その内迎えに来てやるから、お前らはここで身を隠しているんだ」

「わざわざ逃げなきゃいけないようなことなのか？」  
「そうだ」

「でも、あたし達だけってどういうことなの？」

「お前達には直接関係ないからだ」

「ていうかオリバーと一緒にってどういうことなの？ 何が起きるの？」

アーサーはそれ以上の事には口をつぐんだ。二人に話してもいたずらに悲しませるだけだろう。

「すべてが片付いて、迎えに来た時に話す。今は話してやる事は出来ない」

「もー！ いつつも秘密にするんだから！」

「まあ、もういいけどよお。挙式の延滞料金はキッチリ払ってもらうからな」

「当然だ。なんなら花火でも打ち上げてやる」

「言ったからな！ お前約束したからな！」

「ああ、その代りちゃんと待っていてくれ」

「わかったー。いつくんの？」

「それは言えない。だが、必ず来る」

「また秘密かよ・・・」

釈然としないようではあったが、二人は渋々納得して引き下がった。落ち着いた二人は山姫に向いた。

「てゆーか久しぶり」

「てゆーかここどこ？」

「二人とも遅いわよ！」

「てゆーか提督ってなんだよ、ウケる」

「似合わないよ」

「あたしが言い出したんじゃないわよ！ 余計なお世話！ 全く、

「ここはあたしの屋敷。あたしの里、椿寿楼よ」

それを聞いた二人は感嘆の声を上げてすぐに納得したようだ。

「とりあえず、あたしタダメシ食らいとか許さないから。二人はウチの仕事手伝ってよ」

「いーぜ。なにすんの？」

「そうね、二人には“侘助”わびすけにでも入ってもらいませよ」

“侘助”？」

「そ、ウチの特殊部隊」

「・・・またか」

「また？」

ボニーとクライドは不思議そうに首を傾げる山姫に、これまでのことを簡潔に話した。

「で、今ミナに至ってはコイツらオリバーたちの上官で隊長やってる」

「ミナが!?! あのミナが!?!」

「そう、あのミナが」

「あのミナが? 信じられない。この短い間に一体何があったのよ」

「・・・」

「詳しい事はこれからゆっくり話すよ」

「ああ、そうね」

話を終えて、もう帰らなければと立ち上がったアーサーはその場でふらついて、慌ててユアンが支えた。それを見た山姫はすぐに状

況を察した。

「なるほどね。眷属を作った理由は、墓守ね」

「・・・ああ」

「だから、この二人を逃がすことにしたのね。もう今のあなたに守る力が残されていないから」

「そうだ。後はもう消えるのを待つ身だ」

「いつ？」

「2日後」

「そう・・・ミナには話した？」

「状況が状況なだけに話せない」

「ミナ、きつと泣くわ」

「そうだな。だが、仕方のない事だ」

悲しげに瞳を伏せるアーサーに山姫は励ますように肩に手を置いて、部屋を出て門へ向かう。

「必ず迎えに来なさい。次はミナも連れて」

「ああ、努力する」

「その時はオリバー、あなたもね」

「あ、はい」

門まで辿り着き、見送る山姫は笑いながらも強く言った。

「待つてるから。来なかったらあの二人食べちゃうわよ」

「それは困るな。必ず来る」

「約束よ」



「ああ、ありがとう」

そうして椿寿楼を後にして、長旅の後にイタリアへと帰還した。

「というわけ」

ユアンの説明に、ああ、ボニーさんとクライドさんも可哀想に、と思わず同情した。そしてこの二人も延滞料金を計算しているなら、アーサーは本格的に借金地獄だ。どっかで腎臓を売ることをおススメする。どうせまた生えるだろ。なんならその心臓に生えた毛も売りに払え。

微妙にどういった感想を持つのが正解なのか考えあぐねる俺と違って、エルメスははつきりしている。

その口元は下弦の月、その瞳は昴、その表情は宵越しの乙女だ。要するに感心してる。

「アーサーさん、ボニーさんとクライドさんの幸せの為に・・・そっか、山姫さんの所なら仮に二人が生存してるってわかってても、探し出すことも踏み入ることもできない」

「そうね。なんてったって、あたしの里、椿寿楼のある島は今は地図に載ってないもの」

「マジですか。仏教国で島国で地図にも載ってなかったら、これ以上安全な場所はありませんね」

「そうよ。上空からも地上からも海中からも、どんなレーダーやソナーを使っても探知されないように常にジャミングしてるし。うち

のセキュリティはその辺の貧乏国家よりも優れてるわ。まあ、悪魔の出現は想定外だったけど」

まあ、だろうな。空間を転移するようなわけわからんものを、どうやっても防ぎようがないだろうしな。防げる方法があるなら俺にも教えて欲しい。

それにしても、それほど高性能なセキュリティを供えたり、それ以前に島丸ごと所有するなんてどれほどの資産家なんだか。彼女は一体何を仕事にしてるんだ。エルメスも同じように疑問に思っているようだが、表情から察するに「なんか聞きたくない」だ。

結局は山姫さんも吸血鬼だ。さっきの話に出てきた特殊部隊侘助からしても、闘争や殺人に関するものなんだろう。

山姫さんには本当に申し訳ないけど、エルメスをもっ「そっち側」には連れて行きたくない。俺達もそこにはもう戻りたくはない。聞かない方が、正解だ。

「龍が帰ってきたらちゃんとあいさつに来るように言ってよ？ また空港まで迎えに行くわ」

「大丈夫ですよ。ジユノ様で一つ跳びしますから！」

「まあそれでもいいけど来る前に連絡しなさいよ。基本アポなしは受け付けないわよ。あたし忙しいから、この前みたく都合よくいるとは限らないから」

「……ごめんなさい。気を付けます」

そんなやり取りがあつて、10年9か月経過後の今日、山姫さんは日本に帰ることになって、みんなで見送っているわけだ。

「もう少ししたら私の誕生日なのに。一緒にレッツパーリしましょ  
うよ」

「そうしたいのは山々だけど、あたしも日本で仕事如山積みなのよ」

そう言いながら後方の付き人に山姫さんが視線を流すと、二人はメガネをきらりと光らせる。

「提督のデスクは書類で埋もれています」

「報告書よりも未決済書類が多いので、早急なご帰投を」

「延期を申し入れたクライアントから苦情が」

「提督の指示がなければ部下達の仕事が進行しません」

付き人の愚痴に山姫さんは両手をWにして「ホラね」と溜息だ。本当に多忙を極めるキャリアウーマンだったようで、エルメスは無理に引き留めようとしたことを申し訳なく思ったようだ。

「山姫さん、忙しいのに我儘言つてごめんなさい。でも、すごく楽しかったです。ありがとうございます」

「あたしも楽しかったわ。結婚式、楽しみにしてるわね」

「はい！」

明るく返事をしたエルメスだったがすぐに名残惜しそうな顔をして、再び笑顔。

「山姫さん、最後にみんなと記念写真撮りませんか!？」  
「ああ、いいわね。芋環<sup>おたまき</sup>？」

オダマキと呼ばれた男は腕時計を見て「10分です」と、溜息を吐いて隣の付き人も「手短にお願いします」となにやら二人は面倒くさそうだ。それを見て山姫さんも溜息。

「全くウチの秘書は二人揃って愛想がないんだから。あと10分しかないから早く撮りましょ」  
「やったあ! じゃあちよっと待っててくださいね、デジカメ持ってきます」

デジカメを取りにエルメスがフツと姿を消したので、その間にみんなが集まっておくと、すぐにエルメスが戻ってきた。エルメスがデジカメを操作していると山姫さんがひょいっとそれを取り上げて付き人に振り向いた。

「虎杖<sup>いたどり</sup>、撮って」  
「映らないはずでは？」  
「それが映るのよ。いいからお願い」  
「はあ、わかりました」

なかば訝しげなイタドリは怪訝そうな顔をしながらもデジカメを受け取る。エルメスと山姫さんを真ん中にして、俺達シュヴァリエとシャンティファミリーで取り囲んで、吸血鬼組が姿を消すと、「やはり映っておりますよ」とがっかりしていたイタドリは画面を二度見した。

驚きながらも画面を覗きながらもう少し真ん中に寄れ、と指示を

出すクールなイタドリは感心だ。少しして「では撮りますよ」と声のした後にフラッシュが焚かれて、念のためと言って3回ほどシャッターが切られた。

撮影が終わると、エルメスはすぐにイタドリの下に駆け寄って行った。

「えつとー、虎杖さん？ いたどり ありがとうございます。ご迷惑おかけしました」

「いいえ。お安い御用です」

エルメスに礼を言われたイタドリは、それとハッキリわかるような営業スマイルを浮かべて、エルメスにデジカメを返却するとすぐに営業スマイルを引っ込めて後方に控える。どこまでもクールで愛想の悪い山姫さんの秘書にはエルメスもさすがに苦笑するしかないようだ。

一方の山姫さんは、撮影が終わって着物の袂を漁っていたと思うとユアンの下に歩み寄って、探し出したものを差し出す。

「オリバー、これあたしのパソコンのメールアドレス。今の写真、メールで送ってね」

「えっ！ わ、わかりました！」

「時々メールしていい？」

「勿論です！ 俺もしていいですか？」

「勿論。待ってるわ」

「はい！ ありがとうございます！」

ユアンは嬉しそうに山姫さんから渡されたメモを握って、おもちゃ箱を開けた子供のような満面笑顔で頷いた。あの秘書二人を見た

後だとより一層いい笑顔に見える。もしや山姫さん、あの二人の無愛想さに辟易してんのか、と秘書一人に視線を移すと、オダマキとイタドリはユアンをガン見だ。

が、俺の視線に気づいた二人はすぐにパッと目を逸らした。あの二人も山姫さんに長い事仕えてるのなら「どこの馬の骨ともつかない青二才が、ウチの提督に色目使いやがって」と言った具合か。

ユアン、思った以上に山姫さんをゲットするのは難しそうだぞ。あの二人からは俺と同じにおいがする。超カタブツの匂いがする。絶対邪魔されるな。

「じゃあみんな、またクリスマスにね」

「はい！」

「お気をつけて」

「ありがとう！　じゃあね！」

笑顔で大きく手を振った山姫さんは、長い黒髪を翻して月明かりを反射する黒塗りの車に乗り込み、ゆっくりと発進する車の窓からいつまでもいつまでも手を振って、インドを後にした。

彼女たちを見送って屋敷に戻ったエルメスは、コピーしたデータをすぐにユアンを含め全員のパソコンに送信して、3枚の中から比較的映りのいいものを選んで引き延ばして印刷した。

「カイ、明日お買い物に行こうよ」

「それ入れる額買うのか」

「うん。せっかくの記念写真だもん。綺麗な額に入れてリビングに

飾るの！」

エルメスはそう言って無邪気に笑って見せて、本当に大事そうにいつまでも写真を見つめていた。

翌日エルメスと金箔を施されたアラバスク模様の額に写真を入れてリビングに飾った。

写真の中では、嬉しそうにほほ笑むエルメスの右隣に優しく微笑んだ山姫さんと二人で手でハートを作って突き出すボニーさんとクライドさん。その隣にはクリシュナを抱っこするシャンティとレヴィが満面笑顔で、その隣にスニルもピースして笑う。いまや、屋敷にいる人間はこれだけだ。

エルメスの斜め後ろから山姫さんを見つめるユアンと、肩を組んでなぜかB・BOYなポーズをとるチャラ男3兄弟。その3兄弟に呆れたように笑うベディと肩を組んで笑うダイナとトリス。

エルメスの背後でにっこり笑ってピースするガラードとランス。その隣で親指を立てる常識人コンビ・ガルフとペレアス。それと、腕に抱きつくエルメスに微笑む俺。

俺って、こんな顔できんのか。写真を見て、なんとなくそう思ってたちょっと可笑しい気分になった。

写真を眺めていたら、エルメスが斜め下から見上げているのに気付いた。

「カイが笑ってるから、これにしたの」

「ふーん」

「他のは笑ってないんだもん。カイったらいつも無愛想なんだから」

「山姫さんの秘書ほどじゃねーよ」

「ああ、まあね。でも、どうせ残すなら、笑顔の方がいいよね」

「そうだな」

「カイが笑った顔は優しくて、大好きだよ」

「そーか」

バレバレなんだろうが、照れ隠しで適当に返事してたせいかエルメスはちよっとむくれたようだったが、すぐにわかったよう笑顔になる。

「でも、私以外の人にそういう優しい笑顔向けないでね。私にだけにしてね」

「ソレお前が言う?」

「言う。私と違ってカイのは貴重なの」

そう言っつてエルメスはちよっといたずらっぽく笑ってみせる。その笑顔を見て、つくづく思う。

俺だつて、お前の笑顔は大好きだ。お前の笑顔を見たいがために、お前が笑顔でいられるように魂を売り渡すんだ。

そう、それこそが目的なんだ。エルメスの幸福、エルメスの笑顔。

すべては憂いのないエルメスの笑顔の為に。

「エルメス、いっぱい写真を撮ろっ」

「うん」

「たくさん思い出を作っつて、たくさん笑おっ」

「うん」



「そしたら俺は幸せに死ねるし、死んでも、生まれ変わってもお前を忘れたりしない」

「うん。そしたら私も記憶を消されても、カイのことずっと忘れな  
いよ」

「ハハ、前はあんなに忘れてほしいと思ってたのに、今は忘れてほしくねえって思ってるよ、俺」

「心配ご無用。忘れたりしないよ。愛して愛されたことを忘れるほど、バカじゃないよ」

「そうだな。絶対忘れられなくしてやっから、覚悟しろ」

「必要ないよ。もうなってる」

記録にも記憶にも残るように。エルメスの笑顔を覚えていられたら、地獄に落ちてエルメスを思い出したとき、記憶の中のエルメスはきつといつも笑顔だ。そうすれば大事な女が泣いてないかって、心配せずに済む。

俺が死ぬときに見る走馬灯は、きつと幸せだ。エルメスも俺も、幸せな過去を振り返って別れられる。

きつと、そうなるに違いない。

シユヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

毎年のことだが、今年は特に悩みの種だ。

バルコニーで煙草をふかしながら考える。エルメスの誕生日プレゼント、何にしよう。今まで人がプレゼントと称して与えるようなものは大概プレゼントしてきた。しかも今年は結婚するわけだし、なんかいつもと違った感じの物をやりてーよな。女はサプライズ好きだし、エルメスも例にもれずそうだろうし。

そんな事を考えてぼーっとしていると、クライドさんとボニーさんがなんだか知らない歌を歌いながらバルコニーに出てきた。

それを横目に再び思索に耽っていると、クライドさんが話しかけてきた。

「マルマルモリモリみんな大好きー・・・なんだ、また恋煩いか」

「・・・違います。なんですかその歌」

「昔日本で流行ってたんだよ。それよかまたケンカか？」

「や、違いますけど」

「なに？ 今度は何悩んでんの？ オニーサンとオネーサンに話して御覧」

何故だろう。この不安はどこから来るんだろう。この二人に人生相談はしたくねえ。が、エルメスのプレゼントとなれば話は別だ。この自由人いや、宇宙人たちの事だ。とんでもねー発想を展開してくれるに違いない。

もうすぐエルメスの誕生日で、そのプレゼントに悩んでいる話すと二人も頭を悩ませ始めた。

「うーん、ミナかぁ。ミナなら何やっても喜ぶだろうけどね」

「そーだなあ。今までは何プレゼントしたんだ？」

「えー・・・服、アクセサリー、文房具、図書カード、本、ゲーム、パソコン、ペット・・・あとは・・・ああ、花火」

「お前スゲエな」

「花火って・・・アンタやることも二枚目だね」

「そうですね」

「お前謙遜って言葉知ってる？」

「存じ上げません」

列挙してみてわかったけど、明らかにネタ切れだ。これ以外にエルメスが欲しがりそうなもので俺に思いつく物って言ったら、建築物しか思い当たらない。そしてそれをやったところでなんになる。

あらかたネタを出し尽くしていることに、ボニーさんとクライドさんも頭を悩ませる。

「うーん、なんだろう。こう、吸血鬼だからこそその盲点とかがありそうじゃない？」

「ああ、確かになあ。でもよ、食い物とかいらねーだろ」

「いらねーねー。どうせ暇なんだし、映画のDVDとか？」

「ああ、それはいいですね。アイツ映画とか好きみたいだし」

「ミナどんな映画好きなの？」

「恋愛映画は滅多に見ませんね。無理のある甘い展開が嫌いって言うて。よく見てるのはスリラーサスペンスとかホラーとかアクション」

「アイツ、映画の趣味は可愛くねな」

「はは、そうですね」

そうか、映画のDVDか。それはいいな。エルメスとは映画の趣味は合うし、俺も一緒に楽しめるじゃん。この二人に相談したのは正解だったな。

そう考えていると、クライドさんはまだ唸っている。

「でもよ、DVDはいいけど、それだとアイツ引きこもって家から出なくなるんじゃないの。映画鑑賞してる間お前相手してもらえねーぞ。アイツ熱中するタイプだろ」

それは困る。そう言われてみればそうだ。二人で映画鑑賞するのはいい。どっちかっていうと俺も熱中するタイプだし。けど、外に出て思い出作りもしたいし、俺に遣されたわずかな時間を映画ばかりに割かれるのもちよっとなあ。

結局振出しに戻って、再び頭を悩ませた。

「あ、そうだ。物をやるうとするからネタに困るんじゃない。物じゃない物にしたら？」

「物じゃない・・・？ あ、どっか連れてったりとか？」

「そう！ 思い出をプレゼントだよ！」

なるほど、女性ならではの発想か。思い出をプレゼントねえ・・・

前もエルメス楽しそうにしてたし、またどっか旅行連れてってやるかな。

「旅行行けよ、旅行。婚前旅行」

「ああ、それはいいですね」

「ミナは建物とか博物館とかアカデミックな感じの好きじゃん。それで、旅行先で映画とか劇場に舞台とか見に行くとか、コンサート行くとか」

「ああ、それいいですね。コンサート・・・アイツが音楽聞いてんの見たことないな」

「そーいえばそうだな。でもアイツ、流行りの音楽やロックなんかよりはクラシックが好きだぞ。昔ピアノ覚えたいとか言ってた」

「へえ・・・なんか既に不協和音が聞こえてきますね」

「確かに。ミナは絶対、超絶“変則”技巧身に着けるよな」  
「間違いないねー」

アイツ、クラシック好きなのか。意外にも程があるな。だとしたらオペラとか連れてきや喜ぶかな。バレエ？ うーん、オペラは俺は好きだけどバレエはないな。やっぱオペラにしよう。

旅行して美術館や博物館めぐりして、高級ホテルのスイートとつて、エルメスをドレスアップさせてオペラ。ああ、それいいな。そうしよう。やっぱこの二人に相談して正解だったな、と考えていたら。

「俺らも連れてけ」

「・・・イヤです」

「二人で旅行とかズルイじゃん」

「婚前旅行って言ったのクライドさんじゃないですか」

「ミナの誕生日はみんなで祝うべし」  
「……旅行は、ちよつと考えます」

結局この二人はたかる気のような。別にグループ旅行自体に問題はないけど、この二人と一緒だとエルメスと旅行を楽しむどころかこの二人の行動にヒヤヒヤさせられること間違いナシ。それはただの修学旅行だ。本格的に引率の先生に成り下がる。それは勘弁だ。またしても振り出し。旅行はいずれ行くとして、その時はこの二人には内密にハネムーンと決め込もう。

エルメスが好きなもの、映画、建築、インテリア、エクステリア、ガーデニング、可愛いもの、綺麗なもの、本、クラシック、様々な（不可解な）研究。

悩みに悩んでいつそピーカーでもプレゼントするか、となかば妥協しようとしたところで、ハツと思いついた。思い付いてすぐにジユノ様を呼び出した。

「今度はなんでしょう」

「ジユノ様に教えてほしいことがあるんです。で、その間空間を隔離したりできますか？」

「できますよ。それは願いに反映されることですか？」

「多分、エルメスの誕生日なんで」

「そうですね。いいでしょう。で、何を教授すれば？」

「その前に買い物いきましよう。さすがに俺じゃ骨が折れますから、ジユノ様の転移で運んでください」

「……あなた、段々厚かましくなってきましたね」

「気のせいです。さ、行きましよう。あ、外出に時間をかけてエルメスに怪しまれたら元も子もないんで、転移で連れてってください」

「・・・・・・・・」

ジユノ様は慚然としたままだったが、結局俺の言う通りに動いてくれた。ざまあみる。買い物を済ませた後、円卓会議にボニーさんとクライドさんも加えて招集。エルメスのバースディパーティーの計画を話すことにした。

「ええ！？　いくらなんでもそりゃ無理があるだろ」

「無理じゃねえ。そこは気合と努力で補え」

「いや、いくらなんでも厳しいぜ」

「んなこと言っても、もう買ってきた。ジユノ様の魔力と俺の財産を無駄にする気か」

「カイが勝手にしたんじゃないか！」

「ま、とにかくそういうことで、これからジユノ様に指揮を執って戴く」

「ジユノ様が？」

「そ。なんてつたつて知略の悪魔だ。ジユノ様に知らないことやできないことはない。そうでしょう？　マエストロ」

「そうですね。ビシバシ指導しますから、覚悟してくださいね、デイスヒーポロ」

「・・・スパルタってレベルで抑えてくださいよ、マエストロ」

というわけで隔離された空間にシュヴァリエ達と引きこもって、ジユノ様による特訓が始まった。

エルメスの誕生日まで1週間ちよつと。普通に考えたら無謀極まりないが、コレもエルメスのため。ボニーさんとクライドさんも協力してくれることになって、鬼教官の指導の下、血を吐くような努力の末に、なんとかモノにした。

そして迎えた10月1日。エルメスの誕生日。エルメスと二人、ドレスコードに着替えて出かけた。

エルメスは久しぶりのお出かけと誕生日とドレスコードなことに既にはしゃぎ始める。黒のシフォンのドレスにストールを羽織って、胸元にはアーサーが贈った青いダイヤのネックレス、長い髪を結びあげてシュヴァリエがプレゼントした青いバラの髪留めを飾っている。珍しく今日はバツチリメイクもして、完璧お出かけ仕様だ。

そんなエルメスを運転しながらチラチラ覗き見ては、正装エルメス可愛いと見惚れていた俺の視線に気づいたのが、エルメスが覗き込んできた。

「誕生日デートだね！ どこいくの？」

「着いてからのお楽しみ」

「またお楽しみ？ でも、楽しみだなあ。正装するようなところかあ、どこだろう？ あ、もしかして国立劇場？」

またしてもエルメスはお楽しみのお正体を暴くのに必死だ。しかし今回もその正体がばれることはなく、目的地に辿り着いた。すぐ着いた。

何と言っても今回は、俺らの居住区がある海沿いの岬ナリマンポイントの丁度反対側、コラバ&フォート地区東岸。距離にしたら2キロくらいの場所にある、ムンバイのランドマークが集中する地域。車を停めて降りたエルメスは、見覚えがあって当然、なその光景に目を丸くした。

賑やかに行きかう人々、大勢の客でにぎわう露天商、それを総べるかのようにそびえ立つ巨大なインド門と、その隣には豪華な佇ま



いのタージマハル・ホテル。エルメスはしばし立ち尽くして、門を見上げていた。

「お前にとっては、思い出深い場所だろ」

エルメスにその声をかけると、どういっわけか泣きそうな顔をして俺を見上げた。

「どうして・・・？」

「ここは、クリシュナさんと出会った場所なんだろ」

「・・・うん」

「クリシュナさんに聞いたかもしれないけど、この門と灯されているあの炎は、戦争で死んだ戦士たちを祀る為の物だ」

「うん」

「インドはクリシュナさんにとっては第2の故郷で、この門は第2の墓標だ」

「そうだね」

「俺は、お前がクリシュナさんを愛しててもいいと思ってる」

「え？」

「俺は忘れて欲しいなんて思ってないし、なによりクリシュナさんがいなければ今のお前はなかったんだから、感謝すらしてる。お前はここでクリシュナさんと出会って、恋をして、幸せを知った。だから、ここで俺に誓ってほしい」

「なにを？」

「今度は俺と幸せになるって」

エルメスは俯いたかと思うと少し泣きそうな顔をして、笑いながら顔をあげる。

「もう「幸せになれ」とは言わないんだね」

「ああ、二人で一緒に」

「うん、一緒に幸せになろうね」

エルメスも、俺が死ぬのは辛いと思う。けど、いつまでも俺が湿気た顔してたら、せつかくの短い余命を無駄に過ごすことになる。

エルメスの為にも、自分の為にも、吸血鬼にしては短い生涯を謳歌しよう。

エルメスとそう約束した瞬間、門の奥、炎の辺りにスポットライトが当てられ、燕尾服に身を包んだ男たちが現れて整列すると、奥に進むように促される。

驚くエルメスの手を取って歩き出すと、重厚なバイオリンの音と共に混声合唱が響き渡り、周囲の客たちも集まり始める。

「え？ な、なんだろう？ 第九？」

戸惑いながらも歩を進めたエルメスのもとに、シャンティ一家やアジメール夫妻までやってくる。

今日のために用意されたガーデンテーブルの一等席にエルメスを座らせようとしたとき、目映いライトに映し出されたオーケストラを見て、あつと声をあげた。

「うそ、なんで」

驚き立ち尽くすエルメスに旋律の波を届けるのはシュヴァリエ。

声の祝福をもたらすのはボニーさんとクライドさんとジユノ様の子

分たち。

その光景と、全身に降り注ぐベートーヴェンの交響曲第9番第4楽章「歓喜の歌」に、エルメスは呆然と立ち尽くす。

シャンティに促されてやっとのことで腰かけたエルメスだったが、相変わらず目と口は開いたままだ。

「婚約して最初の誕生日。第九がぴったりだろ」

「みんな、楽器できたの？」

「いや、俺らは武器しか持ったことなかったから、最初はかなり苦労した」

「・・・すごい」

「お前にそう言ってもらえたら、努力した甲斐があるってもんだ」

みんなの演奏と合唱に聞き惚れていたエルメスは、演奏が終わった瞬間立ち上がってスタンディングオベーション。周囲の観光客たちからも拍手喝采で、シユヴァリエたちはそれにほっとしたように顔を見合わせた。

俺も立ち上がり拍手を送るエルメスの横に行った。

「なんでも好きなものリクエストしろ」

「いいの？」

「その為のオーケストラだ」

「じゃあ、エルガーの威風堂々！」

「わかった」

指揮をするジュノ様にエルメスのリクエストを伝えると、ジュノ様はすぐに指示を出してシユヴァリエや子分たちは楽器を持ち変え

る。

「え！ 今あの楽器どこから出してどこになおしたの？」

「ジユノ様の作った異空間を物置にしている」

「なるほどお。ドラ えもんみたい」

非常に便利な悪魔の能力に感心して訳のわからないことを言いながらも、ジユノ様が指揮棒を掲げると喋るのをピタリとやめてオーケストラに観入る。

ジユノ様の鬼気迫る指揮、迫力のある重厚な演奏に、エルメスは胸の前で手を組んで聞き惚れる。

演奏が終わる頃には涙をこぼして、再びスタンディングオベーション。

「ブラボー！ 本当にすごい！ 感動して思わず泣いちゃったよ！」

ギャラリーと共に拍手を送るエルメスにシユヴァリエはもとより、ジユノ様の子分まで嬉しそうだ。

その時、後方が騒がしくなりホイッスルの音が響き渡る。

「コラー！ お前らなに無断でコンサートなんかやってんだ！」

「ご丁寧に照明やベンチまで設えて大音響でのコンサート。早くも警察に嗅ぎ付けられてしまった。」

ヤバい、と顔色を変え逃げる支度をしようとしたら、思わぬ味方。

「まーまーお巡りさん、あんたらも聞いてきなさいよ」  
「こんな素敵なコンサート中止したらバチが当たるよ」

なんとギャラリイが警官を説得し始めた。

「兄さん達、演奏続けてくれ」

「ただでコンサート観れる機会なんてないからね！　どんどんやつとくれ！」

警官がわーわー言っている間にも他のギャラリイたちは早くやれとせつつく。苦笑いしながらもみんな楽器を持ち直した。

「エルメス、次は？」

「えっとね、じゃあプッチーニのトゥーランドットの誰も寝てはならぬ」

ギャラリイとエルメスのリクエストで次から次へと楽器を持ち替えて演奏がされる。

パッヘルベルのカノン、ジャンニ・スキッキの私のお父様、モーツアルトのファイガロの結婚、ラヴェルのボレロ、ドヴォルザークの新世界より、ホルストの惑星より火星、ベートーヴェン交響曲第6番田園、ブラームスの交響曲第一番、モーツアルトのドン・ジョヴァンニ、ベートーヴェン交響曲第7番、ヨハン・シュトラウスのラデツキー行進曲。

普通のコンサートではあり得ない曲数にギャラリイはいよいよ熱い拍手を送る。でもさすがに夜も更けてきた。このままじゃ騒音

で訴えられそうなので、最後のリクエストを尋ねた。

「ねえ、ピアノはある？」

「あるぞ。ピアノ協奏曲か？」

「うん。大好きな曲があるんだけど、難しい曲なの。覚えたばかりなら、弾けるかな？」

「なんだ？」

「ラフマニノフ、ピアノ協奏曲第2番」

「ああ、お前好きそうだな。わかった」

立ち上がってエルメスのリクエストをジュノ様に伝えると、ジュノ様は振り返ってどこからともなくひょいっとグランドピアノを取り出す。それにギャラリイは驚愕。

「なに！？今のどうやったんだ！」

「うふ。ただの手品ですよ」

「姉さん手品までできんのかい！たまげたな！」

「それより姉さんたまげた美人だな！天は人に二物を与えるんだなあ」

「五物くらい持ってそうだ」とどよめく観衆に俺達もエルメスもクスクス笑って、ジュノ様から楽譜を受け取ってピアノの前に座った。

「え？ カイが弾くの？」

「ああ、今日の為に俺もみんなもスゲー練習したんだ。ちゃんと聞いとけよ」

「うん！」

エルメスは瞳を輝かせて胸の前で手を合わせて満面笑顔で頷いた。楽譜を広げ、一つ深呼吸。吸血鬼として格段に跳ね上がった身体能力、聴力、脳が活性化した為に感覚すらも研ぎ澄まされて、ピアノの習得自体は苦勞しなかった。

でも、はつきり言ってまだ初心者だ。初心者には難しい曲に、さすがの俺も緊張した。目の前で楽譜のページ捲り用小鬼が「ダイジョブダヨー」とケツを振って小躍りするので思わず嘖き出して、少し緊張がほぐれた。

振り返ったジュノ様が頷き、鍵盤に指を乗せる。ジュノ様の指揮棒が振られて、俺の初演を奏で始めた。

第1楽章はモデラート。八短調2分の2拍子ソナタ形式。8小節にわたりピアノで奏される荘重な和音、その後、分散和音、アルペツジョに続き、登場する管弦楽の圧倒的な第一主題。大きなインパクトをもって聞き手を魅了する。

変ホ長調の第2主題はラフマニノフならではの、センチメンタルで、甘美でいて艶やかな魅力を持つ楽章。

ドラマティックな第1楽章に続いて第2楽章。アダージョ・ソステヌート、ホ長調4分の4拍子3部形式。

どこかノスタルジックで、抒情性あふれる旋律。ピアノの3連音符にのせて、クラリネットが第一主題を吹奏する。

この主題が多声的に扱われた後、ウン・ポコ・アニマートの中間部へ。この後、ピアノが華やかに、そして、燦然とカデンツァを奏する。主部が反復され、ピアノ和音によるコーダとなり、最後は静かに曲をとじる。

最後の第3楽章はアレグロ・スケルツォアンド。八長調2分の2拍子。

管弦楽の序奏に続き、ピアノが中心となる主題を奏する。スタッカートで、非常におどけた雰囲気奏する。

オーボエとヴィオラによって奏される第二主題は、第一主題とは対照的に、ラフマニノフらしい叙情的な美しさにあふれている。

弾きながら感動するほどに美しい曲。迫力がありドラマティックで、熱情と恩情すらも感じさせる。

甘さと激しさをより引き出すジユノ様の指揮で、より一層印象が際立つ。エルメスに捧げるに、これほどふさわしい曲はない。

甘美でセンチメンタル、ロマンティックでノスタルジック、激しく強く、優しく儂い。旋律の波に溶けて、さらわれてしまうようだ。

この曲はまるで、エルメスのよう。

勢いをもってコーダにむかい、最後は圧倒的な全合奏によって音の波を一気に増幅させて、津波の様に終結させた。

演りきった

怒涛の演奏からピリオドへ達し指を離した瞬間に、身震いするほどの達成感を感じた。大きく深呼吸をすると、ギャラリーからは割れんばかりの拍手を送られた。いつの間やら、止めに来たはずの警官もギャラリーに紛れて拍手を送っている。

ああ、スゲエ。メチャクチャ気持ちがいい。旋律による支配、達成感、賛辞。エルメスに贈ったはずなのに、俺が感動してしまう程



だ。

拍手に応えるようにジユノ様が振り向き、俺達も立ち上がり礼をとると再び拍手が巻き起こって、立ち上がって拍手を送るエルメスは微笑みながら涙を零していた。

「すごい！ 本当にすごいよ！ カイもみんなもジユノ様も、すごく上手だった！ すごくカッコよかった！ 私すっっすごい感動しちゃった！！」

ピアノの傍から離れてエルメスの前に行くと、エルメスはそう言っ  
ってまだ泣き止まない。

「泣きすぎだろ」

「だって、すっごい感動したの！ すっごい嬉しいんだもん！ しようがないよ！」

「はは、ありがとう。エルメス、誕生日、おめでとう」

「もー！ 私の方こそありがとう！！」

エルメスが想像していた以上に喜んでくれたのが嬉しくて、そう  
言っ  
て抱き着いてきたエルメスを抱きしめると、観衆から拍手と共に口笛まで鳴らされる。

普段なら俺が人前でそんなことするなんて絶対あり得ねえけど、  
ただ  
けど今はそんなことどうでもいいくらい、幸福だ。

ジユノ様の“手品”で後片づけをして、シユヴァリ工達はジユノ様が連れて帰って、俺とエルメスは車で屋敷に帰った。

帰ってる車中でも屋敷に帰ってからもエルメスは興奮が冷めやらない様子で、ずっとハイテンションだ。

「はー、まだ心臓ドキドキいつてる。カイもみんなもすごいね！最近みんなに相手してもらえないと思ってたら、練習してたんだね！」

「そーそー。ジユノ様にしごかれまくったぞ」

「ジユノ様が協力してくれたの！？ さすがはジユノ様！」

「たいしたことではありませんよ。エルメスさんが喜んでくれて、私も皆さんも頑張った甲斐がありました。最初カイさんにその計画を聞いたときは冗談じゃない、割に合わないと思いましたが、よかったです」

そんなこと思ってやがったのかこの大悪魔と違ってたら、ジユノ様にくっついてたエルメスは即座に俺にくっついてきた。

「カイが考えてくれたの！？ オーケストラしようって!？」

「あ？ ああ。クライドさんがお前はクラシック好きだったし、みんなで祝うもんだったし、インド門のことも聞いてたし、あそこならお前にとって思い出のある所だし、広場もあるなあと」

「んもお、本当にもう、カイってばどうしてそんなにカッコイイの？」

「お前にモテたいから」

「もう大好きだよ!!!」

「バカッブルが増えたな・・・」

既に冷静さを取り戻したガルフにそうツッコまれたが、今日だけは全許し。せつかく大喜びするエルメスに水を差したくはないからな。

ひとしきり抱き着いて尻尾を振っていたエルメスは再びパツと離れて質問タイムだ。

「ねえ、どこで練習してたの？」

「この屋敷のサルーンとか空き部屋」

「でも、何にも聞こえなかったよ？」

「ジユノ様に空間を隔離してもらってたからな」

「なるほどお！ どうりでみんないないはずだよねえ」

「ああ、もうずっと練習だったからなあ。最初基礎覚えて、ある程度弾けるようになったらジユノ様にコレをテレビ見ながら弾けるくらいになるまで練習しろって言われて」

ジユノ様から渡された楽譜をエルメスに渡すと、エルメスは信じられないという顔をして俺とジユノ様を交互に見つめた。

「あり得ない！ リストの超絶技巧練習曲集！ これやったの！  
？ 全部！？」

「ああ、一応やりこんだけど、適当に弾ける段階にはまだ至ってねえな」

「いや、十分じゃない！？ 短期間でこれを弾けるようになるなんて・・・本当に頑張ってくれたんだね・・・ありがとう」

そりゃあ頑張りもするさ。可愛いエルメスが喜ぶ顔を見れるなら、ジユノ様に指揮棒でどつかれても、指が疲労骨折しても、この顔が見れたらそんなこと苦じゃない。エルメスが喜んでくれたら、それでいい。それが俺の幸せだから。

「カイ、私にもピアノ教えて？」

「なんで？」

「私もピアノ覚えて、二人でリストやベートーヴェンを連弾するのがきつと楽しいよ」

ああ、きつと楽しい。謳歌しよう。残りの人生をエルメスと、二人で。

シユヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

みんなに呆れられた。

「お前ら、マジどんだけなの」

「お前らっていうか、カイだよな」

「マジどんだけ」

エルメスの誕生日から3日後、リビングに降りて行ったらそんな事を言われて、エルメスは赤くなって俯いて、俺は白い目もしくは好奇の目に晒される。

それを無視してバルコニーに出て煙草吸ってたら、やっぱりチャラ男3兄弟とダイナとベディ。

「カイ、程ほどにしねえとその内エルメスが死ぬぞ」

「死ぬわけねーだろ」

「カイは容赦とかなさそつだもんなあ。普通に心配したぞ」

「アホか。まあ気絶はしてたけど」

「・・・マジどんだけ」

「つーか、よくエルメスが許したな。3日も寝室に引き籠って」

「そりゃ籠る。エルメスに誘惑されたら籠る以外にはない」

うん、ない。人生を謳歌すると決めたからな。ない。

誕生日の夜、非常に異常なハイテンションエルメスは珍しく、自分からキスしてきた。

「どーした。珍しく積極的だな」

「今日は嬉しかったから、お礼なの」

「ああ、礼はキスだけ？」

「・・・じゃ、ダメ？」

「ダメ」

ダメに決まってる。こちとら練習三昧で1週間以上何もしてなかったところにエルメスの誘惑だ。勝てるわけがない。勝つ気もない。しかも1回目、そろそろ本番いっちゃおうかと思ってたら、エルメスは潤んだ瞳で見上げた。

「待って。カイの、してあげる」

そりゃ燃える。燃え盛る。そりゃ3日も引き籠る。エルメスが気絶しても目を覚ましたら即再開。俺ってケダモノ。エルメスに火を付けられて、たっつっぷりと礼を頂戴した。

「うわあ、マジかよ！ 超羨ましい！」

「っーか鬼畜だな。失神させるとかどんだけだよ」

「いやでも、あのエルメスがだぞ。そりゃ燃えるな。そりゃ本当し  
ようがねえな」

「だろ」

さすが同性。ご理解いただけたようだ。ひとしきり勝手に想像して悶えた後、なぜか溜息を吐いて落ち込む5人。

「いいなあ、俺も彼女欲しい」

「ヤリてーだけなら、ナンパとか店で済ませられるだろ」

「いや、なんていうかそう言うのはもう卒業したい」

「いい加減落ち着いたしなあ」

「つーか落ち着きたい」

「それはもう飽きたってどうか」

「飽きるよなあ、だって俺らもうそろそろアラ還じゃん」

「なあ。ああー彼女ほっし！」

アラ還が恋に恋しはじめた。俺は自分では全然落ち着いてる気がしないんだけど、むしろだいぶ元気になってんだけど、エルメスに落ち着いたという意味では、悟りの境地を開いたってレベルで落ち着いた。コイツらはそれに憧れているようだ。

確かに適当に女遊びしてた頃とは全く違う。エルメスがいたらスゲエ楽しいし、超幸せ。毎日がパラダイス。人生バラ色。

エルメス以外の女といた時は面倒くせえとしか思わなかったのに、多分今は俺の方が面倒くせえ奴だ。いや、そんなことはないか。ない。

煙を吹き出しながら「恋がしたい！」と女みたいなことを言い出す5人を見てたら、エルメスもバルコニーに出てきた。

「カイ、ピアノ弾いて？」

「はは、いいぞ。何がいい？」  
「えつとね、ラ・カンパネラ」  
「ああ、わかった」

羨望の眼差しを向ける5人に見送られて、3階の東にある“音楽室”へ。誕生日の日の夜、「せっかくだから専用の部屋作るうよ」とエルメスが言いだして、空いていた部屋が3つ並んだところの壁をブチ壊して一続きにして“音楽室”を作った。

作ったのは勿論シユヴァリ工達だ。多分ジユノ様も手伝ってくれた。俺らは寢室にこもってたから、その間に作ったようで、リビングに降りる前に行ったら、なかなかいい感じに改築されていた。

音楽室の隅に鎮座する、黒く存在感のあるグランドピアノに腰かけると、すぐ横にエルメスも椅子を持ってきて腰かける。言われたとおりラ・カンパネラを奏し始めると、エルメスはウキウキと見入って聞いてくれている。

リスト作曲、パガニーニによる超絶技巧練習曲、嬰ト短調ラ・カンパネラ。良い曲だけど、超絶技巧曲と言っただけあってかなり難しい。

リストは、パガニーニがヴァイオリンという楽器で実現した高度なテクニクを、ピアノ独自の新しい語法や技巧によって表現しようと試みた。

その結果、非常に革新的で、おそろしく難易度の高い作品が生み出されることになった。リストの楽譜どおりに演奏することは、作曲者本人をのぞけばほとんど不可能だと言われてきた程に、この曲集の練習曲は難易度が高い。

何とか弾ききって指を離すと、エルメスはパチパチと手を叩いて喜んでくれた。



「本当にすごいねえ。カイって実は音楽の才能あるんじゃない？」  
「かなあ、どうだろう」  
「今まで音楽何もしたことなかった？」  
「讚美歌くらいしかない。銃と煙草以外持ったことなかったし、考えたこともなかったな。才能つか、吸血鬼だからだろ。じゃなきゃ他の奴もできなかっただろ」  
「ああ、そうなのかな？ でもすごいよ！」  
「そうか？」  
「うん！」

余程感動してくれたのか、誕生日の日から事あるごとに「すごい」を連発するエルメス。俺を見つめる視線が激アツだ。どうやら惚れ直してくれたようだ。嬉しい。

「ピアノ弾いてる時のカイ、すっごくカッコイイ」  
「だろ」  
「あんまりカッコイイと心配になっちゃう」  
「なにが」  
「他の女の子がカイの事好きになったら困るもん」  
「バカだな、お前」  
「なんで？」  
「心配なんてする必要ねーだろ。俺はお前以外はいらない」  
「はう！今のシビレた！」  
「ハハ、だろ。他にリクエストは？」  
「えっとね、えっと、じゃあシヨパンの幻想即興曲！」  
「また難しいヤツを・・・」

いつものことながらかくや姫エルメスは無理難題を押し付ける。  
リストのマゼツパ、同じくリストの狩、シヨパンの木枯らし、ハチヤトウリアン剣の舞、ラヴェルの水の戯れ、シヨパンの英雄ポロネーズに革命のエチュード。マジ容赦ねえ。

「っあー、疲れた」

「カイすごーい！ カツコイイ！」

「そりやどうも。っーかお前ちよっとは容赦しろよ。俺の指、疲労骨折すんぞ」

「大丈夫だよー」

「大丈夫じゃねーよ。今夜ベッドで使えなかつたらどうすんだ」

「バカじゃないの！ もう一生分使ったでしょ！」

「イテッ！」

余命幾ばくとはいえ、一生分にはまだ到達してねえ。っーか冗談なのに、指をあらぬ方向に曲げられた。辛うじて骨折はしてないものの、エルメス専属ピアニストの俺にこの仕打ち。

「お前なあ、ピアノ弾けなくなったらどーすんだ」

「折れてもすぐ治るじゃない」

「そういう問題じゃねーだろー！」

「そういうものじゃない」

そういう事じゃない。思いやりの問題だ。誰のために頑張ったと思ってるんだ、と溜息をついてたら、なんかエルメスが思いついた顔

をする。

「わかった！ じゃぁリストの溜息！」

「・・・なにをわかったんだ」

「だってカイが溜息吐いたから」

「ハア」

思わず溜息だ。溜息吐きつつ、ピアノに視線を戻して、またしてもハードルの高いリストの溜息。ものの数分間に俺は何回溜息吐かされて、何回溜息と言う単語を使ったんだ。いい加減ゲシユタルト崩壊する。

でも、エルメスが俺にピアノを弾いてくれと頼むのは、無条件に嬉しい。それで喜んでくれるから、なお嬉しい。エルメスはピアノを聞くのにすっかり夢中なようだ。

「ねえ、次はベートーヴェンのテンペスト弾いて」

「あ、俺もそれ好きだ」

「本当？ なんか嬉しい」

「そーか？」

「うん」

ふーん、みたいな顔して俺も嬉しいけど。ダンテの神曲も、シエイクスピアも、映画の趣味も、テンペストも、俺の好きなものをエルメスも好きだと言うのは嬉しい。

ベートーヴェンが「この曲はどう解釈すれば？」そう尋ねてきた弟子に「シェイクスピアのテンペストを読め」と言ったことから、そう名付けられたと言う曲。

テンペストは主人公の復讐を軸にした物語。公位を追われた男が復讐の為に長年耐え忍び、ついにその時が訪れる。標的であるナポリ王とミラノ大公の乗る船を大嵐で難破させ、絶海の孤島に漂着し、王と離れ離れになってしまったナポリ王子と自分の娘が恋に落ちたことで結婚を許す。

王は下剋上を企む大公に命を狙われ、主人公は島の怪物に命を狙われるもどちらも未遂に終わり、魔力により錯乱した王の一行に、主人公は復讐を思いとどまり、過去の罪を悔い改めさせ許すことを決め、和解する。王たちをナポリに送り届け、そこで娘と王子の結婚式を行う。

「我々は夢と同じ物で作られており、我々の儚い命は眠りと共に終わる」

テンペストの有名な一文。俺には、この言葉が痛いほどに心に響く。ジュリオ様が赦すことを決意してくれていたら、きっとテンペストの様な結末を迎えられたのに。ま、結婚は結局するから結果オーライ。

夢は記憶や感情を整理するために見るものだ。それと同じもので、俺は作られている。願望、欲望、希望、絶望、憤怒、悲壮、愛。俺の命は、夢と共に潰える。エルメスに、いい夢を見せる為に。

テンペストを弾き終わると、エルメスは優しく微笑む。

「きつと主人公は観客が拍手で送りだして、最後は幸せに死んだん

だよ」

弾き方から俺の感情でも読めるのか、エルメスはそう言うてにっこり笑う。それにつられて、俺も思わず口元が緩んだ。

「じゃあ、次はリストの愛の夢を弾いて」

「急に雰囲気違う曲になったな。どうした」

「カイの愛のこもった愛の夢を聞きたくなったの」

「本当お前ロマンチストだな」

「えへへ。お願い」

「ハイハイ」

表面上渋々、内心ちよつと浮かれて弾く愛の夢。今日、これからエルメスの見る夢が、愛にあふれた優しい夢であるように、優しく情感たつぷりに弾いてみせると、エルメスはウツトリした顔で聞いている。

エルメスにいい夢を、優しい夢を、愛の夢を。エルメスのことだけを思つてピアノを奏でた。

「カイの弾く愛の夢は、優しく甘くて綺麗」

「お前の見る夢も、きっとそんな夢だ」

「カイがそう言うなら、きっとそうだね。じゃあ次はサティのジュ・トゥ・ヴーを弾いて」

「メチャクチャ感情込めて弾いてやる」

「あはは、バカ」

サティがシャンソンから編曲したジユ・トゥ・ヴーは甘美で心地よいワルツ。タイトルに倣って、予告したとおりに感情を込めて甘美に奏でる。

弾き終わってエルメスに振り向くと、エルメスは立ち上がり、隣の横に腰かけてきた。隣に座って俺の手を取って指を絡ませるエルメスの視線は、潤んで熱を帯びている。激アツだ。

「本当に感情タップリだね」

「そりゃタイトル訳したら“お前が欲しい”だからな」

「“あなたが大好き”とも訳すよ」

「どっちでもいいさ。どっちも、正解だ」

「うん。私、カイのピアノ聞いてたら、すぐドキドキするよ。同じ人にまた恋をしたみたい」

「本当お前ロマンチストだな」

「でも、そうさせてるのは、カイだよ。私このままじゃ心臓が持たなくて死んじゃう」

「ハハハ、お前本当バカ」

「バカじゃないよ」

「バーカ。恋焦がれて死ぬのは、俺の方だ」

なんとも可愛い事を言ってくれる。エルメスが可愛くて、エルメスの言葉が嬉しくて無性にたまらなくなって、エルメスを膝の上に載せて頭を引き寄せてキスをした。

唇を離すと、エルメスは何故かふふつと笑う。

「どした」

「カイと初めてキスした時も、こんな感じだったなって」

「あー・・・」

「こんな感じで、こんな気分だった」

「どんな気分？」

「ヒミツ」

「本当は口で言う程嫌じゃなかったんだろ」

「・・・なんでわかるの」

「お前が抵抗しなかったから」

「したよ」

「その後はな。でもキスしてる時は抵抗しなかった。本当は、嬉しかったんだろ」

「・・・ちよつとだけね」

「素直じゃねえなあ」

10年前の真相に笑って、またエルメスと唇を重ねて、舌を絡ませる。愛の夢の様に優しく、テンペストの様に烈しく、ジュ・トゥ・ヴーの様に甘く。

エルメスとするキスは、甘い。感覚も雰囲気も、味すらも甘く感じる。甘くて、くせになる。場所も時間も忘れて、夢中になるほどに。

「カイとキスするの好き。なんだか夢の中にいるみたいに、ふわふわする」

「気持ちいい？」

「うん」

「もっとしてほしい？」

「うん」

「じゃあしない」

「もう、カイの意地悪」

「したかったら、お前からすればいいだろ」

エルメスは少し拗ねながらも、俺の頬を包んで唇を寄せる。少しおぼつかない、遠慮がちなキス。それがまた可愛くて、結局俺がエルメスの舌に深く舌を絡ませた。

唇を離して首筋にキスをすると、エルメスはびくと体を震わせる。キスしながら舌を這わせると、甘い吐息を漏らし始める。

「あ、カイ、ダメだよ」

「ダメじゃねーよ」

「だって、ここ、音楽室・・・んっ」

「ピアノ弾いたご褒美をちよつとくらい貰ってもいいだろ」

「もう・・・ちよつとだけ、だよ」

許可を戴いて、エルメスを抱き寄せながら再び首筋に舌を這わせると、可愛い声を出しながら反応するエルメス。超可愛い。

当然それだけで満足するはずもなく、服の上から胸を撫でる。

「あつ、カイ、ちよつとだけだつてば」

「まだちよつとの範疇だ」

「もう、どこまでがちよつとなの」

「さあなあ」

エルメスにキスしながらブラウスのボタンをはずして、服の中に手を滑らせて愛撫すると、エルメスは途端に嬌声を上げる。エルメスを膝立ちさせて胸にキスすると、より反応が強くなって、エルメ



又は口を閉じる。

「ふっ、ん、んん」

「我慢すんな、声出せ」

「や、だ・・・聞こえちゃう」

「俺が聞きてえから、声出せ」

「あっ、や、ダメ。や、ああっ」

「いい声。可愛いな、お前」

「やあっ、ちよつとって・・・言ったのに」

「まだ、ちよつとだ」

まだちよつとしか触っていないのに、スカートの中に手を入れて下着をずらしたら、糸を引くほどに濡れていて、濡らした指で撫でると、エルメスは我慢できずに声を上げて縋り付いてきた。

しがみ付くエルメスにキスしながら指を動かすと、最初はちゃんときすしたのに段々と舌の動きが鈍くなって、口の端から漏れる吐息の間隔が短くなっていく。

唇を離して空いた手で頭を抱き寄せると、またしがみ付いて素直に反応する。腕により力がこもって、躰が過敏に反応して、耳元で可愛い嬌声上がる。

「あっ、あっ、やあっ・・・カイ、もう・・・！」

快感に耐える限界が来たエルメスが一瞬体を硬直させた瞬間、指の動きを止めて下着を戻すと、エルメスは悶えるように息を吐きながら体を離して、潤んだ瞳で見つめる。その表情に思わずニヤリ。

「なんだ、物欲しそうな顔して」

「そ、そんな顔してない」

「してる。なに、続きしてほしい？」

「違うもん」

「ふーん。そうか」

エルメスを膝から下して隣に座らせて、ピアノのふたを閉じて立ち上がった。

「そうだよなあ。ちょっとだけって言ったしな。お前にも釘を刺されたし」

言いながらエルメスを見ると、エルメスはプイと顔をそむける。それにまたニヤリ。座ったままのエルメスを椅子に押し倒して、内腿を撫でると焦らされた体はまだ熱くて、エルメスは顔を朱くする。

「でも、折角お前は準備万端なのに、このまま放置なのも勿体ねえな。最後までしていいなら、続きしてやってもいいけど？」

「え、こ、ここで？」

「そう。人が来ても、どうせピアノの影でドアからは見えねえよ。

して欲しいんなら、そう言え」

「えう……ううー……」

顔を真っ赤にして悩み始めるエルメス。それに再びニヤリ。だいぶ調教の成果が出てきた。相当俺好みの女に仕上がってきた。大満足。

「やっぱやーめた。エルメス、腹減った。飯食おうぜ」

起き上がってそう言うと、エルメスは「なんですと!?!?」と言った表情を浮かべて、すぐにむくれた。

「グズグズすんな。さっさと服戻して立て」

「うるっさいな! バカ!」

「なに怒ってんだよ」

「怒ってないもん!」

「怒ってんじやねーか」

もちろん計画的犯行だからエルメスが怒るのも想定内だ。かといって放置はいただけない。今後に響くので、ご機嫌取りだ。

服を整えたエルメスに手を差し出すと、無然としたまま手を取って立ち上がるエルメス。そのまま手を引いて抱きしめた。

「ゴメンな、お前が可愛いから、ちょっとで済ませる自信なかったんだよな」

「な、なかつたんだ」

「むしろあるわけねーけど。でも、お前の可愛い声を聞きつけてやってきた聴衆がいたからなあ」

「え!?!?」

俺の言葉に驚いたエルメスがドアに視線を移した瞬間に、ドアの方から「ヤベ! バレてた!」という声と同時に走り去る複数の足音。それに笑う俺に、恥ずかしいのかエルメスはギョツと抱き着いて顔を隠す。それにまたニヤリ。

「お前の可愛い声を他の奴に聞かせるには勿体ねえからなあ」

「んもー、カイのバカア」

「後でタップリいい夢みせてやるから、それまで我慢しろ」

「そう言う事じゃないよ！ もう！」

「よく言うぜ。お前からキスして来たくせに」

「カイがしろって言ったんじゃない！」

「したいならしろつつたんだろ」

「もう！ だからってすぐ暴走して！ バカなんだから！」

「そーだな。でも、お前が可愛いんだからしよーがねーだろ。そんな俺がお前を好きなんだってことはわかるだろ」

「・・・わかるけど、全くもう。本当しようがないんだから」

「ご機嫌回復完了。やっぱ単純だコイツ。だいぶ手懐けたな。趣味と実益を兼ねてもうひと押し。」

「ゴメンな、寝室以外の場所では何もしねえって誓うから、キスだけは許せ」

「カイはウソつきだから信用できない」

「ああ、それもそうだな」

「なに納得してんのよ」

「じゃあ、お前を愛してるから、許せ」

「・・・いいよ」

エルメスから体を離して、顎を持ち上げて顔を近づけると、エルメスも目を瞑る。それで「やっぱやーめた」をやりたい衝動に駆られたけども、そこはさすがに我慢してキスした。

やっぱやめなくてよかった。エルメスとするキスはやっぱり甘くて、夢のようだ。この瞬間は俺もエルメスも愛の夢で作られていて、きつと今眠りに着いたら、幸せな夢を見ながら死んでいけるんだろ

う。

自分で自覚してしまうと、こんなにバカバカしいことはない。俺はすっかりエルメスに夢中になってる。すっかり虜にされてしまってる。

エルメスがどんな悪女でも、もし俺を愛していなくても、それでも傍にいたいと思ってしまう程に。

一瞬一時も離れずにいたい。エルメスの声を俺だけが聞いていたい。エルメスと二人で見る夢をずっと見続けたい。死ぬまで独占し続けたい。ずっと傍にいて俺を愛してると言っていて欲しい。

できることなら、死んでからも俺に愛の夢を見させてくれ。

## 番外編 吸血鬼はかく語りき

クライド「俺いつそのことアンジェロを尊敬しちまいそつだ」

ボニー「アンジェロ本当キレてるね」

ガルフ「そんなの今に始まったことじゃありませんけどね」

クライド「でもクリシュナ泣いてんぞ、今頃」

ボニー「だろうね。悔し涙流してるよ」

ペレアス「なんでですか？」

クライド「そりゃアイツがやりたい放題やってっから」

ダイナ「まあ、それこそ昔からですけど、今更でしょ」

ボニー「そーじゃないよ、ミナのこと」

ベデイ「あぁー・・・」

クライド「クリシュナ、アイツ一回しかミナに手エ出したことないのになぁ」

ボニー「可哀想にねえ」

パーシー「え！？ 夫婦だったんですよね!？」

ボニー「そーだよ。でもホラ、ミナはアルカードになんでも筒抜けじゃん」

トリス「ああ、クリシュナさんは気を遣ってたわけですか」

クライド「そーそー。ミナの処女を奪ったのが最初で最後だって嘆いてたなぁ、アイツ」

キルシュ「そりゃ確かに気の毒ですね」

ユアン「ていうかクリシュナさんって本物の紳士じゃん」

ペレアス「本当だな。クリシュナさんと比較すると、エルメスは力の何に惹かれたのか、全く理解できん」

リオ「言ってる。属性180度違うよな」

パーシー「共通点メガネしかねえじゃん」

ボニー「あ、そういえば、ミナ昔メガネ萌えて言ってた」

ダイナ「そんな理由!？」

ベディ 「つーかカイのは伊達だし」

クライド 「クリシュナだつて吸血鬼だったから、伊達だったぞ」

ボニー 「クリシュナの場合は大学に勤めてたから、それっぽくしてただけみたいだけど」

パーシー 「カイは特に意味なさそうだな」

ガルフ 「そうでもねーぞ。別に理由もなく、視力悪いわけでもねえのにメガネかけてる奴つてのは、自分の本心を晒すのが恥辱の極みって聞いたことがある。アイツまさしくソレじゃん」

トリス 「ああー、確かに。いつつも考え事してる割に何も言わねえしな」

キルシュ 「命令と暴言意外にまともに聞いた覚えがねえ」

ユアン 「喜怒哀楽を口にしないし表にも出さないな」

ベディ 「いや、怒は出してる」

ディナ 「ああ、十二分に出してるな、それだけ」

ペレアス 「しかも性格は凶悪ときた。凶悪故の楽は出してるけど」

トリス 「エルメス、そんな奴のどこがよかつたんだろ・・・」

リオ 「最大の謎だな」

ガルフ 「その謎は俺は解けたぞ。ユアン、カイのモテ講義覚えてるか？」

ユアン 「う？ うん。それが？」

ガルフ 「アイツ言つてただろ、特別扱いは誰でも喜ぶつて。アイツはエルメスの前でだけ、感情を表に出すんだろうよ。エルメスの前でだけメガネ外して、素顔を晒すんだろ」

パーシー 「ああーなるほど」

キルシュ 「元々お互い特別扱いしてたしなあ」

リオ 「つーか、それつてさあ、自然に？ それともわざと？」

ベディ 「さあ・・・わからん」

ディナ 「本当カイに限つてはわかんねーな」

ペレアス 「カイも何考えてつかわかんねえからなあ」

クライド 「わざとだったら、アイツ本当スゲエな」

ユアン 「むしろ怖いですよ」

トリス 「確かに。まあ、あんだだけエルメスに振り回されてんだから、わざとじゃないとは思うけど」

ガルフ 「多分わざとじゃねーな。あんだだけ自己管理徹底してる奴を、エルメスは振り回して掻き回すんだ。そんな奴アイツにとつちや今までいなかっただろうからな。仮面被る余裕なかったはずだ」  
ペレアス 「それもそうだな。つーかガルフがすげーよ」

キルシュ 「確かに。なんで見透かしてんの」

ガルフ 「そりゃあなあ。だってアイツ、単純じゃねーか」  
パーシー 「どこが!？」

ガルフ 「全部。アイツのご機嫌取りなんざ楽勝だぞ。アイツはただのお山の大将だからな」

リオ 「ガルフが大人すぎる・・・」

ガルフ 「アイツは基本ハイハイいう事聞いて、時々反抗してりやいいんだよ。そしたら調子乗るから、こっちの掌で踊らしときゃいい。あと、余計な口を挟まないで黙るときゃ勝手に落ち着く」

トリス 「ガルフ、をとなッ!」

ユアン 「さすがに長年副官やってただけあるね」

ボニー 「てゆうーか、クリスのがよっぽど怖いんだけど」

クライド 「お前ちゃんと年齢通りに成長してんだな」

ガルフ 「俺にしてみれば成長しない方が不思議ですけど」

クライド 「ケンカ売ってんのか」

ガルフ 「ハッハッハ、まさか」

ボニー 「でもさ、話変わるけどさ、ぶっちゃけあたしちょっと楽しみなんだけど」

ペレアス 「なにがですか?」

ボニー 「アンジェロさあ、アルカードがないのを良い事に好き放題やってるわけじゃん。帰ってきたらどうすんだろうね」

ベディ 「あぁ・・・どうすんだろ。さすがにアーサー様相手に太刀打ち出来ねえよな」



リオ 「いや、わかんねえぞ。カイの事だから食って掛かりそうじゃね？」

ユアン 「あり得る・・・」

ガルフ 「むしろ確実。「エルメスは俺の女だ、奪えるもんなら奪ってみる。ケケケ」これに間違いない」

トリス 「その様子がリアルに想像できるな」

キルシュ 「つーか怖ええ！ 巻き込まれたら死ぬ！」

ペレアス 「二人の散らす火花で屋敷は炎上だな」

クライド 「で、多分ミナはそれを面倒くさがって読書でもしてんだろ」

ボニー 「ああ、ばい」

ダイナ 「いつも通り「勝手にやってろ」って感じか」

ガルフ 「だろうな。台風の目はいつだって穏やかなもんだ」

クライド 「お前ウマイ事言っな」

ボニー 「ああ、でも、ミナを取り合って性悪二人が大喧嘩とか、あたし超楽しみ！」

リオ 「全然楽しくないですよ」

ボニー 「なんで？ 絶対面白いよ。クリシュナとアルカードの喧嘩も超面白かったし、絶対楽しいよ。羅刹の家みたいで」

ユアン 「そのどこが楽しいんですか・・・」

クライド 「あーでもアイツら似た者同士だからなあ、大喧嘩必至だな」

キルシュ 「確かに。ああいうのを同族嫌悪って言うんでしょうね」

クライド 「間違いねーな。どっちも自己中なくせに、お互いの自己中嫌ってっから、手の施しようがねーよ」

ガルフ 「全くですね。あの二人の険悪さには、さすがのエルメスもハラハラしてましたからねえ」

ベディ 「つーかジュリオ様が一番ハラハラしてたと思う」

ボニー 「だろうね。育て方間違えたってきつと後悔してんじやない」

パーシー「でしょうね。つーか、ジュリオ様に育てられて、なんであんなったのか不思議だ」

ユアン「俺らはマトモなのになあ」

クライド「どこがだよ。殺人神父がよく言うぜ」

ガルフ「確かに。でも表面上はマトモですよ」

ペレアス「表面も内面も異常者なのはカイだけです」

デイナ「カイ、ジュリオ様に憧れてたよな？　なんであんなるんだ？」

トリス「・・・さあ？」

クライド「アイツある意味すげえよな。俺あそこまで自信満々に生きられねえよ」

キルシュ「その自信に特に根拠もなさそうだし」

ガルフ「残念ながら根拠はある。ガキの頃から兄貴分として俺ら纏めて、隊長やりながらジュリオ様の秘書やって、パパまでやって、頭も腕前も一流。しかもモテる」

ボニー「それだけ聞いたらすごい響きがいい奴だね」

ユアン「まあそんだけやってきたら自信満々にもなるか」

ガルフ「アイツの場合はそうじゃねーけどな」

クライド「どゆこと？」

ガルフ「自信満々にふるまって、自分奮い立たせてなきややってられなかったんですよ、アイツ」

ペレアス「意外に繊細だな」

ガルフ「そうだぞ。アイツ多分俺らの中で一番繊細だぞ。ガラードよりも」

ボニー「ええ？　うそお」

ガルフ「そうですね。繊細なくせに頭かてーから、アイツは見た目以上に色んなモン抱え込んで、人知れずうつ病になるタイプですよ。やると決めたらやらなきや気が済まないし、お節介な分面倒見もいいから他人の事でも四苦八苦するし、完璧主義だし、思い込みも激しい上に極端に考えすぎ。アイツはそれを隠すのが人より上手

いだけ。繊細だけど意志が強すぎる分、自分を追い込みやすい。だから魂売り渡したりなんかするんですよ」

クライド「そう言われてみると、確かにな」

ボニー「ていうかクリスが本当怖い。アンタエスパー？」

ガルフ「ハツハツハ、カイに関してはね。なんだかんだ言つて、俺アイツ好きですから」

キルシュ「ま、確かに嫌いじゃねーな」

ベディ「そこも俺不思議の一つなんだけど。いつそ納得いかないリオ「確かに。でもよお、カイがほんつとーにごく稀に見せる笑顔にスゲエ癒される時つてない？」

パーシー「ああ、なんかわかる。カイ普段笑わねーから、余計に」

クライド「ジャイアン現象か」

デイナ「なんですか、それ」

ボニー「普段悪い奴がたまにいいことすると、すごくいい奴に見えるつていうのを、日本じゃジャイアン現象つて言うんだよ」

トリス「なんかズルくね？」

キルシュ「ずりーよなあ。俺いつもニコニコしてんのに」

ベディ「お前のはヘラヘラつて言うんだよ」

ユアン「カイはニヤニヤはするけど、ニコニコはしないな」

ペレアス「つーかニコニコしてたら似合わな過ぎて、いつそ怖ええ」

リオ「確かに。カイに微笑まれたら殺される位の懸念はあつていいと思う」

クライド「どんだけだよ」

ガルフ「でもエルメスにはニコニコしてんだぜ。見たかよ、あの写真」

パーシー「思わず鳥肌が立った」

ボニー「でも、ちよつとミナの気持ちもわかるかなあなんて」

クライド「え、ちよ、ボニー？」

トリス「クライドさん、気を付けた方がいいですよ」

キルシュ「そうですよ、カイは基本美人なら誰でもいいんですから」

クライド「そうだな、ボニーはメチャクチャ可愛いからな」

ボニー「やだもう、クライドつたらあ」

ダイナ「・・・心配なさそうだな」

ガルフ「ハッハッハ、心配しなくても、アイツはエルメスにメロメロですよ。多分今は目の前にハリウッド女優が現れても、見向きもしない」

ベディ「そーみたいだな。この前のアレみるまではにわかに信じがたかったけど」

リオ「アレ？」

ユアン「廊下で錯乱してたアレ」

パーシー「ああー、そんな俺見てねえ！ 超見たかった」

キルシュ「俺も！」

ガルフ「スゲエ面白かったぞ。危うく笑うところだった」

ダイナ「笑ってたじゃん」

ガルフ「あ、マジで？ 自覚してなかった。でもマジ面白かった」

ベディ「確かに。ほっときゃカイ泣くんじゃねーのって思った」

リオ「マジ！？」

ユアン「マジ。本当エルメス好きなんだなあ。エルメスに嫌われたら生きていけないとか言っつて、ランスに銃持ってきて俺を殺せとか言っつて」

ペレアス「情けねえー」

ダイナ「ランスの面倒くさそうな顔がまたウケた」

ベディ「マジウケるよな。ガイドがさ、ランスに抱き着いてメソメソ言ってるカイ見てさあ「また自分のしたこと棚に上げて泣くんじゃないの」とか言っつて溜息吐いてた」

パーシー「どっちが親だよ」

クライド「っーかアイツ泣くの？」

ガルフ「泣きませんよ。一回も見たことない」

クライド「一回も？」

ペレアス「そういえば、ねえな。ガキの頃ですら見たことない」

ユアン 「ジユリオ様殺した時ですら、泣かなかったよなあ」

トリス 「カイが一番辛かっただろうになあ。カイの我慢強さは異常だ」

ガルフ 「だからこそアイツは死に急ぎ野郎なんだよ」

ボニー 「アーハン、なるほどね。でもさあ、ミナは勿論嫌だろうけど、みんなはそれは嫌じゃないの？」

ベディ 「そりゃイヤですよ。でも、どうしようもないじゃないですか」

ダイナ 「相談とかなんもないしな。一緒に延命措置考える事すらできねえし」

リオ 「そーだよな。俺ら巻き込んでマジ自己中」

ガルフ 「自分で決めた事なんだから迷うなとは言ったけど、相談すんなつた覚えはないんだけどねえ」

クライド 「マジ極端だな」

ペレアス 「でもカイは昔からそうでしたよ。人の手助けする癖に、人から助けられるのを極端に嫌ってた」

ユアン 「なんでも自分一人でやんなきゃ気が済まないタイプ」

トリス 「まあ大概の事はカイ一人でも人より上手くやるけどさあキルシュ、アレか、器用貧乏」

パーシー 「だな。人には頼れって言うくせに絶対自分は頼らねえし。マジプライド高けえ」

ガルフ 「相談どころか愚痴こぼすのですら、アイツの中では禁忌みてえだし、ジユノ様も言ってたけど、本当難儀な奴だよ」

クライド 「単純じゃなかったのかよ」

ガルフ 「単純ですよ。でも難儀な奴」

ボニー 「意味わかんない」

ガルフ 「アイツは基本単純だけど、全部自分の中で処理したがる。それが重要であればあるほど、他人の力を借りようとはしない。でもやっぱり我慢の限界みたいなのはあって、その限界がわからない。

限界突破すると、荒れ狂って手が付けられなくなるか、思い詰めて

とんでもねえ行動に出たりするから、難儀なんですよ」

クライド「面倒くさっ」

ガルフ「面倒くさいですよ」

ボニー「でもアンタ、アンジェロ好きなんだ」

ガルフ「大好きですねえ」

クライド「なんで？」

ガルフ「表面上は全然違うけど、内面がジュリオ様に似てるからじゃないですか」

ペレアス「似てるかあ？」

ガルフ「ソツクリ。一途なところも、企み好きなのところも、面倒見が良い所も、嘘つきなところも、優しいところもな」

ダイナ「優しいか!？」

ガルフ「優しいだろ、アイツ。加えて言うと可愛いじゃねーか」

リオ「どこが!？ 恋は盲目!？」

ガルフ「恋してねーよ。気持ちワリー事言っな」

パーシー「いや、お前が気持ちワリーよ」

ガルフ「そうかあ？ 可愛いじゃねーか。何にでも一生懸命でさあ」

トリス「ガルフの立ち位置がよくわかんねーよ」

ユアン「親戚のおっさんみたいだな」

ベディ「一番謎なのはガルフだな」

ガルフ「ハッハッハ、そうかあ？」

クライド「うーんいや、そう考えると、確かに似てるかもな」

ボニー「アンジェロとジュリオ？」

クライド「いや、アンジェロとクリシュナ」

ボニー「ハア!？ どこが!？」

ペレアス「いや、似てないでしょ」

ダイナ「似ても似つきませんよ」

クライド「いや、似てる。クリシュナ、アイツ一時期だけど国王やっってたんだよ。そもそも長男で、次期国王つてのはガキの頃から決

定してた。たまたまアイツが早世したから、アルカードが国王になっただけで、本当はアイツが国王になるはずだった」

キルシュ「ああ、そう言われてみると、そうですね。でも、それでなんで似てるんですか」

クライド「アイツはガキの頃から国王になるための教育をされて、人の上に立つ責任を背負ってきた。どう振舞えば国王らしいか、どう振舞えば人心を掌握できるか、どうしたら国を運営していけるのか。でも、アイツは王太子だった頃に將軍として駆り出された戦争で、同盟国の元帥から反感を買って暗殺された」

ユアン「あのクリシュナさんが他人から反感を買うなんてことあるんですか」

クライド「その戦争な、負けたんだよ。その元帥の失策で。それをクリシュナと親父が先陣を切って糾弾した。その元帥は強豪国の王に続く実力者で、その事が余程気に食わなかったんだろうなあ。王族とはいえ弱小国の奴が刃向ってきたことが。だから王と王太子もろとも暗殺された」

リオ「クリシュナさんも色々あったんですね。だからあんな優しい人になったのか」

クライド「かもしれない。アイツは優しいし思いやりもあるし頭もいいし、まぎれもなく紳士だ。でも、本来は責任感が強くて内面には強い奴に刃向っていくような激しいところもある。けど、次期国王としての責任で苦悩してたんだろ。アイツ、いくつくらいに見えた？」

ガルフ「25、6くらいですかね。そのくらいの歳に死んだって事ですよ」

クライド「アイツが死んだのは、17の時だ」

パーシー「17!? とてもそんな風には」

クライド「見えねえだろ。そんだけガキの頃から悩み多き少年だったって事だ。責任感が強くてまじめで、かえってその責任に押し潰されそうになってたんだろ。アイツ言ってたからな、自分は国王に

向いてないと思つてたつて。能力や精神はあつても、性格が国王に向いてねえつてな。確かに、そんな繊細な奴が国王に向いてるとは思えねえ。どの道悩みすぎて、病氣になつて死ぬのがオチだ」

ガルフ 「そうか、確かにカイと似てるかもしれませぬ」

クライド「クリシュナもアンジェロも、アイツらは二人とも哲学者なんだよ。自分の限界を無視して、自分の生き方とかが在り方を追いかける求道者。自分はこうあるべきだ、こうでなければいけないつて自身を強迫して、自分を追い込むタイプ。どっちもガキの頃から人の上に立つ責任を負つてきて、弱いところを見せることも、人に頼ることも許されないと思つてきたんだろ」

ダイナ 「そう言われてみれば、そうかもしれないませぬ」

ユアン 「世の哲学者はみんな鬱病だつて言うしなあ」

ボニー 「でもやっぱ似てないよー」

クライド「ボニー・・・今の話を一言でなかったことにしないでくんない」

ペレアス「はは、台無しじゃないですか」

リオ 「ボニーさんが一番自由人だな」

ボニー 「そりゃ生まれも育ちも自由の国アメリカだからねー」

パーシー「そついや、ボニーさんとクライドさんつてどういふ出会いですか？」

ボニー 「あたしのダンナの紹介で、あたしが一目惚れした」

キルシュ「んん!？」

ユアン 「なんか初っ端からツッコミ所満載なんですけど」

クライド「出会つた時ボニーは既婚者だつたもんなあ」

ボニー 「そーだね。幼な妻」

ガルフ 「何歳だつたんですか？」

ボニー 「クライドと出会つたのは17だよ。結婚は16ん時にした」

ダイナ 「早っ!」

クライド「俺とコイツのダンナが友達の友達みたいなんで紹介され



ただんだけど。まあボニーはすさまじかった」

ベディ 「何がですか？」

クライド 「ボニーアタック。積極的ってレベルじゃなかった」

ボニー 「夜這いしちゃった」

ガルフ 「ブフツ、マジっすか」

クライド 「マジ。超ビビった」

ユアン 「でしょうね・・・」

クライド 「それでウツカリ既成事実作っちゃってさあ」

リオ 「結局手エ出してんじゃないですか」

クライド 「いや一応ね、俺もね、ボニーは人妻だしとかいろいろ考えたんだぞ。で、考えた結果、まあいいか、と」

ペレアス 「よくねえー！ クライドさんも自由だな！」

ボニー 「あたしはよかったよ」

トリス 「そ・・・うですか」

ボニー 「で、しばらく不倫して、ダンナが銀行強盗で捕まってる隙に二人で逃げちゃった」

パシー 「ダンナも強盗犯かよ！」

ボニー 「でもクライドのほうがカッコいいよ。強盗のスタイルとか、ねえ？」

クライド 「まーな。俺人気者だったしな」

トリス 「そうみたいですな。二人の話映画化してますもんね」

クライド 「おうよ、俺ら銀幕スター」

ガルフ 「二人が出演したわけじゃないでしょ」

ベディ 「フーか、何？ 吸血鬼の女って積極的なのか？」

ユアン 「エルメスも自分から告白したもんなあ」

ボニー 「ていうか、ぶっちゃけソレはビックリした」

クライド 「あのミナがなあ」

ボニー 「あ、でも、クリシュナの時も超浮かれて大学押しかけてっただっけ」

リオ 「なんだ、意外と秘められた積極性があったんですね」

ガルフ 「まあ、カイが拒否するのは予想済みだったから、それこそ色仕掛けさせようとは思ってたけどな」

ディナ 「させようとしても、するかなあ」

ガルフ 「ボニーさんほど積極的にしなくても、アイツどうせそっち方面は忍耐強くねえからな。コロッといくだろ」

キルシュ 「ああ、エロメガネだもんな」

ユアン 「前科者だしな」

クライド 「は？ そーなのか!？」

ガルフ 「そうですね。付き合う前に、既にアイツエルメスに手エだしてますから」

ボニー 「そうなの!？」

ベディ 「アレ、知らなかったんですか。カイは前科2犯ですよ」

クライド 「2犯!？」

パーシー 「え!？ 1犯だろ!？ エルメスと出会った時の」

ガルフ 「いや、その後がある。インド来てから」

リオ 「マジ!？ いつの間に」

キルシュ 「やっぱカイすげえ」

ディナ 「どうも2度目は不本意だったっぽいけどね」

ペレアス 「どゆこと?」

ガルフ 「まあ、ちゃんとアイツに聞いたわけじゃないけど、アイツの今までの話を総合すると、ジユノ様に嵌められたっぽいな」

クライド 「なんかそれはそれで気の毒な話だな」

ボニー 「てゆうかミナが一番可哀想じゃない? ダシにされたって事じゃん」

ガルフ 「けど、今こーなってんだから、ジユノ様の言った通り結果オーライですよ」

クライド 「いいのが、それ」

ガルフ 「いいんじゃないですか。当てもエルメスは許したらいいし」

ボニー 「ミナ、どんだけ」

ガルフ 「エルメスにしたら、許さなきゃ嫌われるとでも思ったんでしょ。嫌われる位なら許して、カイを手元に置いておきたいって考えたと思いますよ」

トリス 「ああ、だろうなあ。エルメス、カイにベツタリだったしなあ」

ベディ 「カイが傍についてなきゃ、エルメスは立ち直れなかったかもしれないもんな」

ボニー 「そうなんだ」

ガルフ 「そうですね。エルメスに怖い思いをさせないように、淋しい思いをさせないように、カイが24時間体制でずっとエルメスの傍にいて、エルメスもそれに安心しきってましたからね。カイの前では素直に泣けたみたいだし」

クライド 「ふーん、そっか。アイツ優しいところあるんだな」

ガルフ 「そうそう。アイツああ見えて優しいんですよ。あの戦争の直後から、アイツは本当にエルメスを大事にしましたからね。

どんな雨にも風にも当てないように、エルメスを包み込むみたいに」

ボニー 「ふーん、だからミナはアンジェロ好きになったのかもね」

ガルフ 「でしょうね」

クライド 「意外と紳士じゃん」

ボニー 「そうは見えないけどね」

ガルフ 「確かに」

クライド 「でも、そう言ういきさつがあつて、二人がどんな思いで生きてきたかつてのをアルカードがちゃんと理解すれば、案外許すかもなあ」

ボニー 「そうだといいいねえ」

ガルフ 「そう上手くいくといいんですけどね」

ボニー 「それこそアルカードとジュノ様くつつけちゃえば」

ペレアス 「あの人女の格好してるだけで、女じゃないですよ」

クライド 「マジか」

ユアン 「悪魔には性別はないって言うてました」

ボニー 「マジか」

パーシー 「ああ、じゃあさ、ジユノ様に頼んで、エルメスの分身作  
つてもらえば？」

ディナ 「それだと、どっちがどっちかわかんなくなって、結局大  
喧嘩なるって」

ベデイ 「つーか仮に分身が出来ても、カイはその分身だって譲ら  
ねえだろ」

トリス 「だろうな・・・」

リオ 「アーサー様対策は、解決策なしか」

キルシュ 「天に命運を託すしかねえな」

ユアン 「案外エルメスがなんとかするかもよ」

ペレアス 「それを祈るしかねえなあ。じゃなきゃ大戦争勃発だ」

ガルフ 「はあ、相変わらず俺らは、平和な日常からは程遠いな・

」

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

「じゃあ、次はリストのー・・・」

「またリストかよ！」

「だってカイは吸血鬼界のリストだよ」

「なんだそれ・・・」

今日も今日とてピアノレッスン。じゃねーな、一人演奏会。「私にも教えて」って言うときながら、エルメスは完璧聞き専だ。

エルメスのリクエストに応じて難しい曲を弾きまくっていたせいか、楽譜や鍵盤を見なくても弾けるほどに、短期間でメキメキ上達していった。かといって「6本指のピアノリスト」と揶揄されたほどの超絶技巧ピアノリスト、リストは言いすぎだ。

「だってねえ、この前調べたら、リストはピアノの魔術師って呼ばれる位、凄い技術持ってたんだって」

「ああ、らしいな。大概の楽譜は初見で完璧に弾きこなしたとかないとか。俺にはまだそこまでは無理だぞ」

「それと、リストは当時はアイドル的存在で、コンサートには女性ファンが殺到して、リストの行く道は大渋滞。ホテルや劇場周辺は

出待ちでいっぱい。音楽界では超有名な遊び人で、恋人がいても女性関係の派手さが収まることはなかったんだってー」

「……俺は今大人しいぞ」

「どーだろうねえ。浮気癖って抜けないらしいよ」

「いや抜けたって。マジで」

「ふうーん？」

吸血鬼界のリストってそう言う意味で言ってるのか。リストのせいで疑惑の眼差しを向けられる俺。

リストが女性関係派手なのは有名な話だ。貴族の女と付き合っておきながら、「リストマニア」と呼ばれる女たちがリストを取り囲んでたと言う話だ。女性客が感激のあまり、失神者続出コンサートってのも有名な話。

「リストだって最後には結婚を望むほどの女に出会ってたぞ。結局身分違いなせいで結ばれなかったらしいけど」

「リストはね」

「……もー！　なんだよお前！　俺はジュノ様に誓って何もしませんけどー！」

「ウソばかり。じゃあこの前のアレ、何よ」

「……アレはだなあ……」

話は遡ること3日前。その時もエルメスに頼まれてピアノを弾いていた。

~~~~~ バツン！

「あれ？」

「あ、弦切れたな」

エルメスのスパルタリクエストに根を上げたのはピアノだった。どうやら弦が切れてしまったようだ。そう言えば最近音が若干鈍くなったと思ってたけども、ハンマーも具合が悪いかもしれない。修理の為に、シャンティに電話して提携会社の調律師を呼んでもらった。

「こんにちはー。お、すごい、楽器がいつぱい」

「どーも。夕方にすいませんね」

「いえいえ、おたくの社長の直参でしたから。いつもお世話になってます」

「こちらこそ。時間外手当10倍つけろって社長に言っときますよ」

「あはは、ありがとうございます。このピアノですか？」

「ええ、弦切れたんですよ。ついでにハンマーとかペダルの調整もお願いします」

「わかりました」

調律師としてやってきたのは見たところ20代後半の男二人と10代後半くらいの女一人。3人は珍しそうに音楽室を眺めていたが、すぐに作業を始めた。

道具と材料があつて簡単な作業なら覚えて自分でやろうと思つて、俺はその様子をガン見。エルメスは何故か一生懸命フルートの練習

中だ。スゲエ下手。

「お前ソレ、ディナのだぞ」

「か、間接キス！」

「ガキか」

なぜか赤くなつてフルートをしまいなおすエルメス。そんなの気にするのはお前だけだ。今度はヴィオラを取り出して弾きはじめるエルメス。窓の外で、ハクモクレンにとまっていた雀が落下していった。

「おい、調律師の人たちが作業に集中できねーからやめろ」

「むーずーかーしい！」

「バイオリンとかならランスとガライドに師事しろ」

「じゃあ呼んでくる！」

「今はやめろつて・・・オイ！」

人の話を聞かない子猫ちゃんは速攻音楽室を飛び出して行ってしまった。仕方なしに溜息吐いて、再び作業を鑑賞しようと椅子に腰かけると、調律師たちがクスクス笑う。

「お嬢様は面白い人ですね」

「ええ、とんだじゃじゃ馬ですよ。世話するこっちは大変だ」

「あなたはあのお嬢様の付き人ですか？」

「そんなもんです」



「イケメンでピアニストで付き人なんて、乙女系小説みたい。お嬢様羨ましいなあ」

「お、リュイ、惚れたか」

「違いますよ！ 違いますからね！ すいません！ もう、先輩！ やめてくださいよ！」

「あっはっは、すいませんね」

「あー、別にいいですけど」

どうでもいいが、乙女系小説ってなんだよ。ああ、でもそうか。顔よし・頭よし・腕よし・男も惚れそうなワイルドビューティ。執事で加えてピアニスト。トキメキ要素の集合体か、俺は。まあ俺に惚れても無理はねえ。いつそ惚れない女がどうかしてるぜ。

と、思ってたなら、なんか悪い虫が騒いだ。

「お姉さん、リュイって名前？」

「あ、はい。そうです」

「ふーん、可愛いですね」

「えっ、あっ、そ、そんなことないです！」

「可愛いですよ、リュイ」

「ア、アリガトゴザイマス・・・」

赤くなるリュイ。この手の女をからかって遊ぶのは面白れえ。赤くなりながらそれを隠すように必死に作業するリュイを、他の調律師と共にニヤニヤしながら見ていたら、手元が狂ったのか、張っていた弦が急に跳ねた。

「痛っ！」

跳ねた弦が指に当たったのか、リュイの抑える指からポタリと血がこぼれ出た。吸血鬼の習性とは恐ろしい。鮮血に引き寄せられるようにリュイの手を掴んで、指を舐めた。

「……っ!」

「ああ、すみません。痛みますか?」

「いつ、いえ!」

顔を真っ赤にして指を抑えるリュイに、あ、やべ、やっちゃまった、と即後悔。リュイの心臓の音がこっちまで聞こえてくるほどだ。

俺ってばエルメスが居ながらついウツカリ。アレはまあしょうがない。そういうアレじゃなくて、血の引力に負けたって言うか。

自分に言い訳しながら椅子に座り直したら、エルメスがランスとガラードを連れて戻ってきた。

「あれ? エルメス様、ピアノ壊れたんですか?」

「うん、今調律してもらってるの。だから二人を連れて来たの!」

「だからってというのがよくわかんないけど」

「だってカイからピアノとったら、鬼畜しかないじゃない」

「ああ、そうですね」

「オイ、何納得してんだ。作業の邪魔になんねーようにしろよ」

「ハイハイ、口うるせーこって」

「口答えしてんじゃねーよ、クソガキ」

「いつまでもガキ呼ばわりするな、クソヤロー」

「んだと、コラ」

「あ? なんだよ」

「やんのか、コラ」

「あ? 上等だよ」

「ちよ、二人ともなにケンカしてんの・・・エルメス勝手に始めちゃってるけど」

溜息を吐くガラードの横では、既にエルメスが楽譜を広げて弦に弓を乗せている。マイペース、実にマイペース。ケンカしてんのがアホみてーじゃねーか。

そんなエルメスにランスと二人溜息を吐いて、目が合っただけで同時に舌打ち。ランスはエルメスの方に行って、俺がピアノに視線を戻すと調律師たちはまたクスクス笑っていた。

「このお屋敷には何人ぐらいいらっしゃるんです？」

「あのお嬢ちゃんの友人が2人、社長の家族が4人、お嬢ちゃんの付き人が12人」

「12人もいるんですか!？」

「そうですね。そんなくらい手間がかかるんで」

「ちよつとカイ！ ウソ言わないでよ！ 私手がかからないよ！」

「いや、クリシユナより手がかかる」

「もー！ 私をなんだと思ってるのよ！」

「バカだと思ってる」

「むきー！ ムカつく！」

「エルメス様、落ち着いて！」

なぜか暴れはじめるエルメス。バイオリンと弓をブンブン振り回して、ランスとガラードがそれを避けながらなんとか宥めようとしている。あ、ガラード避けそこなった。

「ああ！ 弓が折れた！」  
「エルメスが振り回すから・・・」  
「もお！ ガラード！」  
「え！？ 俺のせいなの！？」  
「ガラードが避けないからじゃん！」  
「マジ・・・ハア・・・ごめんね」  
「全くもう！」

何故謝るんだガラード。お前は何も悪くないだろ。本当エルメスの我儘はたまんねーな。

俺は何も見てない、とピアノに視線を戻して溜息を吐くと、さすがの調律師たちも引いていた。一人が声を潜めて話しかけてくる。

「あのお兄さん、大丈夫なんですか？」  
「ああ、問題ありません。いつものことなんで」  
「そうですか・・・お疲れ様です」  
「ホントお疲れ様ですよ」

溜息を吐きながら再びエルメスに視線を戻すと、さすがに切り替えの早いエルメス。既に弓を交換して、二人にバイオリンを習い始めている。

楽譜を見ながら弓を弾くエルメスにランスがダメだし。エルメスの後ろから抱き着く様に弓を持つ手を取って、一緒に動かし始める。

「エルメス様、ここの流れはこう弾いた方がいいですよ」  
「あ、本当だ」

そのやり取りにイラつとした俺。ランスの奴、ここぞとばかりにエルメスの手握りやがって。アレ絶対わざとだよな。

イライラして睨みつけていると、まずガロードが俺の視線に気づいてアワアワしだす。続いてそれに気づいたランスは俺と目が合った瞬間、ニヤリと笑った。それで更にカッチーンきて、思わず立ち上がった。

「オイコラ、クソガキ。てめえ何してんだ」

「何って？ バイオリンの練習だけど？」

「エルメスに気安く触ってんじゃねーよ」

「何言ってるの。こうしなきゃ教えられないじゃん。ねえ？ エルメス様？」

「ねえ？ そんな怒るような事？」

「つーかお前もお前だ。自覚持てよ」

「なんの？」

「なんの！？ 決まってるだろ！ 俺の女だつて自覚だよ！」

「してるよー」

「してねーよ！ なんでお前はそう、防御力村人なんだよ！ ランスはわざとやってんだよ！」

「そんなわけないじゃない。カイってば考えすぎ」

「黙れバカ！ もうバイオリンはやめだ！ お前から出ていけ！」

「ハア！？ マジ自己中！ この色ボケピアノリスト！」

「うるせえ！ このムツツリバイオリニスト！」

「誰がムツツリだ！ このエロメガネ！」

「てめーだよ！ このエロガキ！」

「ガキ呼ばわりするなって言ってるだろ！ このエロオヤジ！」

「ちよつと二人とも、ケンカは・・・」

「ガロードは黙ってる！」

「ハア・・・、全くしょうがないな。エルメス

さん、は

いつ」

「お願い、二人ともやめて？」（エフェクト使用）

「「チツ！」」

ガラードに引き立てられたエルメスが、ガラードの合図で両手を組んで涙目で静止。それに思わず引き下がった俺とランス。再びエルメスの隣にドカッと腰を下ろしたランスに溜息を吐いていると、調律師たちはヒソヒソと話している。

「なんだかんだでお嬢様、ウマイ事纏めてるんですね」

「そうだな。まさにツルの一声だ」

「付き人の兄さん達、みんなあんな狂犬なのか？」

「でも茶髪の人はマトモですよ」

「あの金髪と黒髪だけじゃないか」

「だとしてもそれが側近だろ？ あれは実の所大変なのはお嬢様の方だぞ」

「リュイ、お前羨ましがってたろ」

「・・・現実つて甘くないんですね」

「そうだぞ、少女マンガに出てくるような奴なんて実際いないぞ」

「うん、勉強になりました。理想は二次元に追及することにします」

「そーしろ。理想と現実ギャップがあつて然りだぞ」

おい、聞こえてる。聞こえてるぞ。俺ら吸血鬼だから、人間ごときのヒソヒソ話丸聞こえなんだけど。

エルメスとガラードは呆れたように俺とランスを見てる。つかそもそも悪いのは俺じゃないんだけど、と思つてたら。

「でもよ、リュイあの黒髪の兄さんに引っかけりそうだったろ」

「なっ！ 違います！」

「お前ありやダメだぞ。気を付けるよ」

「何がですか？」

「だってお前、あの兄さんとお嬢様、話から察するに恋人同士だぞ」

「恋人がいながらお前に可愛いつつたり、ああいうことできる奴に口クな奴はいねえぞ」

「ありや相つ当の遊び人だぞ。ああいう男はな、女とみれば誰にでも手を出すんだぞ。また一つ勉強になったな」

「・・・そうですね」

「良かったなお前、引っかからなくて。泣くのはお前だからな」

「・・・そうですね」

だから聞こえてるって！ ヤバイヤバイ、エルメスにも絶対聞こえてる。恐ろしくてエルメスの方を向けない。

いや、別に俺は浮気心とかそう言うのは全くなくてですね、なんていうかこう、魔が差したと言うか。

あの指舐めたのに関しては、アレはもう吸血鬼の習性だからついウツカリやっちゃったってだけで、本当マジで全然そんなつもりはなくてですね。

頭の中で糾弾された時に必死に言い訳を考えていると、エルメスの隣に座ったはずのランスは再び立ち上がって、調律師たちの所へと歩いて行った。

「その話、くわしく」

「え、いや、何も」

「聞こえてましたから。“ああいうこと”ってなんですか。あのエロメガネは今度は何をしてくしたんです？」

「今度はつて、やっぱり」

「あの男は女性はみんな肉便器だと豪語するような男ですからね。遊び人なんてレベルじゃありませんよ。性犯罪者です」

「うわぁ・・・」

「そんなこと言った事ねえし犯罪者でもねえよ！」

「皆さん、あの男のいう事を信じてはいけませんよ。あの男は稀代の大ウソつきなんです。呼吸するようにウソを吐くんです」

「リュイ、お前本当気を付けるよ」

「は、はい」

「さぁ、先ほどの話を詳しく」

「実はですね・・・」

稀代の大ウソつきはお前だろ！ 信じらんねえこのクソガキ！

どんだけ俺が嫌いなんだ！

頭を抱えて悶絶した後ハツとして、調律師たちの口を塞がなければと思いつたが、時すでに遅し。

例の流血セクハラの話聞いたランスは、それはもうわざとらしく頭を抱えてみせる。

「ああ、なんてことでしょう。リュイさん、お気の毒に。騙されてはいけませんよ。あの男は誰にでもそう言う事をするんです」

「は、はい。気を付けます」

「ああ、お可哀想なエルメス様。惚れた弱みに付け込まれ、文句を言う事も許されず、今日もまた袖を濡らすでしょう。あんな男に引っかけってしまったばかりに好き放題に蹂躪された拳句、きつと



最後はボロボロになってしまつのかと思うと、僕はもう耐えられ  
ません・・・」

「そんな、ヒドイ・・・お嬢様が可哀想です！」

「そうですね。それでもエルメス様はあの男を心から愛してら  
し、健気に尽くすのです。僕はそんなエルメス様を見ているのが辛  
くて・・・」

「待て待て！ お前、さっきから勝手に勝手なこと言つてんだ！」

マジでランスにはビックリだ。ビックリしすぎて思わず聞き入る  
ほどだ。よくそんなネタ思いつきやがる。どこの世界の昼ドラだよ。  
アイツまだエルメスを諦めてなかつたのか。俺のスクヤンダル  
俺失脚 ランスの天下、を指指してんのか。腹黒にも程がある。な  
んて恐ろしいガキだ。

しかし恐ろしいのは、間違いなく今の会話が聞こえていたである  
うエルメスだ。昼ドラの下りは恐らくスルーしてくれるとは思  
うが、その前がスルーしてもらえるか疑問だ。

さっき考えた言い訳を脳内で反芻しながらゆっくり振り向くと、  
ガライドとエルメスの俺に向ける視線が、まるで荷電粒子砲だ。そ  
の視線に圧倒されながらも、何とか口を開いてみる。

「あの、エルメス、あのな？ ちょっと理由があつてな？ 聞いて  
くれる？」

「ウソつきの話に聞く価値があるならね」

「や、ウソじゃない！ ウソじゃない！ 俺本当浮気心とかさう言  
うの一切ないから！」

「どうだろうね。なんたって“神速の遊び人”だもんね」

「なんで知つてんの！？ いや、それは昔の話だし！ 今はお前」

筋だつて！」

「胡散臭ッ。じゃあなんで彼女に可愛いとか言ってるの？」

「それは、アレだよ。なんかこう、魔が差したって言うか、ちょっと試ってみただけって言うか。別に意味はねーよ」

「意味なくそう言う事言えるんだ。そんな事言つて、彼女にも失礼でしょ。全く・・・」

溜息を吐いたエルメスは立ち上がり、俺の横を抜けて調律師たちの方へ近づく。リュイの前まで来ると、ペコリと頭を下げて、それにリュイは慌てふためいた。

「お、お嬢様、何を・・・」

「リュイさん、ゴメンね。カイのせいで嫌な気分になせちゃって」

「そ、そんな！ お嬢様が謝ることじゃ！」

「そうですね、エルメス様。カイに謝罪させてください」

「いいの。悪いのは私だから。私の愛が足りてないのがいけないんだよ」

「そんな、お嬢様は何も悪くないですよ」

エルメス、エルメス？ 何を言い出す気だこのお嬢様。エルメスの醸し出す雰囲気、猛烈に危機を覚える俺。

「うっん、あるじとしての監督不行き届きもあるよ。これからリュイさん達には、うちに調律や楽器の修理に来てもらう機会が増えるだろうから、二度とこんなことがない様にちゃんと試しておくから、カイの事許して貰えないかな？」

「お嬢様・・・お嬢様がそう仰るのなら」

「ありがとう。でも、一つだけお願いがあるの」

「お願い？」

「あのね、カイのこと好きにならないで。私ね、本当にカイの事愛してるの。カイがどんな人でも、何をしても私はカイを嫌いにならないの。せつかくリュイさんと知己になれたのに、カイはリュイさんを気に入ったみたいだし、リュイさんがカイを好きになったら、私はどうしたらいいか・・・」

そう言っただけで何故か悲しげに顔を伏せるエルメス。そんなエルメスにリュイは同情するような表情を向けて、エルメスの手を取って強く言った。

「ご心配なく！ 全つ然無いです！ 私は、お嬢様の味方です！」

「リュイさん、ありがとう。この屋敷には他にイイ男なんていっぱいいるから、何もあんな人じゃなくても大丈夫だよ」

「そうですね！ でも私は二次元の男で十分です！ 体温のある男なんていません！」

何故か俺が敵になり、エルメスに二次元ヲタクの友達ができた。

手を取り合っただけでキャツキャツ言う女二人に俺は呆然だ。

自己紹介とメールアドレスの交換をした後、エルメスはバイオリンや楽譜を片づけ始めた。

「お嬢様、なんてできた人なんだ」

「お嬢様優しいなあ」

「素敵！ やっぱりお嬢様はこうでなきゃ！」

「あんな可憐なお嬢様に、あの男かよ」

「世の中には怖い奴がいるもんだ」

「大丈夫ですよ先輩！ これからは私がお嬢様の味方になります！」

エルメスの株は急上昇だ。それと反比例して俺の株は急降下だ。片づけを済ませたエルメスは、調律師達にっこりほほ笑む。

「皆さん、じゃあピアノお願いしますね。私、カイの弾くピアノが大好きだから、早く聞きたいんです」

「お任せください！」

「ありがとうございます。じゃあランス、ガラード行こっか」

「はい！」

二人を引き連れて音楽室から出る瞬間、エルメスは少しだけ俺の方に向けて、口の端だけでニヤリと笑い、音楽室から退室した。

残されたのは調律師3人と俺だけ。スゲエ気まずい空気。かといって今すぐここを出て行ってもなんかちょっと。でも今すぐ出て行きたい。雰囲気針のむしろだ。

チクショー、やられた！ エルメスの奴ワザとだな！ 昼ドラの下りもスルーせず、バツチリ利用しやがった。

この場で怒鳴りつけて糾弾するよりも、可哀想なお嬢様を演じた方が得策だと考えての事に違いない。珍しく頭使いやがって！

イライラしながらどういいう行動をとるのが正解なのか考えあぐねていると、調律師の一人が話しかけてきた。

「兄さん、お嬢様を大事にしてやってくださいよ？ お嬢様いい人じゃないですか。本当に兄さんの事好きみたいです」

「い、いやいや、俺本当に大事にしていますから！ 俺言つときますけど、生涯で惚れたのアイツだけなんですって！」

「生涯つて大袈裟な。僕らと同世代位でしょ」

「俺こう見えてそんな若くもないんで！ 結構オッサンですけど！」

「オッサンなのにフラフラしてるんですか？ 落ち着いた方がいいですよ？」

「落ち着いてますよ！ 大人しさで言ったらナマコより大人しいですよ！」

「ウソくさっ。オッサンが若い子誑かして・・・世も末ですね」

「でもお、ダークなおじさんと可憐な少女の恋愛なんて、フランス映画みたい。素敵！」

「可憐な少女！？ いや、確かにアイツも相当若く見えるけど・・・いや、そうじゃなくて。俺本当にアイツ一筋なんですって！ 浮気とかマジあり得ない！」

「じゃあさっきのリユイのはなんです？ 昔は遊び人だって自分で言っただじゃないですか。浮気癖は抜けませんからね」

「本当に稀代のオウソつきですね・・・」

「お嬢様が可哀想です！ お嬢様は心からあなたを愛してらっしゃるのに、ウソついて騙して、ヒドイです！」

「だから騙してねーしウソじゃねーって！ 俺真実しか言ってますんけど!？」

「・・・胡散くさー」「」

「あぁもう！ 胡散臭くていいからさっさと作業してください！」

「うわ、逃げた」

初対面の人間にここまで白い視線を浴びたのは人生初だ。さすが

にたまりかねて音楽室から逃走。

この日のエルメスは、みんなの前では普通にしていたけど、二人の時には俺が話しかけても完全シカト。涙で袖を濡らしたのは俺の方だ。

という事が3日前にあって、とうとう今になってエルメスに糾弾されているわけだ。

「はあ、まさかカイにそんなに早く浮気心が湧き上がってくるとは思ってなかったよ。ガツカリ」

「いや、違うって。マジでそう言うんじゃないんだって」

「じゃあなんでリュイさんにセクハラしてんのよ」

「いや、アレはだな、リュイが怪我して血が出て、その血がなんかスゲー美味そうで、つい引き寄せられたというか。ホラ、吸血鬼じゃん。鮮血なんて滅多に飲めねえし、つい」

「ハア？ バカじゃないの」

「ごめんなさい」

「じゃあ可愛いって言ったのは、なんで？」

「え、あ、えーと、それはまあ・・・なんとなく」

「ああ、可愛いと思ったんだ」

「違う違う！ そうじゃなくて！ それは、あの、アレだ。魔が差したって言うか、えーと、ちょっとからかってみたくなったっていうか、本当そんだけ！俺が可愛いと思う女はお前だけだったって！」

「胡散くさっ！ ていうか、からかっただけって、本当最低だね」

「ゴメン！ 本当そんなつもりは全然ないから！俺本当お前しか好きじゃないって、お前もわかってるだろ！？」

「・・・はあ、まあいいや。許してあげる」

「エルメス！ ありがとう！ 愛してる！」

「全くもう、バカ」

許して貰えたことに狂喜してエルメスに抱き着くと、エルメスはそう言つて笑いながら溜息を吐く。

抱きしめ返ししながら、エルメスが言つた。

「ホント、バカだなあ私。本当に、カイが何しても、私はきつと許しちゃうんだろうなあ。すごい癪だけど」

その言葉が嬉しくて、より一層腕に力を込めてエルメスを抱きしめると、エルメスは腕の中でもがきはじめる。

「カイ、苦し、よ」

「バカ、俺は本当にお前しか愛してねーよ。俺がお前以外の女に興味持つわけねーだろ」

「苦しいつてば、離して」

「離さない。お前は俺のモノだから、死ぬまで離さない」

「私がかいに支配されてるって事は、カイは自由って事じゃないの？」

「どこが自由だよ。お前みたいなじゃじゃ馬、捕まえるのに必死過ぎて、繋ぎとめるだけでも精一杯だ」

「そんなことしなくても、私は逃げたりしないのに」

「わかつてるけど。お前を好きな奴は俺だけじゃないから、傍にいて見張つてねえと、お前はすぐに餌に釣られそうだからな」

「私そんなにバカじゃないもん」

「わかつてるよ。ただの心配性だ」

「カイが私の浮気を心配するなんて、お門違いにも程があるよ」  
「それはお互い様だ」

そりゃ心配にもなる。ランス、あのヤローが本気出したらマジ恐ろしい。んで、その内敵将の大本命、アーサーまで出張ってくると思つと、俺はもう今からハゲそうだ。

調律師の3人と言い、敵将二人と言い、俺の周りは敵だらけだ。俺は本当にエルメスしか好きじゃない。それはこれから絶対変わらない。だから誰にも触れさせたくないし、渡したくない。

エルメスも、同じ気持ちであつてほしい。そう思つてたけど、エルメスが俺を疑うのは、同じ気持ちだと思つていいんだろうか。女から受ける嫉妬なんて、大嫌いだった。鬱陶しいし、迷惑でしかなかったのに、エルメスに心配されるのが嬉しいとエルメスに言つたら、どんな顔をするんだろう。

怒られるのか、呆れられるのか、それとも、喜ばれるのか。

その予測が立つまでは、言わないでおこう。



海外出張報告 1

ハイ、11月25日です。結婚式まであと1か月。アーサーが就寝して10年と11か月経過。

寝坊助アーサーに大分ゲンナリしてる俺らは再び日本にいる。ボニーさんとクライドさんがインドにやってきて、待ち人は残すところ一人になった。そこで俺がエルメスに提案した。

「なあ、ボニーさんとクライドさんも戻って来た事だし、ジュノ様もいるんだからお前両親に会いに行けよ」

「でも、北都の事件がどうなってるかわかんないよ」

「それなら問題ない。迷宮入りのままとつくに時効は成立してる」

「え？ そうなの？ カイ、調べてくれたの？ 日本語読めないのに？」

「調べたのは俺じゃなくてジュノ様だけだな。結局犯人を断定する事は出来なくて、ジュノ様が手を下すまでもなく時効は成立したつてよ」

「ジュノ様が手を下すまでもなくって、もしかしてカイはそれもお願いしてくれてたの？」

「あ、まあ」

「カイ、ありがとう」

「俺は何もしてねーけどな。まあとにかくそう言う事だから、両親

に会いに行けよ」

「うん、ありがとう。カイも一緒にいこ?」

「なんで俺も?」

「やっぱり北都の事を切り出すには勇気が必要し、それにお父さんとお母さんにカイを紹介したいし」

「・・・ああ。でも俺日本語勉強しねえと」

「じゃあ教えてあげるね。言っとくけど日本語は難しいよ」

「ハッ、1日でマスターしてやるぜ」

昼も夜も時間使ったというのに、マスターするまでに1週間かかった。何なんだ日本語。超難しい。なんなの謙譲語とか尊敬語とかスラングでさえ複雑だし、なんで表記文字が3種類もあんだよ。覚える方の身にもなれ。

で、俺が日本語覚えてボニーさんとクライドさんとエルメスと一緒に、極東の島国上陸。初めて来たけど、日本ってアレだな。都市部はエルメスの好きそうなものがあんまりない。近代的なビル群乱立。歴史的建造物とかほとんどねえ。

「第2次世界恐慌の後経済復興してから更に発展しちゃったから」

「ああ、そう言えば政府が変わって経済大国に返り咲いたんだっけ」

「うん、革命起きたから。でも第1次産業と第2次産業に力入れるようになったから、大都市以外の地域はわりとのどかだよ」

「へえ」

一時は中国とかに追い抜かれて落ち目になったと思われた日本。ギリシャ発の第2次世界恐慌を経て、経済危機に陥って逼迫したことで反政府運動が起きて、無血革命で新政府が樹立。

日本は国名も改めて「日本皇国」となって、政治と法律の専門である法政議会、経済や福祉なんかの各部門の専門家と市民代表からなる文民議会と天皇の3者が主権を握る国になった。

第1次産業と第2次産業をおろそかにしたことを反省したのか、そっち方面に力を入れるようになって、農業法人や第1次産業向け投資家が急増。

元々資源も少なく国土も狭い国だから生産量には頼らず、商品のクオリティの高さと新技術の開発を追求してブランド化を確立。今や「メイドインジャパン」と言えば何をとっても世界最高峰の最高品質の物ばかりで、工業製品でも農産物でも、はつきり言って貧乏人には縁がない。

「日本人はコツコツ地道に努力するから、本来は楽しんで儲けるよりもそっちの方が性に合ってるんだよ」

「ああ、お前も割と勉強家だしな。昔から勉強好きだったか？」

「ううん、学生時代は学校には寝に行ってた」

「無駄な時間を過ごしたな」

「でも好きな科目だけは起きてた。今お勉強してるのも好きだし興味あるから」

「極端だな」

「一芸に秀でてるって言うて欲しいんだけど」

ホテルに荷物を置いて、ショッピングブロックと呼ばれる商業地域でエルメスの両親へのお土産をお買い物。こういう地域が各地にあるらしい。

廃れかけた商店街を大企業が買い上げて、既存の商店をテナント化して地域丸ごと商業施設化するという、とんでもねえアイデアが

大流行した。

ちなみに今いるところは「霧島メディカルデバイス」という医療機器のトップメーカーが買い上げたところで、プロックの中には商店だけじゃなく色んなクリニックやサロンがあつて、若い女と年寄りが異常に多い。

他には玩具メーカーが買い上げた遊園地やホビー店の乱立した行楽街だの、印刷会社の本屋街だの、なかには芸能事務所劇場街なんかもあつたりする。確かに一芸に秀でた街づくりだ。

元々技術も質も高かっただけに、廃れた商店街に企業のブランド名が付いたことで再興したらしい。数百年前までは当然のようにそういう街づくりをして300年も安泰だったつー前例もあつたよ。うだ。スゲエことを考える奴もいるもんだが、それが成功したのもスゲエ。

「日本人はミーハーだからね。ブランド好きなんだよ」

「そういうもんなのか？」

「まあそれだけじゃないだろうけど。あ、中沢米穀のお煎餅！ コレ買って行こう！」

「クッキー？」

「NO！ お煎餅！」

「わからん」

「お米なの。甘くはないの、しょっぱいの」

「それが噂の俳句か」

「あ、本当だ！ 私スゴい！ 風情もなにもあつたもんじゃないけど」

「ああ、知性のカケラも感じられねーな」

「確かにね・・・」

そんな具合で日本観光も楽しませていただきーの、試食をつまみ食いするジユノ様にみんなで羨ましがりのやりながら、買い物済ませてエルメスの実家に到着。

「うー・・・緊張してきた」

そう言いながら玄関でまごつくエルメスはなかなかインターホンを押せない。ボニーさんとジユノ様が大丈夫、と励ます横から勝手にクライドさんがインターホンを連打。

「ちよ！ クライドさんやめて！ 迷惑だから！」

「一回やってみたかったんだよ」

「いい歳こいてなにやっつてんですか」

「本当ならピンポンダツシュしてやるとこなんだぜ」

「本当やめてもらえませんか？」

クライドさんって確か100歳越えてるよな。なんでこんなに無邪気なんだ、と思つてたら廊下をパタパタ走る音がした。

「うるっさいのよー！」

クライドさんのせいで怒りながら勢いよくドアを開けたのは、エルメスにそっくりなオバチャン。エルメスママは怒つた顔をしていたけど、エルメスに気づいた途端に、あんどりと口を開けて驚いている。

エルメスは泣きそうな顔になって、「お母さん・・・」と呟くよう

に言葉を漏らすと、エルメスママも同じような顔になってエルメスに抱きついた。

「ミナ、ミナ。心配したのよ。急にいなくなって17年も連絡もしないで！」

「お母さん、本当にごめんね。ごめんなさい」

エルメスの「ごめんなさい」に含まれるすべての意味を、エルメスママやエルメスパパが理解することは一生ない。

ここに来る前に決めていた。エルメスの両親の為に、エルメスが人殺しをした事は一生隠し通す。

北都の事件の事も、死神の隊長の仕事も、戦争の事も、エルメスが人殺しをしたとなればエルメスの両親は殺人者の親。

それはまごうことなき事実であって、隠蔽したところでその現実が変わるわけではない。だけど、世の中には知らない方が良い事なんて、山の様にある。この事実はその一つだ。

最初にエルメスにそう指示したのはアーサーだ。アーサーが隠し通せと言った。それもあるから、これからエルメスはエルメスの両親に一生嘘を吐く。嘘を吐き続けるのは、エルメスにとっては辛い事だ。だけど、それでも隠し通さなきゃいけない。

エルメスママがしばらく抱き着いていると、今度は北都によく似たオツチャンが出てきた。

エルメスパパはエルメスママを優しく引き離して、エルメスと俺達を歓迎して家の中に招き入れてくれた。

リビングに通されて全員が座り、俺がエルメスの背後に直立すると、エルメスは両親に深く頭を下げた。

「お父さん、お母さん、ずっと行方をくらませて勝手に勝手してごめんなさい。連絡もせずに海外を逃げ回って、本当に心配かけたよね。本当にごめんなさい」

エルメスの謝罪に、最初は心配顔を向けていた両親だったが、二人で顔を見合わせて優しく微笑んだ。

「全く、お前はとんだ放蕩娘だな」

「本当よ。だけど、便りが無いのは元気な証拠ってね」

「ああ、正直、またお前に会えるとは思っていなかった」

「ミナは本当に老けないのね。元気そうだと安心したわ」

両親の優しい言葉に、エルメスは再び深く頭を下げて謝罪して、顔を上げると「お父さんとお母さんも元気そうでした」とニコニコ笑った。

エルメスはすぐに振り返って、俺が持っていた紙袋を奪い取ると、両親に差し出す。

「はい、コレお土産。中沢米穀のお煎餅、好きだったでしょ」

「あら、わざわざ買ってきてくれたの」

「お前よく覚えてたなあ」

「えへへ、当たり前じゃない」

「でも普通お土産と言ったら、海外の物を買ってくるものじゃないか？」

「あ！ そっか！」

「ミナは体の成長と一緒に、頭の成長も止まっちゃったみたいねえ」

「違うぞ、母さんに似たんだ」

「やだわ、お父さんったら」

「母さん？ そこは喜ぶところか？」

「私お茶淹れて来るわね」  
「ミナ達はお茶飲めないだろう」  
「そうだったわね。じゃあ私一人で頂くわ」  
「俺のは用意してくれないのか」  
「あら、忘れてた」  
「.....」

エルメスもかなりアホだが、エルメスママの方がキャラクターが強烈なようだ。毒舌なうえにかなりの天然だ。エルメスパパが気の毒だ。俺もいずれ、ああなるんだろうか。

エルメスの両親のやり取りに、ボニーさんとクライドさんは爆笑だ。俺もかなり耐えてるけど、爆笑は失礼だろ。

さすがにバツが悪くなつたのか、エルメスパパは二人に視線を向けた。

「君たちは確か、ボニーとクライドだったかな？」

笑いすぎて目じりに堪った涙をぬぐいながら、クライドさんが笑ってみせる。

「覚えててくれたのか。一度しか会ってねーのに」

「勿論、なんせ会つたのは北都の命日だ」

「そうだったなあ。でも俺あの時荷物に埋もれてたから、正確には今日が初対面だ」

「そう言えばそうだったな」

「初めまして。ミナには超お世話になってます」

「こちらこそ。ミナが迷惑かけただろう」

「いや全然。ミナはよく気が付くし、優しいからな。パパとママの躰が良かったんだぜ」



「はは、そうか。ありがとう」

そうか、この二人はエルメスの両親に会っているのか。北都の命日と言う単語に思わずエルメスに視線を移すと、エルメスは「大丈夫」と儂げな笑顔で頷く。

エルメスママが戻ってきてソファに腰かけると、エルメスパパはママに呆れたように視線を送る。

「母さん、お茶は？」

「あ、いつけない。忘れてた」

「何しに台所に行ったんだ」

「何しに？・・・あ、お茶淹れるの忘れてたわ」

「そこからか・・・本当に何しに行ったんだ」

「お父さんはうるさいの！」

クライドさんとボニーさんは再び大爆笑だ。さすがの俺も吹き出した。エルメスママは顔を赤くして恥ずかしそうに笑いながら、再び台所に消えて行った。

「パパ久しぶりだねえ。ママ普段からあんな面白いの？」

「ああ、ボニーも久しぶりだな。面白いと言うか、毎日だと疲れるぞ」

「だろーねえ」

「ミナもゆくゆくは、ああなるんだぜ」

「なりませんよあ」

「なるって。その片鱗は十分見えてるよ。既に苦労してる奴が後ろにいるじゃん」

再び手ぶらで戻ってきてしまったエルメスママに溜息を吐きつつ、エルメスパパは俺とジユノ様に視線を移した。

「そちらの二人は初対面・・・だよな？」

「そーだよ。こっちの女の人は悪魔なの。この方は地獄の大悪魔、  
ジユノ・アスタロト侯爵様だよ」

「まあ、悪魔！ 悪魔も本当にいるのねえ」

「綺麗な人だなあ」

「お父さん、メッ！」

「・・・感想位許してくれよ」

「うふ。お褒めに与かり光荣ですわ。以後よしなに」

「こちらこそ。声も綺麗だなあ」

「お父さん、バゲットナイフで刺すわよ」

「人前でそう言う事言うのはやめなさい」

エルメスの実家はエルメスママが最強のようだ。続いて、と俺に向いたエルメスは「えつとお、この人はあ・・・」と紹介を戸惑っているの、自分から自己紹介することにした。  
体をかがめて礼を取り、とりあえず、背後にバラ。

「お父様、お母様、お初にお目に掛かります。私は、ミナ様専属騎士団筆頭兼執事を任されております、カイ・ペンドラゴンと申します。日頃よりミナ様には、大変寛大なご厚遇を賜っております。若輩ゆえ至らぬところもございますが、何卒お見知りおきお願い致します  
たく存じます」

丁寧な挨拶の後になっこり。10年ぶりの執事バージョン。顔が疲れる。しかし執事バージョンの俺は、第一印象は悪くはなかった  
ようだ。

「まあ、素敵・・・！」

「ミナ様って、騎士団ってなんなんだい？」

「我々騎士団12名は、いずれもミナ様に並ならぬ御恩があるので。その御恩に報いるため、及ばずながらミナ様を守護する役目を仰せつかっております」

「騎士なんて素敵ねえ。ミナ、あなた何様？」

「な、何様って・・・」

「ミナ様は、お優しくお美しい我々の守護すべき姫。我々が忠誠を誓った、ただ一人のお方でいらっしやいます」

「誰が姫・・・」

「話合わせるバカ」(フランス語)

「ギャップがヒドすぎる・・・」(フランス語)

初めて見たわけでもなかるうちに、ジユノ様以外の3人からの視線は、漂白したてのシーツよりも白い。が、さすがに空気を察してくれたのか、内緒話はフランス語だ。

「忘れてたな。コイツ元執事だったんだ」

「本当ギャップがヒドイ」

「アルカード並の二面性だな」

「違いますよクライドさん、この人多重人格なんです」

「誰が多重人格だ、コラ」

「笑顔でツツコまないでよ・・・なんか怖いよ」

「うるせえ」

「よくあんな思ってもないことスラスラ言えるよね」

「うるせえ」

マジうるせえ。完全に精神病患者扱いだ。失敬にも程がある。口を挟みながらも何とかスマイルは維持。顔が攣りそうだ。

内緒話をする俺らに不思議そうに首を傾げる両親の視線に気づいて、エルメスはすぐに前に視線を戻してごまかすように笑ってみせる。しかし不思議そうな視線は戻らない。

「ミナに恩があるとは、ミナは何をしたんだ？」

思った以上に突っ込んだ質問をしてくるパパ。それにさすがのエルメスママも溜息だ。

「どうしてお父さんはいつもデリカシーがないの？」

「気になるじゃないか」

「普通は聞かないでしょ？ カイさん、ごめんなさいね。この人KYなのよ」

「KYじゃないぞ！」

「KYとはなんでしょうか？」

「ああ、外国の人は知らないわよね。空気が読めないっていう意味よ」

「読める！」

「読めないじゃないの。ねえ？」

「お父さんKYだよ。会社で嫌われてないか心配だったもん」

「そうよねえ」

「余計な心配かけて悪かったな！」

なにこの家族。面白すぎる。ボニーさんとクライドさんはまた笑ってるし、パパは常に強気なのに微妙に弱ええ。こっちは思わず笑いそうになるのをこらえるのに必死だ。

「いいえ、KYなどと、とんでもございません。我々の身の上話など、ご遠慮いただくほどの物でもございませんので」

なぜかパパに味方しなくなつて、そうフォローを入れると、パパは俺に向いてにっこり笑う。

「じゃあ聞かせてくれないか」

マジ遠慮ねえ、このパパ。心の中で溜息を吐いて、にっこり笑って身の上話。

「我々は両親を殺害され、誘拐された孤児です」

「え、そうなのかい」

「ええ、誘拐され、異常な男に異常な環境で育てられ、異常な人生を歩んでおりました。ですが、ミナ様に出会い、ミナ様は我々を友達とおっしゃって、その環境から救い出し、新しい人生を与えて下さったのです」

「え、ちよつと、カイ？」

「ミナが、そんなことを？」

「はい。ミナ様にはそのご自覚はないようですが、我々は全員感謝しております。ミナ様に自分の騎士になるように、とおっしゃっていただけただけ時は、目の前に拓かれた人を守りながら生きるという人生に、光明が見えたのです」

「異常な人生とは、君たちは何をしていたんだい？」

「人の道に背く様な事です」

「言えない程の事なの？」

「申し訳ございません」

「軽蔑などしたりはしないよ。教えてくれないか」

「もう、お父さん！」

「・・・」気分を害されましたら申し訳ございません。我々は、殺し屋です」

「殺し屋!？」

「はい。幼少より暗殺者としての教育を施され  
いえ、

それしか、教育されませんでした。マインドコントロールと人殺し、それしか我々にはなかったのです。そんな我々に、ミナ様は友達だと笑いかけて下さった。それが我々にとってどれほど憧れだったか、

どれほど救いになったか、ミナ様はご存じないかもしれませんが、我々にとっては、ミナ様は救世主。人を傷つける人生を捨てさせ、人を守る人生を与えてくださった、運命の救世主なのです」

「カイ、大袈裟だよ」

「大袈裟ではありません。本当にご自覚いただけていないのですね。ミナ様がいらつしやらなければ我々は未だに人殺しをしていたか、「普通の日常」というものも知らずに、ただの兵器として生きて、使い捨ての道具として死んでいたのですから」

「・・・カイくん、君は今、幸せかい？」

「はい、とても幸福です。ミナ様に出会えた運命に、感謝せずにはられません」

「そう、それはよかったわねえ」

不本意ながら、十分に同情票を獲得してしまったようだ。ママ泣きそう。つーかパパはマジ容赦ねえ。好奇心の塊だな、オイ。で、なぜか憐憫の目を向けるボニーさんとクライドさん。

「そっかあ、アンタたち普通なんて知らなかったんだね」

「はい。ですが、我々に同情など不要です。我々のしてきたことは、他人を不幸に陥れるだけでしたので。軽蔑こそされても、情けをかけて頂けるような身の上ではありません」

「でも、お前らは命令に従っただけだろ」

「その命令に従ったのは、自分の意志ですから」

「お前は本当に自分に厳しいなあ」

「身に余るお言葉です」

マジ同情とかやめてほしいんだけど。いや、エルメスの両親は別だけど、この二人に同情される覚えはないんだけど。アンタらも似たようなモンじゃねーか。

俺の中で同情＝見下しという方程式が確立してるから、軽く腹立

つけども、まあ、ここは我慢だ。

「うふふ、ミナは昔から友達だけは多かったものね」

「そうだなあ、それが唯一の取り柄だったもんな」

「唯一じゃないよ」

「じゃあ他に何があった？」

「……どこでも寝れる」

「それは取り柄とは言わないでしょ。ただのぐうたらよ」

「全く、カイくんすまないね。ミナはぐうたらで我儘な娘だから迷惑かけてるだろう」

「とんでもございません。私のような下賤の者がミナ様のお傍に仕えさせていただけるだけで、私にとりましては至極喜悅に存じます」

「……ミナ、お前幸せ者だなあ」

「……」

本当幸せモンだけ。なのに何引いてんだコノヤロー。ボニーさんとクライドさんまで引いてやがるし、なんなんだコノヤロー。

ふと、パパが思いついたように周りに視線を流す。

「そつえば、龍くんは一緒じゃないのか？」

「まさか、ミナ、龍さんを置いてきぼりにしたの？」

「違うよ！ 置いてきぼりはこっちだよ！」

「ん？ どこかに行ったのか？」

「行ったって言うか、消えたって言うか」

「消えた？」

「ミナ、北都にも会いたいわ。北都を出して頂戴」

「……ごめん、できない」

「どうしてだ？」

不思議そうに首を傾げる両親に、エルメスは俯いて、ぎゅっと手

を握りしめる。これから話さなければならぬ、重大なことにエルメスは緊張しているようだ。

「龍さんの事もだけど、それ以上に、お父さんとお母さんに・・・謝らなきゃ、いけないことがあるの」

途中から言葉を詰まらせたエルメスが居たたまれなくて、エルメスの傍に跪いて、フランス語で話しかける。

「エルメス、無理すんな。俺から話そうか？」

「ありがとう。でも、私が言わなきゃいけないことだから。ごめんね、大丈夫だよ」

そう言って少し申し訳なさそうに笑ったエルメスだったがそれでも不安だったようで、傍に跪いた俺の手を握ると、意を決したように口を開いた。

「お父さん、お母さん、よく聞いてね。本当に、大事な話なの」

「ああ、どうした？」

「・・・北都が、死んじゃったの。本当に、死んじゃったの。北都はもう、この世には・・・いないの・・・うつく、うつく・・・」

こらえきれずに嗚咽を漏らすエルメスの言葉に、両親は信じられないという顔をして身を乗り出してエルメスの顔を覗き込む。

「ミナ、嘘だろう？ お前は吸血鬼で不死身だから、北都も死なないんだらう？」

「ミナ、お願い。嘘だって言って」

嘆願するように視線を向けて縋る両親に、エルメスは泣きながら



首を横に振って、その様子に両親もとうとう慟哭した。

「ああ、北都、北都！」

「嘘だ、嘘だ！ 北都・・・ゴメンな、北都。俺があの時守ってあげてれば・・・こんな事には・・・ううっ・・・」

昔、エルメスに聞いた。目の前で北都を死なせた自責の念で、本当に苦しんでいるのはエルメスパパだと。顔を覆うように頭を抱えて涙を零すエルメスパパの悲痛な声は、心に突き刺さるよう。その慟哭はまるで、俺が責められているかのようで。

一つだけ、ずっと、思ってた。最後の砲撃の時、俺がジュリオ様を殺していれば、北都だけは死なずに済んだんじゃないかと。ジュリオ様殺害の命令はアーサーの消滅後とあったのに、俺が躊躇して悩んでいたせいで北都を死なせてしまったんだと。今更考えたってどうしようもないことだってわかってる。俺じゃジュリオ様を止めることが出来なかったとわかってる。

でも、エルメスの為に止めるべきだった。あの時にジュリオ様を殺しておくべきだった。あの時止めていれば、俺の命と引き換えでも北都は助かったかもしれないのに、なぜあの時の俺はそうしなかったんだろう。今なら、躊躇なくできるのに。

これほど悲しんで慟哭するエルメスとその両親を見るくらいなら、あの時に命なんて捨ててしまえばよかった。

そんなエルメスを見つめて悲しそうに俯くクライドさんと、ポタポタと涙を零すボニーさんに気付いたエルメスパパは顔を上げて涙をぬぐうと、二人に口を開いた。

「ボニーとクライドは、無事でよかった」

「ありがとう、パパ。リユーも無事だよ。今ちよっといないけど」

「そうか」

やっと笑顔を見せてくれたエルメスパパに安心していると、エルメスママも涙を止めて顔を上げて、エルメスを見つめた。

「ミナ、どうして北都は死んでしまったの？ ミナは不死身だから、北都もミナが死なない限りは死なないはずでしょう？ 一体この17年の間に、何があったの？」

その言葉にエルメスも涙を拭って、俯いたまま口を開いた。ウソの真実を話す為に。

「実は、10年前に私達はイタリアに住んでいたの。でも、イタリアってローマにヴァチカンがあるでしょう？ 10年前のクリスマスイブの日に、ヴァチカンのエクソシストから総攻撃を受けたの。それで、私も勿論攻撃されて、使い魔って言う能力として体内にいた北都の血すら生命力として消費しなきゃいけない程に追い込まれて、それで、北都の血を使い果たして、北都は、死んじゃったの。私がおもった強ければ北都が死ぬ事はなかったのに、あの時北都が励ましてくれたから、私はまた立ち上がったのに。北都がいてくれたから、私は生き延びることが出来たのに・・・お父さん、お母さん、本当にごめんなさい」

泣いてもいいはずなのに、両親の為なのかエルメスは涙をこらえて、流そうとはしない。

エルメスの話を聞いた両親は愕然として、頭を抱えた。

「襲われたのか」

「うん」

「お前が、お前達が吸血鬼だからか」

「うん」

「お前も、襲われたのか」

「うん、ボニーさんとクライドさんはその時いなかったから無事だったようなもので、私と龍さん以外の仲間は、死んだ」

「・・・そうか」

「そんなことが・・・ミナ、辛かったわね。皆さん、ミナを支えてくれてありがとう」

涙を湛えた目で礼を言うエルメスママに、ボニーさんは首を横に降る。

「違うよ。あたし達も最近になってその事を知ったんだ。あたし達はこんな大変なことが起きてたなんて知りもしないで、あたし達はミナになにもしてやれなかった。ミナを支えたのは、カイ達騎士の奴らだよ」

「そう・・・カイさん、どうもありがとう」

「いえ、私は何も」

「いいえ、カイさんは優しそうな人だもの。ミナは寂しがり屋だから、ずっと傍で支えてくれたのね。ミナは気の小さい子だから、きっと沢山迷惑かけたわね。ごめんなさいね」

「いえ、ミナ様は強い方でいらっしやいます。ミナ様はご自分の努力で立ち直られたのです。我々はただお傍にいただけです」

「誰だつて、立ち直るのは自力でするもんだよ。ただ、人の手がなきゃ立てないこともある。君がその手で支えてくれたから、ミナはその手を取って立ち上がったんだよ」

「そうだよ、カイが私を一人にしないって、一緒に生きようって言うてずっと傍にいてくれたから、頑張ろうって思えたんだよ。ありがとう、カイ」

「・・・誠に勿体ないお言葉、ありがとうございます」

マジで勿体ねえ。俺には果報過ぎる。エルメスにも、エルメスの両親にもそう言ってもらえたことが、思わず泣きそうになるほどに嬉しい。

つい顔を伏せた俺にエルメスは笑ったようで、隣からクスツと聞こえた。

「私には、カイ達やボニーさんとクライドさんや、大勢の人が傍にいてくれるから、大丈夫だよ。ねえ、北都にお線香、あげてもいい？」

エルメスの言葉にうなずいた両親は立ち上がり、それに続いて立ち上がった俺達も両親の後について、床の間の仏壇へと足を向けた。が、部屋のふすまを開けて入った瞬間に、ボニーさんとクライドさんは足を止める。

「どうなさったんですか？」

「お前、なんともねえのか？」

「お線香の匂いと、数珠とか位牌が・・・ムリ」

「あ、私とミナ様はジユノ様に強化して戴いたので、なんともないんですが」

「マジか。ジユノ様、俺らも強化してよ」

言いながら振り向いたクライドさんに、ジユノ様は小さく溜息を吐く。

「構いませんよ。私と契約するのであれば」

「いや、しねーけど、強化してよ」

「それはできません」

「つれねーな」

その様子を見ていたエルメスの両親は思い出したような顔をした後、悲しそうな表情を浮かべる。

「そういえば、昔はミナもお線香あげられなかったわね」

「今は、平気なのか？」

「うん、私とカイは、今は平気。でもボニーさんとクライドさんは・  
・・」

「そうか・・二人とは北都も仲良くしてもらってたみたいなのに、残念だ」

悲しそうな表情を浮かべる両親を見渡して、エルメスはジユノ様に向く。

「ねえ、ジユノ様。ボニーさんとクライドさんも強化してもらえませんか？」

「それはできません。関係ありませんもの」

「お願いしますよお」

「ダメです」

頑固なジユノ様。エルメスのお願いだと言うのに、聞き入れる気配は全くない。仕方がないので、ジユノ様の傍まで行って、耳打ちした。

「ジユノ様、俺の言った願い、忘れましたか？ エルメスがこれほど頼んでるのに、無視ですか。ボニーさんとクライドさんにとっても、北都は可愛い弟分だったんですよ。その北都に手も合わせられないなんて、エルメスにとっては悲しいことなんですけどね」

そう言うとジユノ様は幾分か不機嫌な顔になる。

「あなたから囁かれると、とても不快な気分になります」

「それが嫌なら、お願いします」

「はぁ、わかりました」

溜息を吐いて、ジユノ様がボニーさんとクライドさんに振り返る。まずはクライドさんに、俺にしたように胸に手を当てて、その後ボニーさんにも同じように胸に手を当てる。

二人はやっぱり俺同様に体感したようで、「おあ！　なんか元気になった！　数珠怖くねえ！」と騒ぎ出した。

「二人とも、墓前ですよ。静かにしてください。ほら、線香あげますよ」

そう促して、やっと全員で北都の仏壇の前に座った。黒漆の仏壇の真ん中で、遺影の北都は子供のままで、サッカーのユニフォームに身を包んだ表情は満面の笑顔だ。それで、かすかに疑問を感じた。

「ミナ様、私がお会いした時は北都様はもう少し大きかった気がしますか？」

俺の知ってる北都は子供は子供だが、ここまで子供じゃなかった。エルメスの言う東洋人誤差を入れても、14・5歳くらいには見えた。遺影の北都は、それよりも小さい。

俺の言葉に首を傾げたのは両親の方だった。

「カイくんの会った北都は、大きかったのかい？」

「はい、少なくとも15歳くらいだと思っていたのですが、北都様は何歳だったのですか？」

「北都は、10歳で死んだのよ」

「10歳・・・そんな小さい時に・・・」

よく考えてみたら、それもそうだ。エルメスと10歳離れているというのは知っていたし、俺が北都の話を知ったときは、既に事件から7年が経過してた。

そんな小さい時に無差別殺人事件なんか巻き込まれて、きつと俺の想像しているよりも恐ろしかったに違いない。もつとたくさん遊んで、学びたかっただろう。それでも、きつとエルメスの中で生きながらえたことは、死んでしまうよりも幸せだったと思うけど。そう考えてたら、手を合わせていたエルメスが顔を上げた。

「お父さんとお母さんにも、大きくなった北都を見せてあげたかった。私ね、あれから強くなつて、影を操れるようになったから、北都を影で出してたんだよ。影だから北都は等身大でね、年相応に年々大きくなつて。最初に影で出てきた時点で、とっくに私よりも大きかった。お父さんとお母さんにも、大きな北都を見せてあげたかった」

そうか、北都は影だったけど、まだ子供だったから、少しずつ成長した姿で出てきていたのか。だから、俺の知ってる北都はこの遺影の北都と姿が違ったのか。

エルメスの言葉に両親は眩しそうに目を細めて、北都の遺影を見る。

「そうか、お前の中で、北都も成長していたんだな」

「大きな北都、見たかったわね」

「背も高くて、年々お父さんに似てきて、声も低くなつてたよ」

「そうか・・・」

「お父さんによく似てた。優しくてまじめで、正義感が強くて、強い相手にも臆せず立ち向かう勇気があって、私を大事に思ってくれた。私がケンカしたりしたら、いつも止めに入るか、私の味方にな

つてくれて、優しい弟だったよ」  
「そう、か・・・見たかったなあ」

エルメスパパはエルメスの言葉に、目じりに涙を浮かべる。

思い出す、まだイタリアにいた頃のこと。俺がエルメスを虐めると、いつも北都とクリシユナさんが怒って現れた。俺がエルメスにちよっかい出す度に、影の二人ともよくケンカした。本当に姉思いの、いい奴だった。

北都の遺影に十字を切つて、誓った。北都が大事にしてた大事な姉は、これから北都の代わりに俺が守るから、お前が生まれ変わるまではきつと守るから。生まれ変わってまた会えたら、一緒に両親に会いに来よう。北都の生まれ変わりに会えたら、きつと両親も喜ぶぞ。

顔を上げて北都の遺影に目をやると、遺影の中の北都が、笑った気がした。



## 海外出張報告 2

床の間から出た後、エルメスの希望でエルメスの部屋と北都の部屋を覗いて見ることにした。エルメスが言うには、どちらの部屋も当時のまま残してあって、昔に戻ったようで嬉しいと言って、泣いていた。

本棚を漁って、エルメスは何冊かのアルバムを取り出して、見せてくれた。

「私が10歳で、北都が赤ちゃんの時のです」

「ミナ可愛いッ！」

「北都ちっちええ」

満面笑顔で赤ん坊の北都を抱っこするエルメス。昔聞いた。北都が可愛くて仕方がなかったと言っていた。本当に嬉しそうに北都を抱っこするエルメスは、可愛い。10歳の頃、既に銃を握ってた俺とは大違いだ。

「これは私の小学校の卒業式の。北都可愛くて、もうみんなのアイドルでしたよ」

「スゲエ北都、JSに取り囲まれて満面笑顔じゃん」

「北都モテモテじゃん」

「JSとか言わないでくださいよ・・・まあ、北都は可愛いですがらね」

「すいません、クライドさん、JSってなんですか」

「女子（J）小学生（S）。AV業界から派生した単語」

「ああ・・・そうですか」

「後はJC（中学生）とかJK（女子高生）とか。でも最近のファッション誌にもその単語が載ってるの。当事者たちは元々AV用語だって知ってるのかな」

「知らねんじやね」

日本の造語は意味不明だ。なんだその変な略し方。そしてAV用語を常用するって、どんな国民性だ。

内心呆れつつ、俺よりはるかにモテモテな北都の写真を見ていて気付いた。

「エルメス、お前本当は黒髪なのか？」

「そうだよ、日本人だもん」

「北都は、茶髪だな」

「北都は色素薄かったから、元から茶髪なの。そう言う人じゃなかったら、ほとんどの日本人はみんな黒髪黒目だよ」

「へえ、そうなのか」

おかつぱ黒髪の子供エルメス。人形みたいで、可愛い。俺個人的には、今の明るいベージュ色の髪色よりこっちのが好みだ。

そんな事を考えていたら、ポニーさんとクライドさんが思い出したように笑いだす。

「そーいえばさあ、一回みんなで黒髪に染めたよね、インドで」

「あー！懐かしいですね！あの後ヒドイ目に遭ったなあ」

「ヒドイ目に遭ったの俺の方ね！」

「いや、クライドさんは刺されてもしょうがないですよ」

「イヤイヤ！ なにも刺すことねーと思うよ、俺は」

髪を染めて刺されるとは、一体どんな状況だ。意味が分からん。頭をひねる俺に気付いたのか、3人は昔話を始めた。

「あのね、インドのテロ事件の時にね、私の人相が結構バレちゃって」

「そう、茶髪で髪の毛長い外国人の若い女って」

「だからボニーとミラーカ様とミナは髪を染めることになったんだよ。でもミナは髪切った方がいいんじゃないかねーかっつたら、スゲー逃げ回ってよ」

「だってクライドさんの腕、その時知らなかったし、ナイフ振り回して追っかけて来るんですもん。そりゃ逃げますよ」

「クライドさん、何やってんですか・・・」

「ふざけてた。で、逃げた先がアルカードの部屋でよ、そこでとっ捕まえて髪切ったらアルカードが戻ってきてさ「何故ここで切る必要があったのか、納得できる理由を言え」っていうから、「なんとなく」ついたら、俺刺されてさあ。マジビビったよ、あん時」

「そりゃ刺されますよ。なんとなくじゃ納得できないでしょ。俺でも撃ってますよ」

「んだよ！ アンジエロもアルカードの味方だよ！ 俺の味方はボニーだけ！」

「あたし味方してないよ」

「孤立無援！？」

孤立したクライドさんはいじけてしまった。「ドンマイ」とクライドさんを励ますボニーさんだが、トドメを刺したのはボニーさん

だった気がするけど、俺の気のせいかな。

全くこの宇宙人たちは、と溜息を吐いて再びアルバムに視線を戻す。胸に華を付けたエルメス達小学生に取り囲まれて満面笑顔の北都。北都も、可愛い。アイドルになるのもうなずける。隣には同じ日に撮ったであろう家族写真。エルメスの両親も若くて、エルメスママなんか今のエルメスにそっくりだ。

「本当お前母親似だな」

「本当だね。自分でも見分けつかない」

「つい12歳の母親にしては若いよな。お前の両親って何歳？」

「えーっと、今はお父さんが62歳、お母さんが57歳だよ」

「マジか！俺と歳近けーじゃん！」

「そう言えば、そうだねえ」

「ん？ アンジエロ今何歳なの？」

「・・・54です」

「ミナと同年じゃなかったのか」

「ああ、アレはウソです」

「アンジエロ、アンタ本当ウソつきだね」

「そうですね」

マジか、エルメスの両親は結婚が早かったとは聞いたけども、思った以上にママと年が近い。確かに年齢差からして俺にエルメス位の娘がいてもおかしくはない。なんか、悪い事をしているような気分だ。

「アンジエロ、お前ロリコン？」

「違いますよ！俺だって25から見た目変わってないんだから、いいじゃないですか！」

「クライド、それ言ったらクリシュナはロリコンどころじゃないよ」

「ああ、それもそうか」

そういやそうだ。クリシユナさんとエルメスは500歳以上の年齢差だ。それになんか安心した。でも俺の場合、微妙にリアルな数字で、なんか複雑だ。もう歳の事は忘れよう。化け物だし、関係ねえ。

気を取り直して再びアルバムに目をやると、不思議な格好をしたエルメス。

「これねー、中学校から部活で剣道初めて、その合宿の写真だよ」

「へえ、こんな服着てやるもんなのか」

「そうだよ。元々剣道は侍のモノだったから、それに倣ってるの侍？」

「うん、なんていうか、今で言ったら帯刀してる公務員っていうか「物騒な公務員だな」

「そりゃあね。公務員であると同時に、軍人でもあったからへえ」

白の袴を着て部活の仲間と、スポーツドリンク片手にピースするエルメス。傍らには竹刀。まさか学校でやってた部活が実戦に活きるとは、この時のエルメスは予想もしなかっただろう。

「ミナが剣で戦ってたんの、カッコよかったよね。なんていうかこう、凛々しくて」

「っーかあの剣がカッコよかったよな」

「あ、だよな。あたしもアレ欲しかったもん」

「二人は剣術できるんですか？」

「できねー。俺は昔から基本、銃で脅迫専門」

「銃で殺したことないんですか？」

「いや、あるけど。殺しやると、仕事スムーズに行かねーからな」

「警察とか見物人が集まると邪魔だもんねえ。強盗はスピード勝負だよ。制限時間2分」

「2分!? それは、すごいですね」

「ま、俺らプロだからな」

強盗のプロなんて聞いたことないが、この二人は本当にプロなんだな。初めてこの宇宙人二人に感心した。が、考え直した。

確かにスゲエけど、犯罪者じゃん。エルメスが尊敬の眼差しを向けてるけど、その内強盗やってみたいとか言い出しかねない。その時は是が非でも阻止だ。強盗に比べたら、泥棒の方がまだマシだ。いや、一緒か。

またしても溜息を吐きながらアルバムに視線を戻すと、今度は学校生活の写真のようだ。白のセーラー服のエルメス。普段クソ真面目な奴だが、制服好きのベディが見たら大喜びしそうだ。

「なんかこのミナ、萌えるね」

「セーラー服、イイな。まだ持ってるか？」

「まだ持ってたと思いますけど・・・あげませんよ」

「ミナのケチー」

「妙なプレイに使われるってわかって、あげるわけないでしょ」

「そんな事言っつて、アンジェロと制服プレイする癖に」

「しませんよ！ バカじゃないの!」

「そうですね。俺は制服の趣味ないんで。でも、病院潜入用の白衣ならありますよ。貸しましょうか？」

「マジ? 貸して」

「汚さないでくださいよ」

「洗って返すよ」

「バカじゃないの・・・」

ボニーさんとクライドさんのマニアックな性癖に、エルメスはドン引きだ。そう言えば日本の勉強をしてる時に、日本人の女は「奥ゆかしさ」が大事だとか書いてあった。こういう意味ではエルメスも、奥ゆかしいと言えば、奥ゆかしい。それがまたイイ。

宇宙人達に白い目線を投げかけるエルメスを尻目に、アルバムのページをめくると、今度はブレザーに身を包んだエルメス。

「あ、コレ高校の時の」

「周り、男だらけだな」

「工業系だったからね」

「この環境じゃ、ミナモテたんじゃん？」

「いや、それが全然でした」

「なんで？」

懐疑的な視線を投げかけるボニーさんに、エルメスがページをめくると、高校の門の前、エルメスの隣に竹刀を持った女友達と、その隣にはランドセルを背負った北都、その後ろにはエルメスパパ。

「護衛が、ついてたんですよ」

「ああ・・・」

「お父さんがいつも北都と一緒に私を学校まで迎えに来て、友達と遊びに行く時もお父さんの送迎付きでした」

「箱入り娘にも程があんな」

「お父さんヒドいんですよ。私が風邪で学校休んで、お見舞いついでにその間のプリント持ってきてくれた男の子達に「ウチのお姫様に手エ出したらブツ殺す」とか言ったらしくて、文句言われた上に休み明けから私は笑い者ですよ」

「パパ・・・どんだけ」

「しかも北都に至っては「お姉ちゃんに指一本でも触れたら、明日から毎日お前らの机に菊の花飾りに行くからな」とか言ったらしくて」

「菊の花？」

「日本では亡くなった生徒の机に菊の花を飾るの」

「北都、怖ええ」

「おかげでモテたどころか、彼氏すらも出来たことなかった・・・」  
「クラい青春送ったな」

エルメスに色々と免疫がないのは、北都とエルメスパパのせいかなんか、可哀想エルメス。アルバムの写真は今のインドの屋敷同様な男女比率が異常だ。見える範囲に女子がエルメスともう一人しかない。こんな特殊な環境でモテなかったとは、本当に暗い青春を送ったな。

高校の写真は中学校に比べてかなり多くて、それを見ていて気付いた。いつもエルメスと一緒に映る女の子。

「この子は、お前の友達か？」

「うん、この子は剣道部の主将でね、科は違ってたけど仲良かったんだ」

「へえ、綺麗な子だな」

「そうだよ。この子凄いだよ。美人で、料理上手で家庭的、奨学金で高校きてるからって言って、勉強もすごい頑張ってる3年間学年首位、剣道でもインターハイ行って、卒業後は大企業に就職したの。ホラ、買った物した商店街のホストブランド、霧島メデイカルデバイス」

「へえ、お前とは大違いだな。この子こそモテてたろ」

「それがそうでもないの。男の子にしてみたら、完璧超人過ぎて近



寄りがたかつたらしい。それにツンツンした子だったし武術やってたから、下手打つたらボコボコにされてたかもしんないし」

「ああ、なるほど。この子そんな強かつたんか」

「インターハイで、優勝した」

「全国一かよ。マジ完璧超人だな」

にっこり笑うエルメスの隣で、凜々しくクールに笑う完璧超人な友達。恐らくデコボココンビだったに違いない。きつと彼女もエルメスに振り回されたんだろう。

エルメスと同じ年の友達なら、年齢的にもきつと今頃結婚して子供がいたりするんだろう。そう言うのを考えると、やっぱり吸血鬼は可哀想な化け物だと思う。普通の家庭が手に入らないのは、普通に生きてきたヤツにとつては、きつと悲しいことだ。だからせめて、俺が生きてる間くらいはエルメスを幸せにしてやりたい、と思う。

しばらくエルメスの部屋でアルバムを見て、その後北都の部屋に入った。北都の部屋は昔のサッカー選手のポスターや、部屋の隅にサッカーボールなんか置いてあつて、男の子らしい部屋だった。

「おお、クリステイアーノ・ロナウド。懐かしい」

「北都の憧れだったんだよ」

「へえ。北都と一緒にサッカーしたかつたな」

「好きなの？」

「そりやイタリア人だからな」

「あ、そつか。できるの？」

「俺はスポーツ万能だ」

「へえ、ああでもなんか、ぽい」

エルメスが机の引き出しを開けると、引き出しの中からたくさん

のプリントが出てくる。その一つを取り出して、エルメスが笑った。

「見て、算数のテスト、100点!」

「アタマよかつたんだな」

「なんかね、私が出たから、次に私に会う時に恥ずかしくないようにって、クラブもお勉強も頑張ったんだって」

「なんて感心な奴・・・」

「本当、北都は感心だよ」

もし北都が人間のまま生きていたら、今は26歳。遺影や部屋に飾られている写真の北都は、10歳で時が止まってしまった。北都が生きていたら、今頃どんな男になっていたんだろう。

きつと普通に中学高校出て、頭もいいなら大学にも行って、就職して、仕事終わりに同僚と飲みに行ったり、休みの日はサッカーチーム作って練習したり、そういう普通のサラリーマンになってたんだろう。

つくづく、思う。「普通」であるということは、とても幸せなことだ。俺は最初から普通じゃないし、それ以上に途中から普通じゃなくなってしまう奴は、悲劇だ。

昔から憧れてた、「普通」に。今は「普通」どころか人間ですらなくなつて、いよいよ手の届かない物になってしまった。届かないからこそ、憧れると言つのもあるけど。

俺が普通の人生を送っていたら、俺は今頃、何を考えて、何をしているんだろう。

「エルメスは子供の頃、夢とかあつたか？」

「うん、小さい頃からお父さんに憧れて、私も建築士とか設計士になりたかった。当時は就職難で、なれなかったけどね」

「世知辛い世の中だな」

「そうだねえ。カイは小さい頃、憧れとか夢とかあった？」  
「ああ、両親が生きてた頃は、俺も普通に父さんに憧れてた」  
「お父さん、何してたの？」  
「消防士」  
「へえ、カッコいいね」  
「ああ、カッコよかった」

憧れは、所詮憧れだ。子供の頃の夢なんて、大概叶う事はない。その内忘れて、流れに流されて、妥協してしまうものだ。妥協した結果、殺し屋つてのは異常だとは思っけど。  
そんな事を考えていたら、エルメスが俺の手を取って笑った。

「でも、カイもカッコいいよ」  
「なにが」  
「カイはシュヴァリエでピアニストだよ。相当カッコいいよ」  
「ハハ、まあ、ある意味な」  
「私には何もないから、カイが羨ましい」  
「何言ってるんだ。俺がカッコいいのはお前のせいだ」  
「なにが？」  
「お前は俺の人生の設計士だからな」  
「なんで？」  
「お前がいなきゃ、俺はシュヴァリエにもピアニストにもなってるよ。お前は俺の生きる理由で、俺の夢、そのものだ」  
「エへ、ありがとう。嬉しい」  
「ビュービュー！ アンジェロ言うねー！」  
「あまーい！ この色男！ ドキドキしちゃうー！」  
「カイさんたら人前で、恥ずかしい人ですね」

宇宙人の存在を忘れてた。この際ジユノ様はいいとして、冷やかされんのはスゲー嫌。折角ちよつといい気分になったのに、台無しだ。

つーか、エルメスといると、たまに他人の存在を忘れてしまう。どうも視界が狭くなる。もしやクリシユナさんとエルメスが他人の目をはばからなかったのは、その末期的症状か。それはイカン。甚だ遺憾だ。気を付けよう。

相変わらず宇宙人達は、冷やかしたり茶化したりうるさい。仕舞には口が上手いだの詐欺の手口だの言いだす始末だ。俺がいつエルメスを騙した。

「アンジエロは本当に恐ろしい男だな」

「マジで。そりゃミナも引っかかるよ」

「ちょ、別に私騙されて付き合ってるわけじゃないんですけど」

「そりゃわかってるけど。アンジエロは人前でああいう事言う奴じゃないじゃん。ミナはアンジエロの掌で転がされてるって言うてんの」

「ハッ！ そうかも！ 騙された・・・」

「いや、騙してねーって」

「てことはさっきのやつは本音かよ！ おまつ、ラブラブだな！」

「ヒューヒュー！」

「すみません、いい加減にしてください」

思わずツツコんだら、また宇宙人達が騒ぎ出す。うるさい。そして結構腹立つ。

でも、本当なんだから、しょうがねーじゃん。子供の頃の夢は叶わないもんだけど、今は心から叶えたい夢ができた。その為になら

何でもするぞ。

エルメスが、笑ってくれるなら。

海外出張報告 3

部屋から出て、一旦エルメスの部屋に戻ってから階下に降りると、やっこのことで茶にありつけたらしく、エルメスの両親は土産の煎餅を頬張っていた。

「ねえ、このアルバム持って帰ってもいい？」

「ああ、いいぞ」

「ありがとう」

再びみんなでソファに腰かけると、クライドさんがニコニコしながら両親に口を開く。

「実は、もう一つ報むぐつ・・・フガフガ」

「ちょっと黙ってください」

「ムガモゴモゴ・・・ペロ」

「ギヤア！ 舐めんなー！」

慌ててクライドさんの口を塞ぐと、モゴモゴ引きはがそうとするクライドさんに最低な反撃をされた。隣でボニーさんが俺に「なにすんの！」とわめきたてるので、二人にコッソリと耳打ち。

「婚約の件は、内緒にしてください」

「なんで？」

「さつき俺、殺し屋って話したじゃないですか。普通自分の娘が、元とはいえ殺し屋と結婚するって聞いて喜ぶ人はいないでしょ」

「ええ？ そんなことないって」

「ありますよ。それに、俺その内死ぬんですよ。次にエルメスが両親と再会した時に、俺が死んだって聞かされたら、結婚した意味なくない！？ って話になるじゃないですか。無駄にバツつけやがって、みたいな」

「もうついてんじやん」

「尚更ですよ。少なくともエルメスの両親には、キレイなエルメスのままでいさせてやりたいんです」

「もう純潔汚されてんじやん」

「いちいち反論しないでください！ とにかくそう言う事なんで、この件は口外しないように。いいですね？」

「もう、しよーがないな」

二人が了解の意志を示してくれて、クライドさんの口から手を離すと、掌がベチヨベチヨしてたから、クライドさんの肩で拭いた。

そんな俺達に両親は「なにを相談してるんだ」とあからさまな視線を向ける。それに慌ててエルメスが訂正。

「あ、な、なんでもないよ。そろそろ今日は帰ろうかな、夜も遅いし」

「そうか。日本にはいつまでいるんだ？」

「とりあえず一週間くらいはいいよと思うてるよ。私達昼間も起きていられるから、時間が空いたらここに連絡頂戴」

エルメスがバッグを漁ってメモを渡し、それを覗き込んだ両親は

目を丸くしてエルメスを覗き込んだ。

「ガーディニア・プレジデント・ホテルのロイヤルスイート!？」

「お前ここ、政府要人御用達のホテルだぞ」

「うん、カイがとってくれたの。折角だから見学においでよ」

「そうね! 普段行ける様なところじゃないものね」

「よくとれたなあ」

「金と権力にモノを言わせてみた」

「お前、金と権力なんて持ってたのか・・・」

金は持つてるが、正確には他人の権力だ。サービス業最先進国日本。どうせなら高級ホテルに泊まらせてやりたいと思っただけで、このホテル。調べてみると1年先まで予約がいっぱいだった。で、山姫さんに相談してみた。

「ああ、いいわよ。このホテル、ウチの系列だからなんとかしてあげるわ」

まさか山姫さんとの系列企業だとは思わなかった。各国政府御用達は山姫さんも同様だ。山姫さんほど権力を持った人もそうそういない。言葉の通りすぐに何とかしてくれて、一等室を確保できた。持つべきものは金と権力と友達だ。お陰様でスゲーVIP待遇。

「お待ちしておりました。ペンドラゴン伯爵家の皆様でいらっしゃいますね。わたくし、支配人の松本と申します。ご入用の際はわたくしになんなりとご用命ください」

支配人が先陣を切つての申し出だ。こんな待遇は初だ。さすが、権力ツ! 俺も権力欲しい。



ちなみにこのペンドラゴン伯爵家、役どころはエルメスが伯爵家のお嬢様、ボニーさんとクライドさんはいとこ夫婦の子爵家ってことにして、俺がエルメスの執事で、ジユノ様が家庭教師。まあ大体貴族の家ならこんなんで妥当だ。それを聞いた両親はビツクリ。

「は、伯爵？ 貴族？」

「うん、龍さんが伯爵って名乗ってたから。あの人本当は王族らしいけど」

「王族!？」

「うん、生前は東欧のある国の王様だったんだって。でも今王族って言っても、ちょっとアレだし。だから伯爵の方で私達も名乗ってる」

「はあ・・・ジユノさんも侯爵だと言うし、すごいなあ、お前の周りは」

「前はもつとすごかったよ、他に王族がもう一人と、伯爵夫人もいたし、枢機卿もいたから」

「なんて雅で豪華な面子・・・吸血鬼は権力者のなれの果てなのかしら」

「かもね。私は普通だけど」

そう、良く考えてみたら昔のエルメスの周りはそうそうたるメンバーだ。それが今や天地逆転だ。

エルメスの周りは悪魔と、ヴァチカンの殺し屋と、アメリカの敵とまで呼ばれた強盗犯と、インドのスラムドッグ盗賊団だ。更に付け加えると、ベトナムのマフィア。何この犯罪者集団。取り巻く環境が10年前と大違いじゃねーか。マジ平和と程遠い。

現在の環境に辟易して小さく溜息を吐いていたら、エルメスが荷物を持って立ち上がった。

「フロントで「伯爵家の母方の親戚」って言えば通して貰えるように頼むから、来る前に電話してね」

「ああ、わかった。気をつけて帰るんだぞ」

「うん、ありがとう」

みんなで立ち上がって、玄関先まで両親が見送ってくれた。

「今日は夜遅くまでごめんね。ありがとう」

「いや、また来るといい。ここも、お前の家なんだから」

「うん、ありがとう」

「カイさん、御面倒おかけしますけど、ミナをよろしく願いますね」

「かしこまりました」

背を向けてその場から立ち去るも、エルメスは何度も振り向いては手を振って、両親もいつまでもエルメスを見送っていた。

ホテルに戻ると、支配人自ら恭しくお出迎え。マジVIP待遇。

が、キャスティング上俺はここでも執事のふりだ。

「松本支配人、一つお伺いしたいことがあるのですが」

「は、なんなりと」

「松本支配人は長年こちらにお勤めかと拝察いたしますが、外国語も堪能の様にお見受けします。何か国語お話しに？」

「お褒めに与かり光栄です。最低限、当ホテルをよく御利用いただいておりますお客様の国語は、修めさせていただいております。英語、中国語、ドイツ語、フランス語、イタリア語は、浅学ながらお話しできる程度には。ロシア語は未だ勉強中の身です」

「左様ですか、素晴らしいですね。大抵は通訳を同伴してくるでしょうに、支配人の鑑でいらっしやる」

「ありがとうございます」

「フーことは、この人の前で内緒話をするときはフランス語はダメだな。スペイン語にチェンジだ。」

「フーか、さすがは特級ホテルの支配人、マジスゲエ。この人も完璧超人だ。人間なのにこんだけ外国語を操れるなんて、大したもんだ。」

荷物を置くと、宇宙人達は急に観光に行きたいと言い出す。こんな時間にどこに行く気だよ、と思ったが、日本は夜中でも観光名所はあるそうだ。

「歌舞伎町行こうぜ！ 歌舞伎町！」

「カブキ町？ そのブロックはなにがあるんですか？」

「不夜城！」

「不夜城？」

「行きやわかるって！ アンジエロお前絶対気に入る。ハマったら抜け出せなくなるぜ」

「・・・なんか怖いんですけど」

「私の方が怖いよ！ やめてね！」

「いや、なにが？」

「いいから行こうぜ！ アンジエロ、全財産持って来いよ！」

「全財産！？」

フーわけで到着した歌舞伎町。何フーかこう、節操がないほどに煌びやかな繁華街。深夜だと言うのになんだこの人数。超賑わってる。

スーツを着た男と派手なドレスを着た女と客で溢れかえってる。もしやここって、夜の街？

「キャバクラ行こうぜ！ キャバクラ！」

やっぱりそうか。キャバクラ、ボニーさんはいいのか？ 疑問に思っただけボニーさんを覗いて見ると、ボニーさんも案外ノリノリだ。それにさらに疑問を感じたけど、エルメスも何故か普通だ。疑問は募るばかりだ。

まあいいか、と着いて行ったキャバクラ。なんつーかもう、眩しい。

「いらつしやいませ！」

「わあ、外人さんだ！ 超カッコイイ！」

「女の人も超美人！ あ、女の子は日本人？」

「そうですよ」

「かーわーいーい！」

「5名様入りまーす！」

いきなりのヨイショだ。俺圧倒されて一言もしゃべってない。席に着いてからも圧倒だ。

隣に座った女がご丁寧におしほりを差し出す。それを受け取ると今度は名刺を差し出してきた。

「初めまして！ ルナっていいです。よろしく！」

「あ、どうも。カイです」

「やだ、カイさん声も超カッコイイ！ 何人？」

「イタリア人」

「イタリア人！？ でも日本語超上手！ お仕事何してるんですかあ？」

「執事でピアニスト」

「執事でピアニスト！？ すごい！ 執事って、もしかしてその女の子の？ あ、ルナです、よろしくー」

「あ、ミナです。よろしく。そう、私の執事で、専属ピアニストです」

「ミナちゃんっていうの？ 可愛い！ いいなあ、こんなカッコイイ人が執事で専属のピアニストなんて、超羨ましい！」

「ありがとう」

「ミナちゃんって、お嬢様？」

「一応」

「やっぱり！ なんか品があるもん！ 可愛いし、やっぱりお嬢様って違うね！」

恐ろしいかな日本のキャバクラ。まさか女までチャホヤするとは、外国のキャバクラとは格が違う。

煙草を取り出すと、すかさず火が差し出されて、手を付けていないグラスは、頻繁に汗が拭われる。

こっちがビックリするほどの配慮に思わずエルメスに振り向いたら、何故か得意げだ。

「初めて来たけど、日本のキャバクラって、スゲーな」

「でしょ？ 歌舞伎町は日本が世界に発信する、サービス業の最高峰だよ」

「やだ！ ミナちゃん超嬉しいこと言ってくれし！」

「いや、でも確かに。さすがは気配り大国、日本だな。外国のキャバ嬢はここまで客に気遣いしねえし、大したもんだ」

「カイさん、カッコいい上に優しい！ 二人のお陰で、超やる気出てきた！ もうあたし今日は超頑張っちゃう！」

「アハハ、嬉しい。ありがとう」

なんつーか、プロだ。人を喜ばせるプロだな。キャバクラでこの

レベル。会員制の高級クラブなんかに行ったら、一体どんな待遇が待ってたんだ。日本人、スゲエ。

感心してたら、ルナがメニュー表を差し出した。

「二人は何飲みますー?」

「いや、俺らは・・・」

「じゃあルナさんにピンドン!」

「マージー!? いいの!?!」

「いいよー」

「うわあ! ミナちゃん優しい! 超嬉しい! お願いしまーす!

ピンドン入りまーす!」

「はい、ピンドン入りまーす!」

なんか、祭りが始まった。どうでもいいけど、このルナって女、テンション高けえ。更にどうでもいいけど、あのチャラ男3兄弟が日本のキャバクラ来たらビックリすんだろうな。絶対ハマる。毎晩繰り出すな。

現れたピンドンに俺らは手を付けることなく、ルナや他の女たちに飲ませまくる。その後も高い酒ばっか頼んで、女どもに飲ませまくる。そのせいか、徐々に俺らのテーブルに着く女の人数が増えて、交代したり。「こいつらしいカモだ」と悟ったらしい。それでも唯一交代しないザル女、ルナ。

「やっぱお嬢様って違うよ、庶民と違ってケチケチしてなくて、優しくて大らかで! やっぱ格が違うわ!」

「そんな褒められた者じゃないよ」

「そんなことないって! ていうかなんで飲まないの?」

「私達下戸なの」

「ノンアル持ってこよつか？」

「いいよ、ルナさん達に美味しいお酒を飲んでほしいの。たまには、はっちやければいいじゃん」

「マジ優し！ ミナちゃん天使！？ 天使なの！？」

「違うよー」

違う、吸血鬼だ。が、そんな事知る由もないキャバ嬢たちはフィ  
ーヴァーしまくる。しばらくすると、着物の女が出てきて、ルナが  
席を空けると、その隣に座った。

「ママだよ」

「初めまして、ようこそ・・・」

自己紹介を始めようとしたんだろうが、ママは急に言葉を止めて  
エルメスを見つめる。エルメスも固まって、すぐに思い出したよう  
な顔をして見せた。

「もしかして、早苗ちゃん？」

「やっぱりミナちゃん！？ うわ！ 久しぶり！」

「久しぶり！ 元気だった？」

「ミナちゃんこそ！ 病気大丈夫なの！？」

「うん、もう治ったよ。あの時急にお店やめちゃってごめんね」

「本当心配したよ！ ていうか、ミナちゃんどんなアンチエイジン  
グしてんの！？ 変わらなすぎなんだけど！」

「あ、えっと、金にモノを言わせたアンチエイジングだよ！」

どうやら知り合いだったようだ。店って、もしかエルメスも日本  
にいた頃キャバクラで働いていたのか・・・？ 思わず覗き込んだら  
エルメスが視線に気づいた。

「あ、ママは早苗ちゃんって言って、私が日本にいた頃に居酒屋で働いてた時のバイト仲間だったの」

「ああ、そうなのか」

「え？ ミナちゃんお嬢様じゃないの？」

「正確には、養子になった、みたいなの」

「へえ、え？ ていうか、ママの昔の友達って、ミナちゃん何歳？」

「ミナちゃんは私の2歳年上なのよ」

「ええ！？ じゃあ37歳！？ 見えなーい！ 20歳くらいかと思

った！ マジ半端ないアンチエイジングしてるね！」

「えへへ」

確かにエルメスが吸血鬼化したのは19歳だから、ルナの目は正しいと言えば正しい。俺ら西洋人には14・5歳くらいに見えるけどな。

あれ？ そう考えると、もしかして俺はやっぱりロリコンなのか？ いや、そんなはずはない。たまたまだ。

うつすら悩んでいたら、早苗がエルメスとはしゃぎ始める。

「本当懐かしいね」

「ねー。それにしても早苗ちゃん、こんな立派なお店のママになって、すごいね」

「ミナちゃんこそ、お金持ちの養子って何よ。意味わかんないよ」

「ああ、日本じゃ病気治せなくて、海外の病院で治療して、海外あちこちフラフラしてたんだけど、まあ色々」

「海外いたんだ！ へえー。え、でも英語とか喋れなかったじゃん勉強したんだよ。今は10か国語くらい話せるよ」

「マジ！？ すごい！ いや、ていうか今金持ちならいいんだろっけど、ミナちゃんたちのテーブルの料金がすごいことになってるよ」

「だろっねえ」



「大丈夫なの？」  
「ちなみに今いくら？」  
「90万ちよつと」  
「マジ・・・カイ、大丈夫？」  
「余裕。クライドさんが全財産って言うから、800万持ってきた」  
「800万!? すごー!」  
「持ってたき過ぎだよ・・・」  
「足りねえよりはいいだろ」  
「まあね」

俺らの所持金を聞いて再びキャバ嬢フィーバー。ボニーさんとクライドさんもめっちゃハイテンション。  
もちろんそれでも足りると思っけど、とりあえずシャンパンタワーを初めて見て、ちよつと引いた。

「てゆうかー、さっきから思ってたんだけどお、カイさんって執事の割にミナちゃんに態度デカイよね。ウケるんだけど」  
「あー、いんだよ、こいつだから」  
「どついう意味よ」  
「そついう意味だ」  
「意味わかんない!」  
「わかれよ、バカ」  
「マジウケるー! カイさんってドS!」  
「まーな」  
「褒めてないし!」

ルナにそうツッコまれたが、褒め言葉じゃなかったらなんだよ。俺には褒め言葉だ。

隣でエルメスは憤慨していたが、酒のせいかな笑い上戸になったル

ナに溜息だ。で、早苗に相手を切り替えた。

「早苗ちゃん、結婚は？」

「したよ。旦那はメイド喫茶の店長」

「マジ？　なんか早苗ちゃん楽しそう。子供は？」

「いるよ、中1と小5」

「そんなデカイ子がいるんだ！　早苗ちゃんこそ見えないよ」

「あはは、褒めてくれたから1万まけたげる。ミナちゃんは？」

「私は婚約中」

「へえ、てゆうか、今まで未婚だったの？」

「んにゃ、バツイチ」

「そーなんだ、ま、人生色々だよ」

「ま、ね」

「婚約者はどんな人？」

「こんな人」

で、指差される俺。視線を注がれる俺。なぜか笑われる俺。

「なに笑ってんだよ」

「だって、恋人同志でキャバクラくるなんて、ウケるー！」

「それはツレが行きてーつつたからだよ」

「てゆうか、ミナちゃんとカイさんってなんか面白そうだよ。三

ナちゃん、いつも負けてそう」

「ま、確かにあんまり勝てたことない」

「バカ言っつな。一度もねーだろ」

「マジドSだね。超俺様じゃん」

「まーな」

「だから褒めてないって！」

ルナに再び突っ込まれた瞬間、少し離れたテーブルから小さく悲鳴が聞こえて、キャバ嬢が早苗のところに走ってきた。

「ママ、お客様が暴れてるの、どうしよう」

「わかった、ミナちゃん、ちょっとごめんね」

早苗が歩いていった方に目をやると、ガラの悪い若い男が数人暴れている。それをみてルナは溜息だ。

「たまにいるんだよね、なんか勘違いしてるやつ。いい迷惑だよ」

「男数人に早苗ちゃん一人で大丈夫かな、お酒入ってるみたいだし」

「ま、それもママの仕事なんだけど・・・」

再び早苗に視線を戻すと、男達の話聞いて頭を下げる早苗。謝罪したあと幾分か男達が大人しくなったところで、早苗がたしなめていた。

「あー！」

「あー！ あいつらー！」

再び激昂した男達は早苗を突き飛ばして、バランスを崩した早苗はその場に倒れ込んだ。すぐに近くにいたキャバ嬢が駆け寄るも、その子も突き飛ばされて、再び早苗に手を挙げようと男が右手を振り降ろした瞬間、その手は動きを止めた。

「あんだ、男の癖に女に手をあげるなんて、どーゆー教育受けてんのよ」

殴り掛かる男の手をいとも簡単に受け止めて、男を睨み上げるエ

ルメス。いつの間にやら止めに入っていたようだ。こうなったらエルメスは手が付けられない。

「オーイ、殺すなよ」

「うん、久しぶりだから、自信ないけど」

「早苗に迷惑掛かるから、手加減しろ」

「わかった」

会話しながらも男は「ざげんな！」と今度は左手でエルメスに殴り掛かるも、それも容易く防御。俺に返事をしたエルメスはやつとこのことで男に向いて、笑った。

「大人しく金を払って店を出ると、痛い目に遭った上に法外な金を取られて店を出るの、どっちがいい？」

「ああ！？ バカかテメエは！ 何言つて・・・っ！」

「さっさと決めてよ」

両腕を掴まれたままエルメスに怒鳴りつけた男は、一瞬で手を離して振り降ろされた手刀に、その場に崩れ落ちた。それを見下ろして男を跨いだエルメスは、席から立ち上がる男達を睨みつけ、歩みよる。

「あんだ達は、どうする？ 大人しく私の言う事聞いとけば、痛い目見なくて済むけど？」

「ああ？ 調子乗ってんじゃねーぞ。まぐれでいい気になんな」

「んだよこの店、最悪だな」

「マジ腹立つ、このアマ。殺すぞ」

男達の様子を見渡して俯いたエルメスは大きく溜息を吐いて、再び顔を上げた。

「はあ、しょうがないな。コレだからアタマ悪いチンピラって嫌いなんだよね。死にたい奴からかかって来れば？」

「！ ミナちゃん！」

エルメスの挑発に乗ったバカなチンピラたちは、手前の奴から順にエルメスに殴り掛かって行った。それに早苗が顔色を変えた瞬間、チンピラは宙を舞って床に叩きつけられた。

俺らの目からしたら、遅すぎる拳を軽々躲したエルメスは、そのまま懐に入り勢いを利用して男を投げ飛ばすと、男の体が降下し始めた瞬間に踵落としをキメて地面に叩きつけた。マジ容赦ねえ。

「おい、殺してねーだろうな」

「・・・多分」

どうも自信なさげだ。仕方なく俺も席を立てて床に伸びている男の所に行くと、まあとりあえず無事なようだった。

他の奴らはエルメスの実力を目の当たりにして、動きを止めてしまったが、一人がエルメスに飛び掛かろうとしたのを蹴っ飛ばすと、壁に激突して沈黙。勿論手加減した。

「ガキが。俺の女に気安く触んじゃねーよ」

「カイ、カツコイイ」

「まーな。おいガキども、コイツのいう事聞いといた方がいいぜ。マジで死んでも知らねえぞ。コイツは手加減知らねえからな」

「カイに言われたくないよ！　すぐ撃つくせに！」

「最近は何も撃ってねーだろ。お前だつてすぐ俺を骨折させようとするじゃねーか」

「それは自業自得じゃん！　ていうか撃たれるのに比べたら、骨の一本や二本、大したことないじゃん！」

「バカ言え。スゲエ痛てえんだぞ」

「撃たれた方がもつと痛いよ！ 私一回死にかけたじゃん！」

「う、まあ、あん時は悪かったけど。だから俺最近撃つてねーって  
言つてんだろ。最近俺がお前になんかしたことあったか？」

「………ない」

「だろ？ 普段から俺に殴る蹴るの暴行を加えるお前と違って、俺  
は紳士だからな」

「どこが！？ よく言つよ！」

「あの、ちよつと二人とも、アイツら逃げちやう！」

「ん？」

「あ！」

うっかりエルメスと口論に夢中になつていたら、男達は伸びた仲間を見捨ててその場から逃走しようとしていた。すぐに追いかけてよ  
うとするエルメスを引き留めた瞬間、男達はその場に崩れ落ちて、  
その代りにボニーさんとクライドさんがニヤニヤしながらそこに立  
つていた。

「お前ら遊び過ぎ」

「本当だよ。二人揃つてポケットとしてんだから」

「あ、すいません。殺してませんよね？」

「大丈夫だよー」

結局男達は全員気絶してしまったので、クライドさんが男達の服  
をゴソゴソ漁つて財布を抜き取った。

「うわ！ コイツ1万しか持つてねえぞ！」

「最低……だから言いがかり付けたんじゃない」

「あわよくば店から金とろつて魂胆か。みみっちい詐欺だな」

「コイツらどうするよ？」

「うーん、警察は面倒くさいですね」

「……あ！ いい事思いついた！」

「何？ ……ああ、それいいな。面白れえ。それやろう」

すぐ戻るから、と言い残して男どもを担いで店を出たあと、近くの公園へ。エルメスと俺とジュノ様で男達を見張っていると、ボニーさんとクライドさんが買い物袋を提げて戻ってきた。

「ミナに言われた物、ドンキで買ってきたよ。画用紙とガムテープと赤のインクと筆」

「ありがとうございます！」

袋を開けて早速みんなで作業に取り掛かる。まずは男達をガムテープで縛り上げて、鉄棒に固定。その後エルメスが画用紙一枚に一字ずつ真っ赤なインクを付けた太い筆で殴り書き。それを男達に貼りつけた。

「どうよ」

「あっはっは！ 最高！」

「マジお前容赦ねえな」

「ミナマジウケる」

男達の張り紙、顔の前にはこうだ。『社会のゴミに天誅！』で、腰にはこう『正義の味方、見参！』バカ丸出した。どっちが？ どちらも。

これだけじゃ物足りないっつーことで、みんなで好きに落書き。

「できた」

「見せて！ つあはは！ ヒドイ！」

「なにになに？」「私は豚です。薄汚ねえ豚です」「マジヒドイね、アンジェロ」

「私も出来ましたよ」

「なんて書いたんですか？うわ、これはスゲエ」

「さすがジユノ様。「こっに見えて俺、最強だから」「コイツが一番可哀想」

「エルメスさんはなんて書いたんですか？」

「私は、はい」

「誰か先週のサザエさん、録画してない？」って意味わかんねーし！クライドさんは？」

「俺は「このシュークリーム食べたい」どうよ」

「意味わかんねーしどうでもいい！ボニーさんは？」

「じゃーん！それは私のおいなりさんだ！」「」

「全然意味わかんねーし！微妙につながってるし！」

夜の公園で化け物大はしゃぎ。みんなで思い思いに落書きして、最後に写真を撮ってから、軽く打ち合わせをして店に戻った。店に戻ってその画像を早苗やキャバ嬢たちに見せた。

「キャハハハハハ！なにこれ！」

「ひゃー、マジウケる」

「あースッキリした。ざまあみる！」

「マジ可笑しい！最高！」

キャバ嬢軍団、大爆笑。ハアハア言いながら手を叩いて大笑いだ。頑張った甲斐があった。

男達を追い払ってくれたお礼だって事になって、なじみの客と俺



らだけ残して店を閉めると、キャバ嬢たちは一斉に俺らの周りに集まってきた。

「ていうか、ミナちゃんも皆さんもすごいカッコよかった！」

「マジ強いし！ その小さな体のどっからあんな力が！？」

この質問は当然想定内だ。日本で病気になったと言って仕事を辞めたエルメスが、アホみたいな戦闘マシーンになって帰ってきたら誰だってビックリする。勿論、公園での打ち合わせはこのための口裏合わせだ。

「実はねえ、海外で治療した後、体力つけるために格闘技始めたんだあ」

「あ、それで！」

「うん、元々武術やってる身だったし、意外と向いてたみたい」

「そう言えば剣道やってたって言ってたもんね！ なるほどー。でも、カイさん達はなんで強いの？」

「俺は元々ボディーガードでつけられたから。その点では俺いらなけれど」

「あはは、まああんだけミナちゃん強ければ、いらないよね。連れの人たちは？」

「あたし達はただのケンカ慣れ！」

「俺ら元ギャングだし」

「ああ、なるほど。ていうかギャングとお嬢様が友達ってどういう繋がりなの」

「養父が面白そうって言って拾ってきた」

「ミナちゃんの養父の人、不思議な人だね」

「うん、謎の男なの」

ミステリー野郎アーサー。アンタはどこに行っても謎の男扱いだ。

ぶつちやけ、アンタの事を説明しろと言われても、微妙にどう説明したらいいかわからん。吸血鬼の真祖で、やな奴。以上だ。

と、考えていたら、疑問が湧いてきた。山姫さんは休眠期はその吸血鬼の力に比例すると言っていた。階級は山姫さんの方が上だから、山姫さんより長いことはありえないと言っていた。それは、本当にそうなんだろうか。

あの戦争での有様、アーサーのラグナロク解放時の血の量はとんでもねえ物だった。まるでダムが決壊したんじゃないやねえかってほどの血の量。

もしアーサーが山姫さんの階級と言う差を超えて、山姫さんを凌ぐほどの力を有していたとしたら、本当に数年以内に帰ってくるんだろうか。

いや、それ以前に本当に帰ってくるんだろうか。あの時、アーサーは明らかに満身創痍だった。ジュリオ様の攻撃に立っていられずに、地に膝をついてしまったほどに。死ぬ直前に休眠期に入ったら、それはセーフ？ それとも・・・

もしそうなら、エルメスはどうなるんだ。待ち続けているのに、帰ってくるって思ってるのに、帰ってこなかったら？

そうだ、よく考えてみたら帰ってくると言う証言はあっても、保証なんてない。あの状況じゃ尚更だ。

いや、ダメだ。やめよう。悪い方に考えるのは、よそう。アーサーが帰ってくると言うのなら、帰ってくるはずだ。あの男は約束は破らない。

重傷を負って帰還が遅れるという事はあるかもしれない。でも、その内必ず帰ってくるはずだ。それまで、俺はちゃんと役目を果たせばいい。それで、いい。

「カイ？ どうしたの？」  
「あ、いや、なんでもない」  
「また何か考え事してたの？」  
「いや、本当に何でもない」

エルメスに声をかけられて顔を上げると、酔っぱらったキャバ嬢たちと大はしやぎする宇宙人達が視界に入ってくる。こんな席で考える事じゃなかったな、と思い直して、折角だし俺も初日本キャバクラを愉しませてもらう事にした。

「ねーねー、カイさんはさあ、ミナちゃんのどんどこが好きなの？」

「あ？ あー・・・いや、わからん」

「ああ、わかった。全部でしょ」

「いや、全部じゃねーけど」

「でもベタ惚れしてるんでしょ」

「してねーよ」

「でもさっきの「俺の女に気安く触るな」とか言っつて。そんなの言ってる人初めて見たもん」

「ああ、アレカツコよかった。あたしもそんな風に守られたい・・・っ！」

「別に。俺は自分のモンを他人に触られんのがキライなだけ」

「独占欲！ カイさん独占王じゃん」

「まーな」

「いや、褒めてないって！」

どうやら独占王も褒め言葉ではなかったようだ。隣でエルメスも

ウンウン頷いてる。やっぱり褒め言葉じゃないのか。

「ねーねー、カイさんとミナちゃんはさあ、第一印象どんなだった？」

「俺はアタマ悪そうだと思った」

「私は怖い人だと思った。ていうか最悪だった」

「ああ、まあ、だろうな」

「カイさん、なにしたの」

「初対面で撃たれた」

「はあ！？ 撃たれた！？ なんで!？」

「・・・さあ」

「なんでだろうなあ」

「カイさん、怖っ！ ドSどころか鬼畜じゃん！」

「ていうか、自分撃った人を好きになれるミナちゃんがすごいわ」

「えへへ」

「いや、褒めてないからね!？」

どうやら日本のキャバクラはヨイシヨして褒めちぎるだけじゃないようだ。随所で貶される。まあ面白いし、いいけど。

しばらくお祭り騒ぎをした後、時計を見たらまさかの午前6時。さすがにもうお開きって事になって、早苗に会計を頼んだ。

「はい、お願いします」

差し出された金額の書かれた用紙を見て、エルメスは額に手をやった。

「ウソだ、250万。あり得ない」

「うん、マジあり得ないよね。連れの人達がウチらに飲ませまくる

から」

「まあ、迷惑もかけたし払うけど」

「まいどありっ！」

その場で早苗に250万渡して店を出ると、空は白んでいた。店先まで見送りに出てきてくれたキャバ嬢軍団は、化粧崩れしまくっている。

「今日は楽しかったよ、早苗ちゃんありがとう！」

「あたしも楽しかったよ！ また日本来た時は遊び来てよ！」

「うん！ 絶対来る！ 今度はもっといっぱい連れて来るから！」

「連れまだいるの？」

「うん、後10人くらい」

「マジ？ 大所帯だね。楽しみにしてる」

「ありがとう。じゃーね！」

「うん、気をつけてね！」

そう言った早苗がキャバ嬢たちを見渡すと、キャバ嬢たちは一斉に笑顔になってお辞儀した。

『ありがとうございましたー！！』

日本のサービス業の接客スキルは、素晴らしい。

## 海外出張報告 4

クリスマスは嫌いだけど、冬は、好きだ。

空が白む朝の歌舞伎町。11月26日。もうすぐ12月で、日本の首都、東清京とうせいきやうの朝は冷え込む。吐く息の白さにエルメスは「漫画の吹き出しみたい」と笑って、小さく身を震わせて両腕で体を抱きしめる。

吸血鬼にとっては、暑さも寒さも大して影響はない。それなりに季節に準じた格好をしてれば、大概は体感温度26度前後に感じるから年中快適に過ごせるんだが、女と言うのはどうも薄着が好きなようだ。

「バカ、お前もう冬なのに、吸血鬼だからって薄着しすぎだ」

薄手のブラウス一枚しか着ていなかったエルメスの肩にジャケットを脱いでかけてやると、エルメスはその襟を握ってにつこり笑う。

「あつたかい」

「それ着てる」

「ありがとう」

礼を言って嬉しそうに笑ったエルメスは、俺のジャケットに袖を

通す。体格が全然違うから勿論ブカブカで、余った袖を見せてきて子供みたいに笑っている。その様子がなんか可笑しくて、可愛くて、嬉しいような気分になって、思わずハグ。

したい衝動に駆られたけど、ボニーさんとクライドさんがニヤニヤしてたから我慢した。

「アンジェロ、アンタ優しいじゃん。本当やること二枚目だね」

「そうですね。ついでに訂正ですが、やることも、です」

「マジお前、謙遜は・・・？」

「謙遜？ なんですかそれ、美味いんですか」

「でも、こういう優しいカいは本当にカッコいいから、大好き！」

「・・・」

「プツ、アンジェロ照れてるし！」

「照れてません」

「ウソつけ。ミナ、もっと言ってやれ！」

「煽らないでください！」

しばらく歩くと、件のチンピラ拘束公園の前に通りかかった。そういえば、アイツらどうなったんだろう、とみんなでワクワクしながら公園を覗いて見ると、朝の散歩中だったと思われる年寄りたちが、チンピラたちに「南無阿弥陀仏・・・」と手を合わせていた。

それを見て俺達は声を殺して爆笑して、どうなるのかしばらく様子を見守ることにした。

「つぶえつくしよーい！！！」

「寒っ！」

「なんだこの紙！ 前みえねー！」

「つか動けねーぞ！ どこだここ！？」

「チクシヨー！ あの外人ども！」

少しすると寒さで目を覚まして、状況が把握できずに混乱している。目の前の天誅の張り紙が邪魔なようだ。死んでも思っていたのか、年寄りたちはチンピラが起きたことに驚いていた。すると年寄りの一人が、チンピラに歩み寄っていく。

「あんたら、天上様てんじょうさまになにしたんね？　てるりすとかね？」

「天上！？　天皇になんて逆らつてねーし！」

「でも、天誅つて書いてあるけどねえ」

「天誅！？　アイツら外人のくせに、なんでそんな言葉知つてんだ！」

「外人？　あんたら外人ね？　ああ、だからやねえ。故郷が恋しくなつたんやね。ちよつと待つときなさい」

「は！？　ちよ、待てババア！　いや、おばあちゃん、助けて！」

耳が遠いのか、ババアはそのまま公園から出て行って、遠ざかる足音にチンピラたちはひどく落胆した。待つときなさいと言つたらババアは戻ってくるだろうと判断して、俺らも隠れて待っていると、まんまとババアは戻ってきた。

「ハイ、これ置いとくから食べなさいね」

「は？」

「しゅーくりーむ食べたいんよね？」

「は？」

「みんなの分あるから、ケンカせんようにね」

「は？　え、ちよ、ババア！　おばあちゃん、おばあちゃんって！  
助けてエエエエ！」



ババアはコンビニの紙袋をチンピラの足元に置いて、公園から出て行ってしまった。それを見て俺らはとうとう大爆笑。

「ぎゃはははは！ マジウケる」

「アハハハ、クライドさんがシュークリーム食べたいとか書くから！」

「ハハハ、あのババアが歌舞伎町最強だな」  
「間違いないよ、あはははは！」

ひとしきり大爆笑した後、チンピラたちはそのまま放置して公園を出てホテルに戻ることにした。

歌舞伎町を後にして歩く、朝焼けの街。徐々に日が差してきた街並みに、ボニーさんとクライドさんは感嘆の声を上げる。

「スゲエ、スゲエ！ 太陽だ！」

「すごい、綺麗！ 眩しい！」

俺の時もそうだったけど、俺以上に長い年月吸血鬼やってた二人足を止めて顔を覗かせる太陽に見入って、ずっとずっと眺めている。

「すごい、100年ぶりだ」

「もう二度と見ることもなんか出来ないって思ったのに」

「やっぱり太陽って、いいな」

「うん、いいね」

食い入るように太陽を見つめる二人は、その表情を変えることなく、ポタリと涙を零した。そんな二人をエルメスは嬉しそうに見つめている。強化した張本人ジユノ様は、無関心と言った有様だけ。それでちよつと疑問が湧いた。

「ジユノ様は太陽とか別に平気ですか」

「なにがどうダメなのかもわかりませんね」

「普通に飯も食えますよね」

「ええ、あくまで嗜好品として、ですが」

「寝てます？」

「睡眠は必要としません」

「十字架は？」

「あんなもの、ただの金属です」

「結界や呪法は？」

「術者のレベルに寄りますが、大概、あつて無いに等しいですね」

「じゃあジユノ様無敵じゃないですか」

「無敵ではありませんよ。敵は、います」

「え？ ジユノ様にも敵になるような奴いるんですか」

「ええ、私の敵は、神と人間です」

「神はわかりますけど、人間が？ ジユノ様に敵わないでしょ」

「意外と、そうでもありませんよ」

ジユノ様の発言は俄かには信じがたい。俺らにですら、人間は敵じゃない。数の問題だとすればわからなくもねーけど、そう言う事だろうか。

いや、でもそう言えば大昔にフランス人の退魔師が、ジユノ様を追い払ったと聞いた。それほどの能力を持つ術者なら、敵になり得るって事か。

「カイさん、人間の最大の武器をご存知ですか？」

「最大の武器・・・なんででしょう。数、ですか」

「それは最大と言うには少々役不足ですね。私の思う最大の武器は「足掻き」です。諦めの悪さと言ってもいいでしょうけど」

「足掻き、ですか。でも、いくら足掻いても無駄なことはあるでしょう」

「ええ、それはもちろんあります。でも、人の足掻きが引き起こす強力な精神の波は、時に奇跡を起こすんですよ」

「そういうものですか？」

「私は3500年生きてますが、人がこれほど繁栄し、生きながらえてきたのは、諦めを踏破してきたから。人の足を止めるのは絶望ではなく、諦めです。人の足を進めるのは希望ではなく、努力です。人を強くするのは、そうあるうとする意志です。カイさん、あなたはまだ若い。あなたの知らないことが、この世の中にはまだまだたくさんありますよ」

そう言ったジユノ様は微笑んでエルメスに視線を向ける。まるで「彼女のようにね」とでも言いたいように。エルメスは自分の力で立ち直った。それはエルメスが強いからだと思っていたけど、強くあるうとする意志の上に努力があったから、そういうことだろうか。

「カイさん、あなたは諦めてしまっているようですが、エルメスさんは諦めていないようです」

「なんのことですか？」

「あなたの、命を救う事を」

「そんなこと、今更どうしようもないのに・・・」

「ええ、どうしようもありません。ですが、諦めていないようです。呆れかえるほどの足掻きの果てにどんな結果が待っているのか、私

も楽しみですね」

そう言ったジュノ様がポニーさんとクライドさんの許に歩み寄ると、二人はジュノ様にしきりに礼を言っている。その3人の様子を見て、エルメスも嬉しそうだ。

エルメスの傍に行くと、俺に気付いたエルメスはにっこり笑い、ポニーさんとクライドさんに視線を戻す。

「あの二人は100年も太陽を拝めなかったから、きっと喜びも入だろっね」

「だな」

「二人とも、泣いてた。嬉しいって」

「あん時は俺もそんなに嬉しかったぜ」

「泣けばよかったのに」

「俺が泣くわけねーだろ」

「泣く癖に」

「泣かねーよ。でも、もし俺が死なずに済んだら、泣いてやってもいい」

そう言っただけでエルメスを見下ろすと、一瞬キョトンとして、すぐに笑ってみせる。

「絶対泣かせてやるから！」

「お前に泣かされる位なら、死んだ方がマシだけどな」

「うえーんって泣かせてやる！」

「んな泣き方するか！」

エルメスに泣かされる日は、来るんだろうか。呆れかえるほどの足掻きの果てに流れるのは、俺の喜びの涙なのか、エルメスの悲しみの涙なのか。

延命の努力をしようとは考えていたけど、俺は生きることです  
かり諦めてしまっていた。

ジユノ様からの挑戦状。諦めを踏破すれば、生きながらえる。

結果が楽しみですね、そう言つて笑つた悪魔。絶対に泣かせてや  
る、そう言つて笑う諦めの悪い、俺の天使。

天使にBETしたら、俺はそのギャンブルに勝てるかな。それと  
も悪魔の囁きに耳を傾けていた方が、楽だろうか。

そんな事を考えながら顔を上げると、太陽はすっかりその姿を現  
して、相変わらず何億年も変わることのない光を注ぐ。太陽を見つ  
めながら、エルメスは余つた袖からいそいそと指を出して、俺の指  
に絡めた。

「冬の朝つて好き。空気が澄んで、太陽の光が真つすぐ届くみた  
い」

「俺も冬は好きだ」

ジャケットの袖に隠れたのを良い事に、温かく小さな手を握り返  
すと、エルメスは嬉しそうに笑う。

「どうして冬が好きなの？」

「お前が嬉しそうにしてるから」

「本当、カイつてばどうしてそんなにカッコイイの？」

「生まれつき」

エルメスの言葉で、急に昔見た小説のセリフを思い出した。それ  
で、足掻いてみようと思つた。

いい男は、死なないもんだ。

## 海外出張報告 5

ホテルで一眠りしてから、今度はエルメスとジユノ様と3人で東京観光。本当はクライドさん達も一緒に行くつもりだったが、あの二人はまだギシアンやってたので3人で出かけることにした。

到着した先は「二次元ワールド」秋葉原。「昔より二次元が加速してる」と言ったエルメスは、すぐに本屋に入って行く。

「面白い漫画あったら買っていき！ リユイさんと一緒に見るんだ！」

「ああ、あの二次元ヲタク、こういうところ好きそうだな」

エルメスはあれからリユイとちよくちよくメールでやり取りしているようで、日本に行くことも伝えてきたようだ。その際、メールの画面を開きっぱなしにして風呂に行ったもんだから、アイツら何話してんだ、と気になってコツソリ覗いて見たんだが、思わず吹いた。

TO：お嬢様

旅行、羨ましいです。楽しんできてくださいね。

日本は漫画やアニメがたくさんあるから、私も一度行ってみたいです。それにしても、お嬢様を旅行に連れて行こうだなんて、案外カイさんは優しいんですね。

TO：リュイさん

そう、案外優しいんだよ。ていうか、この前の件は冗談だよ。カイは悪い人じゃないよ。ちゃんと大事にしてくれてる。

TO：お嬢様

そうなんですか？ そうは見えませんでしたけど・・・それならランスロットさんの方が大事にしてるように見えましたよ。あんなにカイさんに食って掛かるから、カイさんは余程酷い人なんだと思っただけですけど。

TO：リュイさん

ランスもカイも大事にしてくれるよ。あの二人は普段から仲悪いの。似た者親子だから。

TO：お嬢様

ええ？ あの二人親子なんですか？ その割にはカイさん若すぎませんか？

TO：リュイさん

厳密には育ての親だけど。ランスとガライドはカイが使用人の長だったから、ずっと面倒見てて。ガライドは反面教師に育ったみたいだけど、ランスはカイにそっくりだよ。正義感が強くて腹黒くて、私にだけ優しい所まで、そっくり。

TO：お嬢様

あの二人はお嬢様にしか優しくないんですか・・・でも、どっちかっていうとランスロットさんのほうがまだマシなような・・・

TO：リュイさん

確かにね。唯一違うのはランスが紳士なことだね。でも、私モランスが小さい時から見てるから、気分的にはお母さんなんだよね

TO：お嬢様



え？ お嬢様ランスロットさんより年上だったんですか！？

TO：リュイさん

そうだよ。リュイさん、私の事いくつくらいだと思ってたの？

TO：お嬢様

すみません、15歳くらいだと思ってました。

TO：リュイさん

15歳！？ 私そんなに幼く見えるんだ・・・まあそれならカイが悪者扱いされるのもわからなくはないか。カイはいくつくらいに見えた？

TO：お嬢様

28くらいかな、と。本人はそれよりもっと年上だって言っていましたね。

TO：リュイさん

ああ、そうだね。ていうか28歳と15歳じゃ完全に犯罪じゃん。ロリコンじゃん。

TO：お嬢様

ええ、ロリコンだと思ってました。それはそれで、萌えるかなって。

TO：リュイさん

萌えるんだ・・・

TO：お嬢様

萌えます！ 遊び慣れた大人の男の危険な香りに誘われた初心な少女が、男の強引とも言えるリードに、めくるめく大人の扉を開けるんです！

最初は遊びだった男も、少女の純粹さに徐々に惹かれていって、いつしか本気の恋になって。だけど年齢差とか少女の親の反対とか

に悩んで、でも愛の力で二人はその壁を乗り越えて、永遠の愛を手に入れるんです！ ああ、素敵！

あ、でもカイさんとお嬢様は主従関係にもあたるわけですよ？  
てことは、身分違いの恋！ 身分を超えた執事とお嬢様の恋なんて、もつとドキドキしちゃう！

「お嬢様、嫌なら嫌とおっしゃればいいんです。貴女の言う事には、私は逆らえないのですから」

「そんな事言われたら、嫌なんて言えなくなっちゃうじゃない」  
「いいんですね？」

「うん・・・」

みたいないな！ ツキヤー！！

TO：リュイさん

ちょ、リュイさん、落ち着いて。まあ確かにカイはあらゆる意味で危険な男だけど。ていうか、微妙に近からず遠からずなところがちょっと怖いんだけど。

TO：お嬢様

はあ、やっぱり！ 素敵！ たまんない！ あ、興奮したら鼻血が出ました。

TO：リュイさん

・・・大丈夫？ 色んな意味で。

TO：お嬢様

はい！ いつもの事ですから！

TO：リュイさん

そう・・・いつもの事なんだ・・・お大事に。

あのリュイって女、ヘンタイだ。男の俺が見ても引くレベルのヘンタイだ。リュイの中で展開されてる妄想で、一体何本映画が撮れるんだろうか。エルメスも困った奴と友達になったもんだ。

しばらく秋葉原を散策していると、エルメスが俺に見せたい面白いものがあると言って、ある建物の中に入って行った。ドアを開けるとベルの音とともに、衣装に身を包んだ女が駆け寄ってきた。

「おかえりなさいませ、ご主人様、お嬢様！」

何を言ってるんだコイツは、という俺の動揺をかき消すように、

店内では客とメイドの主従ゴツコが展開されている。

想像以上の二次元つぷりに辟易しながら席に着くと、隣のテーブルの奴らはメイドと遊んでいた。どうやら追加料金でメイドと遊べるらしい。勿論、断った。

「・・・なにが面白いわけ」

「日本にはメイドなんていないから、夢なのよ」

「本物のメイドはあんなじゃねーぞ」

「そうだね。でも日本の二次元の世界では、あんなだよ」

「ヲタクの妄想力つて、スゲーな」

なぜか感心させられて、エルメスと話してたら斜め前のテーブルからコソコソ内緒話が聞こえてくる。

「田中氏、アレに見えるは外国人観光客に間違いない」

「そうだね、山田氏。女二人に男一人、ハーレムだな。しかし一人は日本人のようだね」

「それはアレだよ、田中氏。落ちぶれた商家の娘が、外国の貴族の家に売り飛ばされたのだよ」

「おお、それはいいね。そうだろう、そうだろう。きっと女二人で毎晩主人に傳いて、夜のご奉仕をしているんだ。性奴隷だよ」

「プススス、それ、いいね。萌えるね」

「萌える萌える、プススス」

勝手な妄想で萌えるな。なんなんだ、ヘンタイだらけだ。呆れて溜息を吐く俺の目の前では、ジユノ様は超不機嫌そうで、エルメスは思わず耳を塞いでいる。

でも、そんな二人の様子が面白かったので、もう少しその状況に晒しておくことにした。

しばらくプスプス笑っていると、山田と田中はまた騒ぎ出す。

「ややつ！ また外国人だよ、山田氏」

「今日はやけに外国人の来店が多いね、田中氏」

「しかしみたまえ、山田氏。あの二人は金髪と銀髪だよ」

「田中氏、あの二人は異世界から召喚されてきたに違いない」

「プススス、それはいいね。そうだね、そうに違いない」

んなわけあるか、バカ。ヲタクの妄想力がヤバイ。完全にコイツらにとって二次元は二次元じゃないらしい。

同じ被害に遭った外国人が気になって、エルメスと二人で振り向くと、銀髪で長髪の男と、金髪で長髪の女。

ああ、確かに二次元ぽいな、つーかあの金髪女どつかで見たことがあるような、と思ってたら、俺らの視線に気づいた女の方が、驚いた顔をしてエルメスに近づいた。

「ミナ！？」

「あつ！ つばさちゃん！」

「アンタ久しぶりじゃん！」

「本当だね！ 高校卒業以来だね！」

エルメスの言葉で女の正体を思い出した。エルメスの高校の頃の友達だ。エルメスがジュノ様を隣に座らせて、空いた席に二人に座るように促すと、二人は俺らの前に腰かける。

金髪黒目の超キレイな女と、銀髪赤目の超キレイな男。確かに二次元ぽい。特に男の方が。何この容姿。

「ミナあんた老けないね。整形でもしてんの」

「整形まではしてないけど！ でもつばさちゃんこそほとんど変わ

つてないね？ 25歳くらいに見えるよ」

「ま、あたしは独身貴族だし、好き勝手やってるから」

「え？ 独身なの？ その男の人彼氏？」

「ハッ、こんなのが彼氏なわけないでしょ」

「こんなのとはなんだ！」

「じゃあそんなの」

「変わらないだろう！ なんてお前はいつも俺をぞんざいに扱うんだ！」

「ああもう、うるさい。面倒くさい」

「面倒くさい言うな！」

「つばさちゃん、相変わらずクールだね」

マジでクール。むしろコールド。つばさの男を見る視線が氷のようだ。どうも友達のようなのだが、なぜそこまで冷たくできるんだ。つか面白れえ、このコンビ。

このコンビに興味津々のエルメスは、自己紹介ついでに男の事を聞き出そうと試みる。

「初めまして。つばさちゃんの高校の同級生で、ミナっていいいます。

こっちは彼氏のカイで、こっちは友達のジユノ様」

「私はあなたの友達なんですか」

「まあいいじゃないですか」

「ていうか、友達に様付っておかしくない？」

「まあいいじゃない」

説明が面倒くさいエルメスは「まあいいじゃない」連発だ。それでそちらは？ と向けられた視線に、つばさが答える。

「コイツはなんつーか・・・ペット」

「ペットじゃない！ 他に何か言い方ないのか！」

「少なくとも友達じゃねーし」

「お前は本当・・・俺はただの同居人だそつだ」

「アンタそれ言うなよ。面倒くせーじゃん」

「え？ 一緒に住んでるのに、彼氏でも友達でもないの？」

「だから言ったじゃん、バカ。なんつーかアレだよ、あー・・・面倒くさ、なんでもいいじゃん」

「うん、まあよくわかんないけど、いいか」

全然わかんねえ。で、この女の面倒くさがりが異常だ。結局この男の名前すらわからないまま、普通に会話を始めるエルメス。コイツは相変わらず雰囲気流される女だ。ある意味つばさのような面倒くさがりには、付き合いやすい楽さ加減なのか。

「ていうか、聞いた。北都の事」

「あ、うん・・・」

「可哀想にね、北都。でも、よかったね」

「え？ なにが？」

「犯人の男を殺した奴が迷宮入りして、時効成立したじゃん」

「・・・よかったのかな」

「よかったんじゃないの。どーせ犯人は死刑だったろうし、ヒドイ事した奴はヒドイ目に遭って死ぬのが自然の摂理じゃない」

「あの男、川崎を殺した人は、ヒドイ事をしたからヒドイ死に方をするね」

「さあ。川崎を殺したって事は復讐なんだろうけど。復讐して気が済んだら、きつと今頃自分の所業に苛まれて悩んで生きてんじゃん。ソイツが苦しんだならいいんじゃない。復讐遂げてスッキリしてのうのうと生きてたら、見逃して貰えないかもしれないけど」

「見逃すって、誰が？ 神様？」

「神様なんかいないでしょ。自分のしたことはいずれ自分に降りか



かってくる。5年前の自分が現在の自分を作るもんだし、その時どう考えてどう生きたかで、運命が変わるもんじゃん。自分を見るものは、自分しかない」

つばさの言葉に、エルメスは考え込んだ。川崎を殺して、エルメスは人殺しをしないと誓ったんだと言った。でも、ヴァチカンでその誓いを破った。クリシュナさんと強くなると約束したから。

つばさの言う通りなら、ジュリオ様から攻撃を受けてミラーカさん達が死んでしまったのは、エルメスの業だ。それでもエルメスはジュリオ様への復讐だけは思いとどまった。エルメスが復讐を遂げていたら、俺はエルメスを憎んでいたんだろう。

エルメスがどう生きて、どう考えたかで運命が変わった。つばさの言う通りかもしれない。しかし普通の女のように見えるのに、この女は一体何を感じて生きてるのか。何か色々事情があるんだろう。

「ねえ、つばさちゃんなら私と同じ立場だったら、川崎が死んで安心した？」

「しただろうね。ざまあみろって思ったと思う」

「その犯人の事は？」

「感謝すらしたんじゃない。実際、あたしは感謝した」

「え？」

「だって、そうでしょ。あなたの大事にした弟を殺したんだよ、川崎は。ソイツは川崎に罰を下した。当事者が何を考えたかまではわかんないけど、ニュースに出てた被害者遺族は、喜んでたよ」

「そうなんだ・・・」

人が死んで喜ぶのは、狂気だろうか。それとも、正常なんだろうか。俺には、よくわからない。自分の家族を殺した奴が死んだら、「ざまあみろ」って思うのは正常かもしれない。ソイツが死んだ理由が、自分に関わりのない死に方なら。

「ただ、俺はスレシユを許してしまったし、憎み続けるのも悩み続けるのも、疲れる。あの時エルメスが止めなければ、もしあの場でスレシユを殺していたら、俺は今つばさの話をごんな気分で見ているんだろう。」

「エルメスと悩んでいると、つばさはフツと笑う。」

「あたし、イカしてる？」

「ううん、普通だと思う。」

「そう、普通だよ。第3者ってのは、外堀しか見えないから、表面上の出来事しか知らない。当事者たちの感情なんか見えない。だからあたしみたいに好き勝手言う。それが普通。でも、友達の大事な家族を殺した奴を憎いと思うのも、友達なら、普通だと思うけどね。」

「つばさちゃん・・・ありがとう。」

「この女、厳しいな。厳しいけど、優しい女だ。その優しさが非常に分かり辛いのが玉にきずだけど。」

「北都が死んで、つばさはきつとエルメスを心配していたに違いない。心配で、エルメスの大事にしていたものを奪った男を憎いと思っただろう。それはきつと、第3者だからで、友達だからで、普通の事なんだろう。」

「つばさのおかげで色々元気を取り戻したエルメスは、今度は男の方に視線を向けた。」

「ねえつばさちゃん、このペットさんは外人さんだよな？」

「誰がペットさんだ」

「あ、ごめんなさい」

「このペット野郎は、一応外人って言うか」

「誰がペット野郎だ！」

「うるさい。まあホームステイ的な」

「ああ！ そうなんだ。留学生？」

「そーそー」

「何人？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・フランス人」

ウソくせえ。思いつきり「それ聞くか。やっべ、えつとー」みた  
いな顔して答えたぞ。なんか露骨にわけありっぽい。

「なんでつばさちゃん独身なのにホストファミリーなの？」

「あーあれじゃん。仕事の都合？」

「仕事まだ霧島メディカル？」

「そ。その海外事業部」

「つばさはつい先日課長に昇格したんだぞ」

「マジ！？ すごい！ さっすがつばさちゃん！」

「まーね。面倒くせーけど」

面倒くさがりな女に管理職は本当に面倒だろう。しかしエルメス  
と同年で大企業の課長に昇格とは、本当にとんでもなくデキる女  
だな。なぜそんな女がエルメスと友達なんだ。不思議だ。

なるほど、海外事業部なら外国語も堪能だろう。それならホスト  
ファミリーも領ける。が、一番領けないのはこの男の容姿だ。

地球上では少なくとも俺は見たことない。相当重度のアルビノな  
ら写真でこういう症状をみたことあるが、そういう奴は日光に当た  
れないから常にサングラス着用で肌を露出できないのに、コイツは  
そうでもない。

つばさ対策に念のためヒンディー語で内緒話をすることにした。

「あの男さあ、もしかして人間じゃねーんじゃねーの」

「かもね。あの目の色はおかしいもん」

「かといって魔力のようなものは感じませんが」

「あ、そうなんですか？ じゃあなんだろう」

「カラコンかな？ でもあの銀髪はクリシュナの比じゃないよ。マジ銀だし」

「染めてんのか？」

「かなあ。でもさあ、いでたちがファンタジックすぎない？」

「秋葉原だからじゃないですか」

「ああ、コスプレ？」

「ええ？ つばさちゃんの連れにコスの人なんて絶対いない！」

「・・・確かにいなさそうだな」

「でしょ。ていうか名前もまだ聞いてないってどんだけ」

「俺の名はアレスだ」

「ああ、アレスさん・・・え？」

「無駄話、終わった？」

「ええ！？」

途中から口を挟んできたつばさとアレスに俺らはビックリだ。そりゃ驚く。二人ともヒンディー語で入ってきたら、そりゃ驚く。

もしかして、今の会話の内容全部聞いてたのか、と恐る恐る視線を向けると、不機嫌そうなアレスと、ニヤニヤ笑うつばさ。

「つばさちゃ・・・聞いてた？ ていうか、わかったの？」

「言っとくけど、この地球上であたしに理解できない言語はない」

「どんだけ完璧超人なの・・・」

「職業病にも程があるな・・・」

呆れとも感心ともつかない感情を湛えてつばさを見つめると、そう言っただつばさをアレスがバシッと叩いた。

「お前、よくそんな偉そうにできるな。それはお前の努力の成果じゃないだろ！」

「痛いしうっさい！ あんたは黙ってる！」

「手柄横取りしたってヘルメスにチクってやる」

「うるさい、プレス機に挟まれて圧死しろ」

「死なん！」

「プツ、アハハハハ」

その会話を聞いた瞬間、ジュノ様が笑いだした。こんな風に笑うジュノ様を見るのは初めてで、俺とエルメスはビックリだ。

「つか、二人の会話から聞こえてきた「ヘルメス」と言う名も気になるが、ジュノ様も気になる。気になる尽くしで、どうしたらいいかわからん。」

「とりあえず、一番意味不明なジュノ様からいってみよう。」

「ジュノ様？ 急にどうしたんですか？」

「いえ、あまりにも可笑しくて」

「おかしいって、そんなに何が？」

「だって可らしいじゃないですか。まさか帝国の将軍がこんな所で遊んでるなんて」

そう言っただけでアレスに笑顔を向けるジュノ様に、アレスとつばさは驚いたような顔をした。

「将軍、アレスはどこかの国の将軍なのか？ つーかジュノ様の知り合い？ その割には初対面のような。有名なのか？」

「相変わらず意味の分からん俺とエルメスに、ジュノ様はご丁寧に説明を始めた。」

「アレスとヘルメス。初対面ですが、よく存じ上げてますよ」

「ジュノとか言ったか。お前、何者だ？」

「うふ。あなた達の宿敵ですよ。聖トロイアス帝国騎士団団長、  
“白狼の軍神”アレス」

その言葉に急に立ち上がって、驚きと敵意を向けるアレス。俺とエルメスは「何それ、中二病？」だが、つばさも驚いていることから、どうやら真実のようだ。つーか、その国どこ？

「貴様・・・ソロモンの悪魔か！」

「ええ、初めまして、ジュノ・アスタロトです」

「侯爵アスタロトか！ そうか、ここであつたが100年目！ この場で殺してやる！」

「え、ちょ！ アレス！？」

「あなた一人で私に敵うとでも？ フン、いいでしょう。あなたが死ねば、帝国には大打撃。帝国の陥落はあつという間ですね」

「キヤー！ ジュノ様やめて！」

「のぞむところだ！」

「バカ！ のぞむな！」

急に一触即発になって、二人とも立ち上がって睨みあうものだから、俺ら3人で慌てて止めに入った。

つーか、宿敵とメイド喫茶で初対面って、なにこれ。何とかつばさがアレスを宥めて、二人とも大人しく座りなおしたので、つばさとジュノ様に説明してもらつ事にした。

「いや、コイツさあ、なんか異世界から飛ばされてきて」

「そう。私の故郷とその男の国は、こことは違う第11次元の異世界にあります」

「え！？ 第11次元！？ ていうか異世界！？ ジュノ様の住処は地獄じゃないんですか？」

「地獄の侯爵と渾名されていますが、地獄に住んできると言つた覚えはありません」

「・・・そういえば」

「で、アレスの国はその第11次元のちょうどヨーロッパあたりに

なる」

「ちなみに私の治めているところはアメリカあたりになります」

「へえ・・・なんで敵なんだ？」

「コイツら悪魔どもが我々の国まで侵攻してくるからだ！」

「マジ？ 侵略戦争？」

「そうだ！」

「と言っても私は侵略にはそれほど興味ありませんが、他の人たちは面白半分です」

「面白半分だと！？ 貴様！！」

「落ち着いて！！ もう、ジユノ様も煽らないでください！」

「うふふ、面白い」

「面白がるな！」

「つーか、ヲタクの妄想が妄想じゃなかったことにビックリなんだけど。ヲタクの妄想力、悔りがたし。」

異世界では人間対悪魔の侵略戦争なんか繰り広げられてんのか。

「つーか悪魔と一国のお偉いさんがメイド喫茶で睨みあってる構図が未だにありえないんだけど。」

「しばらくジユノ様を睨みつけていたアレスは、急にハツとしてつばさに向いた。」

「つばさ、お前の友達は何者だ？ 悪魔と繋がりがあるなんて、彼女も悪魔なんじゃないのか！」

「あたしの知る限りは、ただのバカだけど」

「バカじゃないもん！」

「バカじゃん」

「バカだろ」

「んもー！ 寄ってたかってバカバカ言わないでよ！」

「しょーがないじゃん」

「うるせーよ、バカ」

「んもおお！」  
「・・・・・・・・」

なんか暴れ出したエルメス。アレスは気の毒そうにエルメスを見つめる。つーか、このつばさって女とは気が合いそうだ。俺と同じにおいがする。

「つーかよお、意味不明なのはお互い様だし、もう言っちゃっていいんじゃないか」

「そうだねえ」

「なにが？」

「あのね、私とカイはジユノ様の仲間とかじゃないの」

「じゃあなに？」

「えっとね、カイを餌にジユノ様の魔力を貪ってるって関係なの」

「ふーん。意味わからんけど、わかった」

楽！ つばさ楽！ 面倒くさがりなぶん、面倒なことに口を挟まないから超楽！ 適当に相槌を打った後は「ふーん、なんでもいいや」みたいな感じだ。が、アレスは違った。

「という事は、お前はアスタロトと契約したのか」

「そーだけど。つか、俺らが束になっても敵わねーし、俺は目的が達成できりゃ別にいい。言っとくけど、お前の作戦には加担しねーぞ」

「貴様、それでも人間か！」

「ちげーよ。それと、俺のが年上なんだからナメた口きくな」

「・・・・・・・・」

黙り込むアレス。ジユノ様を謀殺させようとも思っていたのか、ちよっと残念そうだ。俺とアレスの会話を見てつばさはニヤニヤ笑



っている。どうもアレスがへこんでいるのが楽しいらしい。やっぱり俺と同じにおいがする。DS女だ。

「でね、つばさちゃん、内緒にしてほしいんだけど」

「いーよ、なに？」

「私とカイね、人間じゃないんだあ」

「へえ。どーりで老けないわけね」

「なんか、あんまり驚かないね」

「ファンタジー慣れした。で、なんなの」

「吸血鬼」

「へえ。昔からじゃないよね？」

「うん、19のときになっちゃった」

「ふーん、気色悪っ」

「つばさちゃん、ヒドイ・・・」

「そりやどーも」

「褒めてないよ！ もー！」

「うるさい」

つばさとエルメスのやり取りに思わず吹いた。どうもエルメスは昔からこういう扱いを受けるタチのようだ。しかしその会話に顔色を変える面倒くさい男、アレス。

「貴様ら魔物か！ ではやはり悪魔の一族じゃないか！」

「ちげーよ。元人間だって」

「ウソを吐くな！」

「ウソじゃねーって」

「では証拠を見せてみる！」

「ねーよ。つーかお前面倒くせーよ。うるせーし」

「本当アレス面倒くさい。アンタちよっと黙れ」

「なんだと!?! つばさはコイツら」

「うるさい」

「うるせえ」

「ぐぬぬ・・・貴様ら・・・」

「カイとつばさちゃんが組んだら強いですねえ」

「そうですね。うふふ、面白い」

悔しげなアレスを見てエルメスとジユノ様は完全に傍観者だ。「くそ！　なんで俺の周りは性悪しかいないんだ！」とアレスはキレてるけども、それを見て俺とつばさはニヤニヤだ。

しばらくクスクス笑っていたジユノ様は、イライラするアレスに口を開く。

「それにしても、騎士団長がこんな所で油を売っているなんて、ベルゼブブたちは知ってるのかしら」

その言葉にハツとして顔色を変えたアレスに、ジユノ様はにっこり笑う。

「うふ。教えに行こうかしら。あなたのいない隙に戦争が勃発したら、帝国はどうなるんでしょうね」

「貴様！　やはりこの場で殺してやる！」

「できるのなら、どうぞ？」

「だああ！　落ち着けて！」

「ダメだ！　殺す！」

どうも落ち着きのない猪突猛進男アレスは今にもジユノ様に襲い掛かりそうだ。必死に宥めてたら、エルメスはポンと手を叩いた。

「そうだ！　決闘しよう！」

「お前状況見て物を言えよ！」

「やだなあ、場所を移したらいいじゃない」

「そう言う問題か？」

「ああ、いいんじゃない。一回負けりや落ち着くでしょ」

「つばさ、お前本当クールだな」

「まーね」

と言うわけで、メイド喫茶を出て近くの公園へ。時間はもう夜になっ  
ていて、公園には人っ子一人いない。

そんな公園で、睨みあうジュノ様とアレス。そこにエルメスが割り込んでいった。

「ハイハイ、あのね、多分ジュノ様手加減しないと思うの。で、アレスさんが死んでも困るし、私が相手します！」

「何を言っているんだ。俺は女と戦う趣味はない」

「言っときますけど、私強いですよ。化物ですから」

「・・・そうだったな、まあいいだろう。試合形式は？」

「じゃあ、鬼ごっこ！」

「鬼ごっこ!？」

「施設を破壊しないように、です。この公園内を逃げ回るので、私を捕まえてください。攻撃、武器の使用、何でもアリですよ」

「いいだろう」

睨みあうエルメスとアレス。つばさの合図で鬼ごっこがスタートすると、アレスは猛然とエルメスに駆けだした。それを見てエルメスも走って逃げると、あつという間にその差は開いていく。

「遅い遅い！ そんなんじゃないや捕まりませんよ！」

「待て！」

「待てと言われて待つわけないでしょ！」

「くそ！」

圧倒的に機動力に差のある鬼ごっこに、つばさは感心している。エルメスの身体能力はもとより、アレスが翻弄されているのが面白いようだ。

ふとエルメスは立ち止まってジャンプすると、ジャングルジムの頂上に飛び乗った。それを見て一瞬驚いたものの、アレスもジャングルジムによじ登る。アレスが頂上に到達してエルメスを捕まえようとした瞬間、エルメスは再びジャンプして、今度はブランコの柱の上に飛び乗った。

「アレスさん、ほら、早く捕まえてください」  
「くっ！」

アレスに挑発的な言葉を浴びせると、すぐさまジャングルジムから飛び降りてブランコに駆け寄る。するとまたジャンプして逃げるエルメス。コレ、いつになったら終わるんだ。

さすがにエルメスの方が詰まらなくなってきたのか、地上に降りると再び追いかっこ。逃げ回るエルメスは、池の前に追いつめられる。逃げられるのに、そこからジャンプして逃げようとはしない。息を整えながらアレスがエルメスの腕を掴もうとした瞬間、エルメスは姿を消して、アレスの背後に回った。

「ざんねーん」  
「！ うわぁ！」

背後に回ったエルメスは笑って、アレスの背中を蹴飛ばして、池に突き落とした。マジ容赦ねえ。その様子を見てつばさは爆笑だ。水しぶきを上げて池に落とされた後、何とか池から這い上がったきたアレスは、池のふちに佇んで笑うエルメスを睨み上げる。

「・・・パンツ見えてるぞ」

「えっ!?!」

慌ててスカートを抑えたエルメスに、すかさずアレスが手を伸ばすと、その手はまたしても空振り。エルメスは分子結合を緩めたのか、アレスの手はエルメスの体をすり抜けた。

「アレスさん、卑怯」

「お前の方が卑怯だろう!」

「アレスさんのエッチ」

「なっ!?!」

エルメスの言葉に動揺して少しだけ顔を朱くするアレス。どうやらアイツは女に免疫がないようだ。それにエルメスはニヤリ。悪女魂に火がついたようだ。

池から這い出て再び突進してきたアレスにエルメスはにやりと笑って、その場から姿を消すと、一瞬で戻ってきた。

手を伸ばしたアレスはその勢いそのまま飛び掛かって、一緒に倒れ込む。

「痛った・・・アンタなにすんのよ」

「え? あれ!?! つばさ!?!」

アレスに押し倒されて下敷きになったのはなぜかつばさで、その隣でエルメスは腹を抱えて笑っていた。どうやら消えてこっちに來てつばさを誘拐したらしい。なかなかどうしてヒドイことをする。

「うわ、ちょ、あたしまで濡れたじゃん!」

「う、あ、スマン」

「スマンじゃねーよ！ さっさとどけ！」  
「グッ！」

アレスはつばさに膝蹴りされて、横に倒れて腹を押さえてのた打ち回っている。相変わらずエルメスは爆笑だ。不機嫌そうに起き上ったつばさはエルメスの下に行くと、エルメスの頭を思い切りブツ叩いた。

「ミナ！ なにすんのよ、このバカ！」

「だってえ、面白そうだったんだもん」

「あたしが面白くねーよ！ 濡れたし！」

「ごーめーんー。払うから」

そう言っつて財布から金を出してつばさに握らせるエルメス。以前俺に成金みたいだと嫌味を言ったが、アイツもまんまと成金かぶれしたようだ。金を握らされたつばさは余計に腹が立ったようだったが、その金額に目を丸くする。

「うわ、10万もあるじゃん！ いいの!？」

「いいよ、あげる」

「マジ？ じゃあ許す」

「ありがとー」

なんてサツパリした女だ、つばさ。清々しすぎる。ポケットに金をねじ込んだつばさはアレスの下に行くと、その腕を掴んで引き立たせた。

「もう十分でしょ。アンタにゃ無理」

「無理じゃない！ コケにされたまま終われるか！」

「無理だからお終い」

「ダメだ！」

「しつこい。いい加減にしないと飯作ってあげないよ」

「・・・わかった」

弱！ アレス弱！ どうもつばさに餌付けされているらしいアレスは悔しそうではあったが、大人しく引き下がった。エルメスはそんな二人の様子を見てケタケタ笑っている。

「私に負けてるようじゃ、ジュノ様には絶対勝てませんよ。ね？」

「そうですね。エルメスさんでも瞬殺できるでしょう」

「そうですねえ。木端微塵です」

なんとも物騒にほほえましく会話する女二人に、つばさとアレスは首を傾げる。

「エルメスって？」

「あ、私今は海外にいるから、エルメスって名乗ってるの」

「へえ、偶然もあるもんだね」

「なにが？」

「ああ、聖トロイアス帝国の魔導師の事ですね」

「魔導師？」

「赤鷲の魔術師ヘルメスは、第1次元においては世界最強の魔術師です」

「へえ！ そんな人がいるんですね！」

その話に感心しながらも、俺はそれよりも気にかかると言っか、腹立つことがあったからアレスの前に行ってガンつけた。

「テメエこのスケベ野郎。ミナのパンツ覗いてんじゃねーぞ」

「何を言う！ 角度的に不可抗力だろ！」

「ああ？ 黙れ。目ん玉潰すぞ。それとも別の玉潰されてーのか？ あん？」

「なぜパンツごときでそこまで・・・」

「ちよつと、カイ、それはヒドイよ。別にいいじゃない」

「よくねーよ！ お前は全てにおいて俺専用！ わかったか！」

「わかつてるよお」

「あんたら面白いね。アレス、潰されればよかったのに」

「潰されてたまるか！ ぶえつくし！」

「ちよ、汚！ 伝染さないですよ」

「・・・寒い」

くしゃみを連発しだしたアレスに思わず身を引くつばさ。11月の寒空の下びしょ濡れになったアレスは、マジで寒そうだ。俺にしたらアレスとつばさの方が余程面白いが、やっぱりこの二人の関係性がよくわからん。

エルメスはくしゃみアレスに近づくと、アレスの髪を撫で始めてそこから水蒸気が立ち上った。

「水分飛ばしますから、ちよつとじつとしててくださいね」

「む、かたじけない」

そう言っただけでエルメスが腕や背中や胸を撫でまわしていくと、そこからどんどん水蒸気が逃げて、水気でまとまった髪はさらさらと乾いて、服の色も濁いた色に変わっていく。それと同時にアレスの顔が赤くなってきた、エルメスの手が脇腹から腰に伸びた瞬間に、アレスは飛びのいた。

「い！ いい！ 下はいい！」

「でも、寒いでしょ？」



「いい！」

二人のやり取りを見て肩を震わせて笑うつばさ。笑いながらエルメスの肩をポンと叩く。

「くつくつく……。違うって、アレスは照れてんだよ」

「ああ！ やだ、アレスさん可愛い」

「可愛いくない！」

「可愛いですよ。だってカイだったら私が嫌って言うっても絶対無理やりさせるし」

「当たり前だろ」

「お前、それでも男か？」

「だからこそじゃねーか。この甲斐性ナシが」

「どつちがスケベ野郎だ……」

「マジ……可笑し……」

つばさはツボにはまったのかずっと笑っている。アレスがバカにされてるのが余程好物なようだ。ひとしきり爆笑した後、アレスが風邪ひいたら面倒くさいと言って、二人は帰ることになった。

「つばさちゃん、コレ泊まってるホテルの電話番号と、私のパソコンのアドレス！ また遊んでね！」

「あー、気が向いたらね」

「遊んで！」

「ハイハイ」

面倒くさそうな態度とは裏腹に、つばさのエルメスを見る目は優しい。本当に仲良しだったんだな、と思ってなんか和んでいると、アレスは二人にジットリした視線を投げている。

「お前何不服そうにしてんだよ」

「別に」

「ははーん、さてはお前、自分はいつも適当に扱われてんのに、つばさとミナが仲良しなのが気に食わねーんだろ」

「違う!」

「うるせーよ。急に大声出すな、バカ」

「うるさい!」

「てめーがな、バカ」

「くそ・・・なんてムカつく奴なんだ・・・」

イライラ気味のアレスは俺を睨みつけて、すぐさまつばさの下へ寄っていく。つばさの腕を掴むと「帰るぞ!」と無理やり引き連れて行くので、つばさは慌てて俺達に手を振った。

「じゃあね! 連絡するから!」

「うん! バイバイ! アレスさん風邪ひかないようにね!」

「わかってる!」

エルメスの言葉に何故かキレながら返事をしたアレスに、つばさは引つ張られながら溜息を吐いて見上げる。

「もう、アレス何怒ってんの」

「怒ってない!」

「ハア、つたくしょうがないな。今日はあなたの好きなもん作ってやるから」

「じゃあ肉じゃが!」

「ハイハイ。ていうか、痛てーから離せ」

「スマン」

やっぱり餌付けされているアレスに思わず笑って、二人を見送った後振り向くと、ジユノ様がなにか考え事をしていた。

「どうしたんですか？」

「ちよつと、出かけてきます」

「もしかして、アレスさんの事仲間の悪魔さん達に教えに行くんですか？」

「まさか。あの人達に教えるくらいなら、人間に味方した方がマシです。それとは別件で用を思い出しました。しばらくしたら戻ります」

そう言ったジユノ様はその場からパツと消えてしまった。それに顔を見合わせる俺とエルメス。

「悪魔同士って、仲悪いのかな？」

「所詮悪魔は悪魔だし、全員やな奴で嫌い合ってるのかもな」

「ああ、そうかもね」

しかし今日は面白かった。エルメスの友達をつばさも、ペットのアレスも面白い奴。つくづくエルメスの友達は変な奴が多い。

「なあ、ちよつと行ってみたくなーか、第11次元」

「ねえ。どんなところなんだろう」

「ジユノ様、連れてってくんねーかな」

「頼んだら連れてってくれるかな？」

「新婚旅行は異世界で決まりだな」

「あ！ それいい！」

ジュノ様もないのに勝手に新婚旅行先を決定。魂くれてやるっ  
てんだから、存分にジュノ様の魔力は貪らせていただく。  
異次元旅行、楽しみだ。

## 海外出張報告 6

日本旅行3日目。今日は昼のうちに霊園に行ってきた。

墓の前で手を合わせたエルメスは、「私、もう二度と人殺しはしない。絶対に人間を殺さないって誓う。もし誓いを破って、つばさちゃんが言ったみたいに5年後の私に降りかかってきたら、みんなも辛いと思うから」と言っつて、初めて手にかけて男の墓石に、深く頭を下げた。

1092

「最初に北都の話をしたとき、私泣いちゃったよね」

「ああ、あの時はまだ、死神だったもんな」

「あの時ね、私本当に嬉しかったんだあ」

「嬉しかった？」

「うん、私の話をカイが聞いてくれて、慰めて、励ましてくれたでしょ？ カイと友達で良かったって、あの時心底思ったよ。本当、カイって優しいよねえ」

「は？ 優しくねーよ」

「優しいよお」

自分で言うのもなんだが、俺は全然優しくねえぞ。欠片も人に優しくしねえぞ。でも、よくよく思い返してみれば、エルメスは昔から俺の事を優しいとかほざいてやがった。何を見てそう思ったんだ。不思議だ。

相変わらずエルメスの目には、誰でも「いい人」に映る不思議なコンタクトレンズが装着されているらしい。

ホテルに戻ったらまだジユノ様は帰っていないようで、宇宙人達も観光から戻ってないようで、誰もいなかった。

エルメスの友達や両親の話をしていたら、何故かエルメスは途端に不機嫌になる。

「どうして結婚すること内緒にしたいの？」

一応エルメスには日本に行く前に説得して納得させたつもりだったんだが、時間と共に不満になってきたようだ。

「いや、話したじゃねーか。クライドさんに言ったのも聞いてただろ」

「一応カイの言うこともわかるけど……でもお父さんとお母さんにも結婚式来てほしいんだもん」

「多分来てくれねーし、祝福もしちゃくれねーよ。ただでさえ両親はお前溺愛してんのに、殺し屋なんか認めねーだろ」

「そんなの昔の話じゃない。カイとみんなのお陰で頑張れたんだってお父さんもお母さんもわかってくれたんだし、きつとわかってくれるよ」

「じゃあ聞くけど。何しても時間が経てばその事実まで消えると思ってるのか」

「そういうことじゃないけど……人殺ししてたって、言わなきゃ

よかったのに」

「言つとかねえと、お前もクライドさんたちも結婚式の話を持ち出すだろ。仮に黙ってても、俺が親なら認めねえ。吸血鬼だし、外国人で親子ほどに年も離れてる。しかもすぐ死ぬとくりゃ、許す理由の方が見当たらねえよ。お前を溺愛してんなら、尚更な」

「そんなこと、関係ないよ」

「ある。本人はそりゃいいーだろ。関係なくて当然だ。俺もお前も互いの身の上を理解した上で、好きで一緒になるんだからな。でも、親にとつちや相手の身元は重大な問題だ」

「そうかもしんないけど・・・」

「とにかく、この件は黙ってる。ただ黙っとくだけでいい。俺が死んだら好きにしる。長くても2、3年だ。そのくらい隠し通せるだろ」

「・・・わかった」

明らかにわかってないような、納得してないような顔だったが、渋々エルメスは引き下がった。

俺だつて好きで隠したい訳じゃない。出来ることなら話して、祝福してほしい。そうすればエルメスも嬉しいだろう。

でも、俺が親なら絶対認めない。自分の大事な娘を得体の知れぬ一奴にくれてやるなんざ、絶対に嫌だ。それは親なら誰だつてそうだと思う。

両親の事を思えば、北都の件もあるし、これ以上無闇に悩ませたいとも思わないし、それに北都の事件の時効成立前だったせいで、クリシユナさんの事も両親は知らない。

エルメスはクリシユナさんのことだつて当然両親に紹介したかったはずなのに、結局それは叶わなかった。それなのにクリシユナさんを差し置いて俺だけ紹介されるのも気が引けるし。

もし紹介するとしたら、まずクリシユナさんの事があって、それを両親が理解して納得した上じゃなきゃ、俺に順番を回しちゃいけ

ねえ気がする。

それにクリシュナさん同様俺も死ぬんだから、いつそのことどっちも黙つとけばいい気もする。エルメスは箱入り娘だったみたいだし、エルメスの両親はエルメスの男関係なんか聞きたくもないだろうし。

いつまでもエルメスを「自分たちの大事な娘」でいさせてやりたいな、とも考えて、そう言う判断をしたわけなんだが。

そんな話をしていたら、出かけていたボニーさんとクライドさんと一緒に、ジユノ様も帰ってきた。

「お、お帰りなさい。なんで3人一緒なんですか」

「たまたまロビーで遭遇しただけ」

「なんでロビー？ ジユノ様は直接こつち帰って来れるでしょ」

「そんな事よりジユノ様、折角日本に来たんだし、私椿寿楼に行きたいんですけど」

「構いませんが・・・彼女は今里にはいないようですが？」

「あ！ 連絡するの忘れてた！」

「ミナやっぱママに似てるね」

ジユノ様の千里眼がもたらした事実にがっかりするエルメス。確かに日本に来る前に椿寿楼にも寄りたいから連絡しなきゃとか言っていた気がするけど、すっかり忘れていたようだ。本当バカな奴。

「つーか、椿寿楼いくならユアンも連れてくりゃよかったな」

「そうだねえ、どっちみち山姫さんいないなら意味ないけど」

「意味ねーつーか、お前が連絡忘れてたせいだよな」

「うるさいな！」

そんな話をしていたら、部屋のベルが鳴ってドアを開けると、支



配人がドアの前にワゴンと共に立っていた。

「失礼いたします。お食事をお持ちいたしました」

「支配人、私共は頼んではおりませんよ。部屋をお間違いでは？」

頼むはずがねえし、気を利かせてくれたとしてもぶっちゃけ有難迷惑。ワゴンに目をやるとワインボトルとグラス。ん？ ワインボトルと、グラス、だけ？

「提督よりお話は何っております。皆様も、提督と“同族”と」

「え？ ああ、そうだったんですか。では、そのボトルは・・・」

「はい。血液でございます」

「そうですか。それは、失礼いたしました。ありがとうございます」

スゲエ、さすが山姫さん。さすが日本人。超気が利く。思わず感動。支配人の中に入ってもらうと、グラスを置いて、ボトルから血を注ぐ。

その様は実に優雅で、段々血液が高級ワインに見えてくるほどだ。支配人の立ち居振る舞いは超一流だ。勉強になる。

支配人が全部のグラスに注ぎ終って、グラスを手に取ったエルメスは一口口にして、支配人に目を向けた。

「支配人さん、これ、どこから調達してくるんですか？」

「系列病院より調達しております血液を、私が厳選しております」

「え？ 支配人さんが厳選？」

「という事は、松本支配人も私共と同族ですか？」

「はい。系列企業の所謂老舗のCEOたちは、大概提督以下の吸血鬼が名を変え姿を変え、営々と受け継いできております」

「へえー！ そうなんですな！ 支配人さんはこのホテルは何年く

らいつ？」

「創業当時から、支配人を務めております。当ホテルは来年で創業80年を迎えます」

「へえ、本当に老舗なんですね。以前は松本さんじゃなかったんですか？」

「はい。“松本”の前は“松川”、その前は“松木”と名乗っておりました」

「常に松がつくんですねえ」

「はい。提督より“松”の名を賜りましたので、それに倣っております。私を含め提督以下の吸血鬼はみな、提督より名を賜っております。吸血鬼として生まれ変わり、人間としての生と名を捨て、新たな人生と共に授けていただきました」

「そうなんですねえ。でも支配人さんは、吸血鬼になってよかったですか？」

「勿論です。私はそう希望いたしましたので。人として生きていくことに耐えられなかった私にとりましては、これほどの幸福はございません」

「そっかあ、支配人さんも色々あったんですね。今幸せで、よかったですね」

「ありがとうございます」

とりあえず、このやり取りを聞いてて思ったことが2つ。やっぱり支配人スゲエってのと、やっぱりエルメスはあの両親の子だ。

支配人はなんつーかもう、さすがだ。エルメスの質問を先読みにして、聞かれそうなことを先に答えてる。さすがに長年サービス業のトップやってねえな。思わず感動。

エルメスに至ってはもう、コイツの好奇心はパパ譲り丸出しだ。後半あたりとか俺的には、「それ聞くのかよ」って思ったんだけど、まあ俺も気になったからいいんだけど。

支配人の話を聞いてなぜか嬉しそうなエルメス。昔っからだけど、エルメスは人が幸せそうにしていると嬉しそうな顔をする。そう言えば昔から何度も聞いた気がする。

「 が笑ってたら嬉しい」

「 が幸せなら嬉しい」

「 といれたら幸せ」

それこそ出会ったばかりの頃なんか、アーサーとジュリオ様を仲直りさせようとしてたくらいだ。その話し合いをした時に言ってた。「あの二人が仲直りしたら、無駄に血を流すことも誰かが死ぬ事もないし、みんなハッピーなのにな」

その時俺は無理だろって一刀両断して、実際、無理だった。あの二人が仲直りしてたら、エルメスの言う通りみんなハッピーだったのに、そうならなかったことは今になって心底残念に思う。

あの時俺は軽い気持ちで無理って言ったけど、これほどの事態が起きるなら、本当にもっと真剣に考えておくべきだったな、と今更後悔だ。

エルメスはいつも能天気「みんな仲良し！」とか言うけど、エルメスの言うみんな仲良くとか、みんなハッピーとかが、あの戦争の後だとスゲエ重い言葉に聞こえる。

もしあの時、俺も真剣に考えて、エルメスと頑張って二人を仲直りさせてあげることが出来ていたなら、俺達は今どうしていたんだろう。何度も、それを考える。

そうなっていたら、みんな楽しく幸せに暮らしてたんだろうと思うけど、きっと今でも人殺しはしてたんだろうな。楽しく暮らして、でもあのままの状態なら、俺は絶対エルメスを好きになつてないし、エルメスもそうは思わなかっただろうし、ずっと友達のままだ。

勿論それでもいいとは思う。昔から俺はアイツを親友だと思ってきたし、大事な友達で、エルメスもそう言ってくれて、それで十分

だった。

「だけど、現実の今と、仮想の今と、どっちが幸せなんだろう。まあ、所詮仮想は仮想でしかない。考えるだけ、無駄なことか。これから「みんな仲良く」してりゃ「みんなハッピー」なんだろうから、それでいい。」

「ぶっちゃけた話、アーサーとは仲良くできる気がしねえけど、俺とアーサーが相性最悪なのは今に始まったことじゃねえから、まあ殺し合いにならなきゃ、それなりでいい。」

「つーか、俺完全にエルメスに感化されてるよな。昔は他人が自分をどう思おうが、ケンカになるうが知ったこっちゃねえとか思ってたのに。もしかして調教されてんのって、俺の方が。」

「とか考えて思わず頭抱えてたら、いつの間にかディナータイムは終了してたようだ。」

「アンジエロ、お前まだ飲んでねーのかよ」

「あ、すいません」

「また考え事してたのか？」

「いえ、別に」

「どーせエロいこと考えてたんだろ」

「違います」

「ウソつけ。エロスの権化のくせして」

「なんですかそれ・・・」

「そーじゃん。お前下半身に脳があるだろ」

「そんなわけないじゃないですか！ 失敬な！」

「もしくは脳が下半身に浸食されてんじゃん」

「されてません！ 浸食は腰で止まってます！」

マジ失敬なんだけど。何？ エロスの権化って。俺そればっか考

えてるわけじゃないんだけど。それは俺の思考の10%にも満たないんだけど。クライドさんの目には俺はどういう風に見えてんだ。

クライドさんに溜息を吐かされて、グラスに残った血を飲み干して支配人に預けると、支配人の笑顔に営業じゃないスマイルが浮かんでる気がして、とうとう支配人に笑われたと思って軽くシヨックを受けた。

俺は人知れず落ち込んでいると言つのに、エルメスは何故かクライドさんの話を聞いて引いている。違うつつてんのに、なんで信用ないんだ、俺。

が、そこは切り替えの早いエルメス。思いついたような顔をして、ポニーさんとクライドさんに顔を向けた。

「ねーねー、二人は今日はどこ行ってたんですか？」

「今日は秋葉原行ったよー」

「あ、私達も昨日行きましたよ。二次元ワールドすごいですよねえ」

「確かに。でも、俺らは電気街としての秋葉原に行ってきた」

「買い物したんですか？」

「そ。日本製は性能がいいからな」

「何買ったんですか？」

「ミナにはヒミツ」

「えー！ ケチ！」

「アンジエロには教えてやる。ちよつと耳貸せ」

「え？ はい」

言われてクライドさんに頭を寄せると、その購入した商品を聞いて、一瞬キレそうになった。

「どっちがエロスの権化ですか！」

「貸したげよつか？」

「いりませんよ！ 使うときは自分で買います！」

「買うのかよ」  
「買いませんよ!」  
「どっちだよ」

いらねーよ。そんなモンなくても俺はテクには自信がある。つーかある意味さすがだ。さすが性最先進国アメリカの宇宙人だ。イタリアも割と先進国だが、どうも発展途上国らしい日本人のエルメスにはまだ早い。

その証拠に会話の内容で察したのか、今度はクライドさんに引いているエルメス。つーか俺も若干引いてるんだけど、そんなのお構いなしに、宇宙人達は何故かエロ談義を始めだした。

「だってよお、愛する女を気持ちよくさせるのは男の義務だろ?」

「……まあ」

「俺はボニーを愛してるからな! ボニーの為ならなんでもする!」  
「もう、クライドったらあ」

「……何年経っても仲良しでいいですね」

「まーな! 永久にイチャつき続けるぜ、俺らは! お前らは週に何回くらい?」

「クライドさん達は?」

「週5」

「多ッ!」

「お前らは一晩に何回くらい?」

「クライドさん達は?」

「3回くらい」

「週5で3回って多くないですか」

「そーか? ピ する? ミナは」

「クライドさん達は?」

「ボニーはする。ピ したことある?」

「クライドさん達は?」

「まだねえなあ。今度してみる。ピ　　は？」

「クライドさん達は？」

「俺らはある。つーかお前さつきから、質問返してばっかで一言も答えねえな」

「答えたらエルメスがキレルんで」

「お前的にはそっちのが面白いだろ」

「そうですね、今後に響くんで」

「ああ、なるほど」

隣のお嬢ちゃんが「余計なこと言ったら爆破するわよ」みたいな顔してて、とてもじゃねえけど暴露できない。恥ずかしがるエルメスを見るのは確かに楽しいが、今後どこるか命に係わりそうだ。いくらなんでも爆死はゴメンだ。

この会話の流れが気に入らないのか、お嬢ちゃんはいささか不機嫌そうにクライドさんに口を開く。

「まあ、クライドさんやめてくださいよお。観光の話してたのに」

「そーだっけ？ エロスの話してただろ」

「してなかったでしょ！」

「アンジェロがエロスって話してたじゃん」

「勝手にクライドさんがそう言っただけじゃないですか」

「それはお前がエロイ事考えてたからだろ」

「だから考えてませんって」

「じゃあ何考えてたんだよ」

「別に、大したことじゃありませんよ」

「大したことねーなら話せばいいじゃん」

「人に話すほどの事でもないんで」

つーか、もしやこの流れに発展したのは、俺のせいってことなのか。俺は何もしてないのに。言いがかり付けられたの俺の方なのに。

しかしなぜか雰囲気は一変。さっきまでの脅迫的な視線とは打って変わって、悲しそうな目をするエルメス。

「何考えてたの？」

「別に」

「また別について言う。もう、どうしてカイはいつも一人で考え込むの？」

「普通考え事なんて一人でするもんだろ」

「そうだけど、カイはいつも一人で悩んで、私にも誰にも相談とかしてくれないじゃない。誰にも話さないで一人で考えるから思い詰めちゃうんだよ。それは悪い癖だよ」

「いや、別に悩んでたわけじゃねーし」

「私には隠し事しないでって言ったでしょ？」

「いや、そうじゃなくて、本当にそんな大層なことじゃねーんだけど」

なにこれ、なんか大事？ 何この雰囲気。なんか「話してくれたっていいじゃない。私達を信じてよ」みたいな視線が集中してるけど、なにこれ。余計話しくいんだけど。本当に大したことじゃないのに、この歓迎ムード。逃げ出したい。

「いや、あんな、別に悩んでたとかじゃなくて、本当にただぼーっとしてただけだから」

「でも頭抱えてた」

「いや、別に悩んで頭抱えたわけじゃないんだけど。マジ大したことじゃないし、人に話すような事じゃねーから」

「ダメ！ 事の大小関係ないの！ なんでも私には話さなきゃダメ！」

ダメと言われても。俺の脳内で発生した悲しい妄想を語れと？



考え事の内容をはるかに凌駕する雰囲気の高さに、余計話したくない。しかし、宇宙人と俺を心配する可愛い彼女の視線がブツ刺さる。本当に仕方なしに、デカイ溜息を吐いて渋々口を割ることにした。

「ハア、マジで大したことじゃないんだけど」

「なに？」

「お前が誘拐されてきて、まだ出会ったばかりの頃にさ、俺とお前でアーサーとジュリオ様を仲直りさせられないかって話したの、覚えてるか？」

「うん」

「あの時俺はどうせ無理だって決めつけて、正直な話まともに考えてなかったんだよな。でも、あの時真剣に考えて、もし二人が仲直りしたら、今頃どうしてたんだろって。あの時お前は、仲直りしたら誰も死ぬ事ないし、みんなハッピーだって言ってたのに、そうならなかったことが今になって心底残念に思うし、仲直りに成功してたらきっと今頃俺とお前は恋人じゃなかったけど、ずっと親友で、みんな仲良く楽しく過ごしてたんだろって思っただけ。本当それだけ。大したこと……どした」

言いながら宙を仰いでいた視線をエルメスに戻したら、エルメスは何故か知らんが瞳を潤ませている。何故泣きそうになっただのか意味が分からん俺は内心大パニックだ。

エルメスはそんなパニックな俺の手を取って、見上げる。

「全然、たいしたことだよ」

「大したことじゃねーだろ。今更どうしようもねーんだから、考えるだけ無駄だ」

「でも、大事なことだよ」

「まーな。だから、これから俺らはお前の言う通り「みんな仲良く」過ごしてけば、「みんなハッピー」だろって思っただよ。アーサー

とはお前の事もあるし、ただでさえ相性悪いから仲良くはできねーけど、殺し合いにはならねーようにしようとは思った。つーか大したことじゃねーだろ」

「・・・カイには大したことじゃなくても、私には大したことだよ。こんな大事なことを大したことじゃないと思えるなんて、カイはいつも大事なことを一人で抱えすぎなんだよ。カイはいつも自分が辛いその後回しにして、全部自分一人で背負い込もうとするし、私に何かを相談してくれたことなんて一度もない。私はカイがいつか壊れちゃうんじゃないかって、心配だよ」

「別に、俺は・・・」

「また「別に」って言う。カイはいつもそう。カイは考えてることを、良い事も悪い事も、悩んでることも全部隠そうとするじゃない。私はカイに出会った頃から色々相談して、色々話聞いてもらって、今までいっぱい助けてもらったのに、私じゃカイの力にはなれないの？」

「そう言う事じゃねーし、俺もお前には色々助けてもらったけど。俺はただ、そういうことを人に話すのが嫌いなだけだ」

「でも・・・」

「ハア、もうそんだけだから。煙草吸ってくる」

「あ、待って」

もう、本当なんなんですかね。俺が何かしましたか。別に心配される覚えなんかないんですけどね。別に・・・「別に」口癖だな、確かに。

別に、は否定的な言葉だ。誰かに何かを言われて否定するために使う言葉。何に対して？ 行動？ 言動？ いや、思考と感情だ。それを誰かに言い当てられた時に、否定する為に。否定して、隠すために。

隠したい、知られたくない？　なんで、俺は隠したいんだろ。確かに、なんか嫌なんだよな。でも、エルメスにだけは愚痴った覚えがある。

ジュリオ様を殺した時と、インドに来たばっかの頃エルメスを救ってあげられないのが辛いつて愚痴ったし、婚約破棄騒動の時も信じるのが怖いと言った。その時にエルメスは、言わなきゃわからないと言った。

そう考えてみると、仕事の事は別として、俺は自分の悩みとか考えを自分から誰かに話したり、相談したりしたことが滅多になかった気がする。何か、そうしちゃいけない気がしたし、そうしたくもなかったし。

自分のことなんだし、自分のことは自分で解決できなきゃいけないし、なんかウジウジ悩んでるとか思われんのも嫌だし。まあ、勝手に見透かされて説教されたことはあったけど。主にゴルフとジユノ様。

部屋から出てホテルの屋上でそんな事をポケットと考えながら煙草吸ってたら、ドアが開いて、クライドさんがヘラヘラ笑いながら近づいてきた。

「本当お前クリスの言った通りだな」

「は？　アイツなんか言ってたんですか」

「繊細で単純で頭が固くて完璧主義。本心を晒すのが嫌いで思い込みが激しくて極端なうつ病のお山の大将」

「……………」

アイツ、インド戻ったら一回殴ろう。誰がうつ病のお山の大将だ。俺がうつ病になるか。

内心イラつく俺を尻目に、クライドさんは柵に背中を預けて相変わらずヘラヘラ笑う。

「お前のそう言うところは、クリシユナとよく似てるなあ」

「……どの辺が？」

「ただアイツは、それすらも隠してたけどな。綺麗に飾りつけた言葉と物腰の柔らかい態度で本心を隠して、分厚い爽やかスマイルの紳士の仮面をかぶって、笑顔で周りを騙してミナに心配なんかかけなかった。アイツが背負ってた苦悩なんて、ミナは気付きもしなかっただろ」

「……俺はまだまだ未熟ってことですか」

「ちげーよ。お前はまだ、そうならずに済むって事だ。そのクリシユナの段階を超えると、ジュリオに到達するわけだ。わかるか？」

「……なるほど」

「そこまで行きついたら、誰も信じないで、ウソついて欺いて、そう言うのが平気になっちまうぞ。今ならまだ、そうならずに済むって事だ」

「つーか、意外過ぎる。普段のクライドさんが宇宙人なだけに、意外過ぎる。クライドさんって、意外とマトモな人だったんだな。何も考えてなさそうな顔して、よく見てるもんだ。」

確かに、クライドさんの言う通りかもしれない。俺はとっくの昔に、いや、昔から隠すことに、抵抗はない。俺は嘘つきだし、歳を重ねるごとにどんどんウソも上手くなって、嘘を吐く事にももう、慣れた。

きっとその内罪悪すらも感じなくなつて、前にランスが言ったように、呼吸するように嘘を吐くんだろう。

欺くことに慣れたら本当の事を出すのがどんどんできなくなつて、その内どうでもよくなつて、いよいよ本物の詐欺師。ジュリオ様のできあがりだ。

「お前、なんでメガネかけてんの？ 吸血鬼なる前は目が悪くてメガネしてたのか？」

「や、昔からかけてましたけど、視力は良かったですよ。なんとなくかけて、かけはじめたらないと落ち着かないっつーか」

「はは、やつぱりか」

「やつぱりって？」

「これもクリスが言ってたけど、理由もなくメガネかけてるやつは本心を晒すのが嫌で、仮面の代わりにメガネしてんだと。多分クリシユナも同じ理由だったんだなあ」

「アイツ、好き勝手言いやがって。別にメガネなんて・・・」

「ほら、また「別に」つつた。ミナが言ってたぞ。俺に何でも話して貰えるボニーが羨ましいって。アンジエロは何も言ってくれない。悩んでることも、辛いことも、考えてることも。聞いてもいつも「別に」って言うてはぐらかす。愛してるとも滅多に言わない。アンジエロがそう言うてくれるのは、メガネ外するときだけ。だからアンジエロはメガネしてない方がいいってさ」

そう言いながら、クライドさんは手を伸ばして、俺のメガネを外した。

「お前がメガネを外すときは、どんな時？」

「・・・寝るときと、風呂と・・・エルメスを抱いてるとき、くらいです」

「それもたまにしかなくて、更にたまにしか言わないんだろ」

「・・・そうですね」

「俺、初めてお前の素顔見た。お前、メガネないほうが男前だぞ。これは俺が預かる。一服したら戻ってこい」

「え？ ちょっと!」

クライドさんは俺の装備を強奪して屋上から出て行ってしまった。つか、俺はメガネにそこまでの効果を期待した覚えはないんだけど。なんとなく、かけてたほうが落ち着くってだけで、かけないで人前になるのがなんか嫌っていうか・・・落ち着く・・・安心ってことなんだろうか。

目は口ほどに物を言うとか言うし、やっぱり心を覗かれないための、仮面のつもりだった？

でもなー、メガネ外したくらいで性格まではかわんねえよ。本心晒すんなざ絶対に嫌だ。

けど、なんで嫌なんだろうなあ。わからん。エルメスは考えてることも思ったこともポンポン言うけど、確かに俺は言わないな。文句意外マトモに言わないな、そういえば。

言わないのは、必要性を感じないからだ。自分の事は自分で処理すべし。自分のことは自分が一番よく知ってるし、自分の事は他人にはわからない。話しても、無駄。

無駄？　なんで無駄だと言い切れる？　人はそれぞれ価値観が違う。だからこそ俺には出せない答えを他人が持つてるかもしれないの。

本当は無駄じゃない。それをわかってるのに言わないのは、プライドだ。コレも昔ランスが言ってたけど、俺は大概の事は一人でできるし、一人でいたい。あの時ランスが言った通り、自分の願いは自分で叶える。基本的には。

ガキの頃からシュヴァリエの奴らを纏めて、隊長して、ジュリオ様の一番の側近で、ずっと人の先頭に立ってきた。俺的には頑張ってきたつもりで、今までの経歴からのプライドも勿論あるし、先頭に立つからこそ、俺が弱い部分を見せるなんてもつてのほかだ。

ガキの頃から、思ってた。俺がしっかりしなきゃ。俺が頑張らな

いと。俺がコイツらの兄貴で、リーダーなんだから。

責任。俺は、強くなきゃいけなかった。みんなを引っ張っていく存在じゃなきゃいけなかった。だから、誰かに弱音を吐いたり、相談したりして、弱い俺を見たみんなに迷いが生じる様な事があっちゃいけないだと思ってた。本当の俺は、そこまで強くもないのに。

でも、その表面上の自信と強さが虚勢だとしても、弱い俺を晒すよりは遥かにマシだったはずだ。少なくとも、今までは。

今は、状況が一変してしまった。俺が本当は弱いことなんて、きつとみんなにはわかっている。ジユノ様と契約してしまったから。エルメスが傍にいるから。

エルメスにも言われてしまったし、これ以上隠すのは、いや、いっそのこと隠してしまう事の方が無駄なんだろう。

それが分かったからと言って、エルメスに言われたからと言って、50年以上この性格だったんだ。そんな事ですぐに転換できるはずもない。

だけど、クライドさんの言う事もあるし、努力したほうがいいのか。でも、なんか嫌だ・・・チクシヨウ。部屋、戻りたくねえなあ・・・。

クライドさんに一服したら、と言われたのに、一服どころか5服しちゃってる俺。気まずさも手伝って6本目に火をつけてたら、悪魔、襲来。

「・・・今度はジユノ様ですか」

「うふ。あなたが唯一頼りにする私ですよ」

「本当は頼りたくないんですけどね」

「でしょうね。本当はあなたが一番頼りたいのはエルメスさんで、一番頼りたくないのもエルメスさんですものね」  
「そうですね」

さすがは知略の大侯爵。ジユノ様はクライドさんやガルフとはまた違った存在だ。この人は例外だ。仲良しクラブ的な感じじゃなく、カウンセラーとかプロファイラー的な感じた。それはそれで、俺のプライドが許さないんだけど。

そう言えば、初めてジユノ様に会った時も「この俺がカウンセリングとか、プライドが許さん」とか思った気がする。俺、プライドの塊だな。

「あなたがエルメスさんに頼りたくないのは、彼女に心配をかけるのが嫌だからでしょう?」

「まあ、そうですね。俺以上に辛い思いしてんのはアイツなんだし、俺の事で悩ませたくなんかないですから」

「じゃあ、話すべきですよ」

「俺の話、聞いてました?」

「勿論。既に手遅れだと言っているんです」

確かに、そうだ。エルメスにはもう、わかってる。さっきだって「心配だ」と言われてしまった。俺だってエルメスが悩んだり苦しんだりするのはわかるのに、何も言われなかったら心配になる。

エルメスだって俺と似たようなところはある。周りに心配をかけたくないが為に、辛さを押し込んでるようなところがあった。だけど、話せと言えば話したし、ちゃんと泣けるようになった。

「人と言うのは、「わからない」事に不安を抱くものです。何かあるはずなのに、それが何かわからない。何故かわからない。わからないことを模索して、五里霧中、暗闇を歩き続けるような感覚に、



人は恐怖と不安を抱くんです。あなたの行動は、人にその不安を抱かせる。表面にも出さないから、何を考えているのかわからない。聞いても教えてくれない。あなたの心は誰にも見えなくて、周りはどうしたらいいのかわからない。あなたが言葉を使わないから」「言わなくなつて、わかつてる奴にはわかつてるみたいですけどね」「そうですね。ですが、本人にしてみれば憶測の域を出ません。「多分こう思つてるはずだ。でも、本当のところはどうなんだろう」そう思つてますよ。あなたは特に隠したがるから、聞いても答えないとわかつている以上聞く事も出来ない。憶測が、余計に不安をおるんです」

「言葉は 怖いです。俺は嘘つきだし、正確に表現するのが難しいから」

「そうですね。ですが、言葉と笑顔は人が作り出した至高の発明品ですよ。他の動物にはその二つは使えないのですから、人が使わないのは勿体ないですよ」

「確かに、そうですね。でも、隠すことに慣れたら、出し惜しみしちまうと言つか」

「あなたは人の事では言葉を操れるじゃないですか。自分のことも同じように言葉を操ればいいだけですよ。エルメスさんを見ているのなら、わかるでしょう。自分を表現することに、そんなに怯える事はありませんよ」

「別に怯えてはいませんよ」  
「怯えているんですよ、あなたは。自分はこういう奴だと言い聞かせて、そう言う風にふるまって、周りにそう思い込ませて、あなたは自分自身をまるで芸術品の様に描き上げてしまった。自分の描き上げた自画像と、本当の自分にギャップがあることを知られるのを恐れている。自信にあふれた強く美しい絵の下に、繊細で弱い弱いデッサンが潜んでいるのを見られるのが怖い。そのデッサンを見た人に、失望されるのが怖い。完成品の絵の出来が良ければ良いほど、余計に。だからあなたは嘘でどんどん上塗りをしていく。一心不乱

に描き上げた絵はそれは美しいものでしょう。ですが、心の宿っていない物に、人は目を止めても、手を伸ばさないものです。いずれあなた自身も、そうなりますよ」

このままだといつかは見放される、ということだろうか。それは確かに、自分を知られることよりも、恐ろしいことだ。俺は一人が好きだけど、孤独が好きじゃいけない。特にエルメスと出会ってしまったってからは、より孤独を怖いと思うようになった。

孤独であるという事は、恐ろしいことだ。ジュリオ様の事を考えると、それがどれほど恐ろしい事なのか、容易にわかる。それなのに、俺は自ら孤独になろうとしているんだろうか。そうあれかし、と、孤独へ。

「あなたの気持ちもわからなくはありませんが、少なくともエルメスさんはそれを望んでいません。あなたと共に生きることを望んでいるんです。生きると言うのは生命機能を維持すると言うだけではありません。共に歩み、共に笑い、共に泣き、共に悩み考えることが、共に生きるという事なのです。それが人が作り出した「結婚」というシステムで、「家族」というコミュニティなのです」

家族なんだから言いたいこと言っただけぞ。それが普通だろ。もう一人で悩むなよ。

突然、思い出した。インドに来たばかりの頃、俺がエルメスに言った言葉。思い出して、思わず頭を抱えた。

俺、スゲエバカじゃん。エルメスに言ったことを、俺が誰よりも実行してないなんて、ちゃんちゃら可笑的。人にやれって言っただけで、自分が出来ないなんて、本当に俺はバカなんじゃないか。つ

「か、いつそのこと、それこそプライドが許さないんだけど。」

俺だって、本当はわかってるんだ。コミュニティを築くためのフ  
アクターとしてコミュニティケーションが重要だなんて、わかってる。

コミュニティを構築するためには不可欠のもので、エルメスの心  
の内を知らないという事がその時の俺には不安で、恐怖で、だから  
そう言った。

エルメスの苦悩を解放する為と、自分の不安を払拭するためにそ  
う言ったのに、俺は隠して周りを不安にさせてた。 バカ

バカしい。俺は本当にバカだ。

「全く、私は仮にも悪魔であって、あなたのカウンセラーではない  
んですが」

「………すいません」

「ですが、これもエルメスさんの為です。これ以上エルメスさんか  
ら嫉妬を受けるのもイヤですし」

「嫉妬？ エルメスが、ジユノ様に？」

「ええ。「ジユノ様には何でも話すのに、私には話してくれない」  
となぜか怒られましたよ。あなたのせいで」

「それは、すいませんでしたね」

「あなたは今まで本気で付き合ってきたことがないようでしたから、  
わからないのでしょうか。かつての恋人たちの抱えていた不安も、今  
エルメスさんが抱えている不安も。わからないどころか、ろくに隠  
蔽できてもないいくせに、見て見ぬふりをしてきた。完璧に隠蔽で  
きる人にしか、見て見ぬふりは許されませんよ」

「そうですね。今更、無駄なんでしょうね」

「ええ、無駄です」

「俺、無駄なこと嫌いなんですよね」

「嫌いなことは、しなくてもいいんですよ。あなたは本来、好きな

「ことしかしたくはないでしょうし、無駄な事をしろと強要する人もいません。無駄は省いて然るべきですよ」  
「そうですね」

悪魔なカウンセラーにはお手上げだ。まんまと言いくるめられた。それがエルメスの望みだと言っのなら、俺が叶えないわけにはいかない。努力、してみるか。ちよつと抵抗はあるけど。

「カイさんは、メガネをかけていない方が、いい男ですよ。エルメスさんも惚れ直すでしょう」

俺にトドメの一言を浴びせて、ジユノ様はその場から消えた。それを見送ってとうとう10本目に火をつけていたら、ジユノ様と入れ違いで今度はエルメスが現れた。

少し驚いて、なんだか急に恥ずかしくなった。エルメスが、なぜか俺のメガネをかけてたから。

「お前、メガネ似合わねえな」

「カイは似合ってたけど、似合いすぎて嫌だったよ」

「嫌だったんか」

「うん。だってメガネかけてる時のカイは平気で嘘つくから」

「メガネ、クライドさんに強奪されてお前のモンになったみてーだけど、また買うぞ」

「いいよ。買うたびに叩き割ってやる」

「メガネ、そんな重罪？」

「重罪。カイのカッコよさ半減させるアイテムなんかいらんない」

「素顔の俺はカッコいいわけ？」

「本当のカイは、ウソのカイよりもずっとカッコいいよ。本当のカイは、優しくて、繊細で、真面目で、厳しくて、怖がりで、恥ずか

しがり屋さんで、私の事が大好きで、強い人。超カッコイイ」

「あんまり強そうにもカッコよくも聞こえねえんだけど」

「強いしカッコいいよ。私ね、ずっと強くなりたいてって思ってた。だから、クリシュナやカイみたいに、辛いことがあっても、一人でそれを乗り越えて立ち上がれる人は、すごく憧れる。クリシュナが言ってたの。理不尽は存在して然るべき。だから理不尽による絶望に足を止めていないで、これから自分にできることを考えて実行した方が建設的だって。そう言う風に考えられるクリシュナみたいになりたかった。クリシュナもカイも、それを当たり前に行ける人だから、私はきつと好きになっただね。だけど、それをできるようになるまでに発生する苦悩と葛藤を押し殺すのは、弱さだよ」

「・・・そう、かもな」

「カイ、私はカイが思ってるほど、悲劇のお姫様じゃないよ。私だってカイの力になれるよ。支えになれるくらいの力は持つてる。みんなだってそうだよ。本当の自分を他人に知られるのは怖いことだって私にもわかるよ。ウソの自分は傷ついても痛くないけど、本当の自分が傷つくのはすごく苦しいから。だけど、私はカイになら傷つけられてもいいよ。私はカイを傷つけるつもりはないけど、もし傷つけてしまったとき、本当のカイを傷つけた相手が私じゃ、不満？」

「プツ、ハハハハハハ！」

「もう、何笑ってるのよ」

そりゃ笑うだろ。なんだこの妙な交渉術。なんで上から目線でドM宣言してんだコイツ。

思わず笑い出したら、エルメスは不服そうな顔をして覗き込む。覗き込んできたエルメスからメガネはずして、屋上から投げ捨てた。

「ポイ捨てしちゃだめだよ」

「いんだよ」  
「空からメガネが降ってきたら、下を歩いている人ビックリするよ」  
「八八、だろうな」  
「もう、いきなり笑ったと思えばメガネ捨てて。意味わかんないよ」  
「わかれよ」  
「わかんない！」  
「お前なら俺を傷つける相手として不足はないし、メガネ外してる時しか「愛してる」って言わねえから、その方がいんだろ」  
「じゃあこれからいっぱい言ってくれろ!？」  
「気が向いたらな」  
「何でも話してくれる？」  
「気が向いたらな」  
「もう！ 向いてよ！」  
「うるせーな。よっぽどノリノリじゃなきゃ言いたくねーの」  
「ちなみに今は？」  
「向いてる」  
「じゃあ言って？」  
「………愛してる」  
「もう！ サラツと言ってるっていつも言うのに！ 本当カイは照れ屋さんなんだから！」  
「うるせえ」

なんかノリでメガネを捨ててしまった。さすがに3人がかりで説教されて、折れないわけにはいかないだろう。ちよっとボーっとしてたくらいで、まさかこんな大事になるとは思わなかった。でも、こんだけ寄ってたかって言われるって事は、心配かけてたんだなあ、と反省した。

よくよく考えてみれば、ジュノ様と契約したことも、エルメスから記憶を消去した時も、俺は誰にも相談しないで勝手に決めてしま

った。スゲー重要なことなのに一人で悩んで、勝手に決めて、拳句に周りを巻き込んで迷惑かけて心配かけて。

あの時、せめてガルフとかガラードとかに相談してたら、別の道が開けてたかもしれないのに、そうしなかったのは俺がバカだったせいだ。俺が弱かったから。糾弾されて責め立てられて軽蔑されるのが怖かったから。バツカみてえ。

ちよつと考えりゃわかんじゃん。契約して俺が死ぬまでの間にみんながどれだけ嫌な思いするか。自分がどれだけ苦悩する羽目になるのか。それに比べたら、全員からリンチされてた方がマシだったよな。

まあ、過ぎたことはしょうがない。クリシユナさんの言う通り、これからできることを考えた方が建設的だ。

とりあえず今できる事を、と思って、エルメスを引き寄せて、キスをした。

「急に、どうしたの？」

「愛してる」

「・・・もう一回言って」

「愛してる」

「もつと」

「愛してる。お前は？」

「私も、愛してる」

「愛してるよ、エルメス」

これからは少なくとも、最低でも、「いい事」くらいは言えるようにしようと思った。

もう、メガネはいらねーか。

拝啓   アーサーさん

今日、インドに帰国しました。どこに行っていたのかと言うと、日本に行っていました。カイが「時効成立してるから、両親に会いに行けよ」って言うってくれて、ジユノ様のお力で、ボニーさんとクライドさんと5人で出かけてきました。

私が離れていた17年の間に、日本も結構変わっていました。携帯電話とか、家電製品の進化っぷりにすごくびっくりして、トリスやベデイが来たら喜びそうだなあと思ったし、歌舞伎町は相変わらずサービス精神の塊で、たまたま言ったキャバクラのママが私の昔の友達で、すごく盛り上がって、今度はみんなを連れてきてあげようって思いました。

泊まったホテルは創業80年だとかで、日本では政府要人御用達で有名なガーディニア・プレジデントホテルに泊まりました。そこは山姫さんの系列企業らしくて、支配人さんも吸血鬼でした。

観光で秋葉原にも行ったんですけど、そこで驚くべき出会いがありました。高校時代の友達のつばさちゃんという子がいるんですけど、その子に再会して、つばさちゃんのペットのアレスさんは、なんと異世界からやって来た人らしいです。山田氏と田中氏の推察はバッチリ当たっていたわけです。



しかも驚いたことに、ジユノ様とアレスさんは敵対関係にあるらしくて、メイド喫茶で一触即発の危機でした。それでケンカを阻止するために、アレスさんと私が鬼ごっこ勝負して、正直な話勝負にもなりませんでした。当然私圧勝です。アレスさんはつばさちゃんに怒られて、渋々諦めて怒りながら帰りました。

本当あの二人は最高に面白いです。遊びに来てねって言った「気が向いたらね」とかそっけなく言われちゃったけど、ちゃんと来てくれるあたりつばさちゃんって優しい。なんか女版カイみたい。

私、こういう人が好きなのかもしれません。つばさちゃんとアレスさんも結婚式に来てくれることになって、いよいよ嬉しいです。

案の定つばさちゃんとカイは意気投合しちゃったみたいで、つばさちゃんとカイとジユノ様と三人がかりでアレスさんを虐めて遊んでました。凄く楽しそうに。この3人はどうも邪悪で無敵です。この3人にアーサーさんが加わったらもう、最強ですね。誰も勝てないと思います。

そう言えば昔アーサーさんとカイにお仕置きだつて追い回された時、最狂のアーサーさんと最凶のカイの二人が組んだら最強だ！と思って震えあがった覚えがあります。その時は本気で自分の命を案じましたよ。

カイはつばさちゃんとは仲良くなりましたけど、同じ似た者同士でもアーサーさんとは妙なところで意気投合してた以外は、仲悪かったですねえ・・・本人も仲良くは出来ないって断言してたし、まあケンカしないならそれで妥協しようと思います。

両親には、初日に実家に帰って、北都のことを話しました。アーサーさんに昔言われたとおりに、私が人殺しをした事は相変わらず内緒です。

北都の事は、二度も死なせるようなことになってしまつて、その事を考えると両親に合わせる顔がないと思つて、すごく辛かつたです。本当は言いたくなかつた。

だけど、北都を出してつて言われても出してあげられない。言うしかないけど、言うのが辛い、そう思つてたら、カイが「無理すんな、俺から話そうか？」つて言つてくれて、その言葉に甘えたくなくなつたけど、自分の弟の事なんだから、ちゃんと自分で言わなきゃつて思つて、話しました。

怖かつたです。北都が死んだと聞いて、両親が泣くことまでは想像つきました。だけど、もしその事を私のせいだつて責められたらどうしようつて。確かに私のせいだけど、両親から面と向かつて言われてしまつたら、お前が死ねばよかつたのにとかわられてしまつたらどうしようつて、すごく怖かつた。

でも両親は話を聞いて泣いた後、何があつたのか尋ねられて、ヴァチカンから攻撃を受けたつて話したら、私が無事でよかつたつてよく耐えたねつて言つてくれました。それから、ボニーさんとクライドさんとカイに、私を支えてくれてありがとうつてお礼まで言つてくれました。

凄く嬉しくて、私は本当にこのお父さんとお母さんの娘で良かつたつて、心の底から思いました。お父さんとお母さんの私と北都を思う愛が凄く嬉しくて、涙が零れました。

北都の遺影の前で、大きくなつて出てきた北都の話をしたら、お父さんとお母さんはすごく切ない表情で、「みたかつたなあ」つて私も見せてあげたかつた。もう、それは叶う事がないのだと思うと、とても悲しいです。

だけど、両親がホテルに遊びに来た時に、カイは両親に宣言しました。

「北都の生まれ変わりを絶対に日本に連れてきます。いつか必ずお父さんとお母さんに会わせませす。いつになるかわからないけど、絶対に。約束します」

絶対と言い切るからには、恐らく根拠があるのでしよう。ジユノ様にお願ひするのか？ でも、何にしても北都の生まれ変わりにまた会えたら、私も嬉しい。両親もカイのその絶対宣言に驚いてたけど、あまりにも自信満々にカイがそう言うものだから、「じゃあ、楽しみにしているよ」と笑ってくれました。本当、カイっては何やらせてもカッコいいです。

そんなカッコいいカイは、この日本旅行でカッコよさに磨きがかかりました。メガネ捨てちゃったんです。それで、最初は両親に結婚の話の内緒にしろって言われてたのに、やっぱり話そつって。

「クライドさん達にも口止めしちまったけど、やっぱり考えなおした。色々懸念はあるけど、こういうことはちゃんと両親の了解をもらおうべし、と思っとな」

「じゃあ、両親も結婚式に呼んでいいの？」

「ああ、でも、その前にクリシュナさんのことを話せ。クリシュナさんのことを話して、その了解と理解を得られた上じゃなきゃ、俺のことを話すのはダメだ」

「クリシュナの事、どのくらい話せばいいの？」

「全部だよ、全部。クリシュナさんは隠さなきゃいけないような相手じゃない。まあ、クリシュナさんのせいで無駄にハードルが上がる気はするけどな」

「カイも隠さなきゃいけないような相手じゃないよ」

「・・・」

「プツ、アンジェロまた照れてるし」

「照れてません」

無言でブイです。照れ屋さんなのは相変わらずで、こういうカイは可愛いと思います。でもそれを本人に言ったら怒られるので、内

緒です。カイのことはシャンティとガルフとガードとランスは理解が深いので、この4人とカイのネタで盛り上がるうと思います。

ホテルにやってきた両親はひとしきりホテルに感動して、お父さんは会社をもう定年退職してたけどやっぱり血が騒ぐのか、あちこち見て回って、このホテルのデザイナーが有名な人だって気付いて大はしゃぎしていました。

一応セレブの集うホテルなので、庶民丸出しなお父さんは少し恥ずかしかつたんですけど、KYなのは今に始まったことじゃないので、まあいいです。

部屋に通して、早速クリシュナの話の切り出しました。

「あのね、実はね、私、バツイチなの！」

「正確には未亡人ですよ」

「カイさんと結婚したいんだらう？ 今日はそのOKの返事をしに来たんだよ」

私とカイは超ビックリです。「なんで知ってるの!？」と両親に詰め寄ったら、どうもジユノ様とボニーさんとクライドさんが、私たちの知らない間に勝手に両親に話しちゃったらしいです。それで説得してくれたって。

最初ボニーさんとクライドさん達だけじゃ説得できなかつたらしいんですけど、ここはさすがの知略の大侯爵、ジユノ様です。私には想像もつかないような巧みな話術で、まんまと両親を言いくるめてしまったらしいです。

「でもねえ、多分そうなんじゃないかとは思ったのよ」

「え？ どうして?」

「ミナとカイさん、お揃いの指輪をしているじゃないの」

「ああ！ そっか!」

「そういえば。うつかりしてた・・・」

「カイくん、君にはしつかりしてもらわなきゃ困るぞ。ミナは母さん似だから、ボヤつとしてると妙なことになるかねないからね」

「・・・すみません」

「カイ、なんで謝るのよ。ていうかお父さん、妙なことって何よ」

「お前昔っからすぐ迷子になったり、財布を落としたり、犬に追いかけてボロボロになって帰ってきたり、川に落ちたり、トラブルの申し子だったじゃないか」

「トラブルの申し子って！ まあ、微妙に否定できないけど」

まあ結局両親は許してくれることになったみたいです。それは嬉しいんだけど、なんか釈然としませんでした。しかもこの続きがひどいんです。

この会話を聞いてたボニーさんが急に笑い出したかと思ったら、私が一生内緒にしようと思ってたことを両親に暴露しちゃったんです。

「パパ、ママ、聞いてよ。ミナってばさあ、まだあたし達がフィレンツェいたころ、ギャングと大喧嘩して警察に捕まったんだよ」

「ギャアアア！　なんでそれ言うんですかあああ！」

「ああ、あの後アンジェロは事件のもみ消しで大変そうだったなあ」「懐かしいですね。確かに大変でしたね。各方面から嫌味を言われました」

「ミナ、お前・・・警察沙汰なんて、俺はそんな娘に育てた覚えはないぞ！」

「うう、ごめんなさい・・・」

説教ですよ。そりやもうまんまと、説教ですよ。37にもなって両親から「このお転婆娘！」って説教ですよ。本当勘弁してほしいです。10年以上前の事なのに！

まあ確かにあの後ジュリオさんとカイは事件のもみ消しに四苦八苦してましたからね。迷惑かけたなあとは思いますが。

でも、お仕置きとか言って撃たれたんだから、おあいこだと思う

んですけど。かといってその時撃たれたなんて話したら、さすがに結婚に反対されちゃうと思って、口をつぐむほかなかったです。なんか悔しい。

そんなこんなで嬉しいやら悲しいやら悔しいやらで、結局両親はイブに結婚式にインドまで来てくれることになりました。結果的にすっごく嬉しいです。本当ボニーさんとクライドさんとジユノ様には感謝。

ジユノ様は急に用事を思い出したとか言って丸一日消えてたけど、どうやら用事とはこの事だったようです。ジユノ様はカイの願いを成就させるために、私のことを真剣に考えてくれるから、本当頼りになります。カイ様様です。

でも、そんな頼りになるジユノ様に私は密かにジェラシーファイヤーを燃やしてました。だって、カイは私には何にも言わないし全然頼ってもくれないのに、ジユノ様にばかり頼るんですもん。なんかジユノ様にカイとられちゃったみたいな感じがして、悔しい思いをしてました。でも、それを思い切つて、というか怒りに任せてジユノ様に言つたら、笑われました。

「確かに私はカイさんを奪っちゃいますね。カイさんの魂を。それで恨まれるならまだ理解のしようもありますが、それ以外でエルメスさんから恨まれる覚えはありません。厳密には、仇として恨まれる覚えもありません。カイさんが死ぬ事は、私が言い出したことではありませんから。カイさんが私と契約したことも、カイさんが私にしか頼ろうとしないことも　　正確には私以外に頼れないのですが、まあそれも、カイさんが勝手に自分一人で決めて行っている事ですから、全責任はカイさんにあります」

ジユノ様厳しいー！　さすが悪魔、全然容赦とかありません。

それ言われちゃったらもうこっちから反論できません。おっしやる通りです。それで言い返せなくて、確かなあ、と思わず納得したら、続けてジユノ様はこう言いました。

「カイさんは、大小関係なく全部一人で決めて全部一人で実行するから、全責任を一人で負う羽目になるんです。分散と言う発想が彼にはありませんね。仮にあつたとしても、カイさんのプライドがそれを許さないのでしょうか。彼のプライドがそれを口にするのを憚らせるのです。ですから、それに気づいたなら、エルメスさんの方から分散するように、自分や周りの人たちと分かち合うべきだと、進言しなければなりませんよ。カイさんはそれに気づいても、自分から言い出すことはできません。支えたいと思うなら、彼に甘えてばかりいないで、あなたから手を差し伸べてあげるべきですよ。」

ジユノ様さすがー！　ほんつとおっしやる通りです！　ほんつとジユノ様スゴイ！

確かにジユノ様の言う通り、私は今までカイに頼って甘えてばかりで、聞いてもらって、してもらえばかり。言ってくれない、話してくれないなんて文句言って、どんだけ甘えん坊だって言う話ですよ。お前がやれよってという話ですよ。

言わないなら言えるようにしてあげればいいし、話してくれないなら聞き出せばいい話です。カイが一人で背負うのが嫌だと思っていたのに、そんな事も気づかないで結局私はいつまでたつても甘えん坊です。

ジユノ様の話を聞いて、私って恥ずかしい奴だなあと思いました。カイにとっては自分から話すことも苦痛なんでしょう。それを無視して、話してよ！　なんて、私は鬼かっつていう。カイの事をもつとちゃんと真剣に考えて、いつかカイの心を読んでやるぞ！　と心に決めました。それができるまでは、しつこくインタビューしていきます。

でも、カイはカイでジユノ様にお説教されたらしくて、メガネ捨てて、「お前は俺がメガネしてねえ方がいいんだろ」って。どうもクライドさんがチクツたようです。私が「クライドさんと違って、カイはメガネ外した時しか愛してるって言うてくれない！」ってエキサイトしたもんだから、気遣い屋さんのクライドさんも、お説教したようです。

クライドさんの意外な一面を見たってカイは言ってたけど、確かにクライドさんって意外と気遣い屋さんなんですよね。ベトナムで私がアーサーさんに刺された時も気遣ってくれたし、誘拐されて城に帰って来た時も、本当のことを話してくれて、多分色々オブラートに包んで、私あまり傷つかないように話してくれたんだろうし。

「クライドさん、ああ見えて洞察力鋭いんだよ。結構人の深いところ見てるのよ、昔から」

「そうみたいだな。ただの宇宙人だと思ってたけど、なんか、見直した」

「宇宙人だと思ってたの？」

「思ってた」

「アメリカ人だよ」

「そう言う事じゃねーよ！ バカ！」

「もう、冗談なのに。すぐ怒るんだから」

「うるせえ！ お前の日頃の行いのせいだろ！」

まあ、わざとですよ。ちゃんとわかってますよ。そんな怒んなくていいのに、相変わらず冗談が通じません。大体、日頃の行いとか言われても、意味わかんないです。日頃の行いなら、カイの方がよっぽど悪党です。

本当短気なんだから、そんなすぐ怒って、カイのアドレナリンは他の人のよりも多忙なんじゃないかと思うと心配です。



ボニーさんはボニーさんで、私もあんまり人の事言えないけど、相変わらず能天気です。

「てゆうーかミナはさあ、アンジェロからそれ聞いて、どうしたいの？」

「どうしたいのって、だって、一人で悩んでほしくないでしょ？」

「一人で悩みたいなら、ほっときやいいじゃん」

「ええ？ そう言うわけにはいきませんよ。ほっとくから魂売り渡したりしちゃったんですよ、きつと」

「本人がそうしたいからそうしただけじゃん。アンジェロは基本自由人なんだから、やりたいようにやらせときやいーんだって」

「ええー・・・でもお・・・」

「だってさあ、アンジェロってああしろ、こうしろって言って、素直に言う事聞く奴じゃないじゃん。アンジェロは子供じゃないんだらうし。なんかクラウディオとかレオとかが言ってたけど、アンジェロは人に頼るの嫌いで、何でも自分でやりたがるらしいじゃん。でも、それでもミナがどうにかしたいなら、ウマイ事掌で転がせるように、ジユノ様かクリスに悪女修行つけてもらいなよ」

思わず納得です。確かにおっしゃる通りです。あの男は一筋縄じや行かない頑固者です。

絶対私の言う事なんか聞いてくんない。今までの経験上、絶対聞いてくくんない。だって、私に絶対服従宣言した直後に、反逆するほどですからね。恐ろしい人です。

ボニーさんの言う通り、ジユノ様とガルフに悪女修行をしてみらおうと思います。ジユノ様は勿論、見る限りガルフも上手いこと掌で転がしてますからね。カイもガルフには時々説教されたりとか、ちよつとくらい頼ったりはしてるみたいだし。それでも悩みとかを打ち明けたりはしてないみたいですけど。なんか、昔ガルフが言ってました。

「アイツはただの見栄っ張り。ただのカッコつけ。普段の自信満々で威張ってて優秀で何でもできる鋼鉄の男は、メガネ外したら、本当は硝子の少年だぜ。メガネはアイツの変身アイテムだからな」

硝子の少年って、変身アイテムって・・・！ どの世界のスーパーマンでしょう。カイはクリシュナの事をスーパーマンだと言ってたけど、どうやらカイもスーパーマンだったようです。なんか変な。そう言えばスーパーマンって普段はメガネの気弱な新聞記者でしたねえ。

でも、確かに思い当たる節はありましたね。カイは普段は自信満々で「俺に不可能はない」とか「俺は天使の再来だ」とかいつも大袈裟な事ばっか言ってる、あんたはナポレオンか、とか思ってたんですけど。

フタを開けてみると、自信なんて全然なくて、途端にメソメソしちゃうんです。「俺って最低」「俺って役立たず」「俺はダメだ」「よし、死のう」何度か聞きました。聞くたびに、この人大丈夫かになって、心底心配になります。ギャップがヒドすぎて。シャンティとランスが「この異常者を病院送りにしよう」って企むくらいです。確かにガルフの言う通り、硝子の少年かもしれません。

今になって思うと、クリシュナももしかしたらそう言う本質を隠していたんじゃないかって、思い至ります。

カイは不満爆発したら、大暴れするか、なんか色々ブツブツ言ってますけど、クリシュナも怒った時は、口を挟む隙間もないほどのマシンガントーク炸裂させてましたからねえ。今思い出しても、アレは参ったなあ……。クリシュナにマシンガンされた時に、言われました。

「ミナはずっと、付き合った最初の頃から、僕の苦悩をわかってな

い！」

正直、全然わかってませんでした。クリシュナ、何か悩んでたんだ？ みたいなの。よく考えたら、そりゃそうだよなって話です。夫婦なのにずっとアーサーさんに気を遣ってたし、あの頃はアーサーさんとジュリオさんがなんか取り合いしてたし。カイもちよっかい出してきて、それにも怒ってたみたいだし。

あの頃は、間違いなく私はクリシュナを愛してたし、クリシュナしか愛してなかったけど、それを表現する術が言葉しかなくて、それもきつと足りていなくて、クリシュナはきつと不安だったんですね。なにより周りには男だらけだったわけだし、そりゃあ心配にもなりますよね。

結局あの頃から私はクリシュナの優しさに甘えてて、クリシュナが悩んでたりしたことにもちつとも気づいてあげられなくて、より、クリシュナを苦しめていたのかもしれない。

ジュノ様に言われなかったら、きつと私はカイにも同じように甘えて頼ってばかりで、苦しめ続けることになっていたのでしょ。そう言えばカイに言われました。

「どーせ俺もクリシュナさんの二の轍を踏むんだろっよ」

カイはどうやら最初から覚悟していたようです。でも、気付いたからにはそうはイカ下足です！

絶対悪女になって、カイを掌で転がします！　カイが気付かないうちにいう事聞かせて、調教してやりますよ！

敬具

## シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

この10年で、笑い者にされるのには随分と慣れた。

「おかえりー。あれ？ カイ、メガネは？」

「壊したのか？」

「捨てた」

「なんで？」

「別に」

帰ってそうそう、当然ながら顔にあった物が無くなってんだ。すぐ気付かれた。みんなは物珍しそうな、まるで珍獣を見るような眼を俺に向ける。が、俺は無駄な情報をクライドさんに提供しやがった賢者の姿を探して、見つけた瞬間にニヤリとされた。

「ガルフ、テメエちよつとツラ貸せや」

「ハツハツハ、ああ、いいぞ。スピンのお前に殴られるなら本望だ」

「いい度胸じゃねーか」

「え、ちよつと、カイ。ケンカはダメ！」

「うるせえ」

「ダメ！ そう言うのやめなさい！」

ガルフをリンチしようと思立っていかうとしたら、ガルフを心配するエルメスに怒られた。適当に振り切ろうとしていると、ガルフが後ろから肩を叩いて、口を挟んできた。

「エルメス、心配すんな。コイツは確かに俺を殴りたいだろうけど、それ以上に男同士の話をしたくて仕方がねーんだよ。エルメスも知ってるだろ、カいは照れ屋だから、素直に「相談したいことがある」って言えねーんだよ」

「あ、そっかあ。じゃあごゆっくり」

「ハッハッハ、ありがとう」

本当、何なのこの賢者。なんでそんな勝手なこと言うわけ？ 確かにガルフ殴ってから話したいことがあるかと思ってたけども、なんで見透かすのコイツ。いつそ怖ええ。コイツもはや読心術とか使えんのか。

俺から放たれる疑惑の眼差しに気付いたガルフは、いつも通り半笑いだ。

「お前のメガネは、やっぱペルソナだったみてーだな。目が口ほどに物を言ってるぞ」

「言ってるよ」

「や、ベラベラ言ってる。余計なこと話しやがって、なんで見透かしてんだコイツ、メガネしてないスピンの顔を人前に晒すのが恥ずかしい、メガネ捨てた真相をこの場で他人の口から語られて恥をかくよりも、直接俺を責めて礼でも言っという方がまだマシ。ってところか」

「……マジお前なんなの」

「ハツハツハ、俺はエスパーだからな。俺とエルメスとジユノ様に隠し事はできねーぞ」

「お前エスパーだったんか」

「お前に関してはな」

「怖ええよ」

「ハツハツハツハ」

いつの間にかエスパーになってしまったらしいガルフに思わず溜息だ。溜息とともに、何故か殴る気も失せてしまったんだが、まあいいやと二人で連れ立って部屋に行った。

ソファに腰かけたガルフに、「本当お前は可愛いよな」と何故か褒められた。その褒め言葉にイラつく。

「可愛くねーよ。ふざけんな」

「俺から見たら可愛いんだけどねえ」

「気持ち悪いからやめろ。俺は男のケツには興味ねえぞ」

「俺もねーよ。俺が興味あるのは、これからのお前とエルメスが、どう幸せになるのかなって事だけだ」

「どう・・・？」

「そう。今までお前は誰にも何も話さなかったし、勝手に決めて一人で行動してきた。だけど、メガネ捨てたって事はそれをやめようと思っただって事だろ？ 今までのお前は一人で生きて、エルメスだけを幸せにしようと思っただみてーだけど、これからはエルメスと二人で生きて、二人で幸せにならなきゃと思っただる。良い事も悪い事も共有したいって」

「・・・そうだな」

「まあ、急には無理だろうけど、ちよつとずつ頑張ればいいんじゃないか。お前が昔エルメスに言っただる。俺らを信じて、頼れ。みんなお前の味方だって。昔は確かに、お前が誰かに頼ったり甘えたりすることは許されなかった。でも今は違う。リーダーとしての

お前じゃなく、夫としてのお前と生きることを望む女がいるんだから、お前が頼ろうが愚痴ろうが、文句を言う奴はいねーよ。たまに愚痴こぼして嫁に花持たせてやんのも、夫婦円満の秘訣だぜ」  
「そうだな」

独身のくせに何言ってるんだか。ガルフの言葉に思わず笑ったら、ガルフも半笑いの上に、更に笑う。

「お前、メガネしてねー方がいい男だな。ちゃんと笑えるじゃねーか」

「うるせーな。俺は生まれつきいい男だ」

「ハツハツハ、そうだな。もっと笑えよ、これからは」

「気が向いたらな」

「お前は本当可愛いなあ」

「可愛くねえ」

なぜか可愛いを連発される俺。コイツの目には俺はどう見えてんだ。ちよつと怖い。

それにしても、ガルフはマジですごい。俺は計算で他人の思考を読むタイプで、感情とかは全くわからん。自分で言うのもなんだが、人の気持ちかわからないデリカシーのないタイプと言える。

しかしコイツは感情も思考もわかるらしい。俺に関してはエスパーとかふざけたことぬかしてるが、世の中には恐ろしい奴がいるもんだ。

とか考えてたら、急にガルフに肩を叩かれた。

「なんだよ」

「厳密にはお前限定じゃねーけど」

「は？ なら、誰でも？ いや、っーか・・・」

なんでそこまで読めるんだよ。俺何も言っただけなのに、マジで怖ええ。と思っただら、ガルフは急に真顔になる。

「俺実はリアルにエスパーなんだよな。誰にも言っただよ」

「は？」

「あースッキリした。やつぱ人に話すと気が楽になるな」

「え、は？ いや、なに言っただのお前」

突然の「俺はエスパー」告白。意味がわからん。なんか本人は真顔から一転、スッキリした顔して相変わらず半笑いだけども、俺は意味がわからん。

俺のテンパリ具合に気付いたのか、ガルフはソファに肘をついて、頬杖を突きながら解説を始めた。

「俺の吸血鬼の能力だよ。右手で触った相手の心が読める」

「は？ ウソつくな」

「マジで。じゃなきゃ、お前がエルメスに惚れてることを、あんな早い段階で気づくと思うか？」

そう言われてみればそうだ。俺はかなり演技派のはずだし、ガルフが言ってきたのは俺が自覚して即だった。

「てことは、お前・・・あ、だからなんかお前、折に触れて肩叩くのか！」

「正解」

「おま・・・マジで怖ええ」

「心配すんな。俺もかなり訓練したから。右手じゃなきゃわかんねーし、俺が意識しなきゃ心は読めない。それに表層しかわかんねーしな」

「てことは、訓練する前はただ漏れか」



「そーだな。けど正直なところ、読まれてるやつの方がまだマシだけどな。世の中には知りたくねーこともあるからなあ」

「……まあ、それもそうだよな。左は？」

「左は逆」

「逆？」

逆ってなんだ？　と違ってたら、ガルフが左手で俺の肩を叩いた。その瞬間に、頭の中に響く声と、たくさん画像。　どうも左手の逆と言うのは、読みこんだ情報を解放する能力らしい。が、俺はその内容に激しく動揺した。

シスター姿の隊長時代のエルメス、俺とエルメスが喧嘩してるところ、インドの町中で、笑顔で見上げてくるエルメス、腕の中で泣きすがつて、時計を握りしめるエルメス。ガルフの部屋で涙を零すエルメス。その画像から、全部ガルフ視点のものだとわかった。

「本当クリスって大人だよ。アンジェロも見習えっつーの」

「クリスってなんでいつも笑ってるんだろ。常に笑顔の人って、隠し事してそう」

「カイは硝子の少年なのか……どの辺が？　でも、ガルフはカイの事本当によくわかってるんだなあ。ガルフって、本当はどんな人なんだろっ」

「やっぱりガルフも私にウソ吐くんだ。クロと仲良かったって事は、私がどんな思いをしているのか知ってるくせに。ヒドイよ」

「ガルフもみんなも、クロがどんな人だったか知ってるくせに、どうして教えてくれないの。どうして私に隠すの。みんな、本当は私の事なんかどうでもいいんだ」

「ガルフはいつも優しい。こんな辛い思いをするなら、いつそのことガルフを好きになりたかった。でも、ダメ。どうしても、忘れられない」

頭の中に流れる画像と音声に、俺はガルフにとんでもない苦悩を背負わせていたんだと、初めて気づいた。思わずガルフに視線を向けると、見たことも無いような悲しそうな表情を浮かべて、笑った。

「今はもうそんなことないけど、俺は昔、エルメスが、好きだった」

たくさんのエルメスの画像、たくさんのエルメスの声。俺が傍にいられない間、ランスとガライドと共にずっとエルメスの傍にいたのは、ガルフ。

傍にいて、好きなのに、好きな女の悲痛な声を聴き続けるのは、どれほど辛いことなんだろう。

「ガルフ、ゴメン。俺のせいで……」

「謝んなよ。誰も悪くねえから。それに、昔の事だ。つーか、むしろ怒ってもいいんじゃないの？」

「怒るわけ、ないだろ」

どうして怒れるって言うんだ。あの頃みんなに迷惑かけてたなんて、わかってるつもりだった。でも、俺は全然わかってなかった。俺の事で、俺の為にみんなが陰で非難されてたかもしれないなんて、思いもしなかった。

エルメスを好きなのは俺だけじゃない、それはわかってたはずなのに、俺は何度もガルフに助けられたのに、気付いてやることすらできなかった。きっと、ガルフだけじゃない。ランスも、ガライドも、他の奴らも、みんなにとってエルメスは大事な女だ。

俺のせいで泣く女に何も悪くない奴が責められて、俺のせいで泣く女を、みんながどれほど気に病んだか、どんな思いを抱えてたかなんて、考えもしなかった。

勝手なことをして、勝手に契約して、みんなを巻き込んで、みんなを苦しめて、それに気づきもしないで。俺は、なんて最低な奴な

んだろつ。

考えて、顔を覆って頭を抱えた俺の肩を、ガルフはポンと叩く。

「過ぎたことはしょうがねえよ。別にその事で誰もお前を責めてねえし、俺らも苦労したけど、お前だつて辛かつたんだから、おあいこだ。けど、頼むから、これからは一人で悩んで、一人で勝手なことしてたりすんなよ。俺らを巻き込むなら、最初っから巻き込め」

「ゴメン………。俺、もう勝手なことはしねえって、約束するから」

「謝る必要はねーって。仮にも俺らはシュヴァリエだからな。エルメスを守るのが仕事なんだから、キツチリ仕事したつてただけだ」

「………ありがとう」

「それでいい。俺はエルメスも好きだつたけど、お前の方が付き合っても長いし、どっちか取れつて言われたら、俺はお前を取る。エルメスよりもずっと前から、ガキの頃から一緒に育ってきた兄弟なんだ。俺も他の奴らも、エルメスと同じくらい、それ以上にお前が大事だから、お前とエルメスが幸せでいてくれるなら、ちょっとくらいの苦勞、どつってことねえよ。ランスが言った通り、家族の幸せを願うのは当たり前のことだ。これからも応援してやるから、俺らがいる事を、忘れないでくれ」

「ありがとう。俺も、お前らの為なら、なんでもするから」

「本当お前は極端だな。50にもなつて泣くなよ。いい男が台無しだぞ」

「うるせえ」

仮面で隠されていたのは俺の心だけじゃなくて、人の心も見えなかった。自分を隠して、閉じこもって、自分のことで頭がいっぱいで、自分のことしか考えてなくて、周りを見ようとすらしていなかった。俺は本当に身勝手に、最低だ。

ガルフに本当に申し訳なくて、嬉しくて、思わず涙が零れた。相

変わらずガルフは半笑いでそれを茶化して、おかげですぐに涙は止まった。本当に、ガルフは大人だ。

ガルフは吸血鬼になってからずっと、知りたくないことを知らされて、聞きたくないことを聞かされて、きつとガルフの笑顔は、俺のメガネと同じ、仮面なんだろう。

俺がメガネを捨てるきっかけを作ったのは、ガルフだった。だから、今度は俺が、いつかきつと、ガルフの仮面を外してやろう。そう、固く決めた。

「カイは長兄としてよくやってきた方だとは思っけど、上がちゃらんぼらんだと下がしっかりするっつーのは本当だな。俺の方が兄貴っほいだろ」

「うるせえ。お前は精神年齢老けすぎなんだよ」

「年相応だと思っけどねえ。お兄ちゃんって呼んでもいいぞ」

「呼ばねーよ！ むしろお前が呼べ！ つーかお前、ちょこちょこ気持ちワリーよ！」

「お前も結構気持ちワリーぞ。お兄ちゃん」

「やっぱ呼ぶな！ 気持ちワリー！」

「どっちだよ、お前。面倒くせーな」

「うるせー！」

「お前の方がうるさい」

ガルフは普段からなんかオッサンみてーで、常になら目線で、なんというかこう、温かく見守られてる感があったんだけど、コイツの精神年齢の高さは、能力がもたらしたものなんだろう。

勝手に流れ込んでくるものじゃなくても、自分の望んだ情報が入ってくるわけじゃない。数多の心に触れて、コイツは人の数倍の経験をしたんだろう。

環境にしても、状況にしても、心情的にも、ガルフがエルメスに

惹かれるのは必然だったんだろう。それでも、ガルフにとっては恋よりも、兄弟の方が大事だった。きっと他の奴らもそうで、だから誰も俺を責めなかったんだろう。

俺は幸せ者だ。思われてる。愛されてる。家族がいる。みんな俺の味方になって、応援してくれた。

金輪際、もう二度と、一人だなんて思わない。みんなと共に、生きよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8837w/>

---

コントラクト ? インモラルティ・ティアーズ -

2011年12月31日03時53分発行